文談苑談

齊藤源郎著

本間文庫
文庫 14
D 10

文庫14
D10

序

比較文學を日本に創始せざるべからず。文學研究の國際的運動に參加して、文學原論及文學研究法の基礎を一層堅實にすべき要あればも也。取材の種類と方法の徑路とは人各々其好む所に從ふを得べしと雖も、詩人論の心理病理を鑽し詩材論の辨析剖判を行ふにあたつて、眼を東西に馳せ汎く古今を收攬せんと欲するは則ち一のみ。

日曜毎に書き散し饒舌り散せしもの正さに數百、多くは湮滅して遺骸すら見當らずと雖も、偶々屑籠の厄を免れしものを拾集して百二十七篇を得、更に豫定の頁數に換算して八十編となし、茲に再び公衆に獻本す。所談素より系統のあるべき筈なし、唯だ其何れの片隅にか比較文學の匂ひだにあらば、希くば此方面の前座となつて後日大なる眞打を迎ふることを得ん。

質に於て取るに足らざるは學力なければ也。量に於て見るに堪えざるは時力なければ也。數多の着色板を挿入すべき花觀鳥觀を後に控へて素面素肌の文談花談を先きに出したるは財力なければ也。學者の三資格に缺如たりと雖も、なほ親の賜へる十人竝の體力あり。人生百二十五歳と注せらるゝに非ずや。果して然らば、未だ其丁年にすら達せざる身は、脈搏七十五回體温三十七度を昇降する限り、花鳥觀を想ひ風月觀を想ひ戀愛觀を想ひ忠孝觀を想ひて、のたり〳〵と洵に春の海の如き哉。

明治四十年七月

畔柳都太郎

凡例

一、體裁上、冒頭一篇の地位を取換へたれども、其他は嚴密に年代の順次に排列せり。

一、四月以後の「東西比較楊柳美觀論」と「外國文學の社會及自然」とは共に「續文談花談」に收むべし。

一、太甚しき差支の生せざる限り、舊稿の面目を其儘保存するが爲めに猥りに字句を修正せず。

一、文談は悉く親ら筆を執り、花談は多く速記を煩したり、從つて不統一の感を更に深くするが如し。

文談花談

目次

詩文學系統……一
劇形の五部三點……九
西劇に見えたる自殺及厭生……一七
研究の新方面……二三
女性詩人……二四
戀愛の多樣……三五
沙翁研究家に與ふ……三六
小說家としての女性……三七
西歐文藝研究者の不注意……三八
近松研究法の論難……三九
古代の神來說……四一

『あはれ浮世』に餞す……四七
はげあたまの說明……五〇
無の兩義……五三
詩の活用……五四
新體抒情詩是非の三要素……五七
抒情詩人の閲歷を論ず……六〇
作家論……一〇四
戀愛と色道……一〇九
見眞似
聞眞似 天才修業……一一〇
秋冬季と創作との關係……一一〇
『天才論』自序……一一一
劇と敎育との關係……一一三
新派觀劇連……一三一
作小說術……一三四
鐵鎖を斷てる新體詩人……一四一
カーライルの所說と我現代と……一四四
文士品性問題に關する管見……一四八
詩文界の病理を論ず……一五一
『帝國文學』第七卷の終了……一七七
敎育界と小說……一八四
アリストオトルの詩學……一九二
羅馬の案內者……二〇五
人骨馬嘶……二一四
詩的空想……二一四
英文新誌社編『ドンキホーテ』序……二三一
登張竹風氏著『あらひ髮』序……二三四
Charles Dickens……二三五
枕上偶語……二四〇
『女嫌やる』考……二四四
交遊三十年……二五二

歌の誕生……二五四
新瀬浪子の新氣焰……二五八
ラファエル前派解說……二六一
牛涎子の置土產……二七三
修浦島田舍文士……二七四
鯉……
文學上猫の話……二七五
文學上の水仙花……二七九
略解英文學中の花—ユキノハナ……二八八
文學上の梅花……二九八
文學上の櫻花……三〇二
菫の匂ひ……三一三
日英文學中の櫻草……三二八
植物と文學との關係……三三四
罌子粟麗春花に關する東西詩觀の比較……三三九
……三四四

旋花と月見草と……三六九
歌材としての薔薇……三七三
睡蓮の詩趣……三八一
蓮睡蓮に關する東西詩觀の比較……三八四
理想の花嫁……四一六
外國花の流行と國華の將來……四二三
忘れられたる冬の鳥……四二九
國際と評論と小說と……四三四
病戀愛……四四六
夏季の休暇と自然文學……四五一
初夏の草……四六三
ヂギターリス、ブルプレア……四六五
オホヒレアザミの傳說……四六八
松本信夫氏譯『ツワイス、トールド、テールス』序……四七二
文學上藤袴の將來を卜す……四七三

目次終

田園文學とは何ぞや……四七六
家庭に於ける園藝趣味と文藝趣味……四七九
東亞の第一芳……四八二
世界の松と松の世界……四八六
新年松……四九〇
蘭蕙始芳……五〇二
桃天桃源……五〇八
泉斜汀氏著『深川染』序……五一一
比較文學……五一三

文談花談

芥舟漁郎

詩文學系統

詩文學に想を着けしより既に四たび衣を更へぬ。少閑乃ち毫を執つて紙に莅みしも、塗抹するところ未だ所期の半にだも達せざるうち、白駒の驅くるは矢よりも速きに、鷓鴣一枝を以て足れりと爲さず して、深林を想望し大澤を惝恍し、心緒さながら燬くるに似たり。

風姿嫋々、觸れば消ぬべき宗教詩文の兩姐を驚奔せしめつる濁世の田夫野人は問はずもあれ、儕は是を尋ね還すと謂ふ研究者なる人々も、或は東に馳せ或は西に飛び、或は山に登り或は谷に潜み、或は蒼空を仰いで空しく長嘆し或は碧海に臨むで徒らに呶號し、進路を異にし方法を異にし範圍を異にし目的を異にし、紛々擾々喧々囂々、條理幾んど識別し得ざらしむる迄に至れるは、抑も〳〵愁みても又た悲むべきことにあらずや。斯の陋や如今吾國にも絶えず。稜々しき知劒を振翳して美園の小草若

草を薙立て斬立てし猛士の武者振は、飴細工の狸の腹よと嘲笑ひし精緻派の擴げし異樣なる大風呂敷も、幽婉曲雅の染模樣割合に鮮やかならず、研針の緒區々にして傍眼も眩むばかりなれば、斯は屑買ひの春に結付けよと問反へすめり。偏狹乎。散漫乎。世は唯だ研鑽の聲のみ高く響くなれば、如何なる態度を執りて如何なる結果を得むと欲し、又た得つゝある乎を明らかにする人こそ、洵に斯學に一絲を添へ一瓦を加ふる誠實の能士なれ。椿は裂いて覆巢の資にもせよ、氣は化して陳吳の跡を追はずむば、奈何ぞ三春の行樂を去つて故紙堆裡に屛居するの勇氣を生ぜむや。吾が專念は實に斯の如くして根蒂を有するに至りぬ。

暗示の緣由程可笑しきはなし。吾が學生々活の終歲、偶々圖書館にヴェッツの心理學方面の沙翁研究論を瞥見し頃は、幾多批評的詩人論文學論に心安からぬ折柄なりしかば、頗る是れに興味を惹起し、同時に二三の宗教研究手引にかぶれて、圖らずも類推を詩文一般に及ぼさむかとの動機を得て、理論の活證は及ぶべき丈豐富ならむことを希ひ、其僅かに系統の立てる儘に縞に朋友に語るところありしに、甲は迂遠也とし、乙は疎漫也とし、丙は其一部學の存在の疑はるゝを楯として不可能也と絶叫しぬ。其後邦文にては岸本氏の『宗教研究』中島氏の哲學雜誌に於ける基礎學云々の論文にも慰藉され、殊に一兩年前迄は洋の東西に同志の一人もなき事實さへ明確になりてより好奇心までも煽動され、去つて再たび一端を敍說すれば朋友丁は『素敵にエライ』と冷やかしぬ。今春三たび朱絃會の席上にも左したる反響なく、頑迷尙ほ昨の如し。所謂盲蛇を怖れずの類ならむ乎。

詩學、文學、詩文、詩歌、文章の語は數々之を聞く、未だ詩文學の新熟語を耳にしたる覺えなしとは等しく讀者の唇頭に上る疑問ならむ。洵に吾が此に創めむと欲し、併せて大方の承諾をも乞はむと欲する新熟語の意義と範圍と目的とは、吾が解說を與へずば、吾れならぬ誰人も會得し得ず。詩文學とは詩と文學との謂ひにあらずして、詩文の學の義、詩歌文章の科學の義也。想ふに科學の香ある詩文一部の獨立研究、附隨研究、世に敢て尠しとせず。修辭學はあり、比較文學はあり、審美學はあり、詩學はあり、文明史學はあり、社會心理學はあり、指を屈すれば十あまりにも及ぶべし。しかも宗教研究が最近二三十年間に著しく頭を擡げて統括的氣運の勃興し來れる時、そが妹子とも見紛ふ詩文が部分の研鑽にのみ是れ追はれ、敢て其他を顧みざるは如何にぞや。是に於てか吾れは覺束なくも、心理病理を緯とし言語歷史審美を經とする邊に、吾が不器用なる梭を投ぜむと欲する也。

分析は研究に生じ、綜合は分析に從ふ。分析は現象の增大を希ひ、綜合は歷史の案排に應ずるを路とす。分析の根原には解釋を要し、綜合は比照に依りて時處の聯關を計らざるべからず。分析綜合共に判斷を伴ひ、分析の對象には內容と外形とを配し、先づ詩文觀を以て詩文の內容を區劃し、外形に至つて分類に及ぶべく、分類に先ちて語形の研鑽あり、分析終つて綜合來り、玆に研究は其目的を到達して始めて詩文に依憑する人間發達の意義を識るべし。趣味の健全材料の豐富は言はずもあれ、依つ

て以て指導を受けむとする心理、病理、言語、歴史、審美、各部門に進むに從ひて何人か愈〻其堂に上り能はざるを洪嘆せざらむや。

詩文觀を以て人生を律する詩文を研鑽するには、客觀的に始づ論理の人生觀と倫理の人生觀と何等の區劃何等の交涉あるかを解釋せざるべからず。凡そ人間精神の生活には三要素あり。古の所謂智情意即ち是れ也。今日にありては是等三要素の實際に於ける結合を認むるが故に、其區別せらるゝは僅かに吾人の思考に依り抽象に依る場合のみなるを知れごも、發達せる精神界にありては、時には彼れ時には是れと其偏重するを何人も疑ひ能ざる事實とすれば、根蔕を玆に養へる論理觀、倫理觀、詩文觀の目的を區別すると共に、又た是等の三觀が何等の交涉關係を有する乎の問題は自ら生ずべし。從來實際の結合に由りて誤られ、或は詩文觀を以て朦朧澁晦の認識に在りとし、或は道德眞理を以てするものなりとし、遂に詩文觀の獨立を怪しみし人尠しとせず。其僅かに獨立を計る爲めには、唯だ外形を以てしたるが故に、主として詩學、修辭學の類を生み、以て詩文の研鑽足れりと信じぬ。訝かしきかな。吾れは詩文觀の目的を情にありとし、人生の情方面を優視したるものとし、發達せる形式に於て全然智意を結合すれごも、斯の場合には情を著しく亢するものとし、詩人文人は刺觸の何物たるにもせよ情を動かされて靜止するところなく遂に或る美的外形に表彰するに至り、讀者聽者亦た同じく感奮するに至るものとし、以て詩文の觀念に到達すれば、進むで詩文觀と論理觀との關係を研鑽し、

殊に非常の交涉影響ある倫理觀と詩文觀との關係を研鑽して彼の所謂ポヱチカル、ヂヤスチスの正否を決定せざるべからず。次に詩文の目的に依りて鼓舞せられたる感情は、强弱に依り性質に關して如何にすれば著しく吾人を刺觸するかの條件を歷陳し、感情の永續は如何、反照は如何、更代變化は如何、清新獨特は如何等の諸問題を終了すれば、尙進むで詩文の典範を蒐集せざるべからず。典範は創作にあらずして發見すべきもの。吾れは多數人の爲すが如く或る二三の大作に依憑するを以て足らずとすると共に、博覽を衒ふ輩の三流四流末派の詩文迄をも拾來つて呶々する冗漫をも斥く。一面に於ては己れの反省と識見とに由りて研究標準を得るは左ることながら、他の一面に於ては詩人は時代の精神より起らざるべからずと認むる吾れは、勿論史的關係の意義を觀過することなくして、其時代の特性に養はれたる標的詩文の充分なる分解をも要すと信ず。始づ豫め何れの時代にも應用し得べき感情の作用を擧げ、次に感情の或る客觀的事情を表はすものに及ぼすべし。前に所謂清新若しくは反照の類は甲の匹儔にして、時代的國民的民族的內容の如きは乙の匹儔に屬す。

偖右の如く詩文觀の一般を獲得すれば、吾れは詩文といふ美花を唉かしむる根蔕たる詩人の精神活動其ものに就きて、一面には天才人才の空想、理解の力を研鑽し、他面には感情方向人生觀意志衝動を研鑽して性癖情調、運命に惹起せらるゝ運命感情、意行に生長する意志感情、人格に關係する人格感情、さては自己、他伴、群集、宗教の諸感情の主要なる形式を見、繼で生ずる觀法即ち見方に及びて、

罪惡の觀念、運命の觀念等幾多の問題は簇生すべし。是れを了らば吾人は詩人の日記、書翰、談話の類に由つて、試みに生理の暗示に依り、活働を縱に構成して、以て動機より詩文誕生の曉に至る迄の內的生長の徑路を研究すべし。乞ふ始づ上述の所言を一括して以て詩文心理學と命名せむ乎。心理は常軌を逸して亢進に失し若しくは減退に陷るものを研究すべき病理を隨伴す。是れまた詩文病理學を第二に置く所以也。

斯の如き內容は始づ作者の精神に起り、爲めに研者の精神にも起りて感情作用の行動をなすが故に、是れを對象として上心理學に聯關し、以て標準規矩を與ふものとせらるゝ一科學あり。主觀に於ける美的觀念と客觀に於ける美的觀念とを區分して、後のものゝうちの優美とは何を謂ふや、崇高とは何を謂ふや、悲壯とは何を謂ふや、將た又た可笑とは何を謂ふやの問題を提來つて斯學の實相を研鑽する、卽ち是れ從來審美學の一部となつて現はれしもの、吾れ玆に詩文のみに適用して以て第三詩文審美學を組織す。

第四は詩文形體學也。既に全く詩文となりて文字に現はれたる詩文の外形を中心として研鑽せむとす。既に前にも述べしが如く、多數の學者は詩文の研究を以て全く其外形に依りて維持さるべきものと信じたるが故に、斯界の結果は割合に多く、從つてまた吾が一貫せむとする詩文學の目的に適應する材料に豐富なれども、悲しい哉、部分學其うちに於ても暗處また鮮少ならざるのみならず、心理學研究の進歩に連れて、是れ亦た變轉の命運を免れざるものあるをや。其幾部若くは全部を玆に須らく收むべきは、或は文法と命名せるもの、或は音韻學と命名せるもの、或は文章學と命名せるもの、或は修辭學と命名せるもの、或は詩學と命名せるものを以てすべし。殊に最終の詩學なるものは恰かも詩文學の別名の如くに使用せられたれば、部門を別にして第五詩文分類學と稱し、詩文形體學の終結に先ちて、內容に於てせしと同じく、詩人の日記、書翰、談話、原稿の類に依りて、詩文誕生の曉より推敲鍛錬を經て上梓に了はる外的生長の徑路を研鑽し、以て此部門の點睛となさむ。斯は支那詩話に熟せる讀者の容易に首肯するところなるべく、又た吾が曾て草せる閱歷論の左券を益〻精確にする所也。

詩文の內容遂に分析せられ、詩文の外形亦た遂に分析せられ了んぬ。しかも未だ全しとせず。詩文は個人意識の事實に止らずして、塑像の如く、建築の如く、敎會の如く、書冊となりて生動するが故に、其表現は人文史的となりて時處に關與して特有の生命を發達すべく、其發達を左右すると共に、他の人文現象と交涉影響して以て一大勢力を逞うすべし。卽ち詩文は個人の生死に關せずして永遠に發達する歷史的生命を有し、彼處に流れ此處に漂ふ個人の詩文を浮動する人文史的詩文の大潮となる。されば詩文の人文史的生命は如何なる狀態を以て、如何なる規定の下に發達する乎、其生命と一般社會人文との關係は如何、從來の各國文學史若しくは世界文明史の一部を以て詩文なる實相の發達科學を

編み、名けて第六詩文發展學といふ。分析玆に全く了りぬ。統括、綜合、希くは人間發達の意義を詩文の一面に窺ふを得べし。

趣味の健全材料の豐富は悉く是れ吾が雙肩に懸れり。唯だ夫れ『今の人詩文史を讀みて詩文を讀まざる』や否やは、幾年の後の調査に讓りて、玆には單に詩文學系統一般を以て吾が斯の稿を了らしめよ。あはれ詩文學に想を着けしより、歲を閱みする既に四たひ、少閑乃ち毫を嚙みて紙に莅みしも、塗抹するところ未だ所期の半にだも達せすして、今宵も亦た片破月を西廂に迎へぬ。

- 詩文學
  - 詩文心理學
  - 詩文病理學
  - 詩文審美學
  - 詩文形體學
  - 詩文分類學
  - 詩文發展學

（三三、九）

劇形の五部三點

劇的人物の科白を藉りて人の心が或感觸を受けて情に滿てる意志となり終に行爲に變ずるまでの徑路と竝びに自他の行爲のために煽らるゝ人の心の運動とを敍述するものを劇と謂ふ。

劇の動作は劇の各部々々に表裏の兩面を有し、其一常に他の一を跲ふて進む。表なるものを動と名くれば裏なるものは對動と名くべき也。更らに劇全體より通觀するに動作と人物とは之れがために全く二つに別つことを得べし。夫れ劇の髓は主公が或抵捂力に逆ふて少からぬ心の運動をなす一場の格鬪也。始め主公は外より來れる鼓舞にもせよ、若しくは內より生したる思考にもせよ、兎に角其結果として強き感情、亦は意志の萠芽を發する刹那までは、毅然として己が特性を維持し、敢て猥りに他より擾亂さるゝことなかるべしと雖も、心の岸に打ちよする波の音漸くに騷かしく、伸ひつ屈みつ隙を窺ふこと宛然蛇の如き新しき事件に纏はれて、滿腔の熱情抑へんと欲して終に抑へきれず、一旦瀉然として行爲と變ずれば、主公の心の高潮人目に觸れ、此處に始めて反動の影を見る。劇の高點とは則ち是れなり。主公は是迄、縱しや半面的とはいへ、頼みある意慾に滿ちて常に內より外に向つて働き、己が生活の關係を左右して始終上昇の途にありき。足僅かに巓の土を踐むや否や、向きに行ひしもの、今や翻然として己に反へり、主公を下降せしめて以て其威力を揮はんとす。羊の如く屈從せし外界が、

格闘未だ全からざるうち、早くも既に其頭を擡げて漸く強く漸く猛に、終に亦奈何ともすべからざるに及び、咆吼一番虎の如く、主公を投げて大破裂に粉韲し盡せば、恰かも雨收り雲散りて限りなき深き海の靜けさを眺むるが如く、人の心もまた一片の漣漪だも湛えず。

此順序に從へば人は始づ動を看次に反動を看る。前半に於ては主公の心より外に向つての挑戰を看後半に於ては之れが爲めにやましき事件を生む逆擊を看る。オセロ●リアを除きては沙翁の大悲劇皆此類に屬す。

更らに又た他の順序あり。冒頭已に外力は主公の心邊に潛み主公の生活は稍比較的靜寧を保つのみ。此力（對動力）次第に强大となり高點に及びて必至の運命と變じ、其後主公は壓迫の下に憂へ、苦しみ、悶え、亂れて、終に大破裂に粉碎し盡さる。オセロ●リア●エミリア、ガロッチイ●クラフィゴオ●カバアレ、ウンド、リイベ等は此種に屬す。

既に述べしが如く、劇的動作の兩半が一の中點（高點）によりて連結せらるゝが故に、劇は恰かも一個の三角塔形を作るべし。發端（アインライツング）より以上、動作的分子の搜入に逢ひて高點（ヘーヘンプンクト）まで上昇し、夫れより以下大破裂（カタストローフェ）まで下降す。此三部の間に上昇（スタイグルング）の部と下降（ファール）の部とは存する也。而して活動作の起點たるものは、發端と上昇との間に、反動作の起點たるものは、高點と下降との間に、終局前に更らに一回上昇せむと試むるの點は下降と大破裂との間に在り。第一點を興奮點（エルレーゲンデ・モーメント）。第二點を悲慘點（トラーギッシエ・モーメント）、第三點を掉尾點（ダルレッテン・スパンヌング）と名く。此のうち第一點は何の劇にも缺くべからずと雖も、第二、第三兩點は然らざることあり。今順を追ひて聊か敍述するところあらんとす。

抑も發端は主公の生活上の關係、其場所其時等をあらはすが故に、境遇の何等の類にある耶は稍此處に於て明らかにせらるべし。且つ夫れ樂の序の始づ、緩調促節をほのめかすが如く、發端はしばゝ動作の性質を豫報す。故に余等はタッソウに於て最麗はしき園の裡に薔薇にも優れて雅びたる貴き雙女の姿を眺め、マリア、スチュアルトに於て戶棚やぶりのパウレットに論ふ柔き女子のケンネヂイが怨言を聞き、白晝街道を通して鏘々たる劍戟はロミオに響き、雷雨を沐びて荒野の邊に三個の妖婆はマクベスに躍り、夜も更けて寂しき頃ひ、幽魂の影に愕かされて一園の疑雲は始づハムレットの胸に結びかゝりぬ。

一般の方則としては、劇の性質に折合ひを失はざる限りは力を强めて此の初のあはせを調ぶべきなり。蓋し徹かなる活動は、差障りなく稍穩やかなる排置（エキスポジチオン）に移行くを得るものなればなり。

さて此の初のあはせは必しも多人數の合奏を要せず、主公の心の微動をあらはして後のあらしを作るべき小波のうねりたらしむるも可なり。故にエミリア、ガロッチイにありては書工コンチイとの對話によりて、机に倚れる若殿の不安を示し、エミリアの婚禮の日の近けるを聞きて上昇部たるマリネルリイとの應對に移る。イフィゲニイは更に歩を進めて、初めの靜けさは却て後の活動の基礎を作りたら

むが如し。

初のあはせより排置にすゝみて主公の心に情感（パツシヨン）若しくは意志の起るところ又は對動が其槓杆をもて主公を運動せしめむとの決心を生ずるところに興奮點を置く。此點は如何なる劇にも動作のうちの重要なる分子たることを失はず。ヂュリアス、シイザルにはカシアスとの對話中、ブルウタスの胸に次第にシイザル殺害の想を萌し、オセロにはイアゴウ・ロデリゴ第二回對話中、テスデモナ・オセロの間を離隔せむとの企に始まり、リチャアド三世には之れに反して劇の發端より主公の心中に確として存す。ロミオ、エンド、ヂュリエットにはロミオがベンヴォリオとの談話中、不圖夜會に臨むの意萌しゝとき、エミリア、ガロッチイには彼女が婚禮日の近ける報知痛く若殿の胸を刺しゝとき、ファウストにはメフィストの入來りしときに各々始まる。

上述の諸例に徴して、余等は興奮點の形ちに種々あるを見る。全然一場を充すあり、僅々數語に含まるゝあり、或は外より逼るものあり、若しくは内より發するものありと雖も、いづれも發端より上昇的動作までの移動を占むるは同じ。其成るやテル中バウムガルテンの話の如く、倏忽として起るもの と、シイザル中ブルウタスの殺害心の如く徐々として成形するものとの二つあり。

而して茲に余等が殊に注意せざるべからざることは、興奮點をして著しき完成（アウスフユウルンク）あらしめざるにあり此點や動機を付與し只動作の方向を指示するに過ぎざれは、全く無味無力たらしむるは固より不可なりと雖も、さらばとて後に來るべき高潮を低め、若しくは主公の運命を早く既に弄ばむとするの狀あるが如きは極めて宜しからず。ブルウタスの決心が明晰なる言辭に表はれざる、ハムレットの疑念が父の亡靈に逢ひて確かならざるを味はゞ、思ひ半に過ぐるものあらむか。

動作既に興奮點を經なば、重なる人物等は各其特性を顯はし、感情の鼓舞、事件の紛擾或一定の方向を取りて進む。此運動の部に與ふるに上昇の名を以てす。

今迄登場し得ざりし對動中の主公も、動中第二流の人物も、尚又た劇の後半を占むべき人物も、氣運の成熟と共に新たに其運動を開始し得るの春に逢ひぬ。上昇が高點に達するには一階段を以てすべきや、將たまた多階段を以てすべきやは、材料の質、作者の腕に關し、敢て余等の問ふべきかぎりにあらねども、孰れにしても數多き場々を配合して單一ならしめ、一步は一步より漸く強く漸く大に、終に最後の階段をして主場たるの性質を有せしめざるべからず。勿論こは形體兩側よりの立論也。例によりて古劇に徴すればヂュリアス、シイザルは一階段を有し、ロメオ、エンド、ヂュリエットは四階段、カバアレ、ウンド、リイベも又四階段を有す。

劇の高點（クライマクス）に達すれば、上昇的爭鬪をなし來れる動作は、確乎としてしかも最も明晰に發揮せらる。西劇にありては此點は幾ど常に一の大なる完き場の頂點となりて、上昇の小さき場々も下降の小さき場場も皆此一場に連接せらるゝを見る。高點は主公の自動になる劇にありてのみ其價最貴く、對動に上

昇せしめらるゝ劇にありては、主公を捉へて下降的方向に赴かしむるてふ重要なる地位を占む。試みにリア中小屋の場を觀よ、麻の如き亂髮を野分にさらして、山も崩れよ海も湧け、雷も碎けて落ちかかり、生物種子を鏖滅せよと天地に咀ふリ王の狂態、吁嗟是れ何等の絶調ぞや。而して余等は之にフモオルを加味したる沙翁が一種超絶的の詩眼に驚くと共に、又渠がマクベス宴會の會場に表はしたる健筆の非凡なるに嘆服せざるを得ず。想ふに此場に先だつダンカン殺害の夜はあらゆる劇的詩力に富みて、余も人も此上には到底一歩の上昇だも適ふまじと疑ふにも關らず、貴賓と王冠とに比照して渠が巧に描き出せる殺人犯者の幻影に愕かされ良心に苦めらるゝ凄涼の光景に接せば、誰れか悚然として膚粟を生せざるものあらむや。エミリア、ガロッチイに於ては余等は此點をエミリアの膝を屈するに看オセロに於てはイアゴオがオセロに嫉妬心を起さしむるところに看る。而して此嫉妬心の進行は始め徐々たりと雖も、後には主公の全身を擧げて幾んど震ふが如き格闘の原となる。

若しも高點が悲慘點に由りて下降的動作と連絡せらるゝ場合には劇形は相對照して彼我を高むる二つの場所よりなる。試みにマリア、スチュアルトを見よ。ヂユリアス、シイザルに至りては此兩點を稍明かに分劃する一味徒黨とアントニオとの應對場、竝びにブルウタスとアントニオとの演說場とあり。古より劇の結構上最も難しとするところは下降的動作又の名反動の部是れ也。就中主公の自動になる劇に於て殊に然りとなす。夫れ上昇的動作にありては、あらゆる分子は主公に左右せらるゝところありたれども、一旦主公の行爲を經て方面を殊にしたる新勢力の勃興を見るときは、人は始づ玆に其注意を與へざるべからず。由是觀之分解的作用は既に進入する也。劇の前半を組立つる單一を破りて多樣ならしめむとするの作用は進入する也。此時對動の力一人に限り、一事に止まらむよりは、寧ろ多方面より徐々に主公を重圍中に陷らしめむこと仲々に面白し。且つ此部や主公を事件中に繫縛し、主公の運命を左右する動作の觀念、全劇の精神を發揮するが故に、作者の用意亦須らく謹嚴にして周到ならざるべからず。如斯して下降的動作の進みて大破裂に向ふや、對動の力に最強の運動を與ふるか、若しくは動中にある主公の胸裡の洞見を許さしむるかを要す。コリオラナス對其母は前の例にして、服藥前のヂュリエットの獨語、マクベス夫人深夜夢裡の步行は後の例なりとす。

夫れ大破裂の忽然として出現し、人をして一驚を喫せしむるの不可なるは極めて覩易きの道理なり。山愈〻高ければ其根愈〻固からざるべからず。花の開謝、實の生熟、其間亦多少の因緣を含む。掉尾點の大破裂に先ちて勢の調和をはかる、豈偶然ならむや。故にシイザルの亡靈ブルウタスに現れ、ロミオはヂュリエットの骸前にパリスを殺害しクロウヂアスは早くよりハムレットを失はむと言ふ。然り而して運命固く主公を捕へて人の理性は到底其破壞の必至を認むると同時に、情に於て尙之れを忍び能はざる場合にありて、古より詩人が用ゐ來れる唯一の方法は、暗黯たる空に兩三の星斗を炳乎たらしむるにあり。閃鎌力能く荊棘を路傍に芟除し得たるが如く見えしむるにあり。終には自ら死ぬるブル

ウタスも始めはカシアスに對して自殺の卑怯を公言し、ロミオ將に瞑せむとしてロウレンス前に現はれ、使者は馳せてリチャアド三世にリッチモンドの艦隊あらしに覆沒せられたることを報ず。あはれ望みてし殘んの星影も墨の如き妖雲に包まれ果てぬ。頼みてし鎌の利き刃もこぼれて空しく骸を地に遺しけり。而かもなほ戀々として袖を斷つに忍びず、箱の如き穹廬に跼蹐せむと欲する乎、不幸は訓えぬ、『人の生はこよなく良きものにはあらず』と。自ら活動し自ら發展し自ら完了せざるべからざる主公が、斯の如くして大破裂に得る徹悟の狀態なるものを、如何でか余等の情と理性とを兩ながら滿足せしめずに止むべき。故に劇の結語は偶起的たらずして、須らく詩的たり、萬人の曉り得らるべきものたらざるべからず。

大破裂に及びて誰晦の筆を見るは、世甚だ其例に乏しからずとなす。是れ豈に惜しむべきの至りならずや。今夫れ動作は秩然として其歩武を進め、彈一指、將に天地の奇觀を演せんとする其刹那に到りて、忽然として軟弱の趣旨を生しなば、如何に全劇を損傷すべきか。大破裂とて他意あるにあらず、たゞ動作と性格との自然の結果を收拾するに外ならず。作者深く此意を念頭に鏤刻しおかば、運筆の際全劇の排置を案じて隙なき動作の進行を誌すに蓋し容易なるべき也。エグモンドに於てホルランドの獨立を知らしむるには、或は早く書き得たる機ありたりしならむも、かくては此劇に適應しからぬを恐れたりしならむ。

余は今筆を擱くに際し、大破裂に關する一般の方則を與へんとす。曰く殊に注意して閑語を省け劇旨を明らむべき言辭若し劇的人物の脣頭に上し得べくんばつとめて之れを上せよ些少だも性格を傷くるの恐れあらば斷然捨てよ復た顧る勿れ。

（二八、五）

西劇に見えたる自殺及厭生

其一　ヴイルギリウスのダイドオ——セネカのオエヂプス——ソフオクレエスのアイアス

末の露本の雫、後れ先つためしはあれど、いづれ消えでかなはぬ世の常の態なるを、情知らざる一陣の山風の吹くに得堪えで我から道芝の根をうるはす悲しさよ。學びの道に上らざる男、さては物語の哀れさに濡れくつる袂を擁して微睡もし得ざりき秋の夜の味を知らざる女子等は、解けごまつはる羈絆の下に轗軻するも、猶且つ三寸の舌を噛み切つて萬象を彼方より消えしむるの術を悟らず。開けゆく世の勢と共に自殺の數もおのづから殖ゆるの理りなれば、東の國にては基督敎の感化を受けぬるまでは此道絶えて無かりきなど論ふ人もあり。なべての中に最とも幸なくデョブの價値だになき者が文を繙かず想を沈まさずあらば、奈何ぞ自ら殺すの崩を養ひ得む。近き頃青年の文士の袖を聯ねて續々他界に去りしものは、渠等の靈智の絶えず今日の學問と文化とに煽られし結果に出る莫らんや。古のストイック・エピキュラス諸哲學派に導かれ、若しくは近世文學の思潮に觸れて自ら成形したる、

ありきたりの自殺の外に、全然一時の感情に燃やされ毫末の反省だも許さゞる他の一類の自殺あり。ファエドラ●アイアス●ダイドオの類を温ぬるに、要は唯失望にかられし者のみにて、其間深遠なる哲理の匂ひも見えず、又は冲天の宗教焔の立つこともなければ、従つてハムレットの長想もウェルテルの狂態も乃至チャッタアトンの厭生もあることなし。一旦の煩悶に忍びきれざる渠等は其刹那に己が性命を放抛し了るなり。

……Lucemque perosi,
Projecere animas.

然はあれ死は如何に速やかに渠等の世を棄つるの心を回さしめしかよ。暖かき日の光りを見むと思へば哀しき哉、渠等が忍ばざるべからざるものは、是れ實に忍び能はじと信ずるものなるを如何にせむ。

……Quam velient aethere in alto
Nunc et pauperiem et duros perferre labores
Fata obstant, triste que palus inamabilis unda
Alligat et noviés Styx interfusa coercet.

斯の如く渠等は前の世より定められたる悲運の糸に何處までも操らるゝ傀儡子たらざれば止ます。古の劇は自殺に同情す、而かも自殺を批判せず。讀者を感觸す、而かも讀者の認識を俟たず。今の劇の訓化的に鼓吹するものとは其間におのづから濟るべからざる一條の流れあり。

内に憂ふるところあれば天地もまた愁むかと疑はるゝこそ恨みなれ。やう〳〵夜の更けゆく儘に人のけはいも自ら間遠になりて、廂のあたりに星の光り物凄きまでに冴えぬ。猶殘穂を剪つて行々子ダンの昔を弔ふ。階前に啣く蟲の音も一入しきるが如く、折からの黄葉枯葉を捲く秋の風に殘んの夢までも荒されけむ、名もなき羽蟲二つ三つ愕き飛びて我れと吾身を燈火に焼き失ふを視ては、吾れは流石に胸ふたがるまでの悲みに得堪えずなりぬ。

＊　＊　＊　＊　＊

風と共に流れよれるアエネアスの譚に聽き惚れたるカルタアゴの女王ダイドオは、はからずも戀風の身に染み渡れごも、女子の口より有繋それとも言ひ兼ねければ徒らに小き胸を躍らすのみにて來ん機會を待つこと〳〵はなしぬ。東郊に狩りの催しある旦、紫だちたる雲もはや散りて雄秀なる日輪の影も拝まれぬれば、鬱て警蹕の聲諸共に眩むばかりの華美なる一列、青牛白馬七香車、絡繹として宮門を出去るうちにも、美しきアエネアス其日の打扮を視れば、キンッス山の嶺に春の水の漲るが如き髪を香よき葉の紐に束ねて循徊ひ給ひしアポロン神の昔も憶はれバリスの君の名いとゞ高うなりぬ。

ヘエラ神の豫ねての企なれは、此日一天遠かに掻き曇り、沛然たる大雨は篠を束ねて投ぐるが如く、おごろ〳〵の鳴る神さへ加りて闇を劈く電光に、惶てふためき散り〳〵になれる從者の影さへ見失ひ、獨らずも只二人のみ同じ處に身を避けたるダイドオとアエネアスは、金風蕭殺の天を去つて紅花綠草

の春の野に生れたらむが如し。

空の月も盈れば虧くる世の習ひ、終日夜もすがら歡樂の温胸にのみ育くまれて二人を繋ぐ黄金の條の斷けんなど夢にすら想はざりしダイドオが、嚴かなる神の命にアエネアスの心強くも愛着の絆を斷ちて以太利の故里を訪ふの報を得し曉は正に是れ夢遊の人の覺むれば何時しか萬仞の懸崖にかゝれるが如く、驚愕と落膽と怨恨とに沸き返へる胸をつゝみあへず、果ては媛御前のあられもなき日頃のたしなみさへ忘られて『さても戀知らずの男め』と、

Non—tu n'es point le fils de la mère d'Amour;
Au sang de Dardanus tu ne dois point le jour;
N, impute point aux dieux la naissance d'un traitre—
Non, du sang d'héros un montre n'a pu naître;
Non.—

ドライデンの英譯は物かはデリユの佛譯さへ、原詩の聲調を傳へじと謂はるゝ怨み泣きも、岩の如き心を翻へすまでの力なかりき。

白帆朝風に駕して駛ること矢よりも急なり。ダイドオは血走る眼に之を視送ること半晌許、青白き唇を嚙みしめつ、顫る手先に形見の衣を取り上げて打ち回へし打ち眺め、果ては今昔の想ひに堪へざりけむ、『樂しき頃の愛の紀念よ、妾の魂を斂めて此苦しみを救へよ』とあはれ秋の宵の霜と共に消え失せぬ。

悲しき哉ダイドオの死や。何等の理由に死なねばならぬ歟、死しての後に如何になるべき歟、そは渠女の問ふところにあらず。渠女は只戀のみを知りぬ。戀は渠女の生命なりき。之れありて渠女また生く之れなくんば渠女いかでかあらむ。ダイドオの頗る劇的なるは玆に負ふところ蓋し鮮しとなさず。然れども羅馬にありて自殺は幾程もなく稍哲理的の調を帶び來れり。セネカのオェヂプスを讀める人は渠の死の單に不幸にのみ起因せざことを發見すべし。渠のアンチゴネエに言ふところを聽くに、渠は自身の生殺與奪の權あるを確信し、夜の暗さも盲の渠を隱すに力なければ劒を執りて身を地獄の中に陷れんと思ひ定め、之れを妨ぐるの極めて迂なるを嘲り、果ては勵聲一番して『あらゆる人は其生を取り去り得べし而かも何人か其死を離し得むや』と喝破しぬ。

Jus vitae ac necis
Mere penes me est. Regna deserui libens,
Regnum mei retineo : si fida es comes.
Ensem parenti trade.....
.....
.....Hoc animo sedet
Effundere hanc cum morte luctantem diu
Animam et tenebras petere : nam sceleri haec meo
Parum alta nox est. Tartaro condi juvat.
.....
Eripere vitam nemo non homini potest;

At nemo mortem.....

アンチゴネエの答は更らに一段のひゞきあり、『父よ、御身程の勇ましき人にありては悲しみに屈むこ
となく世の不幸に出逢ふこそ相應しからめ、君子は生くるを恐れず、渠は不幸に反抗して面のあたり
之を視る、不幸の頂きに達せし人は後は極めて安らかなり、神々は其上追加すべき何等のものをも有
し玉はざれば』

Et hoc decelat roboris tanti virum
Non esse sub dolore, nec victum malis
Dare tegra. Non est, ut putas, virtus, pater,
Timere vitam, sed malis ingentibus
Obstare, nec se vertere ac retro dare.
.....Cujus haud ultra mala
Exire possunt, in loco tuto est situs.
Quis jam Deorum (velle fac) quidquam potest
Malis tuis adjicere.....?

希臘悲劇のうちには、自殺は哲理的の問題たらずして全く一時の感情に出るものなることは既に前に
述べつ。希臘劇中最も沈思反省したるアイアスの自殺さへ決して理的の名を與ふべからず、一旦の憤
怒に堪へずオヂッソイスを殺すべく信じて希臘軍の家畜の群れを屠りしも、其過ちを認めては流石同
輩に遇はむも面伏せに寧ろ潔よく死して其恥を雪がむと決心しぬ。霜は軍營は滿ちて篝火の影さへい

とど暗うなりつ。消えては起り起りては消ゆる幻を追ひて身の來し方行末を想ひやれば、實にや其妻
テリメッサの訴ふるが如く、寄る年波と共に髪の邊りの霜深うなるにつけ、日々闇に倚りて父母の嘸
や我が凱陣を待ち詫び玉ふらむも、悲しき哉、名譽は剝がれ希望は消され、昨は百萬の勁敵を睨み殺
して適れの剛の者、軍さの華よと讃めたゝへられしものゝ、今は天蹋まり地躋まりて六尺の身の置き
どころなき迄に落魂ては、何の面目ありて再たびサラミスの土を踐み得べき。神々は吾れを見放し玉
ひけむ。希臘の軍も吾れを見放しけむ。何の理由ありてぞトロイアの市までも野までも山までも斯く
迄に吾れを見放しけめ。

自殺は此の如くしてアイアスを斃せり。渠が江山に告げたる永訣の辭より見るも渠が其子を抱きての
遺言より見るも、さては渠が自ら及を地に植たる態より見るも、アイアスの死の如何に悲しく又如何
に落付けるかを證するに難からず。然れどもソフォクレエスは未だ嚴しき哲理の思ひに沈むこと能は
ざりき。渠は死なむと定めたる不幸の男を描かんとこそつとめたれ、美しき死をなすものを寫さむと
はせざればなり。嚴正剛膽のみのアイアスはいかでか讀者を感動せしめん。只之れあらしむるものは
渠の父に對し母に對し妻に對し子に對し、さては希臘に對しトロイアに對する千態萬狀の諸感情の迸
發するにあり。殊に幾千の年は隔つとも、雄松にからむ蔦蘿の如く、離れがたなきテクメッサの風情
を想へば、情緻纏綿得も言はれず『アイアスの君よ、いつぞやの御情より思ひは御身のことばかり、

ツォイスの神も照覽あれ、願ふは御身のとゞまりて家の守りとなり玉はむを、二人の臥床は妾を捨てじ、仇しの腕になど任すべき』

O here Ajax ……………………

………………………………ex quo
In tuum cubile conveni, tuis rebus studeo;
Teque per Jovem familiarem obtestor,
Perque torum tuum, quo conjunctus es mihi,
Ne me sinas tristem fabulam fieri,
Inimicorumque tuorum ludibrium,
Cujusvis alius arbtrio permissam.

ストイック主義は劇的としては適應しからず、人間の精神を平和ならしめむとして却て渠をして石の如く冷やかならしめぬ。石には血なし情なし、奈何ぞ他を動かし得むや。勿論世間にも歷史にもストイック主義の幾分の效ありしは事實なり。人は諸々の煩惱以上に超越したるらしき此敎義を聽くを喜ぶ。意志の極めて薄弱なる者は恐れにも悲しみにも寄りつかれざる此一團の隱者を見ては恐らくは欣羨の思ひに堪へざりしなるべし。自然と人情を繫ぐ糸目に放れ、悲歎に伴ふメダルを棄てたる人の胸の邊を撫でつる吾れは、其色もなく溫みもなきに愕きて恰かも冷水を浴びせらるゝ心地そしける。アヂソンの優麗なる詩も遂に劇中のカトォを躍らすまでの力なくて止みぬ。

吾れは更らに進みて感情の激越よりは寧ろ精神の薄弱に起因したる自殺を見むことを欲す。吾れは現代の病とも見なば見らるべき一種の自殺は既に四世紀の寺院の文學に上れるを見る。聖クリソストムの作など確かに其例の一なり。

其二　聖クリソストムのスタヂル――佛蘭西古劇の主人公――シェエクスピィアのロミオ及びヂュリエット――同じ人のハムレット――リチヤアドソンのパメラ

聖クリソストムの作のうち、鬱憂に捕はれたるスタヂルは落付かぬ胸の救はるゝ術もやと思ひて唯ある庵室に隱れつれども望みし平和の得らるればこそ、心の奧底に喰み込みし惡魔はいよゝ其齒をすどならしむるのみにて、面白きイオニア風の舞ひの手態も、ポンペエ●ヘルクラヌムの壁を飾る美しき繪畫も、到底此惡魔を誘出す力なかりき。吾れは聖の說き給ふなる、鬱憂を去るは之を愛さゞるにあるの理をまことゝ識るも、生活の幾千の條を傳りて間がな隙がな忍込む此盜賊を如何にして防ぐべき。吾れは聖の聲調の徒に大に過ぎて慈悲の手の遂に吾れ等に達せざるを悲む。

佛蘭西の古劇は希臘劇を學びたればラシイヌのモニイムもアタリイも一として反省したる痕跡を示さず。此風延てヴォルテエルに及びたれば其作のロルフェラン、ヅ、ラ、シイヌ、第五齣第五套中、イダメが自殺せむとして其夫に向ひて語れる一段の如き、甚だ哲理らしきことを述ぶれども、仔細に全劇を點檢すれば遂に其假面なるを看破するに難からず。ヴォルテエルの人物如何を見ても大方は推測らるべきに非ずや。要するにコルネエユ●ラシイヌ●ヴォルテエルの描きたる自殺はダイド●オアイアス●カ

トオ●ブルウツスの頬にて、英獨の暗潮に浸されたる今の佛劇と日を同うして語るべからず。十餘世紀の霞を隔てゝ聖クリソストムに幽かなる謦咳を返へすは、英にありては實にシェエクスピイア其人の劇にあり。

悟れるらしく二たび三たび其長き白鬚を撫でゝ、戀は若き男の病なりなんと冷笑ふ輩の惡らしさよ。春風のけしきばかり音づるゝ以太利の野邊に二七の少女の蕾辛くも綻び初め、匂ひなつかしう戀にあえぐ隣家の郎の袂を撲ちぬ。天地は愛もて固められたらむ如く、往き通ふ劒の響きは恰かも樂の調べにも似たりけり。東の山の端の薄白く覺ゆるは黎明か、あらぬか、夜這星か。鶯ならぬ雲雀の聲に愕けども、離れ難く放しともなかりし後朝の別れを辿れば、猶乾き果てぬキスの痕を撫でゝ假りに死ぬる毒藥を服するごとき、女子ながらも何かは恐れむ。況して男の身になりて見よ。連理の枝の摧かれたる、追ひ行くところは唯天あるのみ。生死は坦々たる一條の大道となりぬ。

ロミオ及びヂュリエットの二人は遂に死なざるべからず。恍惚のロミオも男らしくなり、また少女も忽ち婦の如く花さきぬれば、二人の運命は既に充されたるにあらざるか。世の中にありといふ悲みと哀しみの杯を滓もたまらず飲み乾したる彼等二人、あはれ何等の爲し遺したる事かある。

輕快なる佛人ならんには、ヂュリエットの服藥に先ちてロミオを追思するとともに、斂骨堂の恐しさをも想像して、覺むる頃までに萬一ロミオの來らざりせばなど躊躇ふ心の如何にしても少女の考へと信じがたかるべく又はキャプレット家の檀那寺に、ロミオの『オ、戀人よ、我妻よ、息氣の根とめたる死も未だ汝の美しさには勝たれず』

O, my love! my wife!
Death, that hath suck'd the honey of thy breath,
Hath no power yet upon thy beauty:

と謂ふ一節を讀みて、希臘のソフォクレエス以太利のルイギ●ダ●ボルトオに比べ、これとても如何はしからずやなど疑ひもすべけれども、畢竟沙翁の天才の之を英國化したるを識らざるの言のみ。モンテスキュウ曾て英國に自殺する人の多きを見て其原因を氣候の勢力に歸しにき。吾れは其他にも數多の原因あるべしと思へども、沙翁劇の勢力亦幾分の責を辭する能はざるべきを信ず、淨瑠璃の心中頗る社會の心中を誘導したる例さへあるものを。

『存生ふべきか、死ぬべきか、是れぞ問ひなる、死ぬ、眠むる、眠むるは夢む』

To be, or not to be, that is the question:.....
.....To die,——to sleep;——
To sleep! perchance to dream:.....

嗚呼是れ豈に幾萬年を通じても常に新しく繰返さるべき疑問に非ずや。ゲエテの所謂『大業を仕遂ぐるに堪へざる薄志弱行のハムレット』なりせば、道德の秩序を正さんとするの希望も起すまじく、或はシュレエゲル●コオルリッヂの云へりし如く『智的能力にのみ餘りし』ならば、斯程の情緒もあらざり

しならんに、心情共に働き、夢魂常に明暗の間を迯るが故に、或時は唯心説の如く或時は唯物説の如く或時は信仰あるが如く或時は信仰なきが如し。問題（プロブレム）を捨て〻生活（ライフ）を拾ひたるハムレット劇の霧を吹き散らす風は遂に無かるべきなり。

さるにても年若き女子の信仰あるもの程、心悪き迄に小供らしきものはあらざるかな。パメラは年若く美しく温順なる小間使なりき。主なる人の切なる心に従はざりければ、一室に押籠められ、意地悪き監視の女さへ付せらるゝ身とはなりぬ。パメラ私かに思へらく、斯くなりては何時如何なる憂目を視んも測られず、寧ろ能はぬまでも逃れんにはと。其夜の更くるを俟ちて高窓を忍び出でたる状は彼女の第三十二翰の中頃にあり。姑らく其大意を摘めば——

『……外壁に手を掛けてあはや頂きに上らんとしたる刹那、古煉瓦の抜落つると共に、身は忽ち墜下して傷さへ蒙りぬ、妾は傷を忍び豫ねて見覚えの梯子もやと探しまはれども夫れさへ見當らず、遂に這るゝの道なきを知ると共に、忽然として身の不幸を心付き、續いて浮みし悲しの思ひ、御ゝ神も許し玉へ、……或は踉蹌き或は膝行り庭の池へと心ざしぬ、あはれ天つ神の御ゝ救だになかりせば身は池の藻屑となりて此世の恐れは永く浮む瀬あらざりしならむを、

今にして思へば傷ける身の歩み遅りしは極ての幸福なりき、池の邊に近ける頃には亂れたる頭も平らぎたれば、岸頭の草の上に坐を占めて自ら問ひ自ら答へぬ、あはれなる人よ、汝の無辜を知ろしめす

慈み深き天の父に其生命を捧げずば、汝は如何にして悪人の迫害を免れ得む、貴き此生命を自ら失ふの權利あるか、名譽を保ちて生存へ能はじとの私語は是れ汝の心弱きを示すにあらずや、さるにても自ら死なむとしたる企こそ、返す〳〵も心得ね、かくて妾は身投を思ひとゞまりぬ』と。

あはれ吾れをしてパメラの如き單純なる心ならしめんには、某の學窓に暁かけてウェルテルと共に血に啼きし若しみもなかりしならんに、顧みれば已に五歳の昔となりぬ。

其三　ゲエテのウエルテル——アルフレッド、ド、ヴィニイのシャッテルトン

打ち寄する浪の力には描きのこせし濱千鳥の足のしるしも洗ひ消され、天工を奪へりとまでに讃めたたへられし名匠の鑿の痕も幾秋春の雨風に襲はれて空しく啾々の恨みを斷草の裡にのむと聞くに、獨り白熱の情焔を燃やして電光の層雲を劈くが如く、青春の念頭に鏤刻したる『わかきウェルテルのわづらひ』なる四ッの獨逸文字のみは今もなほ鮮やかに讀まれ、憶ひ出づる折々、はづかしや雨ならぬ怪しき斑點に我衣襟を汚さゞるはなし、女子ならぬ吾れも忘れ果てられて。

ホメエロスの遺韻を懐に抱き、レオノオレの夢の猶ほ新らしきながらも想ひを馳する花月の苍、一管の彩筆に百ことせの美觀を寄せて、仇し世の果敢なさをなげきたる若きウェルテルの風丰の如何に清く温かく且つ悲しとはするぞ。近き頃みまかれりし某れの公の園生にはせきあへぬ涙に我袂を絞り、滔滔たる小川のほとりに坐して靜かに移り行く自然の美に醉ひ、若き女子の徽笑には萎えたる腕をうら

めしとも思はず。朗らかなる日、人々は猷に忙はし。四つばかりなる男の子の生れて未だ半歳にも足らぬ乳兒を抱きたるが、樂しき野邊に心ありながらも、猶ほも靜かに坐せる無邪氣なる一幅の活光景に逢ひては、直ちに筆を舐りて其下繪をつくる。時に天才論の序にはおのづからなる情感の戀愛に纏かくる尋常腐儒の迂論を笑ひ、更らに一歩を進めて『小兒は何の故に欲するかを知らずと學者の一様に說をなし玉へども、大なる小兒も亦何處より來り何處に向ふて去るかをも知らずして空しく地上に彷徨す』と罵倒す。

Lass die Kinder nicht wissen, warum sie wollen, darin sind alle hochgelahrte Schul- und Hofmeister einig: dass aber auch Erwachsene gleich Kindern auf diesem Erboden herumtaumeln, und wie jene nicht wissen, woher sie kommen und wohin sie gehen.....

多感なるウェルテルの狀のすさまじさ。若し夫れ、おごろの神もやゝ間遠に、雨は繁からぬながら猶ほ降りやまず、活き〳〵しきあたりの匂ひに如何に深く動かされけむ、星の如き眼に一滴の露を湛へてウェルテルの手を捕へ『あゝクロップストック』と我命なる戀人の力ある調子を耳にしては、ウェルテルたるもの安んぞ滿身の萃熱に燃ゆるが如き一キスを捧げざるを得むや。

『愛づるとな、此頃も吾れにオシアンの詩を愛づるかと尋ねたるしれものありき』

Gefällt! Neulich fragte mich einer, wie mir Ossian gefiele!

とは、是れ豈に愛の絕頂にあらず乎。

『ふと我指の彼女のに觸れ、卓の下に我足の彼女のに遇へば、如何に血のめぐりのさはぐかよ、火の如く熱して、吾れはそを後ろにひく、不思議の力復た之を故位に戻さしむ』

Ach! wie mir das durch all Adern lauft, wenn mein Finger unversehens den ihrigen berührt, wenn unsere Füsse und eine geheime Kraft zieht mich wieder vor wärts.

とは是れ豈に戀の眞情にあらず乎。

然れども是れウェルテルの長への樂しみにはあらざりき。少女が許嫁の夫たるアルベルト歸へり來らばウェルテルは去らざるべからず。否、アルベルト家の平和を保たんがためにはアルベルト、少、女ウェルテルの一人は死なざるべからず。而してウェルテルは祭壇に顫ゆる小羊にはあらざりき。果敢なき君の運命を抑も何に譬ふべき。香ひそめし罌粟の花の觸るれば卽ち散りはつるが如く、流れに浮ぶ泡雪の白きと見えしも瞬くひまに過ぎざりけり。昔しは世を擧げて君に泣きぬ、今もなほ泣く、後の世も亦泣かむ。涙脆き人情のならはしは左ることながら、少女の同じく君を戀ふるを知りてあの世の樂しみに滿されつゝ、少女が手づから拭ひて與へりし短銃に自らを殺したる君が最後は人をして却つて欣羨のおもひに堪へざらしめぬ。愛もなく望みもなく食もなかりし海の彼方のチャッタアトンに較べても見よ。

厭世詩人アルフレッド、ド、ヴィニイが一千八百三十五年に著はせし戲曲『シャッテルトン』の材料となしたる英の詩人チャッタアトンが眞の歷史を繙きなば、何人か其悲哀なるに醜鼻せざらん。十歳には則ち

賈逵、六經を暗誦し、金鑾の書石を勒るに堪へたりと聞けど、同じ年に既に痛快淋漓の諷刺詩をつくり、十七歳の曉に遺したる二大詩集を以て滿天下の批評家を驚倒せしめたる十八世紀の最大詩人は、抑も是れ何等の天才なりしぞや何等美界の神祕なりしぞや。而かも世は之を知らざりしなり。書肆の報酬未だ其口を糊するだも足らず。渠れは失望のうちに希望を生み、落膽の上に勇氣を粧ひ、幾度か存命せんとは欲せしかども、バアレット、キャトコットに送りたる書翰の返事も思はしからず、食はざること既に數日に及びぬれば、玆に意を決してブルック街の一小屋にあはれ自ら藥を仰ぎて死しぬ。享年僅かに十七年九ヶ月。ヴィニイは其最後を描きていふ、

『(亞片の小壜を執りながら) あゝ吾が精神(コヽロ)、吾れは汝を賣りにき、此藥にて復た買ひ戻すべし、(亞片をのむ) 一切の煩惱を捨てゝ、假りの生命の最後、常住の曙光を見るよろこばしさよ、卑辱、惡厭、譏刺、汚行、不安、疑惑、薄命、苦痛、御去らばよ、あゝうれし』

(Prenant la fiole d'opium.)

O mon âme! je t'avais vendue. je te rachète avec ceci.

(Il boit l'opium)

Libre de tous! ——Dernière heure de ma vie, aurore du jour éternal, salut! ——Adieu, humiliations, haines, sarcasmes, travaux degradants, incertitudes, angoisses, misères, tortures du caeur, adieu! Oh! quel bonheur! je vous dis adieu!

英の詩人コリンス●バアンス●キイツ●シェレエ●バイロンの徒皆夭死せり。然れども其最も年少のもの猶且つチャッタアトンに七年を超えたり。十七年九箇月、吾れは再たび之れを言ふに忍びざるなり。自ら死にし凡ての亡魂よ。吾れの君等を列べ來りしはホメエロス●ダンテ●タッソオ●ミルトンを擧げ、フェネロン●ヘルマンを引きて所謂『生(ラ、フォルス、ド、サイヴル、)くる力』なるものを論はんと欲したるなりき。讀みもてゆくうちに、我心何となく悲しく、怨めしく、心細くなりて、振り上げし腕もいつの間にか休らひけん、哲理の緒、繹ぬる術もなくなりぬ。あはれ我想ひの紅化したるにはあらざるか。　(二八、十)

研究の新方面

『男性は渠を喜ばしめぬ。女性も又渠を喜ばしめぬ。然れども人生の重なる問題は男性の精神と其生活との裡に藏るゝが如く思はれければ、渠は女性よりは寧ろ男性に深く其樂みを置けり。渠の大悲劇はコルヂリア●デズデモテ●オフィリアにあらずして實にリア●オセロ●ハムレットにあり。渠の男性は道德的發達、若しくは道德的凋零の歷史を有す。渠の女性は活動し又た活動さるゝも、生長することなく變化せらるゝことなし。渠は神興一來、其女性を創作す。然れども渠は男性を研究せり』とは是れ豈ダウデンがシェエクスピイア評論中の一節にあらずや。

新思潮の横溢につれて、個人性の活躍と共に、戀愛のうちに、戀愛を通じて、若しくは戀愛の外に人生の大問題の存在するを認識する以上は、曷んぞ比較的少數元素の結晶たる女性研究を以て吾人の意慾を滿足せしむるを得んや。花の如き少男少女が初戀成否の一徑路を敍するのみを文學とは謂はざる

也。

『渠は男性を研究せり』洵に是れ意味あるの好辭句。若し夫れロモラ、或はドロオテアの心的歷史なきを捕へて時勢尙早の辭柄となすの人あらば、余輩また別に幾ぐの涙あり。

（二八、九）

女性詩人

近時、小金井喜美子、花圃女史、若松賤子、一葉女史、薄氷女史等多少の女性詩人輩出して、稍巾幗者流の爲に氣焰を吐くに足るに似たり。然れども、余輩の信ずるところを有體に言はしめば、最も嚴密なる意義に謂ふ詩人なるものには女性は決して適當なるものにあらず。女子の性は感じ易く涙脆し、而かも其泣くは彼女の知れるものに泣くのみ。母の腕に假の夢を結ぶ病兒に僅か指頭を觸るゝだも嗚咽に堪へざるは女子に非ずや。而かもその袖の雫には破垣を縫ひて靈光を薰せし微草の影を宿すべくもあらず。滿天下の狂へるが爲めコルヂリアの星の如き明眸に誰か一滴の露を豫期せむや。よしや萬斛の愁思を絞つて哀を曾根崎蜆川に寄するとも、全人生の大悲觀に悶死せし跡なくんば、女子の涙の特趣的にして從て其感化の廣からざるを歸納するに難からずとなす。女子は單に是れ女子也。慈み深き母、情愛籠れる妻、氣高きマドンナは得べきも、基督の生れざるを見れば吾人の所謂詩人の決して女性に出でざる所以を證し得て餘りあり。ラスキン曾てシェエクスピイア・ダンテを評して、渠等は情に動かされ又同時に之を司配すと云へりし辭は、エリオット・ブラウニング夫人に適用し得べきや如何に。

遮莫余輩は徒に壯語を弄して敢て諸々の媛達を驚かさむとするものに非ず。渾沌の域を脫して漸く其緒に就かんとする我明治の文學界は、媛達の伎倆を伸ぶる餘地あるのみならず、或方面に於ては實に大に其女子獨得の手腕を煩はさでは協はぬところあれば、益其歩を進め、遠く平安朝の媛達を凌駕せむことを期すべき也。明治の才女乞ふ自愛せよ。

（二八、九）

戀愛の多樣

明治小說界の戀愛は女物に名を博したる紅葉子を首として幾多秀才の圓熟せる筆によりて描かるゝが故に、其傑作往々吾人をして感嘆措く能はざらしむるものあり。然れども全體より通觀して吾人は常に其戀愛の多樣ならざるを遺憾とす。

戀愛夫れ自身は極めて簡單なるもの也。兩性相愛し相慕ふに過ぎず。只其二原因、卽ち諸々の他の感情と結合する時に於て、若しくは、戀愛の諸々の狀況に處するに隨ひて、戀愛は眞個に多樣複雜の大偉觀を呈するものなり。年少作家が處女作たるマヽゴトらしき戀愛は是れ戀愛の最も簡單なるもの、或一派の慣用題目たる某れの社會の張りも意氣地も多くは江戶時代の舊窠を襲ふに過ぎず。人間界の戀愛豈に斯の如く單調平板の者のみならむや。

吾人之を獨の批評家に聞く、沙翁の戯曲を讀める人はシラの理想に走れる戀愛とゲエテの稍情慾に傾ける戀愛とを共有せる翁獨得の多樣的戀愛を認むべしと。又之をヂェエムソン夫人に聞く、沙翁戯曲中の女性には諸感情の巧なる案排ありと。於是吾人は戀愛の多樣も亦『多心的』の沙翁をつくるの一要素たるを知る。

平安朝殿上人の戀愛も、元祿年間町女房の戀愛も、今猶世界の寶庫中に存す。明治の作家讖らず何等の戀愛を貢獻せむと欲する乎。

（二八、十）

沙翁研究家に與ふ

よしや、ゲエテをして千八百十三年に "Shakespeare und kein Ende" を書き得たりしものとするも、之を方今の理解力に比較すれば先きの沙翁アルバイテンの範圍、猶は未だ狹小を免れず、とはマクス、コッホの夙に公言せしところ。吾人は獨逸文運晩近の隆盛を視て眞個に此言をなし得るコッホをうらやみ、願みてテエムス河畔、風色の轉た末枯れたるに驚く。

英國の天才を見るは恰かも駝鳥の卵を生み放すが如し。沙翁研究亦其一なり。されば單に英語を識るものはダウデンを手にし得べし。ウルリチ・ゲルフィヌスの面影を窺ひ得べし。ファネスを繙き得べし。然れどもウルリチ・ゲルフィヌス・ダウデンを捨てゝ却つて端本のヂイフェルス、一面論のフラアテを擧げ、比較基礎上先づ指を心理方面に染めたるヴェッツの趣旨と意氣とを察知すること能はず、是れ豈に沙翁研究者の等閑に付すべきことならんや。

青年の漫に沙翁を口にするものは多くは假聲を遣ふに止まる。未だ以て齒牙にかくる程の價値を生ず。獨り戯曲を目的とし沙翁研究を本職とせんとする人は始めより廣く語學に力を盡すことなくんば、中途にして醫すべからざる憂目に逢遇することあらんっ東洋の孤島にありて沙翁を研究するの道も亦た難い哉。

（二九、二）

小說家としての女性

去ぬる日、余輩は『女性詩人』と題して、最も嚴密なる意義に謂ふ詩人なるものには女性は決して適當なるものにあらずとの說を公けになしたることありしが、古今東西、小說作家としての女性が比較的に成功したる實例あるに關しては、猶は一言先きに漏れたるところを補ふの要あり。

歷史の上に於て、科學界にも文藝界にも女子の大業を爲したるもの太だ鮮し。是れ女性たるもの〻理の當さに然るべきところあればなり。女性の哲學者、女性の論理學者などいふは、辭の上にありて既に矛盾したるものなるべく、繪畫界にては想と術とを溶化する女學生は、とて可笑しき諺さへつくられ、音樂界にはベエトオフェン・ヘンデル・メンデルゾォンなく、詩歌界はた上はサッフォより下ブラウニング夫人に至るまでの寂しさ驚かるゝばかり、而して此間に獨り小說家としての女性のヤ、成功したる蹟あるは何の故ぞ。他なし、單にハアトの事、是れ畢竟女子に依りて整理し得らるべき適當のも

のなれば也。

西歐文藝研究者の不注意

人を射むと欲せば先づ其馬を射よ。苟も一國の文藝を研究し、會得し、以て發明するところあらむと欲せば、第一着に其國の根本的思想を攫取せざるべからず。事茲に出でずして漫然其國の詩歌を誦し其國の美術を觀るも、猶ほ霞を隔てゝ物に對するが如く、曖昧糢糊として到底其本體を知悉することを能はざるべし。焉むぞ庖刀牛を割くの妙趣を解し得べけむや。

吾人は近時我國の文學界に於て、熱心に西歐文藝を研究するの氣運著しく勃興し來れるを視て悦しさに堪へざれども、其或者は恰かも申合せたるが如くに徒らに摘句掇章の末技にのみ走りて、西歐文藝の二大根本的思想、卽ち基督想希臘想の如何なるものなるやに關しては毫末の注意だもなさゞるを知り、今更らの如くに驚かざるを得ず。抑も〳〵渠等は聖書に導かれずして猶ほ且つ西歐の文藝を理解し評論し得ると思へる乎。希臘羅馬の神話に育まるゝことなくして猶ほ且つ彼國の詩歌を談じ美術を口にし得ると思へる乎。識者或は吾人の言の極めて平凡なるを笑ふならむも、事實に於て、渠等學生が聖書と神話とに關する知識の僅少なるを如何にすべきか。

予輩は聖書の引照に依り、若しくは一二のクラシカル、デイクショナリーを取りて零碎的知識を集むるを願はず。是れ寧ろ下世話に所謂『骨折損の草臥贏け』なるべし。予輩は斷言す、聖書を熟讀して或仕方に於て少くとも一度は身を擧げて渾然基督想化することなくむば、若しくは希臘神話の觀念、起原、及び發達を學びて、同じく少くとも一度は己を希臘想化することなくむば、到底此等二大思想を心から會得せん折なかるべしと。既に會得せず、彼國の美術詩歌は只造れる花而已。

英文學を學べる人は、シェクスピイヤ・ミルトン・ウォルズウォルスの如き詩人、スコット・ホオソオンの如き小說家、ベエコン・スチイル・アヂソンの如き論文家、カアライル・ラスキンの如き批評家が如何に聖書を恰かも說明の寶庫の如く見做したるかを悟るべし。彼のテニスンが詩才は姑らく措て問はずとも其名聲を斯く迄に博したる一主因は渠の聖書を引用せしにありとはヘンリイ、ヴァン、ダイクの道破せしところ。若し夫れキイツ一派の希臘想に至つては今更ら繰返へすも煩はしかるべし。（二九、四）

近松研究法の論難

早稻田子が一片の嘲罵的文字、端なくも論壇破裂の導火線となりて、帝國文學の宣言となり、明治評論の左祖となり、抱月子の解釋となり、更らに明治評論の打擊となりて甲論乙駁、停止するところを識らず。其『再び抱月子に答ふ』の如き、竝びに宙外稿『巢林子が同情』を評せるが如き、流石に『赤門俊兒の一』なればにや立論正大、意氣雄奔、凛として當るべからず、輕佻浮華の評壇をして覺えず肅然として襟を正さしむるものあり。知らず逍遙門下の高弟は將さに何等の論陣を張りて之れが應戰を試みむとはするぞ。吾等は刮目して之れが成行如何を視むと欲す。左るにても訝しきは近松を傳し

近松を評し近松通を以て愛山の許したる塚越停春樓の論營の籌を滅し鳴を靜めて閑として水を打ちたるが如くなるを、停春夫れ眠れる乎。

研究の細心を要し多端を欲する豈に啻に近松の上のみならむや。古より大なるらしく思はれたるもの の眞價を認むるまでに幾百年間幾十百人の手を經たるもの鮮少にあらず。從來の所謂近松通なる者が其性格を論じ世界觀を云々するの間に何故に遊女と云はず傾城と云はずお山といはずしてよねと云ひしかに留心したる者無かりしは事實なり。此研究を以て文學上の一要素となしたる明治評論子の着眼は流石に奇警といはざるべからず。吾等は子と共に字義の研究をも勿諸に附すべからざるものあるを認む、否字義の研究を以て最も要用なるもの〻一と認む。然れども字義研究の完了せざるうちは性格を論評し筋立を批判するの效力毫もなしとなさば、吾等は恐る、是れ或は守株の僻論にあらざるなきかと。大なる文學は數學に於けるが如く前式を解せずんば後式を釋く能はざるの比にあらず。何れの部か敢て覗ひ能はざらむ、而かも何れの部か敢て明らかなりとなし得むや。"He is ever new, and he cannot satiate." とは其無限大を示すものにあらざるか。既に無限大なり、故に之れが研究の材料も方面も年月も又た從て無限ならざるべからず。よしや近松を以て無限大ならざるものとするも、兎にも角にも髣髴の間に大なるものらしとの假說を與へ得るならば、研究の材料も方面も年月も又た從て大ならざるべからざるなり。本文撰擇原著批判の才あるものはシンガアたれ、ファネスたれ、クラアクたれ、シュミットたれ、ダイスたれ、ネヱアリ及びライトたれ、古語字典編纂の才あるものはクラアクたれ、シュミットたれ、ダイスたれ、ネヱアスたれ、文典學者はアボットたれ、集註學者はゲルフィヌスたれ、チエムソンたれ、ダウデンたれ、コールリッヂ●ハドソン●シュレエゲル●ハズリット有りとあらゆる好きな人になるがよし。ブルトハウプト出でずむばヴェッツ出でず、シュレエゲル●ウルリチ出ですむば同じくブルトハウプト出づる能はざりしなり。

篁村、逍遙、青々園、宙外、抱月等は眞に是れ恰好なる一團の近松研究者、萬年、醒雪、桂月、正美等も同じく是れ恰好なる一團の近松研究者、停春樓、愛山生等又た共に恰好なる一團の近松研究者たるを妨げず。近松研究の先導たる卿等各長ずるところをなせ。唯知らず今正さに何を爲しつ〻あるかを。（二九、十）

古代の神來說

天才の筆を提げて紙に莅むや、詩興頓に加はりて意氣おのつから昂り、所謂官知止而神欲行の境に到ることあり。眼中素より物我なく、憮乎として夢みるが如くまた醉へるに似たり、覺後痕なく唯だ靈香の衣袖に薰ずるらしきを視るのみ。英の所謂インスピレエション、邦語に譯して神來といへるもの卽ち是れ。

神來をほどけば神の來れるなり。既に神の來れるといふ、まことに神靈の移れる狀態を指す歟、將た

亦た神靈の移れるらしき狀態を指す歟、別言すれば外より來れるものとなして文字其儘に解すべき歟、將た亦た內より生じたるものに暗比として用ゐられたるものとして解すべき歟。其字義の如何は之れを用ゐる人々のこゝろ〴〵によりて自ら差別あるべく又た差別あらざるを得ざる筈なり。そは兎まれ角まれ、今玆に綴り合せたる我が斯の文字の目的は主として古代の神來說は如何なりし歟、何故に其意義を生み出せる歟を視るにあり。單に是れのみ、豈他あらむや。

簡朴なるは古代民族なる哉、單純なること小兒の如く羨ましきまでに疑惑の念を挾まざるものは眞個に彼等民族なるかも。山靑く川白き邊、雲雀に覺め鶯に眠り、饑えては木の實を拾ひ渴しては谿間の淸水を掬ぶの外に何物をも得辨へざる彼等は凡ての事物を判ずるに必ず自己を標準となしぬ。思へらく、彼等自身の爲せるものは皆其意ひたること考へたることの結果として現れざるはなし、自身以外卽ち自然世界の現象に見る運動若しくは活動の基礎も恐らくは自身以外に存在する或不可思議力の意ひたる、若しくは考へたる結果なるなからんやと。斯の如くして彼等は自然界に精神を付與して凡ての物凡ての事に必ず精神力を認むるにいたりぬ。是れやがて神話の緖をつくる古代民族が自然に對する見解の法に外ならざるなり。

既に脚を斯の觀察點に停む。顧みて自己の體內を注視し始めなば未だ生理的作用を知らざる彼等は、心臟の瞬時猶ほ休せず整然たる一定の調子を以て皷動しつゝあるには恐らくは一たびは愕きて又一たびは怪しむならむ。自己が動かさんとの意志なくして而かも動きて息まず、是れ或は自己の知らざる或者ありて我體中に斯かる作用を爲すにはあらざる歟と。之れと等しく卒然として不規則に發作する生理現象にも彼等は必ず同一の怪訝心を生ずるなるべし、反射運動と名くる欠伸、噦の類も古代民族に取りて恰かも神的所爲の觀ありし證は今日獨逸あたりに噦する度々 helf Gott ! と叫ぶ習慣の遺れるを見ても明らかなるべし。吾等は同じ習慣をホメエロス・アリストテレエス・プリニウス等に發見するのみならず、今日猶ほクルヂスタン・フロリダ・トンガ諸島嶼に存するを見る（ラボック開明之成立四一五頁）。

人間が興奮せる時の狂態は又た均しく彼等の怪しむところとなれり。觥を擧げて未だ三遍ならざるに沈默の者饒舌となり、溫厚の者躁暴と變じ、或は輕妙となり滑脫となり、或は豪快となり雄壯となる。復た甚だ平常の性格に似ず。其狀恰かも藥中に忍べる或魔力出でゝ人間を捉へて此の如くならしむるにあるが如し。是を以て上古より催醉料は常に宗敎的禮拜と伴へるを見る。北亞弗利加にはハシシあり、南亞細亞に鴉片あり、太平洋諸島にタブウあり、亞細亞にては殺蠅菌の煮汁を用ゐ、中世紀にては魔術師の使用する油藥の類なるヘグゼンザルブを用ゐ、古代希臘にてはヂオニュソス祭に葡萄酒を用ゐ、古代埃及にては託宣によりて未來の吉凶を卜せむが爲めに他界に行き得るの力ありと思惟せられたる或一種の醉藥を用ゐたりき（タイロオ文化之起原二卷四二〇頁）。

驚くべきものは夢的現象也。古代民族は夢的現象を解釋せむとして二樣の說明法を用ゐたりき。一は肉を離れたる靈が實際に經驗して生ずるものとなす說にして今日猶ほ黑人種及びグリインランド人の間に遺り、他は人間の視たる物の靈が實際に此方を訪問するものとなす說是れなり。屍體を鄭重に取扱ふ習慣は全く死者を以て夢中にあるものとなし靈魂が他地方を訪問しつゝあるものと信じたるに原因す。是に於てか夢も又た宗教的禮拜と關係して古代民族が何故に豫言的夢象を信じたるかの理由を知り得。ホメエロスも此意味を述べ、ピタゴラス派及び其他の哲學派も卜夢術を修めたり。此遺風今尙ほ處々に存す。

疾病に關しても古代民族は又た同樣の見解を下し、自身の肉體が全く或種の魔力に捉へられたるものと思惟したり。故に醫療の方法としては彼等は藥劑を用ゐずして單に禁厭を用ゐ、醫業は一切之を僧侶に託し、僧侶は誓詞若しくは其他の手段を藉りて惡魔を肉體より退散せしめ得る力ありとせられたり。此種の現象世界各國到るところに多く殊に我國の下等社會にありては行くとして逢遭せざることなし。オーストラリア人の如きは命數滿ちて死ぬるさへ禁厭の利目なかりしものとなすといひ傳ふ。中世紀にありては癲癇を以て惡魔の所爲となせるよし。まことや癲癇の語エピレプシスは被捕を意味し、亞剌比亞語の癲癇と惡魔に捕へらるることとは共に同一の文字を用ゆ。

以上敍述の諸點に依りて讀者は古代民族が其自身以外なると以內なるとを問はず、苟も自己の意志、

自己の思考の結果ならざる現象に對しては、常に或不可思議力の所爲に歸し去るの事實と理由とを知了せられしならむ。生理學を知らざる彼等が夢に對し興奮劑に對し疾病に對して誤解を抱けりしが如く。心理學を知らざる彼等が無意識製作の狀態に命名するに他よりするなる神來の文字を以てしたるは毫も怪しむに足らざる也。總じて吾等思慮の行進を觀察するに、頭腦の作用吾等の識域中に存する間は個人的能力の自由なる活動を明確に認識し得れども、哲學にありても技術にありても精神最後の活動に至りては腦の活動全く無意識中に沒入し、想の意識に上れる頃には既に成形したる結果の如く現はる。最も優れたる想はまことシルレルの歌ひけむ如くに晃々として、さながら無より現はれたらむが如き像を醉へるに似たる眼の前に見るにあらずや。此時を目して腦が恰かも或靈力に魔せられたるが如くに思へりとは寔に止むを得ざるの事と謂ふべし。されば哲學にても美術文學にても驚くべき程の大作を後世に遺せる希臘に於ては哲學者詩人美術家等は皆神と相往來するものと做し、ピタゴラスの如きは人間以上のもの、アポロン大神の子にして『世界の調和』を聽き得べき能力ありきと信憑せられぬ。プラトンは詩人に就きて說を爲して曰く、彼の作物は到底科學より得らるゝものにあらず、全く神來に得たるもの神の恩賜の一種なりと。彼又たイオンに言ふて曰く、詩人は技術（デヒネ）によりて語らずして神來（タイアモニラ）によりて語ると（ツェルレル希臘哲學二卷四九八頁及五一一頁）。

其他チツェロの如きも詩人を目して靈光を浴びたるもの醉へるもの神來せるものとなしぬ。酒に醉へ

る狀態と美術家文學者が神來の狀態を同じとなせる梨倶吠陀（リグヴェダ）及びツェンドアヴェスタ（火教の古典）のうちにソマと名づくる草（汁を飲料に供す）を『讃美歌を作るもの』と謂へるが如き、印度の太陽神因陀羅（インドラ）のソマを飲みて大業を爲すと信ぜられたるが如き、將た又たホメエロスが葡萄酒に『神的』の名稱を附せしが如き（スペンサア社會學一卷四二八頁五六六頁二卷三四二頁）皆之れが證となりて餘りあるにあらずや。

此等の事實を綜合して推考すれば、吾等は古人が其一時若しくは永久の神來如何はあれ、兎にも角にも詩人の製作的方法は一に神的興舊にあり、神靈の移れる狀態に存すとの確信を抱けりしことを察知し得べし。然り、彼等は文字其儘の意味に全然外より來れるものとなしたりき。足の地を離れ得ざる憫むべき人間の口を藉りて美神の天歌を吹奏するものと信じたりき。敢て其所說を是非する勿れ。彼等已に神といふ、眞摯なり、誠實なり、血あり肉あり、後世の字句を修飾して僅かに景象を維がむとする儔にあらず。"Achilles' wrath……heavenly Goddess, sing!" の褪せたる花の香りなきが如きは畢竟ポオプ其人を想へばなるべきも、若し夫れ開卷第一 *μνῖν σεῖλδε δεα*（メイニン アイレ テア）（神よ怒りを歌へ）の文字に接するあらば吾等は次に來る文字の既に人の聲にあらずして神の聲ならざるやを疑ふ。（二九、十一）

『あはれ浮世』に餞す

吾國現代唯一の院本作者櫻痴居士が一世一代の傑作と稱せらるゝ哀史の翻案『あはれ浮世』は今より半歲に涉りて續々太陽に揭げられむとす。ユウゴオは近世佛文界の泰斗にして『哀史（レ、ミゼラブル）』其傑作と稱せらるゝもの。居士這度の用意も序言に依りて決して其尋常一樣にあらざるを微覺せしむるあれば、丁酉上半季の讀書界に於ける呼び物は蓋し此『あはれ浮世』ならむか。左るにても冥々の裡に回轉する氣運の增進ほど微妙なるはあらじ。其昔抱一庵に依りて吾國民はユウゴオの先生なるを聞く外何故に先生なるかを知了すること能はざりき、思軒居士今年の筆『死刑前の六時間（ル、デルニエ、ル、ヂユウル、ダン、コンダムネ）』に及べりしかども未だユウゴオの全豹を窺ふこと能はず。なにがしとやらむが『九十三年（カトルヴアン、トレエズ）』刊行の曉に到らざれば果して巧みに著者の面目を傳ふるや否やを批判するに途なし。時茲にユウゴオの氣魄、熱情、暗淚、憤恨、打して成れる一個のヂャン、ヴァルヂャンは衣を更へて四民凝視の間に立たむとす。馬已に動く、余輩抑も何を以て之れに餞すべきや。

島國の小規模を打破し大なる文學を作らむがために四方に向ふて思索する文士の衷情頗る掬すべきものあり。或は英を說き或は獨を說き或は佛、以を說き或は露、那を說く、西班牙を說くもの、波斯を說くもの、今なればこそ說者堪能の譽れなく聞者謹聽の情ぞなけれ、焉んぞ知らむ是等の諸潮流が數十百年の間更はる〳〵數多の人の手を經て、生長し發達し成熟する國民文學の一瓦を敷き一絲を織るに至るべきを。何人か日夜に健全なる文學を夢想せざらむ。唯だ分け上る動亂の途中にありては人各

各所信を戈こし所守を楯とし、飽くまでも同に黨せざるべからず。余輩は既往に於て余輩の主義に依憑したりき、余輩は現在に於ても亦た余輩の主義に依憑せざるべからず。『あはれ浮世』豈に獨り逸せしむるの理あらむや。

いつの頃なりけむ、個人に罪なく社會に罪ありの說聲高く唱へられたりしが觀念小說流行の時復た此說を敷衍したる人ありきと覺ゆ。卽ち此說に從へば四邊の境遇は全然人間を作るなり、人間は其制度に依りて作らるゝなり。知らず說者其趣旨を那邊にか求めたる。

其昔巴里雜誌に世界四大文豪の一と數へられたるヴィクトル、ユウゴオがタイタンの如き巨想を放て萬象を洞察するや、ホオマア・シェクスピアに見るが如く人間の多面的活動に付きて熟視せざりしがために、作物概ね怪奇に傾き不自然に陷り根本的に經驗の說明たるもの幾んどあらざりき。夫れ『哀史』は醜穢にして敗頽せる佛國の社交制度に反抗せる大告訴狀なり。當時立法者の罪惡決して少小にあらず。ファンチインの如くガヴロオシュの如く憐むべき弱小の者が上に向ふて論辯の意氣を生じたるは素より怪むべきにあらず。唯だ是等ルソオの胸裡に燃ゆるが如き大憤激（サヘヴア、インヂグナチオ）の渦瀾中に投入せられて人間は其法度に作らるゝものとせば卽ち如何。若しヂャン、ヴァルヂャンを以て一有罪者なりとせば辯護者は恐らくは流涕して其犯罪の赦免を讀者に乞ひ狀恰かも讀者の惻憾の情を動かして犯罪者が宇宙の規則を故意に破りたる事實を變換し得るが如くなるべし。夫れ刑罰は立法者の工夫に出でずして罪惡の半面をなせるもの、有罪の者の所刑せらるゝは當然のことにあらずや。若し慈悲にして挿入を欲せば世界の基礎を作る正義が其分を保たむがために適當の準備を前置せざるべからず。然かもユウゴオの諸作中に暗示せる原則は罪惡を犯せる個人の罪惡たる事實を等閑視せる無意義の仁惠に過ぎざるの觀あり。夫れ法度は人間の制作にして、困苦の根原は一に人間にあり。故に人間にして舊世界より一新世界を作らむと欲せば正當なる艱難其物は到底避くべからざるものなり。是に於てか余輩は再言せむ、曰く、人間の性格は單に四圍の境遇に創造せらるゝものにあらず、人間に自由の意志あり、此意志に對して同盟せる惡の力は全然是を壓服することを能はず、自憑則ち中心にての自制なるものは人間救助唯一の元素たりと。

顧ふにユウゴオ等の小說作家が革命の文學を作り、天地の間苟くも法則と名づくるものあらば財產篇たるとを問はず、婚姻篇たるとを論ぜず、都てに對して打擊を試みたるは余輩の渠等を目して天職を解せざるものとなすに躊躇せざる所以なり。

遮莫、余輩明治の讀者が訴へむところは『あはれ浮世』にあり。嘉永安政の紊亂時代に生れたる惡玉吉五郎が性格如何に依りては居士が原著を國民化するに際し、及ぼすところの感化影響頗ぶる偉大なるものありて存す。語に曰く、戲曲は壓促せる小說にして小說は伸張せる戲曲なりと。言果して眞ならば『哀史』を翻案せる『あはれ浮世』の詩的裁判は何物ぞや。ゴオル種族の頭腦由來獨想を注入す

ること難く、丹次郎米八の後裔頗る道念の薄弱を以て聞ゆ。義務の理想を無慈悲の運命と観じ、戀愛を邪淫と観じ、美麗を快感と観じ、翹望を厭慾と感じ。宗教を妄想と観ずる作家評家の跳梁する間は余輩の毛錐摧けずむばすなはち止まず。『あはれ浮世』の前途如何。（三十、二）

はげあたまの説明

伊れ昔紅顔の美少年、今や鶴髪亂れて恰かも絲の如し。吁嗟壯者終に斯の運命を脫すること能はざるべき乎。老境果して樂しかるべき歟、果して苦しかるべき歟、樂しかるべしとせば果して何物か樂しかるべき歟、苦しかるべしとせば、果して何物か苦しかるべき歟、苦しきもの終に離すべからざる歟、樂しきもの是れ常住の樂しみなるべき歟、抑も亦た老者が未來の希望と過去の經驗とに關して如何なる意見を有し自己と他者とに對して如何なる行爲を保つべきもの歟。歲月流れて毫も休する時なく墓門蕭々近く吾れに逼らむとす。是に於てか古への詩歌を通じて自己の依憑すべき理想的老年を描き、今の言行を注目して自己の堅固なる立脚地を築かむとす。壯者の念時に斯の如く切なるを覺ゆるときあり。想ふに今日のはげあたまは何等の説明を以て可憐の子弟に其訓戒を附與すらむ。

露伴は明治五十年を觀じて云はく『饗庭篁村は奇麗なる梅干老爺となり坪内逍遙は鐙甲ぶちの大眼鏡かなんぞかけたる白髪老人となり森鷗外は輝き渡るてら〳〵あたまとなり廣津柳浪は初孫といふ小説を公にし森田思軒は總入歯となり尾崎紅葉は煎茶に紅葉好みの一式を立て宮崎三昧は胡麻鹽ひげとなり我れ幸にして生く共中風となりてあゝ〳〵と唸る』と。茲に吾人は豐富なる想像によりて病苦を訴ふる唸りの外、左も福々しき閑そうなる隱居に似たる一群の詩人の後身を視ることを得たり。

鷗外のはげあたま中、ビタゴラス説いていはく『我黨の中には口さがなき小雀どもに甚だしい寃罪を蒙らせられて居るものもある、實に怪しかることである、この賢人アントニオを見るが好い、思慮分別が鼹鼠のやうに頭の中に縱横に潜り歩ひてそこに生えて居た草の根を掻きむしつて仕舞つたといふ事は爭ふべからざる事實である、智識のあるものは慈悲といふ事を心得ねばならぬ』。吾人は茲にはげあたまの多年の經驗に貯へたる夥多の思慮分別あるを知り、其懷に抱きて髪の長き愚人を敎育するを恥とせざる言を聽くを得たり。

近著の『繪畫草紙』に一個の白頭翁、眼鏡越しに其重々しき瞼を張り上げながら、安樂椅子に坐して筋張れる老ひの手に希臘語の書冊を繙くの圖あり。題してグラッドストオンの肖像といふ。吾人は茲に政界の老雄具翁が今も猶ほ書見を以て唯一の樂しみとするを視るを得たり。

未だはげあたまには程遠かるべきも年は六十路の坂を踰えなむとする左るやんごとなき官人は、一旦冠を掛けて野に下るや、紅燈綠酒の間、美姫を隨へ粹唱を和して意の之くところを恣まゝにす。茲に吾人は酒色を快とせる新聞屋亦た之を羨むの現象を視るを得たり。

夫れ明治今日の子弟は明治今日のはげあたまの説明に俟つこと多し矣。近來二三の材料を取りて試み

るに病苦を訴ふるあり、隱居らしきあり、思慮分別を有して愚人を敎育するあり、書見を專らにするあり、酒色に荒むあり。

昔はカトオ其對話篇に老年を不幸とする原因四個を數へ第一事務處理以外に離居せしめ第二身體を衰弱ならしめ第三凡ての快樂を剝脫せしめ第四死に近からしむとなし、是等を人間其自身の過失となし、希臘羅馬の諸例を擧げ一々之を辯駁して曰く、第一國家の事務、家族の事務より離居せしめらるゝも老者は事務に關する新資格を享け新進弟子の行爲を導くに足るべき經驗と智慧とを有す、蓋し智力は體力より多くなればなりと。鴎外のピタゴラスは願ふに同じ說を演じたるにはあらざるか。第二次第に衰弱せると共に中年の活潑なる義務に關する要求又た從ふて休止し、今は惰眠、不活潑に反して戰はむが爲めに絕へず心を鍛鍊すと說く。煎茶を澄まし眼鏡に老込む、去りとは餘りに早手廻はしなら、ずや。第三青年の大缺點を老年より分離し得るは是れ老年の貴ぶべき特權なり、快樂減ずると共に慾望減じ、爲めに青年時代に生命を賭して熱中せる無意味の快樂を笑ふ道理力發育し、更らに高尙純潔なる快樂に向ひて其心の自由となれるを喜び、入つては希臘語を學び出でゝは田園に從事し、終に叫びて曰く、覺官的快樂は是れ何等の價値ありやと。彼の酒色に荒む者之れを聽て果して何の感をか生ずる。第四、老年の終に死ぬるは恰かも熟せる果物の取らざるに自ら落つるが如く歸するに等しと。カトオ逝きて後、人間思想の擴張と共に理想的老年代表者の中心點移動したるは素より自然の理なり。

彼の貴族に生れ軍人として辯士として政治家として富者としての老年は已に去るともカトオの唇頭に上れる老年の幸福、快樂、報酬は猶ほ單一のうちの變化の如く形を變じて敷衍せらるゝにあらざるか。然らざるの所說は到底吾人の理想として成立せざるにあらざるか。幸ひに吾人の所信を歌ふの時期あらば吾人は遙かに天に面して高くテニスンの詩句を誦せむ。

Through the ages one increasing purpose runs,
And the thoughts of men are widened by the process of the suns.

（三十、二）

無の兩義

世界は苦痛なり、人生障礙多し。生ける者皆死に歸し容顏盡く變衰す。高山も壞散し、蒼海も枯竭し、大地及日月、時到らば皆歸盡せむ。希くは穢土を厭離して淨土を欣求せむ哉。苦痛は解脫を要す。生活を離れ現世を捨て、所謂世界の超越をなさば生ずるところ是れ卽ち無、調和求めずして來り平安欲せずして存す。

個性已に生活を離れ現世を捨てゝ成存せず。無の世界に或ものを有すとは何の義ぞや。言を換へて說かむか、既に感ずること能はざるものが猶無の世界を以て調和ありとなし休息ありとなし解脫ありとなし、何等かの仕方によりて滿足に感ずとなす。其意味は抑も何の意味ぞや。自己の感せざる滿足なるものは自己に取りて一の滿足と稱すべからざるものなるが故に、感せざる者に對しては調和も解脫

も休息も只無意味の文字たるに過ぎざるべきなり。吾人は茲に無の意義を問はざるべからず。

無に兩義あり。運動廢止し生活缺亡す、死なり滅なり、感亦た止む、此種の無に滿足なし。他は卽ち休息なり、生活の缺亡するにあらずして生活の他より攪亂されざるところまで出達するなり、運動の廢止するにあらずして運動の他より攪亂されざるところまで超越するなり。圓滿の感自己を浸了す、調和始めて玆に生ずべきのみ。彼の止みたる不調和は調和にあらず、調和の存せざるにあらずして單に空なり。調和の存することころは何物も響かざるところにあらずして數多の響きが他より攪亂さることなく共鳴するところにあり。不調和の調和中に溶化したるところに眞の調和始めて存す矣。而して世の詩に遊ぶもの、何人か此種の無を捉ふるを願はざらむ。迷妄を斷じ罪障を滅し擾々以外別に曜晃の天地に逍遙す。天下幾萬の詩、終に此妙境を喚起せしむるの能力なからむか、吾人は世を擧げて之を抹殺するに踟躕せざるなり。戴益嘗て春を探る、歌ふて曰く、

盡日尋春不見春。芒鞋踏遍隴頭雲。歸來適過梅花下。春在枝頭已十分。

詩界春を探りて此好句を得なば吾が願卽ち足る。（三十、三）

詩の活用

客あり笑ふて曰く、詩の無を探る子の言や謹むで之を聽く、敢て問ふ如何にして之を探らむか、又た問ふ探りて以て何をなさむとするか。

詩人の眞理を歌ふや、多感の性往々一片を碎きて之を增大ならしむる傾きあり。且つ夫れ渠等素より神にあらず、如何ぞ一人の力を以て能く宇宙の大眞理を發揮し得む。沙翁は歷史の沙翁なり宇宙の沙翁にあらず。ダンテは歷史のダンテなり宇宙のダンテにあらず。ホオマアは歷史のホオマアなり宇宙のホオマアにあらず。ホオマア讀むべくダンテ讀むべく沙翁讀むべし。豈啻に是のみならむや。世界の矛盾せるもの撞著せるもの又た最も喜びて之を讀むべし。ゾラなど第一に讀まざるべからず。吾人をして百年の後に生れしめむか、百年の後までに世の一癖あるものは皆喜んで之を讀むべし。吾人をして二百年の後に生れしめんか、二百年の後までに世に一旗幟を樹てたるものは皆喜んで之を讀むの決心あらざるべからず。吾人をして漫に譫語するものとなすなかれ。旅客野に出でゝ途を失すれば鞭を馬首に掛けて其之くところに任すにあらずや。不調和の調和を觀じ缺損の圓滿を探るは吾が本性の遊ぶところに隨ふのみ。宇宙を愛の精と觀じたるがためにシェリイを棄てず。宇宙を想の普遍と觀じたるがためにウォルズウォルスを棄てず。宇宙を愛想俱に存する天則の進行と觀じたるがためにテニスンを棄てむや。將亦た極端の悲觀詩人バイロンを棄てむや。若し夫れドイッセンの唱道するが如く耶佛兩敎其根本的思想に於て同じとなさむか、吾人は世人が依りて以て水火相和せず、氷炭相容れずとなすものも其實相和し相容るゝところ太だ夥だしきものが糠麵眼にあるがため却つて眞相を逸するにあらずやと疑ふこと數々なり。或は哲學宗敎文學の境にありて所謂大悟徹底の巨匠名士、之を研究するにあ

たりて數々其矛盾衝突の論點を發見すといふ學者の說を是認せむか、吾人曷んぞ不調和を胸に藏めて調和のうちに溶化したる一個玲瓏の新天地を豫想するに逡巡せむや。

縱しや、人力を以ては到底這般の妙境に達し能はざるものともせよ、眞實の世界を發揮せむとつとめたる古今の傑作を讀破して其髣髴を窺ひ其一端を捉へたる上に偕願みて我現實界の萬象に接せしめなば行くとして解せざるはなく處として釋せざるはなし。彼の擾々のもの紛々のもの紛々と共に閑々あり。拙劣の手段を以て穢土を厭離することなく穢土のうち自ら淨土あり。世活を棄て現世を離るといふも此意味に於ての棄離にして人生の眞に對する吾人の義務は離るゝこと能はず。人生悲觀のもの同時に其テレオロヂカル、ヴォウを滅せざるべからざる理由もなければ吾人は人生に對する義務を完了するに寤寐の間も忘却せず、依りて以て衆庶を救ふは是れ豈に詩聖の本旨ならずや。

吾人は近時青年文士の間に二個の忌むべき現象あるを見て遂に敢て上言をなしたり。一は詩を弄すると是れなり、渠等は嚥下せずして掌上に轉ずるなり、讀みて自己の品性を養ひ性格を修めずむば、讀詩果して何の快かある、千萬篇の敍述渠は必竟之を以て何をなさむとするか。一は任意に詩數を偏狹ならしむることなり、バイロンを讀みてフィリッピンに走らむことを欲し李白酒を食へば詩人第一の條件を飮酒にありと速斷す。憐むべき哉其偏狹の志や、自己幸福の立脚地を破壞されたるがために唱へらるゝ悲觀は到底夥多の詩篇に養はれたる無界唱道の深きに比たらず。彼の弱年にして既に悟りなる僧侶と萬障を嚙み碎くの勇氣なくして僅少の障碍に身を殺すものとは共に無界探見の伴たる能はざるなり。

意餘りありて辭足らず、客夫れ之を解せるか。客笑ふて答へず時評子亦た笑ふ。客の笑ふは時評子の愚を笑ふが如く時評子の笑ふは客の愚を笑ふに似たり。

（三十、三）

新體抒情詩是非の三要素

數年來新體詩人を責むるに必ず想を以てしたるは一に時勢の反動に起因せしのみ。極端なる形體滅却論者も必ずや其本旨に於ては其所論の示すが如き氣焰はあらざりしなるべし。何を以て爾か云ふ。詩形法の美なるもの、縱しんば其想に於て最も取るに足らぬものなりとするも、少くとも一時吾人に樂しみを與ふるに反し、粗雜なる詩形法を以てせば其想の通路をつくること能はざればなり。ブラウニングの口調を藉りて說かば吾人は『斯の如くつくられてあるなり』。是に於てか吾人は新體抒情詩是非の一要素として先づ格調韻律の音樂的完全を以てせんとす。偕形體に於て疵なからしめば更らに一要素として此形體に包むに充分價値ある思想若しくは話說を以てせざるべからず。玆に思想といふは反省的卽ち主觀的抒情の含むところなり。外形內容兩ながら相調和したりとせば吾人は更らに一要素として緊切集中の性、別言す

れば有名なる抒情詩人の傑作中に見るが如く思想若しくは話説の表白に力足らざる章句を節約して、詩想發展上、全として見たる詩歌に對し、消極的のみならず又た實に積極的に有害なる表白を省略することを數へざるべからず。

主觀的抒情詩のうち形體、內容、緊切の三要素に關して略ぼ其宜しきを得たるものはウォルズウォルスが『フラックス氏の逝き玉はむ恐れある頃』に綴れる小詩なるべし。雄大の形體を組み建てゝ深長なる恭敬の想ひを運ばせ、句節僅少にして韻格能く調ひ、また一語の餘りあるを見ず。シェリイのも大方は單純なるが多く間〻 "When the lamp is shattered" を以て起句とせるもの〻如く想ひの八重なるがあるも決して複雜と稱すべからず。

さて現今の新體詩の如く、形ちといへば何等の種類にも大抵七五調を用ゐて韻律のごときは未だ深くは作者の念頭に上らず、詩歌の特質たる語句及び組み立ての撰擇など間〻棄てゝ顧みざる者あれば、書き直はせば恰好の散文をなすものさへあり。新體詩の清新を欲するは吾人の日夜翹望するところなれど、和歌を排斥さへすればプロオゼイックにても佳しとは未だ唱道したる覺えなし。吾人は形體に就きては大に世上の研究を望まずんばあらざるなり。而して從來形體の爭論を措て先づ新體詩人の詩想を非難したるは、如何に滕龍派が自家を辯護するとも、其詩想の貧少なることは何人も明らかに認め得べければ也。吾人がシェリイを終日吟咏して猶は倦まざるは何の故ぞや。是れ實に其抒情詩が絢爛眼を奪ふばかりの語句を排列せるものとは遙かに其趣きを異にして抒ぶるところ質實あり歌ふところ意味あるが故にあらずや。詩的外形を燃やさんばかりの熱實と色彩とは內に包む本質的生命より溢れ出るが故にあらずや。而して詩歌の粧飾的意匠たる衣裝が思想と巧みに適合して故意に明比暗比を亂用する似而非詩歌の匹儔を抽くが故にあらずや。吾人は比喩の使用に就きては殊に今日の新體詩家に望むところ多からざるを得ず。蓋し和漢詩人の一大痼疾たる進歩の傾向を亡みするものは兎角に清新の想調を忌むこと多く、隨つて空想を着色すべき一大武器たる比喩も盡く舊窠に陷り平凡に流れ、無味單調、讀む者をして胸を刺し情を躍らしむるまでに到らざればなり。詩想一般に關しては湖處子、國男、玉茗、藤村、天遊、天來、晩翠、花袋の諸子等稍々趣きを異にせるものあれど、是れとても『メール』記者の評言を全然抹殺すること能はざるべし。新體詩人たるもの豈猛省せずして可ならむや。偖又た吾人が特に今日に唱道の要を視る緊切集中の一素は新體抒情詩界一般の通弊と斷言するに敢て憚らず。複雜なる十九世紀最新の詩想は思想話説共に三十一文字を足らずと唱ふるものあるや、長篇ならずんば新體抒情詩ならずと思推するものを生ずるに至れり。少くとも和歌の天地に覇權を握る海上大人が『あのチョボクレ、チョンガレナ、あれでも新體詩より餘ッ程面白いぜ』とは文字通りの意味に於て眞個に現代の新體抒情詩の通弊を說明したるものなるべく、早稻田の行々子が『俳儒が關羽の青龍刀を揮ふが如く』も、或る一派に對して吾人の共に苦言せんと欲するところなり。何の故に或る

一派といふや。吾人は十七文字につゝみても尚餘りある想を強ゐて長びかする一派と共に、意の之くまゝに浮かされて締りなく驅け行く或る他の一派を視ればなり。彼れは動かざるものを無理に前に進ましめんとし、是れは動き過ぎるものを抑へて後に留むるをなさず。共に抒情詩の一要素たる集中の何たるを知らざる者也。

偖前に述べきたれる三要素を標準として以て吾が新體抒情詩に望まんか。幼稚なる新體詩界のことなれば素より比較的に言ふに過ぎざれども羽衣一派は第一要素に於てヤ、成功せるものなるべし。而かも唯一の七五調文字鎖りの如きは豐富なる英詩の夫れに比すべくもあらねば羽衣等は更らに大に研究の功を積まざるべからず。況んや羽衣等にだも及ばざるものに於ておや。藤村一派は第二要素に於てヤ、成功せるものなるべし、而かも其歌ひしどころは多趣多樣なる英詩の夫れに比すべきもあらねば藤村等は更らに大に研究の功を積みて『メールヘン』記者に鼻をあかさしめざるべからず。況んや藤村等にだも及ばざる儕輩に於ておや。若し夫れ第三要素に關しては新體抒情詩の通弊にして和歌に及ばざるもの比々として然り。新體詩家希くば彼是共に三省するところあれ。

（三十、五）

抒情詩人の閲歴を論ず

What objects are the fountains
Of the happy strain ?

What fields, or waves, or mountains ?
What shapes of sky or plain ?
What love of thy own kind ? what ignorance of pain ?

——Shelley.

はしがき

鳴りしきるベルに今はとて讀みさしの詩卷閉ぢつ深く念頭に鏤刻せられたる『文のなかのあらゆる寶よりも優れたる』の句を二たび三たび微吟して閲覧室を出づれば流石に頃は春なれば朧ろに霞む月の夜の匂ひおかしう木立ち深く池を繞れる中庭の邊りより醫科大學を右に雪の降りかゝれるが如く咲き亂れたる櫻のたぐならぬ姿なるに袂に堪へぬ香風の送るともなき沈靜なる想ひの浸み渡りて情ろおのづから融けひろがれるが如く暫らくは夢うつゝの境だも得辨へず地の底に呼びたつるに似たる學友の聲に復た我れに回れる頃はあはれ斯の刹那の興を斯の儘に一絲亂れず一毫損せず何の故に我れを石に化せしめざりしやと及びなき悔ひの涙に咽びぬるは忘れもせぬ去月半ばの頃なりき。

花褪せて散りはじめぬれども斯の想ひ我れを去らず散りぬる花は滴るがごとき新綠に移りて時に小燕の低飛するを見れども斯の想ひなほ我れを去らず宵ひ〳〵毎に憧がれ出でゝ足の地を踐むを忘れかぬる現世の我れを翔てつ流れに浮ぶ淡雪の消えて果敢なき影を追ひ月のすがた花のふりあ

ひなど彼れか是れかと想ひめぐるは逃げたる幻境を捉へんことを望み覺めたる我れを夢に囘へさんと願へばなり假令悲しき運命は我れをして塞の河原の石子積みに終らしむとも離れがたき我が小さき胸は何を樂しみに他に任すべきや。

恍惚として神を有耶無耶の間に馳する時は是れ我れの詩歌に醉ひたるの時にして科學的研究に焦慮する時は是れ我れの詩歌に醒めたるの時なり醒めたる時は醉ひたる時に攀ぢ上る階段をつくるに忙はしく醉ひたる時は醒めたる時に滑り下らざらむことを望むや切なり科學的研究の生命と稱するものも人は知らず我れにありては單に此間に此目的に使はるゝに過ぎずあはれ半百の歳月之れを打して新たに一團の夢幻塊を鑄る鑪缸もがな。

序論

閲歴の文字或は世の誤解を惹起するの恐れなきにしもあらねば吾れは本論に入るに先ちて始づ吾が所謂研究の方面より抒情詩人の閲歴の字義位地ならびに限界を説明しおかむと思ひ立ちぬ。

イズムスの聲蚊軍の攻め寄するが如くに喚く十九世紀の末葉なれども抒情詩界に果して如何程の貢獻を與へしと思惟し得べき乎誰れ人か敢て抒情詩人の研究に於て其智識の限界に到達し得たりと言ふ乎誰れ人か敢て一歩を進めたる研究の餘地なしと言ふ乎願ふに滔々たる世界の大勢はあらゆる事物をかつて科學的研究化せしめ理想的作物を斯の如くあらざるべからざるものと許すことなく何處までも實際的關係を捕捉せむと欲して抒情詩界にさへ波及し來れるは事實なれども摘み菜にすれば偖ても少く吾が豫ねてより望める研究の方面即ち抒情詩人の閲歴の字義位地ならびに限界を説明しおかむと思ひ立ちぬ。

て幾人かある果して幾何の書かある彼の詩學と稱するものも既に科學的名目を拜受せむとならば僅かに詩歌の分類を排列し規則箇條を逐載するに止まらずして詩人の身邊を研究し詩歌の後景を精索して抒情詩歌の生るゝ迄の徑路に就きて能く説明したるもの世果しこれを批評すると共に又た實に之れを分解せざるべからざる責任を有するにあらずや詩歌を既に生れたるものとして横に之れを説明する以前に未だ生れざるものとして縦に之れを説明すべき第一要件生ずべき筈ならずや若し夫れ詩人にして恰かも一夜に湧き出でたる富士山の如くむば吾が研究の道も茲に施すの術なからむも苟くも智識を運用し經驗を精査しておのづから解釋し得らるべきスフィンクスの如くむば吾れ豈にデエロスの神託を與へ能はざるの理あらむや。

或る一個の抒情詩人が其作れる或る詩歌に關して如何なる緣因ありしかを自から説明することあるべし是れ往々其傳紀に徴して逢遭し得べきところなりとすよしむば斯の詩人の傳紀を缺きたりとするも他に幾多の詩人もあることなれば同じ樣なる詩歌の緣因を數多蒐集し得らるべし偖て斯のごとく或る一個の場合を取りてあらゆる方面より之れを研究し行かば外にある緣因と其緣因に由りて生じたる詩歌との間に何等かの關係を稍々發見し得らるべし甲の詩人を捕へて其關係を發見し乙の詩人を捕へて同じ場合の其の關係を發見し丙の詩人を捕へて又同じ場合の其の關係を發見し順を追ふて以下斯の如く

に進み行かば玆に同じ場合の諸關係を蒐集し得らるべければ吾れは其詩歌と其緣因との間の或る關係を得べし之れを打して一群となしつ又た他の或る一個の場合を取りて同じ手段を施し其集め得たる關係を打して一群となしつ旦に一群を集め夕に一群を集め玆に比較研究の道を施さば希くば科學的の意味に於て是等の緣因と是等の詩歌との關係を詳らかにすることを得む玆に一詩人ありと假定せよ幾多の詩歌が其緣因に至る迄の徑路を追躡し得らるゝものとして其間の或る關係を觀測し得ば他の觀測を許さゞるものまでも類推に依りて或る種の結果を收むべきにあらずや而して更らに幾多の詩人に依りて斯の類の比較研究を進め行かば他の直接觀測を許さゞるものまでも類推に依りて或る種の結果を收むべきにあらずや研究の上に研究を積みなば希くば科學的の意味に於て緣因に對する詩歌の關係如何を詳らかにすることを得む乞ふ彼の醫士の診斷を見よ患者のチフス診斷までには其徵候となすべきあらゆる場合を集めて偖て後に其斷案を下すにあらずや抒情詩界の斯の研究は著手する學者の甚だ稀れなるところにして又た實に吾れの好むで爲さむと欲するところ也。

偖ても吾れの用ゐたる閱歷とは何を意味するや又た其占むる位地乃至限界は如何あるべきや幾多の抒情詩人が自己說明に依憑し吾れの智識に參照して吾れは略ぼ抒情詩成形の曉に至る階段に命名することを得たり或る事物が內若しくは外より詩人を知覺せしめて其心を引き立たしめ事物玆に光明中に坐すれば知覺は詩歌の緣因をつくるべしよしや詩人自身は之れを悟らざるまでも遲かれ速かれ他日の詩となるべき基礎なれば斯の如くにして詩的作用に入らしむる事物を汎稱して我れは閱歷と命じぬ閱歷の文字或は妥當ならざるやも知れず而かも差しあたり他に適當の文字を想ひつかざれば姑らく此二字をかりて以て第一階段を表示するの記號となすべし閱歷中の事物は數々些少の刺激だも與ふることなく空過すべけれども然れども詩人が或るこゝろもちとなりて情調忽ちに熟すれば閱歷は核心となりて詩人の空想中に送らるべし玆に閱歷は其地位を固むべきも詩人の性格の異なるに從ひて各々其好める方向に走るべければ吾れは此時轉化の作用ありと認めざるを得ず偖轉化して核心漸く發達すること猶ほ胎兒の發達するが如くなるべければ吾れは斯の徑路を內的生長と名くべく生長期熟して分娩せらるれば詩人の口に歌はれ若しくは筆に書かれて玆に始めて一篇の詩を得べし語餘りあらば之れを削るべく語足らざれば之れを補ふべく幾多鍛鍊の階段を經るべければ吾れは之れに外的生長の名を與へぬ抒情詩の成形は玆に其完成を告ぐる也。

外的生長も內的生長も轉化も核心も將た又た情調も本論に於ては未だ關係するところあらざれども吾れは後々斯の徑路に依憑して以て抒情詩の研究を試みむと欲す假りに此目的を達し得たりとせむ而かも生理學に於て一たびは男兒となり一たびは女兒となる原因を知り得ざるが如く材料を確認し素因を明晰にするも尙ほ如何にして其素因が其核心に移動せしやを知ること能はざるべし是れ實に神祕にして詩人自身も知らざるところなれば美術の暗處としては吾れの如何ともなし能はざるところなり而かも

吾れは爲し得べき範圍内に於て所謂科學的に知識を運用せば事足る今日生理解剖の諸學科が微を啓き細を摘むの發達をなして非常の名聲をなせるに愕き凝視して以て僅かに止むべき乎世界無數の抒情詩人は鶴首して千歳の知己を待つを如何せむや。

而して唯だ問ふべきは研究の材料に於て果して完全なるべきや殊に抒情詩界に於て果して斯の如き材料に豊富なるべきや答へて曰く然り又た曰く否何を以て然りといふや詩人自身の説明に依り學者先輩の研究に依り抒情詩の若干は其緣因まで追躡し得べければ也何を以て否といふや吾れの見るところを以て誤りなからしむれば今日に至る迄の材料に於て未だ肝要なる結論を得ざれば也。

茲に所謂根本的材料を構成するものは何ぞや凡そ詩人自身の説明に二種あり一は彼等が一般詩術に就きて立論せるものにして他は其自作に就きて立論せるものなり彼れは詩人が研究家の範圍内にあるときにして先づ其眞贋を識別するに當り其詩人が種々なる他の説明より科學的に信憑し得べきを發見して毫も誤まらるゝことなき證跡を得なば吾れは是を以て古人の證據物件と認承せざるを得ず斯の如き任意的表白の外にありて偶發的表白とも名け得べき一類の表白にして吾れの比較決論を待つべきものあり日記の如き書翰の如き談話の如きもの即ち是れ也日記に於て事實を列記するに止まらしめなば少くとも時日を知るの便りをつくらむも若し夫れ思考感情乃至刺激の如何を記さば吾れに對しては更らに妙ならむ即ち其詩歌が徐々として成形する下書きを視ることを得べけむ吾れは又た書翰を繙て詩人が他に現はせる表白を參考し依りて以て閲歴の成形せる狀態に比照し得べし若し夫れ談話に至りては又た以て我が材料の一部をつくるは言ふを俟たず。

述べ去り述べ來れば吾れに幾多の好研究を得たるらしけれども吁是れ吾れの希望也未だ現化されざるもの也ホーリブルの酷評ある圖書館に入りて僅少なる參考書に依り未熟の頭腦を以て新奇の行路を辿らむと欲す其結果又た豫想すべきのみ殊に英國抒情詩に關しては未だ結收せる効果を得ざれば止むを得ざる場合にあらざれば一々之れが引照をなさず今は單に汎論を與へて止まむと欲す吾れは幾多の參考書中博士ウェルネルに對しては吾が滿腔の感謝を表するところにして殊に本論中二三の表の如きは全く同博士の手になれるものを引用したる也吾れ豈に世に敎ゆと言はんや一端を叙説して吾が意のあるところを知らせ得なば吾が今日の願ひ即ち足る。

本論別つて凡そ五となす第一に閲歴總説を論じ第二に内的外的閲歴を論じ第三に情的閲歴を論じ第四に思的閲歴を論じ第五に間接的閲歴を論ぜんと欲す唯だ俗事纏綿意の如くならざるを恐る希くば爾後數回讀者と相見ゆるの榮を享けしめよ吁叙事詩既に逝きぬ劇詩も又た逝くの期あらむ抒情詩汝れこそ眞個詩界の花にして又た吾が終生の好伴侶なれ。

Immer und ewig
Bleibst du, hochaufstrebende Lyrik,
Blüthe und Krone der Dichtkunst.
——Fer. v. Saar.

抒情詩人の閲歴を論ず

本論

第一　閲歴總說

『何物か詩人の眼底に映ぜざるものやある』と英のサミュエル、ロオヂャアスの言へりしも理りなるかなスタインは獨の詩聖を評して街頭に吊られたる玻璃球の如く前面を過ぎる總てのものを反映すと思ひぬ實にや詩人は其が身邊に來るものとしいへば美しきもの眞ことなるもののみにあらずして曲りたるもの正しからざるものさへも寫し返へし世界の像を其儘に宛然鏡の如く振舞へど吾れは未だ此譬を以て當れりとなすべからざるを覺ゆ鏡は寫像を把持するの力なし忽ち寫りて忽ち消ゆ詩人は然らず一度び寫れる像は幾度びも新たに見ることを得べく幾度びも舊に回へすことを得べし一木敢て脫せず一石敢て失はず精妙細緻の誠實を以て其眼底に映せる總ての事物を保持する也如何にして之れを保持するかは是れ渠れが本性の神祕に屬し吾れ今敢て解釋することを能はず唯渠れが之れを保持する事實是れ即ち詩人が詩人たる所以にして又た實に衆人と異なれる天稟の材能ある所以なり詩人ヘッベル自己を說明して云はずや『吾等は吾等の受くる像に關しては感情あり意識ある鏡也』と。

吾れは詩人自身の表白に依憑して說かむとするに當たり詩人の特性を論じたるギョオテの文中『世界は詩人に夥多の材料を與ふ』との一句を提起して以て吾が本論の冒頭となさざるべからず世界は詩人に夥多の材料を與ふこれ實に詩聖ギョオテの所言吾れ人詩人が創作の本質を研究せんと欲せば先づ第

一に斯の言に着眼せざるべからざるなり然らば如何にして材料が與へらるゝや色學史中科學的に講述したる同じ人の言に曰はく『經驗に二類あり一は不在の經驗にして他は現在の經驗也過去に屬する不在の經驗を得るは他のオ、ソリチイに出づれども現在の經驗を得るには己れのオ、ソリチイに出づ』と即ち材料はギョオテの所謂經驗を通じて以て詩人の生命中に入る也。

玻璃球の前にありて映ずるがごとくに總てのものは詩人の生命中に入るべし是れ實に閲歷也されど吾れは何等かの仕方に依りて刺觸を與ふるものだけに閲歷の名を付し些少の跫音もなく閲歷せらるゝ人を空過するものには閲歷の名を與へず別言すれば閲歷の意味の生くるは吾れを空過するものにあらずして吾れに侵入するものなり總じて外的事件には之れに適應せる內的事件あらざるべからず。

斯くの如くして詩人に侵入する閲歷は詩人自身の覺官に依るものと或る他より傳來するものとの二あり兩者共に記憶中に保持せらるゝことは同じけれども先きのものは後のものより勞すること多き丈其れだけ之れを繼續することも長し上來述べ來れることに依りて吾れは事物が詩的閲歷に關係する所を概括して次の言を得曰くすべて詩的空想を煽りて活動せしむるものを閲歷と汎稱す。

詩的閲歷に二種あり曰く直接的閲歷曰く間接的閲歷直接的閲歷は詩人が自身に知覺するものにして間接的閲歷は之れに異なり或る迂曲せる道より詩人に來るものなり朝日に匂ふ山櫻は我が抒情詩人の直接的閲歷となすことを得べけれども漠北の天地に弦月斜に懸りて胡笳悲しむところは身其處にあらざ

りし詩人には間接的閲歴たらざるを得ずシルレルの足一度びも瑞西の地を履まざりしが故に山の歌のフエシスの叙述より間接的閲歴たりしは人の知るところなれどチヤイルド、ハロルドに身を託したる數多の歌がバイロンの直接的閲歴たりしや論を俟たず傳記に徴して直接的閲歴を用ゐたるキョルネルの寶刀の歌あり吾れ豈に間接的閲歴に依りて干將莫邪の劍を咏じ得ざらむや。

直接的閲歴も仔細に之れを吟味し來れば明らかに二條の道を辿りて詩人の空想に赴くを視る感情を通ずるものを情的閲歴と名け思考を通ずるものを思的閲歴と名く兩者共に神經を鼓舞し之れを腦中に導くことに於て同じきは生理學の教ゆるところ故に二つながら共に腦を感化して其結果として詩人が詩的に煽らるゝ也。

抒情詩人が戀することあれば戀は斯の詩人の眞接的閲歴なり其戀にうれしき情ろ若しくはうれしからぬ情ろを惹起し渠の空想は爲めに點火せられて戀の歌茲に成立たむ吾れは此種の歌を情的閲歴に胚胎したるものといふ戀の焔の燃えて止むときもなきに萃熱發して乾坤を焚き天に上りては憑る黄金の格子をも溶かし地に下りては坐はる岩が根をも穿つ風雪を叱咤し雲雨を使役してみなわ逆捲く青淵の如くに躍り狂ふ詩人の胸のゆらぎを吐き出す狀は智力の活動を亡みして論理の徑路を辿らず縦横無盡に熱情の激越を發揮せむと欲す木石ならぬ人の戀に動かぬはなきに況して多感多血の詩人なれば吾れ一其生傳に徴する迄もなく古今東西到るところ此種の詩歌に溢るゝばかりなるを今更事新しく例を擧ぐるも却つて煩はしきに幾からむか此場合には單に戀なれども斯の如く基點を直接的閲歴に置きて感情の通路より詩人の空想に達する詩歌は情的閲歴に出づる詩歌也。

等しく是れ戀なり等しく是れ直接的閲歴也生傳に徴せば略ぼ其戀ふる女子の關係をも知り得べし愛の露の滴るばかりなる彼女が牖に吾が生命を投ぜん乎吾が義務に於いて如何あるべきや盲目なる戀の導くまに〳〵吾が名譽をも棄てゝ顧みざらむ乎吾が品性に於て吾が德操に於て果して傷くるところなかるべきや正さに是れ胸中に水火相閧ぐの時なり此身を棄てゝ此身を任せば或は吾が戀ふる女子の愛を得べけむも吾れの得る報酬は女子の愛の外にあるべくもあらねば得るが如くして是れやがて失ふことに同じからずや名譽を抛ち義務を棄てゝ一女子の愛を買ふ外に吾れは大に發達せしむべき我れと大に爲すべき天職とを有せざる乎斯の如く論理的衝突が詩人の空想を煽りて活動するは感情にあらずして思考なり是れとても吾れ數々詩人の作の實例を視るに難しとせざるところ此の場合には單に戀なれども斯の如く基點を直接的閲歴にをきて思考の通路より詩人の空想に達する詩歌は思的閲歴に出る詩歌也。

思考が全幅の精神を發揮して抒情詩人の空想に當るは敢て感情と異なるなしと雖も純智的純理的を去りて詩的にならむには更らに激しき活動を要す猶ほ後段に至りて吾れは思的情的兩閲歴の差異を詳論すべければ今は單に二つながら直接的閲歴なることを記憶せらるれば可也戀は感情をも鼓舞すれば思

考をも鼓舞す戀は詩人が直接的閲歴の一也。

人間の感情と謂ひ思考と謂ふ共に他より刺觸せられざるべからず外に何等かの閲歴ありてこそ始めて感情も發し思考も生ずるなれ詩人自身の口吻を藉りて曰はゞ『摩擦に依り或る對象に依り』て生ずるにありて決して兩者獨存のものにあらず外より來る活動的閲歴ありて同じく吾が内心に或る活動を生ずるなり是れとても亦た閲歴の名を與へざるを得ざるが故に吾れは玆に内的閲歴外的閲歴と稱して劃然區別するの要あり吾れは又た告げざるべからず總ての外的閲歴に適應せる内的閲歴を生ずとはいはれず何となれば日清戰爭に於ける詩人が戰的に鼓舞せられざるものあり得べければなり又た總ての外的閲歴に適應して直ちに内的閲歴を生ずともいはれず何となれば後に至りて始めて明らかに現はるゝものも數多あり得べければ也良し情的にもせよ思的にもせよ詩人の活動を起す素因を凡て詩人の閲歴と稱して誤まらざるに似たり。

今や漸やく發達せんとする年少の抒情詩人に向ひて少からぬ注意を與ふるうち吾が心を得たるもの一にして足らねど中に就きて目と鼻の間なる摸倣を事とし歴々斧鑿の痕をとゞめて猶ほ及ばざるもの是れ實に間接的閲歴に得たるものを化して直接的閲歴に得たるもの程に爲す美的工技に闕如たるが故にあらずや藍より出でゝ藍より青からしめずば藝術の進歩も如何せむ事固より本論に關せざれど言はで止むも腹ふくるゝ種なれば敢て數言を玆に附加して以て吾が此章の結尾をつくりぬ。

閲歴と謂ひ經驗と云ふ是等二樣の漢文字を分析して果して吾が豫期の思想を輸達するに足るべきや否やは吾れの私かに心元なく思ふところなり曾て鷗外博士の創めて用ひ玉ひし閲歴は是れ或は獨のエルレーブニスの譯字にあらずやと不圖思ひつけるまゝ本論を草するに當りて吾れ亦た之れを重ねて用ひぬ總じて文字の使用は甚だしき誤謬なき限りに於て說明を附記せる編者の意に任せて可なるべし吾が所謂經驗（エルファーレン）せる人が其實内心に於て充分に咀嚼しながら猶ほ自らは經驗せる人と稱することも得べく己れに關係なき目擊のみを單に叙述しながら猶ほ自らは閲歴せる人と稱することも得べし吾れは詩人自身が之れを悟れるや否やは敢て問はず唯だ客觀的に視察して詩人を詩的に煽る他日の素因をつくるもの何等かの方法に依りて刺觸を與ふるものギョオテの所謂『吾等の人格を強大にし增進する』ものを閲歴と稱し些少の刺觸だも與へずして空過するときは閲歴の文字は詩人に對して其性命を有することも未だ詩人の内心に惹起せられたる態度に論及せざりしが爲め所謂閲歴は其實外的閲歴にして之れに隨伴する内的閲歴の如何なるものなるやを知らざりし也。

外的閲歴は素詩人以外にあるものなり彼れと是れとは全く關係あるにあらずして而かも其成立を視るは一に偶然の接觸而已詩人は任意に外的閲歴を呼び起すことも得ざれば又た數々任意に外的閲歴を拒

絶することも能はず外的閲歴はゆくりなく詩人の捕ふるものなり何人も閲歴すべき氣候を以て吾れは試みに之れを說かむ乎人の知る岳陽樓の記に陰風怒號濁浪空を排し薄暮冥々虎嘯き猿啼かば滿目瀟然感極つて悲しむ者ありと謂ひ長煙一空皓月千里浮光金を躍らし靜影壁を沈め漁歌互に答へなば心曠く神怡して寵辱皆忘れ其喜洋々たる者ありと謂ふ細雨朦々昨日今日の如ければ榮花のゆうしで四丁にも『さみだれもいみしきころにてむづかしけれど云々』と謂ひ狹衣四の上三十八丁にも『其ともも過ぎて夏のはじめにもなりぬまだしきにさみだれがちにてものむづかしきひるつかた云々』と謂ふ夫れ天氣なる外的閲歴は詩人と詩人の意志に關しては何等の關係あるべき筈なしさるを詩人をして靜かならしめず其こゝろもちをして天氣のこゝろもちに和せしめむと望み天平らに空清くして麗らかなる日には詩人もうれしき情ろを生じ天平らならず空清らかならざる日には詩人も又たうれしからざる情ろを生ずるは略ぼ前の例に說けるが如しされど麗らかなる日に却つてうれしからざる情ろを生ずることあり假令ば夏の熱さに堪えかねなば麗らかならざる日をうれしと思はむ樂翁が花月草紙雨記に『また暑さにたえかぬるころ雲の漲り出る勢ひ有て風一しきり吹おちたるに柳蓮葉なんどの葉うら白くみせたるもすゞしやがておほきやかなる雨の間遠におちたるが後にはしきりにふり來て物おともきこえず土のにほひたるもいと心よし』と謂ふ文字あり玆に見る諸例にては外的閲歴に對する詩人の關係は相等しきものにあらずして麗らかなる日にうれしき情ろとうれしからざる情ろとを生じ麗らかならざる日にうれしからざる情ろとを生ずることもいづれも詩人の感情爲めに發揮せらるゝが故に質を同うするものと稱し得べし別言すれば外的閲歴に適應せる內的閲歴を生じたるものと稱し得べし外的閲歴に依りて其れに對する詩人の感情を表白すればうれしき情ろにもせよ將た又うれしからぬ情ろにもせよ兎に角適應せる內的にして而かも情的なる閲歴を生じたる也。

內的閲歴こそ詩人をして始めて詩人たらしむるものなれ是れありて始めて外的閲歴の生命を維ぎ是れありて始めて詩人の空想を鼓舞することを得足を詩人の內心に留めずむば外的閲歴も必竟何の用かある先きのうれしき情ろが次第に上昇して詩の核心を空想中に傳達する迄に熟せば終には他日のうれしき情詩となるべく或は又たうれしからざる情ろが次第に下降して詩の核心を空想中に傳達する迄に熟せば終には他日のうれしからざる情詩となるべしされど詩人の內的閲歴と外的閲歴との間の關係は常に斯の如く緊密にして又一致するものにはあらず春の頃には萬物生々しく之に隨伴する人の心も又いき〳〵しき筈なるに長明には如何に見えけむ『春風も稍深う吹きわたりて靑柳の枝に宿かる百千鳥の聲を瀨にうち囀り園生に遊ぶ蝴蝶の垣根の宿とやら云々』と四季物語は說く月の夜も流石にすてがたきものなりさるを『月のいとはなやかにさし出たるにこよひは十五夜なりけりとおぼし出て殿上の御あそびこひしく所々ながめ給ふらんかしとおもひやり給につけても月のかほのみまもられ給云々』と源氏の君は須磨に悲しみ玉ひぬ斯の時にあたりてや今感ずべきうれしき情ろより曾て感じたる情ろの方

遙かに強きため自ら惹起せらるべき外的閲歴の結果を亡みして過ぎ去りし他の閲歴を憶ひ出でゝ感ずるなり故に外的閲歴と内的閲歴との矛盾を感じそめて兩者の適應を生せず即ち外的閲歴より惹起せられたる情的閲歴に直ちに隨伴して更らに内心に思的閲歴を生じ之が詩人の空想を活働せしむる也。

前文後段頗る複雑にして或は誤解を招くやの恐れなきにあらず吾が所謂『外的閲歴より惹起せられたる情的閲歴に直ちに隨伴して更らに内心に思的閲歴を生じ』とは何の義ぞや想ふに長明も源氏の君も春光秋景に逢遭する以前に於て或る閲歴を有せりしなりされば今春花に遇ひて自ら起るべき情ろと秋月に遇ひて自ら起るべき情ろとを内に適應せしむることなく別に或る情ろを生ず而して此情ろや麗らかならざる日に起るべき情ろにあらずして或る他の關係より起りたる情ろ也されば吾れ私かに信ずらく前例に於ける長明も源氏の君も其他凡て感じ易き詩人の類は麗らかなる日には必ず一旦うれしき様なこゝろもちを生じ而して後直ちに之れを對比して始めて彼是矛盾の感を生ずるにあらずやと即ちはなやかにさし出たる三五の月に源氏の君の心情ふと動かされ直ちに今昔しを比照して物おぼしつゞけられ變はれるさまを愁しみたまへるにあらずや長明とても又た然り故に外的閲歴に應じて直ちに内的に來るものは情的閲歴にして後に思的閲歴を隨へ遂には詩人の空想中に核心を輸送することゝなるべし獨の詩人リュッケルトなるもの詩を作つて之れを說きて曰く

Ich bin von Schauen ausgegangen,
Um durchs Empfinden hin zum Denken zu gelangen.

理りある言と謂ふべし。

上來述べたる如きものは情的閲歴に思的閲歴を結合したるものにして外的閲歴始づ情的閲歴を呼び起し之れに恰かも同伴せる現象の如くに一の思的閲歴を隨へたるものなれば其根本は情的閲歴にありと稱して敢て差支なきに似たり。

是に於てか吾れは外的閲歴と情的閲歴との間には必然的關係あるを認めたれども外的閲歴と思的閲歴との間には偶然的關係あるのみなるを知りぬ而して又心情の靜平なる時に來るべき思的閲歴を呼ぶ外的閲歴は力弱わきものと稱し得べけれども強大なる外的閲歴は先づ詩人の心情を活働せしむること甚だしきをも知りぬ。

第三　情的閲歴

東籬の下偶〻一莖の美花の咲けるあり風丰極めて艶麗小女は之れを撮りておのが簪にせむことを願ひ佛者は之れに觀じて禪ろひ易き世のさまを想ひ神の子は之れに唇觸れて靈光の薫ずるに咽び科學士はこれを摘みて纖緯色素の剖判を試みむと望む科學士や神の子や佛者や小女や人なることに於ては彼等異なるところなけれども花に對して起すべき感想の同じからざること斯の如し各自おのが情調に同化せむとする態度は猶ほ伶人が何處にも樂音を聽き畫工が何處にも畫像を視るが如く抒情詩人は天地の

萬象をとりて凡て抒情詩化するなりミダスの黄金シェレーの戀愛其間果して能く幾何の差異ありとはするぞ。

天地が抒情詩人に對して輸送すべき抒情的素因に豐富なるは猶ほ空氣が一般人間に對して輸送すべき疾病的黴菌に豐富なるが如し疾病を誘引するに足る黴菌の斷へず吾れ等に接觸して其成長發育に適當なる立脚地を求むるに急なるは猶ほ亦た抒情詩を誘引するに足る素因の斷へず詩人に接觸して其成長發育に適當なる立脚地を求むるに似たり而して同一の空氣を呼吸して同一の疾病を釀すことなく吾人の間能く抒情的感觸を捕捉して抒情詩人たる者太だ尠し蓋し抒情詩人となるには特殊の情性を要すればなり也。

既に抒情詩人となるに足るべきものが一般の詩的情調を懷抱することなすも或る動機なくむば終に抒情詩に現化すること能はず動機は即ち閲歴也鳴るべき鐘も撞木を須つて始めて鳴るが如く抒情的に感觸すべき可能性も閲歴を須たずむば感觸なきこと火を睹るよりも明らけし然りと雖も一定の閲歴が總ての詩人を同樣に感觸するものにあらず譬へば雪降ると假定せむ乎雪は鵞毛に似て飛んで散亂すとは降る雪を叙述したる詩人の感觸なるべく白雪は一樣に積りて世の汚れを掩ひぬとは濁世を長想したる詩人の感觸なるべく流れに消て痕もなしとは人間は哀しむ爲めに生れたるものと悲觀したる詩人の感觸なるべくどうでもぬしは行かんすかあれ見やしやんせ此雪にとは雪を小楯に切なる戀を匂はせたる詩

人の感觸なるべし戀愛若し詩人の心情を感觸すれば玆に一篇の戀歌を得むも或は神聖の意を傳ふ者もあるべく或は通俗の情を述ぶる者もあるべく或は切なる想ひを露はす者もあるべく或は忍び音に匂はす者もあるべく若くはうれしきもの悲しきもの可笑しきものに對照する者もあるべし政治の閲歴も又た同じ彌生半ばの眠氣ざましにと息巻くあればぶんぶといふて夜るも寢られずと茶かすあり漢にしていかでか死なむと氣張るもあれど黒船の見ゆと歌ふは叙述的とや言はむ。

偖斯の如く抒情的核心の性質如何に隨ふて詩人の種類もさま〴〵あれど覺官を興奮して得べき情的閲歴の範圍は如何なるべきや換言すれば詩人は如何なる程度までに閲歴し能ふものにや吾れは答へて曰はむ彼れが人間として到達し得べき範圍内に於てと然り詩人も人間なり彼れは天上を歌へども其足地を離れざるが故に終に人を超ゆること能はず彼れは動植界を咏ずれども三本の毛の餘れるが爲めに終に人を下ること能はず是に於てか詩人は個人として有すべき條件を具備せざるを得ざるなり人間は或る時代に生る故を以て詩人は時代を離るゝこと能はず人間は或る國民に屬す故を以て詩人は國民を離るゝこと能はず人間は或る地位を有す故を以て詩人は地位を離るゝこと能はず人間は或る邦土に住む故を以て詩人は邦土を離るゝこと能はず凡そ是等の具情や移動するあり變轉するありと雖も必すや一度びは詩人の捕捉すべき折あるが故に抒情詩的核心の種類に聯關するや言を俟たずいでや順を追ひ序を立てゝ以て上述の範疇を研究し行かんかな。

時代國民地位邦土を個々詩人が特殊的に具備すべき偶起的形式と共に一般人間的として到底分離し能はざるものあり一に曰はく戀愛二に曰はく宗教三に曰はく天然。

動物の戀ふるや之れを表白するに抒情的音聲を以てす故に動物にも亦た其表白を望む喜情の芽の如きものあるを認め得べし人間に上りて始めて言語となる眞ことブルダッハの謂ふが如き文化の最低度にある民族にても猶ほ戀歌の存在せる證據を發見し得るこせば吾れ等は戀歌を以て原的抒情詩を認識すと稱するも過言にあらざるを信ずヤコブ、グリムは曰はく、人間の心よりおのづから萠え出づる抒情詩は直接に吾等の心情の方面に向ひいづれの時代いづれの人にも理解せらるゝものなりと而して何等の情感か敢て戀愛の如く能く一般に理解せらるゝものありや。

女子ならでは夜の明けぬ國は戀歌を以て其集帖の大半を充しぬ想ふ櫬櫚の葉影の婆娑たるところにだも猶は双々相擁して節面白き暮歌に夜の更け行くさへ知らざる者あるを月の笆漏る簷が家も爪琴忍ばるゝ高臺もいづれの涯いづれの角濃やかなる斯の情ろの發せざるところやある而して歌はれたる戀歌（戀愛的抒情詩）を分てば凡そ三つありあきの夜も名のみなりけり逢ふといへば事ぞともなく明けぬるものをと歌はゞうれしき情ろを抒べたるものにして名けて喜的戀歌といふべく月やあらぬ春や昔らの春ならぬ我身一つはもとの身にしてと歌はゞかなしき情ろを抒べたるものにして名けて悲的戀歌といふべく思ひつゝぬればや人の見えつらむ夢と知りせばさめざらましをと歌はゞうれしくて又た悲しき情ろを抒べたるものにして名けて悲喜的戀歌といふべし。

想ふに戀愛の情感たるや姿こそ異なれ兎に角人間動物共有のものなれども稍高尚にして獨り人間のみに存するものあり熟ら〳〵宗教發達の跡を温ぬるに其昔文化極めて幼稚なる頃ひよりも既に宗教様の觀念ありて丸木船の軍艦に形を變ふるまで些細の切れ目なきが如くに目のあたり見る最高の宗教も原人種の信仰する一部を離れず總ての宗教を宗教進化の階段と見做さば人間以上の勢力に對する崇拜として世は長へに之れを見るなり野蠻人と神との個人的關係も長じては家族の事件となり同族の事件となり漸く擴がりて公衆一般の共同崇拜となる歴史の眞髓を知らむと欲せば宗教を學ぶに若くはなく人間固有の向上的精神は詩歌に流れて宗教を溢らしむ是れ將た心理的必需のことにあらずや人間發達のあらゆる階段に於て人間以外にありとする世界と人間以内にある感情慾望の世界との矛盾衝突存するを見何等かの方法に依りて兩者の不調和を圓滑ならしめむとの念萠すべく爾かせむには是等兩界を司配する勢力に我れ等人間を同化一致せしむるにありとの想ひも生ずべし果して然らむには人間意識の發現と共に優勢を恃恍する作用は直ちに活働せざるべからず野蠻人は其求むるところと世界の與ふるところとの不一致より賴み甲斐なき自己の薄弱を感じ初めて其希望を滿足せしむべき或るものを描きぬ且つ夫れ文化を逆に遡れば人間が外界に對して保護を受くべきもの極めて尠きがため生計享樂一に日月風雨の作用に憑らざるべからず自己を以て小兒の如くに外界の事物を判じたる彼等野蠻人があら

ゆるものに精神生命を附與したるを知らば膚寒き折りに温かき同情を以て四邊の草木を温むる日輪といふ奇しき神を想ふべく飢えて物欲しく覺ゆれば枯れなむとして襤褸果てたる菜果に膏の如き養料を灌ぎかけたる雨といふ惠み深き朋に訴へむあらしは旱魃を殺せる神にして風伯は森林を裂き濕地を洗ひ又た雨をも使ふ天は懸らぬところなく地は載せざるところなし生けるもの皆茲に出づユピテルの空へリオスの日セレネの月或はヴェダの諸神より北米の諸族インカス日耳曼族サモエデ乃至オヂブウェースの諸神を比較し行かばミトスの何物たるかは希くば明らかにするを得むミトスは詩歌の大部を占むるものなり。

所謂ミトスのみにあらず崇拜の形式を如何に異にするとも信仰の種類を如何に同じからざらしむるとも憐れむべき人間が綿々として絶ゆるときなく日夜に翹望する宗教心は終に詩歌より離すこと能はざるなり一般物につきて神的の觀念なくむば現實の詩人は抑も何事をか考へ得るや宗教は實に一般人間の閲歴なり閲歴としての宗教換言すれば高上なるものに向ひて起る情感の興奮は抒情詩の一部をつくる之れを名づけて吾れは宗教的抒情詩と呼ぶ時代國民地位邦土の偶起的形式あるに關せず一般に理解し得らるゝ宗教的抒情詩あるは是れ一般人間的のものなれば也されど時代國民地位邦土なるものが戀愛的抒情詩に具情するが如く宗教的抒情詩にも亦た具情することを忘るべからず。

斯の範圍内に於て吾れは少くとも二小區分を試むるの要あり或る對象に關して人間以上のものとする情感を打して一團の名を附し全く各個特殊の宗教的形式を捨てゝ見なば吾等は或る專念を有すべく從ふて其閲歴に起因する專念的抒情詩を得む反之斯の情感を狹義に宗教的となし神に司へるてふ觀念を發表して祈禱をなさば茲に得べきものは禮拜的抒情詩なるべし假令ば「死」といふことを想ひ來りなば其意味のあることに捕へられて一個の專念は詩人に打勝つべしされど普通世の謂ひ慣れたる死神につくりて意味の狹き宗教的となし死神に誘はるゝなど表情すれば得べきは自から禮拜なり。

人間存在以後常に繰返へすべきものにして又た實に繰返へしたる一群の閲歴猶ほ他にあり天然的現象即ち是れ夜晝の交代夏冬の陳謝雨雪風雲陰晴陽光或は地上の岩石河川より動物植物に至る迄有機を問はず無機を論せず兎に角吾れ等を離れて獨存せる是等のものは詩歌の現はるゝ限り抒情詩人の空想を煽ふりて核心を送りたるものなれば從ふて天然的抒情詩の成立を見る。

天然的抒情詩は宗教的抒情詩若しくは戀愛的抒情詩に比して時處の關係頗る緊密なるものあり均しく是れ夜景也されど熱帶地方の夜景と寒帶地方の夜景とは素より霄壤の差あるべく同地方にありても平地に見たる夜景と山上に見たる夜景とはおのづから類を異にすべし況んや又た其の時々刻々の變轉に於てをや唯だ之れを概稱して天然的の名目を與へ得るは閲歴が一本の梭糸なりとするも將た一本の松柏なりとするも其天然的なることに於て毫も差異なければ也。

而して茲に知らざるべからざることは太初の狀態に於て宗教的抒情詩と天然的抒情詩との區別甚だ容

易ならざりしことなり恐らくは是れ同一ならむ其故如何となれば抒情詩界にありては外圍の光景に關する感情は根本的に專念として生ずればなりされごまた混同し得べからざる區別あり總じて天然的抒情詩に現はるゝ閲歴は寧ろ外的として來り吾れ等の覺官之れを測り吾等の眼光之れが爲めに時間を費やすこと多し然るに宗教的抒情詩に現はるゝ閲歴は寧ろ內的として起り戀愛的抒情感も宗教的情感も生れながら存すれごも之れを流動せしむるために或る衝突を要するなり天然的情感の外來刺激に隨伴するものと目を同うして語るべからず。

上來略ぼ人間なる詩人が人間として離れ得ざる一般閲歴を叙述し去れりされご詩人はまづ或る時代に生るゝが故に這裏安んぞ打算し得べき關係作用なきことを得んや。

彼れも亦た時代の兒也とは誰が道破しけむ文化史と聯關したる美術文學の跡を尋ね殊に文學史中抒情詩の徑路を歴觀すれば當時に於ける內的外的事件の爲めに如何に其感想の潤色に差異を及ぼせるかを認識するに難からざるべしテニスン一生はヴィクトリア朝の反映なり佛蘭西革命がシェレー、ウォルズウォルス等に及ぼせる感化の程をも視よ平安朝の優にやさしき維新前後の兵兒的なる一昨年のチャンチャン節は今も尙ほ歌はるゝにあらずや若しガイベルをして千八百七十年に生れざらしめなば如何ぞ世は彼の如き美はしき數多の愛國歌を讀むことを得む斯の如く詩人が或る時代に生れたるの故を以て得たる閲歴に基因する總ての詩歌を時代的と稱し殊に當時の勇者乃至事件を歌へるを時代的抒情詩と稱す時代的抒情詩に隣りして吾れは祖國を歌へる祖國的抒情詩を置くべくそれが第二の副趣味を保たば更らに命名して愛國的抒情詩といはむ。

祖國的抒情詩を以て時代的に附與したる一見頗る奇異なるが如しと雖も再考すれば直ちに其理由を發見すべし吾が見るところをして誤謬なからしむれば如何なる民族にありても文化發展の各階段に於て祖國的感情の闕如たるものあることなし團體を形ちづくれる若しくば種族を同うするの感情ある時さへ猶ほ然り況んや適當なる文化に達して國と名くる概念の頗る明晰となる時代に於てをや想ふに內に顧みては同族一致して相鬩ぐことなく外に對しては親交を保ち些少の波瀾だも起すことなくむば祖國的抒情詩の最も滿足したる時代にして現實上活働すべき缺處を有せず一旦緩急あらむ乎外敵の襲來に激しては戰爭的抒情詩（軍歌）を歌ふべく祖國の危急間髪を容れざるに至らば同胞は火の如く熱して愛國的抒情詩に海內を轟かさむ。

論者或は思へらく是れ時代が標準となるにあらずやと布哇島上猶ほ君が世の一曲を聽かば邦土は未だ以て標準となすに足らざるを知らむ或は曰はく國民が標準となるにあらずやと敷島の倭心をたゝふる情もアロンザン、ファン、を歌ふ心も其間に根本的差別あるを認むること能はず獨國の愛國的抒情詩とニュウヂーランドの夫れと果して何等の差別あるべきか言を換へて謂はゞ詩人が祖國的抒情詩を歌ふために要すべき國民的特性なるものあることなく每々

時代的關係の表白に外ならざる也。

更らに又た詩人の閲歴すべき時代的のものあり之れを政治的といふ此類の閲歴が或詩に核心を輸送せば政治的抒情詩玆に成立せむ文學史中間々斯の類の詩を以て政略に使用することあり此の時や愛國的抒情詩とは遙かに趣を殊にして永久に遺るべき詩の本性を毀損し吹けば飛が如き世の風塵を事としたるものなれば識者の嗤笑は得て免るゝ能はざれど時代に依りて或は其必要を觀ることなきにあらず。

腐敗せる政治の刷新に煩悶し根本的改革を熱望するものを革命的抒情詩となし滿腔の勇氣を發揮して外敵破滅を絶叫するものを戰爭的抒情詩となし次で戰勝を祝するを凱旋的抒情詩となす是に於てか時代が閲歴の根本をつくるものは約して左表となし得べし。

- 時代
  - 時代的抒情詩
  - 祖國的抒情詩—愛國的抒情詩
  - 政治的抒情詩
    - 革命的抒情詩
    - 戰爭的抒情詩
    - 凱旋的抒情詩

論じて玆に至れば詩歌神聖論者は必ずや言はむ詩歌の世界は天上にあり天上のことを解釋せざるべからず區々たる塵世能く何事をかなさむと然り詩歌は天上のことなり而かも論者は石の如く氷の如き衆生が夢と過ぎゆくうちに葉うらさへ見せぬなよ風にだも漣漪をたゝふるが如き詩人の情ろを動かす精妙なる活動を識れるか而して又た變轉のうちに悠久を寓し現象の裏に眞實を寄する詩人の敏活なる靈腕を解するか萬世を通じて光明を放射するは實に現代に對して慰安となり未來に對して紀念碑となればなり歳月は總ての者を篩にかく而かも恰好なる時代に誠實なる意味を以て其情調を高吟したる詩人は決して其民族に遺却せらるゝことあることなし吾れ豈に詩聖がオリンピア的沈靜を推察し得ざらむや知つて而して斯の言を爲すは實に爲すべき理由あるを信ずればなり。

詩人が或る國民に屬するの故を以て必ずあらざるべからざる一團の閲歴を國民的閲歴となす吾が不敏なる文化史を繙きて仔細に各國の抒情詩に現はれたる國民的特性を打算せざれば未だ兎角の評言を陳述すること能はざれど獨のユニヴァーサリズム佛のグロアール西の名譽心など先づ目につくうちの一なるべし大君のへにこそ死なめのとには死なじとは如何に大和男子の忠烈なるかを知るに足るべく武士は食はねど高楊枝とは眞個日本武士の面目を活寫するに足るべしあはれ櫻かざして今日も暮しつの如きのび〳〵したる情ろのさまは肉靈の爭ひしげき歐の何處に逢遭し得るとはするぞ。

曾て和歌を指して貴族的文學と稱し俳諧川柳を指して平民的文學と稱したる者もありきと覺ゆ是れ實に前の者が多くは貴族に弄ばれ後のものが多くは平民に弄ばれたるが爲めのみにあらずして又た其言ふところ其叙するところに貴族的特性平民的特性あるが爲めにあらずや晝は蟬の如く泣き夜は螢のご

とく身を焦すもの如何ぞ粋と意氣地の達引を知らむ今日の抒情詩界を冷評してニキビの抒情詩と罵倒したるものあり是れ實に作者の年少にしてニキビの境遇を脫し得ざるもの多きが故ならむ或は抒情詩壇外小說界を目して書生的といへるものありき是れ亦た實に作者の多くは書生にして描くところ書生の閱歷し得る範圍內に限られたるが如き形跡ありしが爲めにあらずや若し夫れ歐に到りてミンネザングとマイステルザングの特性幷びに十七世紀の學者的詩風を歷觀し來らば或る地位を有するが爲めに詩人に如何に至大なる影響あるかを察知するに餘りあるべし。

既に地位的抒情詩を視る更らに其小區分を如何に點檢せむ乎例せば書生的抒情詩を取つていはむに或は商たらむもの或は農たらむもの或は工たらむもの或は士たらむもの千差萬別頗る其多趣なるに驚けども各々或る特趣の目的に向つて所謂仲間をつくり一致團體を編むが故に其歌ふ抒情詩を名けて吾れは團體的抒情詩と呼ばむか團體的抒情詩や年齡の大小に由つて種々なる類別を生ずべけれども一々場合を取つて分析せざるべからざるが故に今敢て之れを論せず。

『詩人を解釋せむと欲する人は其土地に行かざるべからず』と謂ひ若くは『一詩人を正當に理解せんと欲する人は其故鄕を知らざるべからず其靜寧なる場所に基音存じ詩人の總ての書を通じて表白し得ざる望鄕病の如くに響く作詩に及ぼす邦土的感化を示したる格言也吾が玆に邦土といふは曾に其山川河澤の形狀を指すのみにあらずして其邦土の風俗習慣よりすべて內的外的に現はれたる特性に指すにあり支那に於ける南北兩人種本邦に於ける九奧兩州の比較は優に此關係を說明すべし其天然的抒情詩に隨伴するを視ればいざ言問はむ都鳥或は月に風情を待乳山はお江戶ならでは知るよしもなかるべく其戀愛的抒情詩に隨伴するなし宗教的抒情詩に於て神社佛閣の名稱の頗る地方的潤飾あるをも見む。」

述べ來り述べ去りて吾れは人間として存するうちは必らずあらざるべからざる閱歷の種類即ち時代國民地位及び邦土を論ぜり吾れは吾が知れる範圍內に於て可及的の例證を擧ぐることの甚はだ興味あるを知れども斯くては本論徒づらに冗長に涉たるを恐れ今は單に汎論を與へて止みぬ愈〻進みて他の閱歷を述ぶるに先たち一表を揭げて以て讀者の便に供せんが表中分類の再度繰返さるゝもの例せば宗教專念的戀愛抒情詩と戀愛的宗教專念抒情詩の如き甲は戀愛的抒情詩根本となりて宗教專念的抒情詩之れが彩色をなしたるもの乙は宗教專念的抒情詩根本となりて戀愛的抒情詩之れが彩色をなしたるものをいへるなり若し夫れ斯くの如く明晰なる區域を去りて主分類の極めて接近するが爲めに區分の朦朧たるもの例せば宗教專念的禮拜抒情詩と宗教禮拜的專念抒情詩との區別の如きものに至らば論者或は徒勞なりとして棄てゝ顧みざるものあらむが兎にも角にも科學的といふ以上は好むで顯微鏡的眼光を以てせざるべからず其の名を羊頭にして其實を狗肉となすもの吾れ豈に之れを贊せんや

（閲歷立脚）抒情詩分類表

	分類	戀愛	專念	禮拜	天然	時代	祖國	愛國	政治	革命	戰爭	凱旋	國民	地位	團體	邦土
人間	戀愛	純	專念戀愛	禮拜戀愛	天然戀愛	時代戀愛	祖國戀愛	愛國戀愛	政治戀愛	革命戀愛	戰爭戀愛	凱旋戀愛	國民戀愛	地位戀愛	團體戀愛	邦土戀愛
	專念	戀愛專念	純	禮拜專念	天然專念	時代專念	祖國專念	愛國專念	政治專念	革命專念	戰爭專念	凱旋專念	國民專念	地位專念	團體專念	邦土專念
	禮拜	戀愛禮拜	專念禮拜	純	天然禮拜	時代禮拜	祖國禮拜	愛國禮拜	政治禮拜	革命禮拜	戰爭禮拜	凱旋禮拜	國民禮拜	地位禮拜	團體禮拜	邦土禮拜
	天然	戀愛天然	專念天然	禮拜天然	純	時代天然	祖國天然	愛國天然	政治天然	革命天然	戰爭天然	凱旋天然	國民天然	地位天然	團體天然	邦土天然
時代	時代	戀愛時代	專念時代	禮拜時代	天然時代	純	祖國時代	愛國時代	政治時代	革命時代	戰爭時代	凱旋時代	國民時代	地位時代	團體時代	邦土時代
	祖國	戀愛祖國	專念祖國	禮拜祖國	天然祖國	時代祖國	純	愛國祖國	政治祖國	革命祖國	戰爭祖國	凱旋祖國	國民祖國	地位祖國	團體祖國	邦土祖國
	愛國	戀愛愛國	專念愛國	禮拜愛國	天然愛國	時代愛國	祖國愛國	純	政治愛國	革命愛國	戰爭愛國	凱旋愛國	國民愛國	地位愛國	團體愛國	邦土愛國
	政治	戀愛政治	專念政治	禮拜政治	天然政治	時代政治	祖國政治	愛國政治	純	革命政治	戰爭政治	凱旋政治	國民政治	地位政治	團體政治	邦土政治
	革命	戀愛革命	專念革命	禮拜革命	天然革命	時代革命	祖國革命	愛國革命	政治革命	純	戰爭革命	凱旋革命	國民革命	地位革命	團體革命	邦土革命
	戰爭	戀愛戰爭	專念戰爭	禮拜戰爭	天然戰爭	時代戰爭	祖國戰爭	愛國戰爭	政治戰爭	革命戰爭	純	凱旋戰爭	國民戰爭	地位戰爭	團體戰爭	邦土戰爭
	凱旋	戀愛凱旋	專念凱旋	禮拜凱旋	天然凱旋	時代凱旋	祖國凱旋	愛國凱旋	政治凱旋	革命凱旋	戰爭凱旋	純	國民凱旋	地位凱旋	團體凱旋	邦土凱旋
國民	國民	戀愛國民	專念國民	禮拜國民	天然國民	時代國民	祖國國民	愛國國民	政治國民	革命國民	戰爭國民	凱旋國民	純	地位國民	團體國民	邦土國民
地位	地位	戀愛地位	專念地位	禮拜地位	天然地位	時代地位	祖國地位	愛國地位	政治地位	革命地位	戰爭地位	凱旋地位	國民地位	純	團體地位	邦土地位
	團體	戀愛團體	專念團體	禮拜團體	天然團體	時代團體	祖國團體	愛國團體	政治團體	革命團體	戰爭團體	凱旋團體	國民團體	地位團體	純	邦土團體
土邦	邦土	戀愛邦土	專念邦土	禮拜邦土	天然邦土	時代邦土	祖國邦土	愛國邦土	政治邦土	革命邦土	戰爭邦土	凱旋邦土	國民邦土	地位邦土	團體邦土	統
		人間				時代							國民	地位		邦土

隋和の璞を手にするや良治は念々之れを磨して明月の光あらしめむことを希ふ或る機會に逢遭して詩人の感情の興奮せらるゝは情的閲歷の特性なりき外界の現象詩人の心情に働き倏忽として空想内に抒情詩歌の核心を結ぶは情的閲歷の主とするところなりきされど人は心情を有すると共に精神をも有することを忘るべからず個々の事物を原因まで追究し截片を拾集して全體を創造し特殊を普遍に導き普遍を特殊に繫ぎて覺官的世界以上別に思考の超越的世界を創む是れ實に精神の宰するところにして又た吾れの特に思的閲歷の章を作りて之れを論ぜざるべからざるの理由なりとす。

思考が閲歷として活働するとの意味は詩人の空想に核心をつくると云ふこと別言すれば詩人をして抒情的に興奮せしむといふこと也斯の如くにして得たる抒情詩は思考的抒情詩若しくは反省的抒情詩と稱し得べし而して吾れまづ偶感的閲歷に斯の章の端を啓かむ乎。

宙外曾て美津子に唱はしめて云ふ『膝を枕にすや〳〵と寢れし顔をじッと見て足らはぬ私に思はれてさぞや世間がア、狹からう』目ざまし草の『詩人』は此體に倣ひて無相窟下卷の眞相を賦さむと欲し『肘をまだらにぶつ〳〵とつねりし痕をばじッと見てなまけたおいらに引かへてさぞや稽古がア、つらからう』と歌ひぬ諷刺嘲笑の加味は論外として今敢て問はず想ふに『詩人』が美津子の歌を讀むや歌其ものゝ内容を其儘に解釋し其儘に同情することをなさずして其形態を取り其形態を再用して以て

自家藥籠中のものとなさむと着想しはじめしならむ恐らく『詩人』は如何にせば形態を同うして内容を異にし而して讀者をして笑はしめ得べき乎に思ひを沈めしならむ斯く偶感的閲歴に着想して後依然として單に長想を辿るのみに終らしめなば吾れは思考家の名を與へてやむべし然れども渠れ亦た一個の詩人なるが故に覺官的に明瞭ならしめむと欲し句を案じ歌に化して以て紙上に躍らしめむとする詩人としての渠れの空想は玆に活働しはじめ感奮せられ點火せられ終にオドヶ混りに下巻の趣意を叙述したる俗調の歌一篇を草してやみぬ。

顧ふに上例のごときものは僅かに偶感的閲歴の一端を示したるに過ぎざるのみ濟々たる古今の抒情詩人が晴日の逍遙に雨夜の讀書に不圖としたる事相に發せる偶感を記さむと欲し稍〻規則だてる思考を始むるもの數多あり而かも其詩人なるが爲めに思考は直覺に溶化せられ徹頭徹尾論理的鋭犀を以て批評の標準となし得べからず。

斯のごとく偶感的閲歴に得たる詩句はおのづから形態に於て簡短なるべく内容に於て單純なるべし既に思考的と稱する以上は多少吾人の視聽を聳動し吾人の注意を惹起せしむ端歌俳諧川柳俚諺の類より漢詩和歌さては西歐のエピグラム等のうちに發見し得らるべきもの吾れは總稱して與ふるに警句の名を以てせむか盃は疊の紋にあらずと謂ひ門松は冥途の旅の一里塚なりと謂ひ短氣は損氣と謂ひ千秋萬古北邙塵と謂ひ小兒は大人の父と謂ふ皆是れ警句と概稱し得べきにあらずや。

既に警句となりて發すべき偶感は詩的と稱する範圍内に於て幾んど常に思考及び直覺の結合なるが故に科學者の思考に思考を結合せるものとはいたく趣を異にす科學をして事實上に進捗せしむべき偶感は正當ならざるべからず誤謬あるべからず抒情詩人をして作歌せしむべき偶感は不正にて可也誤謬ありて可也轉瞬の間に呼出せられて忽ち再たび霧消せざる刺觸ならば即ち足る譬へば酒は飲むべし百藥の長と言はむに科學ならば果して其然るや否やを定むるに極めて細心の研究を要すれど抒情的に偶感するに何等の懸念か是れあらむ要は抒情的に興奮せられて確たる立脚地を占むればより。

警句は偶感の結果而已若し夫れ思考漸次に進行を繼續して愈々長く愈々大にならむ乎結果は猶ほ抒情詩人の閲歴たることを得て適當の意味に所謂思考的抒情詩となるべし哲學者なる人が終に歌ふこと能はずば渠れ歌を以て其哲理を叙述するにあらずして單に歌の形態を彼らせたるまでなり詩人は然らず渠れを哲理化したるもの能く渠れをして詩的に鼓舞し感觸せしむ哲學者よりは吾れ説明を待ち詩人よりは吾れ興樂を享く學ばむが爲めに吾れは彼れの門に行き樂しまむが爲めに吾れは是れに耳を傾むく彼れに對しては何物を豫示するかを問ひ是れに對しては如何に豫示する乎を問ふ材料は彼れに問ふべく形式は是れに問ふべし韓圖の哲學を學ばむが爲めには吾れ韓圖の全集を繙く未だ韓圖の哲學を縱横に貫流するの故を以てシルレルの思考的抒情詩を其本源となすこと能はざるなり。

既にシルレルの所説を以て韓圖の哲學の基礎上に建つことなしぬ果して然らむには斯の思考が詩的閲歴

として如何にシルレルに働くべきや或は所思らく斯の思考ありしが爲めに渠れの想像力束縛せられ渠れの空想自由に活働し得ざりしなりと曷んぞ夫れ然らむ渠れは研究其ものを未だ一度びも空想中に取扱ひしことなし曾て研究したりしものが今空想中に出現することは是れあり渠れ曾て美は人間の感性と理性との調和をあらはすとの研究をなしたることありき而して一旦其空想に上るや渠れは覺官的内容に充てる思考を視るのみ。

吾れ若し情的閲歴と思的閲歴とを比較せば一目して其目的を同うすれど其徑路を異にせるを發見し得べし情的閲歴は偶起の特殊より發足して詩人の務は其れより普遍性を摘取するに存し思的閲歴は必至の普遍より發足して詩人の務は其れに特殊性を修飾するに存す思的閲歴は眞實ならば情的閲歴は現實なり彼れは必至性を有し是れは自由性を有す彼れ虚なれば是れは實茲に於て兩者相合して全をつくり詩人の空想彼是に出入して以て相互の欠陥を補充す必至的普遍は特殊性の生命を保有せざるべからず抽象的眞實は結象的現實中に進入せざるべからす概言すれば思的閲歴は精神より空想によりて心情に近づき情的閲歴は心情より空想によりて精神に近づく思的閲歴のみにても情的閲歴のみにても單獨にては抒情詩となることなく其是れあるは必ず空想を通過したる後也。

思考的抒情詩の哲學と異なるところは心情の共働あることにして感情的抒情詩の感嘆咏嗟と異なるところは精神の共働あることなり哲學的思考は或る觀念を及ぶべきだけ明瞭ならしめむとし思考的抒情詩は或る觀念を美はしき糸に編込みて之れを朦朧ならしめむとす一詩人曾て思考的抒情詩と感情的抒情詩とに就きて、『普遍的思考を特殊化し特殊的情感を普遍化すべき空想の創作的作用を要す』と謂へり當れる哉言や。

吾れは又た思考的抒情詩と教義的抒情詩との別を說かざるべからず韻文中に詩歌はあれども哲學はなしと誰れやらの道破しけむごとく教義的詩歌は單に詩形を借り來つて其れに哲理的内容を盛りたる丈にて詩歌と共有なる部分は單に其形態而已總じて教義を目的とする抒情詩は未だ以て詩に屬すとは謂ふべからざる也。

思考的抒情詩のうち偶感其基礎となりて詩歌となれるもの是れを警句と概稱すべしとは已に前に說けるが如し而して試みに吾れ氣を靜めて思考の徑路を辿り行かば默坐長想せる詩人が深く思ひて其空想を思考と共に悠々遊ばしむるを視む幾もなくして人間が思考の奇しき力に愕き抒情的に感奮せらるゝこと甚だしく思考の爲めに感情殊の外激越して終に神興となりて表發することあるをも視む而してまた是等清純のものおのづからなる儘のものゝ外に喇笑非難憂鬱泣笑の類の入り來りて常心を失はしむることあるをも視む。

要之思的閲歴より生ずる抒情詩は思的抒情詩の名目の下に總稱し得らるべし而して思的閲歴が必至的に生ずるものと偶感的に生ずるものとの二類あるが故に思的抒情詩も亦た偶感性思的抒情詩と必至性

思的抒情詩との二類に分つを得べし。

吾れは俳諧川柳の類を執つて排列し行かば必ずや數多の色彩あるを發見し得べし輕妙なる地口滑稽的偶感を基礎とするもの名けて滑稽的と稱すべく寸鐵殺人的の非難刺嘲をなすもの名けて誹刺的と稱すべく眞面目なる想ひを述ぶるもの名けて眞摯的と稱さむ。

必至性思的抒情詩中思考の性質及び心情の程度に關して分つべきもの凡そ三つあり外的閲歴によりて詩人の思考行動すれば心情も亦た行動すべく核心亦た空想中に導かれ得べし故に心情の入り來る程度に依て差異を生ず詩人が思的閲歴に捕捉せられ或る種の思考茲に種子となりて靜かに湧れは思ひを沈む此狀態を名けて長想と名け斯の徑路より生るゝ抒情詩を長想的抒情詩と名く詩人一度び點火せられ強く興奮し思考は殆んどあらしの如く湧れを動搖す此狀態を神興と名づけ斯の徑路より生るゝ抒情詩を神興的抒情詩と名づく詩人が或る思的閲歴に困しめられ湧れのうれしからざる感情を抑壓することも能はず思考は進入して湧れを靜かならしむること能はず悲慘不幸嘲笑の類詩人の腦中に充滿すべし此狀態を不快と名づけ斯の詩路より生まるゝ抒情詩を不快的抒情詩と名づく長想的抒情詩の特性や靜平なり肅寧なり神興的抒情詩の特性や强大なり激越なり若し夫れ不快的抒情詩に至つてや嘲笑となり非難となり絶望となりユーモルとなり自然なる思的徑行に幾多感情の混入を視る。

吾れは猶ほ足らはぬ節あるやに思はるれど今日の吾れ未だ充分の研究を得るに至らざるが故に姑らく

未定稿として上述し來れるものだけの一表をつくりて以て此章の結尾におかむ乎。

思的閲歴
- 偶感性
  - 滑稽的
  - 誹刺的
  - 眞摯的
- 必至性
  - 長想的
  - 神興的
  - 不快的

第五　間接的閲歴

從來論じ來れる場合にありては閲歴は直接的活動をなしたるもの換言すれば詩人の空想に一個の核子を生じ之れを詩人が育成したるもの、みなりきされど詩人は亦た既に已に他に準備しありし核子を手に取上げて今は單に之れを構成し得ることあり蓋し詩人には斯の如くして學び得たるものを其固有のものに新たに化育し得べき可能性あれば也譬へば人間の血液をつくるに當りても食料のうちに含まれたる養分を其儘に其が體内に着服するにあらずして人間の有機體系が始づ己れに適應せる血液といふものに化成するを視るべし故に間接的閲歴の特性と稱すべきは詩人が何等かの方法にて他人の直接的閲歴をば其固有の精神的作用を活働せしめて其が身邊に持來る也斯の如くにして後世の歌人は淳朴な

る萬葉の昔に戻り斯の如にして我邦の漢詩作家は海を超えて遙けき唐宋の遺韻を探り斯の如くにして山路を辿る馬子の鼻歌も麗はしき錦繡を纏ひて九重の雲深きあたりに出入することを得たりしなり。月に叢雲花に風といふも昨日の淵は今日の瀬と謂ふも或は沈魚落雁羞月閉花の趣ありと謂ふも幾度か同じところに襲用せられては清新の香ひおのづから失せて先きの直接的閲歴が今の間接的閲歴と姿を更へて後遂に聽く人の耳を欹つる迄に至らず已に然らば間接的閲歴は作者の材能の缺乏を表示するものとして遂に全く之れを排去すべきものかといふに抒情詩界に或る詩歌を伸長して其古るき種子より新たなる芽を萠出したるが如くに働らくものある上は決して爾か言ふこと能はざるもの也所謂出藍の譽ありとは斯の如きものにして一頭地を抜くといふも是れをこそ名くべきものなれ駿甲の丘陵を集めては東海に不二の倒扇を懸け季吟坦菴の感化は大に發して遂に蕉風の門を啓きぬ些々たる歌謡の一端に唉ける微花だも撮む人の手腕によりては忽然として所謂時代改作の主脳となるなしとせむやシルレルのテルに於けるグリルパルツェルのサッポオがマダアム、ド、スタエルのサホに於ける偕てはコドルス・ファウスト等の關係如何を知らば抒情詩界に亦た何ぞ是れなきの理あらむ。界を除きて純抒情詩界に是れなきの理あらむ。

斯の如く間接的閲歴が直接的閲歴の如くに働きて夫れより得たる核子を詩人が發育せしめ伸長せしむるときは此狀態を名けて伸長的創作の時期と稱し夫れより得たる抒情詩を伸長的抒情詩と稱す顧みて直接的閲歴を觀察するに詩人が一個の核子を得て之れを空想中に養育するや其儘に伸長せしむるときと之れを轉化して伸長せしむるときとあり間接的閲歴に於ても亦た然り即ち未だ全く使用しつくされざる核子を漸く伸長して完全ならしむるものと共に却つて全く新らしきものを作ることゝあり第一の塲合にありては間接的閲歴を充實ならしめむが爲めに自己を捨てゝ彼れに與へ彼れを我れに來らしめずして我れを彼れの方面に向はしむ然れども抒情詩の性質として斯の種の純粋なるもの幾んどあることなく其是れあるは多少詩人の手加減を經たるものゝみなり例せば彼の連歌の起源たる二人唱和上古の所謂歌謳の如く彼れ一句是れ一句を唱へて以て一首の短歌となるものを取りて論せむに前句を唱へたる詩人の直接的閲歴は後句を唱へむとする詩人に對しては間接的閲歴となるが爲め後詩人が前詩人の閲歴を其儘に充實ならしめむとして自己を彼れに與ふれども抒情詩人の性質なれば多少後詩人の鹽梅なきことを得ざるべし然れども前詩人の着想を其儘に可及的眞摯の心情を以て之れを伸長せしむるにあれば吾れは斯の種の伸長的抒情詩を殊に接續抒的情詩と命名すべし接續的抒情詩や多少の鹽梅は免れ得ざれども猶ほ前想を眞摯に接續するものなり若し然らずして或は眞摯的に或は滑稽的に一旦得たる核子を轉化し前想の接續をなさゞるときは吾れは殊に斯の種の伸長的抒情詩を非接續的抒情詩と命名せむ例せば後世の句合に機智を弄して聯想恰かも飛ぶが如く之れを合して完全なる想の進行を認め能はざるもの即ち是れ也。

凡そ物の伸長といはゞ其物が未だ發展し盡さゞりしことを豫示す既に發展し盡したる想なれど時處を異にするが爲めに享樂の道なきを慨み彼土より移して我庭に植ゑむと欲すれば玆に始めて翻譯なるものを視るに至る翻譯の根本は徹頭徹尾間接的閲歷也吾れは今にして帝國文學第一卷第三號に敎授フロオレンツ氏が日本詩歌の精神と歐洲詩歌の精神との比較考と題し敎授上田氏の非難に答へたる文中に擧げたる飜譯に關するギョオテの所說を再考せざるを得ず凡そ詩歌を飜譯するに當りて原詩の內容形態二つながらの美處を發揮して忠實に移植せむこと殆んど不可能的事實たり吾が私見を玆に敢て陳述するの榮を許されなば吾れはギョオテの第一種飜譯即ち原詩を碎きて散文體の飜譯を以てすることは詩歌界少くとも抒情詩界には決して其の存在を許し得べからざるものと言はんとす詩歌にはおのづから詩歌の特徵あり散文體の爲め詩術の特色を滅却しなば詩的情熱盡く飛散して尋常一樣の無味澹泊に陷るべし是れ實に詩歌に許すべきことならむや各國おのづから各自の詩的形態あり日本然り支那然り西歐諸國亦た然り旣に然らば詩歌的なる範圍內にありては彼の國の詩歌は宜く此國の詩的形態に入るべく此國の詩歌は宜しく彼國の詩的形態に入るべきことを覺悟せざるべからず飜譯せむとする者は粉本に對しては恰かも直接的閲歷なるかの如くに進入し其上に詩的に興奮せらるゝを要す偖彼國の詩歌を此國の詩歌に移植せむとするや譯家は勢ひ下に揭ぐる二法の一を擇ばざるべからず一は譯家自ら身を異邦の狀態に置かむと苦心すれども畢竟外國の趣意を領するに

止り之を出すに自家の趣意を以てせむとするものにして名けて自主的と謂ふ自主的飜譯は原作の特色に代ふるに譯家の特色を以てするが故に原作以外に一己獨立の價値を表はす一は譯原兩作の一致を期し一以て他に代用せしめんと努むるが故に多少我國民の特性を棄つるところあれども原作に特有なる思想感情を與へ同時に能く其土の人民と異邦の讀者と同一の感動を起さしむるに適切なる語句を以てするものにして名けて他主的と謂ふ。

同じく間接的閲歷を基礎とすれども或る有名なる原作に依憑して其題目を別にするものあり語呂の工合を以て戀を鯉に換へ若しくは濃いにかくる等端歌和歌に甚だ多し吾れは名けて轉用的と稱し斯の如き抒情詩を原作に對して轉用的抒情詩と稱す眞摯なる意味を以てする者は或る眞摯なる題目を取扱はむが爲めに有名なる原詩の形態に依憑するものにして眞摯性の轉用的抒情詩を生ずべく滑稽なる意味を以てするものは或る滑稽なる題目を取扱はむが爲めに有名なる原詩の形態に依憑するものにして滑稽性の轉用的抒情詩を生ずべし。

或はまた三十一文字の材料を以てすれども之れを端歌に上ぼしなば先きの優美なる姿は大に失はれて如何にしても世俗的とならざるを得ざるに似たり端歌調を以て何人か能く和歌にあらはれたる大宮人の戀の如くに歌ひ得しや吾が不敏なる未だ是れありしを聽かず亦た是れあるべしと信せざる也斯の如く和歌に間接的閲歷を捕へて卑野の形態を以てし遂に其品位までも卑野に見えしむるものを吾れは

裝的抒情詩と稱せむ。

總じて是等の抒情詩の基礎となるものは常に間接的閲歴にして詩人は之を恰かも直接的閲歴の如くに取り上げて育成せしなり言を換へて曰はゞ詩人は是等の間接的閲歴の爲めに詩的に興奮せられたるところある也されば吾等は有名なる抒情詩に實例を視得るが如く決して間接的閲歴の故を以を非難の辭を逞うすること能はざるものなり若し吾等をして價値なき間接的閲歴上の抒情詩ありとし之れに對して非難の辭を與ふべきものありとせば世の所謂模倣的抒情詩即ち是れ乎。

東西古今世界は模倣を以て塡充せられむとす何ぞ夫れ模倣是れ事とする儕輩の意氣なく抱負なきことの斯く迄に太だしきや模倣は一程の流行惡疫也黴菌は繁殖を與へずして害毒を遺す模倣者は原作者の思考を捉へず感情を捉へず動機を捉へずして語句を捉へ影坊子を捉へ僻性を捉ふ美術にあらずして手工也團洲を得ずして遂に二錢團洲に終はる也和歌盡く模倣を事とし新體詩盡く模倣を事とする時代ありとせば抒情詩界は進歩と稱する一大原則に逆走するものなり靑年作家初學の徒が詩聖の影に趑ふや良し唯だ其時既に自己化するの氣魄あらざるべからず。

直接的閲歴ならずされば迚て上述幾多の間接的閲歴の分類にも屬せず間接的閲歴中最も獨立の性を具備し自己以外或る一人の閲歴にあらずして人間の閲歴を用ゐる抒情詩名けて創構的抒情詩と稱するものあり。

劇詩作家は自己の『我』を殖ち自己以外の多數の人物をして話說せしむるを要す渠れは自己以外の個人をして表白せむるところある也叙事詩作家も亦た數々自己を他人に移すこと劇詩作家に於けるが如し斯のごとく兩者が自己を他人に送り込むことは觀察の結果として生ずるものにして觀察にあり得べからずと信ずることは自己以外の人たりと雖も敢て言はしめず之れと同じ關係をば吾等は抒情詩人にも發見し得べし抒情詩人と雖も自己の內部にとゞまり自己の感情にあらゆるものを寫すのみならずして亦た其足を他人の上にとゞむることを得べく既知の事相より類推して未知の事相を解釋することあるべし即ち斯の如くして間接的閲歴より一篇の抒情詩は生まるべき也而して是れあるは獨力固有のもの甚だ稀れに大抵讀めるもの聽けるもの自己の記憶せるもの若しくは自己に生じたるもの等を結合したるもの也。

詩人が他人の衣裝を纏へども明らかに詩人自身なることを知られ得るときは由て歌はれたる抒情詩を假裝的抒情詩と稱す即ち詩人が自己以外の人物を藉りて全く自身を表白するものなれば是れを前の創構的抒情詩に用ゐられたる人物と趣きを異にすれども一見直ちに假裝創構兩抒情詩を辨別すること難し等しく或る狀態に於ける少女の戀を歌ふとき一は少女を離れて其狀態にある少女の情熱を歌ふ。

例に依りて間接的閲歴を一表をつくれば左の如し

間接的閲歴
- 伸長的
  - 接續的
  - 非接續的
- 翻譯的
  - 自主的
  - 他主的
- 轉用的
  - 眞摯的
  - 滑稽的
- 卑裝的
- 模倣的
- 創構的
- 假裝的

作家論

（附書肆のこと）

最近の『新小說』時報欄に於て露伴子は著作家の狀況日に又た日々に漸く非ならむとするを慨し、内にありては著作家同志の組合を設け外に對しては印刷業者との調停一致を謀り、以て自他の品位を永久に維持せむことを望みぬ、情濃やかに意周ねく言々肺腑を衝いて流露するが如く讀み去り讀み來れば何物か髣髴として吾が面前に逼るものあり。

小說家と謂ひ新體詩家と謂ひ論文家と謂ひ將た亦た一般著作家と謂ふ其間にありて目的方法に關し多少の相違あるは理の免れざるべき筈なれど既に作家と稱する一名詞を以て目せらるゝ以上は作家自身

の如何なるものなる乎を自覺し社會に對して如何なる關係を有する乎をも認識し、力めて正路を通じて進行せざるべからざるにあらずや、高踏を衒ひ阿世を事とする者頻々耳朶を打つに至りては今にして斯の問題を掲ぐる必ずしも必要ならずとせざるなり。

農耕者製造者が人體に偉大なる勢力を有するが如くに作家は人心に密接なる關係を有す、思想感情の無形界を司配する其手は默々の裡に活動するものから俗塵の間に奔走する近眼者流の斷えて注意せざるところなれど靈妙精緻の轉化を與へて内面の行動を刻々に增進する其微其細能く筆紙の盡し得るところならず、試に作家の傳記を省き若しくば其思想を捨てゝ顧みるところなくんば歴史なるもの必竟浩瀚の虚誕ならずして抑も他に何物ぞや、戰爭、迫害、改革、興亡、雜然紛然一も歸着するところなく一も事爲の本相を覗ふところなく一も宇宙の法則を識ることなし、歴史に作家を算せざれば得るものは精神なき歴史而已、觀念なき事件而已、原因なき結果而已、所詮人間界の事物を統御し行くものは作家の想也、善なるも惡なるも眞なるも僞なるも兎に角想なることは疑ひあるべからず、或るこゝろもちと謂ひ或る氣分と謂ふも人間界の旨目なる嚮導者にはあらざるなり、罪過滿々溢るゝばかりなる斯の記錄所謂歴史なるもの上には必ずや毎に遲々として牛歩當ならざる歩調を以て行進する人道の大軍を照らす火光燦然たる想あらざるはなし、世間に於て最も名聲ありしもの世の運命を作りしもの未だ必ずしも王者にあらず、炬火數千輝くところ高く天を燒かんとすれば衆人愕きて目を矚す、須臾

にして灰燼と變じ白骨を曝らせども空間の星辰は依然として沈靜なる瞬轉をなしをるにあらずや、勝者の桂冠を戴きて權威赫々幾萬の儕輩を犬の如くに顧使せし者是れ即ち彼れよりも偉大なる或る想を盛る器に過ぎずして而して其の主人を過去に遡りて探せば雨の漏る怪しき小屋に行燈を掻き立て、禿筆を走らせたる窮措大の頭腦也、此想忽然として火の如く人々の心思を燃やし新淸なる生命勇氣を附與し沈淪せる腐敗の空氣を一掃して玆に改良せる一階段を次第に成形し來る、想ふ者常に行ふ者に先ち思想必ず制度と鬪ふ、是を以て中軸となれる根本的志想は能く社會の變化を生じ得べし、今日他人に衣食せる貧賤なる作家も其屬する民族を左右することあり、縱しや本人自ら決行する勇氣なきも他人は其爲めに全人民に移植するを務むべし、想一度び其方向を轉せば萬物盡く玆に一新紀元を開くべし、猶ほ何人か敢て作家を蔑視するや。

作家は實に高尙なる階級なり、空想家と稱し不生產的動物と喇罵する世俗の衆民は須らく三步を退きて宜しく其輕忽を謝すべきなり、最後の審判者たる時日至らば乞ふ視よ如何に盲目なる衆俗が泡を喰ふて騷ぎ出すかを、食を門に乞ふたる一ホメエロスを得むとて十個の都府は相爭ふにあらずや、迫害の墓上に今やダンテは崇拜せらるゝにあらずや、盲目の毒蛇と稱せられたるミルトンは今や詩界の大星にあらずや、然らば何の故に彼等は死せる後に幸福にして死せる前に幸福にならざりしや。

現世間を理想的完全になさむとして煩悶せる人々の運命は果して如何なりしとするぞ、大精神起て事を爲さむとすれば暗愚は翼を擴げて之れを掩ひ、眞摯なる活躍始まらむとすれば世の墮落は貧乏と死滅を餌ひて之れを阻格せむとす、吁嗟、心的勇氣の天を指して如何に遂に迫害に暗涙を飮みしかを視よ。

然れども總ての事物を淨淸にする時日は遂に作家の生命をも淨淸にしたり、大人の靜かに眠る地は缺點愈々遠ざかりて名譽は次第に加はり人々今や其天才を認識するに至る、作家が生前の缺損は死骨と共に之れを埋沒し傳記する者多くは其罪惡を塗りて地の上に求むべからざる完全なる人間を作るに至る。

凡そ人間の自然的性質として作家の人格を其作の性質より判斷する者多し吾人の永久の朋友となり吾人に智を與へ力を與へ吾人の美に對し道に對して愛するの想ひを活動せしむる書物の作家が眞實は甚だしき卑劣の男なりしとは如何にしても豫想することを能はず吾人は常に之を辯解せむと欲する傾向あり、シッパーに對してはポープに左袒し スチールに對してはアヂソンに左袒し盜鹿に對してはシェクスピーアを辯解し賄賂に對してはベーコンを辯解せむとす、是れ實に作家も他の人と等しく生存の爲めに働くことを忘るゝが故也、勿論天才も時ありては中心より凋零すること猶ほバイロンが終に其胸中萬斛の高慢の爲めに束縛せらるゝが如し、然れども作家が罪惡をなす源泉を考ふるに多くは貧窮にあり、作家が爲す勞力常に報酬と相平均せず、內外種々義理の纏綿するところなり識らず〳〵破廉恥

罪を犯し或は書肆に低頭して自己の天職を忘れ或は友を售りて自己の品格を傷く、己れの意にもあらざる作を草して世上愚物の人氣を博さゞるべからざる理由も玆にあり、新作家として獨存すること六ヶ敷先輩の閥と署し補と書し刪と書せらるゝ必要を見る理由も又玆にあり、知己を千歳の後に俟つことゝして自己の所期に勇往直前せむか飢えて死するを豫期せざるべからず、作物に依りて家族と共に生活するを望まむか、或は天職を傷け、品格を損するが如き境遇に誘引せられずとも斷言すべからず、吁是れ實に作家が天下分け目の境にして之れが幾分の豫防方法だにあらば宜しく共に謀るべきにあらずや、露伴子の言決して輕々に看過すべからず。

作家の他職業の人と同じく猶ほ食に依りて生存するものなることは吾れ之を說きぬ、然れども之れあるが爲めに自己を扞げても可なりとは說かず、依然として突進するが如き勇氣ありてこそ始めて眞の作家たることも得べきなれ、ダンテの如きシルレルの如きウォーズウォースの如きミルトンの如き一切の物質的苦痛を擺脫して空想國に獨住し眼は高く理想の彼方を指す、老病死苦を蚊の刺す程にも想はず、威氣凜然千秋を凌ぐ、宜しく是れ今の作家の他山の石となすべきこと也。

然れども是れ或は實際に於て行ひ得べからざることもあらむ、多數の作家を捕へて稀に見る古人傑を手本となせとは無理なる注文ならずとせず、故に吾人は露伴子が申出したる著作家協會の如きは一日も速やかに設立して其が効果を收めんことを望まずんばあらざるなり、吾人は熱心を以て作家が作家自身の何者なる乎を十分に反省せんことゝ幷びに書肆が作家に對して多少の敬意を表さんことを願ふ、近時の趨勢決して祝すべきにあらざるを悟り聊か作家論を草して世の注意を惹起す。（三十、七）

戀愛と色道

綠雨子が色道の爲めに大氣燄を吐きしより既に玆に幾何の日數をや重ねけむ今稍々朧げなれど、僅かに毎月一回宛印刷さるゝ斯の雜誌が嘴を容るゝ頃には多くの問題の餘熱漸く冷め行く傾向あるは吾等の私かに慽みとする所なり、色道論に關しては『六合雜誌』『帝國文學』『早稻田文學』『太陽』及び其他の諸雜誌に於て明晰なる議論もありたることなれば今又た之れを繰返へすの要なかるべし、されど言はで止むも腹ふくるゝわざなるに問題亦た文界に少からぬ關係あることなれば、時文に不注意ならざる吾等の所期をも聞えあげむため簡單に吾等の信ずるところを述べて以て此問題の殿りとならむと欲す。

綠雨子の御得意なる何里とやらむにも種々なる色道の類ありと聞く、同じ人間界にありても宗教々育性情等の如何に從ひて發達の階段に數多あるものから變愛の狀態性質亦た從ふて一ならず、されど犬猫の夫れに等しき動物的のものには通常色道の名を附與し之れに溺れて他を顧み得ざるものを色道の餓鬼と呼びて唾けるの具となしぬ、例を擧げて解し易からしめむに綠雨子の唱ふる戀愛は未だ吾等の所謂戀愛に及び得ざるものとし彼此の區別を立てゝ色道と稱し綠雨子之れに溺れなば吾等は綠雨子を

色道の餓鬼と名く、是れ人間の半面を識りて他の半面を識らざるもの、動物的の部分を取りて精神的の他の半面を故意に棄てたる議論也、綠雨子が眼界の到達する範圍内に於て自己及び自己に等しきものを評したる語なりとすればよし、然らずして直ちに人間界の戀愛を抽象的に概論するものとせば、吾等竊かに其の議論の淺薄なるを憫笑せずむばあらざる也。

人間は天地を繫ぐ鎖の如き者、肉心の結合せる者、道理ある者、意志ある者、斷たず惱恍する者、約言すれば一人のうちに二個の性質ある者にして之れを合して始めて完全なる者とせば戀愛も斯の如く是れが彼れに結合せむとする希望なりと稱するを佳とす、何人か敢て男若くは女各々夫れ自身に於て完全なる者と信せむや、物質的のみならず又實に精神的に於て各々其缺損を信ずるが故に是れに依りて更らに高尙なる理想的人格を作らむとするは靈妙なる天則と稱すべきものにあらずや、而して精神を肉體に陷沒するにあらずして肉體を精神に曳擧せむとする是れ戀愛の戀愛たる所以にして胃腑を充たせば事足るが如き彼の物質的饑餓の儔に非ざるなり。

（三十、七）

見眞似
聞眞似

天才修業

シェゲ太郎

老爺が一子相傳、天才人造法を講述する積りであつたが氣焰加多兒に罹りて昨今執蓐中故弊が立たず、おれが見眞似聞眞似で試みてをる天才修業を書くことになつたが、老爺が平常唱道する天才人造法の論風につきては是非前序として一言を費やしておかなければならない、老爺の論風は斯うだ。

昔者西行法師始めて東下りの時、如何した表裏の瓢箪やら豆腐の角に蹉躓きて轉ぶトタンに線香の折れを蹈拔き、周章ふためきて双肌脫ぎに柞で穿ること約三日間、到底穿り出せないに根氣を腐らし彼方通る娘子さん呼びかけて泣きながら藥を需めた、娘子さん嫣然微笑して、ありますとも、山に生れた蛤と海に住んだ松蕈と夏降る雪を混せて黑燒にして塗つて御覽、直に恢復るヲ、言ひ捨てゝ忽ち過ぎ去つた、當時でさへ既に斯の妙藥ありだ、況んや西行逝きて玆に七百年、其間の學術の進歩は愈〻甚だしい、否寧ろ凄い程である、コッホの頭を捻ねる肺病も六神丸七十粒服用したら頓治したと吳服商小理口元吉が新聞で感謝廣告をしておく、總じて當人の言ふ程眞ことの事はないもので、帝國文學が太陽記者に謝する文中『個は是れ本人の言の葉なれば是ばかり確乎たる證據はあらじ』に二重圈點を打ちておいたのは至極道理である、山崎帝國堂に行いて御覽、癒らぬ病氣はないよ、キレー水をつけて御覽、雪の樣な肌白にならない者はないよ、何種の葡萄酒も强壯にするし何種の齒磨粉でも口熱を冷すものと定めてある、アロイロナードの効能は丁度牛乳の十三倍半に當るのだ、單に藥ばかりの進歩でなく學術は人造を發達せしめて天然を壓倒した、佛蘭西では絹糸を人造し金鳳堂では純金を人造し珊瑚を人造するものがあれば金剛石を人造するものもある、氷雪の人造など小供でも驚かない世

の中だから老爺が天才人造法など毫も奇とするに足らぬ、人造し得ないのは恐らくは刺身皿に鮪の土手を築くことばかりだらう。

老爺が天才人造法を唱ふるや、直ちに家の雪隠の蔭に一本の柳を植ゑた、是れは槐を植て三公出づべしと唸ツた唐人にあやかつたので、そして同時におれを改名した、是れはシェクスピーアとゲーテの首字を取つたのだそうだ、昨今必至と親子協同で従事中である、老爺が科白を側らのおれは見真似聞真似で修業してをるのだ、尤も親子とも知己を千載の後に俟つのであるから紀元三千五六百年に到らざれば其果して天才である耶否耶は決定し得ないだらう。

始めは伊勢新に倣ふて専賣特許出願中と銘打つて客を惹く考であつたが郵券僅か二錢を投ずるばかりで驚くべき金儲の秘法を無償で教えてくれる大阪某商會の義氣に感じ、同時に『人材倒用』の門に應じ得る人間の材木を作りて國家の爲めになさんとの考をも生じ、汎く公開して脚の生れかけた科斗が尾を搖つて水中に遊泳してをるが如き連中を救ふことゝなつた。

『大詩人は生まるゝもの也』の句は千古不磨の格言と稱すべきもので、吾れ人御互に生るゝごとくに大詩人生れなければ人間界に大詩人のあるべき筈がない、其不思議なる加減は『風流れて八人藝す』と同格で、昔しなればこそ風の流るゝ位に見物あつと喝采もしつれ今日では空氣を液體にする位は米國の學者は屁とも思はぬ、文字を曲解して自分で苦しむ世人の愚には呆れ返らざるを得ずだ、ヴァーヂン買ふて自轉車や金時計の貰へないのを怒り村井商會を詐欺者と罵る人があるがあれは御客が間違ふてをるので、商會は景物を遣らないぞ、『前の大景物を空ふするぞ』と始めから廣告しておくではないか。

此頃或る縣の小學校にて作文の課題に『敎師は人にて造り人を敎ゆる道具也』と答へた生徒があるそうだが、してみると人間も道具も天然も人造も平等無差別といふものだ、吾れ人須らく此理を信ずべしだ、小供の所言に間違はない、The child is father of the man の句はかゝる時に應用する爲めにウォーズウォースが歌ふたのだ、天才修業は徹頭徹尾これで行かなければならぬ、況んや細心精緻の學風によりて歴史的研究を試みたのであるから讀者必ず感服せずにはをられまいと思ふ、夫れで分らない奴等は下宿屋の二階に箸を嚙つてをる奴等だ、と口眞似がしたくなつた。

カメ犬と一處に酢を飲むで體を小さくしなければならないよ、たかゞ大阪の妾に逃げられる位の事で澄むのだ、大アレキサンダーは小さかつた、羅甸語で氣取れば Magner Alexander corpore parvus erat じや、アリストテレエスもプラトオンも乃至ギッボン●スピノーザ●モンテーヌ●グレー●モーツァルト●ベートーフェン●ゴールドスミス●ハイネ●ラム●バルザック若しくはグット今日のイプセン●スウィンバーン等も皆小身であるのだ。

小さくなるが嫌なら今度は大男になるのだ、毎朝木にブラ下り三度に一度は首吊りの眞似をするだ

ね、四尺程のゴムの棒を呑み込むなども可いがやつてみたおれが、大きくこそなつたれ、今に苦痛を感じるから餘り勸める方法でもないよ、どうも大男に限る様だね、ゲーテ●シルレル●ペトラルカ●ヘルムホルツ●シャールマン●ビスマルク●モルトケ●ラマルチーン●ミラボー●老デュマ●シェーペンハウエル●ヴォルテール●デョンソン●スターン●フローベル●カーライル●ツルゲーネフ●テニスンいづれも巨人だ、どうせ盜むなら半錢位盜むだね、血液じやあるまいし總身に智識を廻はして如何するのだ、頭だけで澤山だ。

演說會でおれの體重は三十貫目あるぞと毎に意張る政治屋がある、學者は五十まで智識を集め夫れからシステムを立てるのだから何んでも長命しなければならぬ、オムレツ、ビフテキに限りやすと公言するプロフェッサーがある、いづれも天才には落第だね、天才修業は成るべく身體を虛弱にするが可い、不養生をするだね、病氣を多くするだね、作者微恙あり止むを得ず今一日休み申候、と新聞に出たときは作者は天才の卵の小說家なので、決して小說が出來んで休むだのではない、前編發兌以後半歲過ぎても未だ後編が出來ないのは腦が痛んで經營慘憺と伴はないからの結果で愈々天才的分量の大なる作者であるのだ、吾れ素蒲柳の質四十を踰えざる底の文士は實に後世可畏といふべきものだ、デモステネスもアリストテレースもチツェロもスコットもボアロー●パスカル●ナポレオンなど皆虛弱だ、ニュートン●ベーコン●デカルト●ネルソン●キヨルネル●ポープ●ロック●ルナンなどは小供の時でさへ弱かつた、おれも牛乳は牛の子の飮むもので人の子の飮むものでないとして大に不養生をしたる爲めか色青褪めて天才的にして折々鏡で自惚れてをるに、君は蒼白ね、また財布が下痢したかと尋ねる無學の朋友があるには愛憎がつきるて。

擊劍柔術を學校に課すべからずと唱ふる醫學士の意見が分からないや、轉んで頭をうち腦の形ちを變へるなど天才修業には妙だよ、時々相撲を取つて人に投られてみるだね、短氣な人に議論を吹きかけるだね、そうすると相手が怒つて此方の頭をたゝく、最も妙法だよ、昔マーカス、クラークなる有名な小說家は始めは平々凡々の者であつたが馬から落ちて落馬して頭をイヤといふ程蹄にかけられてから天才になつたそうだ、マールブランシ●コルネリウスなどにも似たりよつたりの事實があつたそうだ、が、寢相の惡るい天才が枕外しにどんな變化を腦に及ぼすかも知れない、おれの知てをる宗教家が排宗教家となり實利文學論者が文學獨立を唱へ出したからね、頭打ちは餘程工合ものだよ、おれは未だに急所を打ち得ないよ。

訥辯になるだね、是れは造作ない方法がある、口頭試驗に準備なしで出席する風習をつくるだね、訥辯になること妙だよ、アリストテレース●デモステネス●アルシビアデス●ウィルギリウス●ラム●ダーウィン●メンデルゾーンなんど皆な訥だ、おれの修業も餘程積んだが唯だ雨夜の品定めに折々失策しかゝるには閉口する。

夫れから左利きだね、之れも容易なことで右ですることを左ですれば可いのだ、チベリウス●レオナルド、ダ、ヴィンチなんど左利きであつた、が、育ちは爭はれぬもので知事の令夫人が天ぷらの立食ひすると同じく好きな煮豆を見ると兎角右が利きたがるよ。

愈々事になつてきたよ、ベーコン曰くサ、大作は小供なき人より出でぬとクローカー曰く、英國の詩人にして有名なるは大抵小供を有せず、シェクスピーア●ベン、ヂョンソン●ミルトン●ドライデン●アヂソン●ポープ●スウィフト●ヂョンソン●ゴールドスミス●カウパー是れと、玆で修業中のおれは獨吟で宙外の無相窟を語らなければならなくなつた、『今までは何うやら斯うやら遣通しては來ましたなれど、行末は如何なることやらと案じられます』、が折惡しく涙が亂れぬから妙だ、ホップスは勉強するが爲めにわざ〳〵結婚を廢したそうだが濟々なる多士結婚する爲めにわざ〳〵勉強するものなくんば大に祝すべしだ、おれは乳臭のものが相帥ひて政略的結婚をなすを視る毎に擧問の爲めに覺えず暗涙を催ふすことがある、カント●ニュートン●デカルト●ロック●スピノーザ●ビット●ベートーフェン●ガリレオ●ライプニッツ●マールブランシ●グレー●ダルトン●ギッボン●マコレー●ラム●ベンサム●コペルニカス●ハンデル●メンデルゾーン●シオーペンハウエル●カモーエンス●ヴォルテール●シャトーブリアン●フローベル等は獨身者であつたが是等が後塵を拜する連中は如何、又た結婚が幸ひするところなきがあるまいと其方が可いといふのは。

新世界を創造する樣な天才に限つて他人の發見を一も二もなく排斥して惡口で叩きつける、シェーペンハウエルは身哲學界の謀反人でありながら政治界の改革家を罵倒した、ベーコンはコペルニカスを惡口する、ボードレールは自由思想家を罵殺した、ラプラースは隕石落下を信じなかつた、ヴォルテールは化石を信せず、ダーウィンは石時代を信じなかつた、日本主義を屈理窟で罵倒する人あれば其又御當人は愚論で他を罵殺す、いづれも我佛尊しなので後には何方かゞ天才と稱せらるゝのだ、どちらが負けても得する樣に修業中のおれは兩方を惡く言ふてをくつもりだ。

天才に二性格あるは驚くべきことでシェクスピーア●ドライデンとも謂はるゝ人が拙劣讀むに堪えない文章をつくるは何たる事であらう、役者なども舞臺で憂鬱なるものが社交上極めて快活なのが多い、ヂョン、ギルピンが二大憂鬱症の中頃に書いたのを視て大抵を想像することが出來よう、或る患者曾てアベルネシーに行き診斷を乞ふた、醫者が、貴君の妙藥は快活になることですよ、グリマルヂのところに御出かけなさい、彼れが貴君を笑はせますから、御藥よりそれの方が可いでしやう、と曰ふたら、患者は愕きて自ら其グリマルヂなることを告げた、といふ話しがある、だからおれは厭世論者と樂天論者なので、時には道德を主張するが時には又主張せぬことがある、文章も絶妙なるのと絶劣なるの

スターン●デッケンス、夫れから——モ止めよう、戀愛小說狂が哉麥を辨せぬ樣になるといけないから、誰れだい其方が可いといふのは。

がある、是れまで世に示したのは皆後者で前者は深く筐底に藏しておく、尤も拙劣句をなさずも無理のないことで天才にならんとして例の清新なる想調を欲するからの結果なのだ。

感情を非常に鋭敏にして僅かの事にも神經を利かせなければならぬ、アルフィエリは始めて音樂を聞いたとき眩暈を催した程である、そしてスターン・ルソー・デェオルヂ、サン等と共に『音樂程精神を鼓舞するものはない』といふてをる、ミュッセーもゴンクールもフローベルもカーライルも都市の喧騒を嫌ひ到底堪えきれずに田舍に遁てしまつたそうだ、おれの目には紅塵が萬丈高く上るのが見えるからだ、ボードレールは樹の香がないからベルヂュームに住めないと謂ふたがおれは香水黨の大將だから爾後左樣心得て貰いたい、日本銀行の側で斷髪しないとおれは頭痛を催すが常例だ。

多感だから多情だよ、ダンテは九歳バイロンは八歳で戀をしたそうだが、今では天才が多いから肩上げの中學生が盡く戀の小說や新體詩を作ツて戀愛神聖論を振舞はす、フランチェスカはラファエルの畫を視て氣が茫としたそうだがおれは小學時代に文藝倶樂部の寫眞には浮身を窶したよ、だから算數では加減も覺束ない。

シャトーブリアンとボアローは其奴僕の賞められるのを見ても胸を惡くしたそうだがおれも他の人が仲間を賞めるのを聞く度びに、ナーニ彼れは不可談（ウジミツトスプレヒバール）的だと一言にケナし去るのだ、シェペンハウエルは己れが名の字を間違ふて二つ書いて來た奴には借金を返濟しなかつた、おれは是非此事丈は巧みに應用する積りだ、何んでも他人は惡しざまに言ふだね、西班牙音一つ間違ふても倶に文學は談ずるに足らずといふべしだ、おれが他日マホメット種族論を書くとき揚足を取る奴には一年半以後に『彼』呼はりで嗤みつくよ、他を嘲笑して觀察識見が狹隘淺薄なりといへばおれは知らぬうちに世の御利口連が大家にしてくれるよ、妙法妙法。

健忘症は天才に有名なる特質だ、モーツアルトは肉切りに傭はれたがピアノに慣れたる指を知らずに度び〳〵切るので終に職を他に讓ツた、ビショップ、ミュンステルは己れの家の戸前に己れが書いた『主人不在』の貼紙を視て主人即ち己れの歸宅を門側に待つておつたそうだ、アンペールは豫ねて熟考中の方式を馬車の後面に書いておつたに馬車が動き出したものだから之れを追ひながら切りに書きつゞけた、デデローは時日も年月も忘れるが甚だしきに至れば現に面と向つて話しをしてをる相手の誰れなるかを忘れて仕舞ふ、之れに比すれば三日以前の原稿と矛盾した異說を吐くなどはまだ〳〵天才修業の足りない論者なので、出來ることなら一句々々に連絡しないこと猶ほ時事新報記者を愕かした巢鴨の先生の如くやツたら嘔かし蟹の穴に小便するより可笑しいことであらうて。

特殊の言語を好むのは餘程妙だよ、アルフィエリの odio serrato ダンテの immiasi や entomata など人の知らない意味があるのだ、『彼』『愚論』『幽韻微趣』『寫象』『歷史的研究』『狂熱』など皆夫れ〳〵

の獨得の奥義があるので、殊におれの好きなBの字は千萬無量の意味がある、ビールとブラック、チーとビスケットが好きだからではまだ〳〵話せない。

幻覺は天才に甚だ夥しい、獨活の大木を瞻仰するなんど初等教育にも上らない連中だよ、此他飲酒、不倫不德、フォリー、ド、ツートなどさま〴〵修業に說明すべきことあれど又の日に讓らう　（三十、九）

秋冬季と創作との關係

炎熱やくが如き八九月の天を去つて金風玉露清爽の氣自ら人に佳なる頃ひになれば文界は相慶して『燈火可親』と謂ひ『讀書の好時節』と謂ふ燈火親しむべくむば創作せむと欲する文士の頭腦また自ら爽快にして運筆も隨つて功妙自由なることを得べき乎、書を讀むに可ならば文を造り想を鍊るに亦た可なるべき乎、幾年の昔なりけむ、東北の地殊に羽陽の文壇稍々生氣ありし頃當時の『早稻田文學』記者は其原因として窓外風雪烈しく寒威峭料、人はおのづから屋内に蟄居して爐を擁し書に親しまざるべからざるの運命を有するが爲めなりとの樣に見解を下したりきと覺ゆ、果して然らば冬季も亦た創作に適せりといふべき乎、總言すれば秋冬季は創作に於て緊切なる關係を有すと斷論し得べき乎、作家苦心談なるもの若し聽くべきものあらば吾人は這般の消息を傳へ來つて彼是相互の關係を科學的に研究したき意甚だ切也、何となれば一見何人も積極的確答を下し得るが如くにして而して其實歷史的證據が往々吾人をして躊躇せしむるものを生ずれば也。

シルレルとギョオテとの往復書翰中、千八百十七年十一月に前者の書ける文に曰はく、『灰色なる空の浦悲しき此頃、吾れは生きてありと感せむがためにあらゆる吾が反動力を要し眞面目なる大作を爲し得るなど思ひもよらず』云々、同じく十二月に『吾れは復た著作に從事せむとすれど天候懶くして精神の明快を保持すること能はず』云々、而して翌年七月の書翰には天氣晴朗、其心亦たあがり、抒情的神興の來ること遲からざる由を告げぬ、秋冬季にある日獨の兩天地、よしや同じからずとするも其間豈に兩者全く相容るゝこと能はざるがごときものならむや。

ダンテが第一短歌のなるや千二百八十二年六月十五日なりき、其『ヴイタ、ヌオヴア』は千三百年の春也、ミカエルアンヂエロの傑作は千五百〇六年の四月より七月にかけて着想し製作せられ、ミルトンの大作また春に起る、バルザックが『ラ、クウシーヌ、ベット』は八月より九月に其『ベール、ゴリオ』は九月、其『ラ、ルシエルシ、ド、ラブソリユー』は六月より九月に亘る、スターンの『トリストラム、シャンデー』は正月になり、バイロンが『チヤイルド、ハロルド』第四章は九月になれり、而して又た其『プロフエシー、オブ、ダンテ』は六月に、『プリゾナー、オブ、シロン』は夏期瑞西に漫遊せしときに書けり、シルレルの『ドン、カルロス』と『ヴアレンスタイン』は秋なれど『ヴアレンスタインス、ラーゲル』と審美論とは九月になり、『ユングフラウ、フオン、オルレアンス』は七月になれり、ギオーテが『ミニオン』其他の抒情詩は五月に、モーツアルトが『ミトリダーテ』は

十月に、ベートーフエンが第九チンフオンニーは二月に、ヴアゲネルが『デル、フリーグンデ、ホルレンデル』は千八百四十一年の春になれり、吾人は古來の傑作を綜合して其統計を取れるにあらず、また敢て爲し得ず、然かれども上に擧げたるごときものよりせば十一月及び十二月の文字の一たびも見得ざるは何の理ぞや、而して吾人はチャンスと評去し得ざるものあり。

ヴオルテールは年中其勉強室を暖め、ルソーは神興到れば好むで日中直射の光線を頭腦に受け、バイロンの寒氣を恐るゝこと羚羊に似、ハイネ冬日爐火なくして我文冰るとと書しぬ、斗酒以て詩三百を編まむと欲するもの此間豈に多少の因緣なからむや。

感奮し激昂し以て天馬空を行く底の大快筆を縱橫に馳せしめむには萎靡收縮せるが如き秋冬の時期を最も惡くむべしとなすにあらずや、作家諸君幸ひに吾人に敎ゆるところあれ。

（三十、十一）

『天才論』自序

多樣なる學說を盡く拾集して汎く之を國內に傳播せむことは洵に一世の偉觀にして又實に人文發達の好基礎を構ふるものにあらずや、普通思想の比較的單調に失せざるやを疑ふ每に余は未だ嘗て此感なくむばあらず、世上外國語を解するの人士、胡むぞ餘力を以て斯の方面に貢獻するところあらざる。既に汎く傳播せむことを希ふと謂ふ、勢ひ讀者の至便を謀らざるべからず、既に讀者の至便を謀ると謂ふ、勢ひ浩瀚の原書を飜譯することは能はず、余が殊に法醫者の研究せる天才論を取りて殊に其大意を移植するにとゞまる所以實に玆に在りて存す矣。

上は國家的事業として著譯を奬勵するの勇氣なく、下は中等敎育書に狂奔して敢て他を顧みざるの時、余は『新撰百種』の如き性質のものが此間に處して一方の使命を完うするものあるを慶す、好漢、希くば爾は余の半身に對して急先鋒たれ。

（三一、一）

劇と敎育との關係

新潟縣尋常師範學校に於て敎員生徒相集まり以て一場の摸倣演劇を擧行するや、世の敎育家、新聞記者、雜誌記者等大概之れを非難して止まず、非難素より之れを妨げず、所信當さに然るべきものあればなるべし、然れども從來世上に發表せられたるところを閱讀するに盡く片言隻語にあらずんば根蔕なき議論にして未だ以て大方の學者を首肯せしむるに足るもの一もなきに至りては吾人の竊かに遺憾とするところなり、其所謂『河原乞食』の眞似をなしたるが爲めに之れを否なりとする乎、果して然らば俳優が河原乞食ならずして美術界の一地位を占據すべき恰好の時代に到達せば敎育界の敎員生徒は之れに摸倣するも敢て不可なしとの意なる乎、或は學校の敎員生徒なるものは斷然演劇なるものと絕緣するを可とするの意見なる乎、或は敎育界の諸員は觀劇は可なるも演劇は斷然不可なりとの意なる乎、或は學校內の演劇は之れを奬勵すべし、然かも堂々たる講堂使用をなすは沙汰の限りなりとの

意見なりとする乎、或は演劇其ものは可なるも今日の劇は不適當なりとの意乎、凡そ是等の意見や適當の解釋を附與するところなくむば紛々一も歸着するところなきに終るべし、新潟縣尋常師範學校の紛擾事件を云々する者幸にして傾聽するに足るべき高說を懷抱するあらば今日の好機を逸せずして須らく謹嚴以て世の論者と共に研究に從事すべきなり、吾人は新潟縣尋常師範其ものにつきて批評を下すこと能はず、何となれば此の特殊なる場合に就きて未だ精細の報告を手にせず、且つ又た特殊なる場合を評論すべき時機の早尙を感ずればなり、唯だ吾人が世評一般を讀みて頗る不充分の感を生じたるは非難者の所言中、未だ劇と教育との關係有無に就きての汎論を與へざるにあり、先づ是を論難して後徐ろに特殊の場合に論及し行くは最も適當の順序ならずや。

抑も〳〵劇と稱するものは果して教育に何等かの關係を有するや、試みに吾人現時の大中小學校教育制度をとりて其教課科目を歷觀し來れば吾人は幾むど其關係を認むること能はざるに似たり、劇を知らざるもの猶ほ能く倫理學を講じ得べく又た之を學び得べし、劇を知らざるもの猶ほ能く動、植、理、化を講じ得べく又た之を學び得べし、劇を知らざるもの猶ほ能く國語、漢文、幾何、體操を講じ得べく又之を學び得べし、凡そ今日教育界に存する百科全書的知識に對して劇は毫末も關係だもなきなり、之を法科學生に觀よ、憲法、刑法、商法、民法、果して劇と何等の關係かある、之を工科學生に觀よ、採鑛、冶金、土木、電氣、果して劇と何等の關係かある、之を農科に問ふも之を理科に問ふも將た又た之を醫科に問ふも誰れか劇と密接なる特殊の關係を認むるものぞ、更らに又た他方を顧みて演劇に熱中せる輿樣、令孃、下婢、乃至若旦那、會社員、若しくは俳優自身、劇通、諸種の著作家等を捕へて劇は何人に何事を教ゆるか、實際教育なるものに何等の關係あるかを問はゞ彼等の大多數は恐らくは啞然として答ふるところを知らざるべし。

教育の目的とは何ぞや、吾人は數々人間社會の一地位を占むるに適當なる人をつくる幾多の教育課目を聞く、吾人は法學と謂ひ、農學と謂ひ、醫學と謂ひ、商工學と謂ふ幾多價値ある特殊的知識を視る、一生を通じて蟻のみを研究するあり、半生を費やして語學のみを口にするあり、更らに美術なる教育に進めば彫刻、繪畫、音樂等と稱するものもあり、所謂美術なるものがあらゆる男女に必要なるもの、是れなくむば人は遂に沒趣味なる弄花、競馬、飮酒、圍碁等に時間金錢を浪費するにいたること、劇は斯の美術界の一地位を占有するものなること等は吾人の玆に論ずるを欲するところにあらず、唯だ問はむと欲することは所謂『よみ、かき、そろばん』の初等學問以外に吾人の必ず知らざるべからざるもの、即ち地位に關せず、職業に關せず、年齒に關せず、兩性に關せず、是れなくむば男として女として缺損するに至るもの果してあるべきかと、曰くあり、言ふまでもなく人生の學問、處世法の學問是れ。

如何にして巧みに生活せむかは小學に於て中學に於て大學に於て學ぶところよりも更らに一層必要な

る學問也、單獨の學術的智識より離れ、單獨の衣食的焦慮より離れて見なばあらゆる教育は處世術若しくは生活學の一手段として僅かに價値を有するに過ぎず。

未だ學校教育なき時代の遺物たる今日の老爺老婆は目に一丁字なきもの多けれども渠等が自然に有せる怜悧、智識、洞察若しくは性質の健全にして潔白なる、若しくは世間の大體に通じて人生に對する義務を辨へたる事等は却つて今日普通教育を受けて學士得業生などゝ稱する者より優れたる善良人民をつくるが如し、別言すれば渠等は生活學處世術を能く辨知せるなり、近來教育の普及せる事實は一見頗る愕くべきが如しと雖も、若し物質的利益のみ爭拾して徒らに黄白是れ事とし、あらゆる教育の最終目的たる處世術生活學に毫も得るところなくむば如何ぞ教育の目的を到達し得たりと言ひ得むや、紛然雜然亂麻の如くなりゆける商賈的世界に立ちて男は正直是れ最良の政略と信じ、女は壯健快活是れ子孫への責任と信じ共に力むるところあらば、是れぞ洵に深奥の意義ある眞理を捕捉したるものにして之れに比較し來らばあらゆる教育は第二段のものとなるべし。

倏劇なるものは何事を示すかと問はゞ、如何なる複雜の結構なりとも詮するところ、人生の是等最單、最大、最廣の眞理を描きたるに過ぎず、『ハムレット』、『マクベス』、『ファウスト』、『アガメンノン』等所謂劇の傑作と稱すものは悉く是等の眞理を最も能く教ゆるものなり、人生の智識は夫れ自身に一の教育也、而して人生に關する智識は劇の最も巧みに描くところにして、如何なる書籍も、如何なる美術も、如何なる談話も、如何なる教育も斯く迄に明晰に斯く迄に直接に吾人の記憶に捺印するものなし。

或は問ふて言はむ、人生を廣く知るてふことは果して必要なるべき乎、生活學、處世術を完全ならしめむには果して是を以て要ありとする乎と、吾人は答へて言はむ、然り兩者は相離すべからざるものなりと、個人を取りて論ずれば間々廣く知りて巧みに行ふこと能はざることあるも、一般に概括すれば國民が知るてふことゝ行ふてふことゝの間に離すべからざる比例あるが如し、智識的發達は早晩道徳的發達となるものにして而して先づ來るは智識的發達なりとす。

吾人は繰返へして告ぐるところあらむとす、善惡を知り人生を知るは夫れ自身に於て一の善といふべしと、殊に今日の如き動搖定まりなき懷疑百出の時代にありては能く〳〵人生に關する眞理を了解するにあらずむば至るところに障碍を買ふに至るべし、人生の問題は舞臺の上に演ぜらるのみにあらざるなり、雜誌にも新聞にも新版小説にも街頭にも説教壇にも客間にも行くところとして逢遭せざるところなきなり。

人生の智識を描くこと愈〻廣く愈〻深く又た愈〻多からば劇が國民的教師として愈〻多く歡迎せられむ、人は聖書とシェクスピアとを併稱して英國民の二大教師と謂ふ、蓋し人生と人生中の重要なる事實と人間の精神及び心情とが最も自由に最も簡單に其内に描かれたればなり、或は聖書とシェクス

ビイアとを知れるものを良教育の人と謂ふ、蓋し兩者の人生を研究すること深く、性質、行爲を自由に活躍せしめ朦朧たる斯世のうちに人間の立つべき地位に關して巧みに知るところあればなり。

劇は人生の實相を巧みに描ける教師たるのみならず又た實に最も人間らしく又た最も寛大なる教師たり、總じて學校教育及び其教育制度は動もすれば頑強に傾むき易く餘りに鹿爪らしくなり易し、反之、劇なるものは其性質上、心情の濶大洪量なる教師なれば人生の大小事相を同樣に取扱ひて、彼れに偏し是れに黨することなきなり。

更らに劇は社交的の善良なる習慣風習を教ゆるところあり、學校育ちの令嬢連は舞臺の三ッ指、目八分を視て以て自己の御轉婆を矯正することもあるべく、金殿玉樓に住みて米の木をも御存知なき貴顯達は須らく舞臺の非人になりても親の仇を酬ゐむとする苦心の程を察知し得べき也、敢て劇といはず所謂狂言位のものに至りても猶ほ且つ人生に對する批評を含蓄せざるものなし、是に於てか教育なる字義を汎く用ゐて人心の慾望、愛情、性癖、習慣等を導き出して教訓し鍛錬するものとせば劇程巧みに之れが効果を收むるもの再たびあらざる也。

論じて玆に至れば讀者は略ぼ劇と教育との關係如何を了解し玉ひしならむ、即ちあらゆる特殊的教育の上に立ちて是等を打して一手段となせる處世術なるものは劇に於て最も能く發揮せらるゝが故に、今日の學校教育と劇なるものとは到底離隔すべからざる極めて密接の關係あることを理解せられしならむ、吾人は私かに顧みて自己の經驗に徵し、吾人の先生、吾人の朋友、吾人の親族、吾人の兄弟姉妹等を二大別し、一を劇に就きて稍〻人生の如何を辨知し得たるものとなし、他を全く然らざるもの、馬車馬的に突進したるものとせば行爲情想兩ながら雲泥の相違あることを證明し得べし、處世術中甚だ手近のこと即ち嫁姑の間柄、親類近隣への義理、親子夫婦の情愛等を朧げに了解しをるものは何事にも所謂呼があく也、處世は人間萬事の根本、但し巧みに處世すといふは當世才子の誤魔化しを手本にせよとの謂ひにはあらず、正道によりて機に處し變に應ずるの巧妙を謂ふ也。

既に劇と教育との關係頗る緊密なるものありて存することを認めぬ、偖然らば既定の『密接なる關係』をとりて中心にをき、今日の劇と今日の教育とが之れに對する資格如何を檢査し來れば吾人は頗る其不完全なるを認めずむばあらず、劇界の方面より觀察すれば勿論所謂從來の夢幻劇と稱するものに於てさへ夥多の人生批判を發見し得ざるにあらねど、是を以て愈々意義あるものとなさしめ、愈々完全なるものとなさしめむと欲せば吾人は明治適當の作劇家、若しくば飜譯家に待つところあらざるべからず、最近十年間劇界の趨勢より判じ、縱しや其進歩の遲々たるにもせよ、新作として逍遙氏の二三種さへある今日なれば前途頗る好望なりと稱し得べし、教育界の方面より觀察すれば從來の教育界は餘りに特殊教育に流れ、餘りに偏僻的に、餘りに形式的に、餘りに頑陋的にして處世術の知識を忽諸に附する形勢なきにあらざりき、劇場、小說、寄席に對する教育家の評論を參照せば思ひ半ばに過ぐ

るものあらむ、故に吾人は斯かる迷想を打破して揮ふて敎育界を劇界に近かしめざるべからず、若し能ふべくんば誰れ人か刷毛を握つて繪畵を作るを願はざらむ、若し能ふべくむば誰れ人か琴を執りて一曲を彈ずるを願はざらむ、故に吾人は斷言す、若し能ふべくむば誰人か繪畵、音樂の伴侶たる劇を拾ふて親ら科白を試みるを願はざらむ、昔は外國語練習の目的を以て外國語の模倣演劇を敎育界に許さむことを希ふ、是れ將た至當したりき、今は人生研究の目的を以て日本語の模倣演劇を敎育界に許さむことを希ふ、是れ將た至當の要求にあらずや、況むやエロキュウションを全然無視するが爲めに社交に於て講堂に於て吃言者に等しき准木偶のみ多き今日此頃、模倣演劇は此種の弊を矯正する最良手段なるに於てをや、言者往々一場の茶番ならば可なりと說く、茶番とすれば却つて嚴禁すべき理由こそあれ、眞摯の態度を以て是れに臨む素より其ところ、正さに斯のごとくあらざるべからざる也。

難者或は謂らく、斯の如きこと言ふべくして行ふべからず、臺詞のモヂリ工合未だ普通世上の言語と聯關するところなし、或は敎育界にも長幼の學生數多あり、一步を誤らば恐らくは救濟し得ざる弊風を生ずるに至らむ、殊に學科の勉勵を忽かにすることやあらむかと、然り、難者の說須らく參照せざるべからず、敎育界の年齡に不同多きは甚だ障害を與ふるものなれど凡そ何歲位のところより稍〻斯の方面に傾心せしむべきやは識者の研究を須つことゝして、吾人が自己の經驗に參照せば大學敎育、高等學校敎育、高等師範及び是等と同等の專門學校敎育に於ては毫も差支なかるべしと信ず、尋中程度は一考せざるべからず、但し尋常師範に至つては年齒較々多く且つ此處にありて一かどの人間と仕立上げらるゝところなれば或は差支なかるべし、況んや一度び卒業すれば頑是なき小兒を扱ふことなれば口も手も餘程面白可笑しく働かしむるの要なきを得ず、エロキュウションの參考としては最も價値をおくべきにあらずや、論じ去り論じ來るも願くは吾人を以て太閤記を辯護するものと誤解することなれ、猶ほ重ねて論難するの時期あるべし。

（三十一、四）

新派觀劇連

聞說らく、『帝國文學』『早稻田文學』の諸秀才は相約して觀劇連合會を組織し、多年の情弊打破を試みて以て斯界の刷新を圖らむとすと、行色頗る壯なりと謂ふべし。

劇界の衰頹も亦た甚しい哉、觀客の大多數は價値ある或るものを求むるが爲めに行かずして實感を好み寫實を好み喧騷を好み奇巧を好み、大道具大仕掛を好み、美しき衣裳を好み、馬鹿らしき隈取りを好み、未だ最も適當なる臺詞を以て發展する性格の描寫を觀ることを好まざる也、斯かる狀況なれば縱しや沙翁の劇を以て古今の大作と絕叫するものあるも、渠等に對しては或は最も繁冗なる面白味なき狂言なるやも知れず、是を以て座附の狂言作者等は顧客の意を迎ふることのみ是れ務め、曾て喝采を博せりし舊劇を補綴するか若しくは舊劇其物を再演するか、二者其一にありて未だ國民的自尊的大美術の眞髓を發揮せむと焦心する者なし、繪畵界にアンプレツショニズムあり、詩歌界に文學界派あ

り、共に刷新の氣運滿々たるに獨り怪しむ明治今日の日本に於て國民の胸中を抉穿して其本心を震動し、以て人生の大問題に接觸せむとする劇界の曙光猶ほ未だ明らかならざるを。

夫れ詩歌は少數の讀者を待ちて猶ほ以て事足るべし、繪畫も亦た少數の觀者を以て事足るべし、獨り演劇は初め一週間に於て滿都の喝采を博さゞるべからず、ミルトンの畏るべき敬すべき希望『最初の聽衆は吾れに少數ならしめよ』は劇界の忌言たらしめざるべからず、滔々たる下級民衆を相手として直接の認識、刻下の賞讃を求むべき條件を帶びて演劇の更代を爲さゞるべからざるが故に座附の狂言作者たるものは勢ひ美術を視すして社會の慰樂を視むとす、國民劇の改良進歩なきは一に玆に在り矣、新派觀劇連は識らず何等の好案を運らして以て斯の難問を解釋せむとする乎、旦に群集と共に入り夕に群集と共に散じ、成田屋音羽屋を云々するのみならば吾人は遂に諸氏が觀劇連新設の要を認むること能はざる也。

明治今日の狀勢を一瞥すれば吾人の生活は紛然たる宗教的政治的美術的大塊をつくりて各個また〳〵瘡傷を帶びざるはなく缺點を有せざるはなし、マシュウ、アアノルド嘆じて曰はく『英國に於て吾人は全然近世劇なるものを有せず、吾人の雜大なる社會は其一部分たりとも能く一致せるところ滿足にホモヂィニアスなるところあらずして、英國近世劇の基礎として立つに適當なる共通的理想あることなし』と、吁嗟是れ豈に吾人を警告せる一大曉鐘にあらずや、ラレイ及びシド子イの理想は移して以て英國當時の思想潮流を覗ふを得べく、捉へて以て全般の目的となすを得べく、發して以てエリザ劇の大成を期することを得べし、然り而して吾人は抑も誰れ人を以てラレイ及びシド子イの地位を占有せしめむとする乎、所謂紳商乎、高利貸乎、蓄妾を得意とし收賄に嫌疑ある大臣乎、獵官に奔走し、變節に酒蛙々々たる政治屋乎、所謂學者乎、所謂宗教家乎、所謂藝者乎、所謂壯士乎、『スパニシ、アルマダ』に聯關せる時代と『クラハム、ヂャンクション』に聯關せる時代の變遷を知了する者、若し一度び四十七士に感泣する時代と拜金主義に狂奔する時代とを歷觀し來れば誰れか隔世の感なからむや、夢幻劇の繰返へしにて事足らば即ち止む、苟くも近世國民劇の興起を望むあらば一般道德的美術的本能の享受すべきチャアムを那邊にか求めざるべからず、近世國民劇の發達せざる理由亦た玆にありて而して新派觀劇連が宜しく盡力すべきところも亦た玆に在り矣、新派觀劇連は識らず何等の好主義を以て其の難問を解釋せむとする乎、旦に群集と共に入り夕に群集と共に散じ、成田屋音羽屋を云々するのみならば吾人は遂に諸氏が觀劇連新設の要を認むること能はざる也。

新派觀劇連は美術的趣味を高尙ならしめて旦つ旺盛ならしめざるべからず、美術的批評を嚴正ならしめて又た目的あらしめざるべからず。

任地、吾人を以て一切事物の破壞を企て、淺薄なる蜉蝣的主義を劇界に推擧するものとなす勿れ、凡そ人生の表彰なるものは人生のうちに存在するものなれば美術は此點に於て嚴密に自然に隨伴せざる

べからず、故に吾人にして近世國民劇をつくらむと欲せば我國民生活に遺傳して生氣あり名譽ある總てのものに聯關せざるべからず、社會の最好分子を取り國民的元素の最も壯健なる最も特性たる部分を拾集して以て之れをつくることを得べし、故に舊劇のうち舞臺の上に幾多の痕跡あるを否定することは能はざるは勿論なれども時勢の變遷と共に形式はおのづから壞滅せられざるを得ざるが故に吾人の劇は吾人の『我』を複寫し吾人現在の生活に拾ひ得べきものを集めて以て近世國民劇を構創するところあらざるべからず、宗教、社會共に消長の時期あり、心情精神未だ曾て例外なるを聞かず、夫れ劇を編むは家を建つるよりも難し、腕に覺えのなきもの未だ曾て大工の職業をとりたることあらざるに會々多少文筆の才を有し田舍新聞に雜報を書きたるのみにて猶ほ且つ作劇を試みる大膽無謀の半狂者鮮少ならず、新派觀劇連が前途の勞力も亦た大なる哉。

羅馬は一日にしてならず、無智にして倨傲なる俳優を屈伏せしめ、狡猾にして射利を事とする座元を納得せしむる豈に容易の事業ならむや、新派觀劇連夫れ徐ろに劃策するところあれ。（三十一、五）

作小說術

小說革新の時機と題して國民的性情の描寫を唱道する近刊の『太陽』記者あり、其意味に稍〻捕捉しがたきところありとなし、快活樂天の國民、尙武任俠の國民、國運を懸念する國民、道義的情緒に富める國民、忠孝義勇の人道を大本となす國民、家系の繼承を重むずる國民に解釋を附して、今日の社會は未だ一定せる國民的新特色を有せざるにあらざるかと疑ひ、論者の言の不妥を難詰せる綱島梁川あり（最近早稻田文學）小說の形式を云々するに對しては小說の實質如何によりて或は雅俗折衷體もふさはしかるべく、或は言文一致體もふさはしかるべし、要するに小說の形式は小說の實質によりて決定せらるゝものなりと說く最近の『新小說』記者あり、我國家が國命を賭して東洋の平和を爭ひしとき、彼等小說家は依然舊に依つて戀愛談を事とし、絕えて愛國義勇を筆にしたるもののあらざりしとて慨嘆せる最近の同誌記者あり、小說は人を描くものなり、人を描くは竟に社會の縮寫たらざるべからずとして今の小說が一半社會に觸れざるを憤慨せる最近の『文藝倶樂部』記者あり、單純なる戀愛を主とせる元より非なり、高潔なる道義を寓する元より佳なりと雖も單調なる現時の小說界を攪醒する手近の策は異を樹て奇を弄し、從來の方面より異なる所に筆端を轉ずるにありとし、現社會の時事的政治的の狀態に觸接し、社會の大處明廣處に存して表現する事實と相觸接し視染せる所のものに主題を採り結構を成すを要すと唱へてしばらく詩美神をして作家腦懷の籠子裡に潛ましめ、社會的狀態に留意せよと勸告せる最近『國民之友』記者あり、觀察の範圍の狹小なるは描寫の範圍の狹小を意味し從つて小說の範圍の狹小なるを意味すとなし猛然として寫實の渦中に突入し來りたる我小說界はかの狹小なる勸善懲惡の範圍を脫せると同時に惜哉他の狹小なる風潮の中に陷りしと斷論して、よしや作家一人々々としては偏狹ならむも、全體に於て漸く多姿多樣終に豐富の文壇たるを致すの希望あれ

と言へる近刊『帝國文學』記者あり。

美術は議論に依り、經驗に依り、觀察點の交換比較に依りて其生命を保持するものなるが故に默々として製作是れ事とする時代猶且つ名譽の時代と稱し得ざるにあらねど吾人は之を以て未だ發達の時代と認むること能はず、凡そ事相に潛勢的認識なくむば決して眞正なる效果を收め得べきものにあらざるなり、辯難や、暗示や、形式化や各家自由に眞摯の態度を以て之を世に與へなば是等は絶えず熟成の方向に進まむと欲せざるはなし、吾人は近時評論に從事せらるゝ人々のうち、曾て一度びは小說著作に從事せられし人々、若しくは今現に執筆せらるゝ人々が相前後して其小說術に關する意見を開陳せられたるに逢遭し自ら喜悅の情禁ずる能はず、漫に題して『作小說術』といふも幾分か是等諸家の高說を拾集せむと欲したれば也。

作小說術は猶ほ夫れ作繪畫術に於けるが如きか、兩者の感興相同じく、兩者の徑路相同じく、兩者の收果亦た相同じ、彼是亦た互に相說明することを得べし、從來我國に於りて繪畫を蔑視せるものなかりしに關せず、其同胞たる小說を以て恰かも婦女小兒の伴侶の如くに見下したる餘弊今猶ほ現存するものから、其迷想を打破せむ爲めには吾人は力めて繪畫の現實なるが如く小說の歷史なることを說かざるべからず、小說の材料は到るところの記錄に滿載せらるゝ作家之を說くにあたりては恰かも歷史家の如き口調を以て正確に之を說かざるべからず、唯だ小說家は歷史家よりも其與へたる前提に依りて眞理を思索するにあたり、比較的に束縛せられざるなり、過去の事相、人間の行爲を描寫し說明するは小說家歷史家共に同うして唯だ小說家の前進すると共に其材料證據を蒐集する困難を多く感じ、茲に至りて渠は畫家なると共に哲學家となり、以て其性格に一段の光彩を放つに至らむ。

小說の一般性はさておきつゝ、悲慘小說、不健全小說、觀念小說等の呼び聲より近く光明小說を歡迎する呼び聲に至る迄の徑路を傍觀すれば讀者及び評者は多少良好なる小說を希望するやの觀あり、曰く性格に德行ありて向上的精神を有せざるべからず、曰はく收結は幸福ならざるべからず、曰はく事件の行動變化に滿ちて迂餘曲折の面白味あらざるべからず、想ふに其聲や種々にして其良好と稱するもの亦た多樣なるや敢て疑を容れざれども吾人私かに信ず、渠等は必ずや口を揃へて其人工的ならざるを希ふべしと、是れ實に斯くあらざるべからず、吾人は斯の點に關しては執拗く一派の評者に反抗せむと欲する也、實にや小說の收結と稱するものは恰かも果熟しておのづから落つるが如く決して器械的に流るべからず、既に一篇の作物と見做す以上は如何んぞ斯くあらざるべからずとの注文を爲し得むや、人生を再現すべき美術の健全には全然自由行動を許さゞるべからず、唯だ吾人の作家に注文し得べき箇條は讀者をして興味を感せしむるところにあり、顧ふに讀者をして興味を感せしむるてふ方法は實に夥たゞしく、人の氣分の異なるが如くに數多あらざるべからざるが故に、其うち最も成效あ

るは各個特殊性を描寫するに正比例すべし、小説を嚴廣義に解釋すれば個人的也、生活の直接的刺觸也、故に刺觸の強度如何に由りて其價値を定むべし、而して感ずるところ言ふところに自由行動なくむば如何んぞ強度あることを得むや、行くべきの筆路を與へ、取るべきの音色を與へ、充すべきの形式を與へなば是れぞ洵に自由を束縛するものと謂ふべけれ、吾人の所見を以てすれば事實ありて後形式を得らるべし、斯くて既に作者の選擇は得られ、作者の標準は立てられたれば筆路を追ひ方向を定め音色を比較することを得べし、運筆一に作家の爲すところ、經驗、勞力、發明、成効、一に他人の掣肘するところなからしめむ。

小説に上ぼすべき性格境遇は恰かも日常逢遭し得るが如きものを視るを欲すと說く評者あり、然り、是れ最も吾人に刺觸を與ふるものならむ、然れども現實の程度を定むるは頗る難事にあらずや、現實の意味を解せずむば作小説術に於て缺くるところありとするは可、而かも吾人は如何にして此意味を生かして使用し得べき乎、人道は無限也、現實の形態は無數也。

一に經驗二に經驗としきりに經驗を主張して經驗ならずむば執筆すべからざるが如く說く作家あり、是れ將た捕捉する所なき論といふべし、經驗は無限にして飽和さることなし、抑も吾人は如何なる經驗を拾ひて何處に始め何處に終はるべき乎、彼の天才に見るが如くに恰かも意識と稱する室內に張れる絹糸の蛛網が空中の小蟲を捕へて全部に徵震を傳ふるに似て想像甚だ豐富なるものは生活の最小なる暗示によりて猶ほ且つ天啓を示すに至る、既知を以て未知を推し、一班を知りて全豹を覗ふ力こそ能く經驗を構成すべき原動なれ、經驗既に刺觸より來るを知らば刺觸即ち經驗といふに何人か喙を容れむや。

或は精細に缺くるを以て唯一の攻撃點となし、殊に其社會に固有なる言語じりの間違、流行の遲速等の小點中の小點若干に依憑して非難を事とする評者あり、然り、現實は小説の骨なれば精巧の觀察最も喜ぶべしとなす、日常手帳を携へて見聞錄をつくる小説作家など吾人の往々逢遭するところ也、然れども吾人は私かに其滿足なる結果を容易に得べからずと信ずるもの也、あらゆる生活は作家を刺觸す、最短の幻想を生ずるだも頗る複雜せる事業なれば作家終身の事業とすべきものにして未だ如何なる事を記錄すべきやにつきては何人も公言し得ざるべし、是れ實に作家評家の豫め知了されんことを希ふ點也。

性格を喋々して事件を輕視するは少くとも近時評界の通弊となす、彼の性格と事件とを區分して見るは吾人の甚だしく怪訝に堪えざるところ也、抑も事件の制約を外にして性格ありや、性格の表彰を外にして事件ありや、假令ば高樓に吾妻琴を彈ずる美人ありとせよ、是れ實に事件也、而かも同時に其性格の表彰也、されば評家は性格發展の徑路を見ると共に勤嚴以て作家の與へたる事件の如何を量らざるべからず。

讀者嗜好の千態萬種なるを楯として小言をならぶる作家あり、勿論讀者の數多あることゝて或は冒險譚を好むものあるべく、或は仇討を好むものあるべく、或は戀愛一點張りを好むものあるべく、或は圓滿なる家庭小說を好むものあるべし、然れども吾人は信ずらく凡そ人としては何人も必ず好まざるを得ざるもの又た好む樣にせられうる或物ありと、斯は大小說家が社會のあらゆる方面を通じて敵も味方も一讀を禁じ得ざる程の聲名を博せる跡を見なばヤ、推察し得らるべし、其果して何物なるかは吾人の知るところにあらず、彼は經驗ある作家の自ら動機によりて選擇するところなるべし、人は生活を感ずるが故に最も密接に生活に關係ある美術を好むべし、茲に所謂密接の關係なるものは作家の忘るべからざるところとなす。

撰擇に容喙して醜のもの不快のものを排去すべしと說くあり、敢て記せよ、美術の範圍はあらゆる生活也、あらゆる感情也、あらゆる觀察也、あらゆる空想也、或は意識ある道德的目的を喋々するものあり、既に之を小說界に入れむとすれば頗る危險となる、只吾人は美術的意義と道德的意義と非常に密接の關係あるのみならず、美術最奥の性質は創作者の心情の性質なるを知れるものから上乘なる小說が決して輕浮なる心情に生れざるを說くを以て足れりとなす、眞摯なれ、是れ最後に絕叫すべきところ、徒らに厭世樂天の語を弄するなかれ、又た是れにつきて考ふるなかれ、唯だ〳〵人生の音色を捕へよ。

鐵鎖を斷てる新體詩人

景に觸れて情を生じ、事に因りて意を起し、眼前の景は口頭の語、人程坦易の境に筆を着けて、よく人の肺腑に泌ましむる如き新體詩人もおはすぞかし。

後ろは濃飛の山つゞき、前に瞰ろす大海原、千秋萬古結むで溶けぬ白皚々たる氷雪の上に動くは吾れと吾が影ばかり、時は今、珠玉を散り布く星明かりに問はゞ答へむ北斗に面して素懷を抒ぶる喜ばしさよ、禽の鳴かぬ良し、獸の走らぬ良し、語る人なき更らに良し、聽かば必ずや禽も獸も人も驚きて氣死せやせむ。

願くは渠をして唯だ一人あらしめむ、由來凡俗大人を解せず、骸を學びて髓を忘れ、影を捉へて形を逸し、遊惰の民を繁殖せしめて社會に及ぼす害毒擧げて數ふべからず、歌ふは是れ本能の命令、歌ふ人は是れ運命の作りしところ、奈何ぞ歌集を弄びて娛樂半分に駄句を捻ねる隱居輩の爲し得るところならむや、自然の性癖は既に既に常道を離れ正路を捨て、瓢々流れに漂ふが如く復た吾人の觀察點に依りて渠が行爲を裁判するの權能なし、數授ダウデン曾て一大詩人が生理的性質の如何に矛盾に滿々たるかを記述して謂へらく、其聲低く語るときは振ひつく程うるはしけれども一度び其聲を高くするや嫌やになる迄不整調也、輕快の行爲に魯鈍の所作を混じ、華やかなる毛氈敷きつめたる踐み心地よき階段に吾れと躓きて其鼻端を傷くることあるかと思へば、山なす群集を掻き分けて些少の衝突だも

なく、滑るが如くいとも巧みに而かも確かに最も危き路を行くに躊躇せずと、極端の道徳的威嚴と極端の自憑絶無と相抱合し、慈悲の熱涙を濺ぐべきところに却つて激怒して口角沫を飛ばし、感情純潔の名高きと共に世界に於て最も不自然なる最も嫌忌すべき問題を咏ずるに極力毫も倦まず、戀愛の詩人、友誼の鼓吹者が戀愛に於て友誼に於て最も驚くべき無節操者なりせば是れ豈に理窟に於て到底說明し得べからざる奇蹟、少くとも吾人凡夫の常識を以てしては到底宣告を下し得べからざる事件にあらずや、而かも其詩歌を讀み來れば恰かも天の與へたる神酒の如く、吾人に生命を附與し、吾人を慰藉し、吾人を躍働せしめ吾人に活氣あらしめ、人道を理解せしめ、義務制裁を悟了せしめ、凡ての點に於て眞ことの人たらしめむとす、小學仲間の一小女子を人に取られたりとてシク〳〵嗚咽する新體詩人は遂に吾人の伴侶にあらず、囀づる鳥、匂ふ花に對して獨り風流韻事を解せりと氣取る歌人は遂に吾人の仲間にあらず、雲雀を聽かば向上的精神の焰と觀せよ、野花を觀なば天外靈氣の片身と想へ、個人的にあらゆる矛盾を包合するも人間世界に躍々たる生氣を皷吹する渠——願くは渠をして唯だ一人あらしめよ、而して二人あらしむるなかれ、而して五月雨的の盲動世界に願くば一道の光明あらしめよ。

願くは渠をして宇宙の神秘なるが如くに全體として渠の詩を神秘ならしめ、部分に於て美情の點綴あらしめむ、驚愕の叫聲、願望の叫聲、失望の叫聲、喜悅の叫聲をして九天に轟き渡らしめ凄じく九地に返響せしめむ願くば渠の詩をして憤悅の詩たらしめむ、homodesideriorum　永久に渴し永久に喘ぎ永久に喜悅を思索して永久に煩悶す、無限的願望の表白は詩界に濶歩するヘラクリトスの獨り恣にするところ、誰れか斯の世に完全なる幸福を懷ろに收め得むや。

願くば渠をして情緒的願望者たるのみならず又た實に智識的願望者たらしめむ、敢て一般人間の願望と言はず、脈々を通じて新鮮なる生命の如くに躍り狂ふ青春の喜悅を追ひ、宇宙を以て永遠に鼓動するものと觀じアアノルドの所謂『抒情的喚呼』を創構せむとす、智識的願望の結果、情極まりて『吾れは喘き、吾れは沈み、吾れは震え、吾れは死ぬ』と長叫し、感するところを歌ふ蛙たらずして感せむと欲するところを歌ふ人となる、渠の眼には火光あり、渠の腦には幻想あり、渠の血には熱病あり、渠の言には顫動あり、得れば爽絶、得ずむば恐怖、誰れかノオマルに天職ありといふや。

願くば渠の戀歌をして人格以外に擺脫したる熱情を追究するものたらしめむ、兩性の差別とは何ぞや、心々間に墻壁ありや、吾等は同じものとなり兩軀のなかに一心とならむ、二つ心の一つ情、假令ば光り據がる二隕星の如くに觸れて雜りて形ちを更へて斷えず燃えて毫も衰へず、二つ思ひの一つ望み、一生、一死、一無窮、一眞如、未だ戀愛の資格如何を驗するの暇だにあらず。

願くば渠をして總ての美の直接に吾等の身に泌み込むこと猶ほ乾ける地に雨露の浸入するが如しとの想を有たしめむ、願くば渠をして美を世界のうちより抽象せしめ、敢て世界の上に之れをインプレッス

せしむるとあらざらしめむ、願くば渠の理想世界をして樂の調べと月の光りと人の想ひと一つになりて王冠未た之を償ふと能はざるところならしめむ、一言以て鐵案を下さば願くば百の歌人的新體詩人を撲滅してせめて吾が瞑目する迄に新體的新體詩人のエ、ピイスの其一端だも見せしめよ。(三十一、六)

カアライルの所說と我現代と

ダムフリイスシャアの靜閑なるかたほとりに苺苔石に青くして墓木既に拱に過ぐ、想ふに今にして其眞價を批判し其經世家にあらざる歟否歟を問はるゝは渠の豫期せしところにあらざるべし。

渠が名譽となり光榮となりて永久に歷史を修飾する點は渠親ら口にせる所謂機械的時代の諸傾向に正反して人間精神の動力的優勢を主張したる熱誠にありき、昔は斯く批判して渠を迎へ今は亦た斯く批判して渠を迎へむのみ、浩瀚なる渠の諸作を貫流するところは即ち是れ近世科學の物質的傾向に反抗して毒づける宣戰と同じかるべく、人間の精神的威嚴と義務とを確認せる公開狀と見做すべし、渠の唇を衝いて迸流するところは社會を腐蝕すべき賤劣なる動機と情慾とを痛罵せる恰好の瀑布而已、渠は人生に於て高傑とし、英俊とし、義務とし、眞實とせる優勢を仰望して以て其誠意を捧げつれども斯かる思想の態度は奇怪偏僻にして而かも頗る修辭的なる文字に表彰せられて剩さへ北田舍の地方語もて浮彫せられたれば人の所謂神秘的寧ろ豫言者的狀貌を渠に與へにき、されば其當時にありて次第に靑年間に感化勢力を及ぼし著作漸く名高く、渠の勢力亦た書

籍以外に擴がりければ渠は恐らく世界に對して獨創の眞理若しくは新裝せる舊眞理を貢獻したりと思ひつらむ、而して是れ果して何物なりし乎。

カアライルの信仰敎訓を蒐集して其最佳のものを拾收するも吾人は決して獨創のもの、嶄新のものを發見すること能はず、姿を更へ形ちを革めて幾度となく繰返へさるゝ所說は詮ずるところ今や將さに生活界に足を入れむとしたる一靑年作家に與へたる渠の下の數句に止まる而已。

"Remember now and always that life is no idle dreams, but a solemn reality, based upon Eternity, and encompassed by Eternity. Find out your task: stand to it: the night cometh when no man can work."

渠が其當時に於て與へたる效果と稱するものは實は斯の片言隻語に過ぎず、しかも決して無益に與へられざりし也、又た與へられざる也。

誇大、偏僻、矛盾、無學、是等總てを包括して猶ほ且つ讀者を惹引する魔力は其斷的筆法にあり、天才は到るところに湧くも渠の崇拜せるギョオテとは全く正反對にして圓滿と完全と司配との缺亡を示さざるはなし、其心的組織に破綻ある、其論理能力に缺如たる、其動搖せる情操の一波又一波の觀ある、其數句のうちに大なる矛盾ある、僅かに其性格に固有なる大潮流の爲めに所言の滅裂を防ぐが如き渠よりして何人か能く冷淡なる頭のすなる經世的劃策を望むべき、其文字の如きもヤン、パウルの惡獨逸文を手本として更らに數等下れる惡英文になせる何人か之を學ばむとすべき、其宗敎に關する眞意に到りても殆んど那邊に存するかを覗ひ知り得ざらしめ、僅かに世の憫むべき蠢爾たる人間を瞰

下して其眞摯なる宗教的部分にのみ情を同うして其他のものに痛烈なる嘲罵を亂下したるを見る而已、勢ひ既に斯の如くなりしかば渠は社會的分子の總ての傾向に對して斷えず戰爭を繼續したり、曰く、あらゆる英雄氣象は十七世紀の淸敎徒と共に全く英國を去れり、法律は欺騙なり、輿論代表の聲は不條理なる謬見なり、人民は愚物の群集也、人間社會を司配すべき眞人は至上權を掌握して之を把持する威力と敏腕を有する專制君主也、奴隷制度は自然のもの也と、凡そ斯の如き所說は渠の文字に現はれ若しくは文字以外に推測せられ得べきもの、明らかに自由の精神を束縛し、人道の活潑なる同情に反對し、弱者幼者の獨立的言論を亡みするものなれば、吾人は實に英國に於て自由說を有する人士が猶ほ且つマンデヴイルよりも殘忍にホツブスよりも暴惡なる所說を何故に熱心に傾聽したるかを怪しむと共に、又た我現代に於ても斯かる所說を輸入し繁殖せしむる要を認むること能はず、カアライルの政見を以てせばビスマルク・ガムベツタの政府を再建するものにあらずや。

一方に於て斯の如き極端なる專制主義、至上權所有說を主張すると同時に他方に於ては又た極端なる破壞說を以てしたり、渠に若し哲學と名づくべきものあらば是れ根本的に破壞主義の一變態哲學のみ、されど人若し渠を捕へて其破壞し了はりたる上に何物をか築くべきと問ふあらば渠は恐らくは英雄的暴君たるクロムウエルの如き、否な一步を進めてロベスピイルの如きをさへ推擧するに躊躇せざるならむ、見よ渠が英雄的人道として撰める模型は眞正の自由、非利己なる義務

さては人類博愛を亡みする宣敎師なるを、渠は恰かも道德的意識に皆無なるかの如くにフレデリツキ、ウヰリアムをさへ嘆美しかねまじき人也、吾人は實にカアライル自身が果して自己の矛盾說を信ぜしか否かをさへ疑はざるを得ず、而かも當時にありて世の與へたる諡娟は益々渠の缺點を助長し、渠が痛罵せる缺點を自己に集めて而して自己之を辨知せざるに至りぬ。

自己以外社會に關せる渠の智識の缺亡は更らに驚くべきなり、隱者的生活を龍動に送れる渠は自己の不消化に歸因せる忘想を以て實在世界を誤解し、其住へる邦土、其住へる時代に對して下せる評語は多くは外的知覺の虛脫を疑はしむ、又た更らに驚くべきは科學を知らず、音樂を捨て繪書を愚と喇けりしことなり、素より其幼時の生活及び敎育が斯くなさしめしとは謂へ、吾人の到底是れを看過すること能はざるものにあらずや、斯く描き來らば略ぼカアライルの何人なるかを覗ひ知るべく、隨つて其經世家たるや否やをも推測し得べき也、吾人の寡聞なるカアライル死後未だ曾て渠に與ふるに經世家の名稱を以てせしを知らず、英文學者たる晩翠にして豈斯かる所感を生ずるの理由あらむや、想ふに其偶々英雄論を飜譯せる原因は別にあるべくして而して其うちの一は必ずや吾人の後に陳述するカアライルの光榮たり名譽たる偉を傳へたるにありと信ず、吁嗟明治維新後三十年の物質的拜金的現世的傾向は優勢に對する精神界憫怳の氣魄を要せずといふ乎、ドン栗の丈競べする小人島にありては眞偉人（カアライルの夫れならずとも）のデモニツク、インフルエンスに吾が人格を增進するの要なしとする乎、

虚欺を叱咤するの鞭、是れ果して現時に揮ふを要せざる乎、眞摯を唱道するの聲、是れ果して今日に聽くを要せざる乎、人は力作せずむばパンを食ふの權利なし、嗚呼是れ抑も吾が現代に最も痛切なる警句にあらずや。

凡て歴史上に於ける巨人の言行所説を其儘悉く手本とすべきことはあり得べからざることにして又た爲し得べきことにあらず、吾人が曾て述べたる如くあらゆる先人の特色を吟味して其長ずるところを玆に集め以て自己といへる人間の爲めになすところあれと言へるは蓋し此理由あればなり、既に一人を以て圓滿なるものにあらずとせば一特色を有するもの猶ほ且つ社會に要あるにあらずや、我が現代にありて小カアライルを以て自ら居るものあるは頗る人意を強ふするに足る。（三十一、七）

文士品性問題に關する管見

『文壇照魔鏡』となむ名告る不思議の讀み物を筆頭にして引續き二三同種類の新刊を以てすべしと謂へば、文壇はしばらく斯の苦々しき問題に就きて時ならぬ花を唉かすべくもや、昔者以太利亞のフェルレロ當時の醜穢なる文藝を目撃して親ら慰むるやう、斯の種類の惡德や必ずしも善德を隨伴せざることなきにしもあらず、何となれば醜穢なる文筆は安全辯の如く溢流の如く作家と稱する個性の非常道的傾向を未前に防止すべければ也、然らずむば斯の傾向は一轉して恐るべき行爲と變形せむと、あはれ『照魔鏡』中の被難者は誤まつて玆に孺子をして名を爲さしめむとするにあらざる乎、吾れ筆執るも懶げなれども他と稍々説を同うせざる節もあれば敢て餘白に二三の管見を附記して以て大方識者の高教を仰ぐことゝなしぬ、程を發せむとして始づ一言の止むべからざるものあり、謂ふ、特殊問題は須らく一般問題となすの優れるに若かずと、蓋し正鵠を失せざらむが爲めには總ての例に於けるが如く彼れは頗る周到謹愼なる究明を須つべきものあれば也。

第一、斯の問題を社交道德方面に於てせむに、醜奴あり、斬つて野を淨めざるべからずとなし、鐵槌亂下、世の所謂素破抜なる活劇を演ずるは、言や壯、理や嘉すべきものありと雖も實に於て或は缺くることなきにあらざる乎、始め起るは被難者が材料の有無問題也、一犬虚を吠へて萬犬しば〳〵實を傳ふることなきにあらず、不幸にして探究の後其正確を認むとせば、次に起るは罪惡の輕重問題也、刑法に接觸するもの、せざるもの、敗德の甚だしきもの、否らざるもの等、大小緩急に依りて又た勸懲の大小緩急あるべし、更らに起るは難者の執るべき方法問題也、一滴の涙時に萬人を動かすの力あり、勸懲盡く是れ勵聲叱咤の收むる效果のみならじ、四たび起るは難者の動機問題也、神社佛閣を楯として自己の懷を温むる者あるが如く、世上往々社交道德を楯として自己の私怨を漏らすものあり、良し、假りに上述の悲觀を一切排去して以て素破抜の止むべからざるものありとせむに、猶ほ素破抜と稱する異常手段の効を奏すべきは極めて特殊の塲合たるを信じて疑はず、難者が動機の純潔尚ほ未だし、名望極めて廣且大ならずむは人は白眼空過せむ、被難者が悔恨の情操尚ほ未だし、意志極めて

強健ならずむば絶望の極却つてあらぬ罪過を釀すに至らむ、更らに加ふるに對動者たる社會が恭敬にして眞摯ならずんば好奇心の滿足に止まずして或は時に榮譽の如く過信するに至る、現今新聞の三面記事は寫して以て這般の消息を傳ふるに足らざる乎、素破抜の實際的價値は未だ容易に首肯し得ざる也。

第二、斯の問題を社交及び詩文の交叉方面に於てせむに、別言すれば詩人文士の個人として社會に關係する方面に於てせむに、廣義に解する道德の問題は文學雜誌の嘴を容るべき限りにあらねど、世上一般に所謂道德なる者の小乘的消極的なるを以てせば或種の道德には詩人文士頗る缺くギョオテ・バイロン・シェレイ等は言ふに及ばず名ある詩人文士の傳記逸話は頻々豐富なる材料を供給して維れ日も足らざらむとす、吾れ素よりノルダウの過激なる斷論を贊するものにあらずと雖もリヴォオが第一學說として揭げたる作物の美的優秀は作家が心身の不健全（不健全即ち不道德の意義に非ず）と相俟つにあらずやと想はしむること數々也、ヒルシを繙きハルシを披き心理學上作家の然るべき理由をも探知するに難からず、絶大の政治家たり科學者たらむものは飽く迄知意の剛健を必要とす、誰れか是れを詩人文士に望まむとはする、詩文界に於て最終階段とも謂ふべき人間が遊戲衝動の滿足を買ひ得なば、個人として詩人文士が陷り易き或種の道德には、世人は或る程度迄之れを堪忍すべき理由なからずや、若し夫れ行爲圓滿なるものにあらざれば作物の上乘得て望むべからずと謂はゞ管見素より許すべきにあらねど、理論上及事實上、學者は未だ兩者の根本的必至的關係を認むること能はずと言へり。

第三、斯の問題を詩文の方面に於てせむに、總て强烈なる寫象は必ず客觀化せられざるべからざる性質を有す、之れに達するに二法あり、一は衆人に見るが如く通常の行爲と變ずるものにして他は詩人文士に見るが如く創作の空想となりて了るもの也、後者を筆にしたるもの即ち是れ詩歌文章也、詩歌文章は詩文界を構成す、猶ほ識域以上に出でざるものが必的現象にあらざるが如く變態して詩文とならざれば嚴密の意義に於て詩文界の材料となること能はざる也、艷なる花、其咲くところ朽木たること能はざる也、美なる詩文、其憑るところ敗德詩人たること高德詩人たることを論ぜず、批評家は詩文を批する而已、鑑賞家は詩文を讀む而已、世上往々詩文と作家を混淆する者あり、彼の詩文が與ふる清澄なる直下の刺觸を亂すに投石を以てして過擧過貶と稱する仇浪を生ずるの愚、吾れは遂に與みすること能はざる也。

（三十四、四）

詩文界の病理を論ず

Dein paviu—Wiarow.

一

書架に列なる詩聖の錦綉を睨して、巢鴨の怨嗟風に亂るゝを聞かずやと一呵しかねまじかりしは、吾

が興に任せてロムブロゾオの天才論を摘譯せし頃なりき。されば讀者は吾が所言を訝る勿れ。透、湖の欝症は言はずもあれ紅、露、柳、鏡の小說家、あるは梅、藤、晩、泣の新體詩人は少くとも宵々毎の惡夢に襲れたる囈語を以てするものと信じたることありしを。斯の念今尙吾が頭に宿るや、宿らずや。卷首にプラトオンが歌人の嚴かなる物狂ひを標榜として、姑らく吾が眇たる研鑽の徑路を辿らむと欲すれども、素より醫博士の門をも叩かず、將た心理の典籍をも獵渉したることなければ、自ら疑ひて自ら釋けざる箇所多く、スフィンクスの謎語依然として吾が手に在り、されど結論抑も何の要ぞ、所思を描きて遺りなくば痞を愈やしてまた遺りなきにあらずや、古德謂ふ、人悶ゆるうちは誤ると Es irrt der Mensch, so lang er strebt.

二

病理學上、肉體に與ふる疾病は、通常態の現象と根本的に相異なれる現象に與ふる名稱にあらずして、健全に異常を生ぜる時、別言すれば健康なる條件が或は增進昂揚し、或は衰退減少する時に與ふる名稱なるが故に、準繩を否し、偏向を指し、相對の語にして絕對の語にあらざるは言ふ迄もなし、心理に於ても亦た同一の意義を以てせざるべからずとせば、病理學上詩文界に疾病の名稱を與ふべき現象は抑も〳〵如何なるものなるべき。

ノルダウは謂ふ、藝術とは健全の偏向したるもの也と。斯の定義を祖述して立言せば、藝術のうちの詩文は健全の偏向したるもの也、則ち詩文是れ疾病也との斷案に歸するを得べく、主として情の活働より生ずる一切の詩文は盡く是れ病的作物也、健全なる心意は詩文と名づくべきものを作することなしとの意味となるべし、是れノルダウの公言して憚らざるところ。所說一見頗る奇なるが如けれども、未だ其理由なきにあらねば、吾は之を默々に附して敢て讀者をして空しく疑惑の裡に彷徨するの愚をなさしめざるべし、言ふ迄もなく玆に云ふ詩文は文筆と稱する材料に依憑せる美的活働なれば、美其ものを唯一の中心とすべきものにして、辭達するも未だ止むべからず、思ひ邪なくも未だ足れりとすべからざる也。時文壇の所謂美文韻文まづは是れ乎。偖人間が心意の健全を以て古代哲學者の所謂清淨（ataraxia）の意味なりとすれば、詩文を作するの快詩文を味ふの快、孰れも健全なる心意と兩立し得べき性質のものにあらず。這般の心狀譬はゞ秋隄に連なる野池の趣きありと言はむ乎。漣漪の娟灕時々無きにしもあらざらむ。唯だ夫れ逆浪はなく、奔濤はなく多くは是れ沒趣味なる散文的靜平に始終せざること稀れ也。詩文の潮流豈に玆に運行せむや。而かも一たび着眼點を玆に存せば、情緒一切健全より偏向せるものなりと言ひ得べく、人間全く是れ道理的動物也と言ふに庶幾かるべく、しばらく智識派等の理想に從つて、人間須らく斯くあらざるべからずとするも、實際に於て通常大多數の人間が情熱の簸搖する所となりて、或は撞着し、或は錯誤し、或は矛盾するを目睹しながら、是れ偏向也疾病也と斷ずる、寧ろ酷に失せずや。夫れ一尺も偏向也、一厘も偏向也。健全の範圍、偏向の意

義如何に依りては、ノルダウの所言素より非難すべくもあらねども、然れども、吾れは情の性質より打算して別に意見を構成せむことを望む。乞ふ、再たび歸へりて醫家の實際に用ゆる不健全の範圍を調査せしめよ。

三

榊醫學士が『教育公報』第二百四十八號に載せたる『兒童の精神缺點』と題せる講演に於て、ストリュンペル、及びショルツが精神病理學に用ゆる不健全――學士の所謂癖――の意義を略ぼ忖度することを得べし。分つて三十三癖となしたる兒童の精神缺點を祖述するに當り、學士は大概ね極端若しくは極端に近き語句を以て修飾せり。感情の條下に於て、曰く大變に鋭ひ子供、曰く何を聞いても恐ろしがる子供、曰く極く活潑――活潑過ぎる子供、曰く一向感覺のない子供、曰く感じが餘り有り過ぎる子供曰く何、曰く何、盡く是れ激甚なる消極的及び積極的の文字にあらざるはなし。既に前條にも陳せるが如く、健全、不健全の間には道傍の分岐點に立つて左右を指示する木標の如きものなく、其間に無數の連續的階段を經由するが故に、從つて紛擾を招ねくこと數々也と雖も、情其ものを認め、情其ものゝ活働を解するものは、情其ものゝうちに於て通常逢遭し得られざる極端なる現象を執つて疾病と稱するの優れるに若かざるを覺ゆ。例を擧げて之れを解說せむ乎。醫家の眼よりして均しく健全なる通常の人也。偶々其父兄姉妹の逝去する者ありて、悲哀の情誘起せらるゝとせむに、甲は道理を以て抑壓すること強きが故に悲哀の情に堪ふべく、乙は道理を以て抑壓すること弱きが故に悲哀の情に堪ふべからず。其程度の大小廣狹は如何にあれ、健全なる人は通常必ず斯かる悲哀を經驗す。其全く經驗せざる場合は通常逢遭し得べからざる極端の現象なれば、病徵として取扱ふべき也。無感症（anaesthesia）即ち是れ。されば眞正に症と命名すべき病的現象迄に無數の階段あるべければ、之れを擬似と言はむも、之れを準と言はむも、將たまた是れを病的傾向と言はむも、そは人々の任意なれども、鈍感は無感症に非ざることを記憶せざるべからず、或はまた同一の悲哀が僅少細瑣なる原因に起由して人の通常理解し得られざる程に感觸するあり。例せば空模樣の良からざる爲めに己れが企圖の實行し得られざる場合、若しくは衣服の新調を父兄に拒絶せらるゝ場合に、流涕號泣するは兒童に有り勝ちの現象なれども、大人には通常逢遭し得られざる現象に屬す。名けて極感症（hyperaesthesia）と云ふ。烈嚴なる感情の類也。されば多感は極感症に非ざることを記憶せがるべからず。或はまた外界に何等の緣由なくして、內界の狀勢より甚だしき憂愁に沈淪するあり。鬱症（melancholia）即ち是れ也。されば憂鬱は鬱症に非ざることを記憶せざるべからず。斯の如く悲しき方面を觀察すれば、外界に於ける大原因に感觸全然缺亡するもの其一に居り、外界に於ける小原因に感觸過大に失するもの其二に居り、外界に原因なくして內界の原因より憂愁に沈淪するもの其三に居る。嬉れしきときにも亦た同一のことあり。但し此場合にありては鬱症に對する躁症（mania）を生ずべし。怒る情、恐る

ゝ情亦た同じかるべく、觀念界の聯想記臆等亦た吾が研鑽を容るゝに難からず。偖上述の如く不健全の意味を大なる偏向、通常あり得べからざる偏向と解しなば、詩文是れ疾病の所説を排して、詩文のうちに疾病を覓めざるべからず。何となれば詩文に依憑する美的活動は優視したる情の作物とするも、通常人より數段高き情調こそあれ、通常人として逢遭し得られざる情にはあらざれば也。兎にも角にも詩文のうちに疾病を談ずることの可能なるを說了し得たりと信ず。唯だ夫れ詩文界の作物其ものに就きて吾が研鑽の對象を覓め得べきや否や。是れ次に起るべき問題なりとす。

四

審美に於ては吾れはヘドニックスの立脚地を賛する者の一人也。故にマアシャルの如く、天然に於て、若しくは人間の活動或は作物に於て、吾れ人、回想して快の結果を與ふるものを美となし、之れに反する結果を與ふるものを醜となし未だ茫漠の觀を免れざる彼の所謂消極的審美標準と積極的審美標準とを左券として、美に屬するもの盡く是れ健全にして、醜に屬するもの盡く是れ疾病也、若しくは病的傾向也と斷せむ乎。到底是れ不可能也とは吾れ信ずること能はず。永き未來に於て、大なる學者は必ず指を此間に染むる者あるべきを疑はざる也。されど試みに想へ、審美學の朦朧たる、心理學の幼稚なる、現代に於て、何等絶大の評家が能く斯の任を完ふし得べしとはするぞ。評家の缺くべからざる資格として、敎育は吾れ未だ周到ならざる也。眼界は吾れ未だ濶大ならざる也。同情は吾れ未だ洽ならざる也。而かも一方に於ては『醜の美學』のロオゼンクランッさへあり。私かに想ふ、現代の學界にありては、詩文其ものを對象とするの困難を避けて、詩文の本原にかへり、詩文の門より詩人の堂に上り、作者としての詩人が心理活動の因子を取りて、殊に其顯著なる疾病及び病的傾向を見るの或は程々容易なるに庶幾からずやと。別言すれば審美學の疾病を談せずして審美學と聯關して詩人の心理學及び病理學を以てするを可とせずやと。いで〳〵吾れまづ詩人の心理を覗はむ。

五

哲人の智識を優視するが如く、信者の意志を優視するが如く、詩人は感情を優視するが故に、吾れは姑らく感情の二字を借來りて以て吾が上文の骨子となしぬ。然れども翻つて想ふ、作家としての詩人が心理解剖をなさんと欲せば、情其ものにのみ止まること能はずして、勢ひ詩人が創作に於ける心的要素を個々抽象的に列擧せざるを得ざるべき也。そが根本的要素と信ずべきもの、略ぼ次の如けんか。

ヴント所謂らく、充分なる或る觀念に始まりて活動する諸觀念を其儘に放置する時は空想は受働的となるべく、生じたる諸觀念が意志の留心するところとなりて一新全體を作る時は空想は能働的となるべしと。兩者の間に截然たる區劃線を與ふること能はずして把住せられ、今尚ほ遺れる寫象が茲に再たび喚呼せられて、配臆のうちに離反聯合して以て思想の

進行を構成するに當り、寫象（觀念）の連續が最強度より最弱度に至る間のあらゆる階程の意志の作用を受くるものと見做して差支なきも、議論の便宜上、明らさまに意志の活働する能働的空想は有意的思考法と命名すべく、反之、明らさまに唯だ聯想に依憑する受働的空想は無意的思考法と命名し得可し。無意的思考法の場合とても意志全然缺如たるにあらずして、空想の一部分となりて受働的に活働し調和せる全局を構成せむが爲めに思想の惑亂を誘起するの恐れあるものを排除する迄の活働を爲すに過ぎず。意志大に弱くんば、調和せる全局を構成すること頗る難く、全く無くんば、荒唐不稽の夢をやつくらん。夢魘、夢に似て夢よりも明らけく、現魘うつゝに似て現よりも朧ろ也。正さに是れ陸放翁の最も快とする半覺半睡の間、ショオペンハウエルの所謂吾が双手の下に何物か生じつゝあり、吾れ勞せずして唯だ筆もて寫しつゝあるのみと言へる時（フラウエンスタットのメモラビリイエン二百四十四頁）、クロップストックが夢心地のうちに數多の詩歌を得たりといふ語、コオルリッヂが『クウブラ、カアン』の首めに親ら書して、外觀丈にても三時間あまり眠りたるうちに二三百行以内にては決して創作し得ざるべしとの確信生じたりと云へること（クラウエル版コオルリッヂ詩集二百〇七頁）は、玆に謂ふ受働的空想の狀態を表白したるもの也。斯の心的狀態や、何人にもあり、詩人のみ專ら有するにはあらず。晝間恍惚たる所謂晝夢是れ也。唯だ夫れ常人や、寫象多くは朦朧たり、詩趣寧ろ索然たり、詩人や然らず、精細也、明晰也、豐富也。譬はゞ彼の七色眼鏡の如きは、最も這般の光景を描くに庶幾からむ乎。覺官に與へられたる刺戟が寫象となりて再現し、空想のうちに幾多の化成を創むるに當りて、寫象と謂ふ玻璃の片々愈々微細にして其數愈々多ならば、構成せらるゝ花模樣は愈々清新にして愈々豐富也。反之玻璃の片々愈々粗大にして其數愈々貧小ならば、構成せらるゝ花模樣は愈々單調無趣味也。色彩鮮やかに裝態精微なる無數の新型を作るは、夫れ唯だ獨り詩人の專らにするところ乎。兩者の差違の質にあらずして量にある心的過程に過ぎざれども、常人は遂に企及ぶべからざる也。是に於て、詩人に缺くべからざる心理活働の因子、第一無意的思考法を得たり。

さらば有意的思考法、即ち意志を以て觀念を連續する空想、詳言すれば或る目的を心中に描きて、記臆中の寫象を撰擇し案配する智的作用とも命名すべきものは、詩人が心理活働の因子たるを得ざるべき乎。敢て再言する迄もなく、有意無意の間、素より快刀を揮つて兩斷すべき區劃線の存在するにあらず。僅かに意志活働の强弱度に依りて假りに命名したるに過ぎざるが上に、あらゆる詩人が創作のとき、其所謂『無意識狀態』を必ず生ずべきものとも限らざれば、設しやシルレルが批評學理等の爲めに其空想の自由活働を妨害せられて、無意的思考法に到達し得ざるを悲しみし事實ありとするも、彼れ自身既に詩歌天上の燦たる一大星たるを看來らば、有意的思考法の決して無意的思考法に劣らざる價値あることを略ぼ忖度し得べき也。詩人の學問漸やく該博ならば、外界の刺戟を同化する能力も漸やく旺盛なるべく、境遇に於ける人物の判斷も漸やく健全なるべく、思想の徑路も漸やく秩序ある

べく、從つて空想も亦漸やく豐饒なるべし。無意有意交互連結して素是れ一條の聯環をつくる。彼れや春の夜の朧ろ月に梅が香の匂ふが如く、是れや秋の宵の澄み渡る空に輝やく星の影を仰ぐが如し。彼れや幽婉。是れや清透。是に於て、詩人が心理活動の因子、第二有意的思考法を得たり。觀念の連續有意なるにもせよ、將た無意なるにもせよ、何等か世の所謂こゝろもち是れに伴ふ。情緒は最も生理的條件に關係を有するもの也。最近チェエムス及びランゲの研究に依りて（チェエムス心理學原理第二卷第二十五章）、情緒を以てあらゆる生物の內的外的現象の意識に過ぎざるものとし、從つて生物狀態が諸種の結合の主觀的表示とするが故に、其等の質と量との配合に依りて情緒の差異を生ずるものとすれば吾れは始づ民衆の間に流布する俗說を排去せざるべからず。俗說に所謂らく、或る情緒の狀態を分析すれば、第一智的狀態別言すれば、發端となるべき觀念第二感ずるといふ狀態即ち悲しみ、怒り等の情緒、第三斯の情緒の爲めに生ずる肉體の狀態及び運動ありと。斯は訂正して第一智的狀態第二肉體と傳動神經との擾亂第三是等不安の意識即ち所謂情緒と稱する心的狀態とせざるべからず。チェエムス謂ふ、刺戟を知覺せば、肉體の變化は直ちに生ず。其肉體變化の起る時、吾人の之を感ずる即ち是れ情緒也と。乞ふ之を詩人に視ん乎。戀人の逝けるを耳にしたるとき、若しくは戀人の逝きたることを再想したるとき、咽嗚嘘唏に堪へざるが故に彼れは悲痛を感ずるが故に彼れは咽嗚嘘唏に堪へざるにはあらざる也。若し夫れ說明の材料たるべき適當なる觀念

なくして昇降變轉する情的狀態あらば、殊に稱して之を氣分と謂ふ。總じてこゝろもちなるものは常人にも存する心的現象なれども、詩人に於ては物的勢力の肉體に及ぼす影響最も銳敏に、情緒の活動また最も激甚也。故にバアンスは其詩を吟咏して飲泣し、ギョオテは其ヘルマンを讀みて流涕し、ハイネは音樂を聽きて一種妙へなるこゝろもちとなり、アルフィエリイが創作のうちは快よき熱病に罹りたるが如しと言ひぬ。是に於て、詩人に缺くべからざる心理活動の因子、第三感情の精妙を得たり。精妙の感情、多樣の觀念斯は抑も何が故に詩人の腦中に結晶して、或る新しきものを創構するに至るや。恰かも是れ生理に於ける生產と謂ふ本能的要求と答ふるの外他に途あらざる也。幼兒の物品を破壞し剖摧するは、破壞的本能を表示するといふよりも寧ろ創構的本能の初步を表示するものといふを得可し。如何なる物にても吾が双手の任意に左右し得べきものならば、人は之を吾が意の儘に創構して以て快感する也。衣服に於て然り、武器に於て然り、家具に於ても亦然り。創構は技術を要す。漸く進むで美術工藝品となり、更らに詩人が作詩に至らば、大なる技術を以て豐富なる觀念と精緻なる感情とを案配せざるを得ざる也。而して創構的空想は時に實際的利益を目的とすることあるも詩人が作詩は唯だ創構するに了はりて創構以外に別に目的なきを見れば、斯の心的活動をつくる何等かの原因なくんばあらず。熱ら〳〵心的身的活動を觀察するに、第一期は個體を保持して四邊の狀況に適應せんことを目的とすれども、第二期に於ては活動其ことが

目的となり、動物に於て、既にスペンサアの所謂『不用機關の無利益活動』となりて、猫兒の爪を柱に磨ぐを視る。落葉庭に繽紛たらん乎、吾が狗は是れと共に跳舞せざるを得ざる也。衆童集まりて鬼ッ子遊びを演せん乎、吾が兒また出でゝ是れと共に馳驅せざるを得ざる也。小兒始ゞ遊戲衝動を生じ、大人の競馬博奕に至りて眞正の遊戲となり、果てはシルレルの所謂『最高の美術とは遊戲の最高點に到達したるもの、言はゞ吾れ人最も内部より遊戲するときにありて詩文殊に戲曲是れ也』とて、詩文を以て最高潮の遊戲中にあるものとなす。何人の命令あるにあらず、自己また毫末の利益だもなく、猶ほ且つ一生を作詩に委ねて敢て他を顧みざるは、大なる詩人の特徴なるべし。ハアゲン謂ふ、動物が其性命を抛ちても必ず或る行爲を完成せんとする衝動あるが如く、作物する天才もまた寧ろ生れながらの勢力によりてなす也。望むにあらずして、爲さゞるべからざるが故に働く也と。斯の本能常人にもあり。未だ詩人の雄勁なるには若かざる也。是に於て、詩人の缺くべからざる心理活動の因子、第四非利益の形式中に遊戲する創構の雄勁なる本能的要求を得たり。

是に於てか吾れは概括して次の如く言はんと欲す。曰く非利益の形式中に遊戲して多趣多樣なる感情觀念を創構する本能的要求を詩人の心理活働となす。是れ常人にもあり。詩人に於て殊に一段の雄勁なるを視るを。

六

ロムブロゾオの反對論者として名高きヒルシが天才を論ぜる條下に於て（天才及退化論）、詩人の特質として表彰せざるを得ざるといふ強大なる本能的衝動ありとなし、情緒大に動けば内に停留することを能はずして、血管脈搏の異狀或は筋肉の反射運動を惹起するのみならず、又實に之を他に表白せんとする慾望を生ずるにあたり、多趣多樣なる詩人の情緒及觀念を簡單なる言語にて叙述し得ざるが爲めに勢ひ技術を要すといへるが如き文句ありきと覺ゆ。吾が讀書力の未熟生硬に失して眼光紙背に徹せざるやの懸念なきにあらねど、論者の意義、或は先きに擧げたる彼の俗説の舊窠に陷れるところあらざるべき乎。縱しまた然らずとするも、表彰の本能を以て説明せんとするは如何あるべき。然り、少女の遂に戀愛を表白するも事實也。罪人が吾れから口走りて捕へらるゝも事實也。然れども他人に表白せんが爲めに技術を要すと謂はんよりも、始めより詩人が頭に畫くことゞ口或は筆に上ぼすとの區劃を與へずして、技術を豫想する創構の本能を以て説明法となす、寧ろ可ならずや。是れ吾が玆に附言せざるを得ざる第一條件也。感覺派、情緒派、知識派其他諸派の不備を極論する快樂派に贊しながら、尚ほ未だシルレル、スペンサア等の非利益説に後顧する吾が態度を訝る人もあらん乎。斯は美とは何ぞやの審美問題に關係することにして、少くとも詩人の心理病理を概論する吾が本篇に左までの關係を生せざるところ、作詩の心理活働に於ては吾れまた内省に訴へて、到底遊戲の埒外に出づること能はず。是れ吾が玆に附言せざるを得ざる第二條件也。非利益の創構といふのみにては、詩人と他藝術

家とを如何に區別すべき乎の疑問起らん。音樂家の耳に於ける、畫工の眼に於ける特別の發達は、否むべからざれども、詩人の覺官と神經とは何を以て是れに應すべき乎。ガムベッタが言語の中樞神經たるブロオカ廻紋の發達を基礎として、詩人にも何等か解剖學上の生理的根蒂あるなるべしと謂ふは、畢竟假說にとゞまりて未だ容易に斷定し得ず。心理としては、數々音樂家の同時に畫工たらず詩人たらず、詩人の同時に畫工たらず音樂家たらざる事實は是れ單に與へられたる事實也、性格也として毫も差支なし。是れ吾が玆に附言せざるを得ざる第三條件也。說いて遂に玆に及べば吾が本題の病理を述ぶべき機會漸やくにして熟したるを覺ゆ。

七

吾れをして忌憚なく理想言辭を弄せしめん乎。嚴密なる意義を以ての健全なる心狀を構成する要件としては、種々の心的要素が比例を保持して發達するに在りと斷言せざるべからず。然れども要するに是れ理想也。理想は到底現化されざるもの也。即ち空言也机上の論也。斯の如き人は、人たるの間に存し得べからざるもの也。實際の人を解析し、實際の人を批判する心理的研究の關知すべき所に非ざる也。是を以て、苟くも人を研究する上は、必ず若干の中正離背を許さゞるべからざること、猶ほ醫學に於て、抽象の理想的健康のみを指して健康と稱せざるに等し。或は空想の旺盛なる人もあらん。或は思考の明快なる人もあらん、或は感情の精妙なる人もあらん。而かも世未だ是を以て健全の埒外に逸出したりとは言はざる也。人心の異なる、譬へば其面の異なるが如し。種々なる心的要素の關係の相違は種々なる人間特性の結果を生ずべければ、世界に於て符節を合するが如き同一特性を有する二個の人間あるべき筈なく、隨つて此間の關係を示すに足る可きノオルムも亦無き筈也。個性の開展と天才の發揮とにつれて、心的要素の差違漸く明瞭となり、中正離背も亦漸く增大となる。然れども猶ほ同一の比例を保持しながら百倍大の顯微鏡下には百倍大の差違の顯出すべき理由は吾人の最も注意せざるべからざる條件の一也となす。彼の故らに聲色を壯にして詩人を非難するの徒、動々もすれば斯の看易き道理を塗抹し去らんとするにあらざるなき乎。偖詩人が兎にも角にも病的傾向に奔下し來つて、其極疾病に到らんとする徑路を觀察せんには、吾れは兩方面より之を研究せざるべからず。第一詩人は人間也。普通形式の性格を對象として其偏向を觀察せざるべからず。第二詩人は職業也。故に特殊形式の職業を對象として、醫士の如く商人の如く、詩人と云ふ職業の生活習慣に說及ばざるべからず。病的性格、吁嗟是れ好個一卷の題目に非すや。詩人亦是れあらゆる生傳を復活するの餘地を存せざるを得ざるにあらすや。僅々數葉の劇愛を乞ふに止まりて、未だ所謂研究叢書の體裁を爲さゞる本紙の如き、吾れはつとめて吾が問題の縮小を計らざるを得ざる也。既に書して作者としての詩人と謂ふ。又た書して最も顯著なる疾病又び病的傾向と謂ふ。其意は性格を離れ得ざるながらも、猶ほ且つ創作に所縁多き範圍に限りて、以て一切の繁瑣なる特殊形式を棄却せんとする也。恰かも立體の

一部を割取したるに似たり。之を側面に觀む乎。性格はありて性格の全般はあらざる也。之を平面に觀む乎。職業の或現象は記載されて、或る現象は記載されざる也。若し夫れ創作其れ自身に於てさへ、注意記臆に說及ばず、又た感情々緒の分類がましきことも擧げずして、詩人の最も顯著なる事實に筆を擱きたるは、洵に不得止也。

八

空想の方面に於て何等の偏向を最も多く詩人に見るを得べき乎。凡そ人間一般の屬性として、空想の活動を缺くこと能はず。是れなくんば、人は鼻端三寸のところにだも進むこと能はざれば也。今若し普通水準の邊を抽象し來つて以て其れ以上の程度を考一考せば、明快にして秩序あるものより、無數の階段を經過し、終局は遂に全然非實際界に永住すと謂ふ危險を包含するに至る可し。超覺官的に進める階段は、詩人に於て數々是れに逢遭することを得。詩人としての優劣は別問題として、空想に聯關する詩人の類別を爲さんに、自由奔放なるべき空想時と良智を須つべき實際時とを明瞭に區別し得るものあり。假令ばアリオストオの如きは是れに庶幾かるべき乎。或はまた創作の頃ひには、全然是れに捕捉せられて、幾むど妄覺錯覺の狀況を繼續するに至るもの、即ち空想界の人物を眼にし空想界の聲音を耳にする者あり。假令へばフロオベルの如きは是れに庶幾かるべき乎。或はまた幾むど平常妄覺の狀態に住ふ者もあり。假令へばタッソオの如きは是れに庶幾かるべき乎。英佛の所謂象徵派は、天地より神秘なる聲調を聞き、山川に奇怪なる形像を視る也。斯の派の所謂仙境に變ずる也。是れ豈精銳なる同情に依憑して、簡朴なる靈魂主義に復歸するにあらずや。僅かに一歩を轉ぜん乎。實際世界に更ゆるに盡く空想世界を以てし、非實際といふ意識も疑惑も存せず、永久にして充分なる妄覺に陷れる狀態となる。想ふに詩文界程、錯覺妄覺の例證に豐富なる、他に其比を覓むること能はざる可し。詩聖ギョオテが自己の天職は繪畫に存せりと想へりしも、全く其自白の如く、此種の異常ありしが爲め也。

錯覺と謂ひ、妄覺と謂ふ。其是れあるもの、盡く心的疾病の徵候と見做すべき乎。斯は學者によりて其說を異にするが如し。ハアゲンの一奇說に謂ふ。血管の紛擾に生ずる一現象なれば、身的疾病の徵候なれども心的疾病の徵候にはあらずと。假りに心的疾病の徵候也とせん乎。心的異常ある人のみが錯覺妄覺を有せば、或は然らむも、健全なる常人また每に此現象を有するが故に、斯は到底理論的問題にあらずして、精神病學全體の如く、臨床的問題たらざるを得ざるべし。健全なる常人にありても、資性怯懦ならば薄暮に妖怪を認むべく、空想の活躍多き小兒は時に其亡母と面語せることあり。情緒の比較的銳敏なる、空想の比較的旺盛なる常人に於て稀少ならずとせば、詩人に最も豐富なるは更らに怪しむに足らざる也。通常、再起像は原像よりも薄くして且つ弱し。其然らざるものは詩人の誇るべきところにして、また斯くあらしめんが爲め、及び進むでは空想の活躍を自由ならしめんが爲めに

は、詩人はあらゆる器械的方法をすら採用するに躊躇せざる也。或は飲酒、或は吹煙、要は斯の方を以て斯の目的に到達するにあるのみ。また何等の批點を價せんや。斯の如くにして、詩人が創作の頃ひにのみ所謂錯覺妄覺を生じ、一旦其必要を失へば所謂錯覺妄覺も亦其影を藏し、大抵我が司配の下にある限りは、未だ以て心的異常ありとは認め得ざれども、己れ霧散せしめんとの意志ありて然かも能はざるに至りてこそ茲に初めて病的の名稱を下し得べきなれ。　翰若しくは傳記の所言をして盡く信憑すべき價値あるべきものならしめなば、名ある詩人の時に疾病に相應する者なきにあらず。然れども詩人の愈々大なるに從つて、第一他より附與する傳說の雜えらるゝものあるが故に、材料の有無に疑を挾む餘地あること、第二己れより出づる夢現を事實の如く語るものあるが故に、材料の眞僞に頭を傾むべき理由あること、を豫想せざるべからざる也。唯だ夫れ火光なき所、煤煙擧らず。詩人の妄覺錯覺多きは、性質上、また必要上、決して掩ふべからざる事實也。

時に錯覺妄覺を雜えて空想の活動するとき、智才との平衡を失して調和を缺くること、詩人にあり。全然理路の覓むべきなくば、患者の囈語と擇むところなきも、斯は或詩人の或時代に逢遭し得べき稀有の事に屬す。バイロンがチャイルド、ハロオルド第三章に就きて、千八百十七年正月二十八日ムウアに贈れる書翰の如き、創作に於ける這般の消息の一端を推知せしむるやに覺ゆれども、是れすら傾向の稍々明瞭なる範圍を出でざるべし。猶ほ筆すべきものあり。而かも敢て次に起るべき詩人の顯著なる偏向に赴かん。

九

感情の方面に於て何等の偏向を最も多く詩人に見るを得べき乎。學者の理解即ち是れ詩人の氣分情緒に相應するが故に、詩人が斯の方面の發達は又た共に驚くべきものありて存す。唯だ夫れ驚く可きものあり。他の要素と比例を失はざる限りは、大なる詩人の特徴として、常人の繩墨を以て律すべきにあらねども、中正離背は延いて特殊の發達を招ねき、時に或は外觀上、病的傾向を帶ぶるに似たるものなきにしもあらず。詩人の優劣は茲にも復た別問題として、多感濃感に聯關する詩人の類別をせむに、間歇的に激甚なる情緒の活動ありて、感奮創作の當時にのみ顯はれ、其機逸せば消失して平常に復歸する者もあれども、近時、少くとも、其自ら聲言する所に依れば、彼の常住鼓舞とも稱すべき傾向を帶びて、如何なる響きにも共鳴する精妙なる樂器に似たる夥だしき小詩人もあり。詩人の努むるや、步一步、理想は漸く高くして、每に滿足すること能はず。是を以て、多くは憂鬱に赴く勢ひあり。ギョオテ四週の幸福を感じたることなしと謂ひ、アリストテレエスは大詩人は憂鬱也と斷せり。但し患者の鬱症とは趣を異にする也。故に病的現象として若し詩文界に存し得べくんば、頑強なる悲觀的傾向は最も顯著なる事實ならん。多感濃感は、時に自己の關與する方面に限定せられて、從つて他方面に無關係を生じ、觀者をして或種の感覺脫失を疑はしむるものあり。素より有數なる詩人が集中力

より生ずるものと、患者が神經の薄弱に起因するものとは、全然種類を異にすべきものなれども、若し病的現象として詩文界に存し得べくんば、斯界に横溢する或る偏見を伴ひて、自己感情の膨脹と共に、誇大妄想の最も顯著なる事實をつくらん。想へ、既に豫言者の時代より、詩人の感奮には特別の意味を附加せられ、天神降下し來つて、我が口を藉りて其所思を告白するものとし、近世に至つては、シェリング派の所謂『文藝の神性』に依りて、何等の好辭柄を與へ得たるかを。人各々吾が好むところに從ふ。從ふもの漸く偏重す。是れ固より止むを得ざる所。唯だ夫れ詩人の吾が好むところに偏重する程強硬なる者蓋し世界に其匹儔を絶するならん。

十

創構的本能の方面に於て何等の偏向を最も多く詩人に見るを得べき乎。斯の本能の活働する時、即ち豐富なる空想、感情を使役して、或る新らしきものを創構せんとの衝動ある時、詩人の性に依り、齡に依り、邦土に依り、民族に依り、總括すれば詩人の先天後天の諸關係に依りて、遊戲の廣狹高下に無數の類別を生ずべけれども、詩文の特殊目的が快樂に存し、詩人の活働範圍が美を中心とする限り、吾れは概括的に實利實益の關係なき形式を以て命名せんことを欲す。人或は言はんか、俳諧腰折れの類或は然らん、若し夫れ雄大なる理想を懷抱して、感興を詩文に托する者、是れをしも創構以外に目的なしとせば、世果して何物か目的ある者やあると。されど試みに想へ、詩文の理想或は幽遠神秘に失し、或は偏重優視に流れ、何ぞ經世家の夫れに似ざるの太甚だしきや。之を歷史より視るも、詩文が舞跳を構成する要件として、運動を單一にし、行爲を單一にし、從つて調子の必要を見て、社會生存の須需となり、共有財產となれる時代、即ち美的快樂が利的快樂と共存せりと謂はんよりも、寧ろ其中に含畜せられたる時代——斯の心的狀態は今猶ほ多數の有する所たり——より、エマソンの所謂『自然は一時實益に供給するも後之を修飾に變ず』といふべき時代を經過して、美的快樂の爲めのみの詩文となるべき時代を歷觀すれば、實にもスチュアアト、ミルが『あらゆる詩文は獨唱の性を有す』と道破らけむ如く、漸く個人的滿足となり、漸く主觀的感興となりて、從つて自己を一員としての社會全般の利害興敗と漸く相離れんとする傾向は、設し全般を包括せずとも、少くとも一面の眞理を發揮するにあらざるなきを得むや。所詮詩文は美の問題也。千古の眞理も時に一片の聲調に若かざること有り。詩文界に在りては理想の高下のみを以て立言すべきものにあらざること、敢て玆に喋々するを須ゐんや。之れを例說に見る、『エンヂミオン』『レヴォルト、オヴ、イスラアム』の句、恐らく何人も其概意を捕促すること能はざらんも、猶ほ是れ千秋萬載、儼として其詩的生命を永續するに足る也。言ふ迄もなく根蒂を三基說におき、そが平等の發展を中正と信ずる常識若しくは科學を蔑視して、鶯の如き空想と麝の如き感情とが描き出す幾多詩人の創構には、科學者として凡人として、經世家としての吾れは、往々玆に偏向ありと絶叫し得んも、詩文界に籍を有する者として、美に惝怳する者として、

偏向不可避の論者として、將たまた天才の謳歌者としては、設し病的の名稱を附下し得るもの迄も、吾れは權衡を推き繩墨を拋ちて、以て其前に平伏するに躊躇せざる也。況んや天才多くは常識を以て測るべからざるのみならず、其測り得るものに於ては、既に前條に陳述せる如く、同一の比例を增大にしたる中正離背の存するに於てをや。唯だ夫れ向上的精神を絶し、詩文の形態に於ても何等の美的特色なく、色情挑發是れ事とする現象に至つては、精神病者に瑣末の創構に熱中して敢て他を顧みざる偏一症（monomania）あると同じく、詩文界於ける最も視易き病的傾向にあらざるなきを得んや。巢鴨に幾何の色情狂あるかをも想へ。

十一

空想に於て錯覺と妄覺、感情に於て誇大妄想の傾向と頑强なる悲觀的傾向、創構に於て色情挑發の偏一傾向を擧げ、以て詩文界に最も明に現れ得べき病的現象となす吾が意見を陳述し了りぬ。若し之れに加ふるに創作者としての詩人の偏向し易き其他の心的現象に及び、更らに詩人が個性に及びて、或は虛飾、或は食慾缺亡、或は孤獨等の現象をも說かんと欲せば、僕を更ゆるも猶ほ且つ及ばざらんを恐る。通常有名なる詩人にして精神の異狀ありとて喧傳せらるゝものを視るに、ルクリイシアス・タッソオ・レエナウ・スウィフト・ラム・ベン、ヂョンソン・ルウソオ・モリエエル・モオパッサン・カウパア・グッコオ・クライスト・ネルヴァアル等の名あり。或者は著書中の片言隻語を左券として現時のトルストイ・ゾラをも加ふるに至りぬ。されど吾れは、往昔は言ふ迄もなく、現時にありてさへ、斯の如き目錄の容易に編述し得らるべきものにあらざるを附言せざるべからず。何となれば臨床の醫士を除きては、看護人さへ、容易に窺ひ識ること能はざるは、精神病一般の診察なれば也。傳記に載せたる素人觀察既に賴むに足らず。又た況んや創作物の片言隻語を楯とするに於てをや。詩人の果して心症ありや否やを識らんとするには、第一其個性に就きて嚴密なる科學的調査を施すべく、第二何事を思ふかにあらずして如何に考ふるかを注意せざるべからず。假令ばワレンスタインの星占も、埃及の牡牛も、ルッテルの惡魔も、事より見なば時世と聯關して何等の異狀を認むべからざるにあらずや。斯の如くにして吾れは從來詩文界の疾病と稱するもの〻頗る信憑するに足らざるを悟りぬ。

然り、詩文界の疾病と稱するもの〻頗る信憑するに足らざるを悟りぬ。更らに之れを詳述すれば、第一嚴密の意義を以てすれば人間壹く病的たらざるを得ざること、第二普通の意義を以てすれば從來の慣用は情の性質を無視する狹隘の恐れあること、第三詩人に普通以上の調和あるを知らずして常人の徒の亂用夥多なりしこと、第四設し人の視て偏向ありとするところにても多くは病者と原因を異にし從つて其種類を異にすること、第五原因を異にし種類を異にする偏向は疾病若しくは病的と稱することの頗る苛酷なること。是れ吾が悟了せるところ也。更らに進むで醫士、科學家、常識者等が、病的傾向なりとして擯斥せんとする現象を以て、人間の立場より、殊に詩人の立場より見て、何等の緣

由及び幾何の價値を有するやを瞥見するは、頗る興味ある問題たるべきを信ず。吁嗟吾れ徒らに辯を好む者にあらざる也。

十二

一度び想ひを沈めて、自然界に於ける人心の粟粒の如く、及び之れが外界と交通する覺官の管孔に似たる事實に注目せば、誰れか人間が觀念系統の流動し易く凝結し難き所以を訝る者かあらむ。寧ろ怪しむ混沌たる劣情激情の瀰漫するうち、兎にも角にも反省の餘裕を生じ、泰山を穿ち北海を涸すに比すべき勞働の後、僅少ながらも猶ほ能く秋獲の若干を收め得たることを。人の狂氣を帶ぶる敢て驚くを須ゐず。人の正氣に安ずる、是れ却つて珍とするに足らずや。人生五十、彭祖既に及び難し。況んや大椿おや。電光の如く、石火の如く、蚊蚋の夫れの如く、秋蟬の夫れの如し。半宵夢覺めて後、復た夢を呼ばざる者、抑も誰れかある。

覺官其數眞に幾何ぞ。中に就いて賴むに足らざるもの半を超ゆ。視覺明瞭也と謂ふも、其過大のモヂファイアアなることは、殊にヘルムホルツを俟つて後識るべきにあらず。聽覺の精緻を說く者は須らく歸へりて試みに其識別し得べき聲音の範圍の計算を聽くべき也。されば人々は己れが滿足するに足る概念を得る迄には、分析と訂正との長勞働を爲さざるべからず。人は幸ひにも斯の機能を有す。記臆あり、綜合し、抽象し、再生し、創作する力あり。一言にして盡さば理解あり。覺官の符號を解釋し、實在の觀念を構成するには、理解は想像の働作を須たざるを得ず。知覺の腦中に下るや、假令ばゞ種子の畝に於けるが如くまた燧木の火藥庫に於けるが如し。個々の印象は、或は匿れて緩に、或は空想の湧起と共に急に、又た更らに幾百の印象を培植す。されば心意自身が外界の知覺を精算せむがために、無數の辛酸艱苦を忍ばざるべからざるが故に、冷靜なる觀察は、漸く變じて空想となり、幻想となり、常識の所謂偏向となり、之れを譬はゞ線香花火の或は燦として右に輝き、或は爛として左に閃めくが如し。若し夫れ、錯誤と錯誤と相摩して金米糖の角のなくなれる實際的なるまた平衡的なる概念の存する方便門なくんば、人は空想に驅られて、其牛步當ならざる思想に歸着する迄には、既に全く燃燒し盡されずんば止まざる可し。

自然間に振動する無數の勢力の一小部分を集拾し得べき覺官、覺官の符號を解釋すべき微弱なる理解、理解を左右する激甚なる空想、吁嗟是れ神の賜物ならずや。而して人の慾望はと問はゞ、あらゆる實在の光景を構成して、其本原と宇宙の本原とを理解し、兩者の諸則を發見して其命運を豫言せんとす。何ぞ其能力の貧小にして而して其要求の過大なるや。

吾人が一の能力の缺陷は他の能力の補充を促す。覺官の缺陷は想像を呼び、想像の缺陷は推理を呼び、推理の缺陷は直觀を呼ぶ。人の覺官の僅少にしてあらゆる外界を觀察し得ざる限り、人の本能の堅固ならずして觀察に反應する力足らざる限り、人は想像を招ねきて慧智の所行を爲さしめざるべからず。

常識及科學の世界は、プレヱトオの詩人をして描かしむることを希へる清淨なる神話の世界にして、想像の生むところ、而かも同時に實用の暗示を與へざるべからざるところに在り。常識及科學の世界は空想の世界と中心を同うす。兩者の動くは想像の衝動あれば也。實用に供し得られ覺官に證し得らるゝ觀念は人名けて理解の觀念となし其然らざる者は空想の觀念となす。人生の短、激情の亂、觀念を實用といふ試金石にかくることの頗る遲々として人間の全體を說明するに足らざればこそ、新らしき空想の波浪は幾度も寄せては返へし、返へしては寄せて、遂に上下茫々六千載、營々として收め得たる勞力の根蒂迄も搖がさむとする人をさへ生ずるに至れるなれ。斯かる人、即ち是れ人生問題の廣大を感じたる人、深遠なる思想を有せる人、當時の理解を以て取るに足らずとなせる人、高妙なる解釋を與へんとの常住慾望を有せる人、將た又た情熱に煽動せられたる人にして、常識の徒、科學の輩の直下に理解し得られざる人也。情熱の旺盛なる人は、理解の先頭に立つか、然らずんば不滿に居らざるべからず。より大なる調和を發見し、より深き意見を構成し得べき者、唯夫れ一に空想にあり。故に常識の想ひ及ばざる竹頭も時に詩文の材料となり、科學の棄てゝ顧みざる木片も、往々宗教の感奮となる。直觀にして經驗の立證し得るものならば斯の時の空想は既に下りて理解となれるものにして空想は遂に空想に始終せざるからざる也。

空想の效果の大なるだけ、其當時の社會に及ぼすべき弊害も亦頗る顯著ならむ。事實の不明瞭は偏見をも伴はむ。希望を愛するの極は偏執をも以てせん。されど若し夫れ詩人を以て、部分的眞理を一層發揚する先覺者として歡迎する勇氣だもなくんば、寧ろ若かむや常識の輩、須らく眼を閉ぢ耳を掩ふて沈默せんには。人は到底自己に都合よき錯誤を飮飽補綴して滿足するに過ぎざれば也。眞の智識は化石たるに在り矣。

先んずれば偏と云ひ、後るれば正と謂ふ。偏する者は非耶、正する者は是耶。人各々從吾所好。誰れか烏の雌雄を識らむや。

（三十四、七）

『帝國文學』第七卷の終了

七卷任を終へて去らんとす。爾の手にする年代記、滿紙盡く是れ嘲笑罵詈の聲。爾をして斯の如くならしめたるもの、吁、豈に獨り一人のみならんや。何等の辭を以て爾の六姊に見えん乎とは、恐らく爾の頗る苦慮する所なるべし。是れある哉、爾の斯の如く低回顧望するや。吾れ今の爾の爲めに、庶務員として爾が雜報の性質を陳述し、編輯員として爾が意見の一端をも說明せんと欲す。悠久なる歲月のうちに加はりて、爾若し爾が六姊に逢遭するともあらば、爾須らく吾が辭を取りて以て爾が辯解の一節とせよ。吾れ今爾と訣るゝに望み、戀々の情、切に禁ずべからざるものありて存するを覺ゆる也。編輯員の每年三月を以て更代期と定むるは、爾の六姊の既に已に知了する所。されば雜報の所說に於て、前代と違ひ後期と同じからざるものある亦自ら生じ得べき必然の勢ひなりとす。現代編輯員

は現代一年を以て生命となし、後任編輯員の所說を規定すべき責任なきと共に、前任編輯員の所說を祖述すべき義務もなし。帝國文學の目的以外に逸出せざる限りは、何等の行動を爲すも一に當代編輯員の自由に任せり。先代斯の如かりき。現代復た斯の如からん。且つ夫れ、吾等不幸にして文藝のデモニック、インフルエンスを與ふべき絶大の勇者を吾等同輩間に有せざれば、雜報を貫通するに同主義を以てすること能はざるのみならず、區々の感、個々の論、時に或は全然相衝突することなきにあらず。今春三月、吾等相會し、大體に於て異常の矛盾なき限りは現代編輯員の所說と見做すべく、其全く相反する所說のみ、別に署名して卷尾に列記し、以て吾等の用意を明瞭ならしめんことを約せりき。學窓太だ忽忙、事往々志と違へりと雖も、猶ほ概觀に於て、慊みなきに庶幾からんことを希ふ。庶務の心勞、豈に半顧の値なしとせんや。帝國文學雜報の一記者を以て目せらる、寧ろ始めより吾等の望みしところ。而して世上好事家の多き、恣に揣摩臆測を逞うして勘違ひの個人攻擊を敢てしたること、今に至る迄其幾度なりしやを知らず。吾等私かに慊みとしき。經驗多くは改良の實を擧ぐべきを信ずれども、爾七卷、幸ひに爾の六姉と相會して猶ほ一層の便法を案出するあらば、好便に托して以て爾が未來の諸妹に敎ゆるところあれ。

極めて概括の言辭を以てせん乎。審美よりも鑑賞、議論よりも實際、多面よりも一面。歷史に於て、文藝を進步發達せしめたる眞正の動因は、彼れにあらずして寧ろ此れに非らざるやを疑ひはじめたる

吾れは、一切研鑽の前提をも亦斯くの如く變更せざるを得ざりき。現在に於て亦斯の如くあらざるを得ず。眇たる吾れ、文藝界に抑も何等の貢獻かあらん。區々の管見、大方の一瞥にだも値ひせざりつらん。唯だ夫れ、取るべきの筆あり、言ふべきの機あらば、吾れ自身の發達の爲めに、寧ろ吾れ自身の滿足の爲めに、吾れは機を捉へ筆を役せざるを得ざる也。先哲多く遺訓あり。猿の物眞似、三面六臂、空を論じ、空論を論じ、空論論を論じ、空論論論を論ず。能はざるにあらず。而して遂に何の得るところぞ。實際考察せざるべけんや、品性問題是れが爲めに在り。一面優視せざるべけんや、天才問題是れが爲めに存す。鑑賞抑も〳〵爲さざるべけんや、問題の狹少全く玆に基く。讀書萬卷、或は及び難からずとも、一片の創作力の前には身を屈して辭せざらんとするを想へば、吾れは親ら吾が近時を說明して餘りあるを信ず。七卷爾に他の問ふあらば、吾れは詩病に罹りたりと言へ。

美感を圓滿ならしむべき一切の覺官的刺觸に關しては、作家の用意の最も周到詳密ならんことを希ふ。這般の準備にして缺如たらん乎。吾は作家としての一資格を失へるものと信せざるを得ざるなり。智識說の桎梏は吾れの寧ろ蟬脫せんことを欲する所也。高劣覺官の區別は吾れの寧ろ融和せんことを欲する所也。道德偏重の失當は吾れの寧ろ遺却せんことを欲する所也。總て美はしきことの爲めには作家は大なる留心を辭すべからざること、是れ洵に作家の試金石たらざるを得ざるべき也。されば新刊を手に上ぼす時、表裝の體裁に於て、插繪の種類に於て、書冊の恰好に於て、活字の排列に於て、墨

色の香りに於て、紙質の手ざはりに於て、詩文界に籍を有する作家の態度如何を卜する、豈に敢て誤まれりとせんや。好個是れ詩文の序樂。若し吾が所感にして誤謬なからしめなば、印刷術の進歩を適用する近時の傾向は須らく奬勵すべき現象にして、同時に是等外形を藉りて内容の貧少を冷笑する評家の不仁を鳴らさゞるを得ざる也。

更らに翻つて詩文其ものを觀る。實にや國語なるものは、覺官を刺觸するものと言はんよりも寧ろ人間が解釋すべき符號也と稱するを可とするが故に、人の注意を惹起すべきところは國語のうちに含まれたる事物思想の美點に存するは事實なれども、既に符號と稱する上は、符號夫れ自身に於て覺官的眞實を有すべきこと、抑も何人か否定し得べき。人の詩文を聽くときは、吾れ聲調の配合を聽く。人の詩文を視るときは、吾れ聲調の配合を視る。人の詩文を想ふときは吾れ聲調の配合を想ふ。以太利亞の言葉は女子の口よりするキスの如く滑らかなりと嘆美せるバイロンの心根こそ、嗚呼是れ詩人文士が居常閑却し得ざる心根ならずや。英吉利にありて美文韻文の極美は唾液に存せりといふ研究も、詩神の子等が子音母音の性質排置に焦慮するも、悉く是れ如上の優しき心根あれば也。言葉の緩急、言葉の前後、言葉の色つや、言葉のみがき、果ては句點の打ち所までをも美はしからしめんとするは、假令はゞ色玻璃の窓にも較ぶべきか。意味と名くる光線を透通せしむるの外、人の視聽を聳動せしめんが爲めには、故意と復雜ならしむべく、故意と朦朧ならしむべく、また故意と自然に離るゝことも

あるべし。蜀の錦、筴を容るゝに先だちて始づ其糸を染む。詩文の情熖熾ならずして斯の樂模樣を旨とする者なければ、始めより美はしといふ性僻なくんば、詩文の描き出す世界の一端を夫れとなく偲ばしむること、いとも〳〵覺束なき極みならずや。文學界の第一義は玆に在り。これなくんば詩人にあらず、文士にあらず。權利と義務に追はるゝ人なれ。利害と損益に聲枯らす人なれ。

之を史に徵しなば、所謂シムボリストは其粹を味ひたるものに庶幾からんか。架空に描くべき理想的の大詩人を建築家と稱し得べくんば是等の詩人文士は金工とや言はん、珠工とや名けん。ゴシック形の寺院に仰嘆すればとて、乙女が插頭の花を毟り、紅差指のリングを掻遣り捨てん程の者、果して詩美を唇頭に上ぼす可き權利ありや。雕蟲鏤刻なる風の猶は吹きすさみて牛門の諸葉を卷上げんする光景あらば、吾れ抑も之を何とか評せん。

ロジック、チョッパアしばらく聽け。厚世利用宗徒乞ふ之を想へ。僅々六千年——寧ろ三千年の歳月を積みて、宇宙間に瀰漫する無限の震動の迷路に似たる山坂を迴るうち、卿等が社會人間の利益の爲めにといふ螢火に見紛ふばかりの古提灯を振翳して、兎にも角にも自己に都合よき宇宙觀、人生觀、社會觀といふ何々系統を探し當てこちたき一通の理窟をこねくるうちには、半ばゝ卿等に便利なる世界を作らんとする卿等の理想は卿等を補助すべく、半ばゝ卿等に都合惡ろき無數の經驗は無意義なりとて卿等に見放たれつべし。誰人か、吾れ萬象を呑吐し、吾れ人間を盡く抄ひ上げたりと極言し得るもの

ぞ。卿等の建家こそ實にも卿等に最も住ひ良き住居なれ。其所に臺所あり、勝手あり。其所に座敷あり、客間あり。されど最も惜しむべし、其處にソオファあらざる也。卿等吾れと語る時、吾れ卿等を賢しと思ひぬ。されども今は仇なれや、卿等吾れを誣かしぬ。理窟は最も世話敷きもの也。眩むばかりに追立てられたる論理の心象の行列を顧みすれば、自他共に活きんとする方便門、形式主義の如何ばかり粗ツぽく、そゝツかしく、思ひやりなく、馬鹿らしくあるかに愕く。野の百合は智識説の棄てたる目的なき幻想を辿らしめ、少女の微笑は智識語の傳へ能はざる名もなき新らしき知覺を與ふ。義理然り。情愛然り。人間然り。天地然り。驅使せらるゝ小僧は道草を食ふべからず。されど道草は面白きもの也、美はしきもの也。詩人、文士の眼を以て之を視む乎。一切の論理的符號を繼ぎ合はせて描き出せる卿等の世界は、渾沌たる心といふ大洋の上に淡く輪廓をつくりて、縦横に罫ける經緯度と何の擇ぶところかあらん。卿等是れに依憑して船をやらんと謂ふ。可也。されど、卿等の微力は波浪を克く如何ともすること能はざるにあらずや。狂氣を束縛して卿等之を健全と名け、夢現を司配して卿等之を醒めたる人生と稱す。司配なき夢現、束縛なき狂氣、斯の本來の人間に歸りて卿等の閑却したる印象を拾集し、卿等の褪色せしめたる情緒を煽動し、以て卿等の想及ばざるロマンチックの趣味を掬せんと欲す。文學界の第二義は茲に在り。これなくんば詩人にあらず、文士にあらず。書けば必ず讀み得ざる沙翁とギョオテとの名のみを擔ぎ廻りて、文壇を跳ね歩く痕狽者也。言へば必ず人を究めざる鼻先き思案を組合はせて、篤學達識の士の敢てせぬ大膽なる概論を振翳す空臼組也。

常識の範圍の方便的なるに慊らぬ者は、別に光榮を發見せんと想へば也。科學の組織の形式的なるに甘むぜざる者は、新たに安息を建設せんと欲すれば也。倒したるは樹てざるべからず。壞したるは補はざるべからず。吾が經驗に復歸して、方便的觀念の水準以下に潜在する感情と空想との實在を捕捉し、清新にして且つ流動する材料のうちより、美を中心として吾が本原的傾向に最も適切なる世界を創設する、吁是れ詩文の叫喚にあらずや。新世界の種類は如何。新世界廣狹あり。新世界に優劣ありや。爾吾れをして語らしめんとする乎。吁嗟七卷、爾は吾れをして更らに第二のロジック、チョッパアたらしめんと欲する乎、吾が肺腑を貫通して吾が生氣に蘇へるもの〻外一切の詩聖をして史上に眠り安からしめよ。爾及び爾の姉妹の吾れに與ふべき同情と敎育とに依りて、多面よりは一面、理論よりは實際、審美よりは鑑賞を最も圓滿に優視し得べくんば、吾が願乃ち足らん。短歌の時代、俳諧の時代、所謂美文の時代、所謂新體詩の時代は、最も進みて第二義を明確ならしむべき時代にあらざるべき乎。否乎。

天才の疵入りを痛論せる人ありき（讀賣）。吾れは訝りぬ、斯の如き意味を以てせば、史上に一人の疵入らずの天才だもある乎と。社會風敎若しくは共同の目的に賜資せざる者は天才にあらずと言へる人ありき（新小説）。吾れは怪しみぬ、斯の如き意味を以てすれば、詩文界の多くの天才は是れ何の天才

なるべき乎と。詩人が性格の極致を說明せる人ありき（文藝倶樂部、新文藝）。吾れは疑ひぬ、天上の聲果して下界の吾が耳に插み得べきやと。吾れ詩人の缺點のみを集めて是れ詩人也といへりと笑ひたる人ありき（太平洋）。吾れは慌てぬ、詩人の缺點のみを集めたるは是れ缺點物にして詩人にあらず、所謂缺點を雜ゆる詩人、是れ史上の詩人にあらざるべき乎と。詩史を暗誦するは汝輩のすべきこと、學ばゝ乃公薀奧を極めんと眞顏に言へる人ありき（新聲）。吾れは感じぬ、青年の意氣冲天の勢あり、而かも此イフはマッシュウス 藥籠中の物となり了らざるべき乎と。歷史を侮蔑せざらんとすれば禍なる哉。

七卷、遂に爾は行かざるを得ざるべき乎。切々の情、綿々の想、永く爾と忘るゝことなけん。爾の最長姉嘗て久しく吾が友たりしと雖も、性格太だ爾と趣きを異にせるものあるを覺ゆ。吾れ年齒尙ほ壯、最も讀書の感化を享くべき頃なるを思はゞ、爾等姉妹幸ひに吾が情操の變遷を恕して可也。天寒く途遠し。爾夫れ自愛せよ。

（三十四、十二）

教育界と小說

最近刊の早稻田學報誌上に於て、教育小說を推奬すと題せる一節を讀むや、無限の感慨泉の如く湧起して竟にまた仰下すべからざるものあり。憶ふ三年以前市俄古大學英文學教授ムウルトン博士の序說を添へたる『小說繙讀四年間』を手にし得たりし時に斯の如き感想に浸染せられたりしことありしを。また憶ふ四年以前世を擧げて嘲笑罵詈の惡聲を逞うせるに關らず僅かに兩名の同志記者を後援として——余が記憶にして誤らずんば今の太陽主筆高山樗牛博士と今の新天地主筆木村鷹太郎氏なりしならむ——渺たる反省雜誌の孤壘に據りて當時の教育界を驚倒せしめたる所謂新潟縣尋常師範學校演劇事件なるものを辯護せる頃ひにまた同じく斯の如き情念を懷抱したることありしを。歲月徒らに過ぎ人空しく老ゆと雖も其間に能く幾何の徑庭をか生じ得たる。居常念頭に往來するものは學校教科細目に未だ揭げられしことなき人生學、內省に訴へ經驗に徵して挺身極力せんと欲するところは是れ情的教育——所謂趣味教育の尋常なるものにはあらざる也、所謂感情教育の一面なるものにはあらざる也、人間修養の最高潮たるギョオテの所謂クンスト也——なるを想へば、たとへ詩文其ものにのみ慰藉を需めて他を顧みざらむとする余が今日の見地よりして現代教育界に何等の接觸するところなく從つてまた何等の負荷するところなきを識ると雖も、身苟くも教鞭を揮うて日夕子第と相見ゆる境遇を考一考し來れば、余が管見に依る教育界の缺點を指摘し同時に之れが救濟法を陳述するは余が當然の義務たるべきを信ず。或者は認めて偏見と言はん、或者は認めて短見と言はん、或者は認めて常套の陳言とせん。其偏見たり短見たり將たまた常套の陳言たるは余の一切措いて問はざるところ。唯だ夫れ教育學の形式を鵜呑みにしてカアライルの所謂 The mouth merely operating on the tongue of the pupil, and teaching him to wag it in a particular way を演じ、余が對象の眼目たるゲミュウツ、レエグングの活動

を五指の間隙より slip out せしむるうちは到底教育の効果の收むべからざるものとなす余の信仰を告白すれば足る。嚮導原理は情操の a mood 若しくは a quality に存して決して他に需むべきものにあらざる也。

一切の宗教的情操を我教育界以外に驅逐せん前に、教育家は二箇の不可忘條件あるを想はざるべからず。家庭に於ける聖書の感化は獨り彼れの專らにするところにして是れ其一に居り、希羅語の練習に伴ふ趣味の啓發は到底和漢文の匹儔を同うせざるところにして是れ其二に居る。而して是等兩個の條件を缺く我にありては、家庭に於ける枯淡主義、禁情主義、三ツ指主義、千松主義と、學校に於ける倫理の御談義主義、歷史のデエト主義、和漢の文法主義、算術主義、幾何主義と互に響應し交々喝吁して、趣味を擁塞し想像を破壞し、文明國中他に比類なき最も大人らしき少年をつくり、文明國中僅かに一ありて絶へて二なき最も直截簡明なる答案を書かしめぬ。謂ふ『教師は人にて造り人を教ゆる道具也』。造語何ぞ夫れ奇警なるや。

天下最も催眠術に長ずるもの三。曰く麻醉劑、曰く子守女、曰く教育家——而して世界の最大教育家は決して斯くの如く理義是れ事とせざりし也。"Without a parable spake he not unto them."

あらず、教育家諸君。余が筆不覺岐路に奔りて諸君の怨みを買ひ同時に諸君の席末を汚す余自身をも嘲り了りぬ。されど諸君、諸君及余が教育の術に巧妙ならざることは吾れ人俱に既に業に知了する所ならずや、少くとも先きに掲げたる答案の活證に依りて爾かく領承すべき筈にあらずや。諸君及余が及ぶべきだけ自己を練磨するは勿論ながら、諸君及余が缺陷にして他に補充すべき途あらば、吾れより進んで之れが誘致を謀らんこと、また決して疾ましとせざる也。余が主要なる矯正策と認むるところは、詩人文士の手を煩はして教育家自身左の運動を熾ならしむるにあり。

第一、小學校にお伽噺其他一切の少年文學を輸入すること。

第二、尋常中學校、高等女學校に所謂教育小說を輸入すること。

第三、小學中學高等女學校を通じて、教科書の或部分の訂正案配若しくは材料撰擇を依頼すること。

想ふに是れ尋常一樣の所說而已。教育界に於て既に趣味教育、趣情教育、美育等の名稱を以て行はれつゝある諸說の半面を茲に再述したるに過ぎざる而已。何等耳目を聳動すべき個所を見ず。唯だ夫れ斯の如き尋常一樣の所說を記して悔ゐざる所以のものは、余が後に添加せんとする個條書の意味を正當に理解せしむべき素地を作らんが爲めにして、本篇の骨髓たるは勿論、同時に教育家の陰に懸念して措かざる妄信を顚覆せんが爲めにしたる也。

第四、尋常師範學校高等女子師範學校高等學校專門學校以上の學生及小學校尋常中學校高等女學校以上の教員をして公然進んで小說を熟讀せしむべきこと。

玆に始めて單に小說とのみ書し、何等の意義を限定すべき形容詞を冠らしめずして以て本論の題目に照應せしむることを得たり。小膽なる教育家の必ずや視て異常とするところならん。小說に關する我教育界の偏見誤解は何日頃より萌初めけん、余得て之れを知らねど、今日尙ほ最大多數の教育家は小說讀みを以て罪惡の如くに感じ、士君子の話頭に上すべきものにあらずとなし、其最も新らしき教育を受けたる極めて小數なる年壯氣鋭の倫理學者教育學者と雖も小說を以て無價値のもの、少くともろ〳〵の學科より劣等のものと認むるは、彼等が卒先して自ら之れを讀み他に之れを讀ましむる勇氣なきを視ても明白ならずや。斯くて彼等は近世の best minds に接觸すべき機會を逸して更らに悔ゆる色なく、轉々又轉々、比較的に容易にして比較的に人生を離れたる數學語學理化學の周到なる鍛錬を喋々し、最も解し難くしてあらゆる學科の中心なる文藝を捨てゝ顧みざるつむじ曲りの教育系統に安ずる道學先生教育先生と退化するに至る。嘆せざるべけんや。教育倫理が文藝殊に小說を離れて獨存し得べしとは余の夢想だも爲し能ざるところ也。一生を賭して蟻研究に是れ從事する單獨なる科學的精神の如く、一木一石一句一節、食を廢し夜を徹して焦心苦慮のうちに自ら樂しむ單獨なる文藝的精神は余の玆に說明すべき限りにあらずと雖も、暫らく教育界より小說を觀察して、あらゆる特殊教育は人生學を修むる手段に過ぎざるを知り、人生學を最も巧妙に最も具體的に說明したる小說は人心の慾望、愛情、性癖、習慣等を描き出して教訓し鍛錬するもの即ち廣義に於ける教育の定義に適應することを知らば、小說に關する教育家の誤解を矯正し、如何にして小說を最も能く利用すべき乎の方法を講ずるは余の須らく執るべき急務なる可し。

小說はつくりもの也。つくりものに貴重の時間を與へて貴重の淚を空しく灑ぐは閑人若しくは樂隱居の爲すべきところにして堂々たる教育家の關與すべきところにあらざる也とは、比較的文藝趣味に緣遠き一部分の教育家よりしば〳〵耳にするところなりとす。謬れるの太甚だしきものと謂ふべし。小說は人間を科學的に分析して實驗的に叙述したるものの也。人生の批判也。歷史家と謂ひ傳記家と謂ふもの也。觀察法に於て進歩せざりし科學の實驗法を須つて始めて生氣を得たると同じく、事實記錄を崇めたる時代の後に、人生の實驗的叙述起りて初めて人の人たる道を明白にならしめ得たる也。更らに言を換へて述ぶれば、つくりものなる小說はつくりものならざる事實よりもまことを得たるもの也。事實は特殊也、個性也。眞實は一般也、普遍也。彼れは材料也。此れは製品也。歷史は合金也。小說は純金也。小說中の大立ものは全階級の模型にして決して區々たる一個體にはあらざる也。

小說の眞理を穿つやよし。されど紛々たる群小說が現社交間に於ける罪惡の導因となるを奈何せんや。若かず有益無害なる最良小說數種を撰擇して以て人間が本來の小說慾を滿足せしめんにはと。斯は多數教育家の唱ふるところにして議論の根蒂亦力あるに似たり。其青年子弟を愛撫するの渥き、余また

情を同うせざるにあらずと雖も、一を知つて未だ二を知らざる淺薄なる訓策に到りては余は決して協賛すること能はざる也。東西古今、Index Expurgatorius に依憑する教育が抑も〳〵如何程の實効を收め得たりとはするぞ。自由撰擇の快感は譬はゞ大鷲の眼よりも鋭く、奔馬の足よりも駿し。袂に隱れ懐ろに走り、抽斗の奥に逃れ衣匣の底に潜み、必ず其所を需めずんばやまざる也。到底改良を逭るべからざるものとせば、之れを小説に於てせずして、何ぞ之れを讀者に於てせざる。

既に讀者に改良を促すと謂ふ。さらば如何なる方法を以てすべき乎。彼の音樂に就いて見るに、ポルカもアダヂオも初めは宛として空吹く風の如きも耳漸く熟れて調漸く明かとなる。徹頭徹尾實地の賜也小説亦如斯。小説を讀みて初めて小説を視るの眼を具ふるに至る。小説に對する趣味の修錬は小説其ものより入らざるべからざるものにして言以て之れを説き口以て之れを傳ふべきものにあらず。彼れを讀み此れを讀み、之れを味ひ彼れを味ふるうち、美醜正邪の辨別自ら生じて、果ては如何なる淫靡小説駄小説愚小説に逢遭すると雖も、超然高處より瞰下するが如き想ひを爲すに到るもの也。況んや尋中以上の程度に於ては今日既に倫理學の初歩を授けて意志の鍛錬を共に俱に推奨勵磨するに於ておや。決して田夫野人の難し御難し度たぐひと日を同うして語るべくもあらざる也。

任他、良禽擇喬木。小説修錬は大家の創作を反覆熟讀玩味するに始まる。是に於てか左の案あり。

第五、小説を讀み習はんとするには、指導教授の嚴密なる監督の下に行動して、期日の限定、書冊の撰擇、研究の方法、其他一切の指定を仰ぎ、中央は隨時會合、地方は夏期教育講習會を利用して文學一般殊に小説原理の講演を催すこと。

假令ば逍遙先生、鷗外先生によりて殊に教育的として一部の馬琴ものを二月間に研究すべき指定を與へられたりとせば、學生は幾度も反覆熟讀玩味して自己の視るところを周到綿密に應答すべし。斯の如くにして漸く進まば、希くばあらゆる小説が伴侶となり親友となり忠告者となり教訓者となりて、人生一日も離すべきものにあらざることを悟了するに至らむ哉。

余の筆不覺また〳〵冗長に亘れり。恐らく委員の分擔すべき既定の頁數を超越して他の領域を侵蝕しつゝあらんか余は惜しからぬ筆を玆に擱くことゝせん。想起す、大學終了迄の所謂修業時代は余にとりて二十有六年間。其高等中學校――今日の高等學校――に籍をおきはじめたる頃ひ、何等の指導を他より享け得ざりしが爲めに誤つて價なき世路日記を筆頭にして余が小説慾を開展せしことは雖も、猶ほ且つ實踐道徳に左したる破綻なく世の後指をさゝるゝに至らざりしことは、全く寄宿舍の窓を通じて人間及社會の如何なるものなるかを小説に依りて會得したれば也。小説は余にとりて恩師なりき。區區たる一個の經驗敢て重きをなすに足らざるやも知られねど、多數教育家の杞憂が余の確信と相容れざるところあるを以て、余は特に玆に陳述すべき必要を見たる也。繩を見て蛇となすの過、或は襲ふべ

くもあらん。隱約の間、四方に無限の感化を逞うしつゝある現小說の勢力を雲煙視するに到つては、其愚遂に及ぶべからざる也。

（三十五、三）

アリストオトルの詩學

西歐の詩學、必ず先づアリストオトルに筆を起し、評論の文、多くはアリストオトルの旨意を布衍せざるはなし。抑も〳〵何等の緣由あれば、斯く迄に幾多學者の證典とせらるゝにやあらん。アリストオトルの詩學の內容とは如何なるものなるべき。其材料には何物をか用ゐたる。將た其位置は何處をか占むる。是恐らくは讀者の等しく問はんと欲するところなるべくして、吾れまた詩文評論の撮要を講述せんとする開卷第一に答へんと欲するところ也。

哲學に於ても藝術に於ても科學に於ても、常に希臘の淵源に遡るものあると同じく、詩文の評論に於ても、吾れ亦希臘の堂奧に上らざるを得ず。憶ふ昔二千餘年前、群賢の輩出、譬はゞ星羅の如くなりしならんか。其うちに在りて先づアリストオトルに指を屈する所以のものは、アリストオトル以前の評論に至りては、或は全部泯滅に歸し、或は斷片零墨に了り、或は系統なき組織なき偶言以上に出づる能はざりしに、漸やくアリストオトルに及びて、始めて希臘評論文學の特性を漸やく明瞭に推知することを得るに至りたれば也。

アリストオトルの詩學と謂ひ、アリストオトルの修辭學と謂ふ。是れ果して洵にアリストオトルの所作たるべき乎。否乎。修辭學は兎も角も、詩學に至りては學者に依りて其說を異にするが如し。西歐の學者にして業に已に斯の如き論爭ありとせば、語系を同うせざる韮才吾等の適歸すべきところは、抑も何れにか之れを求めん。假りにアリストオトルの所作ならずとするも、アリストオトルを去ること未だ遠からずして、初期希臘詩文の圓熟を觀察したる後になれる評論たるべき資格に缺くるなくんば、姑らく多數學者の所言に甘んじて、アリストオトルの詩學と題するも、穴勝ちに不遜の譏なくてやまんか。評論を廻轉せしむるには創作の材料を須たざるべからず。アリストオルの詩學は何物を基礎として立てりや。

熟ら〳〵アリストオトルの時代を想見するに、彼れが詩學の材料は詩文に存せりと言はんよりも、寧ろ詩に存せりと稱する方可なるを覺ゆ。即ち文學の大部分は律語を以て編めりき。其當時行はれりしもの大抵泯滅して今將た覓むるに途なきも、偶々猶ほ傳ふるところを見るに、盡く是れ絕好の標本たるを失はず。敘事詩若くは擬敘事詩のうちには、ホオマア存し、ヒイシオッド遺る。前なる者は大敘事詩家にして、後なる者は大敎訓詩家也。悲劇亦流離の災害を免れざりしも、有名なる所謂三大家猶ほ生く。喜劇作家のうちにては、アリストフアニイズ今日在り。敘情詩に關しては、彼れは之を利用したる痕跡を與へず。一方に於ては或種類のもの、例令ば牧羊歌、警句の如きは、發達未だ全からざ

りき。散文は律詩に較ぶれば材料著しく少かりしが如きも、プレエトオ●ゼノフオン●ヘロドタス●シュシヂデズ等盡く是れ當時の能辯家たりし也。彼の時代を通じて幾んど全くなかりしと思はるゝは散文小說なりき。是れ彼の不利益と見做され得べき點ならん。彼れの材料の不備の彼に與ふるに如何ばかりの影響を以てせしやを温ぬるを廢め、始づ吾れをして珍らしき迄に世論の焦點となれる、噂高き彼れの一小論文を瞥見せしめよ。

吾が詩學の研究すべき對象は、始づ詩術に起りて一般本質に及び、後種類の特質、全體の構造、各部の數及性質、併びに其他の詩法に存すと稱して、彼れ次に謂へらく、叙事詩、悲劇、喜劇、バッカス祭りの歌、且つまた笛遊び琴遊びも、盡く是れ摸倣（mimesis）なれども、個々の摸倣は第一材料第二摸倣すべき事物第三方法に關して各々相異なるころありと。斯くて彼れは音樂及舞跳を以て、文字を以てせざる摸倣美術なりとして一瞥を與へ、國語のみを以てする摸倣美術に歸へりて、平仄の詩人をつくるといふ世說に反對し、エムペドクレスに詩人の名稱を與ふるを拒みたり。彼れは平仄押韻の材料問題をきりあげて、摸倣すべき事物に及び、是れ働作する人也と斷じて後、曰く、人は良不良いづれかにあらざるべからざるが故に、あらゆる性格が此二範疇中に入るものとすれば、詩人の描く人間は。ありの儘の人生より優るか（即ち理想化する表彰）或はありの儘の人生か（即ち寫實する表彰）或はありの儘の人生より劣るか（即ち諷刺する表彰）三者其一に居らざるべからず。此三種類は繪畫にも舞跳にも其他何れのものにも存在すれども、悲劇喜劇のみに就いて言はゞ、前のものは優れる人間を描き、後のものは劣れる人間を描くことゝなるべしと。斯くて彼れは方法に關して摸倣に生ずる種類を擧げ、第一は話說にて表彰し第二は行動にて表彰することなせり。依是觀之、彼れは叙事詩と劇との外、他を知らざりしやうに思はる、

次に彼れは詩術は何が故に生すべきかの理由を述べたり。第一人間生れながらにして摸倣衝動を有す。摸倣して人は悉く快感するなり。斯は日常の經驗にて知り得べし。即ち現實物にては不快を感ずべきものも、忠實に之を表彰したる摸倣的創作物を見れば、快を感ず。例せば最下等動物若しくは屍體の創作物に對する場合の如し。第二摸倣の生れながらにして人間に存すると同じく、人間はまた諧調を好む性を有す。

詩人の性格に從ひて詩術は兩方向を取るべし。即ち眞摯なる詩人は、匹儔稀れなる高尚の人物を摸倣して描寫すべく、諧謔なる詩人は、喇笑すべき通常の人物を摸倣し描寫すべし。斯く述べて、彼は悲劇と喜劇との詩的發達を叙し、ホオマア●エスキラス●ソフォクリイズ等を觀察し、更らに進んで叙事詩と悲劇との關係に就きて曰く、兩者の摸倣が高尚なる人物に存する限りは同じなれども、叙事詩は或る種類の平仄を用ゐ、また話說體を以て表彰す。時間に關しても何等の制限なし。然るに悲劇の時間は、能ふ丈一日位のことにせんと欲する也と。次に彼れは一躍直ちに悲劇の定義を與へぬ（此定義

は後世學者間に大なる議論を惹起したるものなり）彼曰く、悲劇とはゆゝしき完きまた一定の廣さある或る働作をそれ〳〵の部に從ふて異なる美はしき快よき言葉もて話說體を用ゐずして行動する人物に依りて摸倣するものを謂ふ。悲劇の勤は恐怖と同情とによりて是等激情を淨化せしむるもの也。玆に美はしき快よき言葉といふは、平仄聲調等の修飾を具備する言葉にして、それ〳〵の部に從ふて異なるといふは、或は平仄のみの者もあり、或は音樂唱歌のこゝろもあれば也と。斯くて彼れは悲劇を組立つるに必要なる物を區分して曰く、悲劇は行動することに依りて摸倣するが故に第一道具だて第二白まはし第三鳴りものを要すべく、また悲劇は或る働作を模倣したるものにして、其働作に使用せらる人物が働作の性質を示すが故に、第四性格第五意味（內容、思想）を要すべく、また事柄を組合はせたる第六筋をも要すべし。即ち表彰の材料には鳴りものと白まはしあり。表彰の方法には道具だてあり。表彰する事物には筋と性格と意味とあり。就中最も必要なるは筋、即ち事柄を巧みに組合はせたるもの、別言すれば働作也となして、其理由を述べて曰く、悲劇の摸倣するこゝろは人にあらずして働作に在り。禍福の人生にあり。而して幸福は働作に存し、最高の善——人生の終局の目的——は或る種類の働作なるが故に、言ふ迄もなく、性格人物の摸倣は働作の摸倣のうちに含有せらるべきものとす。總ての事に於て、終局の目的は最も必要なるもの也。劇は性格なくとも存立し得べけれども、働作なくしては存立し得ず。されば第一位は筋にして、悲劇の精神とも稱すべく、第二位は、性格、

第三位は意味、第四位は白まはし、是れ言葉もて意味を表白するもの、第五位は鳴りもの、第六位即ち殿尾に道具だて來る、是れ美術以外のものにして審ろ器械的のものなれば也と。

是に於て、彼れは更らに復た筋に就いて言をなして曰く、先きに完きを要すといへるは、始あり中あり終あらざるべからずとの意也、任意に始めあるべからず、任意に終りあるべからず、始ありて後に來るべきもの從ふべく、終ありて前に存すべきもの先だつべく、中ありて後に從ふものと前に先だつものとあるべし。また一定の廣さを要すといへるは、是れなくんば美を生ぜざれば也。假令ば極小の動物を觀るときは、忽ち全體を知りて、各部を比較して區別する時間なければ、美なること能はざるが如し。極大の動物も美ならず。是れ總ての部を觀ること能はずして、從つて統一を破れば也。肉眼もて視る動物の場合と同じく、記憶もて知る筋の場合も、容易に全體を窺ひ知らしめざるべからず。全體を容易に理解し得て而して漸く廣ければ其筋愈々美はし。

次に彼れは後世の大問題となれる彼の所謂統一に論及せり。彼れ曰く、一人の主公なりとて其筋も亦統一ありと謂ふこと能はず。數多の作者は此點に關して大なる誤謬をなせり。人夫れ〳〵數限りなき事柄を有す。主公の事柄なればとて、作者が今描出すべき或る働作に關係なき部分は、盡く取り捨てざるべからず。或る筋は動作の摸倣なれば、一にして全きを要す。されば其働作の部分〳〵は須らく密接に相聯關すべきものにして、若し其一部分を除き去りて何等の差異を生ぜざるものならば、其部分

は正當なる意味に於いて、部分と稱し得べきものにあらざる也と。

斯の如く詩人の描寫すべき事柄に取捨の部分あるを述べたるが故に、おのづから詩人と歴史家との區別を說かざるを得ざるに至れり。彼れ曰く、詩人は實際に起りたることを書くにあらずして、起り得べきこと即ち必然的の結果を書くにあり。詩人は律語を以てし、歴史家は散文を以てするといふ區別は愚論也。兩者の區別は歴史家は存したることを語り、詩人は存し得べきことを語るにあり。故に詩歌は主として普通眞理に關係し、歴史は主として特殊眞理に關係す。詩歌が歴史よりも一層哲學的なる理由は茲に在り。されば或る種類の性格を有する人が如何なる風情にて必然的に語り若しくは行ふかを示すは、これ普通眞理にして、詩歌の目的とするところなるが故に、詩人は斯の存し得べきといふ旨を左券とすれば、全然新たに創作するも何等の不都合かあらむ。彼の悲劇に歴史上の實名を用ゆるは、實際に存在したること是れ存し得べきこと、實際に存在せざりしこと是れ存し得べからざることと、思惟する傾向人々に存すれば也。姓名も事柄も全く新作にして人をして快感せしむるものあり。詩歌としては目的を到達したるものと謂ふを得可し。是に於てか、詩人は律語を作るもにあらずして、筋を作る者なるを知る。

筋は當に存し得べきことを要するのみならず、また其用ゆるものは恐る可しと思はしむるもの、憐む可しと想はしむるものを以てせざる可からず。且つや筋には單複の二種あり。簡單なる筋とは、大破

裂を惹起するに反轉若しくは解明を缺くものを指し、複雜なる筋とは、其一つ若しくは二つを兼併するものを指す。茲に謂ふ反轉とは働作の狀勢及び必然の理由より反對の方向へ轉化すること、即ち思ひ寄らぬ逆さごとを生ずること。解明とは曖昧模糊のもの〻明瞭となること、即ち未知の爲めに諸種の事柄も起りしが、遂に明白となりて或は味方となり或は仇敵となりて落着することの意也。

悲劇を完全ならしむるには、筋の複雜なるを要するのみならず、表彰する働作は、恐怖と同情とを惹起すべき働作を摸倣せざるべからざるが故に、おのづから次のことを生ぜざるべからず。第一德操高き人をして福より禍に反轉せしむべからず。これ道德的滿足も同情も恐怖も惹起せらるゝことなくして嫌惡の情を惹起せらるれば也。第二醜惡深き人をして禍より福に反轉せしむべからず。これ構成せる働作の時に正義感を滿足せしむることあるも、猶ほ同情若しくは恐怖を惹起せしめざれば也。何となれば、同情は須らく享くべからざる悲苦を享くる不遇を視て生ずべく、恐怖とは悲苦を享くる人と己れ自身との間に類似あるを知りて生ずべきに、上述の醜惡なる人が禍より福に反轉するといふ傾向は、同情をも恐怖をも生ずべき素因なければ也。偖然らば餘すところは次の如き人ならむか。是等兩極の中間に立つ人即ち高德及び正義を以て顯著ならず。さらばとて敗德及び不義を以ても亦顯著ならず、全く憐れむべき錯誤の爲めに禍ひを招ねく人にして、而かも地位もあり、光榮もある人ならざるべからずと。彼れはまた恐怖及び同情は、道具だてよりも惹起され得べきも、働作其ものゝ事柄より惹

起さるゝ方詩人の當さに注目すべきところなりとし、禍ひの事柄を擧げて、如何にすれば適當に之を處理し得べきかを論じ、遂に必要なる性格論に移りて曰く、性格に關しては四ヶ條の遺却すべからざることあり。第一性格は良好ならざるべからず。如何なる人にも善はあり。婦人は寧ろ惡なれどもこれすら善あり。第二性格は適應せざるべからず。即ち男らしき性格を善しとするも、主公もし女性ならば、其男らしきといふことは適應せざるものとなるべし第三性格は實際らしからざるべからず。即ち世間に目睹するものに類似せざるべからず、第四性格は調和あらざるべからず。即ち描くべき性格が調和せざるものとするも、其調和せざるといふことに於て調和なからざるべからず。斯の四ヶ條を念頭におきて性格を描くにあたり、詩人は筋の塲合と同じく、必ず斯くあるべしといふ必然を目的とせざるべからず。斯の性格は斯くの如く行ふべし、斯の事柄は必ず斯くの如き結果に到着すべしといふところに注意せざるべからず。されば筋の發達も亦た筋其ものより自ら生すべきものにして、決して器械的に作れるものに依るべからず。

次に彼れは解明の種類を詳說して、外的記號例せば肉體の瘡痕、腕輪、頸輪の類を用ゐて解明の方法となすものを最も技工的ならざるものとし、働作夫れ自身より生ずるものを最佳とし、更らに筋に論及して曰く、筋に二階段あり撚合（desis）及び分解（ducis）是れ也。撚合とは其名の示すが如く、事柄の縺れ合ひながら複雜になり行くところにて、劇の冒頭より運命反轉のところ迄の間を謂ひ、分解

とはまた其名の示すが如く、縺れ合ひたるものゝ解くるところにて、其運命反轉のところより終局に至る迄の間を謂ふ。而して劇の筋をつくるにあたりては、叙事詩をつくる塲合の如くに、數多の筋を組み合はせたるものを作るべからず。長きに失するは最も避くべきこと也。

次に彼れは意味に就きて極めて簡單に、意味とは言葉の目的物全體を包含する者、寧ろ修辭學の問題に屬すべしと言ひ、直ちに話法に移りて說くところあれども、多くは文法を講ずるに過ぎず。中に修辭殊に比喩のことも出でざるにはあらざれども、話法其ものに就きては、僅かに下の數語を與へたり。曰く、唯だ明晰なるべくまた卑俗なるべからず。最も明晰なるは普通語なれども、斯は卑俗也。普通に流通せざる言語は、俗臭なくして高潔也と。

彼れは遂に叙事詩に及べり。曰く、從來叙べ來れる總てのことは、唯だ鳴りものと道具だてとを除けば、盡く叙事詩にも應用し得べく、兩者の相違は、寧ろ程度に存すと謂ふべし。叙事詩は餘程長くまた一定の平仄あるも、悲劇は何を用ゆるも可也。叙事詩は悲劇よりも驚奇のもの、否寧ろあり得べからざるもの、信憑し得べからざるものを含むも差支なきこと多し。是れ働作を肉眼をもて視ざるが故也。而して詩人なるものは、あり得べきことにして、あり得べからざることにして、あり得るやうに見ゆるものよりも、寧ろあり得べからざるやうに見ゆるものを好むべし。

斯く述べ來り述べ去りて、評論の困難なる所以を。稍々秩序なく羅列したる後、忽然として叙事詩悲

劇の優劣論を試みて以て彼れが詩學の修局を結びぬ。所謂らく、第一悲劇は叙事詩の有する總てのもを有するのみならず、望まば當さに一定の平仄をも用ゐ得べし。且つまた道具だてと鳴りものとを加へて幻境を圓滿ならしむ。第二悲劇を演ずる塲合は論ずる迄もなく、單に讀む丈にても叙事詩より明瞭にしてまた顯著なる感觸を與ふ。第三悲劇は短小にして能く摸倣の目的を到達す。これ刺戟を集拾し緻密にして生ずる結果が却つて興味を與ふるものなればなり。第四悲劇は叙事詩の如く粗漫ならずして統一多し。故に曰く悲劇を以て優れりとなすと。

如上是れアリストオトル詩學の大要也。例證は盡く削除したれば明快ならざる節もあるべく、且つは捃摭宜しきを得ざるべしと雖も、希くば書中の内容の面目を傳達し得たりとせむか。讀み來り讀み去るところ、彼れに先ちて世に現はれたる幾多の詩文評論よりも、量に於て多きのみならず、質に於ても亦遙かに優れるを視る。學說其ものゝ進歩の大なる、歸納的證明の堅實なる、二千餘年の後、猶ほ躍々として生氣あり。眞價豈認めがたからずとせんや。唯だ夫れ、今日の吾等よりして之を觀察すれば、一二の更らに添加すべきものありて存するを覺ゆるなるべし。

第一彼れの材料は、彼れの圖書館に依憑し、希臘文學のみを左券としたるのみならず、これ以外には何等の文學も存在せず、また存在し得ざるが如くに思惟したる跡あり。彼れは叙事詩家としてホオマアを有し、悲劇家として所謂三大家を有す。然れども、若し夫れイリアドとならびてダンテの神曲あらしめ、エスキラスとならびて沙翁の諸劇あらしめなば、悲劇及び叙事詩に關する彼れの意見の重大なる變化を生ぜしやも未だ容易に測る可からず。否、更らに一歩を進めて、希臘のスコット、希臘のサッカレイ、希臘のヂュウマ、希臘のバルザックあらしめなば、或は全然反對說を以てしたるやも知るべからざるにあらずや。想ふに、悲劇なるものが、一部は宗教に關し、一部は流行につれ、彼れの生るるさき二三世期間を通じて天才の旺盛なりし事實の爲めに、彼れの詩學中に於て斯くの如く悲劇の最高地位を占有するに至りたるならん。假りに斯かる事實なからしめん乎。詩學中の地位に變更なしとも斷言し得ざるべしと信ず。要するに、彼れの材料の希臘文學殊にアッチック文學に限られしは、詩文現象の全班を包括したるものと謂ふべからざるに似たり。

第二彼れの道德的偏執、また否定し得られざるべし。謂ふまでもなく、彼れはプレエトオの如く、摸倣其ものを惡事と信ずるが如き謬見を以てせざりしと雖も、其必ず善良問題を撰擇すべきものと斷信したるが如き、其喜劇を嫌厭するのみならずして幾んど嘲笑する口吻を以てしたるが如き、彼れが如何に道德的傾向を帶べる乎を立證して餘りあり。

斯の如くにして、彼れは二箇の桎梏を蟬脫し得ざりき。即ち彼れは吾が書庫以外に種類を異にして價値を等うする書庫ありと思惟せざりしと共に、詩學の概括すべき範圍を超越して倫理學に沒入したりき。想ふに彼れの流れを汲める儕輩が、主公は善良なるべきのみならずまた必ず純潔ならざるべから

すと謂ひ、若しくは行の統一に配するに時の統一と處の統一とを以てするに至りたるが如き、素よりアリストオトル彼れ自らの責を負ふべきことにあらざらんも、遂に玆に至らしめたる彼れの罪また決して全くなきにはあらざるべし。

摸倣の文字は後世に害毒を流して、十六世紀より十八世紀に至る所謂古辭派批評眼の誤謬を生みにき。作者の手腕を拘束する恐れあれば、寧ろ表彰若しくは創構の文字を以てするを可こせざるべき乎。彼れが働作に比較して性格を賤しみたるは惜しむべし。されば彼れは、彼れの所謂撚合と分解とを働作に附與せしめずして、唯だ一方向に進捗せしむる丈にても、性格其ものに統一ありといふ事實を認むること能はざりき。彼れの與へたる悲劇の定義の頗る曖昧に失して、幾百千の書冊の相互に論難駁撃を演するも、猶ほ且つアリストオトルの定義以上に明瞭ならざるは、例の Katharsis なる一語に起因すと雖も、詩文を超越して倫理に足を容れたる彼れの態度の始づ可ならざるものありたれば也。

任他。彼れの功績また偉大なる哉。歐州の詩文界に始めて一定の評論を以てしたるは彼れ也。一國の詩文を基礎とするものは、往々短見に失する傾向あれども、希臘文學の富豐にして多趣なる、優に其匹儔を見ずといへば、之れを材料としたる彼れの著書、また其價値なくして止まんや。而して其材料を使用するに忠實なる、是れ將た頗る注目すべき事實にして、到底今日の談理唯一連の企及ぶべからざるところ也。さればウォルズウォルスの誤謬の如く、平仄を以て詩歌の偶起的附屬性とすることあり

とするも、其罪またウォルズウォルスよりも遙かに輕小なりとすべし。殊に道德的偏執のプレエトオの太甚だしきに至らずして文藝の特殊目的を快樂におくを遺却せざりし一事實こそ快樂派に贊同せんと欲する吾れ一個人の最も多とするところなれ。更らに悲劇の特性を錯誤（hamartia）主義に標置せるは、彼れの洞察の偉大なるを證すべきものにして、悲劇中の人物の禍ひを生ずる行動を以て洵に不得止ものとし、人間の錯誤の腑甲斐なきものなるも嫌忌すべきものにあらざるを見て、之を憐れむと共に之れを宥さゞる彼れの所說は、實にも沙翁とエスキラスとをして共に手を携へしむる交叉點を認めたるものと謂ふ可し。作者これなくんば小悲劇家たり。作者これあらば大悲劇家たり。作者たるもの須らく念頭に鏤刻して決して閑却あるべからず。

（三十五、五）

羅馬の案内者

ミケル、アンジェロオ、ブオナロッチイに就て少しばかり言ひたい。詩賦、繪畫、彫刻、建築、ごの道にもすばらしいミケル、アンジェロオの天才をかねて崇めては居たが、さればとて點心やお菜にミケル、アンジェロオは欲しくない、時たま變化がいる。ジェノアでも何から何まで皆んな此人の意匠、ミラノでも皆んな此人か又は此人の弟子の意匠、パチュア・ヴェロナ・ヴェニス・ボロニヤでも、案内者の口にする所は皆んなミケル、アンジェロオである。フロオレンスでも皆な此人が書いたり

作つたりしたものばかりで、偶々さうでないものがあれば、そこには此人が毎日腰を掛けて眺めて居たといふ石を見せる。ピザ[十]で此人の意匠でないものは彈丸製造所ばかり、これもひどく歪んで居まいものなら、てつきりミケル、アンジェロものなのだ。レグホオン[十一]の波止場の意匠も此人、チヴィタ、ヴエッキア[十二]の稅關規則の意匠も此人である。が、こゝに、こゝに恐ろしいのがある。聖ピイター寺[十三]の意匠、法王の近衛の制服、タイバア河[十四]、ヴァチカン博物館[十五]、コリシウム劇場[十六]、カピトル堂[十七]、タアペイア岩[十八]、バルベリニ宮[十九]、聖ジョン寺[二十]、カムパニア平地[二十一]、アピウス街道[二十二]、七丘[二十三]、カラカルラ温泉[二十四]、クラウヂウス水道[二十五]、クロアカ、マクシマ、所謂永遠の都市は此退屈おやじの意匠なので、人や本[ほん]が本當を言ふものなら、書[か]いふ書をも皆んなかいたのだぞ。いつぞや案内者に藪澤が「も、も、もう澤山、澤山、おしやべりは御免だ、糞味噌ごつちやだ。神が伊太利をもミケル、アンジェロオの意匠でこしらへたのだと云はうさ。」とやつたのも尤だ。

ミケル、アンジェロオが死んでしまつた人だと、昨日聞いた時ほど、しんから難有くつて、胸が透いて、落着いてゆつたりした事はなかつた。

ところで、わし達はこん度の案内者には、其手を喰はない。あのヴァチカンの長い〳〵廊架の繪畫彫刻のある處を連れ廻つて、おほよそ二十箇所ほども矢張長い〳〵繪畫彫刻のあるところを連れ廻つて、シスチネ[二十六]寺の大畫幅を見せて、青天井一面に張り詰められさうな、夥しい壁畫を見せて、大抵どれもミケル、アンジェロの作とおつしやる。そこで、これまで利目のあつた惡作劇[いたづら]をやつて見た。それはこつちがぼんつくになつて間拔な事をたつねるので。先生達は流石にからかつて居られるのだとは、お氣が付かれない。

案内者が彫像に指をさして「銅像」と云ふ。わし達は澄まして居る。藪澤「ミケル、アンジェロのかね。」案内者「いえ誰のか分らないです。」次に昔の羅馬の公會所[フォラム]に往く。藪「ミケル、アンジェロのかね。」案内者はじろりと見て。「いえ、その千年前。」次は埃及の方尖碑[オベリスク]と來る。藪「ミケル、アシジェロオのかね。」案「途方もない、旦那、その二千年前ですよ。」

かう疊み掛けて尋ねられるにうんざりして、案内者先生何んにも見せたがらないことがある。奴さん出來る丈の手で、ミケル、アンジェロオ一人で世界の一部を造つたのだといふことを、わし達に呑み込ませたいのであるが、兎に角まだその利目が現れない。調べたり見たりして骨の折れた目と頭は、休まずには居られぬ。さうでないと、わし達は正札付のぼんつくになつちまう。そこで先生相變らずからかはれる。併しそれがいやなら却てお氣の毒さまなので。わし達にはいやでない。

こゝに、そのうるさい案内者といふ奴の事を一寸書きませう。大抵の人は、案内者なしに見物したいとおもふが、それは遣り切れないのを知つて居る故、きやつら仲間に困らせられた返報に、向うをなぐさんで遣りたくなる。わし達はこれをしとげたのだ。お役に立つなら、あなた方、どうぞ此手を御隨

意にお使ひ下さい。

案内者達には、物事をこんがらからせて、つまり分らなくしてしまふ丈の英語しか使へぬ。彫刻、繪畫、寺院、其外いろ〳〵珍らしいもの〻縁起由來は、諳誦して心得て居る。話の工合は丸で鸚鵡の格で、邪魔を入れてとちらせて見ると、先生あと戻りをして、又おさらひだ。先生は生涯外國人に珍らしいものを見せて、その讃めるを聞いて幕すばかりだ。凡そ讃めさせて嬉しがるのは人情で、仲間のまへに、子供か所謂見せつけをやるのも、詰まらない種を人より先に吹聽したがつて、天氣の惡い日に井戸端會議の起るのも、皆んなこゝから來るのだから、人に成程と感服させるやうな珍らしいものを見せるのが專責である案内者といふ奴に、どれ丈此情が強いかは察しられる。其手を喰つた日には、とてもこつちが落着いては居られない。わし達は此道理を知つてからは、決して物に見とれない、決して物を讃めない、どんな結構の物の前に出ても、きよろりと澄まして〻こんまの顔をする。わし達は、かういふ風に案内者の弱點を攫まへたので、それからこつらは、これを利用して先生をおこらせた事はあるが、自分で腹を立つた事は一度も無い。

同行三人の中で、醫者の鍬澤が尋ね役を仰付つたは、彼奴が澄まし込んで居て、馬鹿づらで、お負に、聲までが間が抜けて聞えるからである。此役目の廻つたのも、まことに已むことを得ない。

ジェノアの案内者連が、亞米利加人を攫まへたがるのは、亞米利加の掠鳥なら、閣龍の遺物とさへいへば、どんな物をでも嬉しがるからだ。こゝに來ると、わし達の案内者どのも、始終跳ね廻つて居て、丸で擽條でも呑んで居るやうで、はづんで居て、あたゝまらないで、いふには、

「さあ、旦那、こちらへ、こちらへ、閣龍の書いた手紙を御覽に入れる。自分に書いた、自分の手で書いたのを、此方へ〳〵。」

かう云つて市の御殿へ連れて往つた。錠前と鍵とをやゝ暫くおほぎやうにひねくり廻して、扨、現れ出たのは汚い古紙ぎれである。案内者の目はぴか〳〵する。まはりを躍り廻つて、指尖でちよいと衝いて、「お話申した一件、ね、旦那、そうら御覽なさい、閣龍の眞蹟、自分で書いた。」わし達は知らぬ顔で、澄まして居る。獨りゆつくりと、鍬澤は丁寧に紙きれを調べて、扨、何のあいそもなく、

「あゝ、案内者殿や、これを書いた人の名を誰と云つたかねえ、さつき誰と云つたかねえ。」

案「閣龍、あの有名な閣龍で。」

又丁寧に調べて、

鍬「あゝ、自分で書いたのかね、それとも、それともどうかね。」

案「自分に書いたのですとも。閣龍、眞蹟、自分で書いた。」

鍬澤は紙きれを下に置いて、「わしは亞米利加ではやつと十四位の子供達でも、これよりは上手に書く

のを知つて居るがね。」

案「でも、これはあの有名なコロ……」

藪「誰でも搆はんがね。こんなへた糞は見た事がないぞ。お前、外國人だからといつてだませると思つてはいかん。わし達もそれ程馬鹿でないでね。本當に手本になるやうなのが有るなら、見せさつしやい。無いのなら、歩き出さつしやい。」

わし達はあるき出した。案内者は頗る當惑したが、最一つ運だめしと出掛けた。それはわし達がきつとまゐるとおもふのがあるので。「あ、旦那、こちらへ來なさい。りつぱな、すばらしい、閻龍の半身像を御覽に入れる。すてきにりつぱな、すばらしい。」

扨案内者はりつぱな、左樣、本當に立派な半身像のところへ連れて來て、反身に氣取つて、「さあ御覽なさい、旦那、すばらしい、りつぱな閻龍の半身像で、立派な臺石で。」藪澤は目がねを取り出した。かねて用意があつたので。

藪「あゝ、案内者殿や、此人の名は、おまへ、あの何といふたかねえ。」

案「閻龍、大閻龍で。」

藪「閻龍、大閻龍、はてね、で、何かね、その人の手柄といふやうな物は。」

案「亞米利加發見で、亞米利加の發見で。」

藪「亞米利加の發見。うそを。そりやあうそだ。わし達はこないだ亞米利加から來たばつかりだが、あつちではとんとそんな噂はなかつたがな。閻龍。いゝ名だ。あゝ、案内者殿や、此人は死んだかね。」

案「途方もない事を。死んでから最う三百年になりまさあ。」

藪「何をわずらつて死んだかね。」

案「知りませんなあ。」

藪「疱瘡ではあるまいね。」

案「知りませんなあ、旦那。」

藪「麻疹かしら。」

案「さうかも知れませんよ、私は存じません、いづれ何かで死んだので。」

藪「あの何かね、ふた親はまだ達者かね。」

案「途方もない。なんで、旦那、そんな事が。」

「あゝ案内者殿や、これはどちらが半身像で、どちらが臺石かね。」

案「滅相な、あちらが像で、こちらが臺で。」

藪「あゝ、成程々々、いゝ取合せだね、本當にいゝ取り合せだね。IS—IS THIS THE FIRST TIME

THIS GENTLEMAN WAS EVER ON A BUST?」

此しやれは外國の案内者には通じなかつた。亞米利加のしやれの際どいところは分らぬ。

此案内者の爲めで、わし達は始終面白く見物した。きのふも珍らしいヴァチカン博物館で二三時間遊んだ。いゝ、あゝいゝが吭元まで出るのを、じつと奥歯でころして、つまり見事にやり遂げたが、わし達の外に、こゝで遣り遂げた人はあるまい。案内者先生は分らなくなつて途方に暮れた。駈けずり廻つて、珍らしい物、珍らしい物と捜しまはつて、有丈の伎倆を揮つても、一向利目がない、わし達はちつとも感じた樣子をせぬ。先生は、前から、一番珍らしい物をといふので、どん尻まで藏して居たものがある。これは世界無類の品で、埃及の木乃伊である。扨、そこへわし達を連れて往つて、こゝでこそと思うたらしく、例のやうにはづみ出した。

案「御覽なさい、旦那、木乃伊、木乃伊。」

目がねが出て、例のとほりゆつくりと調べた。

藪「あゝ、案内者殿や、おまへ、此人の名を何とかいうたねえ。」

案「名ですつて。名はありません。木乃伊です、埃及の。」

藪「むゝ、成程、生れは當地かね。」

案「何で、旦那、埃及の木乃伊が。」

藪「あゝ、成程、分つた。では佛蘭西だね。」

案「いゝえ、佛蘭西でもない、羅馬でもない、埃及で。」

藪「埃及。はて聞きつけない。外國の田舍かしら。木乃伊々々々。じつとして、落着きはらつて居る。案内者殿、こりやあ死んで居るのかね。」

案「滅相な、旦那、死んでからもう三千年で。」

藪澤は憤然としたといふ風でそちらへ向いた。

藪「やい、案内者、外國人だから默つて聞いて居ると思つて、馬鹿にした、わし達を支那人扱にするのか。わし達に腐つたいかさま物なんぞ、見せて、ど、ど、どうしてくれう、うぬ。やい、生きた生の屍骸があるなら出せ。出さないといふなら、うぬ、な、な、なぐり飛ばすぞ。」

（MARK TWAIN. マアクトウェエン）

1. MICHEL ANGELO BUONAROTTI
2. GENOA
3. MILAN
4. COMO
5. PADUA
6. VERONA
7. VENICE
8. BOLOGNA

羅馬の案内者

9. FLORENCE
10. PISA
11. LEGHORN
12. CIVITA VACCHIA
13. ST. PETER'S
14. THE TIBER
15. THE VATICAN
16. THE COLISEUM
17. THE CAPITOL
18. THE TARPEIAN ROCK
19. THE BARBERINI PALACE
20. ST. JOHN LATERAN
21. THE CAMPAGNA
22. THE APPIAN WAY
23. THE BATH OF CARACALLA
24. THE CLAUDIAN AQUEDUCT
25. THE CLOACA MAXIMA
26. THE SISTINE CHAPEL

人骨馬嘶

"To ask is my vocation, not to answer."

夜沉々。燈明滅。天外忽ち詩文界に於てと始づ奇聲を發するものあり。耳を欹てゝ聽く。

予は人也、人の骨を有す。此骨化して馬の骨となること能ざる也。予に舌あり、人の舌也。しかも屹屹、毫も意を爲さず。其言馬の嘶くよりも劣る。題して人骨馬嘶と謂ふ。寧ろ當れるに庶幾からんか乎。

總じて詩文の醇なるものが二重の性質を具ふることは、何人も知了するところなるべし。即ち一面に於て興奮を與ふると共に他面に於て慰藉を與へ、一たびは紛擾を招ねくと共にまた一たびは鎭靜を投ずるもの、即ち所謂二重性也。故に詩文の技術は、更らに美に於て利するところあらんが爲めに故意に諸美を犧牲に供するところに在りと謂はんも差支なし。進んで戰爭を辭せざるは是れ單に平和を得んが爲めの戰爭也。望んで格鬪を敢てするは一層深遠なる調和を需めんが爲めの格鬪也。されば世上の所謂何人も手にし得べき詩文は、何事をも敢てせざるが故に從つてまた何物をも與へざるもの、是れ其名は詩文と稱すべきも其の實詩文と稱すべき程の價値あるものにはあらざる也。俗の所謂沈香も焚かず屁も放らざるもの也。單に慰安を與ふるだけの詩文は、美の範圍を逸出すべき危難を有せず。是れ詩文也。しかも必ず常に陳腐なる理想を含む。新たに覺醒せるものは然らず。美の感觸を失はしむべきほどの紛擾を招ねくべき大危險あり。或は辭句の溫雅ならざるものあり、或は譬喩の適應せざるものあり、或は表白の衣裝の完備せざるものあり、或はトオンの統一を得ざるものあり、或は思考深遠に失して一種の觀念の具象の如く多面にして有機なる人間に似ざるものあり、或は偏狹なる宗教の

旗幟押立てゝ時に詩文の反映を生ずべき想像生活に衝突するが如くに見ゆるものあり。新派の缺陷を數へ來らば維れ日も足らざらん。而して是れ詩文也、詩文の一資格を具備するもの也。

破壞的精神其ものが詩文的精神にあらざることは言ふまでもながらん。詩文が決して斯の矛盾せる境地に安むすべきものにあらざることは智者をまつて後識るべきにあらざる也。然り、安んずべきものにあらずして而かも猶ほ安んぜざるを得ざるが如く、大なる作物、大なる天才の分解して不調和となり千種萬態の詩的要素となるは、前面を捨てゝ後面に、或は半生を捨てゝ半生に、或は一代を捨てゝ次代に更らに高く且つ深き調和を作らんが爲めにして洵に不得止ことゝす。底知れぬ湖の如き心なるものゝ上を神風の吹き下す情を放ちやりて理窟の上に出で、方便の下にくゞり拔け、社會人生宇宙なんどの浮島々々を經廻り行けば、兎にも角にも更らに新たなる假りの港に錨を投するまでには激浪の揚ること抑も幾千尺ぞ。この旅路や人生と共に極みなく天地と共に長かるべし。世紀々々は漸く太き聯環にも似たらんか。吾等の亞米利加は那邊にありやとは、寄るべなき民衆が必ず其時代の新派詩人に聽かんことを望み且つ惴ぐところなりとす。陸の前に海あり、平和に先ちて戰鬪あり。知らず、現代の詩人等は何ものを夢想しまた如何なる勇者の爲めに歌ひつゝありや。

讓歩せざる意志、讓歩せざる感情は此社會と共に存在すること能はざる也。人生に斯の種の意志、斯の種の感情を容るべき餘地なく、從て斯の種の意志斯の種の感情は、自己が沈滯し腐敗せりと感ぜる社會に對して、革命の反旗を翻さゞるを得ざるに至る。憂鬱を詩神とし薄運を題目とするのみが厭世の意義にはあらざる也。嘲笑も厭世也、憤激も厭世也。斯くあるものと斯くあらざるべからざるものとの調和は到底現社會に於て得がたしと感ずれば、理想は破壞され、煩悶は漸く太甚だしからんとす。リア王マクベスを描ける作者が夏の夜の夢若しくはあらしを描くに至れるは後のこと也。生れながらにして最高の形式のもとに最高の美を現し世に見んと想ふが如き詩人なるものゝ、覺官世界を醜と見做し惡と感ずるは寧ろ自然の徑路にして、己が希望に些少たりとも適應することなきを知らば、眼に視るもの悉く是れ猜疑の種子とならざるはなく、手に觸るゝもの悉く是れ檢査を經ざれば止まざるべく、世上に於て大と稱し高と名くるもの果して大と稱し高と稱するに足るべき價値を有するや否やを問ざるを得ざるに至るべし。一家に於ける間々事らしき幸福は是れ其羨慕せざるところ、一世に於て眞理と許すところ、是れ其最も怪訝とするところ也。大膽に檢査するものは其結果を表白するに於ても亦大膽也。紛擾を敍長する也。興奮を旺盛ならしむる也。宣戰の聲誰れかまた Terje Vigen を想起せざらんや。

"But when, on days of storm, his eye
Gleamed like the stormy day,
The boldest came not unwillingly
In Terje Vigen's way."

人骨馬嘶

外を賤しみ外を輕ろしとするは、同時に內を貴とみ內を重しとする個人主義を生むに至らん。社會と個人と孰れか優れりや。天若し或る個人に多く賦與する時は同時に社會をして痴愚ならしむる時にあらざるや。ギョオテ・シルレルに厚き時代は社會に薄き時代にあらざるべき乎。是れ彼の漸く信ぜんと欲するところにして、其始め極めて眞摯に、己れ以上の人に憑らんとし、己れの取つて以て典型とすべきものを發見せんとしたりしものが、一旦其價値なきを思ふや、翻然として己れにかへり己が天賦の個性に依憑せんと欲する素より其ところ也。於是、祖國の一子、全部の一分、團體の一員を見ずして唯だ天與の一個性を見る而已。一個性を想ふ而已。南歐のフロオベルは人は愚かなるが故に惡也とし、北歐のイプセンは人は惡なるが故に愚也とせり。己れを重しとして社會を輕んじたるは兩者共に軌を同うす。

己れを重しと感ずる者は政治に於て多數決の議會を嘲けるべく、社交に於て朋友を無益の浪費者と見做すべく、夫婦に於て一が他に對する義務よりも寧ろ一が己れに對する義務を先きとすべく、個性を貴からしむるために自由を喜ぶべく、從つて all or nothing の題辭を擇ぶべし。物識なる哲學者の理路正しき厭世觀を有せずと雖も、詩人はまた詩人だけの厭世思想を有することを得べけん。哲學者の厭世觀は人生其ものゝ價値なきを唱へ、幸福を拾集したるもの苦痛を拾集したるものに比して遙に尠く、青春に悲哀あり、勞働に快興なく、歡樂夢のごとく、物慣るれば感更らに淺きを喋々せん。シェオペンハウエルとなりフォン、ハルトマンとなりて人生其のものゝ幸福なりや否やの問題に指を觸るゝことなくとも、四邊の世間の惡しきことを知れば是れ詩人の厭世思想を生じ得べし。哲學者の厭世觀は戀愛の頼むに足らざる影の如く、個人に幸福を携來ることの頗る遲きに失する所以を詳述せん。此點に於て詩人は却て反對に同情を表示することあるも、近代人間の退化し來つて色情唯一の動機に契約したる法律上の結婚なるもの趣味なき Philistinism を嘲ける厭世思想を生じ得べし。哲學者の厭世觀は幸福の容易に得べきものにあらざること、快樂は五指の間隙より拔け出づること、偶々人の慾望するものを手にすることあるも決して豫期の所感を心に與へざることを喃々し、彼の一世の寵兒たるギョオテすら七十五年間僅か四週の眞の快樂だもなかりきといふ證言を左券とす。詩人は斯の如く幸福の不可能なることを信ぜずして、異なれる狀件の下に於て幸福の必ず存在し得べきを想ふと雖も、所謂半開の都市に「何等の快樂なくして唯だ放佚あり、人生の目的なくして唯だ位階あり、眞正の職業なくして唯だ商賣あり」を見なば、之を鞭ち之を教え之を革めんとする厭世思想を生じ得べし。哲學者の厭世觀は樂世觀を一種の唯物主義となし、世界の破滅を脅かすものを樂世觀となし、人に教ゆるに未來の希望の頼むに足らざるを以てせんのせりとし、社會の地層を壞敗せりとし、社會の空氣を不健全なりとするも、若し之に點ずるに一道の靈火を以てせば、之を清淨にし之を鞏固にし、從つて己れの理想を現化し得べしとする基礎の上に立つ厭世思想を生じ得べし。憤

激的厭世觀は詩人の數々感じ得べきところ、一身に於て悲慘の經驗を嘗め苦鬪の利益の侮り易からざるものあるを知らば、社會に於ても亦苦鬪の利益、打擊の利益を悟り得ん。世を憤る詩人の求むる自由は常に煩悶として存せざるべからざるに似たり。昔者、レッシング、天若し右手に眞理左手に眞理の研究を以てせば、予は左手を取らんと謂へり。眞理に代ゆるに自由を以てせば好箇詩人の求むるところならん乎。經世家の標榜とする One step forward every day の如き、新たに覺むる詩人の感興に到底入り來らざるところ、世の先頭にたゝんとするものは每ねに必ず marvais sujet の惡評を甘受せざるべからざる也。

テエヌは、人魔にあらざれば詩文が反抗し若しくは誹謗するは洵に意味なきことにして、不完全は萬物の順序、恰かも植物の花瓣に畸形あるが如しと想へり。社會人間の缺陷を凝視して遂に盲目的に反抗するは、詩觀よりすれば是れ單に道德家にして了る而已。新たなる世界が何れにか存せざるを得ざる也。後面に、後半世に、若しくは後代に、設し哲學的思考はなくとも、必ず新たなる空想世界の伴はざるべからざる筈也。然らずんば詩人ありて眞の詩なく、詩文ありて醇なる詩文なし。知らず現代の詩人は抑も何ものを與へつゝありや。

或る詩人は或るものを或る方法に依りて或る處へ表示す。故に革命的詩人の成効若しくは失敗を知らんと欲せば、斯の四點より觀察せざるべからず。或る處とは社會也。社會の組織若しくは性質が詩人の理想と相背馳して竟に濟ふべからざらんか。詩人は必ず失敗すべし。而して此問題は今述べず。或る方法とは詩文の形態也。其形態が作物として見るに足らざらんか。詩人は必ず失敗すべし。而して此問題も今述へず。或る詩人とは詩人の種類也。詩人自身が先頭に立ちて奮鬪すべき資格あらざらんか。詩人は必ず失敗すべし。而して此問題も今述べず。或るものとは詩文の思想也。其思想が瞬間的の生命を有するものにして電光の如く石火の如き敢果なきものならんか。詩人は必ず失敗すべし。此問題こそ時文の聯關して今玆に述べざるべからざるものなれ。

時代には時代の觀念あり。此觀念は詩文と稱する材料に依憑して其精神的生命を表示す。觀念は詩人の生むものにあらずして時代の何れの部にか生るゝものなり。或る觀念が圖らずも感奮の狀態に入りて生育するや、觀念界の戰場に於て、奮戰し格鬪し、適者生存の原理によりて其强烈なるもの愈々發達し益々純潔となり、遂には聖書の天の使者の如く其時代を司配するに至る。詩人は之を生ます、斯は詩人の天職にあらざれば也。されど眞の詩人は之を感知す。否、其觀念の未だ戰場に於て煩悶しつゝ生長しつゝある時、未だ一般の注意を受くるも未だ嘲笑せられつゝあるとき、彼は既に之を感知する也。此觀念に伴れて彼は研究することなく之を理解する也。勿論詩人にして觀念なきはなし。平凡の詩人亦觀念あり。然れども是れ先祖の觀念也。着古るしの觀念也。眞詩人の觀念は其時代に聯關する新しき觀念也。ハイネ其「新歌」に序して曰く、之を筆にするとき頭上に鳥

の羽音を聞きぬ、乃ちベルリンの新進作家等に語りしに、互に訝しき面もちさして見合ひ、口を揃へて彼等に斯かることの起らざりしよしを答へぬと。彼等の聞かざりし羽音は即ち是れ新思潮なりし也。天津橋上、初めて杜鵑の一聲を耳にする人は誰ぞや。

然らば當代の觀念は何ぞ。明治の觀念の憑りて以て其教を受くべき西歐思潮の大勢は如何。眼を擧げて視るに、諸觀念の今正さに角逐しつゝあるを知る。適者生存の桂冠が何れの觀念の專有となるべきかは詩人ならぬ予の未だ知らざるところ也。我天職は問ふにあり、答ふる者は予にあらず。イブセンの傳播者は一現象を捕捉したるのみ。美的生活の思想は僅かに現代思潮の一部に過ぎず。ニイチエの傳播者は一現象を捕捉したるのみ。美的生活の論旨は唯だ其一變體として足れり。十九世紀の巨人科學者が宇宙の秘密を解釋し盡すべしと吾れも人も像期したりしに *ignoramus et ignorabimus* 吾等之を知らず而して後來も知らざらんと斷言せるに絕望して、蜘蛛の子を散らすが如くに四方に分れたる民衆は、思ひ〳〵に其歸趣を求めんとはする也。解散の時代也。分裂の時代也。統一なきを以て標榜とすべき時代也。抑もまた詩人は其須らく感知すべきところに感知して其表白といふ本分を盡すべき時代也。眞詩人は神の冥助ある而已。時勢の反映を視よ。ブランあり、トルストイあり、イブセンあり、ズウデルマンあり、ハウプトマンあり、メエテルリンクあり、ダンヌンチオあり、ゴルキイあり、抑もまたニイチエあり、ヘッケルあり、ハルナックあり、何ぞ夫れ多趣多樣なるや。ドクトル富士河、心理學會に於て其研究の題目たる「蟻の腦髓」を詳

說し、附するに「世界の謎」著者の一元論を以てせり。私かに思ふ、文壇に於て科學崇拜を口にする者は、竟に歸へりて其兄弟分たるバチルスと盃の献酬をなすに至らん乎。或はまた宗教熱を皷吹する者は愈々進みてハルナックの跡に趁かんとする乎。統一的新宗教新道德新文學なんどを口にするものは其應さに求むべからざるものを以て擬せんとする也。

時勢を知らざるものは憫むべき哉。時勢を知つて知らず顏する者は惡むべき哉。抑もまた時勢を知るも何等かの信仰の爲めに之れに動かされざるもの、羨むべき乎否乎は神ならぬ身のいかでか知るを得ん。昔者 Sigurd 及 Egstein と名告れる兄弟の王ありき。各々相持して下らず。一は國にとゞまりて之を文明にしたるが爲めに聲價を得、一は諸方に流寓して大膽なる旅行を敢てしたるが爲めに聲價を得たり。兩者各々嘆美者を有し、一は必ず他を排擠せずんば止まざらんとせり。而かも兩者は兄弟なりき。正當なる結果は遂に兩者をして王國を折半せしめぬ。夫れ山は峙つて立ち、水は流れて動く。流る〻水、峙つ山、共に是れ地上のものにあらずや。

試みに經世家となりて詩人の爲めに計らん乎。詩人は空想に終始すべく、行爲に出入すべからず。詩人は夢想を專らとすべく、實行を敢てすべからず。社會は詩人の構成するものにあらざれば也。最も周到なる方案は作中の第三者を藉り縹緲隱約の裡に暗示を與へて以て What is really wanted is a revolution of the *spirit* of man をモットオとなすに若かず。況んや世の詩想を明言する人のごとき須らく沈

默して二元に歸へれ。覺醒の時間は責任の時間也、義務の時間也。一半は夢、一半は現、蓋し最も佳ならん。awaiting the approach of the time in a spotless wedding-garment 先覺の言、爾之を諒とせずや。

名けて夢的生活と謂はん。爾、漁郎、之れが眞味を知らんと欲せば天高く氣清き頃ひを待ち、ギタアを携へ、三更月を踏んで來れ。

（三十五、七）

詩的空想

飄忽として天空を翱翔せる哲學、蠢爾として地上を匍匐せる醫學、兩者相會して茲に始めて人生解釋の使命を完うすべき新心理學を哺育するにあらざる乎。されば世界を悲觀する眼は始づ俯して腸胃の食滯を尋ぬべく、葛根湯を捧ぐる手は更らに進みて精神を讀むを要務とすべき也。此交叉點に立ち此鍵鑰を握るもの、卽ち是れ新心理學の須らく司配すべきところにして、ヘルバルト以後自然科學を研究し、ウェベル、フェヒネル將たロッツェ以後心身現象の關係を追躡して止まず。私かに想ふ、心的生命の最高潮にして物的質實に根蒂最も深き彼の詩的空想なるものを研鑽して、爾かく四方に喧傳せられたる夢及び狂との關係を堅實なる材料に依憑して明晰なる說明を寄與するもの、幾年の後の斯學の賜物に外ならずとせんや。メッセル捨てゝ獨り南窓に嘯く我徒、遂に適歸する所を知らざる也。悲しからずや。

古人既に詩的空想と夢的空想及び狂的空想との關係を考察せる者ありき。デモクリタスは喪心なくんば詩聖を解すべからずと信じ、プレエトオは理解の到達し得られざる神聖なる狂想ありとなし、アリストオトルは狂想の混淆なくして大人の事業を爲し得ざる旨を言ひ、ホレエスは詩的感奮に與ふるに嬉れしき狂想の名稱を以てしぬ。是れまた實に古代詩學の敎義學說の基礎なりき。而して近世は如何。獨に於て、シルレルは一般創作家に一時性の狂想ありとし、ギョオテは詩的空想と狂的空想との密接を說き、ショオペンハウエルは心的生命の雄大なるものに與ふるに繩墨を逸出せる多感を以てせり。大ピネエ後久しく心的科學の重要なる地位を占むる佛に於て、ルノオダンは詩聖の感奮を妄覺に負はしめ、レリュウは妄覺をソクラチイズの神とし、モロオは詩的空想を不健全の範圍に存する感奮の一狀態ならんと言へりき。重大なる問題は洵に此間に伏在する也。吾人は如何にして歸納的結論を茲に求めん乎。試みに詩的空想の千態萬種を一瞥するに、何人も始づ其寫象の豐富なる、其情緒の精妙なる、將たまた現實を超越して連合案配の自由なるに注目せざるものはあらざるべし。

忠實なる心理的態度を以て檢査すれば詩聖は必ず普通人間のノオルムより離れたる痕跡を與ふるを見ん。非常なる勢力、容易なる心的過程、從つて之を喜び之れに憑り、自由に眞摯に寫象を連合して以て吾が固有の生命となすが故に、他方面の他目的に其活働を向くること能はず。之を現世の利害問題

に於てせん乎。繁雑凡俗のうち、精妙なる情緒は、或は憂鬱となり或は多感となり或は轉じて鈍感となりて、人の所謂非實際的若しくは幻想的とならずんばやまず。既に常道を逸出せる心的狀態は、あらゆる經驗を超越せる作物を創構する也。泛々たる寫實の徒が矻々として現實を描寫し標本に從つて摸倣是れ事とするうちに、詩聖は模型を創む。卽ちあらゆる經驗を超越しながら、猶は能く普通の經驗を一層强く捕捉し一層深く吾人の心情に接近せしむる也。詩的空想は譬はゞ石の如き此平凡なる世間を去り此有限なる人間を超え、美はしき影の如くに天の一方に攜がる也。視よや其千秋亡びざる人間の行動するあるを。プロメシュウス在り、アンチゴネエ在り、ハムレット在り、ファウスト在り、或はサンコパンザ在り、將たまたピックウィック在り。吾人は實に現實の人間と共にある時の如く、是等の人間と共に住み、共に愛し、共に恐れ、共に笑ふ也。詩的空想が千秋死滅せざる人間を與へ得ると共に、之を與ふる心的過程も亦頗る注目に價するものあり。詩聖は自ら作れる人間及び境遇を全く肉眼にて現實を視るが如くに視る也。妄覺也。自作の人間を實際の人間の如くに思惟し、自我を分ちて之れに入れ、以て感じ、以て考へ、以て話す也。タッソオ傳を讀め。ギョオテ傳を讀め。バイロン傳を讀め。アルフィエリイ傳を讀め。ヂックンス傳を讀め。抵抗し得られざる創構衝動の存するありて詩的空想の自由に活躍する時、眞個人をして夢的空想、狂的空想を儘ばしむるに堪ふ。夢みる人は自作の人間に吾が心を附與し、之を恐れ、之を喜び、狂へる人は妄覺に陷り、狂想となり、固有の自己は他人となりて再現すれば也。

論旨の多岐に亘らむことを慮り、詩的空想の原因問題及び種類問題には一切關係せざるのみならず、抽象したる一個の心的過程を對境となすと共に、夢的空想、狂的空想は孰れも正當なるもの、別言すれば眞性なる夢及び狂として吾人の認定するものを取らんと欲す。詩的空想、夢的空想及び狂的空想に共通なるところは、寫象を構成するに當りて現實の條件に制肘せられざるところにあり。ダンテ若しくはミルトンが天國の幻境を目視する時は、夢みる者が寢室に臥して星辰の間を往來する時にして、また實にヂャン、ヂャック、ルッソオが病むで被害妄想に罹れる時也。總て是等の種々異なれる場合に於て寫象の自由に創構せらるゝは現實の條件に依憑せざるところにあり。而かも同時に寫象の連合に秩序ありや否や、別言すれば縱しや受働的にして空想の一部となれりとするも全局の調和を謀る意志ありや否や、縱しや覺醒の時の注意に似ずと雖も果して批評的の注意なりや否やを問はざるべからず。心的生命の最高潮にして幽婉なるところは刻下意識の觀察點に上ぼる寫象を撰擇し、案配し、連合して以て眞實に適應せしむるところに在り。夢的空想、狂的空想共に秩序あらしむべき機能に缺如たるが故に、空想に何等の桎梏なく、自由奔放、爲めに寫象の任意連合となり、偶起發達となり、從つて荒唐となり不稽となる。反之、詩的空想にありては、其結合や必ず何等かの効果を收むべくして、唯だ精妙なる情緒が現實以上に寫象を自由に發達せしむるにありとす。果然詩的空想は夢的空想にあらず、

狂的空想にあらず、從つて夢的現象にも病的現象にもあらざる健全なる現象となすべき也。

覺醒時のノオルムを離れたる場合即ち狂的空想に普遍性あり。心的生命の結合が寫象情緒若しくは刺觸を秩序あるものとし價値あるものとすること能はざること是れ也。凡そ個性と外界との交互作用即ち是れ人生にして、外界よりする刺觸が感覺となり觀念となり觀念の連合となりて、種々なる情緒のうちに各個性の經驗となり、而してまた此情緒より惹起されたる衝動と意志作用は再たび外界に向ふて射出するうちに、健全なるものには必ず交互の適應ありと雖も、狂へる者には全く斯の調和を失するに至る。睡眠時のノオルムを離れたる場合即ち夢的空想に於ても亦同じ。睡眠中は血液循環に變化を生じて心的生命の適應を失ひ、聯想思考等の活動を秩序なからしむ。

斯の如く極端なる邊を思考し來れば、上述の區分は略ぼ明瞭なるが如しと雖も、試みに準夢的空想、準狂的空想、即ち夢か夢にあらざるもの、狂か狂にあらざるものを執りて之を準詩的空想に比照せば——言ふ迄もなく原因と種類とは玆にも關與せざるなり——斯の問題は頗る不明瞭のものとなるべし。夢か夢にあらざるもの、是れ詩聖の最も貴しとしてまた最も快とするところ也。狂か狂にあらざるもの、是れ最も詩史の豐富なるところ也。更らに想へ狂的空想とは永久なる夢的空想の謂ひにあらずや。夢的空想とは空想の最も活潑なるところ也、獨立なるところ也、啓示あるところ也。意志毎々停止するとにも限られざる也。注意毎々失敗するとにも限られざる也。何等かの注意なくんば覺後幻境を識らざる筈也。設しや批評的ならずとするも毎々非批評的とも限られざる也。若しまた批評的なれども覺醒に比較して密接せず繼續せずといふことが空想の自由を與へ清新を與へ快感を與ふるに比して孰れぞや。識者を俟つて後識るべきにあらざる也。

豐富なる寫象を秩序的に自由に連合發達せしむるもの、是れ即ち正當の意味に於ての詩的空想に見るところなりき。詩聖の寫象や豐富也。常人の物を觀るや、一定の目的中に含蓄せざるを得ず。詩聖や然らず。宛として外國旅行家の如く、何等の目的なくして事々物々其遭遇するところ盡く吾が全身を擧げて之を捕捉するが如き傾向を有する也。自然に對し人生に對し、手を袖にして傍觀する如きは彼等の敢てし得ざる處也。世の喜劇と共に彼等も喜ぶ也。世の悲劇と共に彼等も悲しむ也。斯の經驗より得たる記憶觀念の後に進みて覺官世界に射出せらるゝに及びては、彼等はまた共に悲しみまた共に喜ぶ也。總て情緒の滿足を得んが爲めに現實の壓迫を離れて圓滿に發展するが故に、詩聖の作物に對して人は回想する毎に新たなる滿足を享受す。

借吾人は現實を超越して寫象を自由に發展すべき種々の條件を知りぬ。然らば斯の發展の法則とは抑も何々ぞ。寫象は確たる事實として取扱はるべきものにあらず。斯くすれば一の抽象に過ぎざる也。現實の心的生命に於ては、寫象は生命を有する也。消長の跡ある也。發芽する也。生長する也。枯死する也。寫象を構成する因子が缺亡する時若しくは廢棄せらるゝ時は寫象は變化す。人が夢中に飛行

する時は困難の經驗の缺亡したる時にして、畫家が標本に依りて美神を描く時は反對のものゝ廢棄せらるゝ時也。寫象を構成する因子が伸張する時若しくは萎縮する時に寫象は變化す。夢みる人には足端の炬燵がエトナの噴火口ともなり、寢耳に水の急警鐘が蚊軍の攻寄するにも似たらんか。寫象を構成する因子に新たなる因子の連合する時寫象は變化す。聯想は最も能く這般の變化を惹起するもの也。而して寫象の變化は、注意の指導の下に、歲月の推移と共に、愈々發達し益々完備し、理想の捕捉したる內的狀件を外的寫象によりて具象化し、外的寫象によりて抽象化し、以て詩文の强大なる根蒂とはなる也。斯く解して後に詩聖の所言を讀む。ギョオテもゴントシャローフもシルレルもアルフィエリイもクライストも毫も疑念を挾むべき餘地を見ず。

夢的空想、狂的空想に於ては、詩的空想と全く異なる哀れなる寫象の連合を見たり。準夢的空想、準狂的空想に於ては、準詩的空想と同じく漸やく進める寫象の連合を見たり。若し夫れ空想の評價を盡く研究せんと欲せば病理に聯關して種類問題に及ばざるべからずと雖も、吾が斯の小論文の目的にあらざれば、今は姑らく玆に擱筆することゝせん。上下茫々六千載、狂足らず。現し世の人草枯れて萌え出づる新らしき薔薇の花咲かんとき、香に憧がるゝ蝶は葉蔭の茨に忍び寄るやいかに。

（三十五、七）

『ドンキホーテ』序

世界文學の書庫を修飾すべき寶典として、人の喧傳するもの其數三。曰く、希臘に於ける Homer の "Iliad" 曰く、英吉利に於ける Shakespeare の "Hamlet" 曰く、西班牙に於ける Cervantes の "Don Quixote" は、先きには一二作家の抄譯に依りて未だ歐語を解せざる人も略ぼ其梗概を窺ひ得しが今また英學新報社は更らに一歩を進めて、英譯の簡易にして其書の面目を傳ふるものを擇び以て英語學生の手引たらんことを期すと謂ふ。同社の勞太だ多とすべし。"Don Quixote" 一篇の趣旨那邊にありや。斯は讀者の始づ識らんと欲するところなるべし。著者親らは俗世界に持囃さるゝ武勇傳騎士物語の聲價を落さんが爲めに作れりと宣言すれども、或は之を以て聖母禮拜を最も巧妙に打擊したるものとし、或は之を以て當時の政治界を譏刺したるものとするなど、讀者の種類によりて其所說亦同じからず。狹小なる余一人の感銘を忌憚なく玆に陳述するの榮を得せしめなば、之を內容に視、之を時勢に考へ、余は依然として作者の宣言に信憑をおかんと欲する也。但し、斯かる長篇を貫通して左る目的を斷えず念頭におきしや否やは頗る疑はし。文筆に從事する人の毎に經驗するが如く、偶々目睹せる些細の事柄に圖らずも心動きて後は、詩的空想の美はしくまた快よき雰圍氣の裡に、興興を生み筆筆を導きて、果ては自身さへ一驚を喫する程の長篇となることあ

れば本書の作者も亦其範疇を脫せざるべく、其始め一小茶話と想へりしものが、延び々々て遂に後世の評家より廣き人間の喜劇と迄に賞讃せらるゝ大作になれりしならん乎。Göthe が、作者は吾が作物の趣旨を他人より敎はるべき要ありと言ひけん、眞に穿てるに庶幾し。

Cervantes は如何なる詩人ぞや。之を崇拜する人は Shakespeare の倒に見るが如く、政治家として、哲學家として、詩人として、說敎家として、學者として、將た又法律、海事、治療、其他何くれとなく聰明なる絕世の巨人として、山なす讃辭を奉るべけれども、文學批評家の適當なる評價に依れば、學理よりは寧ろ實際に、人與の才よりは寧ろ天賦の質に須つところある詩人也とせり。或ば然らん。該博なる學識を絕し、明晰なる推理を缺くと雖も、詩人の要素たる創構の勁雄、想像の富贍、同情の淳篤、及本書に見るが如きヒユウモアの獨特ある上は、確かに世人が胸裡の琴線に觸れて地上の名聲を擅にすべき素因をなすに難からざれば也。偖然らば、何が故に世界文學三大寶典の一とまで に喧傳せらるゝやとの疑問、讀者の胸中に起らむ歟。作物が時代精神と聯關して不朽の名を垂るゝ緣由を最も能く說明するものは本書也。武勇傳騎士物語の狂熱其極度に達して漸く醒めんとする時、本書偶々現れて其滅亡を速めぬ。本書の前に本書の類なく、本書の後に本書の類なし。舊時代を葬むる夕の鐘となれると共にまた新時代を迎ふる曉の鐘となれり。本書出でゝ後、一册の武勇傳だも市に上れるものなかりきといふ事實は本書の感化與つて力あるを示すと雖も、また以て時代精神の潮勢が正さに那邊に向つて流れつゝありしやを描き得て餘りありと謂ふべし。觀察の周到なる、想像の可笑しき、後世は單に西班牙の傑作として終らしめず、遂に沙翁及ホオマアと共に手を携へて世界の文壇に上らしめぬ。從つて作者はあらゆる國の民、あらゆる世の人となりぬ。されば讀者よ須らく本書に依りて、時勢に迂濶なる好武士の標本 Don Quixote と常識一片の從者 Sancho Panza とを讀みて永久亡びざる此兩典型を深く味ひ來れ。讀過一番、自ら餘師あらん。

作者 Cervantes は西曆千五百四十七年に生れにき。少年及壯年の歷史は不幸にして明かならず。恐らく大學修業はなさゞりしならんとの推測也。七十年 Lepanto の戰鬪に從事して二回までも胸に銃丸を受けたる、七十五年羅馬よりの歸途ムウアの海賊に襲れて捕虜となれる、殊に多年負債に苦しめられたる等、一として生存中の悲史を語らざるはなし。"Don Quixote" に筆をつけ始めし年は明らかならざれども、大抵九十一年以後ならんかと謂ふ。出版の日、好評噴々として起り、同じ年の七月既に五版を重ねたるのみならず、引續きて外國に飜譯せられたれば、作者以て瞑するに足らん乎。千六百十六年四月二十三日逝きぬ。"Don Quixote" 以外の其傑作若しくは "Don Quixote" の歐洲文學に及ぼせる影響等、眞個不問におくべからざる好問題ありと雖も、左まではとて茲には省きつ。讀者ゆく〳〵須らく親ら進みて以て是れが研鑽に從事すべき也。

（三十五、八）

登張竹風氏著『あらひ髪』序

おかへし

まなむすめ、一人まうけ、あらひ髪と名告らせ給へりしとや。やがて來ん有松絞の立ち姿、如何ばかり世の咀ひの標的にやなり給はんかと、妬しき限りにこそ。斯くて、おあづかり申せしニイチェの君こたび兄上にならせ給ひつるよな。誰知らぬものなき腕白者とて、懲らしめの線香茶碗は物かは、今はなか〳〵に同僚の手にも餘りぬれば、親元へ返してんなど耳うち聞かぬにはあらねど、聊かもろこしの文にもまなこさらせし身の、さる淺墓なる振舞得こそ忍ばね、詩聖生立のことはりを蝦茶式に述べつることも侍りぬ。兎も角もお心やすう思召せ。引きかへてベエコンの翁の讖言につまさるゝは吾身に侍り。露いさゝかもさる氣色だになく、偶々生るゝは肉の子ばかり。男もあれど、善魔さまの題辭の如く、役者たるべき容もなく藝者たるべき姿もなければ、親馬鹿風鈴の音色涼しき今日此頃何の糸瓜の棚下に、頭を撫でつ帶を摩りつ、心欲レ貴前望二天才一身欲レ正後顧二常識一と一家ばかりの實語教を復習せ侍りつ。不得止也。論ふ君の作る君に旅立つを餞すとて、たま〳〵繙ける歌の一ふし、斯くなむ。

"——seeks the storm
As though the storm contained repose."

（三十五、九）

CHARLES DICKENS

千八百十二年二月七日 Portsea の傍に呱々の聲を上げし時より、千八百三十四年正月元旦 "Old Monthly Magazine" 誌上に彼の所謂嬉し涙に咽びながら其匿名の處女作 "A Dinner at Poplar Walk" を讀みし時に至る迄の Charles Dickens は、貧家に育ちて具さに世路の辛酸を嘗めたりといふ事實の外、別に特記すべきものを見ず。處女作今は改題して "Mr. Minns and his Cousin" と謂ひ、改めて "Sketches by Boz". 中にあり。未だ圓熟の姿態を具備せずと雖も、寧馨兒、前途の造詣容易に測るべからざるものありしが、果せる哉、僅か二年を隔てゝ其大作の筆頭第一として "Pickwick" を出し始めたり。Part I の申込は僅か四百部に過ぎざりしが Part XV の申込は四萬部を越え、書肆は一擧して四萬磅を利せりと傳ふ。其成効の偉大なる、二十五年以前の Byron 僅かに是れと匹敵すべきのみ。抑も著者の才華以外、別に何等かの緣由を其間に認め得ざるべき乎。

案ずるに、當時の英文學は譬へば張りたる繩の一時弛みたるが如く、十九世紀初期の潮流は既に退却して Victoria 時代の潮流は未だ漣漪の娟灑に過ぎざりし時代也。Byron, Shelley, Keats, Lamb, Coleridge の諸星晝く地に墜ち、Southey は末期に近づき、Wordsworth の傑作は既に久しきを經、Carlyle の "Sartor Resartus" は出でたれとも "French Revolution" 尙ほ未だ現れず、政治家論文家として知

られたる Macaulay は印度に在り、Tennyson, Browning 等は未だ來らず。小說界亦 "Eugene Aram," "Pelham" "LastDays of Pompeii" 若しくは "Vivian Grey" ありと雖も、W. Scott 逝きて既に五星霜、椅上空しく塵埃の積るに任せて Thackeray, Charlotte Brontë, Kingsley, George Eliot 等は未だ遠かに近づき易からざりし也。僅々二十有四の一青年小說家が一呼して天下の人心を收攬せるもの、豈怪しむに足らんや。

千八百卅六年より千八百七十年六月九日午後六時十分彼が此世を去れりし時に至る迄の彼の生涯は、一言にして之を盡し得。曰く、活働是れ而已。著述に、雜誌事業に、旅行に、彼は一日として悠々閑居したることなかりき。彼の傳記を讀む毎に、吾人は敬畏の念愈々加はると共に、忸怩の感益々深からずんばあらず。Forster が初めて彼に遇へる時 "bright, animated, eager with energy and talent written in every line of his face" と評せるは至言と謂ふべし。疑ふ者は試みに次の著述及年代の關係を味へ。

Chronological List of Works

Sketches by Boz	1836-7
Sunday under Three Heads	1836
The Village Coquettes	1836
The Strange Gentleman	1837
Pickwick Papers	1837
Oliver Twist	1838
Sketches of Young Gentleman	1838
Memoirs of Joseph Grimaldi	1838
Nicholas Nickleby	1839
Sketches of Young Couples	1840
Master Humphrey's Clock (The Old Curiosity Shop and Barnaby Rudge)	1840-1
American Notes	1842
Christmas Carol	1843
Martin Chuzzlewit	1844
Chimes	1845
Cricket on the Hearth	1845
Pictures from Italy	1846
Battle of Life	1846
Dombey and Son	1848
Haunted Man	1848
David Copperfield	1850
Mr. Nightingale's Diary	1851
Child's History of England	1852-4
Bleak House	1853
Hard Times	1854
Little Dorrit	1857
Hunted Down	1859
Tale of Two Cities	1859
Great Expectations	1861

Charles Dickens

Uncommercial Traveller 1861
Our Mutual Friend 1865
Mystery of Edwin Drood 1870

Dickens の個人を知らんと欲する人は Forster の "Life of Charles Dickens" 及 Dickens の長女が集拾せる書翰集三卷を繙くに若かずと信ずれども、本邦に輸入せられたる部數頗る僅少なるべければ、比較的に手にし易き Frank T. Marzials の "Dickens' Life" を一讀すべし。千八百八十七年 Walter Scott の版にかゝる。猶ほ本邦に最も傳播したりと思はるゝ English Men of Letters 中の A. W. Ward が "Dickens" の評論をも參照するを佳とす。出版は Macmillan にして千八百八十九年に New Edition あり。彼が友として如何に女性にまでも情誼に深かりしかは Hogarth 夫人に送れる書翰に徵すべく、彼が父として如何に慈仁なりしかは亞米利加より歸家せる時の逸話及數々其子供等に送れる書翰に徵すべく、彼が如何に英國紳士の典型なりしかは Niagara Falls 發の書翰に徵すべく、彼が如何に人道の爲めに盡したりしかは瀉車轉覆事件に就きて Thomas Mitton に送れる書翰に徵すべし。個人としての Dickens は好個吾人の模範たるに適す。

若し夫れ文士としての Dickens は如何。文學批評家の諸說を參照するに略ぼ次の觀察に於て相一致するに似たり。彼の本領は humour にあり。humour 以外彼の性格法に於て成効したるもの一もあることなし。彼の情感は故意とらしく強ひて誇張したる痕跡も見え、筋立も亦首肯し難き節もあり。然れども彼の humour は洵に無双也。彼は小說中に出すべき兩性の特點を視るに異常なる眼光を有し、之を描きて後 humour を以て之を擴張する異常なる天才を有す。彼は人性の最も顯著なる方面には非常なる同情を寄せたれども、更らに一層深遠なる方面は措いて問はざりき。玆に一人飢餓に迫れるものありと假定すれば、其人の紳士たると乞丐たるとを問はずして、Dickens 先づ之に同情し、讀者をしてまた之と同情せしめずんば止まず。彼の取材は中等及下等社會に限り、彼の描寫は是等人間の普通なる行爲思想情緒に過ぎざりしも、彼が人生の中心を觀破したる偉才と其淳厚なる同情と其無双なる humour とは、彼をして賢愚老弱貧富共通の寵兒とならしめたり。文體圓滑に流れて、嚴肅なるべきところも、唯だ表ばかりの威嚇に了るなど、彼が缺點のうちに數へらるべきものなれども、Fielding, Smollett, Sterne の特質を一手に收めて Edgeworth の赤裸々さまでにはならざる或る道德的目的を有する Dickens 其人の力は、優に是等微瑕を打消して餘ありと謂ふ可し。

十六年以前の調査に因るに、Dickens 全集の上梓せられたるもの十一種に餘り、抄略十八種に餘り、單行五十種に餘り、彼の著述を種子にしたる筋書五十九種に上り、摸倣四十四種に上り、新聞雜誌中の標題に及びては遂に數多くして計算すること能はざりき。是れ實に彼の死後十數年間のこと也。人或は曰く、Dorrit 若しくは Little Nell に涙を灑ぐ讀者は現時に於て著しく減少したれば遠き將來に於ては、彼も亦泯滅すべき運命を有すと。或は然らん。唯だ夫れ吾人は今日の英米雜誌を披讀して未だ

遽かに斯の如き文字を吾が念頭に鏤刻すべき餘地を有せざるのみならず、尨然たる彼の書帙が恰かも『最も醜惡なりとする「我等」を視ても、なんぞ其の人らしくして又情あるに似たるや』と語るが如くに思はれ、覺えず馳せて是れに赴き、之を愛し、之を敬し、また之を拜せざるを得ざるに至る也。Dickens 豈に及び易らんや。

明治文壇小說を以て著る〻自ら擬して英米の壘を摩すと言ふものあり。彬々たる文質、然かも遂に能く一人の小 Dickens 若しくは少くとも Dickens 的の人たるものなきは、何の故ぞ。吾未だ以て解すること能はざる也。

（三十五、十一）

枕上偶語

The night-time of the body is the day-time of the soul.

——Iamblichus.

如是我聞。文壇は白洲の義にも解せらる〻也。幽艷なる春の香りに憧がれくれば、人生を解釋せよと責めらる〻也。主義を標榜せよと怒鳴らる〻也。所信を告白せよと脅さる〻也。言辭は朦朧にして論旨に矛盾ありと叱咤さる〻也。權勢に阿附する烏滸の痴者なりと宣言せらる〻也。圭覆が滑つたと謂る〻也。客觀が轉んだと謂る〻也。進めば偏狹と嘲られ、逡巡へば迂漫と笑はれ、說難篇は漸くにして識をなさんとする也。戰て怖る〳〵頭を擡げて窺へば、知らぬ諸國の思潮は西貢米と共に夥しく輸入せられ、雲を摑むに似たる時代精神は水車の如くに廻り猫の眼の如くに轉じ、身は應接に忙殺され席は暖むるに遑あらざる也。

啻に是れ而已にあらずして、世間一體が飛脚の義にも解せらる〻也。政治界は製艦に追はれ敎育界は學制に追はれ宗敎界は覺王殿に追はれ實業界は外資に追はれ、一つ飛んで天狗煙草は自稱國益の輸入退治に追はる。斯の如くにして果して勸懲の實効を擧げ得べき乎に惑ふもの數多あるにも關せず、取消を敢てしながら二六時中腐敗を絕叫する新聞もあれば、新學士候補者がギョオテの所謂人格を增大にすべき閱歷を默想するうちに、他人が不言及の一點張りにて社會の棄て行く斷篇零墨を仔細顏に日夜涉獵する新博士候補者もある也。されば文化とは朝の魚河岸の如くにも解せられ、夕のペッタラ市の如くにも解せらる。宜哉、お孃樣の駒下駄カランコロンの優しき音漸く廢れて、牛の皮靴のギュウ〳〵乎として夫れ喧しき響の八百八街に鳴り亘ることや。

騷々しき哉、紛々たる哉、温血動物が眠らんとして光線を遮斷せんが爲めに瞼を閉づれば、瞳子は relax するに、蛇の作用は全く是れと正反對に出づ。普通蛇 Colubridae 猶ほ夜眠るも、毒蛇 Boidae ゝ Viperidae とは夜間に爬行する也。故に文化は毒蛇の義にも解せらるゝ也。

抑も〳〵人は何が故に斯の如く觀察を銳敏にし研究を煩瑣にし他には衝突し自らは安息せざるの運命を有するものにや。

史家の傳ふるところに依れば、古代マセドニアの末帝 Perseus の羅馬に生擒せらるゝや、戍兵の爲めに眠らしめられずして所謂 'done to death' の境遇におかれたりと云ふ。今人は此舊窠に陷れるものにや。ナポレオン第一世の帥を出すや、Hayti の總督 Toussaint L' Ouverture は數々夜襲を擬して佛軍を眠らしめず、爲めに三萬の精兵中二萬五千の病兵を生せしめたりと云ふ。今人は此藥籠中の物と化せられたるにや。

何等かの一大魔力ありて、人をして此舊窠に陷らしめ此藥籠中の物と化せしむる時は、近くは英國癲狂院の統計報告の說明と共に、人は盡く後に狂者たらずんば止まざる勢ひあり。而して此渦中より泳出で此氣運に逆行せんと欲する時は、猶ほ良醫の力めて患者を眠らしむるが如くに、注意の集中を避けざるべからざる也。斯の如くにしてミルトンはオルガンに遁れデェフソンはヴァイオリンに遁れき。斯の如くにしてドクトルフランクリンは將棋に遁れ李白は酒に遁れにき。斯の如くにして吾れは睡眠に遁れんことを思ふ。少くとも和田守の記憶術を捨てゝ圓了の失念術を拾はんことを想ふ。神が一日に八時間を眠らしめ、一月に十日を眠らしめ、一年に四ヶ月を眠らしめ、一生に二十三年を眠らしむることの決して偶然ならざるを固く信ずる者なれば也。

醫者は敎えて曰く、勞作すれば排泄物の一種たる Ermüdungsprodukt 夥しく發生して神經を刺觸し、爲めに吾人は睡眠して其發生を遮斷すると共に其排泄を謀らざるべからず。是れが排泄を終了すれば精神は再たび新鮮活潑の狀態に復歸する也と。彼の紛々たるを追ひ擾々たるを竟めて好んでエルミュウゾングスプロゾクトを製造する、これ吾が希ふ所にあらず。

沈思せんと欲せば晝尙ほ肉眼を閉鎖するを毎とす。開眼の意志なく必要なければ也。即ち睡眠の普遍事實として全く現象界と絶緣する也。此間に於て散漫なるは統一を得、煩雜なるは明快を得、從つて又新生命の旺盛となる也。

彼の底知れぬ蒼海を出でゝ渚近くに吾が足溜りあるやう覺ゆる時の如くに、半は夢に似半は現に似たる頃に於て、釋きかねし難問も自ら解け、竟めかねし字句も自ら現はるゝは、古へより數々逢遭せる事例なれば、流俗と共に齷齪して徒らに浮世の塵影に愕かされんよりも、寧ろチャアルス、ラムと共に床に臥して所謂 "to digest their dreams" の眞味を咀嚼せんことを希ふ。

創世紀二章二十二節に於て、己れ以外の或るものを愛せしめんが爲めに、神はアダムを熟く睡らしめ玉ひぬ。同じく十五章十五節に於て、民の長たらしめんが爲めに、神はアブラハムを日の沒る頃に酣く睡らしめ玉ひぬ。Hira 山にモハメットが天使 (Gabriel) を見しも眠中なりき。

汝の肉眼を閉ぢて汝の心眼を開け。汝の門を鎖して客を斷ち、汝の枕を取りて獨り長眠せよ。狂者を追ふて走る不狂者は決して道を求むる人に非ざる也。

文壇の眠黨は夫れ萬年草派乎。彼等や絶えて所謂時文壇に入らず、閑雲野鶴、行かんと欲する處に行

き、停まらんと欲する處に停り、眼を閉ぢて眼の用をなさしめざる也。彼等の或者は『不急の穿鑿』を爲しつゝある也。彼等の或者は世の落したる感情を拾ひつゝある也。一言にして盡さば彼等は悠々自適の間に彼等の各々求めんと欲する道を求めつゝある也。最も馬鹿を見る者は世のワイ〳〵連中なるべし。

牛の涎のぬらりくらり。また例の八釜敷屋の筆誅は御免を蒙りたし。

（三十五、十一）

『女嫌やる』考

今日の合評問題心中萬年草には、研究すべき事柄非常に多くして、いづれを先きに取り出でゝ言ふべきかに就き、頗る迷ふところあれども、文學方面は却つて他に其人あるべしと信ずれば、余は故意と非文學方面に赴くべし。隱流先生は題目の萬年草を捉へて考證をなし玉ひしことなれば、余は直下の四文字、別言すれば本文冒頭の『女嫌やる』考を作らんと思ふ。斯は侮り易からざる大問題なれば、時間及誌面の制限を想ひやれば、或は其一端を叙述するに過ぎずして止むに至らんかとの恐れを抱かざるにはあらねど、余は其興味あると共に必要ありて、到底閑却するに堪へざる理由を知るが故に、一應余の學べるところを簡單に陳述することゝせん。實際を白狀すれば、斯の問題の提供者は、須らく隱流先生若しくは三木氏たるきものにして、素人たり門外漢たる余の猥りに喙を容るべき場所にあらざれども、下世話に所謂『下手の横好き』及『怖いもの見たさ』は最もよく余の現狀を説明するに足る好辭句にして、息の根の續かむ限り、恐らく毎々斯かる問題に憂身を窶すべければ、今回も、誤謬は諸先生の訂正を俟つことゝして、しばらく列座諸君の清聽を煩さんと欲す。若し諸君のうち篤志の佛教家及日本歴史家ありて、更らに五字を續け『女嫌やる高野の山に』迄を圓滿に研究し得なば、余の本懐何ものかこれに若かむ。發程に先だち一言筆者に告ぐ。眞理の前には何物をも恐るべからざる筈なれども、世が世なれば、例の如く愚者眛者の馬鹿騒ぎするあらんを慮り、誌面にはすべて英佛獨以希羅語の外、決して說明解釋を附記せざらんことを望む。〇二十世紀の最大問題は sex 問題ならん。男女性の問題ならん。小說及其他の文學は人生に聯關し、人生の根本には人性あり、即ち男性あり、女性あり。故に此問題にして解決の方法を講せられずば、吾人は如何にして人生を崇敬すべき乎の理由を識らざるべし。宗教問題は少くとも實際方面には稍〻其端緒につき、勞働問題は少くとも實際方面には其前途の曙光を齎らし來る。獨り人性問題、及其處に基礎をおく人種問題は如何なるべき。想うて玆に到れば、誰人も天を仰いで長大息せざるを得ざるべし。〇『女嫌やる』問題は人性問題の一部門なり。高野の山に住む男性の僧侶が女嫌やる、又吉原の里に住む女性の勤めする身が男嫌やるは言ふまでもなく、男同志の心中となり女同志の心中となる同性相引の現象は、其根本に於て眞に異性を嫌忌すべき素因を有するにや、將たまた境遇上一時誤つて其性ありと信ずるにや、抑もまた斯く聲言する丈

にとどまるにや。宗教若しくは其他の爲めに唯だ聲言する丈のものならば、別に取り出でゝ玆に言ふまでもなけれども、若し然らずとせば、學者は必ず綿密なる研鑽を施すべき必要ありと信ず。心理學、醫學、法醫學のみならず、社會學、教育學にまでも重大なる關係を有すれば也。○余は説明中に用ゐる辭句のうち、最も肝要なる二個だけを邦譯せんと想へばあらかじめ説明しおかんとす。斯は隱流先生より見られなば、幼稚極まることなるべけれども、實際素人の余だけは斯く明瞭に陳述し得るまでには斟からぬ苦勞をなしたるものなり。余は形容詞に病的と變的とを用ゐ、名詞に病理學と變態學とを用ゐるべし。Pathology を病理學と名づく。斯は今より八年以前、獨乙人類學會の席上に於ける Virchow 氏の意見を採れる也。其説に謂ふ、Metaplasia 即ち植物にあれ動物にあれ、一種のものが他種のものに變ずるには Anomaly あらざるを得ず、アノマリイとは夫れまで繼續せる生理上のノオルムに變化を生ずる時に與ふる名也。昔者之を Pathos と謂へり。此意味にてはノオルムを離るゝことは悉く一の Pathological evant 也。Pathos 則ち一變化を生ずる原因は外來の力もあるべくまたは化學上の物質もあるべし。これが或る何等かの事情のもとに遺傳すれば、些少なる遺傳性の基礎となりて一族のうちに傳播す。變態學の取扱ふところ也。如何にといふに、變的のもの有害なりといふ意味にあらねば、從つて疾病と關係あるべき筈なければ也。病氣は希語の Nosos 也。故にノソロジイは病理學也。變的のものは或る事情のもとにありては却つて有益なることあり云々。

さて、余は愈〻本文に入るべし。○生れながら同性の方へ向ふ常道外れの Sexual Instinct 學術界に所謂 (Congenital Sexual Inversion なるものは、比較的に稀有なる現象なれども、偶々自然に愛惜すべき對象物なき爲めの理由のみにて同性相引を生ずることは、人間及大多數の高等動物間に到るところ是れあらざるなき現象なりとす。甲の現象を眞性とし乙の現象を假性とすれば、假性を鳥類犬類牛類等のうちに試驗せる人々は、最も先きに Buffon 氏二十年程前に Sainte-Claire Deville 氏十八年程前に Lacassgne 氏等あり、眞性を鳩に發見したるは九年程前に以太利亞の Muccioli 氏あり、牡雞が同時に兩性を有したる例を六年程前に報告せしは R. S. Rutherford 氏あり。人類にありては古昔より書物のうちに見ゆ。我國の神功紀に謂ふ阿豆那比（アヅナヒ）之罪は無論此事なるべく、David が Jonathan を吊ふ弓の歌の終りに『兄弟ヨナタンよ我汝のために悲働む汝は大に我に樂き者なりき汝の我をいつくしめる愛は尋常ならず婦の愛にも勝りたる嗚呼勇士は仆れたるかな』（撒母耳後書第一章第二十六、七節）を疑はゞ疑ひ得べき理由數多あり。陣中若しくは戰好きの民のうちには、主として發達せる形跡掩ふべからずして、カルセエジ●ノルマン●ドリヤン●韃靼●ケルト族など其好例とすべし。希臘の隆盛時は言ふまでもなく、歐洲以外及今日の歐洲到るところ見ざるはなし。殊に注意すべき現象は、歐洲に於て眞性と見做し得べきものが耶蘇紀元の始めより特に英才及罪人の二階級に追躡し得らるゝことこれ也。年代古るきがため、明瞭に證明すること能はざれども、羅馬帝政時代の英傑

Julius Caesar・Augustus・Tiberius・Caligula・Claudius・Nero・Galba・Titus・Domitian・Nerva・Trajan・Hadrian・Commodus・Heliogabalus 等の斯かる行爲ありしことだけは確かなり。Dante が Inferno 第十五に異才ある人々のうちの Homosexuality の普通なることを歌へるは既に久しき以前のことにして、近く Mantegazza は狹少なる知友のうちの有名なる詩人政治家法律家等を數へ、Krafft-Ebing が Psychopathia Sexualis の序詞に其所謂『自然の繼子等』が大抵智才優れ地位高く且つしば〳〵鋭敏なる情緒を具ふることを言ひ、Raffalovich が指名して Socrates・Sophocles・Pindar・Virgil・Pheidias・Epaminondas 等を以てしたる、驚くべきにあらずや。近代史に及て明白に異性と名け得べき確證を與ふるは文藝復興期の人にあり。佛の Muret は火を睹るよりも明かなり。Michelangelo も最早疑ふべからず。Bazzi も然り。稍々下りては Winckelmann あり。Moll 氏は他の獨逸詩人の Platen・H. P. Moritz・Ilfland を數へ、Raffalovich 氏は更らに Goethe・Molière・Montaigne・Alfieri・Casanova 等の或る時期のことを追究せり。英の Marlowe は兩性に對する Psychosexual Hermaphrodite ありしならん。米の Walt Whitman の Leaves of Grass を讀めるものは彼が辯解の書翰を信じ得ざるべし。近世佛詩人の Paul Verlaine もまた然らんか。○扨この Sexual Inversion の研究は極めて新しきことにして、科學的基礎の上に立てるは千八百七十年即ち僅か三十二年前ベルリン大學教授 Westphal 氏が一婦人の經歷を詳細に叙述し、且つ其婦人の生れながらにして有せる性なれば從つて惡德と名づくべきにあらずと云へりしに始まる也。其後以太利亞に Ritti・Tamassia・Lombroso 佛蘭西に Charcot・Magnan 露西亞に Tarnowsky 等あり。千八百七十七年以後熱心に研究せる E. von Krafft-Ebing の傑作 Psychopathia Sexualis は九十三年には八版を重ね、九十一年の出版には有名なる Die Contraere Sexualempfindung が Albert Moll の手になり、九十三年に J. Chevalier の L'inversion Sexuelle 現れ、九十六年に André Raffalovich が英國に於て佛文の Uranisme et Unisexualité 出で、翌年 Havelock Ellis の Sexual Inversion の研究公けにせられぬ。同氏の調査せる男女三十六例を詳細に玆に演述し得なば、興味極めて深厚、敢て列坐諸君の傾聽に値すべしと信ずれども、時間上不得止、盡く之を抹殺せんと欲す。但し文學に聯關して默々の裡に葬り得べからざることは此問題を取扱へる作家及作物是れ也。男性に關する一二例は既にさきに述べつれども、詩人小說家の好みて描きたるは女性にあり。○小說に於ては、まづ Diderot の la Religieuse あり、Balzac の la Fille aux Yeux d'Or あり、Gautier の Mademoiselle de Maupin あり、Zola の Nana 其他のうちにあり、A. Belot の Femme あり、此他名ある作家の Guy de Maupassant・Bourget・Daudet・Catulle Mendès 等もあり。詩人のうちには Lamartine の Regina のうち、Swinburne の Poems and Ballads 第一集のうち Verlaine の Parallèlement のうちなどにあり。○そも〳〵 Sexual Inversion とは何ぞや。今日に於ては之を說明するに二大潮流あるを見る。一は Binet や Schrenck-Notzing を代表とする派にして、後天

性の方面を擴張せんとし、他は Krafft-Ebing や Moll を代表とする派にして、先天性の方面を擴張せんとする也。何れの說にも眞理あり。唯だ後天論者の力を極めて彼の生れながらに有する要素を排斥するだけ、吾人は愈々之が保存を計らざるべからざるが如くに思惟す。健全なる Sexual Impurse は生れながらに存在して Puberty の時期に發達するものなれども、同性に對するのみならず、また實に非性の Passion ありて目的物の Indefinite なること多き、吾人の熟知するところなり。かくあればとて全く非ノオルムの方向へ奔るとにもあらず。唯之れが永續するときこそ其人の始めてノオルムならざるを知るなれ。扨然らば、大多數の實例をまづは安らかに說明せんが爲めに、生れながらの非ノオルムを許すとせば、此非ノオルムの根蒂は何なるべき。斯は男女兩性の發達及各性に潛在するBi-Sexuality を熟考せば、大に發明するところあるべし。發達の初期にありては兩性に區別あるなく、其痕跡一生を通じて見ることを得べし。牝鷄の蹴爪、哺乳動物中男性の乳房と、女性の Clitoris の如き是れ也。試みに瞑想せんか、男女性の Germ 各半分ありとし、發達するうちに一方が優りて他方を蠶食し、十分發達せる曙に於て僅かに他性の不完全なる Germ 遺るに至ると謂ふを得べけん。而して Homosexual の人にありては、兩性若しくは其何れかの性の Germ の數或は性質に特別のことありて、ノオルムに循ひ發達せざるなりと謂ふを得べけん。Sexual Inversion を色盲に比したる人ありき。最も佳し。多數の人は非ノオルム是れ疾病と思惟すれども、斯は不精確の言語たるを免れざるべく、熱病が病氣也といふ同一の意味にて色盲或は天才が病氣也といふこと能はざるべし。故に偏向あればとて直ちに病理學に入るとは當を得たるものにあらず。一の Anomaly は一の Predisposition to Disease を構成することもあらん。然かも變的のものを研究すること是れ病的のものを研究することにはあらず。猶ほ上にあげたる Virchow 氏の說を參考せられよ。扨本題に戻りて言へば、多數の人々には Predisposition to Invasion となりて潛在すべきも、或る人には强大にして爆發を見るに至らん。潛在的の Predisposition の醒覺すべき原因數多あらんも、失戀は割合に勢力あらざるべく、最も甚だしきものは學校組織の不完全と年長子弟の誘惑ならんか。之れが救濟法としては所謂 Co-Education 可ならん。此點に關しては九十四年七月の Forum 九十六年出版の Edward Carpenter の Love's Coming of Age を繙く必要あり。また例のかと批評せらるるやも知れねど、敎育小說、引き續きては正當なる戀愛小說なんど學校に輸入せざるべからず。社會の交際風俗にも經世家は注目すべし。○さて、論じて茲に至れば、余は社會の制裁なるもの及法律なるものが、余の問題とせるものに對して如何なる變遷をなし來り、現時に於て各國に如何なる差異あるかを茲に述べ、翻つて兩三年來殊に我國の敎育界に八ヶ間敷此重要なる問題に接觸したく、また、文學界の近頃の問題として、彼の天才說に對する道德家先生達の批評にも幾分か聯關して述べたしと思へども、列坐諸君の爲めに貴重なる時間を徒らに余一人にて浪費するを恐れ、茲に口を噤むことゝせん。

（三十五、十一）

交遊三十年

薤上の露、徒らに晞ひ易くして君も亦遂に白玉樓中の人となり了りぬるぞ傷ましき。飛報を傳へ、周章馳せて來れば、魂魄去つて影なく、唯だ見る遺骸石の如く靜かに氷の如く冷やかなるを。先月下旬茅ヶ崎病院に於いて、喉爛れ聲嗄れて既に語ること能ざりしと雖も、猶ほ能く君は此眼を動かしたるにあらずや。八月中旬鎌倉に於いて、嗽咳頻りに襲ひ、談笑の間、既に苦悶を悟らしむるに足りしと雖も、猶ほ能く君は此唇を動かし此手を動かして以て當年の君を偲ばしめたるにあらずや。大磯に於いて、口既に杯を啣まずと雖も、猶ほ能く壯論高語四筵を驚かし、臨風竹風と棋局を爭ふの勇氣ありたるにあらずや。逗子に於いて、嘲風と共に櫓を行り水に泳ぎたるにあらずや。東京に於いて、愛犬を携へ杖を振つて夕々に佐保を訪へるにあらずや。肺量六千と自ら注し、野球を弄して勇を片平原頭に專らにしたる仙臺時代。狗を打ち礫を投じて上級首席の腕白小僧に其人ありと知られたる山形時代。——交遊茲に三十年、君が性情の發展を歷觀し、君が健康の消長を目擊し來れる吾れは、今斯の氷の如く冷やかに石の如く動かざる君の遺骸を撫して、首尾なき聯關なき過去の逸事の一時に簇生蟻集するに遇ひ、想はんと欲して早く其緒を失ふに堪へざる也。人生多く數奇、決して天の寵兒を以て目すべからざりし君は、夢寢の間猶ほ其名を斷たざりし君が晩年唯一の親友嘲風をして其臨終の床に立たしむることもかなはず、須らく心血を濺ぐべき日本美術史の草稿は緒論すら未だ完からずして君と共に果敢なき最後を茲に遂げんとす。畢生の怨、終天の恨。而かも今に及んでまた奈何ともすることを得ざらんとする亡友の俤をせめては吾が念頭に鏤刻すべき餘裕を與へよかし。嘲風今ボムベエに在り。幾ならずして歸東せん。知らず、吾れ抑も何等の辭を以て是れに語るべき。晩翠英佛の野に漂遊して便船毎に必ず君の近狀を尋ね來れり。今夜認むべき吾が消息を披き見んとき、彼の感慨、吁嗟如何にぞや。思ひ想へば腸將さに九廻せんとす。

亡友よ。寧ろ師表とすべき兩國の靈火は、假りに友の形ちを以て、吾が孤獨寄るなき學窓を照らしぬ。一は情誼の權化にして冬日の愛すべく親しむべく、他は智才の權化にして夏日の畏るべく敬すべかりき。彼れや明治二十八年理科大學より日暮里に送りて、假令ば南枝の梅の綻びんとして忽ち嚴霜に遇ひたらんが如く、吾が心情の唇は堅く鎖して猥りに人に許さず、復た春風駘蕩の春を竟めざりしに、此れや茲に明治三十五年、龍華寺に送らんとして、秋天の孤雁何れに適歸するやを知らざる也。香煙永く枕頭に迷ふを見ずや。

亡友よ。春秋僅かに三十二、毀譽褒貶一に喧しかりし君の如きは蓋し稀れ也。吾が眼に映ぜる君の太甚く世評に異なる節々ありと雖も、今之を語らずして寧ろ君をして親ら語らしむるの優れるに若かずと信ず。令弟齋藤信策君、大學を卒ふる近きにあれば、吾等力の及ぶ限り、之を扶けて君の全集及び

詳傳を編纂するに力むべし。

亡友よ。吾が文學の趣味は一に君の賜なり。導因多く君のサグヂエッションに由つて得られき。吾が一生の事業として胸中常に往來する或ものあり。淺學菲才、徒らに高遠なる目的を懷抱して或は空中樓閣に終始するやも測られずと雖萬々一にして上梓刊行するの曉もあらば、第一卷は君にデヂケートして以て芹献の微意を明らかにせんと心私に誓ひてありき。今君既に亡しと雖も在天の靈幸ひに之をゆるせ。

さらば君果敢なき夢を頼みとし、玆に永く君と相訣るべし。其濶き額、其濃き眉、今を限りに復た求めて見るを得ざる也。綿々の情何日盡くるとも覺えねどゞも、遺骸を駿海の濱に埋め、枯骨猶は富岳を仰ぎ見んといふ仰見院文譽高山樗牛居士の炎々たる詩的情念は、世を動かし時を動かして日東帝國必ずや何處にか一詩人を化育すべき使命あるを確信し、僅かに自ら慰めて死して猶ほ活くるが如き君の靈に告ぐ。

（三十五、十二、於鎌倉）

歌の誕生

御婦人方の妊娠は十ヶ月、赤ン坊は其十ヶ月目に誕生と定つて居りますれど、歌人の妊娠は何ヶ月、歌の誕生は何日目になりましょうか。斯く卒然と御尋ね申しましたならば、作歌に従事せらるゝ方々は、それは一定しておらぬと申されましょう。さらば其不定のうちに何種類ありましょうか。是非御返事を伺つて見たいのであります。馬鹿げたことを聞くものだとの御非難もあるかも知れませぬが、歌學といふ上からは、これしきのことも定めておかなければならないのであります。

獨乙の歌聖ギョーテがエッケルマンに語るところに依りますると、ディ、ブラウト、フォン、コリントは——尤も七行一節にして二十八節もありますから決して短かいものではありませぬが——四年もかかつて生れたが、或歌の如きは以前に何等の憧憬もなく忽然として恰かも夢のうちに生れたやうだとのことであります。して見ますると同じ不定のうちにも急に生れるものと緩々生れるものとの二種あることが明瞭であります。言を換へて謂へば、無論時間の上に截然たる區劃を與ふることは出來ないが、比較の語を用ゐまして長い時間かゝるものと短い時間で澄むものとの二樣に分けることが出來ます。或は三十一文字の和歌に四年もかゝるものはあるまいと申される方があるかも知れません。それでも良いです。一年とかゝらなくとも、乃至一日とかゝらなくとも唯だ比較の語でありますから、先きの言廻し方で、一應分類することが出來ると認めます。しかし、是れは表玄關の話で、裏に廻つて見ますと、なほ考察すべき餘地があるやうに思ひます。

見聞することが強く歌人の覺官を刺觸しまして歌心地となり、通常にあるあらゆる發達の階段を横に外れて仕舞ひ、直ちに口若しくは筆に上ることがあります。これは前に所謂短かい時間で澄む方であ

ります。呀と言ひ應と言ふ感嘆詞は取除けて意味のある節奏のある短かい句が得られます場合、これ即ち和歌の一部になります。小供が何かを見て覺えず叫ぶときにも、文化未だ治からざる人民の物言ふ時にも、節奏のある言語があります。今がたぎョーテを出しましたから、また同じ國の歌人を以て例にしますと、ウーランドが昇る旭を見まして Sonne du kommst! Die Knaben erwarteten ein Ge-dicht, aber zu ihrem Staunen blieb es bei diesem Worten と叫びましたのも既に節奏があります。凡そ斯の様な例證は和漢にもありますし、諸君も日常實驗せらるゝことでありましょう。俳句なれば十七字になり、和歌なれば三十一字になれば、兎に角完全な俳句若しくは和歌にはなります。しかし見聞きするものと同時に生れるものは——一概には言れませぬが——頭のなかで充分に咀嚼してありませぬ故、見聞きしたものに必要のない邪魔なものまでも附着して居て、どうしても粗末なことは免れませぬ。尤も俳句にしろ、和歌にしろ西洋ものに較べると短かいと云ふ便利がありますから、此の種の作物に佳いのが多い道理で後日に一字をも動かし得ないやうなものも得らるゝに相違ありませぬが、一般から申しますれば、月滿ちて安々と玉の如き子を生むといふ趣きに缺けて居ると謂ふて差支ありますまい。

ギョーテはまたエッケルマンに個樣な意味を述べて居ります。世間は廣く豐かに人生は多趣多樣で、歌に機會を與へないことがない。現實は材料と機會を與へるので、或る特殊の場合を歌人が取扱ふことになると歌らしいものになる。おれの歌は皆現實に鼓舞されたので、基礎が其處にあるのだ。——といふやうな意味を述べて居ります。此意味を考へて見ますると、一度機會がありさへすれば可いのであるから、縱しんば四十年五十年後に歌となつて現はれるにしろ、矢張りギョーテの意味を損じてはをらない理由です。故に五月の花の時節を一度經驗しておいて十二月の寒い空の頃に春風駘蕩の歌が出來上つても可い理由です。そうすると或る場合にをらないで、或る場合を背景にして歌つたので、見聞きしたものが急になると誕生に手間が取れるのと、二つあることがギョーテの言葉から出てくるやうになります。

是れまで述べましたものは、歌人の心から止むを得ず歌ふやうになるもの、歌はないでは居たゝまらないものに就いてでありました。バーンスの日記を藉りて曰へば "For my own part, I never had the least thought or intention of turning poet, till I got once hearly in love; and then rhyme and song were, in a manner, the spontaneous language of my heart" の趣きがあるものばかりでありました。是れ丈で澄みましょうか。私の考へでは、どうもさうではないやうに思ひます。戀をしないときには戀歌を作らないと謂ふ筆法を以てしては解せない場合、即ち外の物が或る一定の目的を以て歌人の想のなかに歌の種子を培養してくれて、自分は別にそんな感情はなくても恰かも反響のやうに歌ふ場合、假令ば人の婚禮を祝ふ歌や人の葬式を悲しむ歌には、一々自分の身にひき寄せなくても自分から向ふ

の方に歩み寄つて、優に立派な歌が得られまする場合があります。これはどうしたものでしよう。或は、それは華あつて實なき歌で、歌と稱するに足らぬと申されるかも知れません。よくある非難ですが、要するに負惜みで、技術上許さなければならない場合です。或は、そんな場合は稀れだと言はるるかも知れません。しかし、稀れでも關はない、事實なものであります。先きの歌はずにをれない場合を必要の場合とすれば、是れは偶然の場合とでも謂ふべきところでしよう。さうしまするど、此場合は急な時間の方に入れますか。急なものもありましようが、間接である、媒介物が要るといふ點から見て、先きの場合の急な時間と平行しかねますから、緩々の時間の方に配するが至當ではありますまいか。斯う私は考へて見たのであります。

之を總括しまするに、歌の誕生に長短の二種の時間があつて、長時間の方に必至性と偶然性とを配當して考へて見たのであります。つまらぬことで甚だ失禮致しました。

（三十六、二）

新瀬浪子の新氣焰

新春の文藝倶樂部は、新編輯者の手によりて、新歸朝者小波子の新作『ふられ綺』を載せ、元旦早々新婦人倶樂部の新瀬浪子が新氣焰を吐きちらしぬ、眇たる一個少女の身を以て、人は何故に結婚を望むかを怪しみ、結婚は自然に悖り天意に反き、吾人の自由を剝脫する方便的命名に過ぎずとするところ、近時漸やく所在に普ねからんとする海老茶式部が口吻を其儘に聽くの感あり。幼にして父に養はれ長じて夫に護られ、心理上男子以上の事蹟を擧ぐべき理由なく、歷史上男子以上の事蹟を擧げたる例證なきに關らず、猶且つ無音の一大勢力となりて、遠く開闢の始めにアダムをして端役を演技せしめ、トロイヤの戰爭を惹起し、デヴイッドの罪源となり、ソロモンのデカダンに聯關し、セントバーソロミューより普佛戰爭に至る迄、あらゆる自由を享受して足れりとなさず、進んで結婚を否定して其所謂自由なるものを實化せんと呼號するを目視しては、女子大學に顰蹙し『閨秀文學』に臺所のお掃除を氣遣へる牛涎子、遂に呆然として言句の出づべきを知らざるルナン曰く、婦人が第一の義務は美しく見ゆるにありと。ユーゴーは曾て其嬉れしく見えんことを望みぬ。希臘の神話に、神々はヴィーナスに焦れ給ひしもミナーヴァには然かあらざりき。

婦人の天職は鼓吹するにありて命令するにあらず。近頃の悲しむべき現象は、天の男子をして完成せしめんとする職責を婦人の好んで代らんとするにあり。男子たること能はずして而かも婦人たらんことを止めんと欲す、何の意なるやを解し得ざる也。兩性は猶ほ電流の如く、同性相反し異性相引く。婦人の海老茶式にして美しきは稀れに、他を牽引する者は更に稀れ也。最も美しき婦人は最も婦人らしきことをなして滿足す。吾は公會の席に出づる婦人を嫌ふ。吾は講演する婦人を嫌ふ。吾は政治に奔走する婦人を嫌ひ、進化を說き科學を口にする婦人を嫌ひ、婦人の醫者を嫌ひ嫌人の說敎者を嫌ひ婦人の名高きを嫌ひ、婦人の著作者を嫌ひ、アルフォンズ、カールと共に "One book more and one

woman less!』と言はんことを欲す。整へる衣服を着けて丸髷豐かに常に微笑を湛ふる美しき婦人が一生に何事をも爲さゞる、洵に例へしやうもなく尊し。婦人と僧侶、足らざるべしと雖も其領土を擴げんとすれば、これ僧侶を傷け婦人を失ふ。

婦人の學問とは何ぞや。婦人の心情は是れ學問の貯蓄所にあらずや。婦人の自由とは何の謂ぞや。事實は却つて男子の婦人に奴隷たるを示すにあらずや。男子の最も高尚なる行爲より最も醜穢なる罪惡に至る迄、盡く婦人の鼓吹せざるはなくして而かも更らに權利呼りを敢てする所以のもの、吾人は眞に了解し能はざる也。婦人の或者は所謂く、ヂャン、ダークを出し、シャルロット、コルデーを出し、ヂェオルヂ、サンを出し、ヂョーヂ、エリオットを出し、シャルロット、ブロンテを出し、マダーム、ローランを出し、マダーム、ド、スタエルを出し、更らに飛んで小清を出したるは婦人界の名譽ならんと。多謝す、吾繰薄うして遂に之と赤繩を結ばざりしことを。デュールシモンの所言味ひあり。曰く『吾は婦人の爲めに吾身を犧牲にせんと思へども、婦人に服從することを望まず、吾は其司配に反抗して其勢力を欲求す』と。

婦人といふ名稱が美しきこと、優しきこと、溫かなることに同意義なる限りは、婦人は尚ばるべきもの也。昔の大詩人が『最も優れたる婦人は最も世上に知られざる婦人也』といへる無名のルークレシア・ペネロープ・コルネリアこそ始めて正當に婦人の名稱を帶ぶべきものなれ。曾て戰場に僵れたる一兵士の側に坐して其創傷を懸念する婦人の畫を見たることありき。好個生活場裡の光景にあらずや。

吾が最も敬愛する婦人は、吾を勵まして喜んで生活の戰場に立たしむるに足るべき注意を與ふるが爲めに、吾より進んで之を保護し愛撫せんと思はしむる婦人らしき婦人是れ也。男子が一生を通じて婦人を研究せんとするが如くに、婦人が一生を通じて男子を研究せんとし、深く察し能く心付き而かも術に長けたる婦人あらば、男子の幸福何物か之れに若かんや。

昔者喜劇作家テレンチウス・ブブリウス "Homo sum, humani nil a me alienum puto." の句を吐いて一世の賞賛を博せり。されば奥さまお嬢さまよ、『吾は男子なるが故に、女子に關することは何事も興味深し』。

（三十六、二）

ラファエル前派解說

明治二十九三十年の頃、嘲風兄と共に暫時本誌の一隅を汚すに當り、偶々ウィリアム、モリス逝去の凶報を傳ふるに際會して、紀念の爲めに筆を執つて前後二回に小篇を草したることありき。當時海外文壇の消息を敢てしたるもの、帝國文學と及本誌（太陽）と而已。而かも兩者共に世上の顧みるところとならず、彼れや數々疣贅視せられ、此れ亦遂に廢棚の厄に遇ひぬ。爾來僅かに五星霜。今や都鄙の文藝雜誌一として ゴルキイ・メエテルリンク・ロセッチを談論せざるはなく、海外文壇の有無は優に其盛

衰を左右して餘りありと謂ふに至つては、文運移動の行跡寧ろ驚くべきものありて存するにあらずや。茲にラファエル前派の三詩伯が肖像挿入の擧に依憑して其解說を與へんとするに先ち、余は實に多少の感慨を催さゞるを得ざる也。

ラファエル前派の性質行動及び勢力を論述せる書籍雜誌の類余の知れる限りに於て英米文壇に其數決して鮮少なりとせず。吾國又之を傳へて、或は繪畫の寫眞を載せ、或は詞賦の幾片を斷ちて、以て色彩の美を喃々し、以て聲調の妙を喋々す。余亦英文學の研鑽に從事するもの、平素の注意は少くとも常人以下に降らざる所あるを自ら信ずる者也。獨り悲しむ、現時最も余の感興を恣にすべきラファエル前派其ものが、種を異にし語を異にし國を異にし俗を異にするが爲めに、エマソンの曾てスコットに言へるが如く依然として come home せず依然として exotic を改めざることを。繙讀、訓話、釋解、評論、希くば永き將來に於て曼天或は一片の加護を垂るゝ時もあらんかと心私かに期待するのみ。坐に具へたるビイアス・センツベリ等數種の書により敢て茲に解說を記す。ロセッチ詩集スウィンバアン詩集は兎にも角にもアスタア版坊間に數多あり。モリス圖書館以外に見ること稀なりと雖も、機敏なる丸善書房は決して諸君を渴せしむるの愚を演せざるべし。

故國以太利亞を逃れて英京に赴き、キングス、カレッヂに以語敎授を擔任すること十五年の久しきに及べる亡命客あり。英以混血の一女を娶りて四兒を生む。マリア、フランチェスカ千八百二十七年に生れ七十六年に死し『エ、シャドウ、オヴ、ダンテ』（七十一年）の著あり。ダンテ、ゲブリエル二十八年に生れ八十二年四月逝きぬ。三十年に生れたるクリスチナ、デォオデナは『ゴブリン、マアケット、エンド、アザア、ボーエムズ』（六十二年）其他數多あり。三十二年に生れたるウィリアム、マイケルはダンテの地獄篇飜譯（六十五年）其他數多あり。ラファエル前派の創設者はダンテ、ゲブリエル其人なりき。一千八百四十八年ロセッチ・ミレエ・ハントの三青年畫家相集りてラファエル前社を結びぬ。社は其名稱の示すが如く以太利亞初期の宗敎畫家を嘆美せるものなり。神祇に司へ自然を愛し形態簡朴にして興趣幽遠、縱しや透景明暗の間、幾多彩丹の運用に缺如たる所ありと雖も、恰かも幼兒の舌たるく語るが如く、また雛菊の野徑に俯くに似て未だ遽かに棄つべからざるものある也。社の起原はミレエの家に於てカンボ、サントにあるオルカニ、ヤゴツォリ等の壁畫の木版を見しに在り。ラスキンが『近世畫家』に所謂捨つる莫れ擇ぶ莫れの理論を實行せんとしたる也。翌々年機關雜誌として『ゼ、ヂァアム』を刊行せしが僅か四號にして倒れぬ。五十六年モリスとバアン、デョオンスとの手になれる『牛津劍橋雜誌』亦此派の機關と見做すべきものなりき。

ラファエル前派一般の奉するところは、所謂『藝術の爲めの藝術主義』にして深くキイツに私淑し、戀愛に耽り、中世時代の內面生活を喜ぶものに似たり。斯はセンツベリの『十九世紀文學』『英文略史』の告ぐるところに係る。而してロマンチック文學に對する貢獻は主としてロセッチの詞賦に存せり。

ロセッチが十九世紀後半のロマンチック文學に於ける地位は、前半のコールリッヂの地位に等しく、其詩集は七十年迄公刊せられざりしと雖も、猶ほ『クリスタベル』の如くに稿本の儘に知己朋友の間を歴行して、豊富なる心情の溢れ出づる獨創の暗示は能くモリス、スウィンバアンを訓化するに足れり。繪畫に於けるミレエ・バアン、ヂョオンスも亦同様の關係を有しき。モリス既に四巻スウィンバアン既に三巻を上梓しつれどもロセッチの影響は之を明晰に見るを得べし。

千八百四十三年即ちロセッチ十五歳の折、獨語を修めてビュルゲルの『レノオレ』を飜譯し、またハルトマン、フォン、アウエの『デル、アルメ、ハインリッヒ』をも譯したることありしが、獨文學は羅甸人種たるロセッチの喜ばざる、素より其ところにして、其所謂『深く愛せる』ものは詩聖ダンテに在りき。近世佛詩人にありてはユウゴオ・ミュッセエ・デュマを除きて何人をも愛讀せざりしが、新ロマンチック派の『レノオレ』とも謂ふべき十五世紀の例の不思議なる殺人強盗詩人たるフランソア、ヴィヨンを偏愛到らざる所なかりき。ロセッチの好譯者たることはダンテの『ヴィタ、ヌオヴァ』譯及び『初期以太利亜詩人』の確證を與ふるところたり。ロセッチ希語を解せず。飜譯に依りて古文學のうちホオマア獨り稍々見るに足ると稱し、殊に其『オヂッセイ』を擧げたり。これ將た深く怪しむに足らず。『オヂッセイ』は叙事詩中の最もロマンチックなるものなれば也。英詩人に於てはシェリイよりもキイツを好めり。彼れは夢想家にして此れは美術家、彼れは時に抽象に走りて此れは常に其象に停り、彼れは或る哲學を有して此れは毫も無し。ロセッチ亦終に哲學を有せず。これ素より當然のことにして最近のロマンチック派はスコット若しくはコオルリッヂよりも寧ろキイツの指導を受けたるが故に、ロセッチの作物假令ば『ブライズ、プリリュッド』に『エンシェント、マリナア』『クリスタベル』若しくは『ゼ、レム、オブ、ゼ、ラスト、ミンストレル』の香りなくして『イサベラ』『ゼ、イイヴ、オヴ、セエント、アグ子ス』の面影ある、自然の勢也。

ロセッチはミルトン・ドライデンより受くる所毫もなく、晩年に及びてシャッテルトンに溺れたり。凡てロセッチの趣味は其心情の如くに個人的記號的神秘的偏重的のものを求めにき。幸ひにして偏癖に流れざりしは、其藝術的良心の柁を取れるが爲めのみ。ウィリアム、ロセッチの語る所に依れば、兄は一般に幽禮惡魔の書物を喜びぬと。シャプの評言に、ロセッチ想程希臘想と相反するものなし、彼れは明快にして此れはゴシック的の本能を極端迄行へりと謂へる、當れるに庶幾し。

ロセッチが後日のロマンチック藝術を發達せしめたるは凡そ三方面より觀察するを要す。第一繪畫及詞賦に於て初期以太利亜派の宗教的精神を復活表彰し、第二ダンテ殊に其生涯人格及小篇を巧みに傳達し、第三中世紀の人世及思想の新解釋を與へたる是也。ホオル、ケエンは曰く、精神的事物に對するロセッチの態度は全く新教と反對なりと。これ一面の眞理也。然りと雖もロセッチは宗教的ならざる加持力也。基督教的といふよりも寧ろ中世紀的なり。ロセッチを樂しませしものは中世紀宗教畫中のロマンチックの性質にありて、而かもロセッチは信者としてにあらずして畫家として詩人として之を樂し

みたるにありき。到底ホルマン、ハント若しくはクリスチナの宗教的熱誠と較ぶべくもあらざりしなり。

主題の共同若しくは重出、或は詞賦繪畵の交渉關係はラファエル前派の特性也。例せばモリスの詞賦『ゼ、ブルウ、クロオセット』『ゼ、チュウン、オヴ、セヴン、タウァアス』はロセッチの意匠に見るを得べく、ロセッチの繪畵『アアサアス、ツウム』はモリスの詞賦『ゼ、キングス、トラヂェデイ』はウィリアム、ベル、スコットの壁畵に其暗示を得たるが如し。凡そ斯の如く詞賦繪畵の交渉聯關は果して相互に有利なりや否やは頗る疑問なるべし。シドニイ、ラニアアが歌曲の間に彷徨して人の非難を受くるが如く、ロセッチが雄篇『ゼ、ハウス、オヴ、ライフ』は多數の讀者に依然として朦朧たるを免れず。さればテニスンが繪畵詩人と謂はるゝ意味にてロセッチに流用すべくもあらず。ホオル、ケエン又曰く、ロセッチは風景美を甚だ喜べる人にはあらざりきと。是れある哉。テニスン若しくはウォズウォスの如くに戸外の實景を見ずして自然が詞賦となりて出づる前に既に或る他の藝術を經由し來る也。即ち初期以太利亞畵工の背景にある自然なり。

一たび亡妻の柩のうちに葬り、後に發堀を經て七十年上梓八十一年改刪增補の『バラッヅ、エンド、ソネッツ』のうち、『ダンテ、アト、ヴェロナ』はダンテに關する最も主なる作とす。六行一節都合八十五節の長編也。ダンテはロセッチの詞賦繪畵より離るゝことなること雖も、方法に關しては一は絢爛にして假令ばば『ゼ、ブライズ、プリリュウド』『ロオズ、メリイ』『ゼ、スタッフ、エンド、スクリップ』の如く、他は平淡にして假令ば『ストラットン、ウォタア』『シスタア、ヘレン』『ゼ、ホワィト、シップ』『ゼ、キングス、トラヂェデイ』の如し。

歷史的趣味、社交的意義はロセッチの關與せざるところなり。政治、社會、思辨、科學等凡て現代の事物は其顧みるところとならず。大學を修めず、希語をも遺却したれば、コオルリッヂに得るところは其博識にあらずして其詞賦にありき。モリスも亦『クリスタベル』其他數篇を除きてはコオルリッヂを嫌ひ、達識のスウィンバアン亦コオルリッヂの創作に專心ならずして神學哲學に沒入したるを悲しみやくに理想化せられたるは、つまさるゝ身の想ひを深くも動かされにけん、假令ば『ゼ、ポオトレエト』の一篇を爲しぬ。バラッズいづれも中世紀の精神を含むこと雖も、方法に關しては一は絢爛にして假令ば『ゼ、ブライズ、プリリュウド』『ロオズ、メリイ』『ゼ、スタッフ、エンド、スクリップ』の如く、他は平淡にして假令ば『ストラットン、ウォタア』『シスタア、ヘレン』『ゼ、ホワィト、シップ』『ゼ、キングス、トラヂェデイ』の如し。

ラファエル前派中、最も中世思想を代表するはモリスに若く者なからん。中世紀の傳說を拾集して繼續するを畢生の目的となし、十六十七世紀は興味を惹起せず、十八世紀は存在せざるが如く、十九世紀の鐵道電信、通商の利慾は其師ラスキンの眼に映じたると同じく頗る嫌忌する所となりぬ。ニユウス、フロム、ノウホヘア』にユウトピアを描きて中世紀を再築したりき。千八百三十四年に生れ、マルボロオ及オックスフォオド大學に敎育を受け、五十六年に卒業して家計の豐かなるまゝに雜誌を刊行し

て己が文學趣味を滿足せしめたり。六十年ロセッチ●ブラウン●バアンヂョオンス等と共に室內裝飾品製作場をロンドン市に設立せしが勞力資本俱にモリスより出で親ら監督司配の任務を爲せるのみならず、意匠家となりて大に勤むるところありしかば、遂に英米兩國の趣味を一變せしむるに至れり。後北歐に遊びて氷島物語を飜譯し、九十六年十月新刊『ゼ、ウェル、アト、ゼ、ウォルズ、エンド』の廣告に後るゝ僅かに一晝夜にして逝きぬ。『如何なれば妄想にのみ恥る己れの、曲れるを直うせんとて悶ゆるなるぞ』と自ら問へるモリスの一生は、其所謂『曲れる』現世を矯正せんが爲めに非常の熱誠非常の勤勉を以て完全無缺の標本を作るに費やされき。社會主義と書冊表裝の復古說と次に擧ぐる詞賦の主題選擇とに依りて其間の消息自ら釋然たるべし。

The Defence of Guenevere (1858)
The Life and Death of Jason (1867)
The Earthly Paradise (1800-72)
The Story of Sigurd he Volsung (1876)
The Tale of the House of the Wolfings (1889)
The Lovers of Gudrun (Rossetti's favorite)

前記の著作の外に左の主なるものあり。

Love is Enough, or the Freeing of Pharamond (1872)
The Æneids of Virgil, done into English Verse (1875)
The Decorative Arts, and Modern Life and Progress (1878)
Hopes and Fears for Art (1882)

ホオマアのオヂッセエ飜譯（千八百八十七年）
A Dream of John Ball and a King's Lesson (1388)
Signs of Change (1888)（社會主義講義）
The Roots of the Mountains (1890)
News from Nowhere (1891)
Poems by the Way (1892)
Socialism: its Growth and Outcome (1893)
The Wood Beyond the World (1894)
The Well at the World's End (1896)

而して此等の外に氷島（アイスランド）の物語を飜譯せしものあり。序なれば左に掲ぐ

The Story of Grettir the Strong (1896)
The Story of the Volsungs and Niblungs.
Three Northern Love-Stories (1895)

五十八年に刊行したる詩集を評して、センツベリは是れヴィクトリア朝の詞賦の第二期を劃することを恰かもテニスンの第一期を劃するが如しとなせり。蓋しモリスとテニスンとは概念も手法も全く趣きを異にすればなり。六十七年の作を公けにするに當りて或評家は希臘詩に中世思想を插入せるものと思へども、斯は誤れるの甚だしきにて希臘の名をもてる中世紀の物語に過ぎず。或る範圍內に於て希臘の傳說に束縛せらるゝ間に、自ら純乎たる中世思想の行動するを見る也。總じてモリスの話說は稍々單調に流るゝを弊とすべく、美に飽和するまでに情熱を欲するの念を禁じ得ざるべし。假令ば『地上樂園』の如き、ノルウエの人士等蓬萊不死の仙鄉を覓めんが爲めに出航して得ず、古代希臘より放

たれる人々の建てたる或都市に漂着きて歓待されたる後、主客各々月々相話説するに象りたるものにて各十二合せて二十四篇の長きに及べり。『ラヴ、イズ、エナッフ』は十五世紀のモラリチイ、プレエの形ちを以てしたるもの、斯の篇また艶麗前後相踵ぐと雖も、讀者に與ふる最後の感銘は稍々朦ろなるに似たり。ロセッチの愛せりてふ『ゼ、ラヴァアス、オヴ、ガドラン』は十九世紀の妙什の一つなるべしと謂はる。七十一年と七十三年とに氷島旅行を企てゝより、太古の俤を具へたる簡朴なる民族を親しく目睹することを得て、其目的の藝術開拓を妨ぐる近世社會の基礎を根本的に改築せんと想へり。八十五年より九十一年迄にまた雑誌を發行して雄健なる筆を揮ひ、八十八年の散文デオン、ボオルの夢は熱烈奔放の情炎々燃ゆるが如し。九十年の『ゼ、ルウツ、オヴ、マウンテンス』は巧妙なる北歐物語なり。後六年活版事業に盡せるにも係らず九十三四年頃は中世紀の佛小説を續々飜譯せり。病中の稿本二編題して『ゼ、ウォタア、オブ、ゼ、ウァンダラス、アイルス』『ゼ、サンダリング、フラット』と謂ふ。同一の影響が兩個の相反せる心情に働ける作用の關係を觀るは頗る興味あり。等しく是れ中世思想也。ロセッチにありては以太利亞風となり、モリスにありてはノルマン風となりぬ。モリス南歐に遊びて得るところなく、北歐を訪ふて非常なる感觸を受けたり。ロセッチの神秘的はモリスの家庭的となり、『文字の上にありて自然の上に築かれざる』スウィンバアンに憑らざる者は、遂に此世を愛して本能を無視することを能はざりき。其樂園は『地上樂園』なりき。其航海は地上の蓬萊島を覓むるにありき。『天國も地獄も吾が歌ふべき力なし』と告白せる、何ぞ夫れロセッチと異なれるの甚だしきや。其所作スコットの如く數多くして且つ俚耳に入り易く、ロセッチのエソテリックなる趣きを傳へずして、最も能く中世紀を俗化したりき。中世紀はモリスに取りては信仰の時代にあらず、騎士の時代にあらず、また冒險の時代にあらずして、一個是れ通俗藝術の時代なりき。工藝の人は是れ美術の人、自ら作りて自ら樂しむ時代なりき。ミルトンを嫌ひウルズウォルスを貶し、キイツを推して近世詩人の筆頭第一となせる、敢て怪しむを須ゐず。

アルヂャノン、チャアルス、スウィンバアンは千八百三十七年に生れて今日尚在るの詩人也。牛津大學を修めたりしが、業半にして遂に去れり。六十一年に『ゼ、クイン、マザア』『ロザモンド』を書き、六十四年に有名なる『アタランタ、イン、カリドン』を著はして聲名一時に冠たり。後二年にして初期の詞賦を集拾したる『ポエムズ、エンド、バラッズ』を出しぬ。蘇國女王の生涯を劇詩にしたるもの三篇、六十五年に『シャトラル』あり、七十四年に『ボズウェル』あり、八十一年に『メリイ、スチュアート』あり。七十八年に『ポエムズ、エンド、バラッズ』第二集出づ。八十年の『サングス、オヴ、ゼ、スプリングタイズ』八十二年の『トリストラム、オヴ、リヨネス』八十四年の『エ、ミッドサムマア、ホリデエ』八十九年の『ポエムズ、エンド、バラッズ』第三集等、其他續々上梓せられて、評論に詩作に幾んど數ふるに遑あらざらんとす。

ロセッチとモリスとを以てキイツの衣針を傳へたりとすれば、スウィンバアンは寧ろシェリイの遺韻を偲ばしむるものにして其希臘想に於て同じく、其抒情的なるに於て同じく、其政治宗教のラヂカリズムなるに於て同じく、また其想像の奔放自由なるに於て同じとなす。英國評家の言に依れば、繪畫よりも寧ろ音樂に近きスウィンバアンの詞賦は格調の幽婉なる着想の高逸なる將たまた文字の陸離なる、近代遂に他に匹敵する者なしと謂ふ。其朦朧澁晦の誹りは、コオルリッヂの神秘的感銘より來らずして寧ろシエリイの如く話法の眩きまでに奮躍するにありとし、譬喩對照の好例として人は『トリストラム、オヴ、リヨネス』のイシュルトを以てするを毎ねとす。

神秘ならざるスウィンバアンにはラファエル前派の特性たる記號的なるところは著しからずと雖も、他の二特性の殊に其初期の所作に横溢するを見る。一は明瞭なる輪廓を害ひても猶ほ局所の精緻を好むことにして、キイツの『エンヂミオン』は多少の責任を免れざるべく、他は熱烈なる情焰にして妖艶奔放、聊か以て道學先生を顰せしむるに足る。ロセッチの『シスタア、ヘレン』を近世英詩の筆頭におけるスウィンバアンのバラッドは、また以て其學殖慧智の比類なきを證すと雖も、人に勸めたる簡潔直截は敢て自ら實行せざりき。假令ば『ゼ、ブライデイ、ソン』『ゼ、ブライズ、トラヂェディ』の如き是れ乎。抒情に巧妙にして更らに劇詩に堪能なるは讀者の盡く首肯する所。ラウンド、テエブルの傳奇は遙かにテニスンに優れりと喧傳せらる。

ロセッチに以太利亞のロマンチシズムあり、モリスにスカンヂナヴィアのロマンチシズムあり、スウィンバアンに佛蘭西のロマンチシズムあり。佛民が天才の那邊にあるかは今姑らく措いて論せず。ロマンチシズムの覺醒の佛に於て最も後れたるは事實なり。スウィンバアンはユウゴオ唯一の崇拜家にして、更らに一半を分ちてゴオチエエ、ボオドレエルに及びぬ。古代佛詩の數形を輸入して今日ドブソン・ラング・ゴッス等の間に行はれしめたるの力あり。

スウィンバアンの學殖はロセッチ、モリスに比して遙かに富饒なり。あらゆる國、あらゆる時代のロマンチック文學に通曉する而已ならず、近世の政治、古代の神話にも注意し、希語羅語は其自由に驅使する所となる。ロセッチ散文にて一二度批評したることありき。モリス雜誌記者を嘲笑しぬ。スウィンバアン獨り然らず、雄渾の筆、暢達の文、毎ねに讀者の耳目を聳動するに堪へたり。評論唯だ餘りに抒情的にして或は人を九天に上げ或は人を九地に陷るゝの弊なきにあらずと雖も、洞察に富みテクニックに明らかなるは世の均しく認識するところなりとす。

ラファエル前派は遂に現時の所謂新ラファエル前派を生みぬ。想海渺茫際なく涯なし。蝸牛角上徒らに蠻觸の醜態を演ずる者は誰ぞ。

（三十六、二）

牛涎子の置土産

Rozinante に跨れる牛涎子、行々獨り語つて曰く——

評言若し懇篤にして正確ならば、之を尊敬し之に感謝せよ。若し正確なれども懇篤ならざれば之に感謝せずして唯だ之を尊敬せよ。若し正確ならざると共に又懇篤ならざれば、之を遇するに嘲笑を以てせよ。ダラムベルは、斯く言へり。塵世に處して何等かの目的を立てよ。之に到達すべき道途に一切の障碍を許すべからず。アラビア人の諺に『群狗吠々而して隊商は通過する也』と謂ふを聞かずや。例の雑誌屋にてもありつらん。『御貴重なる時間中御邪魔仕り候て甚だ恐縮の至りに存じ候得共ソラ及ドーデーの傳を極めて簡單に御起稿被下譯には參らず候や御繁忙左こそと存じ候へば小傳を御依頼申上候』云々の郵券封入の書翰を作家マクソオレルに寄せたる者あり。オオレル所謂らく、洵に六時間にも足らざる小事業なり。然れども其請求を納れて時間を失ふを好まずと。流石に彼は當代の流行兒也。若し……夫れ……

馬去つて遠く、遂に聽くことを得ず。牛涎子抑も何處に之かんとするか。（三十六、三）

修浦島田舎文士

お役目すみて　候ふか。
みけしきすぐれて　見えたまふは、
いやとよ、懲しめありて　すゝめなき
名も芥舟（こみぶね）の　ごみを積みて
つゝむにあまる　うれしさの
渇して水を　おもふごと
いまは　讀　書　の　したはしく
さらばその汚名を　雪ぎたまはでも。
なさけなしとも　おぼさんが
われはまた　ひたすらに　道をたてんとすれば
よしなき縁に　非文士の
はや　日ぐれ

（三十六、三）

鯉

利根川べりのそぞろ歩き、名物の鯉を肴に一酌をといふので、友と二たり、かねて聞き覺えの茶屋の欅側に腰を下（おろ）した。流石田舎は暢氣（のんき）なもの、見れば亭主は居ないらしく、爺（やじ）さん一人が悶そうに煙草を薫らして居るので、つい話が始まる。

爺さんが、今日の天氣は好いといふから、自分等は昨日の天氣が好かッたといふ。すると今度は三人

お互に、明日の天氣は好さゝうに思へるといふ。夫れから友は此秋の收穫は宜いだらうといふ。仕舞に、どうした拍子か、自分等は此邊始めての者で、明日は早々出立するのだといふことを迄ばれることになッてしまッた。

話が途切れたから、其邊あたりを見廻はすと、向ふの鴨居ぎしに黒ずんだ大きな箱があッてなかに一尾の鯉がある。はゝあ、噂に聞いて居た看板の鯉といふのが是れだなとおもふて、なほ熱く視ると、何しろ長さ三尺五寸もあらうといふ素晴しい鯉であるので、ちよいと見には川ものと受取れない位だ。

「巨大かんべ、あれ、あゝ」と爺さんが自分の見つめて居る方を向いて言ふた。

「素敵だなあ」と自分が獨りごちのやうに小聲でいふと、友が何百目あらうかと爺さんに尋ねた。

「一〆と三百二十目がすぞ」と立ち上がりながら半纏引かけて「こうと十六年前の來月三日、奴俺、俺、上げたどよ。彼の橋の下でな、捕ッたど。何でも此邊に居るといふてな、よしきた、俺捕るべえと請合うてな、捕ッたどよ。あれ位な鯉お前等此邊で見ること、なかんべえと思ふだよ。はゝゝゝゝ、どら行くべえかの、今に亭主も歸るべえから悠々としなさろ」

爺さんが出て行ッて仕舞ッて、後に唯二人きり。

どうも眼が離せない。實に素晴しい鯉である。三十六鱗の雄々しい姿を惚れ〳〵と眺めて居ると、近處の人足らしい男が貧乏徳利片手に這入ッて來て、是れも鯉を見てゐる。

「大きいですなあ」と友はぐるりと其方向いて言ふた。

「うむ、そうだてば」と男は答へて、徳利の口からぐいと一息飲んで言ふには「これ捕れたとき、旦那衆此處らに居らなかッたんべえ」

「はあ、居らなかつたです。此土地の者でないですからなあ」

「ほんで知る筈ないてや。俺捕ってから、もう、五六年にもなんべえかの」

「あの、夫れでは、これを捕ッたのは、あの、貴方なのですか」と自分が問ふた。

「俺よ、あれ捕ッたは、ありや、彼の堰の下でな、何でも四時すぎであッたんべえてや、蚯蚓一匹で捕ッただよ。何はあ、鯉かゝるべえなど根ッから考へねえで鮒釣りに出かけたど、すると、あの巨大やらう、糸端さあ嚙付がッて畜生、ぶったまげべえで居られなかんべ、な、よ、旦那。一〆と八百七十目がすぞ。あッはゝゝゝ」

これが出て行ッて五分ばかり經つと、また一人やッて來て、ある朝自分が園子の片で釣ッた樣子を物語ッた。それと引違へに今度は眞面目そうな三十恰好の若者が這入ッて來た。

しばらく無言で居たが、遂に友が新客の方に向いて、「眞ことに失禮ですが、御近所不案内の私達に、お話くださるわけには參りますまいか、その、貴方が此鯉をお捕りなすッた話を」

「ふうむ私がこれを捕ッたと誰かゞ御話し致しましたかな」と愕いたやうな尋ねかたであッた。

そこで、誰からも聞かないが、何とやら、そんな氣がしたから問ふてみたと返事をすると眞面目そうな人が笑ひながら「不思議ですなあ、どうも不思議ですよ。事實貴方がたが中ッて居るから不思議じやありませんか。なにね、私が捕ッたのですよ。だがね、貴方がたがそう思ひなすッたとは實に驚きましたなあ」

それから、いざ物語といふので、岸に上げるに小一時間かゝッたことや、釣竿の折れたことや、家に歸ッてから丁寧に量ッて見たら、一〆九百六十目と三分あッたことなどの話をした。

この男が出て行ッて良しばらくすると、茶屋の亭主といふのが歸ッて來たので、今迄聞いた話をしたら、亭主大に悦に入ッた風であッて、果ては三人腹を抱へて笑ッた。

「あッはゝゝゝ、太郎兵衞おやぢも甚太公も兵作も村長さあの息子どんも皆んな已捕つたてや。あッはゝゝゝ。それ善かッぺえ何にはあ、彼奴等己ッて俺にくれべえ男だッぺえよ、あッはゝゝゝ」

そこで此鯉の眞個の歷史といふものを亭主が語るのを聽くと、餘程以前、亭主の未だ子供の時分に、亭主自らが捕ッたのでもなく、謂はゞ天幸といふものであらう、或る日曜の午後、棒さきに少しばかりの糸を付けて漁して遊んだときに捕れたのらしかッた。家に歸ッても、此鯉のお蔭で小言も食はずに濟み、學校の校長さんまでが、算術は出來なくとも斯んなのが捕れゝば澤山だとお褒めなすッたとのことである。

折から魚の外に呼び聲があッて亭主が坐を外したので二人はまた〳〵例の鯉の方を見た。實に素晴らしい美ごとな鯉で、見ればみる程感に堪へぬ。たまりかねて、猶ほ熟く視てやらうと思ふたのか、友は椽側にあッた室内用の脚立を持ッて行ッて左手に柱を抱いて、其上に延びあがる、トタンに足が滑ッた。倒れまいと、鯉の箱を力に身を支へたが最後、ドサンと落ちて、友と脚立が其上にバッタリ。「潰しやしないか、おい」と自分が飛上りざまに叫ぶと、友は「潰れなきゃあいゝがさ」と密と用心して、立ちあがりながら見廻した。

あッ萬事休矣。例の鯉は千々に碎けた。——いや、千ゝと言ふたが、九百九十片であッたかも知れない。自分は數へて見なかッた。

自分だちは、剝製の鯉が粉碎するとは頗る怪訝なことだと思ふた。

それで、剝製の鯉であッてみればいかにも怪訝なわけであるが、斯の鯉はそうではなかッた。斯の鯉は素燒製の美ごとに色を着けたものであッたのだ。（Gegome）（三十六、四）

文學上猫の話

私の希望通りに、或問題を御話しやうと思ひますれば、いつも仕掛が大きくなります、猫問題も、人

の目から見ますると、下らない問題のやうに見えますが、十分に之を御話することになれば、自分の極く粗い調べではありますが、數百頁の原稿が出來て居りますから、到底二時間や、三時間のことには出來ませぬ、それで自分自身の未だ調の付かない所は依然として殘つて居るのでございます、今日は和漢の文學に於ける猫の話は全く取去りまして、動物學幷に動物心理學の方で調べて居ります猫の問題も、それも悉く取去りまして、猫に關する傳說及び詩歌を中心として、埃及の昔しからシエクスピーアの文句を解釋し得るまでの程度の事柄をば、極く粗く掻摘んで申上げやうと思ひます、夫れ故にシエクスピーヤより今日のアンドルー、ラング迄は無論抜きます、斯う云ふ風でありますから、詩の文句抔は一々引用することは迚も出來ない、それからして年代をやかましく言つたり、人名を述立てゝ來たりして、精しい御話をすることは出來ませぬ、極く掻摘んだ御話より出來ませぬが、私の信じておりまするところに依れば苟もシエクスピーアを面白いと公言する人があるならば、マクベスの開卷第一に出て居るグレーモルキン猫が、どうして恐ろしいかと云ふ事まで知らなければ、其人は眞に文學を味つたとは言へないと私は思ひます、面白いと言へる道理が無いと思ひます、彼書に伴ふ感情を起すには、我々は前辯士の所言の如く、我々の肉を焼き、我々の骨を割いて苦心しなければならぬです。

西洋文學に於て最も先に申上ぐべき事は聖書でありまして、犬の文句は聖書に出て居りますが、猫の文句は一つもありませぬ、聖書の中に一つも出て居りませぬ。

埃及に於ては、猫が崇拜されて居ります、其時分にどの位猫に重きを置いたかと云ふと、ヘロドタスの言に依りますと殿堂を造つて猫を飼つて置き、其番人には政府が金を給し、猫に食はせる種々の物の爲めに租稅を課して取り立てると云ふやうな事をしたり、萬一火事があつて猫が焼けると、埃及人民は非常な恐慌を起して、泣の涙で親を葬る如く――イヤ、其以上の事をしなければならなかつたのです、さう云ふ風に重きを置かれた所でありますから、猫に對する種々な迷信が伴つて居ります、猫の目の細くなる所と圓くなる所とは、太陽の光と伴ふと云ふ譯からして、太陽の象徴になつて居ります、それからして猫は初めに一匹の子を産み、次に二匹の子を産み、七匹まで産むから、合計二十八匹の子を産み、それが一月の日數に相應すると云ふので、月の象徴にもなつて居ります、月の滿虧に伴つて、猫の眼光の明暗が伴ふと云ふ傳說があるのでありまして、是はプルタークと云ふ人の言つた事でありますが、今日から見ると虚の所があるかも知れませぬけれども、兎も角さう云ふ事になつて居ります、バビロンにもアッシリアにも猫の飼はれたと云ふ證據は一つも出て居りませぬ。

印度では昔しから之を飼つて居りまして、鼠を捕るものであるとか、鼠の敵であるとか云ふやうな名になつて遺つて居りますが、最も古い印度の話の中には、猫を僞善者と見立てゝ口の上手な詐僞をするものであると謂つて居ります。

支那に猫の這入りましたのは、紀元後四百年頃でありまして、諸君も御存じでありませうが、驊騮駃騠天下之俊馬也將以捕鼠於深宮之中曾不如跛猫といふ支那的の格言の文句が遺つて居ります、支那でも印度の考を受けて居ると思はれるのは、『猫』と云ふ文字の解剖です、何と云ふ字が横に付いて居るかと云ふと、『苗』の字が付いて居ります、支那の書物を讀んで見ても、田鼠が苗を害する、それを猫が捕つて呉れるから、苗の恩人であると云ふ文字の解剖になり、印度と同じ使ひ方であります、尤も一言斷つておきたいことは、私は故意に支那の書物に依つて申上げたので、言語學上の研究の範圍には足を入れませぬ。

希臘に於きましては、今日の猫其物が主人の膝の許に座つて居るやうな紀念物は、一つも遺つて居りませぬ、大詩人ホーマーの中に、犬のことは御存じの通り出て居りますが、猫のことは一つも出て居りませぬ、さうして見ると、ホーマーの時代には、猫に重きを置かなかつたらしいです、或はホーマー先生自身が嫌ひであつたかも知れませぬが、少くも詩に出て居りませぬ。

羅馬に至りますと、猫は可愛らしいものであると云ふことになつて、非常な名譽を負はせられて居る、猫は自由を愛する、いくら飼つても主人に屈伏しないから、實に剛い者であると云ふ風に見て居る、チベリウス、グラックスは、彼れの自由の殿堂の中に、猫の像を置きました、自由と云ふ事は、猫の持て居る德であるとして、名譽を付けて大切なものにしてある、それから猫旗が出來て居る、猫旗と云ふのは、軍旗を飜して敵に這入つて行くときに、猫は剛い者だからと云ふので、勇氣を示す爲めに、羅馬時代には、猫の旗印を付けてやつて居ります。

北部歐洲の方へは、何時頃猫が傳つて行つたかと云ふ事に關しては、傳說としては、十字軍に伴つて這入つて行つたと云ふ風になつて居りますが、どうも是は虛らしい、全く歷史に味を付ける爲めに誤つた說らしく、それより以前から、英吉利に於て盛の側に眠つて居り、其鼠を捕へる勇氣の所、其優しさうな所で、英吉利の尼寺に飼はれて、愛せられて居つたと云ふ事實が遺つて居りますから、傳說の方は確に虛であります、此尼寺では、一切贅澤をしてはならぬことゝなつて居りますから、動物抔はあらゆるものを飼つてはならぬが、併し猫だけは許してやると云ふ敎會の法典もある、是は猫が種種の仕事をするからであります、尼寺で猫がごろ〳〵鳴いて居る所抔は、何となく溫い感を起すものであるから、それで常に愛されるやうになつたらしいです。

土耳古から波斯へ掛け、遲羅、緬甸邊りに於ては、今日は非常に猫を可愛がつて居ります、洪牙利の或科學者が、東部西藏の或佛敎の寺院に、いくらも猫の居るのを見て驚いて、此猫をどうなさるのであるかと問ひました所が、猫と云ふものは大切なものです、種々の事をやつて呉れますが、第一鼠を捕へる、我々が鼠を捕へて血を流すやうな事をせずに濟むのは猫が捕へて呉れるからで、我々に取ては、非常に大切なものですと言ふのが、其返事であつたと云ふことであります、さうして見ると、土

耳古から東の方へ掛けては、一體に猫を大切にして居つたのでありますが、西部或は北部の方の歐洲に移つてからは、大切にされるまでには、餘程長い時が掛つたやうに思はれる、サー、ジョン、ラボックは皆なさん御存じでありませうが、此人の說に依ると、九世紀までは、英吉利でも佛蘭西でも、猫を家に飼つて居つたと云ふ證據は無いとしてあります、併しそれは疑で、記錄に無いと云ふに止まつて、其實前よりあつたらうと云ふ風に解することが出來ます、しかし少くも以前には重きを置いて居つたやうには見えませぬ。

此猫と云ふものは性質が冷淡で、獨立獨歩で、若し金持の人が一朝乞食になつたり何かして、零落すると、猫は愛想を盡かして逃げて行つてしまうと云ふやうな說から、どうしても中世紀時代一般の思想と猫と云ふものとは、一致しやうがないです、猫は美味な物は好きであるし、それからしていくら飼つてやつても、愛らしい樣子はせずに、依然として始終冷い感情を持て居るやうに思はれますから、中世紀の頃に惡口を言はれたのは無理はない。

隨て我々がシエクスピーアを讀むに於て、魔物と猫の關係と云ふ事が出て來るやうになるのです、前にも申上げました通り、埃及では神にされて居る、羅馬に於ては、自由の象徵にしてゐる、其後は暫く忘られたかの如くになつて、其姿を見せませぬが偶々中世紀に出てくれば、猫は化物になつて居る、猫其物の爲めには氣の毒な譯でありますが、迷信が非常に伴つて來て居る、第一、其時分の迷信の例を擧げますと、英吉利、佛蘭西、獨逸邊りで流行して居るので、所謂黑暗森林の炭燒人の話です、炭燒人が夜中に變な音を聞いて、寢所を出て月光で透して見ると、三匹の猫が居る、石を拾つて投付けてやらうとした所が腕が利かない、さうすると一匹の猫が『どうだ兄弟、彼男の女房の爲めに、宵してやらうではないか』と言つて、何所へか行つてしまつた、所が其石を投付けてやらうと思ふた男が、それから感覺を失つて了つて、翌朝地上に横つて居たそうです、迷信の第二として例を擧げますと、粉を製造する家で、夜中に何か恐ろしい音を聞いた、さうすると火事になつて、何でも二年許り同じ日に燒けた、三年目になつて、又燒けると困まると思ふて居る所へ、宗敎心の深い一人の裁縫師——旅人が訪れて來て『宜い、私が燒けぬやうにしてやらう』と言つて、床の上へ白いチョークで輪を書いて、其邊へ祈りの言葉を書いて、夜中まで待て居ました、所が眞夜中になりますと、果して一群の猫が這入つて來て、大きなチャンで出來て居る壜と鍋を持て來て、それを火の上に掛けた、さうすると何か沸騰し始める、それから見て居ると、猫がそれをでんぐりかへさうとして居る、裁縫師はそれを見て居るのを止めて逐拂つてしまつた、逐拂ひながら、小刀を以て一匹の猫の足を切つてやつた、さうすると、キャッと云ふ聲を出して何所かへ行つてしまつた、翌朝主人に昨夜斯々であつたと云ふことを話した、そうして其日火事が無くて、家の燒けないのを粉屋の主人が非常に有難いと思ふて居たのは宜いが、旅人が此處の女房に別を告げやうと思ふて、握手をしやうと手を出すと、女房は右手を

切られて蒲團の下に隠して、左手を出したさうで、即ち此話では女房が猫になつて居ります。其他諸威に於ても、迷信の例は澤山ありますが、一々御話することは止しまして、何しろ魔法遣と猫と云ふものゝ關係は、中世紀を通じて物凄い關係を作つて居るです、魔法遣が死ぬ時に『猫におれは化ける力を有つて居た』抔と云ふことを屢々言つて居る、千五百五十一年に死んだ蘇格蘭の有名な魔法遣も、千六百六十二年に死んだ蘇格蘭のお婆さんの魔法遣も猫に變化するやうなことを言つて居ります、斯う云ふ風に猫と魔法遣とは、離すことの出來ない關係を有つて居て、化けるやうに感じて居つたものですから、猫を虐待することは實に甚しかつたのであります。

それで佛蘭西で十七世紀まで永續して來た——今より三百年前まで繼續して來た有名な猫炙抔は、非常に慘酷なもので活きて居る猫を火に炙つて、子供が歌を歌つて囃立てゝ居る、また猫のオルガンと云ふ發明が出來た、これは實に慘酷なもので、其一端が載つて居るだけですからよくは分りませぬが、オルガンを造つて、中に猫を入れて尾を縛つて置いて、さうして熊に渡らせる、熊が上から押へるものですから痛いときにキャッと云ふ響を混へたオルガンの調が出る、さう云ふ事を平然としてやつて居る、又英吉利では、エリザベスの即位式と云へばつまりシエクスピーア時代と稱すべき時ですが此即位式に倫敦で張子のポープを造つて、其中へ無數の猫を入れて、左も仰山に市中を練りあるいて、それからしてそれに火を放けた、さうすると猫は熱いから大騒をしてイヤな聲を發し、張子も焼ける、さうすると皆ながら、惡魔とポープの聲を聞くと言つて囃立てる、斯く無慈悲に取扱はれたと云ふのは、詰まり魔術の聯想があつたからであります。

斯ういふ風に猫と魔術との間に妙な關係があつた爲めに、シエクスピーアの文句の中で猫に關する事を十許り私は見ることが出來ましたが、一つも猫を褒めて居る言葉がありませぬ、僅に一つ猫は害の無い必要なものであると云ふ文句がある切りで、是は比較的善く言はれて居る文句であります、他は猫の出て居る所は悉く宜くない、猫や犬のやうな仕樣のないものは無いと言つて蔑んであつたり、猫の恐ろしい所を形容して、猫が鼠の穴へ忍込むと云ふ文句で、如何にも恐ろしいやうな所に使つてあります。

私はシエクスピーア其人の文句の中に、猫に關して一言の褒めたる言葉の無いのを見て驚きはしませぬ、時世が時世ですから驚きはしませぬが、少くもシエクスピーアの猫に對する感情は、近世の我々とは違つて居る、近世の我々から見ればシエクスピーアの方が劣つて居ると思ふ、私首め皆樣も同じ事であらうと思ひますが、小兒の時に、猫に關する支那傳來の說、それが日本に這入つて來て、種々恐ろしい事や化ける事を、物語抔に頻りに書いてありますから、猫と云ふと、何かイヤな氣持の惡るい感を起す、併ながら段々さう云ふ迷信の域を脫して來ますと、猫は少しも恐ろしいものではなく、犬と同じく、實に愛すべきものであると云ふ傾向を、必ず持つであらうと思ひます、シエクスピーア

以後今日迄のことを上述の傾向を逐ふて御話すると面白い事もありますけれども、今日はこれで止めておきましよう、要するに猫に對する感は段々違つて來て居ります、さうして恐ろしいと云ふ感抔は少しも持たなくなつて、愛すべき自然界の一の物であると云ふやうに重きを置かれて居る、殊に佛蘭西に於ては、猫の實際の善い性質を見るのは、世界中佛蘭西人に限ると云ふやうな、威張つたことを言つて居るのがあります。

總ての自然物即ち一つの花でも一つの動物でも、或はそれが月となり日となりましても、或は又更らに人間の精神活動といふ方面に於ても、我々がそれに敵意を挾むやうな時代では、到底詩人となることも出來ず、詩人的の考を浮べることも出來ませぬ、有らゆる物を愛し、有らゆる物に同情を持ちて、其物の興味を感ずると云ふ程度にならなければならぬと思ひます、諸君に若しさう云ふ御考があるならば、前に言ひました通り、彼の猫の目を細くらしてゴロ〳〵鳴いて綠蔭のもとに心を有耶無耶の間に馳せながら樂しむと同一の境遇、同一の詩興を浮べられんことを希望いたします。（櫻牛會講演）

文學上の水仙花

何か書けと被仰るのです乎、私は近頃少し思ふところが在りまして雜誌に書くと云ふ事は止して居りましたが折角のお依賴を反古にするも甚だ遺憾でありますから、夫れでは初春に因みまして少し許り

文學上に現はれたる水仙花の事を述ぶる事に致しましよう、題は「文學上の水仙花」として頂きましようか、偖此問題を詳しく御談致しますと餘程長くなツて、雜誌に擧ぐると云ふ樣なものに成り兼ますから極く大體の事丈抜いて御談する方がよからふと思ひます、それで水仙の御談をする事に付きましては、夫より前に花全體に關しての御談をする必要があるようになります、花全體の事に關して御談をする段になると、更に進んで自然觀一般の御談もしなければならず、同時に花の研究と云ふ事が文學の研究と云ふ事に關して如何なる必然的關係を有するかと云ふ事も御談しなければならなくなりますが、とてもそふ云ふ詳い事は書物にする曉でなければ書きのせる譯に行きませぬからして、只今の場合では一ツの事丈讀者諸君にお注意を煩はしたいことがあるのです、夫は外の事でもないが今日迄の文學研究と云ふ事には見逃がす事の出來ない缺點があるのであります、夫は今日の學者がま噪しく云ふ事で現にグーレーなども文學批評の開卷第一に言ふて居ることですが、分析と云ふ事が缺けて居ることです、詳しく云へば科學的の分析が缺けて居るが爲に、諸々の學科が日進月歩の趣があるにも係はらず、獨り文學研究のみが根底の堅固な一學科になれないので在ります、之を救ふには從來の如くに文學研究を一ツ離れたものにして居らないで社會現象中の一現象として取扱ひ、其上にこれに科學的の分析をば施すことになると思ひます、斯うしますするには勢諸々のサイエンスの助を借りて文學の研究に及さなければならんのであります、夫で文學の中の花を調べ其中の水仙花を今日御談しする

と云ふ樣な事になッたのは、幾分かそう云ふ考を以てをるのでありますが突然の御來駕で私に十分の準備もありませぬから纏つたものは出來ますまい、夫れで廣く文學中の水仙花と題しましたのは通例の人がぼんやり考へて居ッて同名の植物は國を異にしても同じ植物の樣に思ふて非常な誤謬を辿りつつあるのを幾分か說明して見やうと思ひ、水仙の花の色、形、などの觀念が異ッてをると同時に起る情緒にも非常な關係を及ぼしてくるのでありますから其弊を救ひたいと思ふてをるのであります。只一概に水仙と云ひましても西洋の文學に現はるゝ水仙、殊に英文學に現れたる水仙は注意すべきものが三ッ在ります。

（第一）は普通の（ダフォヂル）と云ふので、佛蘭西語の（ナルシッス、フォー、ナルシッス）と云ひ、獨逸語の（ゲマイヲ、ナルチッゼ）なる和漢文學の方には關係のない花は唯だ一つで側を向いて色は金盞金臺で西洋の文學の裡で關係の深い英吉利で談をしまするとイングランドにあッて多年生草本で春季に花の咲くのであります（ダフォヂル）と云ふ名はアッフォヂル即ち「早く〳〵くるもの」と云ふ意味から來たので春の花の中の一ッになッてをります、スコットランドや、アイルランドには極く少ないが、イングランドの南西の方には幾町と無く數々咲ひてをります、花は面倒くさくもなく肥料も懸からずに如何なる場所にも生育しますから園などには大概植ゑてありまするものだから人間の心も與を持つと云ふ樣な感を生じて希望の象徴になッてゐます、即ちこう云ふ詩が在ります。

"When the vales are decked with Daffodils,
I hail the new reviving year,
And soothing hope my bosom fills"

事實はともあれ、ハーリックと云ふ詩人が早敢なく散ッてしもうのを悲しむのがあります。其詩を次に擧ぐれば、

"Fair Daffodils, we weep to see
You haste away so soon;
As yet the early rising sun
Hath not attained his noon,
We have short time to stay as you;
We have as short a spring,
As quick a growth to meet decay,
As you or any thing.
We die
As your hours do, and dry
Away,
Like to the summer rain,
Or as the pearls of morning dew,
Ne'er to be found again."

此詩は一般の感情を現はすと云ふものには成りますまい、詩人自身の悲みが在ッたのでありましょう。

普通の人が此花を見ると春だと云ふ事が分り嬉いと云ふ感が生ずる傾向があるでしよふと思ひます、實際悲い歌が少くありまして大概嬉い方の情が述べて在ります。

（第二）の方は英語の（ボーエッ、ナーシッサス）佛蘭西語の（ナルシッス、デ、ポエート）と云ふ水仙です、花は一つで瓣が眞白で、花冠が短かく黄なくて赤へりが附いて居ります、即ち口紅水仙と云ふのであります、多年生草本で英吉利では初夏に花が咲きまして希、羅、文學に出てをる水仙です、尤も或る人は希、羅、文學に出て居る水仙は此方で無くて（ナルチッスス、タゼッタ）と云ふ方の水仙だと云ひます、其或人の説に從ふ様になれば和漢の文學の方の水仙と同物になツてくるのです、即ちタゼッタの分布は擴くありまして カナリー群島からインドの北及日本迄も擴がつてをる水仙であります、シリー島などには既に久しく生育して居ます、英吉利では霜やあらしの害を受けて止むを得ず毎年以太利、佛蘭西などより輸入して居ります、これは花は一つでありませぬ、澤山あります、日本になりますと、飯沼慾齋先生の所謂「葉心一莖、莖頭薄苞破れて五六花を出す、梗三稜にして寸餘、花向側」云々といふスキセンであります、然し或人の説でない方に據ツて通例信じられて居る説に從ツて暫く（ボーエッ、ナーシッサス）を、希、羅文學中の水仙として御談を致しましよう、此水仙は香がなか〳〵強い、唯だ一つの花を持つておりまして昔の歌に從ツて見るとギリシヤの神樣などが大そう其花の香をば慕ツて居ツたので、プロサーピンがプルートーから連れて行れた時には此花を集めて居つたと云ふ樣に、シエクスピーアのウィンターズ、テール中に書てあります、

"Daffodils
That come before the swallow dares, and take
The winds of March with beauty."

此水仙は非常に香が強いものだからフューリーズが先づ此花の香で恍惚とさせて其犧牲を捕へると云ふ事でありますから夫故にソフォクリーズは此花を名づけて次句のやうに云ふて居ります、ナーシッスの語原の希語（ナルケ）は昏迷恍惚の義です。

"Garlands of the infernal gods"

此植物の名が出來たギリシヤのナーシッサスと云ふ青年の御談は西洋文學をやる人には誰にも分ツてをる事ですが一般の讀者の爲めに一寸申しますと、水鏡に寫る自分の姿に、戀いしい氣に成ツて溺死して遂に此水仙に化してしまつたと云ふ談から來て居るのであります。

"And on a bank a lonely flower he spied,
A meek and forlorn flower, with nought of pride,
Drooping its beauty o'er the water's clearness,
To woo its own sad image into nearness,
Deaf to light Zephyrus it would not move;
But still would seem to droop, to pine, to love."

（第三）普通の（スノードロップ）と云ふ此頃近日本に無い花で植物學上には水仙と云はずユキノハナと

云ふて通つてをります、佛蘭西語の（ベルス子ーヂ、デ、バリーシアン）獨逸語の（シュチー、グリュックヘン）と云ふ方でこれはイングランドに在つては多年生草本で早春に花が咲く方で白花の唯一ッ首を垂れて弱はしげに雪の間から咲ひてをる處に趣味があるのです、此可愛らしい花に向つて關係のある詩的聯想は餘程和漢の水仙に似たところが多くあります、即ち白く、潔く、弱よわしいといふ處に注意してあるやうです、バーボード夫人の詩の花の神樣の氣息が氷柱を此の花にしたと歌ツてゐるのはなか〳〵面白樣に思ひます、聖母にデジケートしてある花です。

"The flower that first in the sweet garden smiled,
To virgins sacred."

此花は慰藉の象徴になツて居ります、冬と云ふいやな時期の裡に春がもどると云ふ事を示すからでしよう、今次に證據の歌を擧げます。

"Green hues of hope array us,
Our snowy bells must ring;
And low but sweetly chiming,
The joyful tidings bring;
For theirs it is to utter,—
Awake! behold the spring!"

此證據の歌の裡でスノーウヰ、ベルスとあるのは獨逸語のシュネー、グリュックヘンと連結させて見たら面白いでしよう、ヲルヅヲルスと云ふ詩人が此花に對して歌を作ツてをります、其間の二行程抜いて下に擧げます、全く此通りであらうと思ひます、

"Chaste Snowdrop, venturous harbinger of spring,
And pensive monitor of fleeting years."

以上述べましたのは、西洋文學に出てくる三種の水仙を擧げたに止ごまツて居るですが、實際水仙は澤山の變種も在りますから園藝的の趣味から云ふ時にはなか〳〵此位では終りませぬが文學の方から云へば此三ッ丈で澤山であります、尚植物學の方の詳い研究を借りて花の形や瓣や、色や、其他の事を繪を畫いて御覽に入れながら說明も仕度くもあり、詩歌傳說の方をモット詳しく申上げたいが餘暇がありませぬから此丈にして置きませう。

支那の水仙の御話に遷りますと、前にも云ひましたが（ナルチッスス、タゼッタ）丈の事を知ツて居ればよいです、支那の文學では水仙は可成の地位を占めて居ります、瓶花譜に一品九命水仙と在りますからなか〳〵立派な位置に成ツてをるので三柳軒雜識には水仙爲雅客、夫から瓶史には蠟梅以水仙爲婢とあります、時期は尤も舊曆ですが花曆に十二月の部に出てをります、花は香を重く見てをると云ふ事が下の文句で明瞭で在ります、即ち汪機は其花香甚清と申しましたし、李時珍は其花瑩韻其香淸幽と言ひました、八重を好んでをるか一重を好んで居るかと云ふ事に就いては王世懋の花疏に次の文句がありまず、凡花重臺者爲貴、水仙以單瓣爲貴、短葉高花最佳種也、云々と在ります、水仙は色々名がありますが其中で文學的に必要で面白いものは——

水仙、玉玲瓏、金盞銀臺、配元、などで在ましょう、尤も楊萬里は銀臺金盞談何俗と喝破してをりますから此名丈は唯だ必要といふ方面に見ておきましょう、其外、太平清話には、雅蒜、南陽詩註には、天葱、內觀日疏には、女史花、姚女花、などの名が在ります、水仙の名は其物得水即不枯故曰水仙稱其名矣と云ふより來てをる、玉玲瓏は八重のものに附けた名で金盞銀臺は一重の花の形と色とに依つて附けた名で在ります、配元は和氣旁薄陰陽得理則配元棄於庭、から來てをる、雅蒜、天葱は或一地方の名であり、女史花、姚女花は史實及傳說の關係がるのです。

漢文學の方で水仙の花を歌ひましたのは大抵水に關係させて高潔純白或は時に弱々しいと云ふ意味を持たせてあります、從て西洋のユキノハナの方にある一つの意味の希望といふことは漢詩の內では外の植物に附屬して居ります、例の通りに證據の詩をは二三擧げて見ましょう。

宗陳摶の詠水仙花、の第一二句に湘君遺恨付雲來、雖墮塵埃不染埃、或は劉敞の水仙花第二句に氷雪肌膚姑射來、或は黃庭堅の次韻中玉水仙花に借水開花自一奇、水沈爲骨玉爲肌、或は劉克莊の水仙花第三句に不許淤泥侵皓素、或は楊萬里の詠千葉水仙花第六句に丰容要且小蓮花、などゝあります、水仙花の地位に關しては黃庭堅が王充道送水仙花五十枝、第六句に山礬是弟梅是兄、と云ふたのを辯駁してをる詩が在ります、楊萬里が水仙花第六句の內に礬弟梅兄品未公、于若瀛の詠水仙に水花垂弱帶、嫋綠雲輕、自是壓羣卉、誰言梅是兄、之を要するに漢文學中の水仙は冬の寒むい裡にけがれに染まず、高潔の姿を持ててをると云ふ事を詠ふに止まツて初春の希望は梅に讓ツてをる樣です、別言すれば英文學のスノードロップ、即ちユキノハナの地位を漢文學では梅が或部分を奪つて居ります、從て英文學中の初夏や晩春に咲く他の二種の水仙に對しては漢文學の水仙は愈々遠く離るゝ許りです。

和文學では水仙と云ふものは全く歌には出てきませぬ、其原因は修辭學や聲音學の問題になつて今日御話する事には緣が少し遠くなりますから何も云はないでおきましょう、和歌に反對して詩題を廣く取りました俳句が初めて水仙を題にして居ります、俳句の裡の季には大部分は支那文學と同じく冬の部に入れておかれますがまゝ春の部に無い事もありませぬ、此季に關しては少々議論をして見たいことがありますが、長くなりますからやめておきます、俳句で歌ふ水仙は(ナルチッスス、タゼッタ)ですヌ水仙に關係する意味も全然漢文學の影響を受けて居る樣で在ります、例へば水に關係のある花だと云ふ漢文學に現はれをる意味は猿蓑集の內の冬の部に「水無月の水を種にや水仙花」不玉、水仙は寒中に孤獨で白く潔く或は弱々しい姿を備へて居ると云ふ事の證據になる句が在ります、續猿蓑の冬の部に「なほ清く咲くや葉かちの水仙花」氷固、これは青い葉に反照させたのです、芭蕉句集の熱田梅人亭塵裏の閑を思ひよせて「水仙や白き障子のともうつり」千代尼發句集、春の部に、「水仙の香やこぼれても雪の上」「水仙は名さへつめとう覺えけり」俳諧袋下卷、冬の部に「水仙に日のあたるこそさむげなれ」「年明ぬうちと水仙咲こぼれ」俳諧發句題叢冬の部「水仙や根に白玉のされば」こそ」蓼太、「水仙や凩

の音霜の朝」もよき、類題發句集、冬十月の部に「水仙に炭扱ひし手な觸れそ」一品、「水仙や三千人の花の後」風平、蘿葉集第一冬の部に「水仙や見送る菊のうしろ影」也有、蕪村句集、冬の部に「水仙や美人がうへをいたむらし」其他數多ありますが是丈にして置きましよう。

扨て以上述べた事で水仙花に關する一般の事は御了解になつたらうと思ひます、今日の日本文學は支那文學の影響に西洋文學の影響が加はりつゝ在る時代でありますから水仙の意義も次第に西洋の傳說からくる或る意義の加はる事も在るだろうと思ひます、水仙が和歌の中に詠まれるやうになつて來たのも事實でありまして又ギリシャの水仙に關する傳說より生じたる意味を含むだ新派の和歌も見た樣な思が致します、俳句の方は西洋風の意味を加へると所謂いやみの在る文句になると言ひ囃しますから目に附く影響は無い樣に思ひますが後日どうなるものやら夫迄は分り兼ねます、要するに文學の研究者は眼を東西の文學に注ぎて詳しくある事實を充分調ぶると云ふ決心を以て仕なければなりますまい、今日はこれで失禮して置きます、辯が下手ですから嘸かし筆記が仕惡くかつたで御座いましたでしよう。

（三十七、一）

略解 英文學中の花

"To me, the meanest flower that blows, can give
Thoughts that do often lie too deep for tears."
—*Wordsworth.*

"Blame me not laborious bind
For the idle flowers I brought;
Every aster in my hand
Comes back laden with a thought."
—*Emerson.*

"An eternal book
Whence I may copy many a lovely saying
About the leaves and flowers."
—*Keats.*

其壹

COMMON SNOWDROP.

(佛) Perce-neige des Parisiens. (獨) Schneeglöckchen.

GALANTHUS NIVALIS. *Linn.*

ユキノハナ

"As Flora's breath, by some transforming power,
Had changed an icicle into a flower."
—*Mrs. Barbauld.*

凍風剪々、春は淺く嬌として力なきとき、羞澁僅かに一輪、和漢の梅の如くに先づ百花の魁を占むる可憐の小白花あり、氷肌玉骨、水仙と姿を同うして詩人の愛好措かざるもの、和譯してユキノハナと

謂ふ。F. Sobuyer Mathews は其著 "Familiar Flowers of Field and Garden" (P.3-4.) に述べて、

『ユキノハナはオウルド、イングランドの春の花と呼び得べけん、元日とは誰だ是れ名のみ、歳のはじめはげに雪の間のユキノハナよりぞ始まる。』

と謂へり、若し忠岑をしてあらしめなば、必ずや、『春きぬと人はいへどもユキノハナ咲かぬかぎりはあらじとぞ思ふ。』と歌へりしならんか。

Sowerby の "English Botany" (Vol. 9, P. 164-163.) に就きて案ずるに。ユキノハナは石蒜科に屬し、多年生草本にしてイングランドに産し、早春花を着く。花咲く頃の鱗莖の大さは小さき榛の實に似たり。葉も根生花梗も乾ける薄膜の如き一二截形の鞘の中にあり。冬の末、花と共に若しくは花よりも後れて現はるゝ二枚の葉は、線狀の長狹形にして綠のうちに稍々白味を帶び、中央以下は表に一條の溝を具へ裏に一條の平底を具ふ。花咲く頃の根生花梗は葉よりも長くして凡そ三吋より一呎の間を往來し、苞は纖弱にして頂點に稍々深き二條の分裂を有し、そが個々の中程より下にかけて草質の長條を具ふ。小梗亦頗る纖弱にして根生花梗よりも短かし、或は長きものもあり。花は頭を垂れて唯だ一輪。外花蓋片は橢圓狀倒披針形にして基脚に向ひて狹長となり、尖端は鈍く、凹面にして純白、長さ四分三吋より一吋に及び、始めは直立すれども後に擴大す。内花蓋片の長さは外花蓋片の半ば程にして、直立せる倒卵狀の橢圓形なり、刻み目を具へ、頂點に稍々圓形の二分裂あり、是れまた白色なれども頂點の直下に沿ひて二分裂せる綠色の點を帶び、其外緣は花瓣の二分裂と平行するを見る。葯は黃色。

因云。學術界の通稱ユキノハナをして Snowdrop の譯語ならしめんか、余は之に換ゆるにユキタマサウの名稱を以てせば、多少讀者に可憐の聯想を惹起せしむべき媒介とならずやと想へど、深く省察したるにあらねば、姑らく記して後日を俟つことゝせん。およそユキノハナを充分に說明して是れが英文學中の地位を論ぜんには、石蒜科の水仙屬を後景におきて、釋名、史實、及傳說の類より筆を起して汎くこれが詩歌文學を列擧せざるべからず。斯くせんには余が既成の原稿のみにても五十三頁に餘れば、到底此雜誌に揭ぐべくもあらず、乃ち略解の二字を標榜として通解及觀察の二項に限れる所以也。なほ、本號及本號以後に挿入すべき花の口繪は、自己の記憶の便宜上、親ら筆を執つて自己の手控に供したるに過ぎざりき。運筆幼稚にして素より大方に示すべくもあらずと雖も、書肆の至囑と講義の性質とは、余をして不得止這般の態度を執らしむるに至りぬ、讀者寬恕せば幸甚。

"Lone flower, hemmed in with snows, and white as they,
But hardier far, once more I see thee bend
Thy forehead, as if fearful to offend,
Like one unbidden guest. × × ×
Chaste snowdrop, venturous harbinger of Spring,
And pensive monitor of fleeting years!
—*Wordsworth.*

文學上の梅花

今日の題は「文學上の梅花」として頂きましょう、丁度時候が梅に相當するのみならず、前回にお話しました「文學上の水仙花」に於ける關係も大に深いところがありますから、此お話しが一番良いと思ひます。

既に水仙花中にも申上げました通り、西洋文學中のユキノハナに關する詩觀の大部分を和漢の文學では梅が大部分を占有して居りますが、其實梅のうちに入るべからざるもので猶ほ梅のうちに入れてあり、從つて人々が誤解しておるものがありますから、まづ此方から先きに申上げやうと思ひます、尤も文學上に大に必要なものではないです。

まづ第一には黃梅です、即ちワウバイです、これは木犀科の植物で薔薇科の梅と一處に見立てべきものではありません。しかし初春に咲きて、殊に漢字で迎春花と書きますから、初春の梅と何等かの關係あるやうに思ふのは無理はないのです、それだから鶯にも關係が生じて「黃梅や鶯の羽やうつりけん」「芦水」などの句も出てくるのでしょう、黃鳥の鳥が取れて梅になつたといふ洒落ならば許しましょうが、花の色は鶯の羽の色にはとてもならない植物です、李時珍の解釋には「處々人家栽之叢生高者二三尺方葦厚葉如初生小椒葉而無齒面靑背淡對節生小枝三葉正月初開小花如狀瑞香黃色不結實」として

あり、高濂の「草花譜」には「春首開花」の文句があり、王象晉の「群芳譜」には「雖草花最先點綴春色亦不可廢」の文句があります、これで迎春花の一端は解かるだらう思ひます、尤も決して草ではありません、猶ほ實物は何處でも見られましやうが、小石川の植物園に行かれる人は、中央の四阿屋の後、煉瓦溫室の手前、向つて左方を見るか、若しくは四阿屋を通過して眞直に進み、殆んど行當る右方を見るか、孰れかの道を取つてお覽なさい、目今咲いてをります、黃い小さな花です、迎春花の地位に關しては「三柳軒雜識」には「迎春花爲僧客」の文句あり「瓶史」には「梅花以迎春瑞香山茶爲婢」とあり、「花經」には「七品三命迎春」とあり、「瓶花譜」には「六品四命迎春」といふてあります。

此花が漢詩中に現はれて居るのは澤山はありません、例せば唐の白居易の代迎春花招劉郎中と題する詩の第三句四句に「杏園豈敢妨君去、未有花時且看來」といふ文句があり、劉敞の閣前迎春花の第三句四句に「黃花翠蔓無人顧、浪得迎春世上名」といふ文句があります、それですから漢詩人の此の花に與へたる價値は大抵想像されるのです、しかし春を迎へる、初春の花だといふことは證據になる詩があります、例せば宗韓琦の中書東廳迎春第一首の第二句に「帶雪衝寒折嫩黃」同じく第二首の第二句に「獨先嘉卉占陽和」宗晏殊の詩の「偏凌早春發、應詡衆芳遲」などです、それですから黃梅は初春の意味を占むる一部分の植物で、あまり必要のない方だといふて差支ありますまい、吾々が實地に見ても確

かに引立たない植物です。

それからモー一つは臘梅或は蠟梅即ちカラウメのことです、これも梅の種類ではなくて、而かも梅のうちに麗々と入れられてあるやつです、和漢共に重くは見てをりませぬが、彼の「蠟梅も咲いて落つく花屋かな、浮來」（類題發句集冬十二月）の意味をもつて居る植物であります。

抑も〳〵蠟梅は蠟梅科（Calycanthaceae）といふ亞細亞及北亞米利加に產する木本のうちのらうばい屬になる植物でありまして決して梅とは一つになりませぬ、花は葉よりも早く開きますが色は外が淡黃色で內が暗紫色です、木の高さは七八尺或は丈餘にもなります、花は香氣が非常にありますが少くとも小石川の植物園のものは皆下を向ひて咲いて居ます、目今眞盛りです、これも中央の四阿屋を貫通して眞向の行當るところ、さきの黃梅の左手の處にあります。

王世懋の「花疏」には「蠟梅是寒花絕品」また「瓶史月表」に「十二月花盟主蠟梅」また「瓶史」に「蠟梅以水仙爲婢」また「瓶花譜」に「一品九命蠟梅」などの文句はありますが決して文學中に重く見られなかつたといふことは范成大の梅譜の序の中にある「蠟梅香極清芳殆過梅香初不以形狀貴也故難題詠」の文句で證據が上るだらうと思ひます、實際の花の色は無論のこと、樹の好恰にも少しの面白味がありませぬ。王直方の詩話のうちに斯ういふ事が書いてあります、多少參考になるだらうと思ひます、「蠟梅、山谷初見之戲作二絕緣此盛於京師」してみると、不圖したことより人が騷ぐやうになつた丈に止まりませ

うと思はれます、あ！忘れて居ましたツけ、蠟梅の字義は斯うです「蠟梅本非梅類以其與梅同時而香又相近色酷似蜜脾故名蠟梅」また蠟梅は蠟月より來たのです。

蠟梅の詩を少し擧げて見ましょう、黃庭堅の戲詠蠟梅第一首の第三句四句に「雖無桃李顏、風味極不淺」とあります、王十朋のは先きに一寸擧げた事柄が書いてあります、即ち蠟梅第三四句に「一經坡谷眼、名字壓羣芳」とあります、春を報ずることを取つて晁補之は謝王立之送蠟梅の第一句に「詩報蠟梅開最先」といふて居ります、黃いところに因緣を付けたのは樓鑰の詠蠟梅水仙第四句の「精神疑著道家黃」でしょう、吳水齋の蠟梅第四句に「只欠橫斜照水枝」と惜んだのは無理がありませぬ、まあこれ位にして次に移りましょう。

蠟梅をはなれて眞實の梅の方に付て御話をしまする、和漢の文學では春の初めに置ける最も必要なる植物であります、同時にまた往古から知られて居る植物です、先づ漢文學では書經や詩經から既に梅の文字が出て居ります、然し「鶴林玉露」に所謂「古者謂實與花不言花美香至宋朝則詩文詠之」ですから御注意を願つておきます、茲で梅の實のことや食物に關することを御話するのが順序ですが其事は略しまして、どの位梅を貴んで居つたかと云ふ事は色々證據になる文句がありますが、其二三を擧げて見ますると「瓶花譜」には「一品九命」の地位を持て居り「瓶史月表」に「正月花盟主梅花」周密の「齊東野語」に「梅花爲天下神奇而詩人尤所酷好」などにて解ります、此の外傳說、史實などに梅を貴んで居

る證據になる事が數多ありますが煩はしいから略しましょう。

梅全體に關しまして如何なる處を貴しとして見て居つたかを說明する文句は所々で解りますが、先きに擧げました范成大の梅譜の後部にある文句が漢文學中梅に附隨させた意義を代表するだろうと思ひます、其文句と云ふは「梅以韻勝以格高故以橫斜疎瘦與老枝怪奇者爲貴」です、彼の有名なる林和靖の二句が所謂「膾炙天下殆二百年」も半は是れで說明が出來ましょう、然し今日御話しまする梅の花の天下に先て春を知らせると云ふ事は詩人の最も注目したところでありまして其等の證據になる詩は餘り多くて擧げられませぬから例に依て二三だけ擧げて置きます、陸凱の贈花薾宗詩の第四句に「聊贈一枝春」隋侯夫人の看梅第四句に「先露枝頭一點春」陳師道の梅花第一句に「百卉到頭第一芳」以上は春に先驅けする意味の證據になる詩です、此の他花の形、花の香、月との配合、雪との配合、紅白の優劣、他植物との比較、水との配合、其隱君子風な處、など色々申上たい事もありますが、長くなるからよしましょう。

和文學では漢文學と同じく春の初めの最も必要な植物になつて居ります、中古以前は花と稱すれば梅を指すことになつて居つて櫻を指すことにはなつて居らなかつたと云ふ事實から見ても昔より梅を重く見て居つたと云ふことが解ります、梅の春意を寓する史實として能く引かれるのは續日本紀卷第十三の「聖武天皇天平十年秋七月癸酉天皇後大藏省覽相撲晩頭御西池宮因指殿前梅樹勅右衞士督下道朝臣眞備及諸才子曰人皆有志所好不同朕去春欲翫此樹而未及賞翫花葉遙落意甚惜焉宜各賦春意詠此梅樹文人三十人奉詔賦之因賜五位已上絕二十疋六位已下各六疋」の文句です、夫れから續日本後紀卷第八承和六年のことも同卷第十五承和十二年のこともありますが、汎く物語類を涉獵して見まするど吾等の先祖が梅の如何なるところに感興をもつて居たかということが推測されて、和漢の交涉を美觀の方面から解く緒になります、序だから二三御慰みに載せまするど枕草紙「あてなるもの梅の花に雪のふりたる」源氏物語末摘花の「日のいとうらゝかなるにいつしかとかすみわたれる木末ともの心もとなき中にも梅はけしきはみほゝゑみわたれるとりわきて見ゆ」西行物語「軒ばにはこぐらきほどに梅をうへならべたるか花さきみたれたりければ人とゝめねどゆきもやられぬ匂ひゆかしさに此ふせやにとゞまりけり」回國雜記「宿坊の軒に梅いとおもしろく咲薰りて月かけおぼろなる」などです。和歌の方では萬葉以後今日迄數へきることの出來ない程歌があります、然し何れも似たりよつたりの意味で漢文學と區別して別に論ずる程の價値もありませぬ。萬葉集の處は卷五雜歌の號を見まするど梅花歌三十二首幷序と書いてある處に載つて居る梅の歌は或は春を知らせる意味、或は春梅を見て樂む意味、或は雪に見立てた意味、或は鶯に關係させた意味、或は櫻よりも早いと云ふ意味などであります。萬葉以後の歌も大抵其等の意味と、及び其等にいくらか他の意味が加つて來たゞけです。「武都紀多知、波流能吉多良婆、可久斯許曾、烏梅乎乎利都都、多努之岐乎倍米」は春に梅を樂しむと云ふ心持ちですし、

「波流佐禮婆、麻豆佐久耶登能、烏梅能波奈、比等利美都都夜、波流比久良佐武」は梅が魁して咲くと云ふことが分るでしようし、「如何則能爾、宇米能波奈知流、比佐可多能、阿米欲里由吉能、那何列久流加母」は雪に見立てたことが分るでしようし、「烏梅乃波奈、知良麻毛怨之美、和家曾乃乃、多氣乃波也之爾、于具比須奈久母」は花の散るを惜しみて鶯が鳴くと云ふ意味が分るでしよう、兎に角に梅は初春のものであるといふことは「波流奈例婆、宇倍母佐枳多流、烏梅能波奈」でも「烏梅能波奈……波流岐多流良斯」でも「能許利多流、由棄仁末自列留、烏梅能宇奈」でも分るです、これから二十一代集に跨つて徳川明治時代迄汎く分類して見まするに、梅が香や、梅が色や、暗夜、月夜、夕暮、朝、書、雨、露、霞、雪、水との配合や、紅白梅の優劣や、色々美觀の範圍を見るに面白く思ひますが、然し私の今日御話ししようと豫期したことではありませぬ。

一つ漢文學との關係上に注意すべきことであろうと思ひますことは、漢文學中に貴んで居る梅樹の形のことが和歌に出て來ませぬことであります。成程「梅が枝の」云々とは云ひますが、枝を主としたのではなくて鶯に宿をかすことや雪を積ませることに入用があるから云ふのです、「老樹」の文字が出て來ても矢張り漢文學に見る例の意味はありませぬ、況んや「若木」をやです、例せば「はる〳〵とあかぬ色香を契哉花咲初る梅の若木に、宗良親王」でも「散馴しつらさもしらで咲初る若木の梅を哀とぞみる、師兼」でも「老松のよはひをゆつれ枝かはす色もわか木の梅のはつ花、雅世」でも「うらわかみ立枝かちなる梅の花咲かさぬへき色香をぞまつ、基綱」でも「詠こし誰世の春か思ひ出る花も老木のやどの梅が枝、師兼」でも「梅か香は柳櫻の枝もあらし松にまかせて春風ぞふく、御柏原院」でもそうではありませんか、尤も林和靖の翻譯だろうと思はれたのを一つ德川時代で見ましたが、如何しても重きをおいた風には受取れませぬ、或は私の無學の爲めに見落しがあるかも知れませぬが、其節は世の高教を俟つことゝして、假りに私の注意したところが正當としますれば、漢文學の影響を蒙りつゝあつた和文學の此現象は私に取つては興味のある問題に思はれて居るのです、今結論を出すには猶ほ憚りますからも少し愼重の態度を取ろうと思ひます。

俳句の方では和歌と同じ樣に春を知らする意を初めとし大抵同じ事が述べてあります、一つ去來の「痩果てゝ香に咲く梅の思哉」の痩果てが例のことに聯關して一寸面白い樣に思われます、色々の例になる句を一々擧げるのは煩しく又讀者が知て居られると思ひますからよしませう。

玆迄述べて來まするに讀者の中に必ず次の樣な疑問が出るだろうと思います、其疑問と云ふのは外國文學中の春の初を代表するゆきのはなが和漢文學では梅が同じ意味を代表して來るとすれば、和漢に重きを當かれる梅は外國文學には如何なる地位にあるかと云ふことだろうと思います、ゆきのはなではなかつたのですが(たせつた)水仙の和漢文學に於ける地位は既に前回に述べましたから今度は梅が外國文學に於ける地位を述べなければならぬ理になります。

梅と云ふものは西洋の方では吾々の通常見ている梅と餘程異つた梅しかありませぬ通例セイヤウスモモと稱へて居るのは(Prunus domestica)と云ふて小さな薔薇科の植物で。英國では春に花は咲きますが花の方よりも葉の方が先きに出ます、佛蘭西で之れを(プリユニエー、ドメスチック)と稱し、獨逸では(ゲマイネ、プフラウメ)と稱して居るもので、英國の昔の人に知られて居らないと云ふ事實から見ると、多分英本國の植物ではないでしょう、歌に書く程な主要な植物には成つて居りませぬ、多くはその實やその汁などより食物の方に用ゐることを主として居りまして、花がよいなどゝ歌つた詩は私の知る限では見付けることが出來ないのです、猶ほ研究して見ませう、又想像して見まずると詩に現はれてこなければならない程な花若しくは樹の樣にも思へませぬ、第一宗教的意義の附隨しないので理解が出來ます、詩に出て來て日本の梅の趣を稍々備へて居るものは薔薇科(Rosaceae)の中において(Prunus communis)即ちアメンドウ(扁桃)で英吉利で(プラックソオン)佛蘭西で(プリユニエー、エビニユー)獨逸で(シユレーヘン、プフラウメ)と云ふものです、之れは花が葉より先きに出まして花の恰好も色も餘程梅に近く枝振りも少し似て殊に春に花の咲くものですが、唯一つ目立て違ふ所は倭木であつて高さが英國では通例三尺位なもので八尺位に達するものは少いのです、果實は日本の梅の樣には人が食はない樣です、其證據の詩に

"Sloes austre,
Hard fare, but such as boyish appetite disdains not."

があります、尤も此の實の汁を用ゐて酒を造つたりいんきに入れたり其他の使用法もあります、佛蘭西では鹽漬にして獨逸や露西亞では或る一種の酒を造ります、又葉を用ゐて茶の代りにひどく使た時代がありました、詩に出ました例を擧げるのは煩しいが唯一つ此植物には聯想の必ず起て來るBloomfield の詩だけを少し長いが出して置きます。

"Keen blows the blast, or ceaseless rains descend,
The half-strip't hedge a sorry shelter lends.
Oh for a hovel, e'er so small or low,
Whose roof, repelling winds and early snow,
Might bring home comforts fresh before his eyes!
On whitethorns towering and the leafless rose
A frost-nipped feast in bright vermilion glows
Where clustering Sloes in glossy order rise.
He crops the loaded branch, a cumbrous prize,
And o'er the flame the spluttering fruit he rests,
Placing green sods to seat his coming guests;
His guests by promise, playmates young and gay;
But ah, fresh pastimes lure their steps away.
He sweeps his hearth, and homeward looks in vain,
Till, feeling disappointment's cruel pain,
His fairy revels are exchanged for rage;
His banquet marred, grown dull his hermitage.

The fields become his prison till on high
Benighted birds to shadiest coverts fly.
Look then from trivial up to greater woes,
From the poor bird-boy with his roasted Sloes,
To where the dungeoned mourner heaves the sigh,
Where not one cheering sunbeam meets his eye.
Though ineffectual pity thine may be,
No wealth, no power to set the captive free,
Thy sights can make the wretched more forlorn,
And deeper drive affection's barbed thorn.
Say not, I'll come and cheer thy gloomy cell
With news of dearest friends, how good, how well;
I'll be a joyful herald to thine heart,'
Then fail, and play the worthless truffers part."

偖、之れから西洋の水仙と和漢の梅とを比較して或る結論を與へるのが順序ですが、詳しい御話をする性質の雜誌ではありませぬから之れだけにして止めて置きましょう。

唯一つ讀者の注意を煩して置きたいことは、本文の中に詩觀以外のこと即ち食物のことや染物のことなどを少し許り云ふたことで、文學に關係のないことだと思はれる方もありましようが、文學を社會現象の一つとして研究する時分には食物や染物のみならず藥物でも建築の裝飾でも宗教の供物でも種々の方面から植物の附隨性質を分解する必要が起きて來るのです、即ち問題としては詩觀が實觀とどの位の程度で交涉關係があるものか、文學の發達は其他の社會現象とどの位の交涉關係を持て發達したものか或は著しい關係は無かつたものかなどの問題を解釋するに植物の研究自身が大なる材料を供給するだろうと思ひます、私は之に最も多く興味を持つて居ります、唯だ憾むらくは不學の爲めのみならず亦實に材料不足の爲めに豫期の十が一をも滿足する結果を得ないことです、然し徒に泣き言を列べたり、他人を責めたりは仕ませぬ、自ら奮つて自分の力の及ぶ限りはやります、決して斯かる事柄を等閑に付すべきものでないと云ふことを讀者諸君に注意すれば夫れで能いのです、是れで今日の御話しは終りましよう、筆記は御苦勞で御座いました。

（三十七、二）

文學上の櫻花

植物學の方面で、薔薇科といふものゝうちにサクラ屬（プルヌス）といふて杏とか李とか郁李とか梅とか桃とか、皆此中に含めるものがありますが、櫻も矢張其うちに入れてあるのです、サクラ（Prunus Pseudo-Cerasus）は千八百八十三年マキシモキッツの調査に依つて三變種に分たれまして邦語では曰くヤマザクラ曰くサトザクラ曰くケサトザクラと稱するやうになりました、尤もケサトザクラは花梗に毛のある外は大抵サトザクラと異ならないから、サトザクラの一小別と見て其中に含めて仕舞ひ、花の小さいので區別し得るからといふことで近頃松村博士の學名を與へられました、ソメヰヨシノ

(Prunus Yedoensis) を入れて三つになるわけです、此うちサトザクラといふのは大きな花のあるサクラとあらゆる八重ザクラの通稱で、類が多くて櫻品六十九種のうち大半は之れに屬するそうでありまして、栽培品のみで新葉通常紅くなくして一重の者はサクラ中の逸品だといふ評です、實物は英國公使館前より半藏門前に行く路傍に十數株あるそうです、ソメキヨシノは墨堤のサクラの大多數が即ち之に屬するので、ヤマザクラは花の單瓣、新葉の帶紅で區別して內地の山野に自生して居ります、これは武藏では小金井の大多數のみならず、大和の吉野山、山城の嵐山が有名なる勝地でありまして、和歌の昔に關係が深いと認めますから、尙ほ後に牧野氏の研究を基礎として聊か詳述しやうかと思ひますが、夫より以前に此三變種の立木に關する歸山氏の評言は文學上に多少參考に供すべき所あると信じますが故に茲に借りておくことに致します、サトザクラは花の八重なるも一重なるも枝ぶり太くて何とやら不恰好に見えるが、ソメキヨシノは枝ぶり纖細で恰好よく、前のものは仁王の如く後のものは辨才天の如く、從つて花は前者に壯嚴で後者に細美であるのは其宜しきを得たものである、ヤマザクラは實に此二ツの性質の中間にあるものではあるが、總ての點に於て寧ろサトザクラに近い、どうでしようか、昔の大宮人と後の江戶作者との間に無意識にでも其美感に何等かの差違があつたといふ證據がありましようか、所詮所謂ターヒッド、ミーヂアムたる肉眼は夫れ程迄に勢力を文學上に逞うしないものでしようか。

ヤマザクラは落葉喬木でありまして幹膚は年を經まするとと平坦でありませぬ、枝條が茂り外皮は橫に裂けます、通常は滑澤で帶紫栗殼色です、葉は散生して葉柄を有つて居りまして形狀が長橢圓形或は倒卵狀長橢圓形、或は長橢圓狀披針形で、葉緣には通常重鋸齒を列べて居ります、葉裏は多少帶白色です、花は通常短縮せる總狀をなして枝上に側生して新葉の萠えでるのと時期を同じくします、中軸が短かくて上に二つから五つまでの花があつて各花の小梗が長いです、花の大きさは直徑二、三分一乃至三サンチメートル、花瓣五片平開して橢圓形の凹頭で、色は所謂櫻花色若くは殆んど白色、それで洵に散落し易いのです、ヤマザクラは日本、樺太、滿州、朝鮮、淸國の北部中部に自生して居りますから亞細亞東部廣く一帶の地の天產でありますが、日本に於きましては北は北海道より南は四國九州に至る迄普ねく諸方の山地にありまして最も能く成長したときには其高さ八丈もありまして幹の徑三尺に及ぶものがありますために、上述の諸產地のうちに於いて其繁榮の極度に達して居る所が即ち日本であります、そこで春風駘蕩櫻花爛熳と來ますると、遠く望めば雲の如く霞の如く、花の優雅な容の鮮艶なところが至極大和民族のお氣に召して、敷島のやまとごゝろを人間はゞの歌を三尺の童子も口にするやうになつたのでありますからイングリッシュ、フラワー、ガーヅンの著者が其七百四十七頁の所に「日本櫻、これぞ日本の一年のエポックをマークする花なれ」と評したわけになるのです、此點から考へて見ますと日本固有の思想と此花との因緣關係を一の特殊の問題としまして彼の

千八百七十三年に出たるシュライデンの「デー、ローゼ、ゲシヒテ、ウンド、ジンボーリック」に匹敵すべき研究が現はれなければならない筈だと思ふのです、夫れ迄には達しませんでも文學上の問題としては私は東西に亘つて其國々の代表花を比較するのを重要な一研究問題にして居りますから、後年に至つて讀者諸君の滿足を得るお話しは出來るやうになるだらうと自信して居ます。

「櫻諸國皆有之和州最多吉野滿山映花如雲如雪然多此單白山櫻也今京師名花多皆變於子種而或紅或白襍單瓣重瓣數種皆艷美爲百花之長不斥名唯稱花者櫻也」即ち櫻は日本百花の王たるもので、花と言へば櫻のことであると信じられたのであります、こうなつて來ますれば漢の牡丹、佛の百合、英の薔薇などゝ共にどうしても特別に見なければならなくなるのでありまして、貫之が「櫻よりまさる花なき花なればあたし草木は物ならなくに」の意味も充分に理解されます。

櫻を神と崇めて此樹を澤山に植ゑ木花開耶姫を祭つたる神社は櫻史新編に擧げてある通りに處々にありますので、例せば大和國宇陀郡佐倉村の櫻實神社、伊勢國度會郡の朝熊神社、多氣郡の宇爾神社、朝明郡の櫻神社、伊賀國伊賀郡の田守神社、近江國伊香郡の櫻方神社、櫻椅神社、駿河國富士の淺間神社、佐渡の后神社、武藏の櫻田神社、甲斐の金櫻神社、皆それであります木花（コノハナ）または木華に就きましては古事記に「大山津見神之女、神阿多都比賣亦謂木花之佐久夜毘賣（サクヤビメ）」日本書記に「亦名木花開耶姫云々如木華之移落（ウツロヒナシ）一云如木華之俄遷當衰去矣云々木華開耶姫甚以慙恨（ウラミマツリ）云々」とありまする「この花は梅の花をいふなるべしと云は深く古を不考の誤也」で、「木花は櫻花也」の斷案の方が確かによろしいのでありましょう。

允恭天皇が井傍の櫻を見て衣通姫に寄せた歌といふのが日本書記にこう出てをります「明旦天皇見井傍櫻華而歌之曰浮那具波辭、佐區羅能梅涅、許等梅涅磨、波椰區波梅涅儒、和我梅豆留古羅」萬葉集には佐具良とも佐久良とも作樂とも書いてありまして卷之十七に池主が家持に答る歌に「夜麻可比爾、佐家流流佐久良乎、多太比等米、伎美爾彌彌西底婆、奈爾乎可於母波牟」これは家持が病氣をして居つて「雖有乘輿之感不耐策杖之勞」と書いてよこした事を知らなければなりませぬ、卷之十八に池主の「櫻花、今曾盛等、雖人云、我佐夫之毛、伎美止之不在者」に答へて家持が「和我勢故我、布流伎可吉都能、佐具良波奈、伊麻太敷布賣利、此等目見爾許禮」といふて居り、卷之二十に家持が獨惜龍田山櫻花歌と題して「多都多夜麻、見都都古要許之、佐久良波奈、知利加須疑奈牟、和我可敞流刀禰」としてあり、同じく卷十三に「作樂花、佐可遙越賣」とあります、それから夜麻左久良の方は同じく卷十七に池主へおくる家持の歌「安之比奇能、夜麻佐久良婆奈、比等目太爾、伎美等之見底婆、安禮古非米夜母」とあります、以上の歌は別に取り出でゝお話しする程の意味を櫻としては持つてゐるやうに思ひませぬ、尚意味のある櫻の歌を後に擧げやうと考へますが、それより以前に古風な分類即ち八重櫻とか小櫻とか奈良都の八重櫻とか鎌倉櫻とか垂櫻（シダル）とか南殿櫻とか黃櫻（アサギ）とか緋櫻（クレナイ）とか素櫻（シロ）とか彼岸櫻と

か雲井櫻墨染櫻千本櫻六月櫻犬櫻權櫻及其他の苟くも櫻といふ名稱のあるものに對する吾等の祖先の美觀を種々な方面で研究して見るのは餘程面白いことであるといふことを一言しておきたい、玆には其例を示す爲めに二三の物語ものを擧げて見ましせう、例へば源氏物語の乙女「とくひらけたるさくらの色もいとおもしろければ」若葉「ゆへあるたそかれ時の空に花はこそのふる雪思ひいでられてえたもたはむ計りさきみたれたりゆるゝかにうちふく風はえならすにほひたちみすのうちのかほりもふきあはせて」椎本「はる〳〵と霞わたれる空にちるさくらあれは今ひらけそむるなと色々みわたさるゝに」枕草紙には「おもしろくさきたるさくらをなかくをりておほきなる花がめにさしたるこそおかしけれ」「かうらんのもとにあさきかめの大なるすゑてさくらのいみじくおもしろきえたの五尺ばかりなるをいとおほくさしたればかうらんのもとまでこぼれさきたるに」「木の花は櫻の花ひらおほきに葉いろこきが枝ほそくてさきたる」大鏡には「此花山院は風流者にこそおはしましけれ云々又こたちつくらせ給ひしおりはさくらの花はいふなるにえだざしもこはゝしくてもとのやうなとにくしこすゑばかり見るならんおかしきさて中門より外にうゑさせ給へる」狹衣には「あさみどりなる空のけしきいとゝいみじうかすみわたりたるにこぼれてにほふ御まへの櫻つねよりもおもしろう見わたさるゝに」八重櫻につきて徒然には「八重櫻はことやうの物なりいとこちたくねぢけたりうへずともありなん」夫れから山櫻につきて歌林四季物語には「くらまやまひえの山さくらのあとにくものかゝりたるもこゝろあるへくみえたり」撰集抄には「長承の末の年云々吉野山に上りて三年をおくり待りきある年の三月のころ庵の前に山さくらのさきみだれておもしろくなかめわたり待るに」廻國雜記には「白河二所の關にいたりければいく本ともなく山櫻さきみちて心も詞もおよひ侍らす」どうです、朧げに默會するところがあるでしょう。

櫻の歌夫れ幾百萬首ぞと言ひたくなる程な好題目になつて居るのですから、其重なるものだけを取つて、時間と空間とにかけて美觀の範圍を見るのが面白いでしようが、玆には根幕たる今古集だけを以て如何なるところに着目してあるかを見ましようなれば、例の其散り易いところに眼がつく、隨つて玆に色々の道德も附着して來る筈です「うつせみの世にもにたるか花さくらさくと見しまにかつちりにけり、讀人不知」寧ろ散るがよからうといふ方の倫理觀になれば日本の武士の倫理觀とも密接な關係が出て來るものもあります、何にも世の中には久しいものはないから散るがよからうといふのは伊勢物語有常歌「ちればこそいとゞ櫻はめでたけれうき世に何か久しかるへき」があります、散る櫻は人が惜しむ、隨つて浦山敷もなる「はるさめのふるはなみだか櫻はなちるをおしまぬ人しなければ、大伴くろぬし」「いさ櫻我もちりなんひとさかりありなは人にうきめ見えなん、そうく法し」盛んに散るから次の句も出てくる「さくらはなちりぬる風のなこりには水なきそらに波ぞ立けり、つらゆき」そうすると散らす風が恨めしくある「花ちらす風のやとりは誰かしる我にをしへよゆきてうらみん、そ

せい法し」同じ風でも香を傳へるならばよくなる「花のいろはかすみにこめてみせすとも香をたにぬすめ春のやま風、よしみねのむねさた」どうも散るといふことは咲き始めの櫻にさへ斯う言ふて居るではありませんか「ことしより春しりそむるさくら花ちるといふことはならはさらなん」長閑な春に早く散る櫻、「久かたのひかりのどけき春の日にしつこゝろなく花のちるらん、紀のとものり」此二者の配合は私は西洋の花を調査してをりましたうちに、同樣の配合があるものを見付けて非常に面白く感じたのでしたることや、白雲と見られたり雪と見られたり、配合物の山、水、月、夜、雨、霞、曉、其他いろ〳〵のことを古今以後明治迄のうちから幾分か申上げる順序ですが餘り長くなりそうに思ひますから廢めて次に進みましよう。

櫻に就きては決して散ることばかりを歌ふたのでなくて、無論其賑やかに盛んに所謂櫻花爛熳たる風情を寫し出したのは澤山あるです、證歌を別に擧げる迄もないことです、此事は俳諧でも同樣です、一體俳諧で好題目にしてをるものは矢張和歌でも好題目にして居る傾向があるやうに思ひます、尤も符節を合するのでは無論ないが、和歌で句の多い櫻でも梅でも矢張俳諧で句が多いです、然し和歌で歌はないでも俳諧で歌ひよく從つて重きをおかるゝものがあるのは忘れてはならない、例へば棒などほそうらしく思はれるです、全體「中十日梅に別れて初櫻、曉臺」「咲きみたす桃の中より初櫻、桃青」などゝ云ふて居るうちに「油斷して花になりける櫻哉、樗良」となる、而かも夫れが「春中の花をあつめて櫻かな、升六」であるから「七つより花見に起る女中かな、陽和」もあれば「一僕とほく〳〵ありく花見哉、季吟」もあればまた「隱れ住んで花に眞田か謠かな、蕪村」もある、從つて「花盛六波羅禿見ぬ日なき、蕪村」「花に來て都は幕の盛かな、其角」に遊び過ぎて「据風呂に後夜きく花の戻哉、蕪村」もあれば「月のあかき夜はたのみある櫻哉、几董」と思ふて遂に「春の夜は櫻に明けて仕舞ひけり、桃青」で「花に埋れて夢より直に死ん哉、越人」の感も生ずるであらう、「咲くからに見るからに花の散るからに、鬼貫」或るものは「目さむるや花咲おろす大井川、樗良」ともなり或るものは「櫻散る苗代水や星月夜、蕪村」ともある、「嘘にも散りてめてたし山櫻、蕪村」「木樵より外に人なし遲櫻、多代女」落ち行くさきは「花ちりて又しつかなり園城寺、鬼貫」配合物を見ての美觀の論評は前回と同じく私の今日お話し申さうと豫期したことでありませぬ。

「淵青し石に抱きつく山櫻、几董」の本體かとも想像される王安石の櫻桃花の詩「山櫻抱石蔭松枝、比並餘花開最遲、賴有春風嫌寂寞、吹香渡水報人知」を擧げて「觀此則中國亦非無櫻」と評したる文句は確に間違ひはない、これは前に述べたことで了解されると思ふ、しかし日本に賞美するサクラはないので、現に宋の景濂の詩でも分かる、「賞櫻日本盛於唐、如被牡丹兼海棠、恐是趙昌所難畫、春風纔起雪吹香」支那の櫻桃といふのは即ちミザクラと稱すべきもので花瓣の色がヤマザクラより濃いくて

花梗がよく〳〵短かくて、其果實は食ふことが出來るのみならず、支那の史實も詩も櫻桃の實を食ふことを中心として居て花を賞することが却つて少いやうです、櫻桃は含桃とも鶯桃とも朱櫻とも紫櫻とも櫻珠とも言ふて居る、何故に櫻桃と稱するかに就きては、李時珍は「其顆如櫻珠故謂之櫻面許愼作鶯桃云鶯所含食故」と謂ふて居ます、朱櫻といふのは蘇頌の言に從へば「實熟時深紅者」紫櫻といふのは「紫色皮裏有細黃點者」櫻珠といふのは「小而紅者」です、尤も私自身も未だ明瞭ならざるところがあるので、ユスラウメ即ち山櫻桃と櫻桃とは支那で如何程の相違があるか、此點が今以て不明瞭であるのです、更に詳言すれば植物學で支那の櫻桃だといふてデスクライブしてくれるものと李時珍などの櫻桃だといふてデスクライブするものと相違があるやうに思はれ、從つてまた漢詩に顯はれてをるものと相違があるやうに思はれるので、後者は何とやら山櫻桃の趣きがあることです、即ち花曆には「正月櫻桃始葩」としてあり綱目に「櫻桃樹不甚高春初開繁白花英如雪葉團有尖及細齒結子一枝數十顆三月熟時須守護否則鳥食無遺也」の文句があるからです、なほ專門家に教を乞ふ心算でありますが、いづれにせよ花よりも寧ろ實を賞するといふこと丈は同じことです、實を賞することは實に禮記にありまして「仲夏之月農乃登黍天子乃以雛嘗黍羞以含桃先薦寢廟」これ實に「此果先成」で百果に先ちて熟するが爲めに古人多く之を貴んだのであります、漢書叔孫通傳「惠帝嘗出遊離宮通曰古者有春嘗果方今櫻桃熟可獻願陛下出因取櫻桃獻宗廟上許之諸果獻由此興」とあります、東觀漢記「明帝

月夜宴羣臣於照園大官進櫻桃以赤瑛爲盤賜羣臣月下視之盤與桃一色羣臣皆笑云是空盤」實に一場のコメヂーといふべきものですが朝廷で貴ばれたことがイクラか分るやうです、況んや翰林集詩注に「每歲初進櫻桃先宜賜學士」でありますから撫言の「唐時新進士尤重櫻桃宴」も理解されます、零陵總記には「李直方第諸果以櫻桃爲第三」とあり花經には「四品六命櫻桃」とあります、從つて文學上の地位も凡そ想像されるでありましやう。

梁の宣帝の櫻桃賦の冒頭に「惟櫻桃之爲樹先百果而含榮既離々而春就乍苒々而冬迎」云々とあり、唐の張莒の紫宸殿前櫻桃樹賦のうちに「玩芳誠百花之首允薦乃衆果之先」の文字があります、要するに實のことが主となつて居ます、李杜兩詩聖の集を披いてもそうです、即ち李白の白櫻桃と題するものは「江羅袖裏分明見白玉盤中看却無疑是老僧休念誦腕前椎下水晶珠」杜甫の野人送櫻桃と題するものは「西蜀櫻桃也自紅野人相贈滿筠籠數廻細寫愁乃破萬顆勻圓訝許同憶昨賜霑門下省退朝擎出大明宮金盤玉筯無消息此日嘗新任轉蓬」としてあります、梅堯臣の朱櫻の第五六句に「味兼羊酪美食歷楚梅酸」とありますし、白居易は更に此果の位づけをやつて居ます、即ち與沈楊二舍人閑老同食勅賜櫻桃翫物感恩因成十四韻の第十三句より「李俗難爲對桃頑詎可偏肉嫌盧橘厚皮笑荔枝皺瓊液酸甜足金丸大小勻」と書いて居ります、王叔承の荊溪遊櫻桃園の第四句にも「甘驕荔子漿」とあります、然し決して果のみに終りませんで、花も葉も賞して居りまして、中には日本の觀櫻の趣きがあるものもあります、葉

の方は私は白居易の樟亭雙櫻樹の第三四句「素華朱蕚今雖盡碧葉風來別有情」より外に見ませんが、花の方は可なり多くありまして例せば劉禹錫の和樂天讌李周中丞宅賞櫻花の第一二句「櫻桃千萬枝照曜如雪天」溫庭筠の二月十五日櫻桃盛開の第一二句「曉覺籠煙重春深染雪輕」于若瀛の櫻桃花の第一二句「三月雨聲細櫻花疑杏花」などですが、李紳の作の何とやら日本的な北樓櫻桃花を擧げまして支那を終ることに致しましょう「開花占得春光早雪綴雲裝萬蓼輕疑艷折時初照日落英頻處乍聞鶯舞空柔弱看無力帶月葱龍似有情多事東風入周闥盡飄芳思委紅城」

支那から南又西に進めばビルマ地方ヒマラヤ地方に擴がつて居るプヅムといふ酷だサクラに似たるものがありますが、此地方の文學的研究は未だ私の力の及ばないところでありますから猶ほ西に進んで行きますと、ペルシヤ語の Keras と名けられる果が羅甸語のケラスス Cerasus を生じたかの疑ひがあつて、從つて其名を帶びてゐる Cerasus の市即ちCherasond より Lucullus が以太利亞に移植したの傳說あるセイヨウミザクラは斯の如くして歐洲に及び、羅馬人の征服と共に英吉利に入りたりとは、プリニイの言ふところで證據を擧げられます、しかし野生のものは亞細亞と同じく歐羅巴にもあつたらしい、野生のものを改良し培養したのが西漸したのです、抑も〳〵佛蘭語でセリシエー、メリシエー獨逸語でフォーゲルキルシェといふ所謂西洋の櫻は日本の櫻とは異なつて花が白く葉が大きく果實を賞翫するのが主であります、然し野生の方についてモ少し詳しく言ひますと、少許の吸枝を生ずる木本でありまして葉は垂れて廣橢圓形若くは倒卵狀廣橢圓形、花瓣は短縮したコップ形に擴がつて、春季に森や垣に花を咲きます、木の高さは數々一丈五尺程より二丈四五尺程の間に達し時には夫よりも餘程高くなります、枝々は擴がつて一の圓頭形になり花は若葉が現はれると間もなく咲きまして直徑四分三インチ位の白花で、三から五の花梗は長さ一インチ二分一より二インチ位のものがあつて垂下し、花瓣は多少深く裂目あつてそれで、實に早落するです、果實は長さが八分五インチ位の紅若くは黑の食へないやつで葉の色は立派な綠色です、傳說に依れば英吉利の初めての櫻畝はケントに出來たのであつて今日猶は其美しい櫻で有名であります、千四百十五年に書物を書いたリドゲートは既に櫻の實を市場で賣つて居ることを述べてをりますし、千五百九十七年に「ハーバル」を出版したヂェラードは其時代に數多の變種あることを知らせてをります、佛蘭西では櫻實が甘いといふのみでなく貧者の食物となるからといふ理由で非常に貴ばれて居るので、現に此果で作つた汁にパンとバタを少しばかり入れたものを冬季林間に居る木樵が常食として居た時代もあります、大陸では或は櫻酒があり或は櫻菓子がありまして仲々盛に使用しますが、英吉利でもまた食卓に上ぼすに櫻プランデーもあり生菓もあるです、就中尤も有名なるは所謂「チェリー、パイ」です。

"If you will but be mine,
You shall dine on Cherry pie, and drink nice currant wine."

全體小供等の間には櫻樹は仲々愛されてをりまして、理由は不明ですが此樹には必ず伴つて Cuckoo 鳥が出て來て日本文學の梅に鶯の感があるのです、尙ほ此鳥のことに就きましては他日「文學上の鳥」と題してお話する時期があらうと信じて居ます、小供等は次の歌を唱ひながら櫻樹を廻つて舞踏するのです。

"Cuckoo Cherry-tree,
Come down and tell to me
How many years I have to live,"

夫れから小供は一人〳〵樹を搖つて櫻實を落してみて其落ちた數で右の歌の文句の返事を得るのです、可愛らしく詩的な所があるではありませんか、これは今日猶ほ片田舍ではやるそうですが、別にまた昔行はれた遊戲があります、それは櫻の實の種子を小さな穴に投込むことでありまして、現にシェークスピーアの作の "Twelfth Night" に一寸出ています—

Sir Toby Belch:—"'Tis not for gravity to play at cherry-pit with Satan."

これは私の故鄉で小供等の間に流行しまする銀杏の種子の遊戲を聯想させます、私は斯かる種類のことを集めてみたひ考はありますのですが未だに手を着けないで居ます、それから櫻の木の話しや、また英のケムブリッヂ獨のハムブルヒに於ける「櫻遊び」のことやなどお話しをしたいこともありますが、文學上主要の植物は西洋に於ては櫻花よりも寧ろ櫻草に存するが爲めに私は一切此等のことを省略しまして直ちに櫻草に向つて突進したく思ひますが、何とやら前回よりも長いような氣がして酷く疲れましたから次回にお話しすることに致します、但し彼地に於きましても櫻花の白く豐かな、實の赤い美麗な、生長の熾んな所は人々の注意を惹いて詩人や歌人の愛する所となつて數多の詩歌があるのみならず、實に古歌一篇「熟れよ櫻」は汎く人口に膾炙してをりましてハーリックが之をかりて自分の理窟をつけてをりますから其詩一篇と及び同じ作者が花の散ることを一寸歌ふて居りますから其詩一篇とを擧げて櫻を見送ることに致します、二篇の詩は言ふまでもなく Hesperides のうちから取りました—

Cherry, ripe.

Cherry, ripe, ripe, ripe, I cry,
Full and fair ones, come and buy;
If so be you ask me where
They do grow? I answer, there,
Where my Julia's lips do smile
There's the land or cherry isle,
Whose plantations fully show
All the year where cherry grow.

To Cherry Blossoms.

Ye may simpler, blush, and smile
And perfume the air a while;

But, sweet things, ye must be gone;
Fruit, ye know, is coming on:
Then, ah! then where is your grace,
When as cherries come in place?

菫の匂ひ

菫のにほひと題しましたが、香そのものゝお話をするのではなくして、日本にない——今日はありますが——香のある菫が西洋の方の文學を占めて居るのでありますから、それで體裁をつくつて菫のにほひとしたのです。日本にある菫の方は、紫花地丁菫菜の類で、此方は香が好くありまぬから、西洋風な菫とは同日の論にはならない。從つて和歌に出て來る菫の方になりますと、菫を摘むとか、淋しい庭に菫が咲いて居るとか、紫の色に戀愛を含まして居るとか、そんなやうなことで、香を重くいふのは些とも這入いつて來ませぬ。それから俳句の方になりますと、矢張俳句の昔の方は和歌と同じ考へが出て居りますが、幾らか後の方になつて來まするとと、少し違つた意味が入つて來るか知らんと思ひます。一般に話して見まするとと、野に咲いて居る淋しい所、餘り多くない所、人の知らぬやうな所に棄てられて居るといふやうな意義です。幾らか西洋風の若干の詩に似て居て、自然を顯はす所もあります。併し和漢の方は今日のお話しの目的でないから一切申上げませぬ。

それから西洋風の方に關係しますと、長くなる傾きになりますが、極く括つてお話をしませう。日本風の菫とは違ふので、屢々出て來ます菫は、ニホヒスミレ（ヴィオラ、オドラータ）といふやつで、植物學の方で少し言ひますと、根莖が短くつて、根生葉と莖葉と葉のない花梗がそれにくつついて居るやつで、葉の方は基脚の所の心臟形になつて居る圓形な葉です。佛蘭西語のヴィオレット、オドラント、獨乙語のヴォールリーヘンデス、ファイルヘンと言ふのであります。日本語ではニホヒスミレと言つて居ります。此菫は美しいこと香の佳いことで非常に重く見て居られるのみならず、食物の方面とか藥物の方面で、今も尚ほ種々使つて居るのです。先づ古い時代から話をしますとヴィトルヴィウスの言ふ所に依りますと、アゼンスの名高きブルーに拮抗するのみならず、渇を癒したり、睡眠を能くしたり、頭痛や其他の病氣を癒したりする、衞生に使ひ花冠にも用ゐるとか、種々なことが書いてあります。プリニーもさういふ菫の德を稱へた長い目錄を作つて居ります。それからして、農夫の女房がそれの汁を取つて子供に與へる藥にしたり、或は飮物を作る材料にしたりして、菫は非常に文學界の外に役に立つことがあるのです。佛蘭西人では此花を種々のことに使つて居ることは大變なものですが、一例を擧げて見まするとと、マシューのコンフィシュール、モデルンの中に、菫を使つたもの〻名が出て居ります。にほひ菫の根の效能のあることも澤山なものであります。從つて此菫の效能と美いことに、人の注意が非常に向つたものと見えるのです。Aboo Rumi なる詩人は、"It is not a flower——it is an

emerald, bearing a purple gem." と言うて居る。亞拉比亞の人は美しい女子の眼をば菫に譬へて居りまする。昔の希臘は美の神に "violet-like eyelids" といふ形容詞を附けて居ります。Shakespeare の作中に "Violets dim But sweeter than the lids of Juno's eyes." といふ文句もあります。此比較はどういふ所から來たといふことには說が違つて二つありますが、寧ろ眼、殊に赤子の眼に引き込まれるやうなバーブル色の美しいのがあるから、其方から來たのであらうと思はれるのです。Herrick といふ詩人の文句に、

"From her happy spark, here let
Spring the purple violet,"

とあります。此詩の道理からして、英吉利のウエールスの墓地にあつては、にほひ菫と外の香の佳い草と一緒になつて居ります。羅馬の人は花を墓に飾りまする日を殊に稱して菫の日と言うて居ります此等のことが分つて、始めて Shelley の文句の

"Lilies for a bridal bed,
Roses for the matron's head,
Violets for a maiden dead."

が分かるのです。希臘の人の此菫の花をば愛したことは、Theocritas の言に依つてみて、花環に撰んだる花の中に入つて居ることで分ります、Cowper の譯ですが、Homer の Odyssey 第五編の所に、斯ういふ文句あります。

"Everywhere appeared
Meadows of softest verdure, purpled o'er
With violets; it was a scene to fill
A god from Heaven with wonder and delight."

Virgil の中にもあります。アゼンスの人の菫を愛したことは世界に名高いことになつて居ります。Aristophanes は "Knights" に

"He lives in the ancient violet-crowned Athens."

と云うて居ります。此形容は歌の神樣にも與へられて、Homer は "crowned with violets" の形容詞を附して居ります。其他玆に書き載せて見ると幾らも例が出て來ますが、それだけにして置きませう。昔の希臘の詩人は此花を愛して居つたがために斯ういふ傳說を作つて居ります。Io が牝牛に變形した時に、地が所謂 "honouring her" で食ひものにする爲めに菫を發生したと言つて居ります。此意味は Jane Taylor の詩のうちに、知らず識らず反響してをるから妙ではありませんか。

"Where the purple violets blows
Pretty cow go there and dine."

恐らく種類こそ異なれ、菫の生じないところは全世界にないくらゐでせう。歐洲各國には言ふまでもなく、日本でも支那でも、亞米利加でも、何所にもあります。又その美しいことを幾らか歌に謳つて居るのです。序に亞米利加の詩人の文句を一つ引いて置きませう。

"When its long rings uncurls the fern,
The violet nestling low,
Casts back the white lid of its urn,
Its purple streak to shew.
Beautiful blossom! first to vise
And smile beneath spring's wakening skies,
The courier of a band.
Of coming flowers, what feelings sweet
Gush, as the silvery gem we greet
Upon its slender wand."

菫は troubadour に與へられたる所謂 May-day prize 其ものに適當のものになつて居つたのです。後に は黄の菫の方が代りをしました。香の佳いことは、Lord Bacon の言葉に依つて見ると、花瓣を繰返し〳〵 vinegar に浸たすに、一年以上も保存し得るといふのです。此香が感じて幾久しい過去の記憶を思ひ出し得る Tennyson の詩があります。

"The smell of violets hidden in the grass,
Poured back into my empty soul and frame
The times when I remember to have been
Joyful and free frame blame."

此詩の意味は、日本の菫や、つぼ菫などから這入れますまい。Milton は自然を觀察した人ですが、其文句に斯うあります。

"In the violet-embroidered vale
The love-lorn nightingale,
Nightly her sad song mourneth well."

此事は事實であるのです。英吉利にある香菫のある所には、屢々此鳥が這入つて來るのです。恐らくは此鳥の食べる虫が、此植物に養はれるやも知れずと思ひますが、まだ此點に關しては、私は別に調べには着手して居らないのです。此關係は日本の方の梅に鶯といふやうな所に考へて來ると、餘程面白い味が出てくるかとも思はれる。英語のスミレ Violet は羅語の Viola より出で、是れはまた Vitula の次第にコラプトしたるものとする人もあり、希臘語の ion に前置の字々又は"の あるに關係があるといふ人もあります。それは言語學上の方で以て調べねばならぬことです。獨乙語では Stiefmütterchen 即ち little step-mother と言ひますが、其原因は分りませぬ。にほひ菫に關しては、もう少し言はなければならぬこともあり、また共にペンジー即ちサンシキスミレのこともお話ししなければ、十分のものにはならないですが、唯だ今日は日本風の菫では、西洋の菫が理解が出來ないといふことゝ、日本の菫の加つて居る傳說、神話などから來て居る意味が解せるものではないといふことを明にすれば、それで宜いのです。纏つた委しいお話は、何時か世の中に出す機會があるだらうと思ひますから、これで歇めて置きませう。（三十七、四）

日英文學中の櫻草

佐々木大人からお手紙を頂きまして、新刊の「心の花」を頂戴しました時分には表紙の繪を見まして百合の花のことをお話しやうかと思ひましたけれども、此の百合といふものは佛蘭西の國華になッて居て文學上問題が大きくなりちよッと短く申上げる譯には參りませぬし、且又時候がどうも其方でありませぬから、何時か別な好時期を捕へることに致しまして今日は目今盛りになッて居りまする櫻草のことを極く短く日英のものを比較してお話して見やうと思ひます、

櫻草といふものは東京近邊では板橋の停車場に下りましてそれから戸田の街道の方に傳はつて行ッて、一里ばかりも行きますと坂がありますが、其坂を出て行ッて左の方を見まするとお茶屋が一軒ありますから、其處で案内をして貰ひまするとに容易に櫻草の滿面咲いて居る野に出ることが出來ます、櫻草の咲いて居る野原の實景を賞翫しやうと思ひなさる詩人文士は一度は御出かけなすッて御覽なさい昔は決して此一地方ではなかッたのでしたらうが文明の破壞力に堪えないで適者生存の實相を眼のあたりに現して居ます、丁度五月の初めに滿開になる時期になッて居るのです、尤も時候の寒暖で多少の遲速はありますけれども、先づ四月下旬から五月上旬にかけてと見れば差支ないでしよう、

櫻草といふものは櫻草科(Primulaceae)の中に屬して居りまする櫻草屬(Primula)になりますが、櫻草科といふものは多少何處の地方にも產する草本でおッてなか〳〵美しい花を着けることが多いのです、櫻草屬の中の櫻草即ちプリムラ、コルッソイデス、是は葉が卵狀形を爲して居ッて花莖が長くして其頂に繖狀の花序を生じて、花は紅紫色若くは白色を呈して居ります、日本にありまする通例の櫻草といふものは赤い詳しく言へば櫻色をもう少し濃くしたやうな紅紫色といふやつです、白いやつもありますれども多くは櫻色をした方です、之をもう少し詳しく「草木圖說」卷三、十九枚目に依ッて見ますると其文句には斯ういふ風に書いてあります、

櫻草、山間濕潮の地に生ず、我邦柳津の蘆塲亦多く自生す、人家栽て其花を稱し子生して花色葉狀の變ずること算すべからず、春宿根苗を生じ一柄一葉、葉の長さ三四寸幅二寸許本くりこみ邊緣惣て大刻缺、每刻更に三五の鋸齒あり質柔軟柄葉よりは長く葉背と共に微毛あり數葉一窠をなし葉間莖を拔くこと五六寸、頂に有梗數花を繖簇す、花筒樣五裂瓣本細く末大に頂に一小缺凹を爲して略々櫻花の瓣尖の如く又喉頭に鱗狀點記あり色淡紫を常とす其他紅白濃淡雜駁又瓣の大小剪絨等種々あること枚擧に遑あらず云々

としてあります、此文句に依ッて見ましても櫻色を濃くしたやうな花が最も普通であるといふことは分ッて居るのです、此植物は日本文學上に於きましては櫻樹の花といふ昔から因緣のある花の方を非常に賞美して居るものでありまするからして、悲しいかな文學上に好地位を持ッて居りませぬ、殆ど

文學上では櫻に蹴落されて居りますので、俳句の中に折り〳〵出て來ますが何れも櫻を主にして居る句になッて居りまして、櫻草の方の句は誠に情けない文句しきやありませぬ、例へて見ますると老阿の

三月の地にも隙なし櫻草

といふ句がありますが、此文句でも分る通りに大きな櫻を主にして言ッて居るので、櫻草といふものは其方から蹴落されて居ッて上の方に大きな櫻がある、日本には下の方にも矢張り同じ色の櫻花があるといふ位ゐにさういふ意味になッて居ります、もう一ッ例を出しますと一茶の

我國は草も櫻を咲きにけり

といふ句がありますが、是とても櫻の方を主にして居りまして、櫻草はつけたりのやうに聞えます、即ち日本の國は立派な櫻をいふものがあるからしてソイツに草の方も負けないやうにと櫻草を出すといふやうな意味になッて來て、矢張り櫻が主になッて居ッて櫻草は其處から出て來た文句があるばかりです、吾々は櫻草といふ名を解剖して此間の消息を充分理解し得ると思ひます、併ながら此花が英國の方の文學になりますと仲々重きをおかれて居る花でありまして此植物に關しての英の歌といふものは殆ど無數と言ッて宜い位です、それから此植物の科學的研究のことを申しあげる段になると色々面倒になりますから厭しますが一番文學的に目立ッて相違のあると想へる點は花の色です、それから根生花梗の未發達といふことです、色が西洋の方のは通常黃の淡い——讀者は縁日植木屋で御覽になりましようが——のです、英吉利ではプリムローズ(Primrose)と名を附けて居ります、プリムローズといふ意義は Dr. Prior の言に依りますと Pryme Rolles といふ文字から來て居るので初春の花といふことです、尤も此字義に關しては少し面倒なことがありますのですが今は其事を申上げる必要が有ませぬからこれ丈にしておきます、所が俗間の書物やまたは日本學生の間などでは其文字を其儘解釋して初春の薔薇と思ふて居りまして非常な誤解を生じ花の色は薔薇色だらうと想像するのです、これは注意しなければなりませぬ、若し春の薔薇といふ意義のものに何か相應する植物がないかといへば寧ろ英吉利の文學の中に於ては縁日植木屋の所謂延命菊即ちデージーが丁度それに相應するので、南歐に澤山あることゝ云ひ、色と云ひ咲く頃と云ひどうしても其方にならなくてはならないのです、南歐には櫻草は至ッて少いのです、此櫻草が咲いて居る所は土手だの、垣だの、川の邊り、野原、何處を問はず其淡く黃ない色を帶びて咲いて居るのが誠に美事なものですから詩の中に幾らも出て來るやうになります、それでどう云ふ考を此花に關して英吉利の詩人達が起すかと言ひますると、先づ香といひ色といひ形といひなか〳〵佳い所があるもんですから斯ういふ詩の文句があります、

"Long as there's a sun to set,
Primroses will have their glory."

櫻草の前には雪の花といふ物がありまするし、それから又春サフランといふ植物もありまするが櫻草

は餘程英吉利の詩人の間に重きをおかれるので、延命菊を除いては子供時代を懐ひ起させるもので櫻草に若くものは無いといふやうな意味を歌ふて居るのがあります、しかし騒々しい此世界にウォルズウォルスと共に次の如く感ずる人のないでもありますまい、

"A priurose by a river's brim,
A yellow priurose was to him,
And it was nothing more."

其咲て居る處が森や物蔭で其花の色が淡く黄ければ何となく悲しい氣を起させるものと見えまして、ミルトンの文句に斯ういふのが出て居ります、

"Bring the rathe primrose that forsaken dies."

シェークスピアのウインタース、テール中にも斯う云ふ文句があります、

"Pale primrose
That die unmarried ere they can behold
Bright Phaebus in his strength."

春早く咲くといふのは事實なものですからバーンスが斯ういふてをります、

"The Primrose I will put, the firstling of the year."

それから樂しい春に咲く此花にナイチンゲールの歌ふ聲を配合して、浮世の苦痛人生の悲慘を知らない幸福なものだなどゝいふ歌もありまするし、或は其幸ひな日も束の間でやがては風に吹き散らされるだらうなどゝ悲しんで居る歌もあります、斯うして見まするど同じ植物――或は殆ど同じ植物と言ッた方が宜いかも知れませぬが、櫻草といふものは東西に跨ッてありますが文學上其位置が非常に懸絶して居るといふ事實があるのです、花にも幸不幸があると見えます、名稱や作例のお蔭で斯ンな憂目に遇ッては嘸かし日本の櫻草は泣いて居りましょう、若し相像を逞ふしまして、日本に春の櫻の樹が無かッたならばどうであるかといふことを考へて見るのも面白いことであらうと思ひます、或はまた花の色が淡黄であッたならば如何などの想像も面白いです、日本固有の櫻色の櫻草にしろ、野に咲いて居ても鉢植にしても捨て置くやうな花ではないのですから歌をうたふ人や詩を作る人などが古代の傳説に支配されずして、或は古來の作例を追はずして自然を寫すといふ考へであッたならば確かに櫻草といふものが歌或は詩の立派な題になるべき筈だと思ッて居ります、

櫻草の話をすると九輪草のことも言ひたくなりますが先づ今日は櫻草だけのことにして置きましてそれで止して置くことに致しませう。

（三十七、五）

植物と文學との關係

文學と植物との關係を詳細に論述する曉には、熟考の上に系統を立てゝ申上ぐる必要がありますが、私は未だ夫れ程に準備してをりませぬから、玆には僅かに斯の關係を切實ならしむる現代の新氣運に

就いて卑見を吐露するだけに止めておきたい。新氣運とは言ふ迄もなく近頃著しく目につくことであ
りまして、文學に現はれたる若しくは現はるべき植物に對し、一は植物家の方面より、一は文學家の
方面より、殆んど同時に注目し始めたることであります。植物家の方面より注目し始めたる事實は、
植物に關係ある雜誌のうちの雜錄欄内に、植物に因緣ある詩歌文章が少からず引用せらるゝことで推
測することが出來まするが、殊に書冊となつて「植物生態美觀」や「はな」が刊行されたので明瞭であり
ます。文學家の方面より注目し始めたる事實は、集會席上の談話に既に其芽を萠してをりましたが、
殊に一昨年あたり、大學院で、「動植物の文學的價値」を專門に研究する學者が出でたので、一層明瞭
になつて來ました。縱しや其發足點が植物家の方面からにしろ、將たまた文學家の方面からにしろ、
文學に現はれたる若しくは現はるべき植物卽ち文學と植物との交涉範圍に其指の染まり始めたこと
は、私は實に喜ぶべき新氣運だと信じてをります。

文學と植物との關係といふことは、文學と動物、文學と鑛物、文學と地文、文學と天文等の諸關係と
同じく、文學の立脚地から言へば、自然詩觀のうちの一部分の關係に過ぎないのです。御承知の如く、
文學が其目的を到達せしむるために使用する材料の範圍は、有形無形の兩方面に涉つて、宇宙の森羅
萬象を盡く包括する程廣大なものでありまするが、文學特有の篩にかけて撰擇を施しますから、或物
は使用せられ、或物は使用せられぬために、物の分量及性質が著しく減少して來ます。植物の關係方

面でも、矢張此一般法則を脫することが出來かねますから、廣大なる植物全體から分岐しまして、文
學に現はれたる若しくは現はるべき植物卽ち文學的植物の一部門を構成するやうになつてくるのであ
ります。それならば文學的植物は何々であるか、如何なる法則に依つて文學的植物なるものが其範圍
を制限さるゝ乎との質問が出ましよう。文學其ものに生命があつて成長しまする爲めに此質問に應じ
るは容易でありませぬが、過去に於ての文學的植物の分量及性質は何々であつたかといふことはお答
が出來まする筈でありまするし、同時に此材料より歸納して、過去に於ての文學的植物の範圍を制限
する法則をも規定することが出來る筈であります。學者が骨を折つて研究する點は實に此處です。私
だけでも既に多少の結果を得てをりまするから、皆さんの結果をも加へたらば、多少觀るに足るべき
ところがあらうと思ひます。

文學が其詩的感情卽ち其こゝろもちを寄託せんが爲めに撰擇する自然物のうちに於て、植物は殊に主
要のものであると稱して憚るまいと考へます。何となれば、自然詩觀を構成するにあたり、詩人文士
の耳目卽ち聽覺と視覺に對する音と色との二大要素のうち、色の多趣多樣なるところは植物のうちの
花の色であります。夫れ故に、色彩の豐富なる花を包有する植物と文學との密接なる關係を生ずるは
理の當然でありまして、此關係は東洋文學も西洋文學も同じことです。私は今更らながら花鳥風月の
道理ある成句に感服してをります。勿論、花の美しいことばかりが文學に這入つて來るわけではあり

ませぬ、美しくないから這入つて來る花もありまするし、葉も這入れば實も這入る、枝も這入れば全體の形態も這入る、其外に植物が四圍の境隅との關係からも、或はフォークロアの方面から、宗教的儀式やら、迷信やら、傳說やら、民間の醫藥やら、小供の遊戲やら、食料品やら、種々の關係から文學と植物との關係が成立してくるのでありますが、文學に使用さるゝ植物の部分では、花が主要の對象になることは爭はれないやうに思ふ。是等は無論學者の攻明を要することです。

文學と植物との關係が主要なるものであることを知つた上は、何人が此關係の研究をなすも宜しいけれども、其人は必ず文學のこゝろもち卽ち詩的感情を呑み込める人、理解し得る人、同感し得る人でなければならぬといふことだけは注意しておきたい。さうでないと何故に此植物が撰擇されるのに彼植物が放棄されるかの理由も、何故に此植物は本來の生態性質を離れて斯の如く修正され變化し來つたかの理由も、何故に顯微鏡下の精妙なる植物組織や潛水器邊の美麗なる海藻類が——或る特殊なる塲合を除いては——記述されないかの理由も全く會得しかねるだらうと思ひます。現に私は科學者の口より此等の非難を受けて、唖然として答ふるところを知らずといふべき憂き目に遇はされたことが幾度もあるからであります。

文學と植物との關係を根本から研究しようと思ふ程の學者的態度でなくとも、一般文學家が文學的植物の植物をより多く知り、一般植物家が文學的植物の文學をより多く知りたいといふ傾向の起れるのは當然の理由があるからです。文學家が植物を知らぬために受けたる弊は新詩の起らぬ以前の和歌界に最も著しく現はれてをりまして、植物と其植物に伴ふこゝろもちの間に一定の制約が儼として存在するかの樣に心得て居つたらしく、更らに清新の趣きが現はれなかつた。ゲーテと公孫樹との關係などゝ夢想も出來なかつたらうと思ひます。新詩が起りました後も、未だ西洋傳來のこゝろもちと西洋傳來の植物との關係以外に脫却し得ざる文學者が多いのは、要するに植物の本體を知らぬからのことであつて、紙から紙に傳へて、心から物に傳へる方法が具らぬからであらうと思ひます。尤も審美學の一端をも心得へてをる上は、盡く上述の如く斷論し得られない理由も知つてをりまするが、弊害のあるところも亦理解し得られます。時勢の進歩と共に詩的感情のシェードが變化して來まするのに、之を寄托すべき適當の自然物が見當らない苦痛は如何程でありましようか、察するに餘りありで、一般文學家が文學的植物をより多く知りたくなる傾向は素より自然の要求であります。

ソロモンの榮華の極の時だに其裝野の百合の一に及ばざりきの句に逢ひ、玆に言う百合は今いふ百合でないといふことが明らめられて、單に智識慾の滿足を得たるだけで落付ける植物家があるなら、眞に科學の糠に眼眩みて、智識のあなたにある感情の水平線を望み得られない科學界の通弊を代表した人、人間本來の性質を病的に矯めて、智識塊といふ畸形兒にならんと心掛ける人であつて、斯は望んで得られない理由あるのみならず、大科學家の傳記を讀みても寧ろ氣死すべきことであらうと思ひ

ます。一般植物家が文學的植物の文學をより多く知りたいといふ傾向の起れるのは、人間の本性に基くので、素より自然の要求であります。

文學に生命を寄託してをりまするに、或は無形に出で、人生の荒浪にたゞよひ、自然の温懐に眠るうちに、彼處での愛と此處での花とは、恰かも乙女の簪や紅さし指のリングのやうに、捨てがたき想ひの增すは管に私のみではなからうと信じます。文學と植物との關係に就いての所感を一寸申上げました。

（三十八、一）

罌子粟麗春花に關する東西詩觀の比較

罌子粟 Papaver somniferum と麗春花 Papaver Rhoeas とを併稱して其東西の詩觀を比較する者があると聞かれましたならば、細毛の有無に數年を費やして論難駁撃に從事せられたり新種の發見に夥多の腦味噌を絞り出して冥想し沈思せらるゝ科學家は、必ず眼を圓くして其粗笨なる研究の對象に愕然たらるゝであらうと考へます。しかし文學の立脚地から言へば其これあるは毫も怪しむに足らぬことでありまして、一度び詩情の方で繋ぎ合せてある上は、事物の方に如何程の種類若しくは變化がありましても、これを一組の對象として研究することが出來るのであります。夫れ故に或る種類の詩情で繋ぎ合せた事物は、有象と無象とより成立することもありまするし、有象中の植物と天文とより成立することもありまするし、植物中の此科と彼科とより成立することもありますから、文學的研究の從來の態度から言へば少しも不思議はありませぬが、しかし私は研究の徑路を反對にして事物の方より出達しようと思ひますが故に、或る種類の詩情で繋ぎ合せた事物の範圍内に於ては、可及的に自然學者の研究に依憑して、出來る丈の狹小な分類にして見ようと心がけて居るのです。夫れ故にこそ植物學中で罌粟科まで漕ぎつけることが出來たのです。總じて詩觀の研究というやうな時には、顯微鏡を捨てゝ、取あへず小供の肉眼普通の人の肉眼になつて貰らはなければなりませぬ。

西洋の詩觀を調べまするうちの一つの根本潮流たるべき聖書に就いて先づ觀察を試みて見ましよう。和譯聖書を執つて讀みまするに、罌粟の文字が出て居るところは以塞亞書二十八章の二十五節―二十七節であります。「もし地の面をたひらかにせばいかで罌粟をまき馬芹の種子をおろし小麥をうねにうゑ大麥をさだめたる處にうゑ粗麥を畔にうゑざらんや斯のごときはかれの神これに智慧をあたへて教へたまへるなりけし（連枷にてうたず馬芹はそのうへに車輪をきしらせず罌粟をうつには杖をもちゐ馬芹をうつには棒をもちふ。」然るに英譯聖書には fitches としてあります、fitches は大巢菜 Vicia angustifalia で荳科の植物で、決して罌粟と譯すべきものではありませぬ。全體和譯聖書の粉本たる英譯聖書には、大巢菜の文字の出て居るところは上記の以塞亞書の外にも一ヶ所ありますが、和譯聖書は別の譯語を遣つてをります、以西結書四章九節に「汝小麥大麥豆扁豆粟および裸麥を取て之を一箇

の器にいれ汝が横はる日の數にしたがひてこれを食せよ卽ち三百九十日の間これを食ふべし」としてあります。和譯聖書が斯のごとく一方に罌粟と譯し他方に裸麥と譯したる英譯聖書の大巢葉といふ文字は、和譯聖書の訂正を承認すべき何等かの學者的研究でもありてかと思つて聖書字典を涉獵してみると、英譯の大巢葉は原語のヘブル語に照らし合せて見れば、以西結書の方は「すぺるた麥」らしく、以塞亞書の方は、「むぎなでしこ」らしいと云ふことになつて居ます。偖斯くの如く和譯聖書が偶々罌粟と譯したところは其實間違つて居たとすれば、次に起る問題は、或は和譯聖書の見落した罌粟の文字が英譯聖書にはあるまいかといふことであります。是れを調査して見ると英譯聖書に罌粟といふ文字は一ヶ所もない。然るに一方植物の方面より調査すると、パレスチナの植物として、阿片の原料であるところの罌子粟も赤き花の麗春花もあるから、次に起る問題は原語の罌粟にあたるところを英語で誤譯してをるところはあるまいかといふことになります。

申命記二十九章十八節に「なんぢらの中に葶藶または茵蔯を生ずる根あるべからず」とある葶藶（にがせり）の英語は gall とあり、何西亞書十章四節に「かれらは虚（むな）しき言をいだし僞の誓をなして約を立つ審判は畑の畝にもえいづる茵蔯のごとし」とある茵蔯（いんちん）の英語は hemlock としてあります。偖英語で gall としてあるところは聖書の處々に見えますが、苦きものゝ總名になつて居るので、約百記十六章十三節及二十章十四節二十五節は「膽汁」の意味であるが、其他のところでは何か毒のある苦き植物を指してをるらしいといふ說です。hemlock の文字も聖書の處々に見てをります。聖書字典に依つてみると、ヘブルの原語は共に rosh であつて或る學者は是れが罌子粟であらうと推測して居ます。今日何れと決定するは困難の問題に相違ありませぬが、若し罌子粟說をして成立たしむるならば、上述の文句の外に哀歌三章十九節の「膽汁」と耶利米亞記八章十四節九章十五節の「毒なる水」とて罌子粟の浸つた水の用うべからざることを示すところと亞麼士書六章十二節の「毒」と哀歌三章五節の「艱難」とに着目しておかなければなりませぬ。

說いて玆に至れば、私は、聖書より後日の詩觀を誘致すべき方面に於きまして三段の注意すべきことがあらうと思ひます。第一、聖書中には通常の讀者の眼に觸れるべき罌子粟の文字あらざること。第二、聖書中には學者の研究を俟つて後始めて罌子粟ではあるまいかと疑ひを挾まれる文字のあること。第三、其說を承認すれば主として罌子粟の有毒といふ性質に着目してあること。以上のことを先づ記憶しておいていたゞきたい。

次に重要なるギリシア思潮に一瞥を與へて見ましよう。敎授ヒーアがスウィスの埋沒植物を調査して有史以前の庭園――庭園と云ふても無論今日の所謂庭園ではなく、穴居の傍らの一小地を劃して日常有要の果穀菜蔬を培養しただけに止まりますが、なほ其うちに罌子粟の數へられて居るのを見ては、何等かの特質を認めたればこそ斯く久しき以前から既に人間と離るゝ事の出來ない關係を生じて居た

のだと推測し得られましようし、また野中に咲いて居るのを見ても尋常一樣の無名の草花と同視されなかつたと想像し得られましよう。今日ペルシアやドイツの或る地方で此種子を食物菓子に撒きかけ又は蜂蜜に混じて食几に上す習慣は餘程古くからのことらしいと學者は說を立てゝ居ます。種子は無害らしいが白色の液より作る例の亞片は御承知の通りのものでありまして、小アジア地方は極上品を出します。亞片は有毒のもので、人間の頭腦を犯して睡眠に陷らしめ、心持をよからしむる力あることは開闢以來知了されて居りますからして、宗教上アルコール使用を禁じられて居るトルコ人が Mash 神行と銘打つたる亞片菓子に耽つたり、韃靼勞働者が驚くべき速度で長旅行をやる時にまた此ものを使用したりする理由を解釋されますが、ギリシアの神話に關係を持たせて見ることが文學上面白くあります。穀物の女神セレースが娘プロサーピンなるもの地獄の神プルートーに誘拐された時、母親の慟哭一方ならずで、田畝を荒蕪に歸せしめた程も久しく諸處に流寓して其愛娘を尋ね探し廻つたのであつたが、此間の苦痛を忘れんが爲めに方法として、則ち精神上の鎭痛劑として所謂「甘き眠り」を得んがために罌子粟の種子を食ふたということになつて居ます。恐らく種子でなくして亞片の方であつたのでしよう。人或はギリシアのは麗春花の方で罌子粟の方ではないと言はるゝかも知れぬ。成程ギリシア語の ithoia の意義を說明する方法として、一は殼が「柘榴」に肖て居るからだと云ふ「柘榴」說と、一は花の果敢なき最後を遂ぐるからだと云ふ「倒死」說と、も一つは花瓣を押し漬すと赤い液汁が出るからだと云ふ「流出」說とがあるからして、此第三說を成立たしめた上にギリシア文學に現はれた る詩句の赤き花を偲ばしむるものとを連合して麗春花とするのは當然の理由である。併しながら一方、に於てはアテネの西北にあたる古代アチカの一都市エリュース近くに博士クラークが發掘したるセレース女神の像の斷片を調査したる成績を見ると、此像の頭を飾る罌粟の殼は麗春花の長形でなくして罌子粟の圓形であるということ事實を奈何。それで詩句の方をも無視しないやうにすれば、罌子粟と麗春花とを併立せしむる方が宜い樣に思ふ。尤も科學の研究は是等に關して尙ほ多く語るところあるでしようが、文學上は更らに一步を進める必要がない。單に赤白二種の花をつくる罌粟というものがあるということ丈で宜い。罌子粟麗春花を混同して、寧ろ同一視して、此液汁が眠らせる力を有し、此花瓣が脫く、此花色が或は赤く或は白いということ丈で詩觀上毫も妨得を受けない。それ故私も兩者の區別をする必要のない場合若しくは區別し得ざる場合は單に罌粟とのみ稱することにします。

ギリシア神話のうちに、ヴィーナス女神のおもひ者たるアドーニスという美男が獵を嗜める爲めに奇禍に罹つて、野猪の突き殺すところとなれるとき、其赤き血流れて所謂「アドーニス花」を生じたと謂れて居るが、ギリシアの詩人ビオンの詩句に依憑すれば此花は薔薇であるし、ローマのプリニーに從へばアネモネであるし、其他の人々には麗春花となつてをる。全體ヴィーナス女神から愛される程のアドーニスという美男の流したる血のことであれば餘程貴とく著しいものであつて、水色の紅味がゝつ

た河が所謂「アドーニス河」と謂れた位であるから、若しアドーニスの流血が麗春花を生じたとすれば麗春花其ものは西洋の詩觀上餘程貴重な地位を占有することゝなるばかりでなく、東洋の支那に於ての麗春花に關する詩觀と一種の交渉が成立する、加之近世神話の道の爲めに流した血にも關係が付て來る。しかし是れは自己の詩觀的要求を基礎としての議論であるから後段に於て比較評論を述ふる時に讓つて、玆には單に上述の事實だけを記しておくことにします。

戀の辻うらに使用せらるゝ植物は處に依つて色々差違がありますが、罌粟は既にギリシアの詩人シーオクリタスの文句に出てをります。其英譯の文句は斯うです。

"By a prophetic poppy-leaf I found
Your changed affection, for it gave no sound
Though in my hand struck hollow as it lay,
But quickly witherd, like your love, away."

斯の如くギリシア思潮の方には主として眠らせる力、戀の辻うら、及び赤き血の色を認めておきたい。それから其雨の爲めに俯して首を垂れた態度のホーマーの左の句も覺えておく必要がある。

"As brilliant poppies, overcharged with rain,
Recline their heads, and droop above the plain,
So sinks the youth."

しかし野の花若しくは庭の花となつて他の花々と等しく記載されることは、別に罌子粟麗春花の特性を發揮するわけでないから、改めて玆に言ふ迄もないかと思はれます。猶ほ希はホーマーのイリアド八章三百六行羅はヴァーヂルのヂョーヂクス（ドライデン譯にて）四章百九十六行を參照せられたい。

偖、近世詩觀の源泉になる主な潮流を渉獵した結果に依つて見ると、聖書の方からは一も養はれるところがないと言つて宜しい。すなはち阿片中毒の昏睡させる性質を表示したと思惟される聖書中の言辭は學者的研究を俟ちてのみ僅かに朧氣に推測されるのであるから、一般詩觀に何等の關係がないと言つて差支ない。しからながらギリシャ●ローマの方には同一の性質が明らかに且つ著しく表示してあるのみならず、戀の辻占や赤き血色にまでも言ひ及ぼしてあるゆゑに、近世の詩人にして苟くも古典を讀み又聞くことがある以上は、詩人が直接に罌子粟麗春花に對しての閲歷より構成する詩情と共に、間接の閲歷として既に以前に罌子粟麗春花を圍繞する是等の詩情に聯想を及ぼさゞるを得なくなる筈であります。

近世詩人の作物を一々調査して罌子粟麗春花に關する詩觀の統計を取ることは、斯の方面の專門家となつて多大の歳月を犧牲に供しなければならぬのみならず、同時に私の目的でもありませぬから、私は極めて著しく目立つ根本觀念——寧ろ最大の特性となつて發露して居る詩情の範圍を記載するにとゞめ、擧ぐる詩人も亦アト、ランドムになつて來ます。それで、ギリシャ●ローマの古典に精通して、しかもイーヅンの樂園を描きたるミルトンは此植物を如何に處置して居るだらうかといふ好奇心が先づ

人の念頭に上るだらうと思ひますが、「失樂園」其ものゝうちに二回樂園が描かれて名指されたる植物若干あるにもかゝはらず第四章二百三十七行——二百六十八行にも第九章四百二十四行——四百四十三行にも罌子粟麗春花の名は見えませぬ。しかるに「コーマス」六百七十二行——六百七十七行には次の様な文句があります。

"And first, behold this cordial julep here,
That flames and dances in the crystal bounds,
With spirits of balm and fragrant syrups mix'd;—
Not that Nepenthes, which the wife of thou
In Egypt gave to Jove-born Helena,
Is of such power to stir up joy as this."

茲に謂ふ Nepenthes はギリシャ語に遡つて見ると「悲哀を去る」の意であつてホーマーのオヂッセー（ラング譯四章二百十九行——二百三十行）に「レナが酒に混じて飲んだ何物とも判然せぬ一種の藥になつて居るのであるが、ミルトンは茲に之を阿片の這入てゐるものに用ゐてをります。偖阿片の身體に及ぼす害はアルコールの害よりも悲慘であるが、之を用ゐると始めは恍として夢みるが如くに快よく、且つ肉感的快藥を生ずるが故に、ミルトンが「コーマス」には記載したけれども、吾人々類の始祖たるアダムとイーヴの徜徉する樂園に此有毒液を分泌する植物——たとへ艶にして美なる花を咲くとはいへ——を數へなかつた素志は充分に了解されると思ひます。

シェークスピアは「オセロ」三幕目第三場にイアゴーをしてオセロに次の文句を言はせてをります。

"Not poppy, nor mandragora,
Nor all the drowsy syrups of the world,
Shall ever medicine thee to that sweet sleep
Which thou owedst yesterday."

これも罌子粟の阿片の有毒に着目して居るからの句です。同じ意味はスペンサーの「フェアリー、クイーン」三編七章五十二節三行の文句 "dead-sleeping poppy" にもあります。それからドレートンの「ニムフィヂア」には所謂 "deadly sleeping" を生ずる花のうちに數へてあります。

トムソンが「カッスル、オヴ、インドレンス」中には矢張睡眠と關係させてをります。

"Was nought around but images of rest:
Sleep-soothing groves, and quiet lawns between;
And flowery beds that slumberous influence kest
From poppies breathed; and beds of pleasant green,
Where never yet was creeping creature seen.
Meantime unnumber'd glittering streamlets play'd
And purled every where their waters sheen;
That, as they bicker'd through the sunny glade,
Though restless still themselves, a lulling murmur made."

レー、ハントは花の歌のうちで罌子粟に次の文句を親ら物語らせて居ます。

"We are slumberous Poppies,

Lords of Lethe downs,
Some awake, and some asleep,
Sleeping in our crowns.
What perchance our dreams may know,
Let our serious beauty show."

いづれも皆同意義でありまして、其他ウヰリアム、ブラウンが "Sleep-bringing poppy" といふのでも、ストッダードが "The sleepy poppy" といふのでも、盡く同意義でありますから、私は煩はしい此方面の引用を玆に止めて、最後に散文ではありますが阿片の毒の如何程恐ろしいものかを示したる例のデ、クィンシーが阿片喫用者の慚悔より一節を抜いて締めくゝりを致します。

"I could not without effort constrain myself to the task of either recalling or constructing into a regular narrative, a whole burthen of horrors which lie upon my brain."

戀の辻占に就いてはドライデンが其反響を與へて居ます。左に之を錄します。しかし先きにも言ふたやうに戀の辻占に使用する植物は種々ありますから、麗春花の特性を發揮するわけでなく唯だ其方面にも聯想がつけられるといふに過ぎないのです。

"Seeking my success in love to know,
I tread the infallible, prophetic way
A poppy-leaf upon my hand to lay."

けれども麗春花其ものは後景になつて仕舞つて辻占に他の植物が使用せらるゝ場合に、主人公の性や

年などの關係如何に依つては、彼此の色の配合は無論のこと、麗春花を圍繞するあらゆる詩情が活動して非常に面白い美觀を生ずるやうに思はれて、一個の審美問題として分解する必要があらうかと考へられます。其一例は「ファウスト」の花園に於けるマーガレットの所です。序だから一言申添へておきます。

"And that scarlet poppies around like a bower,
The maiden found her mystic flower.
'Now, gentle flower, I pray thee tell
If my love loves, and loves me well;
So may the fall of the morning dew
Keep the sun from fading thy tender blue;
Now I remember the leaves for my lot—
He loves me not—he loves me—he loves me not—
He loves me! Yes, the last leaf—yes!
I'll pluck thee not for that last sweet guess;
He loves me!' 'Yes,' a dear voice sighed;
And her lover stands by Margaret's side."

血の色との聯想は、先きに道の爲めに流した血一般の象徴となつてをるやうに言ひましたが、これは一部の意見を表したのであつて、主としては近世神話に於て麗春花が St. Margaret of Antioch に捧げてある。其理由は此人が十字架にて流したる怪龍の血の色であるからです。

"Poppies a sanguine mantle spread
For the blood of the dragon St. Margaret shed."

何しろ赤きは血色に相違はないが、其血を流すもの〻種類に依つて麗春花なる植物の形體との配合上、詩觀として非常に面白くないのもあるし、または左程面白くないのもある。猶ほ後に言ひましやう。

罌粟の花は洵に果敢ないから何人もバーンスの「タモシャンター」の五節を回想せずには居られなからう。歡樂の夢忽ち消えて跡なきこころ幾度び讀んでも厭き足らない。尤も學者に依つては玆の罌粟は罌子粟では無論なく、また麗春花でもなく、罌粟屬のうちの忽然として花となり忽然として散つて仕舞ふ彼の黄色の罌粟なる Meconopsis cambrica であると謂ひますが、私は本文に別に明記してないから麗春花であつても罌子粟であつてもよくあるまいかと思ふ。果敢ないのは何れも同樣であるからヘシファイする必要がないではあるまいか。兎も角日本的に面白いから左に引用しましよう。

"But pleasures are like poppies spread,
Pleasures You seize the flower, its bloom is shed!
Or like the snow-fall in the river,
A moment white—then melts for ever;
Or like the borealis race,
That flit ere you can point their place:
Or like the rainbow's lovely form
Evanishing amid the storm."

ベン、ヂョンソンの魔女の歌の中に魔術に用ゐる材料として數へてある植物に罌粟もあるが、此方は明瞭に horned poppy と記載してあるから、私の本論に入れる必要はない。さすれば先づ大抵豫定のことだけ略述したかたちになります。これから東洋の方に向ひますから、西詩に於ては罌粟といふと多數は阿片を聯想したるギリシャ神話が最も目立つこと、別言すれば罌粟が有毒といふ性質に於て主として代表されて居る傾向のあることを覺えておいて頂きたい。尤も詩觀のことでありますから、使用せらるゝ範圍に一定の制限は急にはつけかねまするし、從つて阿片以外でも使用せられることは既に大略申述べた通りであります。

小野蘭山の重訂本草綱目啓蒙卷之十九罌子粟の條下七枚裏より八枚裏にかけて次の樣な文句がある

「……葉ハ薊ニ似テ刺ナク白色ヲ帶四月莖高サ三四尺葉互生ス……花色一ナラズ……千葉ナル者ハ開テ二三日落ズ外ノ四瓣ハ大ニシテ內ニ小ナル瓣數多シ色亦一ナラズ甚美ナルコト牡丹ノ如シ故ニ賽牡丹錦被花ノ名アリ……一種ヒナゲシアリ一名ビジンサウ苗葉共小サクシテ白毛アリ……色ニ數品アリテ美シコレヲ麗春花ト云時珍ノ說ニ麗春花ヲ千葉ノ罌粟トスルハ非ナリ一名御仙圖書滿園春花疏蝴蝶滿園春汝南圃史虞美人同上娛美人草丹鉛錄百般嬌秘傳花鏡舞草名物……法言……」。それから岩崎常正の本草圖譜卷之四十二麗春花の條下十五枚表に「これ汝南圃史の虞美人草也」とあつて同時に舞草や百般嬌や蝴蝶滿園春やなどの別名が載せてある。してみると支那の書籍を繙くにあたつては時珍の說に用心しながら主として罌子粟と麗春花即ち虞美人を調べることになります。

植物名實圖考羣芳卷之二十六罌子粟の條下二十九枚裏「罌子粟舊不著所出州土今處處有之人家園庭多

蒔以爲飾花有紅白二種徴腥氣其實作瓶子似觚筒頭中有米極細……」同じく三十枚表「按罌粟花唐以前不著錄開寶本草收入米穀下品宋時尚罌粟湯但穀粟功用僅止濇斂爲洩痢之藥明時一粒金丹多服爲害近來阿芙蓉流毒天下與斷腸草無異然其罪不在花也列之羣芳」に依つて時處の關係が略ぼ推測されます。則ち唐時代より此花の明らかになりたること、種子を用ゐたるも津液の阿片毒を流したのは夫れより後日にありしこと、花は愛翫せられたること等であります。王世懋の花疏に「芍藥之後罌粟花最繁華」とありますから芍藥に次いで咲くところの華やかなものとしたと見えますが、本草綱目に就いて李時珍の所說を讀みますると「其實狀如罌子其米如粟乃象乎穀而可以供御故有諸名」とか「……中有白米極細可糝粥和飯食即水研濾漿同綠豆粉作腐食尤佳亦可取油其穀入藥甚多而本草不載之知古人不用之也」とかありますから、古人は兎も角、唐宋以來此花の種子が主として注目されて居るらしく、詩觀に其實證を示してをります。例せば宋の蘇轍が種藥苗詩の第七句以下に於いて斯う言つて居ります。

　畦夫告予、罌粟可儲、罌小如罌、粟細如粟、與麥皆種、與稌皆熟、苗堪春菜、實比秋穀。

謝薀の二首、甲は轉結二句乙は起承二句に其趣きが明瞭だと思ひます。

　鉛膏細細點花梢、道是春深雪未消、一斛千囊蒼玉粟、東風吹作米長腰。

　茶粒齊圓割罌子、作湯和蜜味尤宜、中年强飯却丹石、安用咄嗟成淳糜。

楊萬里の結句亦同一の意味です。

　鳥語蜂喧蝶亦忙、爭傳天詔々花王、東君羽衞無供給、探借春風十日糧。

明の吳幼培が花の艷麗を歌つて居るはよいが結末に於いて種子に說き及ぼして居るは流石に爭はれないと云ふ感じがします。

　庭院深沈白晝長、階前仙卉旺羣芳、含烟帶雨呈嬌態、傳粉凝脂呈艷妝、
　種自中秋須隔歲、開於初夏伴傾陽、更誇結子纍纍碩、何必汙邪滿稻粱。

開鷹齋筆談に「萬朶爛然亦足奪目」と言ひながらなは「罌粟花之無香韻也」と喝破するところ、花經が七品三命の地位を與へてをるのに照應して詩觀上罌子粟の價値が明瞭になつて來ます。然るに罌子粟よりも一層小さく一層しほらしい姿の麗春花に移りまするとと、種子といふ感じが消失して其花色花瓣花梗の美觀を優視するやうになつて來ます。王象晉が羣芳譜に「艷麗可愛故曰麗春又曰賽牡丹又曰錦被花……姿狀葱秀色澤鮮明頗堪娛目草花中妙品也」と嘆稱して居るところは詩中に現はれて唐の杜甫には左の句があります。

　百草競春華、麗春應最勝。

宋の徐致中は所謂賽牡丹の姿態を叙して居ります。

　並肩罌粟多含態、具體牡丹惟欠香

しかしながら麗春花が舞草と稱せられ更らに進みて虞美人草と賛せられて、高濂の草花譜には「瓣常

飛舞儼如蝶翅扇動亦草花中之妙品也」といはれ、殷成式の酉陽雜俎には「人或近之歌及抵掌謳曲必動葉如舞也」といはれ、益州草木記には「人或近之即向人而俯如爲虞美人曲則此草相應而舞」といはれ、花鏡には「姿態葱秀因風飛舞儼如蝶翅扇動亦花中妙品」といはれ、詩觀上凄艶双びなき歴史的人物の虞姫と結びつきて其流せる碧血、其舞ふ長袖を聯想するに至つては眞に詩觀の絶唱と稱せざるを得なくなります。花として斯の如き寵幸を專らにするものは蓋し類少いでしよう。宋の姜夔は石と化せずして草となれる理由を述べてをります。

夜闌浩歌起、玉帳生悲風、江東可千里、棄妾逢蒿中、
化石那解語、作草猶可舞、陌上望騅來、翻然不相顧。

蕭海藻は袖を翻して王に向はんと言ふてをります。

魯公死後一抔荒、誰與竿頭薦一觴、妾願得生墳土上、日翻舞袖向君王。

易幼學は宿醉未だ醒めざるを譏つたのでしよう。

覇業將衰漢業興、佳人玉帳醉難醒、可憐血染原頭草、直至如今舞不停。

僧北磵の詩に至つては前のより着想が餘程面白くなります。虞々より恨難掩までは虞姫の想ひと麗春の姿と相結び合つて三唱の値があります。

君恩似海海不深、妾意如鐵利斷金、舍生取義我所欲、忍死織室羞同心、
春姿忽作秋蓮萎、一寸剛明曾不死、明年原上野花繁、一枝自托華風起、
裊々娉々不成艶、態度淺深生色染、向人欲訴却無言、寂寥千年恨難掩、
芳郊遊女宛轉歌、停車拍手看婆娑。

しかし曾子宣夫人魏氏の作は恐らく虞美人草を最も佳く歌つた一つでしよう。芳心寂寞寄寒枝、舊曲聞來似斂眉、哀怨徘徊愁不語、恰如初聽楚歌時、は洵に佳句だと思ひます。少し長いが卷軸として皆な引用しましよう。

鴻門玉斗紛如雪、十萬降兵夜流血、咸陽宮殿三月紅、覇業已隨烟燼滅、
剛强必死仁義王、陰陵失道非天亡、英雄本學萬人敵、何用屑々悲紅粧、
三軍敗盡旌旗倒、玉帳佳人座中老、香魂夜逐劍光飛、清血化爲原上草、
芳心寂寞寄寒枝、舊曲聞來似斂眉、哀怨徘徊愁不語、恰如初聽楚歌時、
滔々逝水流今古、楚漢興亡兩丘土、當年遺事總成空、慷慨尊前爲誰舞。

明の孫齊之も亦同樣の怨みを述べてをります。

楚宮花態至今存、傾國傾城總莫論、夜帳一歌身易殞、春風千載恨難呑、
胭脂臉上啼痕在、粉黛光中血淚新、誰道漢宮花似錦、也隨荒草任黃昏。

偖斯く述べて見まするど、支那に於ての罌子粟麗春花に關する詩觀を西詩に比較すれば第一、死を導

くものと聯想せられたる阿片の代りに生を補ふものと聯想せられたる種子の現はれたること。第二、神話上の男子が流したる血の色を聯想せしむる代りに歴史上の女子が流したる血の色を聯想せしむること。第三、幸あれかしと祈る戀の行末を占ふ代りに果敢かりしと語る戀の過去を偲しむること。なほ是等のことに關しては後段に於いて多少の管見を陳述して見たいと思ひます。

植物學者の研究を聽いて見たら充分明瞭にならうと思はるゝが、多少の古書を渉獵した結果で推測して見ると、罌子粟麗春花が他國傳來のものらしいことは支那も日本も共に然りと云ふを憚らない。全體、我國の和歌界に於いて罌子粟麗春花に關して歌ふたものが殆んど絶無であるといふ事實は、私の和歌界の爲めに悲しむところでありまして、同時に本論の爲めに聊か物足りない感じがするのであります。尤も古い物語類のもの假令ば源氏なんどに「けしやき」とか「けしやきのか」とか出て居るのは降魔の護摩を修するに罌子粟を焼くからいふ言葉なので、遙かに西洋の妖魔が嫌る藥の材料にホーンド、ポピーを用ゐることに聯想の及ばないでもないが、和歌に數々歌はれない限りは獨立して詩觀を構成したとは認められないのみならず、物語類の其前後の文意から案じても特別に罌粟に對して動く情感があるやうには解せられない。從つて眼を轉じて文學界の他方面を視なければならなくなります。俳句に於いては和歌にないものを數多歌ふてをりますが、罌子粟麗春花も矢張り其撰に漏れないのみならず、却つて重要視せらるゝ傾向のあるは、詩材の豐富といふ點に於いて俳句の貢献したるところの夥だしきに敬服せざるを得ない。普通吾れ〳〵の眼につく俳句を讀み去り讀み來つて考へて見ると、例の如く傳說類の衣服を脫ぎ棄てゝ直ちに其物自身の特性を發揮して居るうちに、最も花瓣の散つて坊主になり易きところに注目して居るらしく、蝶夢、大江丸、成美、越人、其角、來山、虎文、一茶、闌更、舍羅、泰溪、龍川、保吉、鬼秀、雪雄、蒼虬なんどを次に擧げて見ます。

何ものぞ芥子咲く畑に嘘るは
天津風しばし止めよ芥子の花
永の日や芥子散る程の風もあり
散る時の心やすさよ米嚢の花
芥子畑花散る跡の須彌いくつ
散れば咲咲けばぞ散て忙しい
朝には芥夕には芥子坊主哉
善盡し美を盡しても芥子の花
散にけり芥子のみに吹く風もあるか
押合はぬ先に散りけり芥子の花
色に染む露も一夜やけしの花

薄月の夜を持越せよけしの花
鹿を追ふ聲に芥子散る夕哉
折れば散り折れば散りけり芥子の花
どう切つてどう持て來しぞ芥子の花
道端や一足づゝに芥子の散る

或は散る果敢なさを優視しなければ、花梗花瓣の動き易くして從つて纖弱といふところを優視するやうになつて來るのが蓼太、曉臺、巴水、蒲尺なんどに現はれてをるやうです。

荒海を抱えて芥子の咲にけり
陽炎にゆらるゝ芥子の一重哉
關の戸や突棒刺叉罌粟の花
曰こかす音に動くやけしの花

弱々しい散り易い此可憐の芥子の花の色は孰れを好みしかと尋ねると、血色を聯想させるやうな濃厚のものは俳人の厭ふところと見えまして文句に現はれて居るものは罌子粟の普通色たる白色を用ゐてをるから、文句に現はれないものでも大多數は白色であらうと思はれます。月の配合などには特に此色でなければなりますまい。蒼虬、几董、太祇、丸全、巣兆、蓼太、希言、有篁、青羅、可都里、月花、長齊、阿量、闌更なんどの例は次の如しです。

墨繩の墨が付きけり芥子の花
白罌粟に煤掃く家や加茂の里
白罌粟や片山里の僧の縁の衣
白罌粟や名利の僧の庵を出て雪ほど白し芥子の花
白芥子に續いて脆き月夜哉
白芥子の今年も見ゆる小家哉
白芥子の端に久しき小家哉
白芥子に取餘りたる月夜哉
白芥子にたゞ陽炎の動きかな
白芥子の花のまぼろし散にけり
白芥子のさはらば消ゆる風情也
白芥子に目を澄しけり潮曇
白芥子の花透く朝日夕日哉

曉臺、文常の左の句はどちらも斷つてないが、鷄から荒され散され汚されて仕舞ふには矢張り白の方がうつりがよく、また燃えるにしても始めから赤いよりは始めは白紙のやうなものがパッと眞紅の燄を上げる方がうつりがよくあるやうです。

めら〳〵と火さへば燃えん一重芥子

鷄や花最中の芥子畠

蕾の樣子、蕾の咲き初めなども流石に俳句は觀過して居りませぬ。芙蓉、香貫、草十、士朗の例を次に擧げます。

咲き初むる芥子や鎌音獨鈷首

よしや世は芥子の莟の力み哉

咲かばやと仰向く芥子の蕾哉

白玉か何ぞと芥子の蕾かな

卓袋は苞にまでも及んで居ります。

芥子畑や皮ほろ〳〵と花開く

白の淡きを愛でゝ赤の濃きをうるさいと感じた俳句は麗春花を顧みなかつた。否、顧みたるところがあるにしろ虞姫の愛とか流した血とかいふ濃厚の感ある虞美人草と通稱されたる麗春花を歌ふ時分に、支那の詩想を傳承することなくして、僅かに美人といふ言語を種子に使つた憫れな句が二三あるばかりです。可友、其適、風逸、來遊なんどのがそれです。

蝶々も迷ふ筈なり美人草

裏門に垣間見えけり美人草

情なく蜂にそはれぬ美人草

美人草花は過ぎても唯ならず

五明が「一合の芥子や見渡す花盛」の基礎となるべき種子の細微といふ感、所謂「芥子粒程な」といふことの根源まで溯つて支那からインドへと思つても見ましたが、詩觀の方では著しくなつてをりませぬから、まづは此位にとゞめて東西の詩觀を比較しながら今後の日本文學に於ける罌子粟麗春花の關係を豫想して見たいと思ひます。

世界の文學が相互にアクトしレアクトして己れの特徴を把持すると共に他の特徴に影響されつゝ、詩材及び是れに寄託する詩情の愈々豐富になりゆくことは今後の一般文學に避くべからざる趨勢でありませうから、日本文學も決して淡雅で一切持ちきることが出來すして壯重なるもの濃厚なるものが、浸染して外延內容共に擴張するに相違ありませぬ。衣食住を始め社會一切の現象がさうなつて行きつゝあるではありませぬか。して見ると罌子粟麗春花といふ一詩材と是れに寄託する東西の詩情が俳句

ばかりでなく和歌にも小説にも現はれましようし、繪畫彫刻にも現はれましようし、更らに新たなる詩情も加はりましようし、また更に新たなる文學の形態も始まりましよう。從つて未來を盡く豫測することなどは何人も能はぬところでありますが、過去の甲地にあつて乙地にないものが加はることもあるといふやうな事丈は豫測することが出來ます。罌子粟麗春花に關して既に觀察したところを大に過たずとすれば、一般傾向より概論して見ると西詩は主として內的性質に注目し東詩は主として外的形態に注目してをり、其東洋のうちで支那は主として花瓣の動搖に注目し日本は主として花瓣の脫落に注目してをります。西詩の內的性質の恐ろしい「眠らする力」は外的形態の優しい美しいのと面白く對照して使用するに都合がよいから、今後は文學は無論のこと繪畫彫刻までにも廣く此性質を示す象徴になるだらうと思ひます。支那の動搖は既に從來とても多少注意があつたのですから今後も引續き存在しましようが、牛皮の靴を穿つて海老茶袴を着けて袖なしの衣を纏つて體操の棍棒をも振りかねまじき人の舞ひを形容することだけは出來なくなりませう。アッハ、、、、。赤い長い振袖で、まだ袖止めしないうちが最も良いやうですが、してみると歷史美のうちに葬られる運命でしようか。

西詩と漢詩とは赤色をも等しく注目してをりましたが、日本に於ては主として白色のみを注目してをりました。しかし麗春花の眞紅なところは最も血液の聯想に滴して居るので、遠く之を望んで刻下に起す感情ならば、誰れの血でもよく、あつてまた何の爲めに流した血でもよく、即ち道の爲めでも戀の爲めでも、男の血でも女の血でも可なりですが、近く之を視て其姿が眼に入るか、若しくは遠く望んでも麗春花といふ反省がある場合には、優しい人が優しいことの爲め、即ち美しい乙女が戀の爲めに流した血に見立てるのが最も適してをりましようと思ひます。

要之、罌子粟麗春花でなければ傳へにくき詩情のある限りは此植物の地位は極めて安全なるものと言ふて差支ありますまい。猶は言ひたいこともありますが、餘り長くなりましたから、これ丈にしておきます。

（三十八、二）

旋花と月見草と

私は時候の草花と文學との關係を話さうと思ふ、併し名高き草花につきてはとかく一場の談話では思ふやうに言ひ盡し難いから比較的に名高くない二つの草花について話さうと思ふ、その二は旋花（ひるがほ）と月見草（つきみさう）である。

旋花と云ふ草花は誰れも知り居る如く朝顏風のもので、山の中、川原などに咲いて居るのであるが花は漏斗狀の蕚が五片蕚の形は卵圓披狀で蕚の下に又二ッの小き葉があつて其の蕚を包んで居る。花には大小二つあつて小さき方を旋花と云ひ大きい方を藤長苗と云つて居る。花には少し赤みを帶びたものが多い。晝に眞盛で且暮に萎んでしまうのである。支那では形の方から名づけて鼓子花と云つて

居る。此花が日本の俳句の中では暑い眞晝に咲いて居るから、俳句にあらはれて來る處は皆暖き感を起させ明るい感を起させるようになつて居る。今其の例二三を擧げて見ようならば、

蓼太　旋花や明るう咲て戀知らず
一茶　晝顏やぼつぼと燃ゆる石ころへ
也有　晝顏やどちらの露も間に合はず
几董　晝顏にしばしうつるや牛の蠅
千代　晝顏の面つよさよ晝の鐘
智月　晝顏や雨降り足らぬ花の顏
冶天　晝顏や鮎のいりつく砂の上

旋花の「カラム」と云ふ方の意味を俳句に見立てゝ歌つたものが有名でない二三の人にあるばかりであるが西洋の方では主として「カラム」ところに目をつけて居る。

鷄路　晝顏や立仲んとて友絡み
直房　晝顏や廬火焚く家に取付いて
奇淵　晝顏と思へどものに絶る花

西洋では「カラム」と云ふことを意味して旋花を「バインドウィード」と名けて居る。

嚴格に云へば英國には一種のほかないので、小さな旋花「コンヴアルヴス、アンヴエンシス」が一ツあるだけである。斯は香のよいので名高くなつて居る。その他に人力で養つたのがある。併しながら大きいのも小さいのも文學上にはたゞ「バインドウィード」と云ふ一の名で用ゐられて居る。

西洋ではその白い或は赤みのついた白い花が眞晝間に輝きて咲いて居るところに目をつけぬではなけれど詩の句にはめッたに出で來ぬのである。と云ふ譯は何處の文學でも同じことだが西洋の文學では昔から歷歷のある花で神話に關係があるとか何か又そんなやうな有名の花でないと詩に歌ふのに面白くないと見えて謂はれのない花は出て來やうが少いのである。天雲が日光を遮つてその夕立が晴れて仕まう前に旋花がその美しさを損じないやうにして晴れたのちに又開くところの形容を歌ツてゐる西洋の詩がありますが玆には略して置かうと思ふ。

月見草に就ての詩歌は日本にはあまりないやうであるが、西洋の詩にはなか〳〵多いのである。此花は夏の夕暮に太陽が山のかげに這入つてしまい庭先が薄く暮れゆく時分に薄暗がりの中にアリ〳〵見える黃い花で、それが氣をつけて見る間に音をたてながら開くと云ふ、他の花と一種異つたところがあるので、花としては眞に面白いのである。西洋のほうでは晩方の櫻草と書きます。元來櫻草そのものは西洋文學に最も廣く用ゐらるゝものであるから晩方の櫻草と云ふやうに愛らしく名づけたのであらふと思ふ。

詩人キーツが歌つた歌の意味に、この月見草を見て居ると心がスーと眠るやうになつて、ぼうとして來る處に花がパッと開くので又我に歸ると云ふ意味を歌ふてある。元來キーツと云ふ詩人は花には餘程緣ある人で花をよく見て居る詩人である。

ラングホーンと云ふ詩人の月見草を歌つた意味に、或百性がお前のやうに闇に咲く花は人から顧みられないで氣の毒だ一層晝に咲いたらどうだと嘲けるとフィルメルと云ふ夕方に出る鳥が月見草に加勢をして此の百性に返事をして言ふのには、我々二人(鳥と花)は人に見られない處に暮して居るんでこちらが非常に幸福だ、塵の世の中の汚らはしい奴の眼に觸れることもなく我々の德を傷つける事もなく安全に平和に暮して居るのである、お前のやうな人は世の中でヤイ〳〵と持て囃す花を向へ見に行くがよい、と云ふ意味を歌て居る。此晩方に人の眼に觸れない樣に、おとなしく眞直に咲て居る處が詩に歌ふのに面白いのであるから、此花で「言はぬ戀」の意味を知らせるとになつて居るので、夫を借りて日本でも此頃月見草と題をして不言戀の意の物語を書いたが西洋の意味がだん〳〵はいつて來る前ぶれであらうと思ふ。どうかこの花がも少し盛んに歌俳句に歌はれるやうになつて欲しいと思ふのである。前に述べた樣に見て居る中に咲て行くと言ふ力と、他の花が萎む時に却て開くと云ふ力とをもつて居て、稀な花のやうでありますから、考へ方見方によりてはなかなかに面白く、詩や歌につかひ得る花であらうと思ふ。私は一層此等の花が西洋風に盛んに歌はれんことを希望するのであります。

（三十八、八）

歌材としての薔薇

初め佐々木先生に薔薇と牡丹の比較をすると云ふ御話をして置きましたけれども、段々考へて見ますると、兩方比較することになると餘程問題の範圍と性質が廣く且つ深くなりますから、一席の演說としては却つて如何しいと思ひましてそれを變へて咏歌の材料としての薔薇の御話だけを致さうと思ひます。たしか去年の春であつたと思ひますが、心の花に櫻草の事を話しました時分に、佐々木先生に、表紙の百合が文學上面白いから、之を題に何か書いて見やうと云ふ御約束をしましたやうな覺えがありますので、此度何か話せと言はれましてお斷りする譯にいきませぬから、東西の文學を共通にして重要視さるゝ百合の比較をするよりも寧ろ片々の文學に重要視さるゝ東の牡丹と西の薔薇とを比較する方が多少話し仕能いかと思ひまして此問題を撰みましたが、長くなりさうですから書くことにしまして、咏歌に關係すべき薔薇の一面を此席上で申上げることに致したう御座います。御存知の如く薔薇の和歌は洵に寥々たるものでありました。しかし「坐れば牡丹」の態度を弊履の如くに脫ぎ棄てゝ廂髮の上には必ず薔薇と相場の定まつた時勢の急轉には、文學界亦五十年の後には好事家が歷史美の中より牡丹の和歌を拾ひ出して今日の元祿模樣を見るやうな目付を仕ないとは斷言し得られますまい。果

して然らば薔薇の和歌を作るため將た解する爲め西の如何なる詩想が傳つて日本根本詩想といふ幹に纏はるかを驗べるは決して無用の業ではなからうと考へます。

此頃或雜誌を見ました所が、歐羅巴の方で、花全體の色及び香がどの位の比例になつて居るかと云ふ統計がありました。これを見ると全體で四千百以上の種類がありまして、其中白い色が千百九十四、黃な色が九百五十一、赤いのが八百二十三、青が五百九十四、紫が三百八、その他が二百四十ばかりになつて居ります。さうして香の強いのは其中白に大約五分の一ばかりありまして、黃に七十七、赤に八十四、青に三十一、紫に十三、その他が二十八ばかりになつて居ります。此の比例を取つて見ますると、花全體の中で白い色が全體の四分一ばかりを占めて居り、又香の強いものは白が全體の五分一ばかりになつて居りますから、歐洲の花全體から言ひますと、先づ白い色が最も多くありまして、香の强いのも白いのが一番多くなつて居ります。それで强い香のするものと、香のしないものとを比較しますると、日本或は支那に於て見るより餘程多くなつて居りますから、文學上に現はれて來ましても、色を言ふと共に香を賞美すると云ふ傾向が自ら多くならうと思ひます。此事は注意すべきことであらうと考へます。それで薔薇は其中に白い色を含んで居りますし、香の強いものがありますから、花全體の優秀なる趨勢に隨伴するといふて差支ありますまい。

全體薔薇は世界中にどう云ふ地理上の分布があるかと云ふと、世界至る所として無い所はありますぬ。南半球の方だけに昔は無かつたのですが、これすら今は移植されまして立派なものです。北半球はベンガル灣の邊から、日露戰爭後自分の國の領分になるだらうと思ふて居る東察加半島まで行渡つて居りますし、瑞典諾威から阿弗利加の方まで皆な行渡つて居るのです。尤も一番初めに薔薇の出て來た所は波斯でありまして、波斯が一番薔薇を賞美する、今日に於ても薔薇から造ります香水の原料などは波斯が有名だといふことです。それで最初三つばかりのものが段々擴がつて今日の如く多くなつたのでありますが、今日は佛蘭西だけでも千以上變種があらうと思ひます。和歌の方に於て、薔薇を題として歌を詠じますると、何か以上は唯全體に付ての御話でありますが、和歌の方に於ては居るまいかと云ふ御望みがあらうと思ひますが、それには諸種の傳說などが最も興味あることゝ思ひます。西洋では神話が薔薇はどうして世界に出て來たかと云ふ說明をして居ります。希臘の神話の中で、あすこに美の神樣になつて居るヴィーナスと云ふのがありますが、其のヴィーナスと云ふ女の神樣が海から生れて來られた時分に、希臘の側にローズと云ふ島がありますが、其島に薔薇を降らせながら生れなすつたと云ふ一つの傳說があります。觀音樣が蓮華を降らされる想像を一變して美の神樣が薔薇を降らせながら生れなさるところを想像して見ると實に美くしく文學上に於て薔薇の位地が極めて高いことになつて來ると思はれるのです。それで色の方では、白い薔薇と赤い薔薇との二つが中心になつて居りますが、何故に白いと赤いのとがあるかと云ふことを矢張神話で

說明して居ります。初めは薔薇は白いのばかりであつて、それが後に赤くなつた、といふ風に四つ程
說明がありますが其一つはヴイーナスと云ふ美の女の神樣のおもひものになつて居るアドーニスと云
ふ美しい若い男が殺されるやうになつた時に、ヴイーナスと云ふ神樣がそれを助けやうと思つて、あ
はてゝ薔薇のトゲを踏んでそこから流れた血が白い薔薇にかゝつて赤くなつたと云ふのと、もう一つ
はアドーニスと云ふ美しい男が殺された爲に其血が流れて白い薔薇にかゝつて赤くなつたと云ふの
と、もう一つの說明は、西洋で考へて居ります吾々人間の一番の祖先に當るアダム、イーヴと云ふ御
方がありますが、それがイーヴンの花園に逍遙して居られる時分に、イーヴ、女の方です、即ち吾々
人間の第一の母なる人が、良い香の白い薔薇をば唇にあてゝ香をかいだところがイーヴの唇の紅い色
が移つて、それからして赤い薔薇が出たと云ふて居ります。それからもう一つの說明の仕方は、少し
かけ離けてエフラタの東岸フロリヅス野にて或若い女が罪が無いのを有るやうに世間から見られて、
燒殺される刑罰に處せられやうとした時分に彼の若い女は天に向つて、自己の無罪を訴へ祈り了
つて炎々たる薪の方へと進み寄つたところ、忽然として火の附いて居る方の赤い薪が赤い薔薇になつ
て仕舞ひ、それからまた燃えないで居つた薪は白い薔薇に變化して仕舞つたと云ふことになつて居り
ます。それからもう一つ白薔薇に關する傳說も加へて置きますが、それは前に申しましたアドーニスと
云ふ美しい男が死ぬ時分にヴイーナスと云ふ美の神樣が悲しくて非常に泣いた、其の涙が白い花に變
化したと云ふ事も言つて居ります。どの傳說を考へましても、歌の題としては何れも美しい面白い意
味を傳へることが出來ることゝ思ひます。何故なれば今日此席に集ひましたる吾々は詠歌を生命とし
て美の境に遊んで居るので、其神樣たるヴイーナスの流した血がかゝつて赤い薔薇になり、泣いた涙
が白い薔薇になつたとか、或はまた其のおもひものでありましたる男の血が流れて赤い薔薇になつた
とか、どこから見ても吾々には最も深い關係があらうと思ひます。又イーブの話でもさうです。吾々
人間の一番の祖先である所の二人が天上の樂園、即ちイーヴンの花園に於て、何等の罪もなく、最も
樂しく、最も幸福に暮して居られる時分の唇の色が移つて赤い薔薇になつたと云ふことを考へて見て
も餘程面白く、歌などの意味に這入り得ると自分では考へて居ります。

薔薇と他物との關係ではナイチンゲールと云ふ鳥のことが一番面白くなつて居ります。日本では譯し
て鶯と稱して居りますが鶯ではありませぬ。しかしちよつと日本の梅に鶯の關係の如くに、薔薇とナ
イチンゲールとの間は離すことの出來ない關係になつて居りまして、歌の題として面白く思はれます
のは斯う云ふ話があるのです。ナイチンゲールはよく啼く小鳥でありまして、戀の話にはいつでも出
て來る鳥でありますが、他の物は食はない、薔薇の瓣を食べて命をつないで居る、又他の木には決し
て宿らない、薔薇でなければ此鳥は住まない、それから此鳥はいつも戀の歌を謠つて居る、薔薇の木
の間で絶へず戀の物語を謠つて居りまして、若し薔薇のトゲに胸を刺されて居れば愈よ其歌が奇麗で

面白く開えると云ふ傳說になつて居るのです。自分の胸をトゲに刺されながら謠つて居る聲が戀歌であると云ふ話ですが、大層面白いではありませんか。

薔薇を種子の句のなかで向ふに「薔薇の下に」と云ふ言葉がありますが此の意味は默つて居る、決して他人に漏らさない、コッソリして居ると云ふことになつて居るのです。是れは向ふに歌の題や或は畫題になつてをりますが、ヴイーナスの子キユピドといふ戀の神が「ハルポクラチーズ」と云ふ埃及の沈默の神樣に薔薇を捧げることです、是れはどう云ふ所から來たかと云ふと、ヴイーナスには戀の物語が幾らもありますが、それでキユピドが、私のおツかさんのヴイーナスの話は、どうか他の神樣に打明けて呉れるなと云ふて沈默の神樣に薔薇を捧げたのであります。それで「薔薇の下に」と云ふことは、決して他に話をしてならぬと云ふことになつて居ります。此話の如くに知人が集つて宴會などをする時には天井から薔薇を下げて置いて、此處で話をした事は決して他の人に打明けないから、此内ではどんな世間話をしても宜い、勝手な事をしても宜いと云ふ意味を知らせた時代もあつたのです。

歷史上有名なことが一つ所謂薔薇の亂といふのが英吉利にあります。それは日本の源平の爭ひの如くに、ヨーク家とランカスター家と相爭つて一方は赤い薔薇、一方は白い薔薇の紋所であつて、三十年以上も爭つて居りましたが、此の軍さの一番有名なのは、千四百六十一年三月二十九日にタウントと云ふ村で戰爭をした時で、其時には三萬六千人から人が死にました、さうしてそれを埋めた墓の紀念に植た薔薇の瓣は紅白の斑になつて吹いて居る。兩家の爭の怨みは今もあり〳〵薔薇に現はれて恰も平家蟹の趣きがあります。全體墓ばかりではなく、西洋に於ては薔薇は人間の一生を通じて放すことが出來ない花になつて居りまして、婚禮の時のそも〳〵の白い薔薇や、赤い薔薇の花束や、又死んだ後の臭氣を防ぐ爲の薔薇や、其他色々に使つてをります。詰り薔薇は瓣が褪せても芬香を保つて居ると云ふ關係から、甚だ貴く見做されてくるであります。

それから薔薇は重にどう云ふ意味になつて居るかと云ふと、薔薇と云へばいつでも美しいと云ふ代表に使つて居ります。それで赤ければどうしても戀のまごゝろに聯想がつきまするし、白ければどうしても汚れないで潔白と云ふ聯想が伴つて來ますから、赤薔薇と白薔薇は矢張其こゝろもちを表します。薄い黄な薔薇はどうも面白くありませぬから戀がさめる、衰へるなどの意味になつて來ようと思ひます。それから野に生へる犬薔薇の方になりますと飾りの少い薔薇ですから、極質朴な意味を知らせるやうになります。また蕾は最も興味を持つもので、處女の好箇の代表になります。

時候は丁度春から夏にかけて薔薇を代表に使つて居るやうに思ひます。併し薔薇の咲いて居る間は丁度櫻と同じやうに短いことになつて居りまして、折角美しく咲くけれども忽ち褪せて仕舞つて、殘るのは香ばかりと云ふことに使つて居ります。是れは實際上幾らか間違つて來ようかと思ひますが、詩や歌に現はれて居るのはさう云ふ意味になつて居ります。

苟くも西洋の詩人にして薔薇を歌はぬものは殆んど一人もありませぬ。恰かも櫻を言はぬ歌人なく杜鵑を言はぬ俳人なき有様であります。殊にミルトンの「失樂園」中イーヅン花園のところや、ダンテの「神曲」中天國編の深い意味ある大薔薇のことなどは有名でありますが、是等はヌキにして詠歌に相應に優しい可愛い二三の句を玆に申上げます。スコットの詩中に、

薔薇と云ふものは初めて咲いた時分が一番奇麗だ、人間の希望と云ふものは、初めて怖ろしい恐怖を去つた時分が一番希望がみち〳〵て居る、薔薇は朝の露に濕うて居る時分が一番可愛らしい、愛情は涙を流して居る時が一當可愛らしいものである。

斯う云ふ四つの句があります。それからスペンサーの詩の中に

蕾の美しいのは、蕾と云ふのは丁度初めて現はれた所で、はにかんで、謙讓の徳を示して居るやうに思へる、全體物はよく中まで見えない中が奇麗なものだから、皆な咲かぬ蕾の時が一番美い、併ながら薔薇が咲いて仕舞ふと、何にも隱し立てなく胸を擴げて人に見せると云ふやうになつて居る、最もそんなに奇麗に咲いても間もなく褪せて無くなつて仕舞ふ。

と、奇麗なものが忽ちに褪せると云ふ意味が後の方に悲しげに書いてあります。又ヘリックと云ふ人の詩には、

薔薇の花は咲いては奇麗だが忽ち散つて仕舞ふ、女の方などもお嫁に行く時を間違へないやうに、時を失はないやうにしなければならぬ。

と云ふやうな意味が後に附加へてあります。レー、ハントなる人の、薔薇に物を言はせる詩がありますが、其の意味は、薔薇の其の足元が輕いのに美しい身體を載せて居て——足元の輕いと云ふのは花梗が弱いのを形容したものと見える——、足元が輕いのに美しい身體を載せて、實に嬉しさうに見せて居る、女の人に譬へるに丁度宜いと云ふことになつて居ります。

まことに下らない話でありますが、和歌に聯關させて、何か材料にでもしようと思ふと先づ其位のところで御免を蒙つておきませう。尚ほ心の花に私が書くことが出來ましたならばもう少し纏めて一篇の物にして見たいと思ひますが、薔薇の花といふ左して有名なものでないのでも兩方比較して園藝會雜誌に載せて見ましたところが四十頁ばかりも紙面を割いて頂いて居るやうになるものですから、薔薇とか百合とか云ふ大問題になつて來ますと夫れよりも多數の紙面を割愛して頂かねばなりませぬので、此事が恐縮に堪えぬことであります。今日はこれで御免を願ひます。

（三十八、八）

睡蓮の詩趣

罌子粟麗春花を併稱して前後數回に亘つて東西の詩觀を比較したやうに、蓮睡蓮を併稱して矢張前後數回に亘つて東西の詩觀を比較してみたいと思ひましたところが、夏の卷は肩の凝らない淡白な一回

讀み切り話にしろとの注文、御尤千萬と今更ながら編輯諸君の周到なる注意に感心して、いでさらば歷史の桎梏を掻捉りすてたる我觀小景といふ凄い一幕もの、吾身ながら恐ろしい次第です。

先づ睡蓮といふ發音が至極氣に入りましたね。スキと沈んでレンと輕く浮いた工合、大方識域の彼方では同音共鳴し呼應したる諸觀念が咄嗟の間に聯合して可愛らしい清い澄んだ影でも作るのでしょうか、餘り廣くない清水の堀のやうなところを白鳥が徐かに漣漪さへたてないで、スーと行つて、停まつて、四邊を一寸と見廻したやうな姿が映ります。全體が清音であつて、キで一旦窄んで、そしてンで撥ねて結ばる妙味、得も言はれずと拗りたくなります。それから睡蓮の文字が嬉れしくつて堪らない。尤も此文字に關しては先達或新聞が水蓮と書いたので、非常に剛笑されたのがありましたが、可愛相に支那の本場で既に稽古の南方草木狀に「花之美者有水蓮如蓮而莖紫柔而無刺」なんどゝあるのですから酷く叱ることもないでしょう、しかし無論睡蓮と書くのが正當なので、睡る性質があるやうに見えればこそエジプト、アラビア、ペルシア邊に幅を利して居るのです。元來私には睡といふ現象が勿體ない程貴いので、醫學では物質的に、心理學では精神的に、各適當な說明はしてくれても、美學詩學では未來永遠神祕的に金箔つきで通るから、之を笠に着た花が貴くなくつてどうしましよう。未の刻に萎むからひつじ草といふ日本の名稱は、太陽曆の今日此頃の人々には通じないから、西の海へさらりと棄てゝしまうがよい。それから睡蓮の姿態が素敵に佳いね。妾は水に生れた者だから水は妾の故郷ですといふやうな趣きを見せて、葉は水面に浮び、花は顏ばかりを水上に出して、極めて面映げだ。これに較べて考へると、河骨は角力取が袴羽織で坐つて居るやうに强いばかりで美しい優しい點が始めからないし、蓮はまた泥池を拔け出て潔白になろう〳〵と鶴首して待ち焦るゝやうで、美しい優しいを通過ぎて寧ろ清い凄いといふ感じが現はれて來る。睡蓮がなければ、夏、水邊に立ちて當世風の詩情を寄せるものがなからうと思ふ。況してゆかりの色の紫が少くないといふことはお誂へ向きと評さなければならない。それから目今日本に渡來する外國產だけで言ふと、睡蓮の大きさが恰度傍らに立つ日本人の大きさと適當な釣合がとれて、人ならば所謂高からず低からず中肉中背といふところが難有いね。日本固有の未草では小さすぎて龍蝨や水鉋の伴侶にはよからうが人には向かない、不忍池の夕、近處の藝妓などが團扇片手に涼んで見て居る配合を考へると、大きすぎて人間が客になる傾きがあるし、聯想の方からは兎角抹香くさい風が吹きたがつて始末に了へない。其處にゆくと吾が睡蓮は威張つたものさ。

睡蓮、睡蓮、實に睡蓮に限るやうだ。「何が何して睡蓮、睡蓮」と明笛式に甲ばしつた調子で一つ賛成の意を表したいが、噂に聽くと日本では繁殖が餘りよくないとか。事實果して然らば新詩の爲めに痛心の極みと謂はざるを得ない。

（三十八、八）

蓮睡蓮に關する東西詩觀の比較

霜枯れ時に蓮、睡蓮の噂でもなからうと思へど、夏越しの妙な關係に陷沒り込み、今更菊や紅葉の時節ものに變換してくれとも言出しかねね、所詮逃れぬ惡運と絶念めて手取速やく片付けることにするから、身振ひして讀過せられても、若しくは讀過せずに此儘高閣に束ねられても、僕にさら〳〵遺憾はない、遺憾はあるが小言は吐くまい。

元來温帶及熱帶地方にある水生草本の睡蓮科中睡蓮屬 Nymphaea と蓮屬 Nelumbo とは詩觀上より同部門に併視し得るは勿論のこと、之を混視しても乃至之を同視しても差支なくなる。眞を研究の目的とする科學は中心的に事物に執着する工合が蠅の樣であるのに美を咏嘆の目的とする詩觀は遠心的に事物を遊離して時々其名稱だけに羽を休める監梅が恰かも蝶に似て居る。夫れ故に假令ば日本に於て詩歌の人々はハス N. nucifera とヒツジグサ N. tetragona との和名を聞いて殆んど科を異にする程の感じがするにも拘らず、其物に應用したる漢名の蓮と睡蓮とを聞けば屬を同うする程の感じがするばかりでなく、時としては種をも同うして睡の字が蓮といふもの〻形容詞ではないかと疑ふ程である。此關係は西洋にても同樣であつて、假令ば睡蓮屬の一種セイヤウヒツジグサ N. alba の俗名が英吉利で Water-lily といふから、これよりも勢力のある百合の詩觀が迷ひ込んで來ないとも限らず、獨逸で

Seerose といふから、これよりも勢力のある薔薇の詩觀が不知不識遷移しないとも斷言し得られない。斯の如く名稱を重んじるゆゑ名稱を中心として殊に俗名を中心として誤まられたる事實其ものは如何との歩武を進むべきは改めて玆に言ふまでもないとであるが、同時に誤まられたる事實の儘に調査の研究も詩觀の心理徑路を辿るに有要なことゝ信ずる。日本に於ては物語にも俳句にも和歌にもハス一名ハチスだけで飯沼慾齋の所謂池濱止水の中に生じ、根水底にあつて葉花水面に浮ぶ此花午後未牌に初て開く（新訂草本圖說）本邦ヒツジグサの睡蓮が一度も出てこない。否、支那文字に依憑したる支那詩觀も渡つて來ない。其これあるは最近數年來の新機運であつて西洋詩觀の影響と舶載睡蓮の誘致とにあるから、從つて文字も數々水蓮だの醉蓮だのと誤寫せらるゝ程に新しくして日本固有のヒツジグサの毫も關與するところでない。支那の詩文に於ても蓮が出てくるだけで段公路の所謂其葉如荇而大其花布葉數重當夏晝開花夜縮入水晝復出也（北戶錄）段成式の所謂南海有睡蓮夜則花低入水（酉陽雜俎）稽含の所謂花之美者有水蓮如蓮而莖紫柔而無刺（南方草木狀）の睡蓮は好事家例せば宋祁、溜庵二三の作を除けば幾んど無いと謂つて差支ない。即ち日本から朝鮮を經シベリアに亘り支那にかけては睡蓮屬はあれども、或は形ちの比較的に小さくして目立たぬところから、或は數多からずして目立たぬところから、或は所在の偏してをるところから、彼の蓮屬の不斷な盛んなものに蹴落されて居て從つて詩觀の上からは日本、支那は蓮屬の範圍と見做しハスとも蓮ともいふ同一物が詩觀を動かして居るやうに見

立てゝよろしい。然らば印度から波斯埃及を經て希臘、羅馬に渡り歐洲を卷いて遠く亞米利加迄は如何なる屬があつて、また詩觀に斷えず用ゐらるゝ Lotus と及び Water-lily とは如何程な意味を含ましてあるかを尋ねる必要がある。支那の蓮たり印度の Lotus たり Tamara たりピタゴラスの所謂埃及荳たり將たまた古昔ナイル河にあつて今は亡き神聖視されたる N. speciosum は蓮屬にして紅花をつけ、培養されて白花若しくは青花の變種をつくり、熱帶及亞熱帶の亞細亞地方と濠洲地方とにある。それから睡蓮屬のうち殊にナイル河及其附近の小河に水面上二尺程の高さに大きな白花をつけて埃及ヒッジグサとも稱すべき N. lotus は印度に於てもまた神聖視されてをる。その上印度で禮拜されるのは N. rubra も N. pubescens もあるが、ベンガル灣迄は達せずしてそれより西の波斯から埃及にかけて、即ち亞細亞の南部亞弗利加の北部の流れ靜かなる河や動かぬ水の堀などに藍紫色の美しき花をつけるルリヒツジグサ N. caerulea といふ睡蓮屬があつて古代埃及に神聖視されたこと夥しく、殆んど埃及の國華と謂ふても差支ない程である。即ち蓮屬、睡蓮屬を併稱して此邊のものは皆いづれも Lotus と呼れて居る。斯く蓮と呼れて居るものゝうちには更らに他のものを含んで居るゆゑ詩觀調査に餘程注意を要するといふ理由は、ホーマーのオヂッセーに見る如く希臘の傳說にロータスを食ふ人々の Lotophagi なるものがあつて Lotus なる植物の實を食ひ我朋友を忘れ我古鄉に歸へるを希はぬことになつてをるが、此實に關する諸種の推測あるにもせよ、多分は歐洲南部亞弗利加北部の灌木 Zizyphus Lotus な

んどのことであらう。全體希臘人はロータスの名稱を諸種の植物の其實を食料になし得るものに與へて居るのではあるが、蓮でないことは明瞭になつたから有名な詩人テニスンの "Lotus-eaters" なども本論に關係がないことになる。夫れから歐米に至つて Water-lily といふ名稱は決して睡蓮に限つて使用されて居ない。此の俗名は汎く睡蓮科の諸種に適用せられるから萍蓬（カウホネ）も現はれて來るので Yellow water-lily の黃花の形容詞を失つて詩歌などには萍蓬であるか、それとも又歐羅巴の白花の睡蓮即ち White water-lily たるセイヤウヒッジグサ N. alba であるか、乃至亞米利加の香氣高き白花の睡蓮即ち Sweetscented water-lily たるニホヒヒッジグサ N. odorata であるかゞ判然しないことがある。其上に亞米利加人が故國で Lotus の俗名を與へてをる淡黃花蓮とも稱すべき N. lutea が時として蓮屬を出て睡蓮屬に詩觀上の俗名で移動することもある。しかし、大體の詩觀上から觀察して印度、波斯、埃及が蓮、睡蓮、歐米が睡蓮だと言ふてもよからう。尤も實際の事物から謂ふても、土地の寒暖に依つて大小の差異はありながら、兩屬の花葉の樣子の酷似する鹽梅と云ひ、陸上の艷を競ひ妍を鬪すところを遠く離れて獨り水上に芳姿を擧げて幽香を放つ工合と云ひ、何處から考へても題號の如く兩者を併視し混視し同視して、恰も前回の講述の罌子粟麗春花の場合と同樣にして差支なくなる。

罌子粟の種子を藥用食用に供することは延いて此植物の東西の連絡を豫想せしめ、續いで發音に注目して日本語のケシは亞剌比亞語の ras elkhishkhash の尾音と因緣があるではあるまいかとの疑念を

起した時に、偶々松村博士が略同様の見解を有せらるゝことを知つて愈々深く其所信を堅くして居る。今また蓮實に就いて研究して見るに、此ものが食用に上ぼること埃及の有史以前からであるのみならず、今日印度に於て之を蒔く法は古代埃及に於けると同法を用ゐて居るからして、蓮が始づ蓮實若しくは蓮房として日本に輸入せられたることを豫想せしむると共に外國の原音または轉訛音が日本の稱呼を形ちづくるではなからうかとの疑念が生じる。尤もハスの音の以前に於いて古事記時代にハチスの音になつてをると共に、貝原篤信の蜂巢説が他の諸植物の名稱に關する説よりも餘程巧妙に穿つてあるやうだから、確證を得る迄は暫らく一疑問として存在せしめ、植物名義學者と言語學者との斷案を待つてをることにしよう。

抑も蓮及睡蓮は何故に古代東洋たる印度、波斯、埃及に於て歐羅巴に於ける薔薇の地位を得る程迄に勢力を逞うしたであらうか。印度に於て三位一體の第二神にして保存神たる最古のヴェダ の太陽神那羅延即ちヴイシニユーや第一神にして創造神たる梵天などの玉座となり、埃及に於て天神を母とし地神を父としたる最大の神たる太陽神の頭を飾り、其子ハルポクラテスを載せるばかりでなく、或は花環花束となり、或は象徴文字に入り、或は柱頭船首其他の裝飾品の模型となり、餘波は延いて西藏に進み支那に入り日本に達して殿堂寺院靈机其他一切を修飾して居る。爲めに敎授チヤールス、グッドイーアが彫刻陶器其他の裝飾的意匠は悉く蓮、睡蓮より進化したのだとの詳細なる論文さへ書いて居る位である。如何して斯うなつてをるのであらうか。

印度聖書の一なるマヌーの法典に天地創造説が述べてある。之に依つて見るに、最初此宇宙は黒暗々たりしが自在の神が之を明瞭ならしめ、自體を分つて種々のものを創造し、始づ水を造り次に其中に一個の種子を蒔いたところが、是れが黄金の卵子となり太陽となつて光輝々たり、同時に神自身も梵天となつて此中に生れ、また思ふたばかりで之を二分して天と地とし中央に蒼空をおき、且つ夫れ〴〵の地を劃したことになつて居る。印度とは沒交渉であらうが埃及でもまた太陽神話があつて太陽が最大のものとして崇拜されて居る。

世界が水より生れたりといふ詩觀の動くかぎりは水に生るゝ蓮、睡蓮は無限の創造力を含蓄し表示するものではあるまいか。

"Old Hindu mythologies, wherein
The lotus, attribute of Ganga——embling
The world's great reproductive power——was held
In veneration."

無限の創造力が現はれて太陽となり光明となるといふ詩觀の動くかぎりは太陽と共に水を出で太陽と共に水に沈む睡蓮の花は太陽と感應して太陽の象徴となるではあるまいか。

"Lord of the lotos."

"Robed with light, with lotos crown'd."

力あり光あるものは汚濵なく罪障なしといふ詩觀の動くかぎりは水に生れて水を出で淤泥に染ます塵垢を着けない蓮、睡蓮は聖者の純潔を表彰するに恰好ではあるまいか。

猶如青蓮華紅赤白
蓮花水生水長出水上
不著水如是如來世
間生世間長出世
間行不著世間法

偖、斯う考へて見るとサア、ウィリアム、ヂョーンスが印度の詩を譯して一はヴィシニユーの歌他はブハーヴァニの歌としたるものゝ意味も了解し得られる。因に謂ふ、ヴハーヴァニは埃及に於てのオシリス男神に對するイシス女神の地位と同じ印度の女神である。

"A form Cerulean fluttered o'er the deep;
Brightest of beings, greatest of the great,
Who, not as mortals steep
Their eyes in dewy sleep.
But heavenly pensive on the lotus lay,
That blossom'd at his touch, and shed a golden ray.

Hail, primal blossom! hail, empyreal gem,
Kemel, or Padma, or whate'er high name
Delight thee, say. What four-formed godhead came,
With graceful stole and beamy diadem,
Forth from thy verdant stem."

"Whilst on the placid waters blooming,
The sky perfuming,
An opening lotos rose, and smiling spread
Hisiazure skirts and vase of gold,
Wh lo o'er his foliage roll'd
Drops that impearl Bhavani's orienth ed.

"Mother of gods! rich nature's queen!
Thy genial fire emblazed the bursting scene:
For, on the expanded blossom sitting,
With mystic veil for ever unremoved,
Thou bad'st the softy-kindling flame
Pervade this peopled frame,
And smiles, with blushes tinged, the work approved."

埃及の藍紫色の花を着ける睡蓮、ルリヒッジグサが波斯迄存してベンガルに至らぬゆゑ、印度の紅蓮を神話上說明して三位一體の第三神にして破壞神たるシーヴァの血に染められたことになつて居る。序

に擧げておかう。

"Dire sacrilege! the chosen reed
That Smara pointed with transcendent art,
Glanced with unimagined speed,
And tinged its blooming barb in Siva's heart.
Some drops divine that o'er the lotos blue
Trickled in rills auspicious,
Still mark'd it with a crimon hue."

蓮、睡蓮は埃及に夥しくあつてナイル河の如きは詩人等の "Starred with lotus" と數々繰返へす程であるが、新舊約書に一回も現はれぬといふ事實は西洋に於ての後世の詩觀を構成するに當つて大なる妨得とならざるを得ない。加之、埃及よりアッシリアに進み希臘に至つて自然現象を有性化する場合に於て、河川に因緣あるニ井ムフとなつては此女神が詩觀や神話に占有する地位の高等ならざるがために、希臘佳句集にも一寸目立たぬ程である。玆に於て後世の詩觀に對して第二の妨得ありといはねばなるまい。羅馬の庭園には無論ある筈がない。從つて詩觀も相像される。夫れより下つて後の詩觀には所謂古典に左右さるゝことが多いものであるから、近世に於て比較的古るき名高き詩人の所作にも蓮、睡蓮が活動する樣子はなく、罌子粟さへ現はれたる沙翁のうちにも唯一度の言の及びたることがない。斯は弔すべくしてまた祝すべきことではあるまいか。古來傳說の桎梏を脫する傾向がある場合

には眞に自然物其ものを直接に愛して近世風の詩觀が活躍する餘地が擴大せらるゝことになるではあるまいか。殊に新開國の北米に於てのニホヒヒッジグサが歐洲のものに比して芬香高く人の愛を受け易くして從つて此土地では國華にしたいと迄騷ぐ程であるから、偶然の機會ではあるが、旁々新詩觀の發達するに便宜が多いやうである。薔薇と百合とに比して決して遜色のなき名花の未來もまた多望と言はざるを得ない。

"A flower delicious as the rose,
And stately as the lily in her pride."

光りに疲れて首を垂れ睡りを想ふはハイネの詩。

"The lotus flower is troubled
At the sun's resplendent light;
With sunken head and sadly
She dreamily waits for the night."

瑠璃色は優しき女子の眼、之を寫すに玲瓏鏡に似たる水がある、魂がある。讀み人しらず。

"Like the blue lotus on its own clear river
Lie thy soft eyes beloved, upon my soul."

シェレーの睡蓮は慄えて居る。

"Broad water-lilies lay tremulously

And starry river-buds glimmered by."

靜けくありしナイルの潮に今ゆらるゝは愛の爲めか、クリーヴランドに尋ねてみなさい。

"Rocked now on old Nile's deep pulses,
Love-lily is stirred by the tide
That was moving in cadence-sweep onward
To merge its great heart in seas wide."

そよ吹く風にも一寸漂ふが根は堅いテニスンの詩。

"The water-lily starts and slides
Upon the level in little puffs of wind,
Tho' anchored to the bottom."

同じ意味はイー、アール、ピーの詩にも見えて居る。

"Misty moonlight, faintly falling
O'er the lake at eventide,
Shows a thousand gleaming lilies
On the rippling waters wide.

White as snow, the circling petals
Cluster round each golden star,
Rising, falling with the waters,
Moving, yet at rest they are.

Winds may blow, and skies may darken,
Rain may pour, and waves may swell;
Deep beneath the changeful eddies
Lily roots are fastened well."

根を養ふ土のあればこそ風水の魂も空に上り得たるなれといふのはルシー、ラーカムの歌の旨趣。

"From the reek of the pond, the lily
Has risen in raiment white,—
A spirit of airs and waters—
A form of incarnate light;
Yet, except for the rooted stem
That steadies her diadem,—
Except for the earth she is nourished by,
Could the soul of the lily have climbed to the sky?"

優しさをたゝみ込みて水の温懐に滑り入る樣に君も吾がこゝろにかくれ玉へとテニスンは言ふ。

"Now folds the lily all her sweetness up,
And slips into the bosom of the lake;
So folds thyself, my dearest, thou, and slip
Into my bosom, and be lost in me."

夜もすがら浴みするは、さはやかに裝ひて日輪のとのに復た見えんためとムーアは言ふ。

"Those virgin Lilies all the night

Bathing their beauties in the lake,
That they may rise more fresh and bright
When their beloved sun's awake."

それ故に同じこゝろもちで、エリザベス、エーカーズは純潔な花嫁に譬へて居る。

"Down on the lake where the waters deep
In a trance of leafy gloom,
Rocked ceaselessly by the lulling swell
In an endless waste of bloom,
The fair white lilies, the bridelike lilies,
Unbosom their rich perfume.

Oh, lovingly, after the stars go out,
And the silent night is done,
When their morning choruses clear and sweet
The woodbirds have begun,
The fond whiie lilies, the bridelike lilies,
Look up to their lord, the sun.

And a spell like that which the lotus owns
Steals over the charméd air,
As slow, unclosing their shining leaves,
So wondrously pale and fair,

The rich white lilies, the bridelike lilies,
Their golden hearts lay bare.
White angels of the crystal lake,
Haloed with purity,
There is never a touch of earthly dust
On their radiant drapery,—
The sweet white lilies, the bridelike lilies,
The fairest flowers that be."

水に優しくて、清くて、また美しき睡蓮の咲く模樣を見たならば、トワムレー孃と共に河邊に行きたく、レールズと共に水の女王と稱ぐざるを得まい。

"Oh! come to the river's rim, come to us there,
For the White Water Lily is wondrous fair."

"O melon-scented lily!
O water-queen of flower!
When shall I see the silver waves
Dancing around thee, like sweet slaves
To beauty in its bowers;
When shall I take an earthly part
In honoring thy golden heart?
O pretty rose autumnal!

O fairy queen of trees!
When may I have thy gentle buds
Adorned with their emerald studs,
In their green palaces;
When see thy vernal velvet fall
Under thy ruby coronal?

The sound of forest music
The water-song of streams,
Are become dim and strange to me
As musings of old witchery;
But in my fitful dreams,
And in my waking weary hours,
Spirits come to me, as from flowers."

"Mark where transparent waters glide,
Soft flowing o'er their tranquil bed;
There, cradled in the dimpling tide,
Nymphaea rests her lovely head.
But conscious of the earliest beam,
She rises from her humid rest,
And sees reflected in the stream

The virgin whiteness of her breast
Till the bright day-star to the west
Declines, in Ocean's surge to lave,
Then folded in her modest vest
She slumbers in the rocking wave."

其優しい美しい睡蓮が遙けき彼方の星をのみ一意吾が夫と思ひ込み、ちらと射つたる雲間の光りに胸を擴げたるばかりで其儘篠突く雨に果敢ない最後、流石ブレーキファスト、テーブルのプロフェッサーやオートクラットの著者として北米に名高きホームズ其人の手腕である。

"The Sun stepped down from his golden throne,
And lay in the silent sea,
And the Lily had folded her satin leaves,
For a sleepy thing was she.
What is the Lily dreaming of?
Why crisp the waters blue?
See, see, she is lifting her varnished lid!
Her white leaves are glistening through!

The Rose is cooling his burning cheek
In the lap of the breathless tide;—
The Lily hath sisters fresh and fair,
That would lie by the Rose's side;

蓮睡蓮に關する東西詩聖の比較

He would love her better than all the rest,
　And he would be fond and true;—
But the Lily unfolded her weary lids,
　And looked at the sky so blue.

Remember, remember, thou silly one,
　How fast will thy summer glide,
And wilt thou wither a virgin pale,
　Or flourish a blooming bride?
"Oh! the Rose is old, and thorny, and cold,
　And he lives on earth," said she;
"But the Star is fair, and he lives in the air,
　And he shall my bridegroom be."

But what if the stormy cloud should come,
　And ruffle the silver sea?
Would he turn his eye from the distant sky
　To smile on a thing like thee?
Oh! no, fair Lily, he will not send
　One ray from far-off throne;
The winds shall blow, and the waves shall flow,
　And thou wilt be left alone.

There is not a leaf on the mountain top,
　Nor a drop of evening dew,
Nor a golden sand on the sparkling shore,
　Nor a pearl in the waters blue,
That he has not cheered with his fickle smile,
　And warmed with his faithless beam,——
And will he be true to a pallid flower
　That floats on the quiet stream?

Alas for the Lily! she would not heed,
　But turned to the skies afar,
And bared her breast to the trembling ray
　That shot from the rising Star;
The cloud came over the darkened sky,
　And over the waters wide:
She looked in vain through the beating rain,
　And sank in the stormy tide."

偖斯う書いて來ると、熱帶地方の蓮、睡蓮が歐米の睡蓮と比較して詩觀の上に著しき差違があるのが認められる。土地氣候が與ふる植物の大小及四邊の境遇といふ有形方面と、哲學宗教が因をなす人情思想の無形方面とを考察し來つて兩々相比較すると各々動かすべからざる特質を具へて居る。從つてまた興味が多い。彼れは水を根蒂として立たざるべからざる字宙觀を水中唯一の女王たる此植物に寄託

してあるから、炎熱金を鑠かすところに獨り芬香を吐く眇たる此植物も大千世界を包藏して幽玄の達すべからざる趣きがある。此れは塵を拂つていよ〳〵清艶の美を增す戀愛觀を水中唯一の女王たる此植物に寄託してあるから、靜けき湖の水鏡に眞白き胸をひろげて天使の風丰凜として犯し難き感を生じる。彼れは何處までも聖者の高潔を離れず此れは如何しても處女の純白を棄てることが出來ない。彼れは飽くまで老いて高きを望み此は飽くまで若くて清きを望む。試みに彼此の蓮、睡蓮を交換して考へて見ると、其土地に合はぬこと夥だしくて、恰度木に竹を接いだやうになる。さらば此兩者の間に立つ支那と日本との蓮は如何に其詩觀を發達さしたであらうか。

李時珍の本草綱目に蓮藕荊揚豫益諸處湖澤陂地皆有之とあるから、諸處にあるといふことが分り、王世懋の花疏に蓮花種最多とあるから數多の變種迄あることも想像が出來る。そして詩經に既に左の文句があるによつて其古來より存在することも明らかになつてくる。

山有扶蘇隰有荷華（鄭風）

彼澤之陂有蒲與荷又彼澤之陂有蒲菡萏（陳風）

荷といふことに就いては爾雅には根として韓保昇は葉として陸璣の詩疏には莖としてあるが、時珍の所謂按莖乃負葉者也有負之義當從陸說に依つて姑らく莖說を取つておかう。菡萏は大全に未開曰菡萏とあるし時珍も同じく菡萏函合未發之意と記してをるから、これも此意にしておかう。偕字義を斯う明らかにした上で意味を考へて見ると、單に物各其處を得て居る位のところに止つて、蓮其ものに對する特殊の詩觀は毫も働いて居らぬ。斯は文學心理上是非斯くあるべき筈で情緒之分岐（Differentiation of Emotion）は簡より繁、單より複と次第に進歩するものであるから、此簡朴な民謠的表情が單獨でも漸やく複雜化するが、外來の思潮にも觸れて愈々其程度を進める。そこで支那に於て、蓮に對する詩觀を代表すると思はれる周敦頤の愛蓮說を茲に擧げて其着眼點を觀察してみよう。林泉隨筆に周子愛蓮說一篇僅百餘字形容蓮之可愛宛然如在目前と批評してあるから、僕の引用も不當であるまい。

水陸草木之花可愛者甚蕃晉陶淵明獨愛菊自李唐來世人甚愛牡丹予獨愛蓮之出淤泥而不染濯清漣而不妖中通外直不蔓不枝香遠益清亭々淨植可遠觀而不可褻翫焉予謂菊花之隱逸者也牡丹花之富貴者也蓮花之君子者也噫菊之愛陶後鮮有聞蓮之愛同予者何人牡丹之愛宜乎衆矣。

此文に依つて注意すべきことがあるのは、印度の深遠なる哲學宗教が支那の近邇なる倫理道德と化して居ることで、彼の想像は此の實際となり、彼の聖者は此の君子となつて居ることである。王象晉の羣芳譜にも荷花生池澤中最秀凡物先華而後實獨此華實齊生百節疏通萬竅玲瓏亭々物表出於淤泥而不染花中之君子也と返譽を與へてをるし、殊に蓮の小歷史を作つて居る。此文は蓮を歷史として觀察するときの多少の參考となるやうに思はるゝが、稍々長篇に失して此處に擧ぐるに煩はしい。しかし文中に潔白聰明意氣清虛自以仙流弗與生民偕隱遁不見世苟蔽身雖

汚泥重淵沒齒不怨などゝ彼の所謂根を形容したり、また徐渭が荷賦を作つて直幹不撓虛中無物竅多比干之心清映伯夷之骨などゝ形容してをるやうに、支那で潔白の意義を附與する蓮の部分は根莖にもなるし、或はまた花葉にもなるし、或はまた全部にもなつて別に一定してをらない。總じて水をまつて愈々清く見えるは東西軌を同うすることであるから、漢譯佛典の傳搬と共に無限の創造力あることや、また道者の心に比喩することにも用ゐられて、現に崔融が武后に瑞蓮を賀して奉れる文にも經文を引いて臣等謹按華嚴經云蓮花世界是盧舍那佛成道之國一蓮花有百億國無量清淨經云無量清淨佛七寶池中生蓮花上夫蓮花者出塵離染清淨無瑕有以見如來之心有以察如來之法道之行也曾不徒然と書いて居る如く、或は李網が賦の序に釋氏以蓮花喩性蓋以其植根淤泥而能不染發生清淨殊妙香色非他草木之華可比故以爲喩と書いて居る如く、印度其儘の思潮もあるは勿論であるが、之を支那化して清廉潔白の君子に使用することを遑却することが出來ない。實に蓮を詩觀上愛用したる跡夥だしくて、曹王潘陸の逸曲も孫鮑江蕭の妙韻も喧傳され、蕭銳の所謂蓮之爲物花中之特立者也墨客騷人所以品題多矣花開十丈有若昌黎之詠紅月小湖有若杜少陵之句中通外直有若周濂溪之說或託其花或言其狀或稱其操無非致美於蓮者となつて、他の企及ぶべからざる水中唯一の此植物が世間花卉無踰蓮花者蓋諸花皆藉暄風暖日獨蓮花得意於水月其香清凉雖荷葉無花時亦自香也と彦周詩話に嘆賞された程である。流石に支那は文字の國である。其豐富なる文字を驅使して、蓮の清淨といふ意味を君子のみならず、神仙にも天女にも及ぼし、其美麗なる意味を佳人美童にも及ぼし、更らに進みて單なる叙景記述に及びては其根其莖其葉其花全部を氣候、土地、動植物と配合して夫れ〳〵の趣きを見せたるは仲々偉觀であつて之を特別に研究の對象として心理と審美とにかけて論じたならば面白いことであるが、今は其處まで竝で立ち入る範圍はない。唯だ數例を擧げて其一端を示すにとゞめる。

楚の屈原の離騷では嘸かし清淨なものであらうとの感じがする。

製芰荷以爲衣兮集芙蓉以爲裳。

漢の樂府のうちで江南曲は葉を擧げて魚を副えて居る。

江南可採蓮々葉何田々魚戲蓮葉東
魚戲蓮葉西魚戲蓮葉南魚戲蓮葉北

同心もこゝろもちを寄託するによからう。前のは梁の武帝の夏歌で、後のは唐の徐彦伯の採蓮曲である。

江南蓮花開紅光照碧水色同心復同藕異心無異。

妾家越水邊搖艇入江畑既覓同心侶復採同心蓮
折藕絲能脆開花葉正圓春歌弄明月歸棹落花前。

紅蓮は流石に優しいところに用ゐるに適してをるのは既に夏歌に現はれて居る、なほ次に擧ぐるのは

前は唐の崔國輔後は李白。

玉漱花紅發金塘水碧流相逢畏相失並著採蓮舟。

涉江翫秋水愛此紅蕖鮮攀荷弄其珠蕩漾不成圓

佳期綵雲裏欲贈隔遠天相思無由見悵望凉風前。

白蓮は清淨極まりないから、天女にも、嫦娥の簪にも、譬へられる。前のは宋の楊億。後のは蘇轍、これは佛臭い。

昨夜三更裏嫦娥墮玉簪馮夷不敢受捧出碧波心。

蓮花生淤泥淨色比天女臨池見千葉謫墮問何故

空明世無匹銀瓶送佛所清泉養芳潔爲我三日住

蔫然落實牀應返梵天去。

唐の李羣玉だけによりて蓮葉新荷晩蓮に關する見解の一例を茲に擧げよう。

根是泥中玉心承露下珠在君塘下種埋沒任春蒲。

田々八九葉散點綠池初嫩碧縷平水圓陰已蔽魚

浮萍遮不合弱荇繞猶踈半在春波底芳心卷未舒。

露冷芳意盡稀踈空碧荷殘香隨暮雨枯葉墮寒波

楚客能奇服吳姬停權歌涉江無可寄幽恨竟如何。

蓮を食つて宋の黃庭堅は斯んな感を起したとさ。こゝらが支那の本色だらう。

蓮實大如指分甘念母慈共房頭纖々更深兄弟恩

實中有薏荷拳如小兒手令我憶諸雛……。

しかし蓮は輕風あり水色あつて月明のうちに見るは仲々の美觀であらう。西歐の戀を離れ印度の法をも溫かで西歐のよりも仇つぽい。別言すれば聖者ほど老いて高くなくつてもよく、處女程若く清くなしかし蓮は輕風あり水色あつて月明のうちに見るは仲々の美觀であらう。西歐の戀を離れ印度の法を離れたら落ち行くさきの一つの美觀は正さに此處にありだ。于石の西湖荷花の一端を擧げる。

我昔扁舟泛湖去回望荷花浩無數誰家畫舫倚紅妝

笑聲廻入花深處笙歌凄咽水雲寒花色似嫌脂粉汙

夜深人靜月明中方識荷花有眞趣水天倒浸碧琉璃

淨質芳姿澹相顧亭々翠蓋擁羣仙輕風微顫凌波步

酒暈潮紅淺渥唇膚如凝脂腰束素一捻香骨薄裁冰

半破芳心嬌泣露湖光花氣滿衣襟月落波寒浸香霧

恍然人在蕊珠宮便欲移家臨水住……。

最後に人々の賞讃を博したといはれる宋の丘瓊山の所作を中軸として茲に擧げておかう。印度のより

くつてもよい。支那的であらう。

亭々淨植水雲鄉不染於泥異衆芳映水霞標開國色
迎風雲錦妬宮裝嬌々麗質如西子綽約芳姿似女郎
好向溪亭追勝賞爲渠開酒把淸酒。

支那から朝鮮を經て日本に舶載したのであらうけれども、上下二千餘年、今茫乎として尋ぬるに由なしである。文宇の上では舒明天皇の御宇に渡來したことになつて居る。食用や佛教用にのみ限られたのが藤原時代より園藝的になつて來て德川時代で大成した。古事記に既に雄略天皇の條下にハチスの歌がある。

久佐迦延能伊理延能波知須波那婆知須微能佐加理毘登々母志岐呂加母

續日本紀二十三卷には光仁天皇寶龜六年八月癸酉始設蓮葉之宴とあり、類聚國史には延曆十二年八月癸巳翫蓮葉宴飮奏樂賜祿とあるから、此時代既に斯やうな宴を開いたことがわかる。今試みに萬葉時代の歌を擧げて其詩觀を調べて見よう。前の一首は卷十三の長歌で、後の三首は卷十六の短歌である。

御佩乎劒池之蓮葉爾渟有水之往方無我爲時爾應相登相有君乎莫寢等母寸巨勢友吾情隅之池之池底吾者不忍正相左右二。

蓮葉者如是許曾有物意吉麻呂之家在物者宇毛乃葉爾有之。
勝間田之池者我知蓮無然言君之鬚無加之。
久堅之雨毛落奴可蓮荷爾渟在水乃玉爾似有將見。

蓮葉にたまれる水玉を美しいと觀じたるもの、其露の跡方もなく零れるを戀の思ひの行方なきに譬へて悲しく觀じたるものその外に蓮としての何等の活働がない。なほ印度佛教の影響を受けたものをも加へて萬葉以外の二十一代集や物語類日記類などの詩觀を擧げてみよう。

夏見て凉しく美しいと感じたものは蓮葉にたまれる露も無論あるが夫れ以外のところも生じてくる。

心ちよげなる物池のはちすの村雨にあひたる(枕草紙)
池のはちすをみやるのみぞすこしすゞしき心ちする(同上)
蓮の花みだれ咲てこのころおもしろし(なくさめ草)
いけはいとすゞしげにてはちすの花さきわたれるに葉はいとあをやかにて露きら〳〵と玉のやうにみえわたるを(源氏物語)
かきねにさける夏草の花よりもなをもきゝやかなる池といへどにごりにすまぬはちすの花
つけたるばかりこゝろも淸まる事はあらじかし(四季物語)
うつくしきものははちすのうき葉のいこちひさきを池よりとりあげて見る(枕草紙)

水におひたるはなはあをきはちすのよにすぐれてかにほひたるはなはならびなきがごとく
（榮花物語）

風吹けば蓮の浮葉に玉こえて涼しくなりぬひぐらしの聲（金葉、源俊頼朝臣）
風をいたみ蓮のうき葉に宿占めて涼しき玉に蛙鳴くなり（新後拾、御鳥羽院御製）
ゆふされば波こす池の蓮葉に玉ゆりすぶる風の涼しさ（玉、三條入道左大臣）

猶ほ數多あるが千篇一律だ。露のこぼれ碎けるのが果敢ないから戀の行方なきに譬へるばかりでなく、佛敎の感化を受けて人生の果敢ないことにも譬へる。のみならず、佛敎と蓮との關係からして、蓮の各部分も蓮全體も蓮の性質も、人生の果敢ないことばかりでなく死後の極樂の蓮臺にも、または廣く佛敎々理にも聯想が生ずる筈だ。

春秋の花の色々にほへども種はひとつのはちすなりけり（續後撰、大僧正證觀）
斯くばかりうき世の中の濁にもしまぬは胸の蓮なりけり（新千、讀人不知）
此世より蓮の糸に結ばれ西にこゝろのひくわが身哉（新續古、後京極攝政太政大臣）
一度も南無阿彌陀佛といふ人の蓮の上にのぼらぬはなし（拾、空也上人）
極樂のはちすの上に置く露を我が身の玉と思はましかば（續千、前權僧正成賢）
けふよりは露のいのちもをしからず蓮の上の玉と契れば（拾、實方朝臣）

仇にして消ぬる身とや思ふらむはちすの上の露ぞ我身は（今鏡、靜圓僧正靈）
たてまつる蓮の上の露ばかりこれを哀に三世のほとけに（今昔物語）
草のいほの露きえぬとや人はみる蓮の花に宿りぬる身を（玉、藤原資隆朝臣）
隔なくはちすの宿を契りてもきみが心やすまじとすらむ（源氏物語）
よしあしの人をわかじと蓮ばな九品まで咲きかはるなり（新拾、兼空上人）
池水の底より出づる蓮葉のいかで濁りにしまずなりけむ（續千、俊成）
こゝろをも猶や磨かむ蓮葉の露のたまゝ〳〵法に逢ひつゝ（新拾、讀人不知）
頼むぞよさきだつ人に契りてしおなじ蓮の花のなかばを（新拾、法印顯詮）
底きよく心の水をすまさずばいかゞさとりの蓮をも見む（新古、入道前關白太政大臣）
これや此の浮世の他の春ならむ花の戸ぼその明ぼの〳〵空（新古、寂蓮法師）

猶ほ數多あるがどれも千篇一律だ。これだけで一應批評して見よう。前にも言ふたごとく、蓮、睡蓮は美觀上水中唯一の植物と稱しても差支ない位であるから水を得て始めて其特徴を發揮すべき詩觀か、または水を得てより多く其特徴を增加すべき詩觀か、印度に於て存し、後のものは今代歐米に於て存する。今舊和歌界に就いて觀察して見ると、蓮其ものを見るよりも、主として蓮に隨伴する露玉を用ゐ、清淨を譬へるよりも、主として無常を譬へるに

用ゐて居る。無常を譬へるには陸上の種々の植物でも出來る、否植物に限らない。露玉を用ゐるには陸上の或る植物例せば芋のやうなものでも出來るやうに思ふ。よし一歩を譲つて舊和歌界の所見を正當としても、無常と關係する印度詩觀に比較すれば、彼は大乘的で此は小乘的、彼は幽遠で放奔で崇高で、此は卑近で狹小で凡俗だ。露玉のみを使用することでは支那の叙景詩と比較すると材料の寡小が頗る單調を招ねくと言はざるを得まい。

俳句は此缺點を補つて居る。材料としては決して舊和歌の如き單調のものではなく、蓮其ものにては花も葉も香も使用するが上に花や葉の時間的階段をも使用して居る。蓮に隨伴するものにては立葉の露と浮葉の玉に限らずして飛石でも鷺でも蟇でも乃至茶漬でも使用して居る。つまり蓮を中心としての或る境遇の瞬時的感想を繪畫的に說明して居るに過ぎない。したがつて支那の叙景詩をも遙かに超越して材料の豐富を誇るに足ると思ふ。しかし土地をかへ氣候をかへ人をかへたなら愈々無限に擴張されべき筈のものであるから、内地に西洋睡蓮が加はりつゝある丈でも安心して意張つてをるわけには行くまい。況んやナイル河邊やガンジス河邊の光景をやだ。夫れから蓮の性質の方面では無常にあらずして清淨を示して居る。舊和歌に優るばかりでなく、君子化したる支那詩より高いが、白蓮を御僧が切る限りは數多き圓頭縮衣の徒であるから、李白の所謂素手把芙蓉虛步躡太清の太清もないやうに思はれる。況んや佛陀梵天の太我をや。したがつて創造力は藥にしたくもない。若し俳句は客觀に進むもの

のであつて性質を云々するやうな主觀を容れる餘地がないと言ふなら、止むを得ないから睡蓮の太愛と共に之を他の詩形に求めざるを得まい。

飛石も三つ四つ蓮の浮葉哉（蕪村）
蓮の立葉風情過ぎたる小雨哉（保吉）
瓶の蓮今年も巻葉ばかりなり（召波）
浮葉巻葉立葉折葉と蓮らし（素堂）
蓮池の田風にしらむ葉うら哉（蕪村）
蓮の香や水をはなるゝ莖二寸（蕪村）
花散つて安く立ちけり蓮の莖（其朝）
蓮の香や深くも籠る葉の茂り（太祇）
蓮の香の深くつゝみそ君が家（太祇）
明方や水も動かず蓮匂ふ（大魯）
白蓮の匂ふこそ恨なれ（魚光）
白蓮に人影ふるゝ夜明哉（蓼太）
暮なんとして白蓮の動きけり（長翠）

白蓮に夕暮陰る嵐かな（白雄）
白蓮に傘たゞむ夜明哉（保去）
白蓮を切らんとぞする僧の様（蕪村）
釣舟に御僧を乗せて蓮見哉（維駒）
佛めきて心置かるゝ蓮かな（秋色）
思ふ事の捨處なり蓮の花（梅堂）
蓮の花面白がるは慮外なり（支考）
手を洗ひ持つ氣になりぬ蓮の花（從吾）
咲く花も此世の蓮は曲りけり（一茶）
花は皆莟んで月の蓮哉（闌更）
咲かうとて膨れ返へるや蓮の花（百明）
蓮の花散るや八島のみだれ口（史邦）
散る蓮や水しづまりて月の上（鷺橋）
月と水中靜なり咲く蓮（舍洲）
引よせて蓮の露吸ふ汀かな（太祇）

蓮の花足らぬところへ鷺の首（柳居）
さは〳〵と蓮動かす池の龜（鬼貫）
丘の家や蓮に吹れて夕茶漬（一茶）

徳川時代から明治今日迄の和歌も、明治今日の俳句も其進歩は順潮であつて、殊に最近數年間種々な雜誌に散見したところに就いて僕の記臆をして誤りなからしめなば、新體詩は勿論和歌も俳句も西洋は如何なる方向に以後進歩して行くであらうか。睡蓮を各々歌つて居る。蓮と睡蓮と漸く併稱せられんとして居る。果して然らば差當り蓮、睡蓮の詩觀地球を帶の如くにめぐつて、東西の詩觀が集中せんとする現代日本の表面に足を停めて立つて考へると、蓮、睡蓮に關する詩觀は凡そ三樣の方向を取つて次の如くに開展するのではあるまいかと考へられる。第一、水に依つて始めて立つ印度哲學の宇宙觀を太陽神話と共に雄大なる熱帶地方の蓮、睡蓮に寄託するのは、まづ差しあたり新體詩の役目であらう。詩觀は想像の翼に乘り不忍池の小舞臺を去つて赤道直下の大舞臺に走らざるを得まい。第二、水を得て愈々清艶を增す歐米基督敎の戀愛觀を目下輸入しつゝある小形の睡蓮に寄託するのは、まづ差しあたり短歌の役目であらう。詩觀は庭園の小池でも動きそうだ。第三、水を待つておのづから新生面のある世界に分布する蓮、睡蓮の詩境を繪畫的に暗示的に描くは、まづ差しあたり俳句の役目であらう。日本を問はず世界漫遊にでも御出かけな

さい。

雜誌の頁數に制限があつて例證僅少議論自ら粗笨を免れない。また詳述する機會があらうと信ずる。

（三十八、十一）

理想の花嫁

貴君は何麼花嫁が御望みですかと言ふ問題ですか、斯ういふ大問題を籔から棒に突出して、熟考の餘裕を與へずに即答を求めるといふことになると、解答者は充分秩序のある說明を與ふることも出來かねるし、出題者も滿足を得ることは出來ないと思ひます、恰も往復端書で來世の有無を尋ねられたと同じ樣な者で、誠に閉口する次第であります、故に若し今後此の樣な計畫があるならば極めて小さな問題にして頂きたいし、若し大きな問題であるならば豫め充分なる時日を與へて、熟考の餘裕を持つ樣にさせて頂き度いのです。

今一寸思ひ出した處では、此の問題に對しては全然返辭の出來ない人は何人も無でせうが、又充分返辭を爲得る人は一人もないであらうと思はれます、別言すれば貴君が訪問して尋ねられる所では、何人も御返辭はしませうが、其返辭が十人十種であつて、叩けば叩く程深く底の知れない穴に入つて行く樣になり、終には貴君が總括して纒まりを付けることの出來ない談話になつて了ふと思ひます、其の理由は如何かと言ふに、花嫁を求める花婿の存在は普遍的の事實であるから、如何なる男性からも離れることの出來ない問題になるが、花嫁を求むる花婿の好き嫌ひは個人的の趣味であるから、花に全く相同じき二個の花が無い如く人に全く相同じき二個の人が無い以上は、其個人の四圍の境遇や天賦の性質や、種々の物が相集て築き出したる趣味てふ者が、求める花嫁の資格に全く相同じなものが二ッ出來る筈がない、何の水素でも一ッある以上は何の酸素でも二ッあるものと結合してH_2Oなる水になるけれども、彼の花婿の求めるは彼の花嫁で、此の花婿の求めるのは此の花嫁で、決して、彼と此とを相變換し得べき性質のものでない、即ち彼の花嫁、此の花嫁といふ個性を求めて、花嫁全體といふ類性を求めない、其れ故に貴君は如何な花嫁がお好きですかと問ふ時は、答へる者が底知れぬ深いことを言ふから、宛然八幡知らずに入り行く樣なものである、若し君が此の問題を既婚の男性、例へば僕の樣な者にかけたならば、そして其の男性が他より何等の掣肘干涉を受けないで結婚した者ならば『へゝどうも恐れ入ります、私は私の妻が一番好きな花嫁でした、斯麼花嫁が好きです』と話をして其の美點を數限りもなく並べ立てることになるでせう、若し君が此の問題を未婚の男性にかけて、其の男性が他より何等の掣肘を受けずに結婚し得るものならば、『未だ見付かりませぬから御目にかけることが出來かねます、其の美點を並べるとも出來ませぬ』と返事をするでせう、隨て、貴君はどんな花嫁が御好きですかと言ふ問題は、更めて個人的趣味を離れる樣に直して、花嫁たらんとする

女性全體を通じて花婿たらんとする男性全體は普遍的に如何なる資格を求めるかと言ふことにしなければなりますまい。

問題をさう更へた曉に、現今の日本で要求する花嫁の資格を現代といふ一の制約のもとに打算して述べて行くと言ふことは、我々から申し上げるよりも經世家、女子教育家、倫理家の樣な人が返事を爲得ることになるであらうと思ふのです、即ち現在の家族を單位としての要求に對する花嫁の資格は、理論的に花嫁の資格を述べて、未だ來らざる文明社會の、言ひ換へれば理想的の、文明社會と信ぜられる處に應用することは出來ない、隨て我々の要求すべき花嫁の資格は、現今の日本と言ふよりは、未來の日本と言ふことに當て箝まる樣にならうと思はれます、既に文明の影響を學理及實際から、今現に受けつゝある青年及び今後受けて行くべき未來の、未だ生れざる男性諸子は如何しても此の問題は未來にかけて普遍的に花嫁の資格を論じて行くやうになる譯であります、父として、或は母として、現今持て居る態度と、未婚の青年として持て居る態度とは、其性質の上に於て、矛盾、衝突、延ては社會的動亂を近き將來に於て作り出す潛勢力が所在に形はれて居るやうに思ひます、經世家、倫理家等は非常なる決心と、周到なる用意とで此の所を鹽梅し、經營して行かなければならぬ大問題であるのです、寧ろ我々は既に醒めかゝツて居る青年と步調を同うして進んで行く樣な心の傾向がありまするからして、君も其のおつもりで聽いて居て頂きたい。

現今の社會に於ては、青年の男性の方が目を醒まして居ることが青年の女性よりも一步秀れて居ると評さなければならない、充分なる教育を受けて文明の原理、實際を咀嚼しつゝある現今の青年に比較すると、未だ發達しない教育の下に居る青年の女性は、動もすれば盲動して、何等の文明的影響を裏心から、別言すれば外形からでなくして、咀嚼し消化する丈の眼が開いて居らないと思ふ、それが爲めに花婿を如何にすべきよりも、花嫁を如何にすべきかの問題の方が、一層急務であつて、一層切實であらうと思ふ。それで花嫁の資格を作る文明的教育がドンドと進步してゆかなければならないので、別言すれば、現今の男性に好配遇たる可き女性を作出すと言ふことに總ての人が熱中して行かなければならない、然るに實際に於ては世には頗る天保時代の思想を株守し、古代の東洋倫理即ち進步せる今日の時勢に適應しない過去の古き東洋倫理のみを唯一の金科玉條として何等の改善を施さずに女子教育を指導する人が甚だ少なくないのは、實に嘆はしき次第であるのです。

私は醒めかゝツて居る男性に代つて、女性全般に普遍的に要求し得られるであらうと思はるゝ二三の根本のところを此處に述べやうと思ひます。

第一、我れは男性であつて女性でないといふ自覺を男性が持つと同じやうに、我れは女性であつて男性でないといふ自覺を女性が持たんことを望むのです、假りに人間が男女各一人づゝ此の宇宙の間に居るものと想像して見ると、その男性から考へたならば其の女性は、己れと種を同じくする物は此の人

だけであつて、其の外の者は皆己れ以上若しくは己れ以下の者で己れら人類とは違つた種屬であると考へつくから、己れでない、而かも己れとは種を同じくして居る者と考へて、男性からは千金の寶でも代へることの出來ない、敬ふべき、尊むべき、愛すべき此の女性を曠漠たる原野の中の唯一の好伴侶と思ふやうになる譯で、女性から男性を見ても亦同じことになつて來るのです、而うすれば相助け相賴る上に於て、心身諸共に反對であつて、而かも己れとは唯一の好伴侶たるべき其の物に對するときは、何時でも己れといふものは彼れでないからして彼と違ふ己れといふ自覺を作らなければならないのであります。

第二、自覺を持た曉に、男性が非常の興味を持て一生の研究物と女性を看做すが如く、女性は又男性に對して非常の興味を持て一生の研究物と見て行くやうにしたいのです、今誰れであつたか名を忘れて居ますけれども、或る昔の學者が『我れは男性なるが故に非常なる興味を女性に有つ』と言つた文句がありますが、これは寔に明言であらうと思ふので、『我れは女性なるが故に男性に對して非常の興味を有つ』といふことが女性の方から言ひ出されなければならないのであります。

以上二個條は、男性の花婿から見ても、女性の花嫁から見ても、兩方共に變はることなく、其對者に要求すべき普遍的資格であらうと信じます、即ち己れは彼れでない、隨つて己れならざる彼れを研究するのは唯一の樂みだといふ心は、結婚以前に於ても將結婚以後に於ても、絶へず持て居るべき心的狀態で、若し是等を捨てたならば不完全なる花嫁と不完全なる花婿とが出來上ることになる、隨つて結婚以前の準備が粗雜に流れるし、結婚以後の幸福が深厚にならないと斷言しても、敢て謬論と言ふ可きではない筈です、それからして花婿が花嫁に望む資格と、花嫁が花婿に望むのとに於て、其の間に相違のあるものが幾らも有るやうに思ひますが、茲に女性の心では推測の出來ない重なる一つのことがあります、それを第三條にしておきませう。

第三、花嫁の花婿に對する要求の資格に在ると同じ位置の所に、花婿が花嫁に要求する資格の中に美しいといふことがあるのです、美しいは決して肉體的に於てのみの狹い意味ではありませぬ、心身共に美しいといふ意味で使つて居るのです。

これを社會進化の上から考へて見るも、將比較心理學よりして考へて觀るも、文化の未だ進まない野蠻時代であつては、剛健强壯の筋肉を持て居る男性が、女性の保護者であつた者が、今日文明の競爭場裡に於ける唯一の武器は知識であつて、如何に骨が强大であらう共、如何に筋骨が立派であらう共、若無知識であるならは遂に自然淘汰の渦浪に引きさらはれて了ふであらう、保守的の女性が知識の優秀なる男性に其の身を託して、その一身を安固にして行かうといふ考へは自ら發達すべき筈である、それ故に女性の方では、美男でも、競爭場裡に於ては毎に旗を卷いて敗北する知識の下等なる男性に其の身を委託する考へは出ない筈なんで、隨て修養の全き女性であるならば未來を洞察して、何時でも

花婿の資格に先づ第一に智識を目的として數へることになつてくる、然るに男性の方は決して智識を女性に向つて不可缺資格に數へるものではない、男性が女性に向つて最も重きを置く、而かも女性の知らざる資格は何時でも、美しいといふことが先立つて來るので、姿の美しいと共にまた心の美しい、ラブリーであると同時にアミエブルであつて、怜悧な、悟りの善い、感じの深い、そう言ふ資格の有る女性を望むので、法律が出來なくても、醫學が出來なくても、或部門的智識の如きは少しも重きを置かないのである、私が智識と言ふことに付て誤解を招かないことを望みます、智識學問が要らないから敎育を施さぬで善い、何も世の中のことを知らせんでもよいと言ふ樣に解釋をされては困ります、書物を讀み殊に古來有名なる戲曲や小說等の男女の性質を解剖したる書物を讀んで感情の方面から爾ういふことを會得する素養は、是非なければならないし、一家を持た以上は自ら必要なるべき些少の普通學はどうしても無ければならないので、別に更めて言ふ迄もないことであるが、これを男性の如く深く調べるとか遠く考へるとか言ふことは、女性に取ては少しも必要のないことで、又望んでも到底得られない。

斯う言ふことを述べて行くと數限もなく、種々の要求が出て來るのでありますから、根本たる可き此三個條丈を擧げ、他の資格は他日詳しく論ずる機會に讓ることにしませう、若し夫れ優しいが善いとか、孝行者が善いとか、人の前で大口開いて笑つちや不可ぬとか、其な馬鹿げた枝葉の問題は根本の條件が定まるに隨て自ら引出されて來やうと思ふ、賢母良妻になる前に賢婦良婦になる資格が第一でありませう。

抽象的言語で人の誤解を怖れる處が幾らもある樣に考へられますが、一寸した談話の席では何分にも結象的に話すことが出來ません、よろしく御推測の上に御綴合せを願ひます。（三十八、十二）

外國花の流行と國華の將來

日本園藝雜誌上に於いて、かねて、「日本在來の植物は何が故に外來の草花に壓倒せらるゝか」といふ課題を以て短文を募集せられましたが、應募者が至て少數だといふことでありますから、今日、此席上に於いて、お集りの方々に御高見を發表して頂かうと存じて居りました。然るに、まづ私の意見を述べるやうにとの仰でありましたから、兎に角、簡單に私の考を申上げて、諸君の御批評を願ふ事に致しました。

右の課題に關しては、昨年四月の誌上に、城さんが「花の未來」と題して詳しく書いて居られます。その大要は、今日西洋の草花が流行して居るが、それは何故に流行するに至つたのであらうか、また、その結果、今後「花」といふ言葉は櫻の別名でなくなつて、新たに日本人に持囃される或る植物の名稱になりはしまいか、もしさう云ふ事があるとすれば、「花」と云ふ言葉は將來如何なる植物の專らにす

る名稱となるであらうか、といふのであつたやうに思ひます。

何故に西洋花が流行するかといふに就きましては、私の見る所を以てしますと、園藝そのもの〻性質から考へて見ますれば能く理解し得られると思ふのです。私共の關係して居ります文學の研究する目的が那邊にあるかは略ぼ理解し得られますが、園藝の目的は果して那邊にあるでありませうかといふことには全くの素人で、未だ園藝の書物は一冊も讀んで見たことがないと言ふても差支ない程ですから、從つて園藝の趣味を能く理解して居りませんのであります。併し、嘗て試みにイギリスの百科全書に就いて園藝の事の書いてある處を讀んで見たことがありましたが、園藝は利益又は粧飾を目的とし、植物の原理を知りそれを栽培するに在りといふことが書いてあつたやうに記憶してをります。成程立派な定義だと思ひますが、甚だ廣き意味の定義であつて、主として花といふ材料に制限を生じ、主として人工媒助といふ方法に制限を生じて居る今日の所謂園藝は、私は心理的に考へる必要があらうと思ひます。小說のうちに探偵小說といふものがありますが、それに依つて或は此種の園藝の原理を說明し得られるではなからうかと思ふのであります。彼の探偵小說は珍らしいものを求めるといふ心、心理學でいふ好奇心より成つて居るものでありますが、今日いふ園藝の意義がまたさうであらうと思ひます。卽ち、美しい珍らしいものを求めるといふのが園藝の中心になりまして、なるたけ目馴れないものを尋ねる、さうしてその要求を滿足させるため、美しい目馴れない西洋植物が流行しまして、それが日本在來の草花を壓倒するに至つたのは寧ろ當り前で、決して怪しむに足らぬ事と自分では考へて居ります。

さう申したならば、城さんなどからは、かういふ反問をなさるでありませう。卽ち、美しい珍らしい花といふだけなれば、何も外來のものに限るまい、日本の在來のものにも中々珍らしいものがある、その方に向つても目的は十分に達せられるではないかと謂ふ質問が起るでありませう。併し、これは流行といふことを考へて見たならば直ぐに解ることゝ思ひます。一體、流行は淺く廣く發達するものでありまして、園藝三昧に入つて居る人を標準とする事は出來ませぬ。かの福壽草とか櫻草とか乃至高山植物とか植物中の或る種類を專門として居られる方々の如きは所謂三昧に入られたもので、これは常人の企て及ぶ所でありませぬ、全く流行の範圍を離れたものと申さなければならぬのです。流行は多數の人が爲し得る範圍に屬して居るものでありまして、それに向つて深山を跋涉し異花珍草を探れといふ事は望み得べからざる所と思ひます。一般の人は美しい珍らしい而も求めて容易く得られるものを要求するといふのが普通で、丁度外國から來た草花はこれらを滿足させることが出來る所から大に流行するのでありませう。約めて云へば、十の七分は珍らしいものを求めるといふ好奇心から起つて、殘る三分ばかりは歐米文明の感化を受けるに伴つてそれで西洋花の流行を見るに至つたのであらうと思ふのです。

前申した通り、西洋の草花が流行するに就いて、こゝに一つの問題が起つて來ようといふ事です。即ち、今日では、「花」と申せば櫻を指す事に定まつて居りますが、將來、西洋花が流行の結果、或はそのうちの或るものが「花」といふ言葉を代表するやうになりはしまいかといふ疑問であります。私の考では、我國に於いて花といふ言葉はどうしても櫻を離れることが出來まいと思ひます。御承知の通り、世界各國に於いてもそれ〴〵その國の國華がありまして、何れもその國と離すべからざる傳說と歷史とを有て居ります。イングランドではバラを以て國華として居ります。バラはもとギリシアに於いて珍重されて居りましたが、ギリシア思想がイングランドへ這入つて來て、エリザベス時代にはバラが花の王と仰がるゝに至りまして、それ以來今日まで動かぬやうになりました。スコットランドではアザミを國華として居ります。それは極古い話で、デンマーク人がスコットランドに侵入した際に、頻りに間牒を放つてスコットランド軍の動靜を覗つて居りましたが、その間牒の一人がアザミを踏んで悲鳴を擧げた爲めに、間牒の忍んで居る事が發覺して、スコットランド人はデンマーク人を逆擊して、大にこれを打破りました。その傳說が本となつて、アザミはスコットランドから離すことの出來ないものとなりました。アイルランドはオランダゲンゲを國華として居ります。これは極昔セントパトリックが路傍にあるオランダゲンゲを採つて三位一體の敎を說きましたので、宗敎上から離すべからざる關係を生ずるに至つたのであります。フランスではユリを國華として居りますこのユリは今

ふユリであるか或はハナシャウブであるか一寸分明でありません。その起源に就いては、フランス人が王の即位のしらせに王を楯の上に載せて王の手には笏の代りにハナシャウブを持たせたと云ふ傳說もありますし、又極の昔からフランスの旗章に三つの金のユリを用ゐたと云ふ傳說もあります。この三つの金のユリと云ふのも矢張三位一體を示したもので、非常に古い傳說であります。ドイツの國華ヤグルマは、プロシア王のルイゼといふ人が非常に好きであつた爲めに、ブランデンブルヒ家に於いては特別にこの花を好みましたが、今日尙依然として續いて居るのであります。エジプトのハス、これは非常に古いから能く解りませんが、ニル河に多く生じて居るからでもありませう。その他、ギリシアのオリーブ、イタリアのヒナギク、ペルーのヒマハリ等、いづれも皆古い時代から種々の傳說があります。

右の通り、國華にはそれ〴〵各種の傳說や歷史がありまして、園藝趣味の珍らしい新らしいものを求めるのとは全く趣を異にして居ります。即ち、一國を代表する花と園藝趣味とは、性質に於いて、一方は動的で、一方は靜的で、相反して兩立すべからざるものであらうと思ふのです。要するに、一國を代表する花は最も珍しくないものであることは明であります。それ故に、日本に於いても、二千餘年の歷史を乘て來、新しい花を代表國華とすることは到底出來ないことゝ思はれます。

これに就いては、國を代表する國華のないアメリカ合衆國の事を考へて見るのが宜しからうと思ひま

す。合衆國でも國華を定めようとしまして頻りに說を鬪はせましたが、或ものは、オダマキは瓣が十三で色も白紅青の三つで國旗と似通つて居るし、花の咲くのも丁度七月の祝祭日頃ではあるし、殊にアメリカの到る處にあるから、最もこの花が適當であらうと申しますし、或るものは、ヒッジグサは清い美しい花であり、アメリカ全體に行渡つて居るから、この花を用ふるがよからうと申しますし、曰く何、曰く何と頻りに說を鬪はせました。これ等の人々の說を比較して考へて、國華は少くとも次の五條件を具備して居るものでなければならないといふ結論に到着したのです。

第一、國華はその國の到る處に見ることの出來るものであるべきこと。

第二、國華はその國の到る處にあると共にまた何れの人も目睹して知り得るものであるべきこと。

第三、その植物の一種たりとも外國の國華として用ひられて居てはならぬこと。

第四、その國の祭やその他の場合に修飾に用ひ得る花でなければならぬこと。

第五、その國民の特性の何ものかを代表し得る花でなければならぬこと。

右の五箇條は何れの國華と雖もこれを具へて居ります。我國の櫻も矢張り此範疇を脫することは出來ませぬ。

諸君、「花」といふたばかりで一部の園藝家に合點の行く程持囃される花が生ずるやうになるかも知れませぬ、否、「花」といふばかりで園藝家全體に合點の行く程持囃される花が生ずるやうになるかも知れませぬ。併し、「花」といふたばかりで國民全體に合點の行く程持囃されるものは「國華」より外にはありませぬ、既に生じたる國華より外にはありませぬ。言はゞ苦の生へた庭の石で、愈々古くなつて愈々其美を增します。人工媒助で新しきを求め、高山探險で珍らしきを覓むる趣味とは風馬牛であらうと信じます。一寸思ふところを申上げました。

（三十九、一）

忘れられたる冬の鳥

酷く寒じた上に雪の降つた爲めでもあらうか、夫れ程弱くはない自分が不圖風邪にやられたので、差しあたり一日勤めを缺くことにして其儘起き上らずに寢床に就いて居た。長子は雪達摩つくるからと元氣能く草履袋を肩に幼稚園に行つて仕舞ひ、仲と季はお雪何とか歌ひながら乳母に連れられてこれも出て行つて仕舞つたので、家の內が何日になく靜かになつて珍らしく色々な冬の鳥の聲が聞える。今日に限つて斯う冬の鳥の聲がするのでもなからうけれど、勤めする身の悲しさは朝出たつきり夕にならねば家に戻れず、偶々の日曜大祭日は早朝からの訪問客か、左なくば座敷の上の東鄕大山戰爭ごつこで、ついぞ暢び〳〵した生活をしたことがない。風邪のお蔭で自然の聲に接觸する機會があるとすれば、風邪も何とやら難有いやうな心持ちがする。

カア、カアと太い強い聲がする、屋根の上だなと思ふ。チーチク、チーチクと左の方で囀づる、後架

のさきの竹籔だなと氣が付く。ピツと一聲は近く、またピツと一聲は遠く、やがてツピーチヨと元氣能く嬉れしさうな聲が動かないで聞える、隣の大きな欅の頂きに停まつたのだなと推測する。すると今度は右の窓の椿のところでチヨツチヨツ、チヨツチヨツと低い澁い而かも活潑な聲が上つたり下つたりし始める、翼を開閉して調子を取りながら焦茶の小さな體を右に左に搖ぶつて居る姿が眼さきにちらつく。

詩人を放射して自然に描いて見ると、形ちは遂に鳥になつて仕舞ふ。鳥は微頭徹尾詩人の象徴である。頭の大きな、肺の強い、身の輕い、歌を歌つて、飛び廻つて、制限を知らない。邦土を經とし時代を緯として眺めて見ると、より多く運動に感應する詩人もあるやうに思へるし、より多く音調に感應する詩人もあるやうに思へるし、また多くは兩方に等しく感應する詩人もあるやうに思へるが、鳥と詩人は影の形に伴ふと一般到底離せない心持ちになる。そう感じておいて自分が非常な力をもつて居る心持ちになつて、兩手を延して大平洋方面と大西洋方面とに季節を變化させる爲めに緩つくりと左右運動を一遍やつて見る。手につれて氣候が順次に變化する。同時に鳥が移動する。鶯を送つて杜鵑を迎へる歌人や、スカイラークを背にしてナイチンゲールを仰ぐ詩人などの姿が現はれる。面白い。今度は世紀を變化させる爲めに、又緩つくりと上下運動を一遍やつて見る。手につれて時代が順次に推移する。鷲の羽搏きや鷹の睨める眼が漸く衰えて柳の下で燕が宙返へりしたり草叢の間からポポリンクが囀つたりし始める。面白い。繰返してみやうと兩手を左右運動に仕直す途端に、ツーと涼しい澄んだ細い鋭い聲が遠くから耳を貫いたので、ハツと思つて來たなと考へる間もなく手は其儘頭のさきの障子を五寸ばかり啓けて仕舞つた。

空は拭うたやうに名殘りなく晴れきつて朝日の輝いて居ることも其所等あたりの工合で分るが、一面の白い物づくめで作り上げた銀世界は、宛然半夜のうちに北國に生れたやうな氣がする。椽先の七尺程の梅三本、固く緊つた蕾のまゝ黒ずんだ幹の上に眞綿を被つて居る。其さきの丈高い一本の厚朴は赤裸の白裝束で立つて居るが、下で横に枝を延した松は例の鋭い針を包みきれない趣きがある。半綠半白の五六の樅を同伴にして最高の栗を境に、自分の見すぼらしい庭は西片町に名高き廣い〳〵隣りの庭に開けるのであるが、眼を轉ずる間もなく、其なかの小高い松林から空を横に縫つて一つ、二つ續いて二つ、合せて五羽の珍客が勢よく最初栗の枝に止つて、或るものは直に飛下して松に移り梅に移つた。沈痛と鳴いたやうに聞える澄みに澄んだ一聲をきつかけに、鶯茶の背中を眞向きに見せて松毬の端に逆立ちしたものがある。積もる雪はパラパラと散つて細い小枝は鳥と共に上下に搖れる、搖られながら鳥は食物を貪めたらしい、何か啄むと直ぐ喉黒の頬白の可愛らしい頭を横に向けて梅に向つた。放たれた小枝は故位に跳ね返つて復た白い花を五六片降らすと、新客を迎へる爲めでもあらうか、既に梅を宿の二羽の主人いづれかゞ痛快と甲走つた、痛快々と和するのは厚朴のものである。する

と栗に居殘りの一羽が椽さきに舞下る、續いて厚朴のが釣瓶落しに眞似をした。げら〳〵〳〵、と大笑ひするやうな聲を片身に梅から立上つて屋後の見えない大櫻の枝に移つた一羽がある。殘りの二羽が之に續いた。地上の二羽もまた之に續いた。すると見えない高い處でツツチーツツチーツツと鳴く。嬉れしいことしいこと　言ふやうである。痛快が聞える。痛快痛快が聞える。沈痛が聞える。げら〳〵げらも聞える。しかし間もなく細い鋭い聲になつたので多分向ひの家の槻に引越したのであらうと推測した。

凡そ一分間ばかり、譬へば面白い夢でも見て居るやうに、氷雪を恐れない、寒氣を生命とする、斯の輕快な活潑な四十雀に見惚れて居たが、吾れ知らず大きな嚏を三ッ續けたのに驚いて、ハタと戸を閉ぢ寢床に潜り込んだけれども、しかし相變らず四十雀のことは思はずには居られない。

何故に四十雀は忘れられて居るのであらう、何故に歌人は四十雀を嫌ふて居るのであらう、昔の人は四十からと言ふように聞いた爲めに、此鳥の名にもなり此鳥の不景氣な面白くないことを言ふやうにも思ふたでありらう。昔の人は四十九日の餅が食ひたいと言ふやうに聞いた爲めに、人間の死亡を希ふ不吉極まる鳥のやうに思ふであらう。しかし是れは鶯が法法華經とお題目唱へるやうに聞いたと同格で、佛敎に惑溺した昔の人が感じた迄のことであつて、今の人が斯う聞かなければならぬ道理は少しもない。鳥の歌を意味あらしむるは人間の心情の活らきであつて、鳥の關與するところでない。シレーのスカイラークはシェレー自身を歌つて居るのでスカイラークを歌ふて居るのではない。キーツのナイチンゲールはキーツ自身を歌うて居るのでナイチンゲールを歌うて居るのではない。人がシェレーやキーツのこゝろもちにならなければ鐘太鼓で世界を探したつて、そのやうなスカイラークやナイチンゲールが居る筈のものではない。科學者の眼にこそ天地自然のものが一定の法則に司配せられて不動の固形體となつて居ても、其法則に司配せられて居る固形體を更らに溶解して如何やうな新しい創造物にもなし得るのが歌人の特權であつて見れば、此創造物が歌人の觀念の發達と共にまた種種の形態をとつて進まなければならぬ筈であることは改めて言ふ迄もないことゝ思ふ。材料は一個であつて、其材料を使用する詩情が種々の變態をとるのは毫も不思議でない。してみれば、一部の歌人で昔の詩情と同樣な感じをするのがあるにもせよ、現日本といふ諸種の觀念の大に發達變遷しつゝある活社會に居て、昔の詩情と異なる感じをする歌人が一人もないといふことは甚だ不思議と評さなければならぬ。

或人は四十雀の音調が惡いから歌に這入らないといふ。是れも甚だ道理のない申譯に過ぎぬ。水仙の音調が惡いから歌に這入らないといふ時代もあつたが、何日のまにか今日は平氣で這入つて來て居る。音調の問題には餘程先入の陋固な偏見が伴つて居ることを認めねばならぬ。よし百歩を讓つて四十雀の音調が惡いと許しても、此音調を入れないで、なほ能く四十雀を歌ひ得るものであることを知らな

ければなるまい。ホイットマンのモッキング、バードは如何して歌つてあるか。難者の再誦すべきところである。

自然は普遍であるといふと同一の意味に於て、また頗る特殊であると言はなければならぬ。天地自然のないところもないが、同一の天地自然のあるところもまた無い。未曾有の國民交際の繁劇につれて手取り早い歌人は牛羊の逍遙する景色を夢想して牧者の笛を吹奏して見たり、北海道に旅行しなければ見られない花を事もなげに東京近在に叢生するやうな調子で歌つて居る。これも穴勝ち排斥すべきことではないが、日本到るところにあつて古往今來歌人の目擊し得る天地自然物を材料として新たなる詩情を表白するのが最良の手段であつて、また最良の徑路ではあるまいか。

表白の機關を缺いて居る爲めに、僅かに他人の表白に依つて自からの欝を散せんとする風邪に惱める一人の憐むべき兒は、寢床の中で至大至剛の英氣を吸入せんが爲めに、書架からエマソン集を下ろして其有名な四十雀の歌を三誦しなければならない。日本の歌壇は何日獨立するであらうか。

（三十九・二）

國際と評論と小說と

官私大學の文學を專門に修むる學生の人から奈何いふ問題を研究して見たら可からうかといふ相談に與かる事が屢次あります。これらの學生の方は、如何なる問題が文學に提出せられてあるかといふ理窟の方は解釋が出來ても、其選擇に迷はれるといふ譯で私などに相談が懸かるのでありましやう。で私はこれらの學生の方に自分の過去を顧みて、實に同情に堪えない次第であります。試みに現代の日本文學界を一瞥して見ると、種々の複雜な題目が澤山に諸方に轉つて居ますので、單に其内の尤も目立つものだけを茲に擧げて見るだけでも、其研究範圍の廣い事と、複雜な事は、眼が眩むかと思はれる位です。例へば坪内先生の歌劇に熱衷せられて居る工合、隨つて其取材が傳說に走つて行くし、加之能樂の研究も、音曲の研究も、相聯關して必要に逼られて來る。で其内の傳說の研究だけでも、主としてたづさはつて見やうと思ふと、芳賀博士の最も趣味を置かれて居るらしく思はれる傳說神話の研究、例へば七福神の話とか、丙午の話などの如く、支那文學にも、引續では印度文學にも聯關を持たなければならず。さうすれば印度文學には、印度の古詩がおもしろいといふて譯し出される新體詩家もあらうし、釋迦を基礎として長篇の新體詩を作つて見やうといふ新體詩家も出て居るし、いづれ遠からぬ間に、リグ、ヴエダも頭を擧げて來るだらうと思はれる。全體歌劇には神話傳說がおもしろ味があるらしく、ワグネルの材料にも多く使はれて來ましたから、さすればスカンヂナビヤのサガスとエッダッスにも向いて行くだらうし、シャンソン、ド、ローランも、ニーベルンゲン、リードも、シイッドも材料にするものが遠からず出て來やうと思はれる。プロミシュースだつて棄てゝは置きますまい。それから片山學士の天才と男女の紹介だつて、繰返し捲き返して今後論ぜられる問題でありましやう。

天才は作家の人格を最も極端まで發揮したものであります、隨つて文學の存在する限りは、これに伴ふ人格問題の注意を惹くべき筈であらう。男女の議論であつても同じ事で、現に教育界の問題として學生の交際論なども聯關して諸方に大分意見が現はれて居りまするから、小説の主として描くべき男女性格の研究などは、文學界で永久絶縁する譯にはいかぬものである。其他の問題を列擧して行けば、これ日も足らずといふ事になりましやう、實に百花燎亂の有樣である。西洋に時間的の問題として次第に相繼承して來たものが、日本に空間的として一時に亂發して居るのであります。此大勢は未だ日本に入らない種類や、既に入つて居ても斷片或は粗笨のものであるから、更に飜つて完全に精細に紹介されべき性質のものを顧れば、今後幾何學的に增進して行く傾向が勿論ある譯であります。全體文學といふものは、かくあるべき筈のものであつて、古きを棄て新しきを求めるといふ種類の學問と趣きを異にして居るのであります。文學の源泉滾々として有史以前の神話傳説から發し、あらゆる形式と觀念と相集つて一條の大なる川を作つて居るので、現代の文學は過去の文學の中に生息して居るし、過去の作家は現代の作家に姿を更へて現はれて居るので、齊しく人生は如何なるものかといふ事を、民族を異にし邦土を異にし境遇を異にして幾多の辛き經驗と觀察と考慮とでこれを窮め、文學といふ形式でこれを表白して居る限りは、過去に於て斷片的のものが、現代に於て從深く、從廣くなり、從多く充實して行くといふ相違があるばかりで、同じく關はつて居るところのものが、過去の野蠻人も現在の文明人も少しも變る所がない。隨つて希臘の神話にも支那の傳説にも斷片的でありながら吾人の感想の一部が現はれて居るし、今日の小説家の描くものであつても印度太古の歌つた所と相照應し、相感應して居る筈のものであれば、文學といふ大海は一生を貫しても我々は其一粟を窮める事が出來るばかりで、徒らに新しきを競ひ、團衆の丈比べで爭つても仕方がないものである。それ故一種の趣味の人々がいくらも群居するので、目新しいものだけ好しいといふ彼の初松魚趣味の人や、蝶鰡趣味の人もあろうし、或は亦た唯一箇所に執着して牡蠣の趣味のやうなものや、蛭の趣味のやうなものがあらうといふもので、唯々文學の司宰の腹の廣いのに驚嘆して居り、自然の懐の大きいのに感服するのみである。さて期ういふやうに百花燎亂の時代であれば、悠久の精神に依憑しながら、時代精神に侵染される大なる思想家は世界の思潮、東西の觀念の融合を考へて居りましやうけれども、普通一般の人々、例へば本誌を講讀される一部の讀者のやうなものは、大體の趨勢が解らないで、唯日本の現代の一部の新聞や雜誌のみ讀んで居られる普通讀者は、かの理窟が解つて選擇に迷はれて居る學生とは遙かに趣を異にして其理窟さへ飲み込めないものであるから、本誌のやうな性質のものでは、可成普通讀者を導いて行くといふ方針に由られるのが當然で、これから考へても宙外君の時文も、どちらかといへば幾分が其方針に賴られて居るやうであるし、抱月君の文藝見聞欄の話振りも、亦た同じ方針に據られてあるやうに思はれます。周到なる注意であつて何人も同一の方針に做ひたいと思ひ

ます。偖、現代の文學に於て著しく目立つものが作物の形式の中では、小說及評論で、作家を影響する要素の中では民族分子相互の感化影響、換言すれば國際關係であります。これは作物の取れる形式としては最新のものであるし、作家に與ふる影響分子としては亦最新のものであるから、今後も一般讀者が從多く逢遭し、隨つて從多く說明が要るかと思ひます。全體民族の間の智識的の方面の接觸があつて、其結實の奈何いふものかを研究するのは、今後の大なる頭腦が文明史に由つて十分に取扱つて行くであらうと思ひますが、文學の方面では此關係が、例へば電光のやうに一民族から他民族へと傳達したる跡が明瞭に見える。マシュー、アーノルドのいふたやうに西洋の方では、希臘希伯來の影響が絶へず繰返し繰返して、西洋の民心を動かしめ力あらしめて居るので、ヨブとエスキラスとは、永久に西洋の民心を司配して、一時は忘れられるやうになつても亦た復活したりして居る。此民族影響を單に英吉利だけで言つてもチョーサーが以太利の感化を受けた。次に佛蘭西の感化を受けて居るし、それから三百年經て亦た以太利の大なる感化を受け、其後コールリヂやカアライルで獨逸の影響を受けて居るし、更に西洋で所謂東洋諸邦の印度波斯などが、ギョーテの時代よりエドワード、フィッゼラルドに及んで大作物が種々飜譯されて居ります。例へば波斯の敘事詩のシャーネーメー、印度の有名な敘事詩の數々、從つて英語を通じてカーリダーサ、オーマルカイヤーム、フイルドウシ、ハフヒズ、サーデヰー其他の東洋詩人は、英吉利の書物箱で容易に見る事が出來る。さて斯ういふ次第であるから英語の影響を非常に受けつゝある現代日本は、獨佛露語などは捨て置て、英語だけでも今後何程の文學が進入して來て、何程の民族影響を蒙むるやうになるか、容易に豫想することが出來かねる次第であります。

國際の盛んなる事は今日ほど盛んなる時代は未だ曾て無いのであつて、昔他國の文學の飜譯せられた頃は本國に於ては既に古典の部に入れられたる頃であるに、今日に於ては早刻羽を生じて世界を飛び廻つて來るから、英語に飜譯せられて居るものだけでも、獨逸、佛蘭西は勿論の事、西班牙、以太利、露西亞、スカンヂナビヤにも及び、單に英語を通じて讀み得る英國以外の小說家等だけでも、ド、モーバッサン●ドウデー●ブールヂエー●デ、アーラールコーン●パウル、ハイゼ●ヴアールデス●スピールハーゲン●ブヨルンソン●ヨーカイ●リイ●トルストーイ●シエンキウツチ●ドストエフスキー●ゴーゴル●ツルゲネーフ●ゾラ、何程あるか却々容易に擧げる事が出來ないほどである。さアさうなつて來ると、現に日本の現代の文學で見る如くに、是等の作家は到る處飜譯せられて、日本現代の民心に隱約の裏に非常な影響を與へて居るのである。尤も或者は未熟の好奇心を充すため、知的感情の追求だけに過ぎないであらうけれども、決して皮相の敎育家が學校の敎場で多寡を括つて度外視して居るやうなものではないので、日本の精神界に如何なる感化影響を與へ、日本に何の位な民族の精神を司配するやうになるかは、餘程注意すべき事と思はれる。私は一時非常に心配して、世の識者が大に注意

しなければならないと思ふた事もあつたが、今は民族は歴史的に深き根底があるもので、國民交際が何程自由に發達しても、一民族の實際の最も重要なる特性を如何ともすること能はざるものだらうといふ信仰が、稍芽を出し始めて居ますから昔ほどな心配は仕ませんが、而しさら〳〵等閑視すべきものでないといふ事を認めざるを得ないのです。何程か文學のある部門で少し深く調べて見ると、根本の相違は却々相融合し悪いもので、文學が局處的の模型や色彩を棄てるといふ意味で、普遍的のものになる事が出來ないといふ觀念を得て居ります。而し文明の從多く進歩したる影響を我々が受けて、自覺は進んで來るし、表白の豐富と自由とは愈よ多くなつて來ますから、日本民族の特性が根本に轉覆しないまでも、植物の生長するプリンシプルのやうな外界の思想に適應して次第に發達して行く所は、隨分注目しなければならぬ。

文學の形式としての評論は、近代のレッシング●ヘルデル●ウキンケルマン●ギョーテ●コールリッヂ●カアライル●サントブーブ●アーノルド●エマソン●アミール●ローエル●ステツドマン等に依て全く昔の意味の奴隷的態度を蟬脫して、立派なる一の形式となつたのであります。即ち文學を全體として研究して、多數の國民の精神と文學に於て、根蔕深き人心の結合といふ事が解り、其表白の一機關として存する文學が、亦た一つの結合をして居るものだと飲み込めるし、文學を博く概括して各國民族の氣心も天賦の才も遺傳も特性も漸く明瞭になり、大なる作物の背後には其民族の經驗や事實や其發達

變化して行つた經路も、亦た階段も漸次解つて來たのです。斯ういふ譯であるから何故に或る時代には戲曲が盛んであるか、亦た他の時代には何故に叙情詩が盛んであるかの理由も飲み込めて、昔のやうに個々の書物を斷片的に調べて比較判斷するやうなものでなくして、人間に大なる活動の一として の文學を深く廣く測量をして、人間の精神の最も完全なる一表白と看做すやうになつたのであります。無論評論の始めは所謂本文批評といふのでありまするが、これだけでは必要といふ事はあるが、奴隷的服從的の範圍は未だ脫かれる事が出來ない。即ち本文批評は寧ろ學問といふ方の側で、後に發達して來て居る審美批評の主人的獨立的のものに及ぶ譯の筈のものではない。如何なる大作物にせよ審美批評の進化に對して十分の材料となる事は出來ないもので、イリヤッドや、デイヴアイン、コメデーやなどが評論の力を發達させたのは事實だけれども夫れで完全無缺の材料にはなれない。アリストートルの材料にした希臘の舊劇だけでは今日のイブセンや、マーテルリンクの新劇に對する暗示を與へない。夫れ故に今日の所謂十分なる審美批評を獨立したる一形式として調べるに當つては非常に廣く深く、單に評論文學史及び評論文學といふものを特別に研究するだけでも、一生の中に出來るか出來ぬかも不明な位である。戲曲だけではなく其他の文學の形式に關係しても亦同樣の譯で、一文學形式の眞の意義を解釋するのには、全文學の形式を眼中に置かなければならず、一國民の力を理解せんには、他國民の力をも適當に理解せねばならなくなつて來る。例へば英吉利の詩及びスコットラン

ドの歴史を知らなくとも、一叙情詩人のバーンスは、讀んでおもしろいといふ事は出來やうが、此詩人の勢力の源泉を解釋し、一面に於ける彼の創作の意味を解釋し、一面に於ける彼の優れたる點と、他方面に於ける彼の制限ある點とを解釋しやうとすれば、評論家は此詩人をスコットランドの生活といふ事に聯關させ、更に進めば世界の叙情詩一般に關係させて見なければならなくなる筈で、恰度一片の美しい花が天地を結合せしめて居るやうに、一個の詩人が民族も歴史も氣候も藝術も人間も包括して居る譯であります。斯ういふ廣義の研究は實に近世の賜物であつて、ウキンケルマンの希臘に於けるが如く、彫刻家たるフヰデアス、詩人たるソフォクリーズ、思想家たるプレトー、政治家たるペリクリーズの特性を、希臘の彫刻家に見たるが如く、或はヘルデルが聖書とシエキスピーヤと俗謠とを調べて、歴史及び文學に同一の精神を以て對したるが如きものであります。此樣に文學に深遠なる意味が加はつて來たならば、アリストートルやロンヂヤイナスより近くサントブーブなどをも知らなければならないから、今日の評論界といふものは餘程大なる學問も要るし、明晰なる頭腦も要とするので、一夜作りの間に合せの時文などで誤魔化して濟まさうといふ浮薄な態度は容すべからざる、寧ろ罪惡であらうと思はれる。評論文學は必ず專門として、此方面の歴史的位地を理解するやうに努めなければならないし、單に一評論家の雜著を一瞥しただけで、之れに依憑して今の新聞や雜誌で所謂氣焰などを吐くのは餘程愼まなければならないかと思はれて來て居ます。此注意は無論、自他共に一樣に採りたいものだと思ふので、私はゲーレーの評論に關する泰西諸國の許多の書籍を瞥見する毎に、愈よ此感が加つて來るやうに思ひます。

文學の形式の中の最も新しいモ一つの小說なるものは、物語ものや傳記ものが文學の起原より存して居たとは違つて、最近に發達して來たものであるのです。實際の人生を描いて、性格を寫さうとする努力が要らなければ、小說といふものは發達すべきものではない。西洋では例へば以太利のボツカチオの如きは純正の空想界に代ゆるに、實際世界のもの若くは實際世界に有り得べき範圍のものを以てしたけれども、依然として小說といふべからずして、物語といはなければならないので、何となれば夫れに興味を起す所は事件の方で人物の方でないからであります。近世小說の動作及び性格を現はす小說こそ、實際の生活を研究して深い興味を生じ、社會の堅くなつて居るといふ感が加はつて生じたもので、これが眞正の小說、即ち今日盛んに行はれて居る小說なのであります。何故に今日だけ斯う小說が盛んであるかといふのは、吾人相互の關係及び義務に對して、昔の人よりも深く且新しく意識したためで、我々は我々以外の他人に大なる義務責任を有し、他人は亦我々に對して大なる影響を與へるといふ事を深く意識したがためでありまして、文學の一形式として小說の起つたのは情實の意識の明瞭なる起原と全く時日を符合して居るのであります。我々は常に許多の關係の間に起臥して居るといふ感を脫却することが出來ない。今日小說の主人公は人生の秘密に單獨に煩悶して死ぬのでなく、

民間のために勉め努めるのであります。小説は常に社會に於る人間を描寫するので、個性は他人に接觸して絶えず發展して行くものであります。夫れ故に男女諸共に社會の條件に出逢つて、個人の問題は何時でも無數の社會的影響を認識しなければならず、小説の中の大なる人物の必至的境遇は絶えず社會が供給するので、自己一人が供給するのではない故に、大なる小説の衝動は人間の性格を作つて行く總ての物に有する趣味の深い事であります。人生夫れ自身の描寫となりたる小説は、人生を奥底まで貫通したもので、これほど道徳的のものはないと筈で、御都合の宜いやうに作つて置く眞實でないものは、深い意味で道徳的と稱すべきものではありません。小説が社會的感念の明瞭なるに從つて、漸く重要なるものとなつて、眞面目に寫し出した人生は吾人に取つて最も吾人を感せしめるものになつて來て、吾々は人先づ生としてそれが眞實であるといふ事を認めない限りは、遂にこれを藝術としても亦た認めないやうに進んで來ました。社會の到る所盡く小説家の研究を經ないものはなくなつて、社會的問題の研究が科學として求めて居るものを、小説家は藝術のものとして求めて居るのであります。ヂッケンスや、サッカレーや、ジョーヂエリオット・ブヨルンソン・ツルゲネーフ・バルザック・スピールハーゲン・ゾラ・ドーデー・イプセン等は決して戯談をいつて居るのではない、決して遊んで諳言をいつて居るのではない。彼等の眼に觸れた事實は、或は時としては嫌な感じのするものもありましやうけれども、人生の意味があるが故に、我々も亦た深く考察せなければならない價値の有る事實で、これら作家の着目したる所に相違があつても、一として深き洞察の力で人生に接觸し、人生を說明せざるものはない。さてこれらの小説が前に述べたる如く、英語を傳はつて日本現代に滔天の勢ひで日增しに侵入して來るのみならず、日本從來の戯作者から進んで忠實なる人生の批評眼を具へて眞面目に人生を描寫せんと試みる今日の作家も、相加はつて小説界に立たれて居る以上は、我々が讀むべき接觸すべき廣い深い人生の描寫が、一生讀み盡しても亦た讀み盡せない程殖えて來やうと思ふ。人生は廣くなる深くなる、社會は複雜になる。小説の分量は增加し進歩する事があつても、決して減退すべき筈のものではなくつて、今後も依然として今日の如く、最も著しい作物の形態として存することであらうと思はれる。我々は此間に立つて如何しても短き一生の間に選擇して讀んで行かねばいけないので、何人の何といふ題號の小説は其人の代表的作物であるか、どれ〳〵の作家が其時代の風俗觀念を書き出して居るとかいふ事を、既に調べて居る學者がありますから、さういふものに依憑して讀むといふ事をしなければ、全然八幡知らずに入つたやうに感じるのであろうと思ふ。

なほ小説に關しては、更に言ひ殘した事も尠くないし、今後漸く發達せんとする歌劇なる一つの形にも言及したい事もありますが、あまりに徒に長くのみなりますから、眞の一般讀者のために、學者の方には暫く眼を眠つて貰つて置きまして、解り切つた事について、茲に一席の談話をいたしました次第であります。

（三十九、四）

病戀愛

大低ローラン説の病戀愛を讀了された頃であらうから紹介をとの注文でありますが、そう右から左へと容易に準備も出來ませず、夫に西洋殊に佛蘭西あたりでは此種の研究は仲々盛んでありまして研究の大家は數多く研究の徑路は複雜で吾々素人の推測する程簡單なものではありませぬ、社會の機運は兩性問題の眞摯なる研究を日々に必要として來ましたから專門家の手を經て詳細に紹介されましやうし、また研究もなされるでありましやう、玆に擧げまするのは無論心理的生理的研究と銘打つ程のものではありませぬ、一回讀切りの目的には自然簡單なものでなければなりませぬから、フィンク説の戀愛論の一節として戀愛と氣違との類似の三點を擧げ且つ次に病戀愛に就いて略述して見ましやう。

天才と氣違と似たところがあると言へる詩人等は、また戀愛と氣違と似たところがあるといふことを發見しました、戀愛は一種の氣違であるといふ觀念は既に古るくプレトーからありますので、少壯の男性美を崇拜することは氣違じみた不合理の人間の理性を失つたことだと言ふて居ります、總ての愛情を病氣と見立てゝ居りまするストイック派は戀愛を重い病氣として居ります、それから近世詩にも同一の見立方は數多ありまして現に沙翁の文句にもチラホラ見えて居ります。

一體斯く詩人等の騒げに感じたところに眞理の基礎がありますので、今日精神病のお醫者さんは昔のやうに患者を暗室に監禁したり鞭撻を加へたりはしませぬ、精神病患者は頭腦の病氣と見做されて研究も分類もされた上に衞生や治療の原則に準じて取扱ひを受けて居ります、精神病學に採用されて居る分類を戀愛の徴候に比較對照して見ると、氣違と戀愛とが主として次の三點に於て相互に類似して居ることが分ります。

抑も〳〵氣違の人が自己の想像の生む幻影を外界に描くには幻覺と錯覺とに依りまするが、幻覺といふのは想像が架空に創作して外界には之れに相當するものも乃至之れらしく思はしめるものもないのであります、幻覺に惱む患者は空處を凝視して或は朋友を視或は魔物を視ます、而かも其朋友や魔物は手以て觸れ得べき實在物のやうに明晰に見えるのですが、是れは患者が心の眼に描き出すのです、錯覺といふのは之れと異にして外界には錯覺の原因たるべき實在物がありますが、病める想像は其物を誤解して外界の實物と内界の幻影と殆んど類似が無い程になりまして、錯覺に惱む患者は蠟燭を視て太陽と考へ足音を聽て雷鳴と思ふのです、丁度是れは戀愛中の人が自分の戀ひ慕ふ相手のものを、實際は夫れ程でもない平々凡々の人であるのに、楊妃衣通姫のやうに美しく業平丹次郎のやうに優しいと考へ、色々の秀でたる性質を具備して居ると思ふと同樣ではありませぬか。

それから氣違の極めて普通な形式に被害妄想といふのがあります、之れに惱む患者は何人も盡く己れを注意して居るやうに思ひ、己れを訝しく怪しむで居るやうに思ひ、甚だしきは己れに害を與へんと

して居るやうに思ふ、或僧侶が之れを惱むでからは自己以外の總ての僧侶が徒黨を組みて自己を祈り殺す企圖があると考へて身親ら寺々に行つて他の僧侶の言句を聽いたところが、隱約の裡、機徹の間に果して自己を祈り殺す企圖が現はれて居るやうに思ひ、手紙を管長其他の當路者に送つて罪惡の報告をなし、彼等にして依然として改むることなくむば正當防禦上止むを得ざるが故に彼等の身の奇禍を招ねくあるべしとの威し文句を用ゐたのです、パスカルの言ふた辭に「戀する時は人悉く之を知るが如くに思ふ」"Quand nous aimons nous imaginons que tout le monde s'en aperçoit"—Pascal. といふのがありますが、一體戀愛中の人は自己の秘密を窺知するに相違ないと感ずる、斷えず斯樣に掛念して居るものであるから大抵は遂に知られて仕舞ふのです、それから嫉妬の念にかられて毛程のつまらぬことを薄情の證據にしたり、外の人に空世辭をなしたのを戀の仇敵に考へたり、微笑を向うの人にしたから心變りの爲めだなどゝする類が數多ありますが、斯うして見ると戀人は先きの僧侶と何處に違ふところがありますか、單に僧侶の場合よりも戀人の場合の方が病める想像の常態に立ち歸へることの容易といふより外に差違はないではありませぬか。

それから戀愛の人と氣違の人とは憂鬱の頃には共に寂しいところを好みます、氣違の人は日となく夜となく頭腦のなかにある一の觀念のことのみに氣を受られて四圍の事物には平然として動かずに獨坐して居ります、癲狂院を訪問すると癲狂の患者が自由にしてある處では各々他を顧みず獨り寂しい場

所を探す樣子を氣付かぬ者はありますまい、しかし如何程氣違の人が孤獨を喜んでも、彼の戀愛の詩人バーンスが其情人と共に羽翼を擴げて此浮世を飛び去つて天空の彼方に唯だ兩人丈で樂しき日を暮らしたい、引力の法則以外に出で〻星辰の間を逍遙し自ら湧き出て〻くる歌に託して相互の思ひを語り合ひたいなどゝいふ大袈裟な孤獨を考付くには至りますまい。

斯うして見ると、氣違の錯覺には戀愛の誇張傾向に似たところがあり、氣違の被害妄想には戀愛の嫉妬を偲ばせるところがあり、氣違の孤獨には戀愛の排他双棲を思はしめるところがあります。

歷史を披ひて西洋の男性が女性に對して鄭重慇懃な行狀が極端まで走つた跡を讀むと氣違に近い點が數多ありまして、例せばムーアの所言に依れば雅典で希臘の一少女を戀ひ慕へる詩人バイロンは希臘に行はれる慇懃を示す一行爲として自己の短劍で自己の胸上に疵をつけたとしてありまするし、メモアール、シュール、レスパーニュの著者マダーム、ドーノアの所言に依れば、十八世紀の始めの西班牙では、女性を伴ふ時に男性の腕の下に女性の腕を取るを失禮として、西班牙式上衣の寬濶なるを腕の周圍に捲き纏つて其臂の上に女性の腕を載せたとしてありまするが、殊に中世紀の騎士等の行爲の氣違じみたことの數々あるうちに下の如きは甚だ可笑しき一例でありましやう、十二世紀のトルバドールでピール、ヴイダルといふのは戀人の名がローバで狼の意味であるが故に其機嫌をとる考で狼の皮を被つて自ら狼になり澄まし、狼の吠える聲を出しながら山中に這入つた、すると羊番の犬共は眞の

狠が來たと思ふから寄つて集まつて辛い目に遇せたといふことであります。

一體戀愛の特徴は何に限らず顯著になつてくると時として癲狂院を想起させるものです、平々凡々の男が平々凡々の嫁を格外に自慢する工合は天下の將軍也と巢鴨で意張る蘆原將軍と同じく可笑い、當人同志の相惚は勿論、親類緣者の得心づくにも關せず、嫌がる嫁を無理に婿が捉へて行く假りの形式が今日も數多の國にありまして羞恥を示す型になつて居りますが、此習慣の起原を知らぬ人々には全然氣違と擇ぶ所がありますまい。

是れ迄述べ來つた一般類似の外に實際の氣違であつて病戀愛といふ眞正の精神病があります、ハムモンド醫の言ふところに依りますと病戀愛に惱むで居る氣違の女性は其戀愛を一人に限らないで男性全體を嘆賞して何人にも結婚申込をする、斯ふいふ患者を病院に入れて置くと、看護人にも醫者にも乃至は男性の氣違にも秋波を注いだり微笑を漏らしたりして戀愛に恒久の性質を缺き、甲から乙へと氣移りする鹽梅が洵に容易で又理由が極めて輕少ださうです、或る患者がハムモンドに向つて「妾はね、——醫士さんに岡惚れして居るのですがね、彼の方は昨日遲く此室に來たのですもの、それで今は貴方に惚れちまつたわ、これから始終來つしやいな、ね、ね、宜いでしやう」と話して居るうちに院長が見えたら患者は早速「あらまあ、斯の情夫は何だつて斯う暫らく來なかつたの」と大聲で叫んだ。フォン、クラフトエービング敎授は其有名なる著書精神病學中に病戀愛を概括して下記の如く言ふて居ります、「社會の地位に於て自己より必ず高い異性の者に自己のみが特に戀ひ慕れると妄想するのが病戀愛の根本始原である、それで其人に對する患者の戀愛はロマンチックであるが全然所謂プレトー式戀愛であることは注意する價値がある、此點に於いては西班牙のセルヴアンテスが鈍機翁物語で打擊した昔時の騎士を想起せしめる、（中略）斯かる患者は向うの人の顏付身振は悉く意義があつて自己に對しての應答だと推測する、自制は急に喪失して、つまらぬ些細な事も戀しいとの符號、近寄れとの勸誘だと思ふ、他人に關する新聞廣告さへ思ふ人からの音信と想像する、終には幻覺が起つて患者は戀人と談話をする、錯覺も加勢に來て他人の談話に自己の戀愛事件を聽く想ひをする、自惚れに昂心して嬉れしく感ずる、（中略）最後に患者は妄想に相應する行動を始める爲めに噴飯の種子となつて社會に放任して置くことが出來ず、止むを得ず癲狂院に入れるやうになる」。（三十九、六）

夏季の休暇と自然文學

毎年夏季の休暇になると都下の諸雜誌が自然に關する事柄若くは自然文學に關する事柄を說く傾向がある。其意味を考へると都下に於ける甚が憫然な我々の狀態を說明して居るやうであつて、春夏秋冬を問はず自然は常に吾人の周圍に存在して居るのに、學問をして居る學生は衣食を需むる資本の學問をして居つて自然を忘れて居るし、社會に立つて居る人は現に衣食を求むる戰爭に從事して居て、全

く自然を抛擲して居るために、僅に夏季の休暇になつて、幾分か餘裕を得ると共に、始めて自然の方に眼を注けるために、斯ういふ現象が起つて來るのである。實に都門の黄塵萬丈の間に營々として蠢動して居る吾人は、田舍の人の想像する事の出來ない程に、自然の懐を離れて居るのであります。現に自分の如きは自分の目的の上に於て幾分か自然に接觸して見やうといふ心懸けを有つて居り、公務の餘暇には研究して見やうと思つて居る身でさへ、内外の俗事で到底思ふやうにも出來ず、例へば今年などは勤務先きの廣い庭に梅櫻或はクロヴァー、蒲公英などの姿は見へて居たが水が無いために今以て蛙の一聲も聞て居らない。初春の頃鶯は屢次自分の庭に訪れて來たが五月の中浣に戸田の櫻草を見に行つて一度雲雀の聲を聞いただけて、後にも前にも二度と繰り返して居ない。梅雨の頃の時鳥は去年一度も聞かなかつたから、今年は尚更覺束ないと思ふ。金魚賣の姿はちらほら見へるが、釣竿の浮子が沈んで竿のしなう心持は棄にしたくもする事が出來ない。松林の香も嗅げず岩を噛む波の崩るゝ音も今年は今以て知らない。斯ういふ憫れな境遇に居ると、常時もいつも田舍に居た幼い時の事が思ほれるので、山雀を鼠に取られて泣た事や、兎追ひに行つて雪の中の寒かつた事や、山から蘭を掘つて來て庭に植ゑて見た事や、庭先の小川の岸の所に白い花を見せて居た虎耳草の風情や、或は淀河踦躅の蔭から出て來た蛇が墓を呑んで腹の膨れたおもかげなど、取りとめもなく思ひ出されて來ると、今のやうな情ない境遇に此儘自分は死んで仕舞うのかと、何とやら寂しいやうな凄いやうな氣がしないでもない。全體都の人が自然を語り自然文學を說て他人に教へる資格などは毛頭あるものでない。若し銀座通りの二階でもつて天然の美を說き、或は圖書舘の窓から自然文學を語るやうな人があるならば、それは虚欺であつて、したがつて他人がこれに由て感奮するとは毫も思へない。それ故に自分のやうなものが此問題を他人に薦めるといふ資格は、無論ないものと思つて貰はなければならぬ。乍併都門を離れる事の出來ない憫むべき境遇に居りながら、幾分でも自然は忘れたくない學んで見たいと思ふ人は、必ず自分のみでないと信じて居りますから、斯ういふ人々が毎年夏期の休暇に迨んで、初めて自然問題に接觸する機會を得た曉に、研究の實驗から收獲し得た相互の感想を語り合ふのは、相互に便益する所があると信ずる。さういふ願望で自分は表題のやうな問題を談話して見たいのであります。

全體自然に對して我々の感情は那う働くものであるか、これは少し說明が要ると思ふ。近頃は青年の男女學生等が綠日に往つて花卉を買つて來て机に載せたり、富貴の人が藝者買の金を溫室や盆栽の樂みに向けたり、或は代議士連が鐵砲を擔いで近縣の山野に遊獵したり、或は砲兵工廠の職工が偶々の休日に日比谷公園の庭を飾つて居る花見に出かけたりなどする風習が次第に多くなつて來た傾向がある。而しながらこれらはいづれも純粹の自然を愛する感情とはいへない、自然其儘の姿に最も高い滿足を得、自然其物をうれしく感じ、唯獨り自然を嘆美し崇拜して居ても、何かしら自然といふものが

自分とは相感應して居るやうな心持ちになつて居る人が世の中に果して幾人ありましやうか。此自然は見る人の心次第で或は徹頭徹尾美しい面白いパノラマのやうにもなりまするし、或は寂しいやうな沈靜な消極の慰藉を與へる事にもなりましやうし、或ほ亦た溫いやうな活動する積極の興奮を與ふることにもなりましやうが、いづれにせよ主人たる我と客たる自然と相感應し相默契して敢て人間仲間の語る朋友がなくても少しも寂寞を感じない程まで進んで居る感情の働き、斯ふいふ感情が自然に對しての純粹の感情で、斯ういふ感情の表白が純粹の自然文學といふものであります。

自然に對する感情には發達の次第があります。偖、通例の人間であれば如何なる時代にも、亦た如何なる年齡の時でも、自然に全然無關係である沒交涉であるといふ事は到底出來るものでない、自然は何等かの興味を惹起するのである。而して其興味の發達はそれ〴〵次第があります。先づ第一階段は人間の感覺が唯心持ちの良い時、例へば銀行員が事務所を出て濠端の軟風に當つたり、職工が暗い建物から顏を出して輝く日の光りを受けたりする時、斯ういふ場合は唯慣として不定に我々の感覺が一般に心持ちが良いといふだけで、幾分か滿足を自然に對して得て居りますが、未だ自然を問題として觀察して見たりしやうといふまでには發達して居らない。若し自然に興味が出るならば必ず觀察記載するといふ方向を取つて進まなければならないのが我々の性質である。殊に暴風雨や、寒い日だの、夜の闇などは、此場合には寧ろ嫌ふものになつて居る。それから第二階段に進みますと、第一階段のものと共に存在し得るものではあるが、自然のある特殊の一部分の利益方面を選んで滿足する時、言ひ直せば人間の勞力を要れないで人世を快樂にするものを求むる時、例へば汗が流れた時に木蔭を選んで休む場合、山路を步いて清き小川や透徹るやうな清水の傍に立寄る場合、いづれも吾人に特殊の利益ある方面を求めて滿足するのであります。第三階段は前の二のものゝ次ぎに起つて來る場合であります。即ち人間の手で以て耕耘した土地や、人面には前の二ツのものゝ次ぎに起つて來る場合であります。即ち人間の手で以て培養した秋の收穫や、すべて混沌たる荒れたる自然を秩序ある柔順なものにした場合、即ち農業は土地との戰爭であるが、其戰爭が終つて征服せられたる土地が戰勝者たる吾人に貢獻するのを樂む所。別言すれば人間の力の象徵を樂む所、此場合は自然に對する感情が稍々知識的に働きます。此階段は上古より今日まで中々盛んであつて、殊に人間を中心として人間の努力を優視する職業や、時代や、民族に顯著であります、然し是れは利益といふ事と離れないから、此樣な狹少の觀念や感情の續く限りは高尙な程度ではありません。第四階段は純粹な自然感情でありまして、自然其物を愛して他に何物をも求めない、自然を考へるばかりで一種の自由な快感を生ずる場合で媒介として利益なるものが無く、自然其物が直接の目的になる場合、善の如くに、眞の如くに、人格の如くに、神の如くに滿足を與へる場合、斯ういふ快感は文明が進んで自然を對手の日々鬪爭を終らした後に起るので、衣食足つて後に此强烈なる自然感情が現はれて來ます。此樣な純粹な自然感情は愈よ進んで精細

に自然を觀察し記載して見やうとする心持ちが出て來て、愈よ自然を觀察し記載するに從つて、亦た愈よ益す此自然感情を補育し助長するやうになつて來るのです。斯ういふ高尚な純粹な自然感にも種々階級がありますので、我々の注意を集注する方面の種類に從つて、香ひのやうな全然覺感的のものと、色や形や音や稍知識的活動が交つて來るものと、尙自然全體に亘つて廣く大なる綜合が行はれる塲合などゝ出て來やうと思ひます。此塲合に於いて注意の向け方が如何でもあらうとも、自然其ものゝ姿を其儘に嬉れしく感ずるに止まつてまた他を顧みない個人若しくは民族があります。性情の趣くところ素より然るべき筈であつて、美觀界の活動としては他に對して何等の遜色なきのみならず、寧ろ反つて一層忠實なる美の觀察者、研究者、發見者たる資格を具備する恰好な境遇に在るものと評し得やうかとも思はれる。然しながら外界の自然を如何やうに精細に記述し觀察しても客觀的である間は、一番美しい畫も依然として吾人の外に立つて居るものゝやうに思つて、吾人は自然と何等かの關係を開きたいといふ主觀的な働きが始めたくなり、また始めざるを得ない性情の個人若しくは民族があります。別言すれば自然といふ大なる力が吾人の心に浸入して、十分な滿足を感じるのでありまして最も少し言ひ直して見ると我より大なる或る力、其力は寂しい慰藉を與へるか、或は活動する興奮を與へるかは解らないが兎に角自然全體を主觀に化する美的といふよりも寧ろ哲學的とが宗教的とかいふべき大なる空想が入つて來る塲合でありまして近世の文學に於て自然文學の最も發達したものとして、西洋文學界に重視せられるものであります。しかしながら邦土民族の關係から直ちに此間に輕重の價値を定めるは輕忽に失しましようし、殊に西洋だけでもビーゼ教授の所言の如く一神教が凡神教傾向に走つた十九世紀自然美感を考察して更らに凡神教が日本に及ぼした跡を見なば何等かの新しい大問題を暗示するのではなからうか。自然美感の比較研究者は目今面白い要路に立つて居るのであります。以上述べました自然感情の四階段は或は共存したり、或は單獨に働らいたりして個人々々でそれ〴〵差異もありまするし、また歷史上或る國民を盡く其第何階段に適用すべきものであるかといふ事は、直ぐには行はれないかも知れませんが、然しながら國民性として概括して人間に及ぼした自然の影響を多少概論し得られないこともないです。抑も〳〵各民族は各自獨得の同化する主義があり道があります。何故に斯かる獨得の主義があるかは誰人も說明することが出來る筈のものでなく、唯だ既存の事實として認承するのみでありますが、如何に同化したかといふ徑路は歷史の教ゆるところでありますから、自然感情が働いて自然文學を構成した跡を見るには、適用する民族と適用さるゝ自然とを調べて働反働の相互影響の徑路を見なければなりませぬ。人間は自然の影響を到底脫却する事が出來ないので、ナイルの河が溢れて豐饒な土地を作る埃及や、露西亞の單調な廣漠たる原野や、希臘海岸の碧をなす海と晴々して居る空や、英吉利の霧の深い天と草の青々して居る原野や、黃河濁浪を擧けて柳楊獨り散る支那大陸や、山紫に水明く松青く砂白き吾國

や、交々其文學に特徴を印して居ります。シ、リーのシイオクリタス英吉利のウオルズウオルスも、亞米利加のエマソンも唐の李杜も日本の西行芭蕉も、自然に對する其心的態度の差異や注意を惹起する自然現象の差異に從つて各自差異がありまする。最も古い西洋神話は神の思想を反映して神の生命を漲すやういひ、古代の東洋は自然現象の徑路即ち種を蒔き花が咲き實が結ばる事に於て、或は春となり秋となつて變化する事に於て其意味の深い不思議な所に思ひを凝らし、希臘は鉛敏な美感を有つて自然の變化を美しく鏡のやうに寫し、中世紀は自然に對する人間の美的意義を消滅し、近世に及んで自然に興味を有し初めたるものは伊太利のペトラルクで、英吉利に於ては始めて詩人グレーの手紙に初ります。ヘブライの自然感情はヨブ記を以て代表されたるものとして居りまして、後世の文學にかゝる崇高なる文學は見る事が出來ないといふ事になつて居りますが、寧ろ自然を觀察するのでなくして神を見るといふ方が主になりまして、雨や、暴風雨や、風や、雲やの絶えず動いて山の姿が屢次現はれる趣きに比較したらよささうです。即ち自然は全く神の中に沒入せられて了つて、神の思想を表象する道具になつて、自然は第二流の位地に退却せしめられて、自然が問題にならずして神の取扱ふ道具に自然が取扱はれて了ふ。自然を神より分離して而も尙何か知らぬ或る大なる力が、消極的の慰藉、積極的の興奮を與へる自然に現はれて居る美を示すのは、ヘブライ以來の西洋近世文學が行つた所であります。希臘は自然界に人間の考へを容れて、人間と共に自然が働いて居りますが、人間の

やうな意志や感情の制限せられたる種類のもの、或は人間よりも少し大きな意志や感情も容れましたが、自然の美しい所だけ優視して自然の恐ろしい所は手を付けないやうに態と後景に隱して置く、自然を熟知し觀察はしたが人間の背景に自然を用ゐて居ります。人間を主としたるところは自然迄も人間のやうになります。希臘の一番古るいホーマーには自然は實際のものであるが第二流に使はれ、後世のシイオクリタスは自然の美しい優美な所に注目したが、表面の美しい所だけを摘み取つてそれより一歩を進めない。今日の大なる自然文學といはれるものは、それ以上の景色が入つて來てをるのであります。中世紀の自然を棄てたる時代を經過して十四世紀の終りに始めてペトラルクが、其頃までは恐れて上らない山に上つて自然の美を嘆賞したる所に、初めて自然の美觀が動き出し始めるのです。人が凡そ歷史的に自然感の發達を研究して見やうと思ひまするとなかゝ大なる事業になりますが、これ程面白い研究も餘り多くはありますまい。

我々が都門に於て自然に接觸し、自然文學を讀んで見やうとするには隨分困難があります。自分は此方面に多少力を注いで見た經驗がありまするから、其困難の次第を話して見ましやう。先つ第一に自然其物の研究を行つて自然物に親しくならうとしまするのに、手初めとして自然物を細かく調査する必要が出て來ます。此目的は他日の生きて居る實際の自然界に親しくなる方便に過ぎないのでありますが、死んで居る個々のものを調査するのには、植物や動物をも日本を問はず、支那、印度、波斯、

埃及、歐羅巴および亞米利加に渉つて、自然文學に現はれて來る自然物を知らなければならないので小石川の植物園や、都門の花戸や、上野の博物館や、動物園、大學の動物標本室などに通つて見なければならぬ。それで何所に往つても調べて見やうと思ふと材料が非常に足らない、文學的からいふ標本の集め方の不滿足な點が多い。例へば上野の博物館は標本の選擇及び標本の說明が行はれて居らない、疑問點が付して其儘捨てゝあるが數多ある、紐育の綴字さへ違つて居る、ハンミングバードの小さな可愛らしい姿の見えるのは嬉しいが、雀が二種とは如何したものだ、蛙のところに亞米利加のブル、フロッグ二匹と日本のヒキガヘル二匹とアマガヘル二匹で、これで如何して吾々の目的たる研究に沿ふことが出來やう。誠にお話にならない。最高學府の理科大學標本室でも箱の中に押合つて同種のものがゴロ〳〵したり、または望みのものが無つたりして同一の酷評を與へる事が出來る。さては動物園など猶更の事である、あの園中に一人のコルニッシが居ない。せめて政府で完全なる一個の動物園或は標本室を作らなければ殆んど我々が望むべくして、尙時機の尙早を感せざるを得ない。小石川の植物園でも事毎に自分の豫期と異つて不滿足であつたから松村先生や其他の方々に文學上からの希望を幾度も述べました。例せば數ある花守のうちで花の開閉期を一年の溫度に關係させて統計を作つたものがない。それから第二に日本に於て日本及び支那の自然物を說明した都合のよい圖解書が一冊もない。我々は文學的調査の以外に多大の勞力と時間を犧牲にしなければ、今の處自分の研究をする事が出來ない。卻て歐羅巴、亞米利加、乃至印度のものは、明瞭に彩色繪や寫眞繪で想像する事が出來る亦た說明を聞く事も出來る。結局通俗敎育を目的とする科學者が日本に現はれなければ、矢張時機が尙早と結論するより仕方がない。從つて我々は自由に野外に逍遙しても、中々實際のものが何んといふ自然物であるかも解らない。第三に不便を感ずるのは日本に於る自然文學の按配及び解說の不備である。單に勞力と時間さへ惜まなければ、小學敎員でも出來る有要なる自然文學の材料配列が今まで行はれて居らないので、我々は玆所にも我々に無用の勞力と時間を徒費せねばならぬ、從つて矢張時機尙早の評を與へなければならなくなる。第四に不便を感ずることは外國の自然文學を味うに伴うべき外國風景畫と外國風景寫眞を都合のよい排列にしてある展覽處がない。第五に此度改良された蓄音機第六に色彩に關する古……イヤ、モウ止めやう。不平は何程述べても際限がない。

自然の力を感じ、自然文學を大に味はんと思ふ人は、和漢の自然文學を明瞭に解釋する方法として比較的に西洋文學の自然及び自然文學の研究を藉りて見るが最も良いやうに思ふ。此目的のためには專門としやうと思へば數多の研究すべき部門があるが、專門までに立到らなければ、英語の讀める人は英米近世の自然詩人及び最近に發達して來た自然學者が見たる自然美觀の記事文を讀んで見るがよからうと思ふ。自然詩人の作物に對しては割合に文壇の諸方に見へますが、今日日本の文壇に何等の轉載の榮譽をも蒙らない眞面目な自然觀察者がありますが、其方を少し玆に述べて見ましやう。ホワイト

と云ふ人のセルボーンは時世からいつても先づ初めに讀む位の所でしやうが、自然物が多數載せてあつても記事が乾燥であるから或は日本學生が興味を起さないかも知れない。それなれば後に廻しても よい。ワルトンといふ人のコンプリート、アングラーは釣をする人の讀んで見るものゝみならず、是非これも一度は眼を通すが宜いと思ふ。そして釣の趣味を養ふがよい。リチャード、ヂエッフアリーズといふ人のものが日本の一部分の學生の大に好みさうなものであります、二十年計り前に死んだ人ですが、一番初に其ゼ、ストーリー、オヴ、マイ、ハートを先づ讀んで御覽なさい、其未亡人の集めた論文集も中々おもしろい、ウード、マヂックもチャームがある、此外には廿種位もありましようが追々に讀むが宜いでしよう。一時には兎てもやれませぬ。それからそれと同じ樣に日本人に向うかと思ふのは亞米利加のソーローといふ人のもので、エマソン仲間の人ですから必ず日本の學生に適ひます、これは皆讀まうとするとリヴアーサイド、ライブラリーで三四十圓の書物になりますから、學生はスコット、ライブラリーの中の三種讀む事にするが宜いでしやう。それから今年の二月死んだ英吉利のコルニッシといふ人のものが亦た面白い、彼是十種ばかり書物がありますが、其中のワイルド、イングランド、オヴ、ツデーといふのが一番評判が良い。插繪の一つの魚狗は日本畫家の繪だ。今生きて居る人のヂョン、バアロースは文名擧つて既に三十年になりますから、著書の數が中々有りますが、廉くて其五六種は手にする事が出來ます、遂ひ此頃の作物はウエース、オヴ、ネーチユーアといふので三圓ばかりしますが、此書物では此人の自然觀察から稍々移つて本能などの論を插入して來て居るそうです、此書物は自分に未で到着しませぬ。此他オーヂユボンやノーエルや色々ありますが、それは專門研究者に入用なので、一般學生の人は先づ今述べました書物のいづれかを隨意に選んで、自然觀察者の如何なる者であるか、如何なる意義を自然に對して持つて居るかを參照したならば、大に蒙を啓く所が必ず出て來ると思はれます。昨年頃よりの吾國學校園設置などは西洋の敎育趨勢に倣つたので、今後の靑年に取つて自然觀察及び自然文學に一步近づかしめる進步として、深く喜ぶべき事であります。

（三十九、七）

初夏の草

向陵一帶の地、初夏に入りて將さに靑く黃く白く赤く染まんとす、窓を啓きて、是れ亦吾が庭に移すに堪へたらずやとクローヴアーを指すは——君也、われ仰ぎ見て輕く點頭く。

蝶一つ草を越えて斜に橫ぎりぬ、暈を描く翼は網の如く、急に羽搏ちてさながら身を包める雲に似たり、稍高き草は蝶の足を停め、蝶は草に宿りてわれ漸やく其翼の深紅の斑點を視るを得たり、色彩まことなく美くし、風草を搖りて草蝶の足を離れ、蝶復た舞ひて草を越え、タンポポの黃とクローヴアーの淡紅とドクダミの白とヘビイチゴの赤とに介意せず、名稱は蝶の關與する所にあらずして、蝶の

爲すべきところ一に其深紅の斑點ある翼を渦巻きて目眩き日光を浴び、隨時に動きて隨時に止まるにあれば也。

蝶は其深紅の斑點ある翼を羽搏ち廻りて日光に閃き、時偶々櫻の落葉掻く女の伴へる素足の小供の驅廻るに等し、草を想はず日を想はず生を想はず死を想はず、想はざるが故に幸也、蝶を學びてまた草の名を學ばざるべしと誓ひ、書を高閣に束ねてより既に歳餘、帙上の塵正に堆からん、われ草を褥に此處に坐すべし、深紅の斑點ある翼の蝶はわれを草として頭上を舞越ゆべし、われ考へざるべし、われ想ざるべし、われ生くべし。

丈低きクローヴァーの白と丈高きクローヴァーの淡紅と咲き殘れるタンポポの黄と散り初むるタンポポの冠毛と參差相亂るゝ褥大の地、本館を去る約四尺ばかりの片隅にあり、美しきものゝ意はざる處にあるはなほ善きものゝ意はざる處にあるが如し、憂として庭の一方に野球を飛ばす健兒の素早き眼も流石に此處までには及ばざりけん、王侯の錦繍をも欺くべき程に斯の暖かき光を受けて斯くの如く黄く白く淡紅に織り出でたる草々は折敷きて其生命を攫くに耐えず、莖は毎々として自然を拜めば也、跨がば一歩に足らざらんも、一月之を想ふに餘り、一歳之を憶ふに堪ゆ。

弱き草は弱き枝を擴げ、匍匐して風に攝み去らるゝを避け、強き草は強く繩に沿ひて三尺も高く頭を擧ぐること更らに一尺、對生葉の草、互生葉の草、頂きの扁平なる草、低き草を掩ひて高く垂るゝ草、千草又萬草、連綿として相層重する中を目覺むるばかりに燃え出でたる丈高き數莖は藥物教室の參考庭にある罌粟の花也、罌粟に天資あり、色彩の天資あり、天資あるものは救はる、われ其一部ならんことを希ふ。

草の眞趣を得んと欲せば須らく邊陲の境を探らざるべからず、足の及ぶところ人之を踐み、鎌の及ぶところ人之を刈れば也、草を摘む者は色と形と莖の恰好と蕊の花粉と風の運動とを忘るべからず、摘まれたる草は人と共に室内に入るべし、しかも草の間の風はなほ依然として室外にあり。

（三十九、七）

ヂギターリス、プルプレア

目今諸方に咲いて居つて稍花の好きな連中の願る所となつて居るヂギターリス、プルプレアに就いて西洋の方のことを讀者諸君の參考にまで一寸御話して見ませう。

此花は、歐洲幷に西方亞細亞が本場でありまして、彼地の方では極めて普通な草花の一つです。花の色はプルプレアといふ字が說明して居りまする通りに、英語のパープル、赤紫の淡き色で、皆さんの熟知して居る通りに、鐘形の花の手前の方が濃く後の方が淡く、其上に斑點が際立つて見えて居りまして、四尺乃至六尺五寸程もある一本の莖に簇生して居て、最低部より頂點に向つて次第に開花して

行くのであります。花の色はまゝ橙黄色若くは黄色、時としては白色のもありますが、最も普通のものがブルプレア乃ち淡紅紫のものであります。全體日本の文學は、最もイギリスの文學に負ふ所がありますから、此花に附着する詩想も、イギリス本國より輸入されるが爲めに、從て此花の野生狀態も、イギリスに於ては六月初旬より七月一杯、所によりては八月を通じて九月に及ぶまで、野を飾る花の最も美しき花の一つであります。イギリス全土に殆んど行き渡つて、南端より北端に及ぶまで、まづ見られない處はないといふて差支ないほどであります。全體イギリスといふ處は、花の種類は比較的に少い方でありますが、一種の花の豐富なる點は、世の旅客を驚すほど著しく目立ちます。從て此花の野山に滿ちて野生してボーッと明るくなつて居る時は、畫家の喜んで畫の背景若くは前景に用ゐる所でありまして、旅人が道を歩行いて居る時分には、兩側よりまるで炬火を差出して照らして居るやうに思はれる位です。

此頃の或新聞に、デギターリスを英語の俗名フォックス、グローブ卽ち狐の手套といふ譯語で用ゐてありましたが、何故狐の手套といふ名稱が起りましかに就て少し說明して見ませう。何人も狐の手套といふ意味が、此花に甚だ不思議な聯合だと思はれるでせうが、其實はフォークス、グローブの轉訛した呼名に過ぎないのです。尤も此點に關しては他にも說がありまして、ドイツの植物學者フックスが、千五百四十二年に羅甸の名デギターリスといふ名稱を與へたる爲めに、フックス、グローブといふたものを、轉訛してフォックス、グローブとなつたといふ說もありますが、此方は誤でありませう。何となればフォックス、は十六世紀の人であるのに、フォークス、グローブといふ俗名は、エドワード三世の時代に既に見えて居りますからです。さうして見ると、フォークス、グローブの意味は、昔の英語にフォークはフェアリーの意味に使用してありました。卽ち向の迷信の內にある小さな魔物の此花の中で戲れ遊んだり、或は子供が此花を敲いて音の出るのを小さな魔物フェアリーが怒て逃げ出す時に生ずる聲だと考へた迷信から來て居るのであります。猶名稱の起原に關して、歐洲各國に行はれて居る俗名から演譯したブライオール博士の意見もありますが、煩しいから略して置きます。但し手套は指嵌（ユビハメ）といふても宜しので、寧ろ此方が解し易いかも知れませぬ。オリーヴを集める時に指に嵌める指嵌がありまして、鐘形をして居るので、花の形ちが夫れに似通つて居るために此花の俗名を生じ、此俗名に適合させる爲めに、フックスが羅甸の指といふ文字乃ちデギターリスを根本にして、デギターリスと呼ぶやうになつたのです。此花を元として歌を作りましたいろ〳〵の賦がありますが、最も目立つのがウォルズウォルスの哲學的解釋を附與したる句と、コールリッヂの繪畫的描寫を以てしたるものと二つであります。自然詩人たる前者が花の最低處より次第に頂點に向て秩序ある開花を爲す所に、一の哲學を附與して居りまするし、後者のコールリッヂの方には、雲雀が此植物から飛び立つやうにしてありますが、是は事實上、雲雀

の性質からしてあり得べからざる事でありまして、少くとも繪畫的描寫が一歩滑り外れて眞實を誤まつて居ります。其他の詩句は略します。最後に一つ申上げて置きたい事は、デギターリスは有毒植物だといふことです。

（三十九、七）

オホヒレアザミの傳說

アザミは汎く世界に分布して居りまして、日本文學、支那文學は無論のこと、廣く西洋までも包括して文學上の範圍が廣いために、一場の談話で申上げ兼ねますから、こゝには單にオホヒレアザミの傳說のお話に止めて置きませう。

一口にアザミは蘇國の國華であると申し、蘇國の文學に離すべからざるものゝやうに何人も心得ては居りますが、さて心をとめて幾分か調べて見ますると、蘇國の文學に名高くなつて居るアザミの種類及びその傳說歷史に關しては、精確に斷定を下しにくゝなります。蘇國の農民等はアザミといふ名の下にカルヅーウス及びニークスをも含ませて居りまして、これは立派ではあるし又丈夫でもあるから、ウム即ちオホヒレアザミを指すのだとして居りますが、バルフォーア敎授は異論を唱へて「イングランドには珍是非とも此花に相違ないといふて居りますが、らしくはないけれども、蘇國を本場とするのはあやしい。」といふて居ります。或論者は「カルヅーウス、ヌータンスの頂垂れて居るアザミの方が蘇國の國華である。」といふて居りまするし、又或論者は「處女の唇といふ俗名を有て居る所のカルヅーウス、マリアーヌムの方であらう。」といひますが、このアザミはイングランドに多いけれども、蘇國の方には非常に少くして、只一ところに女王マリーが手づから植ゑたといふ傳說のあるものばかりであります。或論者は又「ニークス、ヘテロフィルス、はカルヅーウス、ヘテロフィルス卽ち哀のアザミといはれて居るところの葉と花の淋しげな色を有つて居るアザミである。」といひますが、このアザミには例の刺がないためにアザミに關する格言「神の保護するものは十分保護せらる。」"Ce que Dieu garde, est bien garde." といふことに合はない。要するにどのアザミと指定するのは、今日に於て誠に困難なる疑問であります。然しながら一方から考へて見ますると、今日科學的の明瞭なる觀察を昔の農夫等の觀察に入れ換へて見るのは、甚だ馬鹿げた事でありまして、私はどのアザミと指定するよりも、いろんなアザミを渾然總稱して居る風に見立てた方が、却て昔の民衆の觀察に合はうかと思ひます。併しながら先づ多數論者の一致して居りまするオホヒレアザミを取つて蘇國の國華とする方にして置きます。それでアザミの種類に關する話は終りまです。

傳說及び歷史に關しても異議紛々で、今日容易に決することは出來ません。傳說には先づ次のやうな事があります。これは昔からの傳說ではありますが、別に證據があるでもないから其儘信ずることも

出來兼ねますが、同時に又排斥すべき議論も立て兼ねます。その傳說といふのは、「むかし〳〵丁抹人が夜中熟睡して居る蘇國の軍勢の陣營に忍び込まうとして、跣足で音をたてずに近寄つたところが、適々一名、過つてアザミの鋭い刺を蹈み、痛さに堪え兼ねて思はず大聲を發したので蘇國人の夢を驚かし、遂に謀が破れて大敗北した。」といふことになつて居ります。當時にあつては、人々の服裝は極めて單純なもので軍服はなかつたにしろ、武士共は戰場に於いて敵味方を區別するために、必ず何かのしるしを帶びて居たらうと相像するのは、不當の相像ではありますまい。それで蘇國人はアザミを擇んでしるしにしたらうと相像するのも、亦決して不當の相像ではありますまい。何となれば單に丈夫であつて且つ夥しく生育して居る植物であるがために、戰場とした荒野に於いても、臨時の急に間に合はすことが容易であらうと思はれるからです。この話で以てアザミのしるしを用ひたといふことがわかりましても、動章を造つたことゝ混同を生じて、歷史的に數多の議論を生じて來ました。ビンカートンに依ると「蘇國でアザミの動章の事は、始めてダンバーといふ詩人の一千五百〇三年に書いたアザミとバラといふ詩の中に見ることが出來る。」といふて居ります。その詩は一千五百〇三年八月三日、ジェームス四世とマーガレット、チユードールとの結婚の節に書いたのであります。此中に著者は「アザミがジェームス四世から選擇されて、帝王の標章たるべしといふた。」としてあります。併しながら多數の歷史家は「アザミの動章を造つたのを、九世紀中の或王樣だ。」といふことにして居ります。

或人は更に又說を立てゝ「フランスのシャールル七世に始まる。」といふて居ります。或人は「ブルボン家の符號である。」として置きます。何にしろ古來の議論を取出したところが明確なる觀念を得ることも出來ず、より又これら及び其他レスレーやサー、バーリス、ニコラスなどの論難を悉く括つても、別にそれ以上の確乎たる根據を有する議論を立てることも出來ないから、アザミの傳說及び歷史に關しては、これらの事柄を列擧するより外に仕方がありません。

アザミの種類及び各國に於けるアザミの野生狀態、若くはアザミの食物として、或は藥物として、或は家畜用材料としてなどのお話に就ては、煩しいからこゝでお話は致しませんが、一つ英語に "Hit me to a thistle." 即ち「アザミに私を縛れ」といふ諺がありますのを說明して置きませう。これは盲人が土地を擇ぶときにいふのでありますが、土地の肥沃なることを吟味するには、根の最も深く侵入する植物の一つたるこのアザミなるものに縛られて見れば、土地の肥沃なることを判斷することが出來る譯です。從つてかゝる諺が生じたのでありますまい。

最後に一つイギリスからオーストラリアに移住した人が携へて行つたために、今日に於てはニューサウス、ウェールスなどには五尺ほどの高さに幾里とも續いて密生して、政府で法律を出してアザミ征伐をしなければならないほどにまで農夫の邪魔になり、從つて農夫に嫌はるゝアザミも、あの毛が飛

んで秋の景色を美しく綺麗にして秋の特色を造るに與つて力あり、且又四月頃の朝に露の滴を帶びた美しいところと、紫色の花が天に向つて蜂を歡迎して居る鹽梅などは、文學的になか〳〵棄てられませぬ、俳句の好材料にならざるを得ない譯であります。言ひ殘したから附け加へて置きますが、オーストラリアに移したアザミは、先に言ひましたカルヅーウス、マリアーヌムの方です。

（三十九、八）

松本信夫氏譯『ツワイス、トールド・テールス』序

譯者松本信夫君は我友松本法學士の令弟也、蒲柳の質、業を高等學校に卒ふること能はずして宿痾の爲めに隻脚を斷ち、後稍〻懈るを待ちて奮つて早稻田に學びしも復成らず、再び去つて遂に肋骨二枚を截る、爾來家門を出づること難く、書齋に閉居して日夕文學と親しむ、文學は君が唯一の慰藉にして實に又君が第二の生命也。

感情を伴はざる正邪の批判は其人に對して毫も眞理と稱し得べからざるが如く、興趣を隨へざる文學の繙讀は個性の訓化に何等の貢獻を以てせず、文學は共鳴を尙び、共鳴は同質を豫想す、譯者の處女作としてホーソーン短話集を擇びたるも亦緣由なきにあらず、孜孜として倦むなくむば、詩聖の靈火譯者の心胸を照らして永く加護を垂るゝ日もあらむ。

僅か一日の長たる故を以て、不學菲才を顧みず、心竊かに微力を盡さむと誓ひしも、稿本完き頃、偶〻机上に山の如く堆積せる答案を調査すべき職責に忙殺せられて餘裕を玆に發見することを能はず、半宵燭を剪つて親しく比較校合し得たるもの前後合せて僅に數篇而已、深く自ら愧づと雖も、しかも既に藤井、渡邊兩兄のあるあり、加之、謹嚴にして率直なる譯者の筆は、曖昧糢糊のうちに一時の僥倖を希はずして、清濁併せ收めて自己の眞相を披瀝するに努めたり、幸にして爬羅剔抉を惜まざる篤學の士あらば譯者の本懷何物か之れに若かむや、人生は眞摯にあり、功名畢竟風塵に値せず。

（三十九、八）

文學上藤袴の將來をトす

諸君の御存知の通り藤袴は日本では、萬葉集の卷の八、三十六頁に出て居ります、山上憶良の秋の七草を歌つた内の一になつた爲に、名高く今日まで、和歌の題にしてをります、しかし文學上に藤袴の過去の事を研究して、どう云ふ所を賞美するかといふ事を深く考へて見ますと、今後の文學上に歌はれる藤袴の位置は、甚だ顯著ならざるものにならうと思はれます。

日本で藤袴をもて囃す樣になつたのは、元は支那の古典並に風俗に習ふたのであります、それで詩經

の中に『彼澤之陂、有蒲與蘭』とあります、此蘭と云ふものが即藤袴に當るので、此時代にこう云ふものを歌つて居るのは、別に美しいからと云ふやうな、文學的の意味は少しもない、それを支那の後世に香のよい蘭と混淆して、詩經の中に蘭を歌ふてあると思ふ人が餘程出てくるやうになりました。すべて時代が後になると文學的の美觀が活動するから、蘭の香の好いことや色の美しいのを、本にして、詩に歌ふのは當然の事です、それ故に支那だけでいふても、詩經に顯はれてをる、藤袴の意味を除いては、美しい所を歌ふ餘地はない筈であつて、文學上に歌はれべきものは、支那に於てさへ、蘭の方が盛になるであらう、日本に於ても亦同じことであらうと思はれます、即藤袴の花が別に好い所があつて弄ばれる譯でもないから自然と人の弄びは、なくなるべき筈なので、今以て秋の七草の一つであるなどいふて、もて囃してゐるのは、要するに、萬葉集の憶良の歌に縛られて居るやうなことに過ぎない。

萬葉以後の歌を調べていつて見ると、藤色の藤と袴との二つに別けて只其名稱を弄んでをる歌だけで、藤袴と云ふものゝ美しい所を歌つてをらぬは云ふまでもなく、歌ふべき美しい所がないからであります、況んや支那、日本を通じて藤袴を乾して軒などに釣つて、其香を賞美したといふ事は、之は歷史に葬むるべきもので、今日の人は非常にもつと優れた香の物を嗅ぐやうになつてをる、そうして見れば袴といふ文字も棄てねばならず、藤色だけが何も藤袴に限る色でもなし、香其物は他の優れたる香に壓倒せられてくるならば、藤袴の和歌の生命は今後、誠に心細いことであらうと思はれます、俳句の方にも亦舊式では袴になぞらへて讀む事が和歌と少しも變らない、して見れば、こう云ふ方面では藤袴の文學的生命も繼いて行くことは餘程困難と思はれる、只一つ、藤袴が今後の文學にも或位置を占めて行くかと思はれる事は、秋の野の寂しさを飾る一つの雜草として歌はれてゆく所に生命はあらうと思はれます、それならば、藤袴丈、特別に重んじなくともよいので、秋の野を飾る野の草は、いろ〳〵あります、只文學と云ふものは、私の信ずる所に依れば、今後の進行する徑路は、理屈つぽいむつかしいことなどを入れないで、自然其ものを、只美しいからと云つて、記載し、觀察して行くやうになるでありませう。

此信念から考へれば、藤袴の秋の野邊に捨てをく事の出來ないのは、外の種々の草をば一草たりとも捨つることの出來ないと同じで、自然界にあるものを、我等人力で左右すべきものでなし、又勝手な意味を附與すべきものでもない、過去の文學に於て藤袴の生命のあつたのは、つまらない或意味を附與して居たからで、其意味を吾人が面白くなく感じ始めるときに藤袴の生命がなくなるので、そういふ、くだらない意味をつけなければ藤袴の將來は依然として、此草の亡びない限りに於て悠久なるものと信じます。

（三十九、九）

田園文學とは何ぞや

田園文學といふ文字と共に、鄉土文學、自然文學などゝ言ふ、一般の讀者には同じ樣に理解されて居り、又此の文字を使用する方の人から言つても、同じやうな意義で、使用して居るが爲めに、往々明瞭な區別を缺いて極めて曖昧な意義を持つて授受されて居るのが、現代の有樣であらうと思ひます。故に田園文學とは如何なるものを主題とした文學であるかといふ事を研究し、併せて其れが文學的立脚地を確定するのが、此談話の目的でありますから、先づ田園生活といふものが、如何なるものであるかを、解剖しなければなりますまいと。私は之れを、田園といふ事と、生活といふ事に分けて、兩方面から、考察して見たいと思ひます。『田園』といふ事を考察するには、これを『自然』と比較して觀なければなりませぬ。田園といふ言葉若しくは文字に依て、我々の頭の中に浮んで來るものは、耕さるゝ田、作らるゝ園などの觀念で、これらの觀念から離れて田園といふ觀念を形づくる事は出來ませぬ。從つて田園は、自然の中の一部分と解釋しなければならなくなる。通例我々が自然といふ意味には、人間の感覺以外に見ゆる天地を示して居まして、現に主として、人間の力の及ばない、或ひは人間の力では左右し得ない、自發的な、自由な自然を意味して居ります。隨つて『自然』なるものゝ中には、非常な深山大澤も入つて來まするし、茫漠たる太洋も入つて來るのですが、『田園』の中にはどうしても、深山大澤乃至太洋の如き大きなものは這入て來ませぬ。かるが故に、田園といふ文字の伴ふ意味は、低い小山や、里の小川や、小さな原野や、それから人間の作る田や畑や、兎に角ランドスケープ的の、餘程平たい、優しい方の感じが伴つて來る方面であります。故に田園文學に於ては、自然文學の骨髓とも言ふ可き自發的自然といふ方面が餘程減却して來て、其の代りに人間の力といふものが大分這入つて來る樣になります。尤も田園の中にても、遠くの高い山を觀ることも有りませうし、涯りなき海を見渡す事もありませうが、それは多く田園の中に身を置いて、之れ等の物を遠方から見るやうな場合なので、田園文學の背景として、高山大原を描き出す事は自由でせうが、一步を轉じて高山大原を主題とするに於ては、其れは既に自然文學の領域に入たもので、これを田園文學と言ふ譯には行きませぬ。隨つて田園生活といふものは山中生活とか海上生活とか言ふものより離れて一種別箇の形を取ることになつて、自然生活の一部分としかなれなくなります。

次ぎに、生活といふ方面から考へますと、田園生活といふ事は、都會生活といふ事と對照して用ゐられて居るやうに思はれます。さすれば煙突から煤を吐いて居る工場は無くなつて、水車の小屋が之れに代り、前垂掛の商人が、鋤鍬を取る農夫と變つて來まするし、生活に狂奔して、『金儲け』と言ふ一事に頭腦の全部を支配せられる事が無くなつて、其の日暮しをするだけで、暇があれば爐邊の閑話や、

鎭守の御祭禮が始まらうといふところになります。其の實田舍だとて矢張り生活問題が苦しいではありませうが、少くとも文學的には餘程長閑な意味が附着して來ます。而すると『利益』といふ感、儲けやうといふ心、換言すれば詩的美的で無い之等の感が減却して來て、儲ける事だの金を作る事だのを離れた、暢び〳〵とした、詩的美的の分子が餘程多く加はつて來る、これが即ち田園生活であります。斯う解剖して見まするに、田園生活の文字は、生活の方面より言へば都會生活に比して詩的美的になつて來まするが『田園』といふ方面より云へば、その詩的美的の箇所も、自然全體の詩的美的なところに比して、著しく範圍が狹ばまり、餘程束縛を受けて來ます。隨つて田園文學の興味は、未成品と言はざるを得なくなります。

然らば田園文學なるものは、爾くけなして了ふ可きものかと考へまするに、我邦今日の狀態のやうに、一國を擧つて實業々々と稱し、只眼中一の富あるのみで其れ以外少しの餘裕もない——言ひ換へれば、人間と云ふ者の活動すべき一の方面、即ち美觀の方面を杜絕して顧みない樣な（此の事は餘程大きな問題として研究す可き事であらうと思ふが）斯かる不具な發達をする場合に於ては、田や畑を作り乍ら俳句の一つもやつて見ようとか、歌の一つもひねつて見ようとか言ふ餘裕をつくるが善いので、人間として又作らざるを得ない理由のものであります。

斯るが故に、此の雜誌の讀者及び編輯者諸君も、此の方面に大に開拓を願ひ度いので、世に油畫があると共に、水彩畫の欲しい理由は、自然文學があると共に、田園文學の無ければならぬ理由に、そつくり似て居らうかと思ひます。

（三九、十一）

家庭における園藝趣味と文藝趣味

近頃園藝雜誌に文藝上のことを掲ぐる傾向がある、家庭において文藝と園藝とを連絡する方法を考へて、世人はこれがよく調和するものと豫想して居るかも知らぬが、この二つの趣味は家庭において決して調和すべき性質のものではない、極端なる文藝趣味と極端なる園藝趣味とは全く正反對の性質を有するものである、今若園藝趣味だけを家庭に加ふるとせば、家庭といふ條件の下に淺薄の園藝となり、若し又文藝趣味を家庭に加ふるとせば、矢張り家庭といふ條件の下に淺薄なる文藝が出來ねばならぬ、淺薄なる園藝趣味と淺薄なる文藝趣味も、共に各讓歩したる兩趣味が家庭の條件のもとに成立つの外はない、例之主人が大に園藝趣味を感する人でも、是を以て直に一家族を滿足せしむるとは出來ない、一家族を滿足せしむるには極々卑近な園藝でなくてはならぬ、文藝趣味も亦之と同じく、主人の味ふ如き深き趣味の文藝は到底老人妻子などが共に味ふことは出來ぬものだと考へらるるのである。

今文藝趣味と園藝趣味との相違せる要點を略言すると、一つの野に咲ける花を見て、園藝家は葉の色を見てまだ艶が足りないとか、或は花が少さくて色も面白くないとか、今少し花を大輪に咲かせて艶

を持たせたいとか、一も二も天然に任せておけぬから人工を加へて親しく養育して見たいと思ふ、そう言ふ考だから自己の庭園に之を栽えてもしきりに改良を試み、何とかして世界稀なる珍花として見たいと心掛ける、そして一朝珍らしく出來上がると自己の物の如くに誇稱して他人に見せびらかすものである、之を換言すると人工を加へて珍奇なるものを造り、自分のものにしたいと云ふ感じが園藝家の心底を解剖すると皆あるのである、反之文藝家は、同一の花に向つて少しも前の如き感じがない、文藝家は野の花の平凡なるものを詠めてそれを滿足してゐる、のみならず珍らしきものは却て忌やな興味を起すものである、故に無論人工を加ふることを欲せず、天然のまゝ自由に發育せしめて置くのを好むのである、又これを自己の物の如くすることをも好まない、寧ろすべての人の共有にして置くことを悦ぶもので、文藝家は即ち天然の儘に放任して凡俗のものを衆と共に詠めて之を樂み、果敢ない人力よりも遙かに大なる天然力を樂み、それにて無限の興味を惹起してゐるのである、故にもし自己の所有に百坪の庭園ありとせば、文藝趣味の主人は百坪丈の野原を切り取つて、その儘自己の庭園に移してそれを天然の一片と見て、非常に滿足して居ることは恰も園藝趣味の主人が、百坪の庭園に最新のダアリヤ、若しくば世上無二の曲りくねりたる松、又は最珍の薔薇の香、其他あらゆる珍奇の花卉盆栽を陳列して樂み居ると同等の趣味を感じて居るのである。

以上述べたる如くであるから若しも文藝趣味の人が花卉の類を庭園に栽うるとしても、極めてありふれたるものを栽ゑ、且つ野原を見る如くに亂雜に籌さへもあつることの出來ざるやうな荒凉たる庭を作る事を却つて好むであらう、此の如くこの二の趣味は、愈々極端に趨れば全く正反對となるのである、乍然人間は皆共通の種々なる趣味が集合して居るものだから、文藝趣味園藝趣味も亦色々な趣味が少しつゝ存するのが、つまり普通の人間である、されば一家庭においても主人は文藝趣味と園藝趣味との各幾分を相混淆折衷したものを作るがよからう、さすれば主人は老人婦女子等と共に趣味を感ずることが出來る程度のものとなるのであるから、園藝趣味と文藝趣味とを合體したものを作るのが肝腎である、そこで余の考としては煙突の煤烟が目の不攝生を來たし、庭といふも僅かにビール箱の二三も並べ得るに過ぎない、憐れな東京などの生活では、花卉さへも碌々見て樂むことの出來ない境遇に何人も滿足は出來ないから、極めてありふれたる花卉類にても少許の空地に勝手に列栽して、之を見て樂み且つ之れをば題となしてこゝにこゝをれうたにてもよろしいから、極淺薄な俳句和歌でもつくつて樂むが上分別であらう、之れ即ち園藝趣味と文藝趣味とが双方相讓歩して、乾燥無味なる家庭に生氣を與へて、和氣靄々の溫き家庭を作ることが出來るのである、かくして爲に精神的方面にも亦幾多の利益あることは言ふを俟たないであらう。

園藝趣味について花卉類のことのみ述べたが、一口に園藝といふも果實蔬菜花卉盆栽其他全體の庭園があるが、果實野菜の如きは食ふて旨からうといふ方で、見て樂むといふ方でないから文藝趣味とは

全く縁の遠きものだと信ずる故に、此處には花卉盆栽其他全體の庭園は文藝趣味に最近の關係あるものとして大體述べたのである、誤解を防ぐために一言を添ふ。（四十、一）

東亞の第一芳

これから春になりますと初春の心持をかすかにほのめかすものがいくらもありますが、中についてまづ自然界の中の植物に取つて、殊に植物の中の花のさく木若しくは草を取つて、それが東亞の方面ではドーいふものを擇らんで居るかと云ふこと、並にその物に伴ふ心持の種類及び起原、發達に關しては、或他の雜誌の記者の方に一席談として極めてザッでありましたが既に申上げたことがありますから、今回は寧ろ從來の詩觀よりはなれて、自分が如何に考へるかといふことを臆面なく述べて見たいと思ひます。

凡べて詩人文士の心持を具體的に云ひ表はして見やうと思ひますと、其心持を云ひ表はすに都合のよい姿や形を具へて居る外界のものを擇らんで、來るのでありますが、外界の自然物が此の如く選擇せられる場合に於て、外界の自然物その物はよしや多少の變化はあるにしましても、先比較的に固定不變の姿形を具へて居りまするが、是れに對する詩人文士の心持は幾樣にも變化し、變遷し、絶えず其範圍や性質をかへて行きます、若し詩人文士の心持の方で多少の變化をしましても、その變化しない以前の場合に選擇したる自然物でなほ間にあう時には、依然としてそのものを用ゐることが出來ますけれども、その物で間にあはないほど變化したならば、勢ひ外の物を擇らんで現在の心持を具體的に云ひあらはさなければならないことゝなつて來ます、假令へて云へば、何か心持がコー重い感じを起すやうな場合ならば、外界の石と云ふものを持て來て、今の心持の重いのは石のやうだといふことができます、設しもまた心持が重いと共に何か堅いやうな心持であるならば、矢張り依然として石を用ひて自分の心持の堅いのは石のやうだといふことができます、併しながら重い堅いやうな心持が段々開けて輕くなつて來た場合には、石のやうに輕いとは云へないからして外のもの即ち羽のやうに輕いとは云はねばならなくなつて來る、この觀方で初春の心持をかすかにほのめかす初春の植物の中の、特に花の開く植物について一應觀察して見たいと思ひます、先づ東亞に於ては支那も及び支那文學の影響を受けて居る日本に於ても、この場合に梅を用ゐて居りました、今も又用ゐて居ます、梅は木本でありまして材は紅色を帶びたる緻密な堅實な如何にも、丈夫そうに見え、加之、枝の末は針のやうに多少尖りて寒氣を毫も恐れない心持を委托するのは最も都合のよい姿になつて居ります、其眞白な五片の花瓣も、その花期の長い健やかな具合も、またその花の所謂る幽香馥郁と云ふあんばいなども古來詩人文士の歌へる如くに其れ〳〵の心持を委託し得るものでありますが、寒氣といふ梅に對して妨害をする力を毫末も恐怖せずして、嚴然たる態度で抵抗する心持の外に、抵抗する梅の力を更に弱くする

と共に妨害する寒氣の力を更らに強くして、言ひなほせば、格闘の時間を長く且つ猛烈にして後に始めて希望の光を見たいといふ心持が起きないとも限らない、十分の格闘の後に始めて成功すれば之に對する興味は又一段と加はることは、假令へば芝居を見ても容易に解する、抵抗すべき主人公の意志の力と及び反主人即ち主人公を迫害すべき境遇の力とが相格闘する場合に、主人公の力が強くして反主人公の力が容易に征服せらるゝ場合よりも、主人公の力が比較的に弱くして反主人公の力が比較的に強きがために隨て格闘が長く繼續し劇げしく行はるゝ場合の方が、却て一段の興味を加へるものである、初春の心持を知らせる花の場合に於きましても、東亞の梅と云ふべきところを、梅以外の更らに一層優しい可憐な草本にして見たい心もちの生ずる場合があるは正當だらうと思はれます。

それから東京附近の寒氣の威力は、東北地方の寒氣の威力よりも弱くして感せしむる原因が種々ある其うちで、東京では常綠葉の植物がいくらもあつて、冬とは云ひながら少しも冬枯れのなさけない趣きが引立たずに到るところ青々として居まして之を掩ひ隱くすところの氷雪が幾んどない、若しも冬の寒いさびしい所に常綠葉を少なくして、また更に氷雪で包んでしまつたならば或は少くとも處々に氷雪を遺して其儘にしめたらば、微動せんとする初春を迫害して動かすまいとする心持が大層多く加はつて來るわけです、斯のやうに迫害する力を更に一段強くさせて且つ之れに抵抗する力を更に一層弱くさせて見やうとするには、堅實なる木本をすてゝ可憐なる草本を擇んで、うすさむいそよ風に戰慄へながら氷雪の間から弱々しげな小花を開いてほのかに萌して來る初春の力をやさしく現はすことにしなければならぬ、注文通りのものがないやうであるが兎も角も東亞では梅を棄てゝ仕舞へば文學上からは支那ならば春蘭日本ならば福壽草にうつらなければならぬ、尤も支那では春蘭に初春の心持を託することが比較的少ないのでありますが、花曆の文句「正月蘭薰始芳」に隨つて春蘭に初春を委託し得るものと考へて一應觀察して見ましやう。

春蘭の香も花も葉も餘ほどやさしくなつて來るが、即ち言ひなほせば梅よりも春蘭の方が自分の目的には適當であるが、葉の色が濃きに失して強く、花の色もくどくつて淡々しくない、日本の福壽草になつて來ますと、よしや文學界に行はれる舊來の詩想を蟬脫して福壽と云ふ意味などを西の海へさらりと投げすてたとしても姿態がつくねて流れのなかの河骨と一般に言はゞ力士が坐つて居るやうな風に、力がありすぎて可憐の趣きを表はさないのみならず、花も色が黃に失して白若しくは淡黃の氷雪と調和するものに比してはるかに及ばない、如何してもこれでは自分の目的にかなはない、寧ろ雪割草のやうなものが、一番自分の目的にかなふが、何分にも山野で人々が絕へず逢遭する花でないからして、此場合に於ても自由に用ゐることが出來ない、先づ東亞に於ては此點に於いて眞に不充分でありまして冬季の水仙を半ば引き下して此重任を分擔せしむるか、若しくは植物以外の或る自然物を探すか、二者其一に求めなければ外に方法がありますまい、若し雪之花の生育が西洋首宿のやうな結果を

日本で生するならば餘程面白うなりますが、これは到底駄目でしやう。（四十、一）

世界の松と松の世界

世界の松は約七十種、空間的に横に邦土を歩いて行くと、北半球の亞歐米に跨つて、熱帶の高山に些少ばかり、温帶寒帶を通じて高きところは峰に連り低きところは磯に沿ひ、砂原さへも笑しげに、同族親しく相擁して亭々空を摩す四五百呎の喬木より蜿々地を這ひ藪と見らるゝもの迄も、各地自然の景觀におのづから美れ〳〵の美觀を恣にして居るけれども、文化の起伏に偏頗があつて、趣味の進化に結び付いたる詩觀を充分に搆成するものが多くない。

姑らく赤松黒松の間に涵養されたる日本の詩眼を放つて觀察するに、北米太平洋岸地方の砂糖松は五葉にして三百呎に達すれども高さ三分二迄枝がなく唯眞直に屹立するばかりであるから、十數段も稍垂れ勝に横木のついたる電話の柱其儘青葉を茂らせたやうな感じがする、同地方の沿海岸から洛機山脈迄の銀松は三葉にして二百呎に達し水中に沈む程重い良材であるけれども、同じく眞直な幹に横幅狹い枝で長柄の傘を一尺ばかり擴げかけた恰好である、大西洋岸地方の南部にある長葉松別名黄松は十五吋の長き三葉にして五十呎より百呎に達し上部に稍々幅廣な枝を翳すけれども下部は多く裸かの眞直な幹であるが爲めに箸を立てゝ椀を冠せた體裁になる、米國詩觀の淵源地たる同地方北部の白松は七十五呎から百五十呎位に達するが、五葉の爲めに透視の出來ない繁き葉が眞直なる幹の下部から頂端へと横に平らに差し延べたる數多の枝や小枝に密着するので松の感じが湧いて來ない、同じ地方の加奈多赤松は二葉にして六十呎から百呎に達するが、全長三分二幾んど同幅なる眞直の幹の棒立ちであつて枝の尖端に葉が密生するから面白味が毫もない、海を渡つて歐羅巴は古代文化の中心地で聖書をも生み希臘羅馬の詩觀をも育みたる地中海邊を逍遙すると、此地の風光を著るしくするが爲めに繪書にまでも現はれ出づる石松は鮮やかなる二葉にして幹を欹く大枝が下手に分れて上に向ひ押潰したる笠形に壯んに繁く葉を出すから、譬へて言はゞ兩腕伸し上げ頭に風呂敷冠つたやうで、面白くはあるが雅致がない、地中海岸から歐洲中部西亞細亞の一部に跨る塊太利松は長さ二葉にしてコルシカ島に發育最も良く砂地で百四十呎に達するが、屈らぬ幹の下手より稍々垂れ氣味に數多の枝を四方に出すがために茂り過ぎて趣きに乏しい、此點から注目すると、歐羅巴亞細亞の中部北部到るところ諸威から露西亞獨逸英吉利等に普ねき蘇土蘭松は二葉にして八十呎より百呎に達し幹の成長に連れて下枝が枯れると共に上枝は横に太く延びて圓頭を描く樣子は日本のものに類するけれども、風雨に曝されたる侭が勝ち過て、巖上に蟠りながら僂み腰の屈曲百態で頗る雅致に富むものが無いらしい、假令少しはあるにしても殖產造林の目的がもと〳〵檣型を望むために自然のものは斫られ倒され英吉利全土には幾ど悉きて歐本土さへ俗化したから滅多に逢へなくなつたであらう、亞細亞の中央喜馬拉山脈は

松に富めども下界の小山の人里近き印度長葉松は細長繊弱の三葉にして寧ろ装飾に適して居り、カシア松は蘇格蘭土松に酷似して居るがカシア山脈に限られるので廣く世界に現はれない、支那朝鮮に進んで見ると、我東北にもある海松は朝鮮西海岸は言ふまでもなく支那の東北満洲にもあるが、極めて長き五葉のもので毬果を食ふのが取柄になるだけ樹態は少しも感心しないし、三葉の白松は北京邊の山なんどの一小部に限られる、反之二葉の赤松黒松を探して見れば、赤松は支那の東北より南は雲南まで も擴がり朝鮮西海岸朝鮮群島一帯に及び、黒松は中央支那の山西の北部北支那蒙古朝鮮をも含んで居るが何しろ支那朝鮮のことであれば樹木保護の觀念なきため濫伐は行ひ次第に行ふたし、もこ〳〵雅びたる情もないから臺灣南支那のマッソニアナもろとも赤裸の支那が出來上るので、お蔭で北海道まで荒れてくるのだ、唐宋詩集を懐ろにして今後の支那が嘸かし彷徨することであらう、抑も〳〵松の美觀は空氣の色も土地の色も風の吹き方雨の降り方悉く相集つておのづから一幅の圖畫をなすのであるから、山紫水明の日本に於いて始めて最も豊かに相連り最も雅びやかに蟠りて枝をも捻り幹をも曲らせ、雨風に揉れたる怪松古松もなほ浦寂しい凄い感じを起させない、此點に於いて日本の松はユニークであるが爲めに東京に入つて何物にも感せざる觀光の外客も念頭深く鏤刻して終生忘れぬ印象を千代田城外の綠滴る幾多の老松に得るのである、しかし其側を不具の電車が跋足曳〳〵躄り行く。世界の松を時間的に縦に歴史を貫いて詩觀を辿つて見ると、人さま〴〵の想ひを寄すれども神代ながらの幾久しく冬なほ榮ゆる常盤の松の四百歳も長生して靜かに動かす壯んに強く雄々しい魂に訴へる世界共通の一點がある、其上に日本の松は蒼穹にのみ向はないて雅びた姿を其儘に纏る蔦さへ素氣なく振捨てずに弱きを扶くる優しき心根、武士の氣質を象徴にして其處にまた〳〵ユニークとなる。

横に縦に日本の松を世界のユニークと觀じ來れば、日本の松は此儘に千代に八千代に育て〳〵てゝ松の世界を造りたい、松が日本か、日本が松か、分らぬ世界にして見たい、赤松は土地を荒すどやら、算盤片手に農學博士は亡國論を呼號すれども、同じ日本の赤松黒松、依怙贔負は武士にあらず、大きな算盤彈いて見て芥舟枘子は興國論を默考する、二十世紀の實業界は、富貴は金の意味と思ひ金は幸福を買ふと想ひ、野山を拓いて金に換へ樹木を斫つて金に易へ自然を破壊して金を堆積するが、食前方丈輕裘肥馬で滿足が出來得れば御慰み、漸く眼が明く趣味教育、園藝造りの幼稚園から骨董把玩りの尋常生徒、雪舟買つて高等科に進みかけるが秘藏兒の北叟笑みて復た落第、可惜人生に限りがある、斯道の義務教育さへ仕上げが覺束ないから自然則ち吾庭園美術是れ共有と考付く暇も力もない、然し人間は進歩もするし趣味の發達も顯著であるから、濃厚盡しの西人さへ眼の痛む自動車から細徑の散歩を願みるし、温室を出でゝ野花に戻るし、複雑生活を後ろにして簡易生活を需めて居る、茲に松の種子を蒔くとしても其壯年時代は二百年を要する故に今日統計の示して居る歐米樹木全滅期の五十年を後るゝこと正さに百五十年であるから、明治二百四十年に到つては、北半球の温帯寒帯を全通じて破壊

に破壊を重ねたる裸體の自然に懊惱し、自然のまゝの簡朴なる風光を目擊したい神代の空氣を呼吸したいと群がる客に押寄せられて、松の日本はおのづから世界の公園になつて仕舞ひ、金の置き場に苦しみたるお伽噺の長者のやうに、撒きすてられる金に身動きならず、千兩箱を東京灣へ投棄て〳〵坐ながら築港が出來上る、元旦早々何と芽出度話しでは御座らぬか、揉上げにコスメチックで富士に輕便鐵道を敷かうとする二十世紀の商人は草鞋を穿いて蓙を着て日本アルプスに狩獵禁斷を行ふ四十世紀の吾人の子孫に笑はれぬやうに仕て貰ひたい。

杓子は屠蘇を嘗めないから酒機嫌の筈がなくお賽を敷かないから寢言を列べる筈もなく、從つて徹頭徹尾眞面目で眞面目である、若し此初春杓子に屠蘇を嘗めさせお賽を敷かせて寢せたならば茄子ッ齒の杓子の葬禮を虱たかりのよぼ〳〵老爺が富士の見える與津街道孤松の根元に行ふ頃ひ、鷹に騎つて驅けつけたるワンターピルド・ロスチヤイルド・カーネギー・クルップ等十世の末孫が居列んで三拜し、生木を其儘白く削つて「嗚呼松臣杓子之紀念碑」と題するところを夢みるであらう。

（四十、一）

新年松

新玉の年たちかへる春の旦、油を流したやうな大海の彼方から、赫と射つたる朝暾の光が始づ峰にあたつて巖上に蟠る常盤の色を染める時は、限りなき力を內にこめながら千古搖がぬ靜けき姿を外に現して、昔も今も同じこゝろもちを胸から胸へと泌み込ませる。

山蔭に起つても、磯邊に伏しても、野中の孤木でも、街道の並木でも、松の松たる素質に變りはない。多く松茸を生む葉の軟かな小さな赤松でも、多く茯苓を伴ふ葉の剛い強さうな黑松でも、松の松たる雅趣は同じことだ。元來松のやうな針葉樹は濶葉樹に多く見るが如くに枝を分岐し、復た分岐して幹の原形を失つて仕舞はないから、恰好が整つてドッシリと重くて貫目がある。金挺でも動くものかといひさうな風丰を具へて居る。從つて根が深く九地に達しさうな心もちをも生する筈だ。それに落葉樹の氣短かな狹量の綠が、黃んで直ぐ零て仕舞ふ變化多いものに較べると、常綠樹は冷靜に沈着に不動の姿勢を執つて悠久の生命を繫いで居る。原始時代の俤を其儘に猫の眼の變るやうな現世を傍觀して澄まして居るやうにも思はれる。巖上に蟠まる松になると、地質の方面から更らに一段強くなつて來る。若し沈默の神が在るならば、其祭壇は松の樹々の間に築かれてあるに違ひない。風の吹く日に濶葉樹の林から針葉樹の松林に移ると、騷々しさが急に掻き亡せて頭上高く所謂松風の妙なる音樂に氣が澄むばかりで、四邊も乃至踐む足元までも音がなくなる。濶葉樹の枯葉はガサ〳〵いふが、松の零葉は全く絨氈の上を步むと同一で、若し彼方此方に紅葉や莓苔や叢程よく點綴するものがあるならば、身は宛然仙人の宮殿深く逍遙して居るやうな思ひのするところを、遠くから幽かに鼻を撲つて來

る松の香りが又た妙に清く澄んで居て、ローズやヘリオトロープやヴァイオレットのやうな甘たるい艶艶しい點が毫もない。これ程毅然獨立の感を人に與へながら、而かもなほ太古より人間に最も親しみ深くして、棟梁となり、板となつて人に隱れ家を與へ、炭となり薪となつて人を温め、バルサムは人の傷を癒やし、若葉は忘れ草の代用となり、樹皮は饑饉の食卓に上ぼり、巨材は檣となつて海を渡らしめ、繁き葉は裸木に代つて冬の寒き北風を防いでくれる。聖書に繁榮の意義を有するは洵に緣由ありといふべしだ。

試みに聖書を取つて讀むに以塞亞四十一章十九節に「我あれのに香柏合歡樹もちの樹及び油の樹をうゑ、沙漠に松杉および黃楊をともに置かん。」とあるうちの松や、尼希米亞記八章十五節に「又云く、一切の邑々およびエルサレムに布傳へて言べし、汝ら山に出ゆき、橄欖の枝油木の枝鳥拍の枝棕櫚の枝および茂れる木の枝を取きたりて錄されたるごとくに茅蘆を造れと。」あるうちの油木なるものなどに關しては英本國の學者間にすら種々の說はあるにもせよ、其巨材たるところ、其脂に富めるところ其葉の繁茂するところ、其處々の山々に容易に得らるゝところ等を參照して此地方に數多き松を指すであらうと聖書字典は說明して居る。元來松に富めるパレスチナ地方に最も多きは Pinus Halepensis 即ち「地中海松」と Pinus Pinea 即ち「以太利亞石松」とである。松類の高さを最高普通三百呎とすれば、地中海松は凡そ其中央位のところであるが、地中海を中心として歐羅巴亞細亞に跨りて、レバノンよりエルサレムに至る山上海邊などは、一面に綠色を湛えて美しく、有要なる材木たるのみならず、著名なるアレッポー松脂を產する。以太利亞石松なるものはレバノンの北方斜面にあるが、是れは主として地中海に沿へる歐羅巴に多くして、希臘では六十呎に達し、修飾上庭園に植ゑて其甘い毬果を盛んに賣買する。羅馬人が其庭園に植ゑたのもこれである。從つて古典文學にも現はれて來る。打ち見たるところ、日本の松のやうな美しい面白い姿にはならないが、裂目の深い赤ズンだ幹の地面を去る遠からざるところより、太い枝を上に向つて長く分岐して、全く踏み潰した傘形に、透見の出來ない程繁く尨犬のやうに松葉を冠つた鹽梅は、どうしても豐富な感、繁榮の心もちを起さずには居られない。

「コルシカ松」Pinus laricio といふて矢張地中海方面の歐羅巴にあるのは高さ百二十呎に及び、エトナ山の四千呎から六千呎の高さでは有名な松林をつくつて居り、松脂を生じ、色々の器具に用ゐられる。其一變種「オーストリア松」Pinus austriaca は勿論、其他の變種を加へて打算すると、實に歐羅巴の中部南部及西亞細亞の一部を包括するに至る位で、是等は稍々三角塔形に下の方から、縞に少し垂れ氣味に順次に枝を出して、餘程優しい感じを起させる。「星松」とも「海松」とも「毬松」ともいふ、Pinus Pinaster は南部歐羅巴に多く、殊に佛蘭西西では ビスケー灣に沿へる土地が風に吹き寄せられる砂に掩れて、沙漠になるのを防ぐ爲めに此松を植ゑて大成効をした。木質は堅くないから、久し

きを保つことが出來ないが、ツーロンやボルドーで諸種の用に立てゝ居り、ボルドー松脂の本になつて居る。

抑も〳〵松は南半球には絶無であつて、北半球の亞米利加歐羅巴亞細亞に限られ、外にカナリー島に一種あるだけである。而かも、熱帶には幾んどなくして温帶と寒帶とに其美を專らにして居る。凡そ七十種もあるが、最も普通なるものゝうちでは、南歐の「石松」と「星松」とに對して、中歐北歐及び亞細亞に跨る獨逸のキーフェルと稱し、フェーレと稱する彼の英の所謂「蘇格蘭土松」Pinus sylvestris を回想せずには居られない。是れは主として北歐を代表するものであつて、露西亞及北方獨逸にては大森林をつくつて、數多の詩神を住ます筈だ。稍高地の適土ならば百呎にも上ぼり、荒ッぽい外皮の幹の周圍は十二呎にも及ぶ。斯かる場合には、根は深く强く地中に入るけれども、土地が合はない處では爾く甘く行かないで、高地がグット高くなれば、向上の成長は早く妨げられ、常綠の灌木に過ぎなくなつて仕舞ふ。枝々は短かく擴がつて、幹の下部の枝は早く枯れる爲めに、雨風に曝されたやうな風姿を具へ、中心の延びる芽が力弱くなつて、上部の枝々が引續き生長するから、頂きがヤヽ平になり、吾等の日常見馴れたる松を聯想させる點もある。生長は速やかで、二十年たてば四五十呎の高さに達するが、氣候の爲めに英國産は北歐産の木質堅緻なるのに及ばないから、蘇格蘭土松の名稱を持つて居る英本國が、却つて年々の輸入をバルチック海地方ノールウェー國地方に仰いで、殊にリガ

産といふものが歐洲中最も名高く檣に用ゐられる。

哀れむべし、流石に名高き蘇格蘭土松も、蘇格蘭土に於ては縱橫に斫り倒され、リッチモンド公の所有たりし大松林などは、實に十九世紀の初めに十萬圓の黃金に換へられて仕舞つた。直徑五呎五吋もあつたそうだ。其隣りの十六哩四方もある大松林も斫られて仕舞つた。勿論其後に直ぐ造林の道は講ぜられて居るが、目的が殖産であるから、自然に生長する面白い姿は毫も得られない。視よ、密生したる種子より成長するものは、競爭して上に向つて延びるから、傍枝を出す遑がない。出しても空氣の流通を妨げられて直ぐ枯れる。從つて瘤がなくなつて、眞直に同じ太さの檣や帆架に誂向きの材木にはなるが、言はゞ團栗の背競べで、十把一絡げの何れを見ても山家育ち、己が勝手に縱橫に枝を出して一本たりとも同じやうな松のない個性を充分に發揮したものが跡を斷ちて、詩神のお宿が見當らぬ。斯のやうな密林の外緣に溢れたる僅かの松の面白い姿を認て、旅客や畫家が自ら慰めて居る。可哀相な英吉利だ。獨逸も佛蘭西も此點に於ては肯たり寄つたりに可哀相だ——ハクショー！誰だい、日本もお仲間入りをすると噂さをする奴は……。

"The Scotch fir, in murky file,
Rears his inglorious head, and blots the fair horizon."

メースンの斯んな言草は自然の趣きを解せぬからだらうが、通常の英人も同樣の偏見を持つて、蘇格

蘭土松は黒ズンだ色が嫌だ、雅致のない恰好だと貶するのは、要するに充分な發育を遂げる自然のまの松を知らぬに基く。濕り勝ちの英蘭土低地にある蘇格蘭土松で、如何して其趣きを解せようや。蘇格蘭土高地に於いて、偶々美事なのに逢遭したるロードンやギルピンは褒めて居る。此方が當然だ。ミルトンは『失樂園』のうちで放逐されたる天使等を形容して、天火に焚かれたる松林の傑ながら荒野に屹と立てるやうだと言ひ、スコットは『湖上之美人』のうちで、松印の旗風勇しく飜らんことを祝して居る。チャーチルは何處如何なる土地にも此松の榮ゆることを辯護した。

"That pine of mountain race,
The fir, the Scotch fir, never out of place."

ウォーズウォースの詩は松に富んで居る。就中次に擧ぐる句は夕暮ではあるが、颯々たる松の奏づる浪の音を聽きながら、誰だ一人小道を歩いて居る此詩人の俤が髣髴として眼さきに現はれる。

"And there I sit at evening, where the steep
Of Silver-how and Grasmere's placid lake
And one green island gleam between the stems
Of the dark firs—a visionry scene.
While o'er my head,
At every impulse of the moving breeze,
The fir-grove murmurs with a sea-like sound,
Alone I tread this path."

しかし、ウォーズウォース程の自然詩人であつても、其故鄉の所謂優しい英蘭土の影響を受けて、大松林の香りがない。故鄉の自然には寂寞の土地はあり、綠なす谷はあり、玉走る瀑はあるが、山々には多く樹木がない。從つて、原始時代以來蔚然として斧鉞未だ及ばざる自然の儘の大松林が呼吸する、至大至剛の精神を感受せんと欲せば、北米に赴いて其處の自然と詩人とに需むるが良い。ホーソーンにさへ森の香がする。ソーローは森の主である。ブライアントには森の歌がある。しかしながら、エマソンに至つては、廣漠たる北米北部の大松林を描きて、英詩人等の到底企て及び難きものと世上に喧傳せられて居る。

"He heard, when in the grove, at intervals,
With sudden roar the aged pine-tree falls—
One crash, the death-hymn of the perfect tree.
Declares the close of its green century.
Low lies the plant to whose creation went;
Sweet influence from every element;
Whose living towers the years conspired to build,
Whose giddy top the morning loved to gild."

松類約七十種のうち、北米には實に二十六種もある。就中「加奈陀赤松」 Pinus resinosa は加奈陀到る處にあるのではあるが、北部ウィスコンシンとミネソタに多い。七十呎より百四十呎に及ぶ。「普通白松」 Pinus Strobis はニューファウンドランドより、加奈陀到るところ大湖地方にあつて、七十五呎

より百五十呎に達する。「長葉松」Pinus palustris (P. australis) は南部ヴァージニアよりテキサス迄海岸に沿ひ、内地に入ること百五十哩以内の範圍に於いて大森林をつくつて居る、高さ約七十呎。「短葉松」Pinus mitis はニューヂァーシーよりテキサスに及び更らにミッスーリとカンサスに達する。「銀松」Pinus ponderosa はブリチシュコロムビアより太平洋地方を通じてテキサス、メキシコに及び、高さ三百呎に達するものもあるが、ロッキー山脈では餘程低くなる。

然れども、北米爾誇るを休めよ。黄金の前に凡てを犠牲にせんとする爾の態度は、山を拓き、森を排きて、間もなく凡俗の天地に化するであらう。斧の音鎌の影が合衆國に繁くなると共に、第二のエマソンは加奈陀に立籠る筈ではあるが、所謂文明を追ふて雑れ日も足らざる加奈陀昨今の大勢は、到底其資格を保持するに堪えないで、剛健なるエマソンの靈は人跡到らぬ未開の松林を探して居るに相違ない。松の香の薫るところ、其處に剛健の意氣を生み、其處に征服の色を示す。所謂「蘇格蘭土松」枯れて所謂「ノルウェー松」が市場を横行すると共に、北歐の精神は全歐を壓してイブセンニ席捲せられ、トルストイに蹂躙せられた。ブョルンソンや、アンデルゼンや、ツルゲネーフには松の香がする。棕櫚樹の立つところ、葡萄蔓の巻くところ、遂に松と共に住む人に屈從せざるを得まい。歴史は既に八世紀より十一世紀にかけて、ヴァイキングなる海賊に困められたる苦き經驗を有するではないか。

"And grant to dwellers with the pine
Dominion o'er the palm and vine."

印度方面にては、ヒマラヤ山脈アフガニスタンに「高松」Pinus excelsa の百五十呎に達するものがあり、西北ヒマラヤに「ヒマラヤ三葉松」Pinus longifolia の多く松脂を産するものがあり、緬甸の山々に「カシア松」Pinus Khasya のために二百呎に達するものがあり、西北ヒマラヤに「チパール毬松」Pinus Gerardiana の六十呎に達して毬果を夥しく供給するものがあるけれども住民が平原に飽食惰眠を貪つて蠢動するのみにて、北方高地に移住せざる限り、松靈に感激せられる機會がないから、まづは天下太平國土安康北斗の光鋭凄氣を帯びない。

奉天廟邊に多少古松の俤を存するのみにて、彼處に一本此處に一本、滿洲軍をして爲めに彈藥箱や石油箱を焚かしめた程の樹木なき北支那は、濫伐の結果住民自らも元氣を喪つて碌々たるものになつて仕舞つた。南支那は如何である。西支那は如何である。遼東や雲南に五葉の「海松」Pinus koraiensis あつて、日本の東北地方のと同じく毬果を供給したので名高いが、現時は如何であらう。古書を案ずれば、所謂中國に松柏頗る多く「八百里黒松林」の類に逢遭すること多いのが世界の舞臺に於て、日本の松と現時轡をならべて馳騁するものがないのは如何なる所以か。詩經に「山有橋松」としてある。三代以前に顯れざれども、或は黄帝の時に松を以て舟車を作つたと曰ふ。秦の始皇に、風雨の世話をしたことは世に知らぬ者はない。しかし、徒らに茯苓を採して百歳の長壽を願ふだけに止まるならば、

「松爲百木之長松猶公也」の字說も死んで仕舞い、「瑞西石松」Pinus Cembra の一變種「西伯利亞石松」var. Sibirica に壓服せられて仕舞ふだらう。

凝霜殄異類卓然見高枝

孤松を撫して盤桓じたる陶隱居は酒を飮んで斯う感じた。

何當凌雲霄直上數千尺

しかし李白の視たのは南軒の孤松である。

蕭々發爲聲半夜明月前

白居易の聽いたのも前軒の雙松である、是に於いてか、韓愈の「時見松櫪皆十圍」と王安石の「森々直幹百餘尋」とよりなれる司馬光の「欝々萬松林徑雨餘香」とを一時に欲しい時もある。

臺灣には「臺灣松」Pinus sinensis があり、琉球には「琉球松」Pinus liukiuensis があり、本州西南には「黑松」Pinus Thunbergii が多く、東北には「赤松」Pinus densiflora が多い。千島の方には「偃松」Pinus pumila さへある。其上に「海松」Pinus Koraiensis も「長實五葉松」Pinus Parviflora もある。彼等の或るものは、他國に見ることの出來ないやうな枝振りを自然のまゝに面白く差出して、日本の姿を飾つて居る。松の百五十年から二百五十年に及む

で、始めて充分なる成育を完了することを知るならば、日本が松の國であつて、吾等が松の民たらんが爲めには、自然を破壞すべき近視眼的實業風を防ぎて、松の保護者たる任務を盡したいものである。況んや地は極東に偏在して、人は全心を元旦に捧げて居る。若し極東に偏在して居なかつたならば、世界の春は日本に始まり、日本は春の先驅であるといふ感想を生することが出來ない。從つて、宣長の

さし出るこの日の本の光より

こまもろこしも春やしるらん

といふやうな心もちになれない。若しまた宗教上に奉祝すべき大祭日があつて、吾々の魂が其日に救濟されたり、洗滌されたりするやうな心もちが生ずるものなれば、全心をこめて元旦を念じ、一切の運動を總括したる休息の結晶と觀じて、歲の首め世紀のはじめ神代さながらの姿と觀ずることが出來ない。從つて景樹の、

としたちてはじめて明くる天の戸を

出づる日影も神代なりけり

といふやうな心もちになれない。斯う感じてみれば、日本の新年は、言はゞ滿を持して放たざる弓であつて、未だ發展せざる始原である。未だ動き出でざる力程強そうに思はれる力は外にはない。此力をこめて新春の曙光の輝くときに、松は寂然として千古變らぬ常盤の色を湛えて立つて居る。

茂岡卿神佐備立而榮有
千代松樹乃歳之不知久

内に限りなき力をこめて、外に靜けき姿を現はすものは正さに新年松ではあるまいか。古詩を吟じても、新歌を作つても、新年松を思ふ人の心は、さながら天地剖判の首めの神の心であらう。（四十、二）

蘭蕙始芳

テニスンのイン、メモーリアム八十二節に次の一句がある、

"Bring orchis, bring the foxglove shire,
The little speedwell's darling blue,
Deep tulips dash'd with fiery dew,
Laburnums, dropping-wells of fire."

此うちオルキスを用ゐたのは珍らしい、元來英吉利を本場としての蘭科植物は四十種程もあるけれども何れも見榮えのするものがなく若しくは詩句に這入るやうな資格に乏しい、強ゐて探し廻るならば蝶蘭と早咲紫蘭とが目につくであらうけれども、併し夫れ〳〵不足の點がある、蝶蘭 Habenaria bifolia は大きな楕圓形の二葉若しくは一葉を具えたる高さ五六寸乃至一尺六七寸の丈夫そうな一本の莖に十數の白花が黄又は綠の暈を帶びて夕暮より芬香を放ち始める極めて高尚なものであるが、惜しいかな海面上約千二百尺の高地にあつて通常衆人の逢遭せざるものであると共に、花期が六月乃至八月といふ他に數多き花の咲く時であつて、机頭に春を携へさする資格を持たせるとまでは出來まい、テニスンの詩句は其前後によつて早春を歌つて居ることが明瞭であるから、此場合のオルキスは早咲紫蘭 Orchis masoula を指すに相違ない、是れは早春に野邊牧場森地を飾る淡紅紫色の花であつて、莖の高さ凡そ八九寸、下部は楕圓形の紫斑點ある葉に包まれて、小供等が櫻草や九輪草と一處に摘み去るので何人も熟知して居るが、普通に在るといふことが取柄になるだけて、花色の嫌氣を催さしめると共に堪えがたき匂ひのするのを缺點とする、所詮英詩には蘭が現はれ難い。

試みに蘇軾の幽蘭三首を默讀してみる、

幽花耿々意羞春。紈佩何人香滿身。一寸芳心須自保。長松百尺有爲薪。
李徑桃蹊次第開。穠香百和襲人來。春風欲擅秋風巧。催出幽蘭繼落梅。
珍重幽蘭開一枝。淸香耿々聽猶疑。定應欲較香高下。故取羣芳競發時。

春初氷霜の後、濃厚ならずして淸遠なる幽香の馥郁として衣を襲ふに驚喜し、國香と賛稱し香祖と嘆美して書屋の一本もなほ壁を拱するが如くに愛惜した樣子は所在の詩句で證左を與へることが出來る、或者は竹節梅花松葉に香を加えたものは蘭なりとまで言ふて居る、しかし後世に斯く鄭重するは

餘程得難い珍らしい蘭であつて「世俗之蘭生於深山窮谷」とか「江南以蘭爲香祖」とか「北方尤爲難致間得一本置之書屋」とかの文字よりして古書に散見する蘭でないとの想像が湧くであらうし、事實上後世の蘭なれば紕佩すべき筈がない、後世の蘭は幽蘭であつて上古の蘭は藤袴である、故に詩經の士與女方秉蘭兮と彼澤之陂有蒲與蘭と禮記の婦或賜之飲食衣服布帛佩帨茝蘭則受而獻諸舅姑を始め諸子に散見する蘭は言ふまでもなく孔子が蘭當爲王者香今乃與衆草爲伍と嘆じて猗蘭操に自ら時に逢ざるを傷みて辭を託したるも屈原が離騷に紕秋蘭以爲佩と歌ひたるも悉く幽蘭でなく藤袴である、否、形體の如何は詩領埒外に逸して仕舞ひ、秋蘭と言ひ春蘭と言ふ程季節の如何も又同じく隱れて仕舞ひ、唯だ芳香を優視するのみであるが爲めに所謂蘭が果して蘭科植物であるかないかの判斷さへ必要としない詩句も數多ある、劉孝綽の蘭芽隱陳葉とか白居易の掃逕避蘭芽とか陳旅の雨暖蘭抽笋とか芽の方面から句を作ると蘭科だらうと思はれるが、香の方面からだけでは蘭科に春蘭と同じく秋蘭もあるから蘭科か菊花か不明のものが甚だ多い、花の方面からならば明瞭に區別が出來る、例せば元の岑安卿が吐舌終不言と俯首若有思とは花形と花態との特徴が發揮されて居るし、張羽の能白更兼黃は花色が充分に指示されて居る、

猗々紫蘭花。素秉巖穴趣。移栽碧盆中。似爲香所誤。吐舌終不言。　岑安卿

畏此塵垢汚。豈無高節士。幽深共情素。俯首若有思。清風颯庭戶。　張羽

能白更兼黃。無人亦自芳。寸心原不大。蓉得許多香。

蕙に到つては更らに分らない、論說紛々として定見なく、從つて本體の何物なるかを辨知すること難くして或は七月頃の花盟主だと謂ひ、或は早春に蘭と共に佳く匂ふと謂ひ、或は葉は麻の如く兩々相對して南海に出づと謂ひ、或は鈴蘭だと謂ふ、試みに蘇軾の一首を徵吟してみる、

蕙本蘭之族。依然臭味同。曾爲水仙佩。相識楚詞中。幻色雖非實。
眞香亦竟空。云何起微馥。鼻觀已先通。

相識楚詞中でなくんば蕙なるもの〻名高くなる筈はなかつたので、從つて後世頭を惱ます種子も蒔かれなかつた筈である、李白の春蕙忽秋草も蕙草留芳根も杜甫の蕙葉亦難留も極めて抽象的の表彰法であつて恐らく當人さへ明瞭の觀念なくして歌つて居たのだらう、蘭蕙と併稱せられながら蕙其ものに關する獨立詩句の僅少なる事實は此邊の消息を傳へるものと解して差支あるまい、補筆談に次のやうなことが書いてある、

零陵香本名蕙古之蘭蕙是也又名薰左傳曰一薰一蕕十年尙猶有臭即此草也唐人謂之鈴々香亦謂之鈴子香謂花倒懸枝間如小鈴也至今京師人買零陵香須擇有鈴子者鈴子乃其花也此本鄙語

文士以湖南零陵郡途附會名之後人又收入本草正經自有薰草條又名蕙草注釋甚明南方處々有之本草傳會其名亦出零陵郡非也

此文は明らかに鈴蘭即ち百合科の君影草を指示して居る、此推測をして適中せしむること能はざる理由を自分は數ヶ條懐抱して居るけれざも、少くとも斯く推測する者を生じたといふ現象は、西歐に於いて比較的近代に詩界の寵幸を專らにし始めたる君影章と、日本に於いて北海道の野生や信州邊の野生を東京に移して樹蔭に滯りなく繁殖すると共に西詩の感化を受けて和歌俳句に昨今詠み込まれる鈴蘭を聯結して、世界的になりゆく此もの〻前途を祝さずには居られない、自分の見窄らしい瓦鉢にさへ毎年晩春になると可愛らしい鈴を振り始める。

本邦所産の蘭では、建蘭（ヲン）が最も卓絶したもので、夏末に新苗を生じ始め、淡黄花の微綠暈を帶びたる極めて清香高き品で、寒地でも結實するといふ話である、漳蘭（メラン）は大同小異、七八月に花咲くコランは建蘭に優る香ひがあるが、初冬紀州幷びに西國暖地に花咲く草蘭（カンラン）は建蘭に比して微である、山野に多く自生して衆人の熟知する春蘭一稱ホクロは惜むべし香氣殆んど絶無であるが、反之流石に唐土本場より輸入せる玉鱗蘭（ギョクチンラン）も素心蘭（ソーシンラン）も光澤ある深綠色の葉に幹苞青く白く花潔白にして芬香蘭中の魁と稱すべく、共に秋季に花がある。

蘭の性質上若しくは配布區域上、机上のもの室内のもの庭園のものたるに止まりて山野自然のものになり兼ねても、境遇に適應して如何なる詩觀も構成し得るから、蘭（らに）とまで訛つて自己藥籠中のものとせんと試みたる和歌の發心は健氣であつたが、聲調が古人の耳に整はないで中止して仕舞つたらしい、俳句の方では季を秋に定めて隨分歌つて居るが十中九分九厘まで蘭の香をのみ引立てゝ其他には及んで居ない、此科の多數のもの〻特徴になる蟲の恰好をしたる花形を婦女小兒は愛でやうが大人は嫌いだと悟り顏の人もあつたであらう、蓼太は蜂にして仕舞つた、英吉利に蜂蘭 Ophrysapifera があるから一層可笑しい、

蜂になれ折る人あらば蘭の花　蓼太

下の句は支那を脫却し得られないと露骨に自白して居る、

詩を作る妾持ちけり蘭の花　周竹

蘭の香や佛にもあらず神にもあらず　鶯笠

嗅覺を視覺で言はせるなら、蘭の香は薄月夜に相應すると感じた、

蘭の香や物に譬はゞ薄月夜　乳峰

擧げ來れる句の外に名家の句々を讀み來り讀み去つて、つまらぬ句、分らぬ句と感じても成程と言ひ當てられたやうな經驗が現はれない、

夜の蘭香に隱れてや花白し　蕪村

蘭の夕狐のくれし奇楠を炷かん　蕪村
蘭の香に老も若きも寐覺哉　白雄
まさ〳〵と蘭に古人の匂哉　士朗
蘭の香や蝶の翅に薫す　桃青
痩せたるを悲しむ蘭の莟み鳧　太祇
もる〻香や蘭も覆ひの紙一重　同
蘭の香や衰へそむる日のうつり
栗に飽いて蘭につく鼠捕へ鳧　青蘿
蘭を愛す賓主の座未だ定まらず　召波
援兵や伏兵が續々出て來て自分の過言を抹殺する時期があつて欲しい、それとも蘭薫始芳の四字は花　几董
戸の日記に限られて、詩界が鈴蘭の占有に歸する大勢を奈何ともすることが出來ないのからら。

（四十、二）

桃夭桃源

元の王惲が『梅粉飄零柳未煙、一枝春色獨當軒』を二たび三たび口吟むで居ると、身はいつしか支那文學圏中に在つて桃詩に伴ふ二大聯想を批評して居る。彼は桃と乙女との關係であつて源泉を詩經の『桃之夭々灼々其華』に發し、此は桃と太平との關係であつて根蒂を陶潜の『桃花源記』におく。若し自然の一部を人情化することがあるならば、桃の花期花色花態と其四圍の具條とを考察して、桃と乙女との關係は止むを得ざるもの、動かすべからざるものと思ふ。傳に『桃有華之盛者夭々其少壯也灼々華之盛也』とあるやうに『其華之紅而麗』なる有樣は『女以盛時而嫁』に譬へたくなる筈であつて、姿色を少し缺くすれば『雖非傾國無雙艷、終是當時第一花』ともなり、更に進めて行くと『生此艷陽質、豈無佳人色』ともなる。灌園史の『桃花如麗姝歌舞場中定不可少』と評した文句は至當であらうし、帝親ら一枝を折つて妃子の寶冠の上に插み『此嗇花尤能助嬌態也』と言つたと記してある開元天寶遺事も桃と佳人との配合を美しく感じさする。萬葉集卷十九の『春苑紅爾保布桃花下照道爾出立嬬嬬』は此間の消息を描いて居るのだ。

長閑に暖く風なき春の日、爛霞紅にして雞犬相聞ゆる山村の光景を眺むるほど人をして太平の想ひに滿たしむるものはない。生温るい氣候、微かに暈したやうな空氣、散るを急がぬ暖か味のある花が樹から樹へと簇々群がる工合、何處から見ても暢びた調子が行渡つて居る。されば、先世秦の亂を避けて妻子邑人を率ひ、此の絶境に來つて復た出でず、今是れ何の世ぞやと人に問ふ程の太平を描くに當つて、桃花林を點綴したる陶潜の詩眼の凡ならざるに感服する。『晉太元中武陵人捕魚爲業緣溪行忘路

之遠近忽逢桃花林夾岸數百步中無雜樹芳草鮮美落英繽紛漁人甚異之復前行欲窮其林林盡水源便得一山山有小口髣髴若有光便舍船從口入初極狹纔通人復行數十步豁然開朗土地平曠屋舍儼然有良田美池桑竹之屬阡陌交通雞犬相聞其中往來種作男女衣服悉如外人黃髮垂髫並怡然樂見漁人乃大驚』洵に太平の象である。李白さへ山中問答に桃を用ゐて『桃花流水杳然去、別有天地非人間』と歌ふて居る。王介甫の桃源行は更らに詳細に縷述して言ふやう『望夷宮中鹿爲馬、秦人半死長城下、避世不獨商山翁、亦有桃源種桃者、一來種桃不計春、採花食實枝爲薪、兒孫生長與世隔、知有父子無君臣、漁郎放舟迷遠近、花間忽見驚相問、世上空知古有秦、山中豈料今爲晉、聞道長安吹戰塵、春風回首淚沾巾、重華一去無消息、天下紛紛經幾秦』。しかし、玆に人ありて、別に一個の桃源を夢想して見よと言ふならば、自分は次のやうに仕たい。第一、淚巾を沾ほすことなくして塵世を超脫したる別天地に化して仕舞ふ。第二、落英繽紛は運動があつて忙しい感じがするから、總て休息の狀態に引き直ほす、但し耳に訴える聲の暢び〳〵したる調子、例せば鶯や雞を聞くのは妨げない。第三、漁人よりも寧ろルーラル、ディヴィニチーたる牛に騎つて行くやうな閑人が欲しい。牛ほど天下太平の象あるものはない。大きな身を悠然と動しながら、可愛らしい目付をして、尻に糞を附けてる鹽梅は天下一品と賞讃すべしである。地獄で佛に逢ふよりも二十世紀で牛を見る方が遙かに光榮だ。そこで、蕪村曰く、

喰ふて寢て牛にならばや桃の花

（四十、三）

泉斜汀氏著『深川染』序

當意即答症の臨床講義に供せらるゝ妙齡の婦人といふのは或は美人であるまい乎。萬一美人であるならば患者として目視するに忍びないから此儘家に戻らうかしら。奈何したものかと思案にくれながら辿るともなく大學の丘上集會所に辿り着いてみると、未だ定刻に達せざる故か人の氣色の仕ないので、吾知らずホッと溜息を衝き、池の方へと二三步下りて、春淺の北風を横吹きに襟を立てたる外套に包まつたまゝ枯芝の堤に背を靠せて四邊を眺め廻すうち、何時とはなく在學時代の記憶が心中を往來し始める。南口の樹陰暗きところに身投美人の屍體が浮み上つたとき、丁度頭上の薄汚い傳染病室の白壁と相映じて二目と視られぬ程に物凄かつたが、今のやうに建物は取毀たれ立樹さへ疎らになつては、あの細徑を通つても異樣な感は起るまい。北岸に沿ふて走る本道は梅雨の頃ひ幾千萬となく池から生れて出てくる小さな蛙に占領なれて了ひ、履齒の下に蹈殺すのを不憫と想ふために夜暗にわざ〳〵大廻りをして寄宿舍から圖書館へと通ふたものだが、今年のやうに悉皆と砂利を敷かれては、蛙の步行艱難を覺えて嘸かし小さな眼を剝き出しながら想ひやりなき總長殿を恨むであらう。病院に化して以來誰人が呻吟するやら分らねど、東手にあたる彼の寄宿舍の隅の一室で頻に紅茶會を催したるが爲めに「湯島謁」の發端を修飾すべく作者の藥籠中に收められたることもある。創構したる鏡花君の腕の冴

を想ひつゝと身投美人、蛙、精神病がふら〳〵と絡合ひて脈を搏ち初め鏡花式に鑄たる空想から美しい姿が現れそうになるので、周章てゝ頭を一ふり振つて眼を二三度瞬いたら、芥舟式の散文に復歸して首尾も連絡もなき三個の事實が右へ左へころ〳〵と石塊のやうに轉顛つて了ふ。

空を摩して聳ゆる數百歳の老幹幾本、枝々に一葉の綠もないが、大地を抄つて湧きかへるべき春の生氣は眼に見えぬ根毛より維管束を傳つて冉々として流動しはじめたるに相違ない。思倣しか、風底にも微温があると感ずるうち、遙か下より、譬へば秋の眞夜半階上から庭前の蟋蟀を聽くやうに幽かに妙なる響を二三回耳にしたので、俯して水面を窺ふと、數多の渦紋が點々として散在するに氣付く。龍蝨や水黽の游ぶにしては圓圈が太過ぎ强過ぎる。鯉や鮒の餌を探すにしては切々たる騒音を伴はない。何者であらう乎と訝りながら更に十數歩降りて水際に到ると、未だ啓き了らぬ口から片言まぢりに優い忍音を漏しながら幾多の蟾蜍が嬉々として雌雄相遊戯するのである。春の生氣は始づ蟾蜍に動きて驚の長眠を覺すのであらうか。北米詩人が三月を描くにあたりてブル、フロッグを粧點ひたる伎倆を想起し、初夏の賑かなる蛙の音にのみ氣を取らるゝ歌人俳人の形式を頗る遺憾と感ずる。

間もなく足元に一匹匍上り續いて一匹後を趁ふて來た。水に漬つて居たる黒味勝ちの蟾蜍が乾き切つたる埴色の堤の枯芝を踐分くるのであるから輪廓が判然と捺印したやうに可愛しい小動物の姿が浮彫になる。多分女夫仲であらうと考へながら、食指で前者の頭に一寸と觸れてみると優雅に右を向て停つたので、同じ食指で後者の支柱をつくり、速に追付かせて居並ばせやうとする。不圖、梅雨時の小蛙の親ではあるまいかと思ひつくや否や、電光石火の如く、身投美人、池水、膏血と聯想して指端が滑つたやうに感じ、身をハタと退きながら二たび頭を振らうとする。途端に、轟々砂上を輾る俥の音。美人と心に叫んで突ッ立ち上る。醫博士の俥は既に高帽の後影を見せ、看護婦の俥は漸く白帽の頂部を露したばかり、丁度頭上を走る患者の俥は紫ショールの束髪姿、年頃十八九の娘盛りながら色黒の醜婦なので、振りかけたる頭を二たび振らずに澄んで了つた。

* * * * * * *

歸つて來ると、遠く北海より序文を求むる斜汀君の書面が屆いて居る。『湯島詣』時代には海軍兵學校を志したる斜汀君が近眼の爲めに目的變換を餘儀なくされて令兄と同じく小説家になられたのであるが、染め出す『深川染』は鏡花式乎將た斜汀式乎。兢れにもせよ妙な因緣の日もあればあるものと吾れながら深く感じて二度頭を振つてみたが、芥舟式が急に整はないで今以て何物かゞ心の奥に挾つて居る。

（四十、三）

比較文學

人の言論は意外の時處に意外の結實を時として見ることがあるもので、自分の學生時代に於いて同窓及先輩の執筆に係る數種の論文に自分が少からぬ興味を惹起したることは、執筆者自身も甚だ意外と

せらるゝであらうと信ずるが自分親らも亦頗る意外とするところである。是等數種の論文は趣旨に於いて相異るところがあるのみならず、又實に氷炭相容れざる二樣の見解すら包含せられて居るが爲めに、同時に再現して渾然融和したる姿態をつくることは出來かぬるけれども、其時其時を回想して行くと、半ば記憶を逸したるところもあるからして、朦朧たる意識の雲間に點睛せられたる畫龍の出沒隱現するやうに、空想の手傳ふ餘地さへ生じて依然として快味を感ずる。幻境を攪破せざるために故意と再讀しない。玆に擧げんと欲することは正さに其一例であつて、高等中學豫科時代に讀みたる逍遙先生の一小篇『比照文學とは何ぞや』と題するものである。

雜誌の名稱は全く記憶にないが極めて粗末な雜誌であつて活字も見苦しく誤植もあつたに相違ないといふことは自分が原著者の姓名をボスネットと覺えて大學に進んだ事實で推測し得られると思ふ。原著の百分一程の小篇なる以上は極めて大意を移植せられたるに過ぎまい。夫れにも關せず面白い學問だと感じたるを手始めにして大學時代に原著を繙き、續いて獨逸のヴェッツの同一觀察點より沙翁を評論したる既刊の第一卷を披見して、遂に比較文學といふものが頭の一隅に根蒂深く陣取つて仕舞つたと無論其後讀書の種類に從つて思想は動搖もし回轉もしたけれども、此考へが何處にか潛在して間隙があれば頭を擡げて來るので、今でもそうであるから、今後もそうであらうと思ふ。尤も自分は目下語學の教師であつて學者といふ閑職に就く餘暇がないから、自分が斯學に貢獻するなどゝは夢さら想ひ及ばないけれども、今を去ること二十一年前、萬國科學叢書第五十四編として始めてボスネット教授が『比較文學』一卷を英文界に寄與し、後數年にして逍遙先生の紹介となりたるのみで、今日に到る迄、先生自身は勿論、新聞雜誌の片隅にさへ比較文學の四文字を筆にする人が唯一度もないといふ事實は自分の蔭ながら甚だしく遺憾に思ふところである。言ふ迄もなく世間には文學の性質上科學的研鑽を容るゝ餘地があるであらう、縱しや科學的研鑽を容るゝ餘地があつても比較的見地に根據を構へることは出來ないと唱ふる學者もあらう、縱しやまた、比較的見地に根據を構へるにしても、ボスネットのやうにスペンサー一派の社會學に依憑することは許せないと言はれる學者もあらう、從つて此學問が文學界に虐待せられ繼子扱ひせられて表面に活躍しない理由にもならうと推測する。しかし學問の新しいだけ夫れだけ研鑽の餘地が充分にあつて觀察點の向け方を自由に案排することが出來るからして、自分の執着し株守する進化說が如何やうであるにしろ、唯だ他の色々の觀察が總て比較の範圍にまで這入つて來ることを熱望するのである。スペンサーはアイデアリストにして正當ならば進化は一場の夢に過ぎずと言ふて居るに拘らず、アイデアリズムより見たる文學を稿したる北米のウードベリー教授は大學の比較文學教授であつて數年以前『比較文學雜誌』を發刊した。但し教授の著書は未だ二種讀たるだけであるから、其立脚點を充分に理解して居らぬといふことだけは玆に附記して置く義務がある。七十餘元素儼として存する間は進化說も瓢簞の如く胸のあた

りに締括りがあつたが、電子觀の勃興と共に無機界有機界超有機界を通じて進化即ちマスター、キーとサリーピーは高叫した。從つて自分は机上に頬杖突いて議論の不備を難ずる『アカデミー』雜誌記者りも、身親ら埃及に分け入つて『倫理觀念之起原及發達』を著したるウェスターマークの行動を嘆賞する。比較文學の見地から觀察すれば、未だ土産を携帶せざる鳥居氏夫妻を二號活字で歡迎する讀賣新聞記者が既に土産を提供したる照山佐々木安五郎氏の高楠博士に與へたる長文を四號活字で日曜附錄の埋草にしたのを遺憾に思ふ。更らにまたイブセン號を出したる早稻田文學記者やシルレル號を出したる帝國文學記者は言はずもがな、トルストイの安否如何を幾度も電報で騷いで居る諸新聞記者が此頃逝去したるブリユンチエールの弔詞を掲げないことを不當と感する。創作を貴しとして分解を賤しとするは文學界の高言に入れる病である。手を觸れることが文學の威嚴を損するやうに言囃すのは文學界の迷妄である。進化論者は一切の現象を平等視して文學獨尊のお太鼓は敲くまいけれども、文學界の進化論者は親が子を思ふ慈愛を以て文學の徽候を驗べ投藥をすることが出來ない筈がない。此一文を草する時偶々長子病に罹つて大學病院に入院した。少年の自分は紙鳶愛を以て愛の本體と感じ、青年の自分は戀愛を以て愛の本體と感じ、中年の自分は親子愛を以て愛の本體と感じて居るから、入澤博士の打診のもとには一個の子供があつて、一個の子供を救はんが爲めに硝酸銀を命じたり尿の反應を調べたりされるのであらうけれども、試みに親ら原書を繙いてルベオラとスカルラチナとの徽候の異同を比較する自分の眼には唯一の愛兒があつて、身を以て代らんと欲する程の唯一の愛兒を助けんばかりの念願で硝酸銀の苦悶を堪へるやうに說きすゝめ蛋白質の有無如何を氣遣しげに尋ねるのである。比較文學は親になれる。心の持ちやうは人に關係する。滔々たる千篇一律の英文學史を嫌つて英國民文學史第二卷を終了し今や第三卷に入らんとするヂュッセランを比較文學に貢獻多大なりと思つて歡迎に躊躇せざる今日此頃、我文界の一隅に比較文學の種子を又新たに植ゑつけることが出來るならば、自分の一小論文の決して徒事に非ざることを確信するものである。意外の時處に意外の結實を見たい。

文學を科學として調査しやうといふ企圖に關しては他の學問と異なりて隨分困難が附屬して完全なる一科學になりかねる點もあらうけれども、さればとて全くなれぬと頭から罵倒する諸說にも無理がある。或者は趣味說を標榜して非難するやう、個々の趣味が千差萬別であつて合理的でないから判斷に標準がない、事實には標準があつて眞僞正邪と辨別が立つが、趣味には只快感するだけで事足るから正邪もなければ眞僞もない、快感を與ふれば傑作で好評を得る、單に夫れだけだと言ひ觸らして居る。しかし是れは一般の人々の經驗上、趣味にも高低の差別があつて、好評の如何則ち人數の多寡で決定し得られない優劣が文學に存するといふことを否定して居るのが缺點になる。或者は評家趣味說を標榜して非難するやう、有力なる評家の趣味が相互に違ふところがある、甲國民の趣味の標準と乙

國民の趣味の標準と違ひ、同國民のうち甲時代の趣味の標準と乙時代の趣味の標準と違ふのみならず、また實に同國民同時代のうち立派な甲評家と乙評家との間に根本的に判斷の相違がある、斯んな相違のあるところから如何して纏つた原理が生れやうと言ふのである。しかし異なれる國民異なれる時代異なれる個人の間に趣味の差違があると共に趣味の類同があることを否定するわけには行かぬ。同じ人類の間に於いて氷炭相容れず水火相和せざる底の悉皆相反する趣味からなれる二樣の人間があるとは自分の到底想像し得られぬ點である。評家の論難に花の咲くことは多くは美點の輕重であつて美點の有無ではない。或者は興趣無限說を標榜して非難するやう、文學の吾人に與ふる興趣は其數無限であつて、到底僅少なる法規のうちに總括することは出來ない、清楚もよければ濃艷もよい、熱烈天を燬くが如き情炎の燃ゆるもよければ澹淡水に似たる仙人風の吹くもよい、感興無限にして歸納するに難く、偶々歸納し得たる部分は少數にして平凡のものとなり毫も文學の性質を說明するに足らぬから、無益の勞力をなすに過ぎないと言ふのである。實にも文學は人間全幅の記錄であつて、人生の廣く深きが如くに廣く深きものであるが爲めに、あらゆる感興の諸點を計算し排列し分類することは不可能であらうけれども、しかし如何なる文學にも共通に缺くべからざる或種類の要素を取調べる盡力は既に今日迄書餠に歸して居らぬといふ證據が歷々として存する。從つて此論難も不備を免れない。或者は人格說を標榜して非難するやう、作物の美點は畢竟作者の人格に依憑するのであつて、人格は遂に說明し分解し得べからざるものであるから、人格の表彰たる文學には法則のうちに這入らざる且つ定義の與へられざる或るものがある、此の或るものが其の作者の他に秀でたる個所であつて、讀者は自から讀みて自から感知するより外に方法がない、科學の奈何ともすべからざるところであると言ふのである。是れは仲々道理のある宣言であつて、自分も人格問題に頭を惱ますこと幾度なるかを知らぬ。しかし未知數を可及的少數ならしめるのが研究の結果であつて、此未知數を故意に增大視するのが從來の弊風である。天與の大人格は吾人凡夫の說明の及ぶところにあらずとして研究を忽諸に附するならば、大人格のみならず苟くも多少の人格のある男女は悉皆說明を拒絕することゝなつて、人間の智識を否定する自殺說に了つて仕舞ふ。感知すると共に說明が肝要であらう。出來るだけ研究を進めて見たい。

或る作者は或る時代或る邦土に於いて或る作物をするから、注意の集中する方面に從つて、科學的研究態度におのづから三樣の區別を生ずる。第一は作物研究である。四邊の條件を一切斷絕して單に文學の一片と見做したる作物其ものゝ評價判斷である。現に好評のあるウィンチェスターの如きは此方面に於て文學批評原理を著はして居るのみならず、同樣の著書や論者が數多見える。作者が不明で時代が不明で、なほ且つ大文學として存在し、如何なる時代の如何なる人からも讃稱せられて、言はゞ東西を貫く普遍的要素が古今に亘つてアッピールするやうに描寫せられてある以上は、此方面の研究が

大に得意になれる筈である。等しく人間である以上は共通の根本要素があるわけで、想像や情緒の活働も變愛や生死の事實も或程度まで輪廓をつけられるが、是れが具象的に現はれる場合に、作者の使用したる其時代の風俗習慣や作者の使用せる其邦土の文物制度を知了したならば、嘸かし一層深厚にアップリシエートすることが出來るだらうと思はれることが數々ある。外國文學に對する場合に此感が一層切實である。更らに一歩を進めて各文學を時間的に連續して觀察するときは人間の最も目立つ根本要素を分解するだけでは落付くことが出來ざるやうになつて、未知數を含めるまゝに人格の愈々廣く愈々深く發達して行く徑路を社會學の方面から出來るだけ調査したくなる。第二は作者研究である。即ち作物の主人たる作者の研究である。作物を理解する場合に於て、幾分でも作者の地位に身を置くことが出來て其觀察點を作者と同一の地位に据えつけることが出來るならば、作物を一層好く理解し得るであらうとは何人も思ひ付くに相違ない。作者の渾心鏡の如く作物にあらはれる主觀的作者の場合に於いて殊に著しく此感を生ずる、從つて作者の傳記なるものを著述する風潮が滔々として天に漲る筈だ。作物の與ふる感興の原動が作物を通じて現示される作者の人格にありとすれば、作者の人格を解析したる傳記は吾人に缺くべからざるものとなつて來る。しかし傳記の說明する人格は未知數を包含する人格であることを忘れてはならぬ。多年同棲する夫妻も多年往來する朋友も何とやらお互に解しかねる或ものがあるやうに感じるから、傳記作者の滑べり過ぎる斷論が少からず怪しまれるのみならず、得意氣に書き載せる事實は表面にあらはれたる皮相の事實或は作物に關係せざる無益の事實若しくは作物を了解するに却つて有害なる事實と思はれることが數々ある。傳記家は最も難局に立つて居る。第三は時代邦土研究である。邦土を異にして住む國民が同一の事件に異れる影響を受けるといふことは情緒の動き工合や理想の持ち工合に差違があるからであつて、從つて文學の性質が夫れは戲曲或は歌曲或は小說と發達の階段が異なつて來て、其時代の歷史が理解されなければ其文學が充分に理解されなくなる。此方面に進化原理の光を投じて見ると、文學が一社會現象と化して他のあらゆる社會現象と結合し、國民としても個人としても悉く社會の生命を持續する力の司配を受けるやうになるが爲めに、個人の人格を往々看過する傾向があるけれども、個人を綜合して比較的に顯著なる性質を國民の間に見るのであるから、比較的に明瞭なる觀念を得る利益がある。第一が文學の批評とすれば第二第三は寧ろ文學の說明に傾むく。彼れは診斷學のやうであつて物足りないから、是れの解剖學が這入り込むわけになる。作物の種類のまち〳〵なること、作者と作物との關係のまち〳〵なること、及び作物と作者と時代との關係のまち〳〵なることに氣が付くと、注意の集中する方面よりおのづから生ずる三樣の研究態度は相互に唇齒の關係があつて、其一を取つて其二を捨つることが出來かぬるけれども、自分の注意の集中する方面に根據を構へようとすると、第三の歷史的研究に比較法

をあしらつて中堅とし、第一第二を左右に具へたる鶴翼の陣立てをしてみたい。

主觀的に働く思想が客觀的に他人に傳はる場合に於いて既に比較が這入る筈であるから、比較の淵源は人間の古るいやうに古るいのであるけれども、比較で智識を得やうとする意識的の運動は或る意味に於いて頗る新しい。古學を復興して萬葉思潮に溯る運動は一國内の比較が時間的に始まつたのであるが、黒船に愕き明治のゴタ〳〵となり維然紛然として諸外國文學が輸入されるときは外國との比較が空間的に行はれるのである。交通は繁劇になる、新聞雜誌は飛び交ふ、社交狀態は變動する。波斯が這入り印度が現はれ亞米利加の原始生活を目睹したる歐洲が文學の觀念文學の發達に前よりも一層明瞭なる智識を獲得したる如く、印度や支那の文明と接觸して更らに歐米の感化を意識し始めたる日本が同樣の結果を齎らすのは當然のことである。マッシュー、アーノルドが文學批評の職責を定義するに當つて、自己の智識思想は故國の英吉利種子よりも外國種子に得るところが多いと附言して居る。ヒリッピンや蒙古や朝鮮が明瞭になつて來ると契冲や宣長の説の仍れるが續々ある。武士道の觀念もナイトフードと比較すれば明るくなるし、戀愛の可能範圍を向うのもので照らせば此方の戀愛の潜在性が分解されるから、從つて義理と人情の衝突が浮彫りにならうといふもの。文明の運行は行爲と本能と情緒と道理と想像とを結合したる個性を次第に鮮やかに際立たしめてデモクラシー、亞米利加國民性、人格、と連呼して三大觀念だと宣言するホイットマンさへ生ずるに至つた徑路を呑み込まないと、現

時の日本小説の腑に落ちないものが間々あらうとふとも種子の盡くる心配がない。佛蘭西には十九世紀の冒頭から一大組合をして佛文學研究を始め、今なほ其半にも達せざる目覺ましい倶樂部がある。材料が幾何學的に增加することを考へると、歲月の進行に逆走するほどの研究になるわけだ。度胸の据え工合が面白い。

藝術進化の一般原理は文學に對して如何なる式樣となるであらうか。四圍の條件に依憑して藝術進化を生ずるとすれば、此等の條件は文學の發達を如何に影響するであらうか。文學勃興を促すに足るべき材料として何等かの社交的宗教的政治的物質的事實があらうか。如何なる理由あつて、或る種類の文學の内容上若しくは外形上永續のもの中斷のもの反覆のものがあるのであらうか。或る文學の種類が何故に甲處にあつて乙處になきか。時の古今、處の東西に於いて國民の性格と其四圍の條件との變態は如何なるものであらうか。郵便電信電話と汽車汽船と新聞雜誌との急速なる進歩は文學の發達に如何なる感化を與へたであらうか。抑も文學の起原は如何なる形體を取るであらうか。數へ去り數へ來れば盡く是れ比較文學の研究すべき好個の題目になるのである。

比較文學に多少の興味を有する者は、日本現代の創作及評論を通じて、光彩陸離の或るものが幾ならずして其一半を喪失するに至るべき運命を豫想せざるを得ない。人間と四圍の境遇との動反動の相互關係を切實に感じて居る比較文學研究の徒は、一國の文明一代の文明に動かすべからざる因果律を認

めて、文學獨り他の諸現象を超越したる突飛な行動を演出し得るものと思はないから、甲の國民時代に生育する文學が何等の因縁もなく倏忽として其儘乙の國民時代に移植せられるやうな怪異なる現象に逢着するものと信じないし、又歴史上に見たこともない。思想感情の活動には系統があつて、接觸し同化し反撥する理法が夫れ〳〵認められるから、心理學を社會の發達に應用して説明を試みるルヴォンのやうな學者さへ現はれてくるのである。余の創作は歐洲最近の潮勢に乘じて而かも其先頭に立つて居るのを日本に天才を識別すべき具眼者が居ないから不問に付すると怨言を放つ作者もある。余の批評は歐洲最近の學問を標準にして居るから、これに的中しない日本の駄作は憐むに堪えたりと息巻く論者もある。日本文明の特質と現下の狀勢とを打算して始めて日本文明の將來を朧ろげに推測するのであらうけれども、東西文明の接觸といふことが大問題であるだけ夫れだけ東西文學の接觸が手取り早く片付くものではない。同じ西洋思潮のうちに在つて、あれ程修養の深いゲーテすら、イフィゲニアを付る爲めに最も傑出したる塑像を手本にして毎日々々繪を畫き、時代と邦土とを異にする希臘當時の想像の習慣と特性とを理解して後始めてソフォクリーズのアンチゴ子やフィヂアスの女神に髣髴たる作物を得たと言はれて居るが、所謂先頭に立つ先覺者は是れだけの決心、勇氣、修養、乃至人格の素質があり得るであらうか。半鐘の亂打に跳ね起されても、月明のためか火元が確と見あたらぬ。偶々見當つて風下になりそうだと考へても明神下の火事が直ぐ片町に飛火するだらうと思へないから

荷片付けの勇氣が出ない。ツイ此間ヂッキンスが萬葉集を英譯してクラレンドン、プレッスで刊行したから向うで何と批評するであらうと注意して居ると、豫定通りの觀察をした。日本の古歌はピロー、ウォーズ（枕詞）で、閉口だが自然の外觀に恍惚として醉へるが如き有樣は希臘上代の佳句集を讀むと同じく其深厚なる藝術的多感を想起せざるを得ない。近英の詩人テニスン・ブラウニングを去ること正さに希臘の詩人カリマカス・シーオクリタスを去ること同じ時代に於て、裏海と西大平洋北海岸との間の塲所に、十二世紀以前極東に偏在せる日本の斯の如き文學的產物を珍らしいと感じて倦怠なく全篇を通讀し得るが、チェーレーニアン語の特徴たる沒擬人法を頗る遺憾とする、と謂ふて居る。若し同一の筆法を逆用せしむるならば、インド、ユーロピーアン民族の產物に擬人法があるので充分に享樂し得られないのを遺憾とすると宣言し得るではないか。單に一擬人法の有無に過ぎないと看過するはけには行かぬ。千波萬波の立ち騷ぐのも必竟は小供の投入れたる一片の小石に過ぎないことがある。能狂言に享樂し寫生文に享樂し性格劇か上ツ滑りをし一錢の權利を伸張する爲めに百圓の辯護料を差控ゆる國民の奥底には政治經濟商工文藝を通じて日本性格の或るものが斷えず其四圍の境遇に適應して交互作用を爲しつゝあるものと見做さなければならない。勿論世が複雜になるにつれて、漸く廣く漸く深くなり行く人格が愈々複雜に働くから、單純にして偏狹なる徽臭ひ説を今更らしく振廻す愚を演ずるのではないが、例せば象徴派が馳せ上ると正反對の傾向を追ふて驅け下る一派が彼地にもある

ことを故意に遺却してはならない。比較文學の賜物は、五年十年の渦中に親らも陷つて盲動する危險を避けしめ、百年二百年の潮勢を外から觀察して周章てずに落付く態度である。日本文明の歩武は秩序ある徑路を默々として徐行する。鞭打つても驅出さない。妨げても停らない。支那印度の思想感情を緩和したると同一の心的態度で泰西の思想感情を緩和して居る。また緩和しなければならぬ筈である。此事實と理論との反證を擧げ得る人が世に果してあるであらうか。比較文學の研究者が世界文學を先きに置いて國民文學を後に置くほど忠實になつて居るのは、佛蘭西の學者が自己と比較して英文學を研究して益々英文學の特徴が發揮され、英古利の學者が自己と比較して波斯文學を研究して益々波斯文學の特徴が發揮され、以下斯の如く順を追うて各國各時代の特徴を夫れ〳〵に認め夫れ〳〵の範疇に入れ得たからである。十八世紀までは單數の人間を知つただけであるが、十九世紀以後になつて始めて複數の人間を知るやうになつた。十八世紀までの論者ならば、或る抽象的概念で全人類の模型を造り、希臘も印度も文藝復興期も十八世紀も支那も日本も盡く同一尺度に欲めたであらうが、カーライルのクロムウェルやサント、ブーヴのポート、ロイアルに目が覺めてからは一民族一時代の無形的構造は動植物の科や類を異にする有形的形體ほど際立つて著しいと感ずるのである。等しく植物のうちであり等しく動物のうちであり等しく人間のうちであることは何人も否定しないが、如何程思想が相闘爭し如何程感情が相衝突しても、生存するものが適者であつて、適者は其四圍の境遇のもとに交互作用をする其國民の性情であつて、而して此性情は幾百千年間遺傳され涵養され鍛錬されたる如何ともすべからざる事實として認めざるを得ない性情である。豆腐を骰子大に切り澤庵を花形に刻む美的國民が釣上り眼の團子鼻に鼻眼鏡を跪坐させ奉る不恰好を怪しまぬ筈がないのであつて、老人ものだと說明が這入て來ても何日とはなしに弦緣になつて仕舞ふ。リボンも、ネックタイも、服も、其他西洋から輸入し來れるものは、悉く變化し行きつゝある。姑の嫁苛責は求めざるに自ら減却するであらうが、嫁が完全なる個性を傷けざらんが爲めに家を飛び出し父母を離れ夫と別れ子を顧みぬ程四面を敵とすべき父母の個性夫の個性子の個性の馬車馬的發展を日本に於いて見得るであらうか。己れ以外の他のものゝ爲めに何時とはなく想察のよい妥協的態度となつて各々其個性の一半を放拋して優美な平和を作つて仕舞うか、左なくば他を生かさんが爲めに斷念のよい犧牲的態度となつて手取早く自己の個性を片付けて崇高ならざる優美な破裂を演じて仕舞ふ。日本は自然も人間も悉く優美の範圍を脫却することが出來ない。ラ、フォルス、ド、ヴィヴルやヴィルレ、ツー、レーベンを文字通りに解釋する程生命に執着する氣になれないから、敵の打ち出す十二吋砲の彈丸に當つて束の間に骨身粉粹するか、卒中で夢の裡に頓死するならば、何日でも生命を投げ出す人ばかりであらう。從つて人間をお留守にして身を雲水の間に托し飄々乎として自然其儘の姿にあこがれて居る。希臘のシーオクリタスは人間を聯想せずには自然を視ることが出來なかつた。羅馬のヴァーヂルも人情化したる自然を

崇拜した。エスキラスのプロミーシウス、バウンドが舞臺を高迦索山脈におきながら自然の記載を少しも入れないのは、作者も觀客も興味を人間のみに置くからである。沙翁でもマーチャヤント、オヴ、ヴェニスの星づく夜やリア王の海などが少し記載してあるばかりで、近松の道行ものには較べられない。佛でも英でも獨でも奇蹟劇には盡く自然が缺けて居る。シルレルのヴィルヘルム、テルさへ瑞西の光景を幕の初めごとに一寸と書くだけである。斯ういふ事は波斯以東には到底あり得べからざることであつて、雷鳴に神の聲を聽き電光に神の矢を視るが如き希伯來の一神教的の感情をも離れ、人情化されたる自然を描ける希臘の個人精神の煩らひをも離れたる印度の叙事詩にも戯曲にも、自然は其豐富なる熱帶の動植物や焦げるやうな蒼穹や雨期の爽快や月夜の清澄や悲く之を提げ來つて眼も眩むばかりの神、半神、人間の雜然たる大活劇を深厚なる同情のもとに動かして居る。從つて劇の金科玉條として崇めたてまつる三一致説などは何處かに吹き飛ばされて仕舞ふ。しかし印度の事は印度にあるべき事であつて印度以外にあるべき事と定まらないから、同じく自然が著しく現はれても支那の詩經には神となつて拜まれるにあらずして友となつて相談されるやうな工合である。後世支那詩人が其文學の特性たる家族生活を離れたる方面に走つたるものを取つて之を日本の俳句の日本化したるものに比較すると、其自然材料の種類や着眼の美點に際立てる相違を現はして來る。眞に是れ邦土各々特長あり時代各々差違ありであつて、東西各々植付けられたるまゝに進化をなしつゝあるのだ。彼是相接觸して以て各々如何なる進化をなさんとするか。クックーの鳴く聲を聽いて英吉利のウォーズウォースは忽ち一度び去つて復た歸へらざる彼れ自身の幼時を回想したが、杜鵑の鳴く聲を聽ても日本近世の俳家は唯だ杜鵑の鳴く聲を聽いて美い聲だと思ふばかりである。己れ自身もなければ家族もない。況んや支那の康節のやうに天津橋上杜鵑を聽いて十年ならず江南の人文字を以て天下を亂すものあらんと懸念顏に國家の前途を考へ込まない。

明治二十七年即ち今より十三年以前に北米合衆國加州大學のゲーレー教授が比較文學協會を組織したといふ宣言書のうちに次のやうな意味がある。科學的研究で審美學説を證明して始めて信憑すべき文學批評原理があるのであるが、系統の立てる努力を仕ないから今日に至る迄文學上諸問題の比較的研鑽が未だ充分に行はれて居ない。唯だ一ッの文學的問題でも、歸納に必要な材料を色々の文學から拾集することは到底單獨の力の及ぶところでない。今日は實に組織ある努力をすべき秋である。創設せんと欲する比較文學協會言ひ換ふれば文學進化研究會では、會員各自は始づ殊に自分の熱知する問題を一つ取て專心研究する。そうすれば次第に其問題の存在したるころには、其進化と特性とが觀察され記錄されることゝならうといふものだ。時到らば色々の結果に系統を立てゝ其問題の著しい特性や其現象を司配して居る起原發達分化の法則を歸納し得ることになるであらう。全體、國民の批評史や個人の批評説を研究することも中々興味はあるが、ボアローやヴィーターやバッツンアムやシドニーやコ

ルネーユや更らに進んでレッシレグやアリストートルなどの批評法典を採用して此等批評家の御存知なき文學の種類若しくは其種類から分岐したる變種に應用することは、非論理的であると共に非歷史的である。今日吾等の熟知せる希臘、羅馬、ケルト、チュートン圈裡の劇より歸納し得たる結果を調べただけでも猶ほ劇を司配する法則に到達せんが爲めには一般に人々の信憑せる審美原理で或る一派の劇法典と稱すべきものをモヂリたるだけでは充分に滿足が出來ない。劇といふ種類の文學に特殊なる批評原理をつくるには、其種類を有名なる文學のみならず比較的名高くない文學にも及ぼし、文明人と共に野蠻人の間にも及ぼし、更らに其進化の各階段にも及ぼして、以て其種類の文學の特性を發見したる後に仕なければならぬ。斯ういふ鹽梅にもろ〳〵の結果に對して比較的に公式を作つて行くと、今日行はれて居る劇法典を或は確定し或は革新するやうにならう。敘事詩にも抒情詩にも其他のものにも悉く斯うする。此事業は今日まで英國や米國の協會で企圖したこともないし、また英語の雜誌報告類が一つもない。

此宣言書を讀みたる人にして、其樣な大袈裟な計畫は抑も〳〵紀元何千年に完了するのかと問ふなれば、比較文學研究者は或は出來ないかも知れぬと答へるであらう。學問は總じて斯ういふものである。出來る出來ないは未來の結果だ。現在に於いて不滿足があるから靜止して居れないで、着手するだけのことである。個人の事業としては一瓦を加へ一絲を織るならば、夫れで本分が立つ。子が繼續するがよい。孫も曾孫も玄孫も繼續するがよい。繼續したくなければ廢止するもよからう。唯だ〳〵滿足し得られないものが行ふだけのことだ。

希臘、羅馬、ケルト、チューン圈裡だけで既にゲーレー教授のやうな感じが生するものとすれば、故小泉ハーン先生の常に唱道されたる如く、異なりたる文明の發達が東洋方面にありたる爲めのみで、所謂東洋なる惡名のもとに一括されて泰西諸學者の記錄に載らないで居たる吾々の文學に關する研究をも加へて、更らに一層擴張されたる深遠なる比較研究を大成したいものだといふ感じが何人の胸裡にも往來するであらうと信ずる。泰西諸學者の著書に於いて、印度は英國の所領であるだけ流石に及びもつかない深遠なる研究があるけれども、支那文學に關する智識は餘程減少して來る。日本文學に至つては更らに一層甚だしい。故に何人でも其得意なる一問題を携へて世界の比較文學界に馳せ參ずべきではあるが、科學者が自己の專門の一小部にのみ明らかにして全體としての其科學に如何なる關係あるかをも知らざるが爲めに往々他の非難を受くる事實を前車の覆へる警戒と見て、所謂比較文學は如何なる程度迄進歩して居るであらう、日本の一篤志家として自己は如何なる方面に盡力すべきものであらう、此盡力は全體の比較文學に對して如何なる地位を占有して居るであらうといふやうな事を一般に知らなければなるまいと思ふ。各自は先づ其程度迄各自親ら消寄せるがよい。

佛蘭西のテーンか其有名なる英文學史を著したのは實に今を去ること四十三年以前であるが、ヴァン、

ローンの英譯は夫れから十八年程後になる。學校を出で〻田舍の敎師となつたが、學問をやらうといふ熱心に居堪らなくなつて巴里に戻り更らに三年の醫科大學課程を修了した程の彼の目的の那邊にあるやを憶測する毎に、自分が文科を出で〻更らに醫科をと思ひながら其儘ズル〳〵に流して仕舞つた腑甲斐なさを思ひ競べて感心せざるを得ない。彼の一生を貫く精力は非常なもので數多の著書もあるが英文學史は殊に名高い。後世彼の學說を祖述するもの多きが爲めに文學研究法史のうちに重要なる地位を占めて居る彼は、自己の學說通りに英文學なる材料を取扱ひ得なかつたといふ非難を受けて居るけれども、文學發展の三要素として人種境遇時代を指命するあたりの議論は實に威風堂々四邊を拂ふ趣がある。所謂らく、文學的作物は孤立せる一つの頭腦が興奮して勝手な空想を働かしたるものでなく、當時の有樣を寫したるもの或種類の心を現はしたるものであるから、文學といふ紀念碑を調査すると、數百年も以前に存在して居たる人々の思想感情を再たび見ることが出來る。一片の化石の背後には既に死滅したる一個の動物が居ると同じく、一篇の筆跡には之を書きたる人間が居るのだ。それ故に歷史の方の色々なもので、飮み食い働き寢る人間を目の前に視るやうに仕なければならぬ。遠い印度のことなら、印度人なるものを視るやうに旅行するが先づ第一だ。夫れが出來ぬならば旅行記や地理植物人類學等の本を讀みて景色や家屋や衣服や食物や總て印度人を生けるものとして目前に現出せしめなければならぬ。あらゆる手段を以て過去を現在に戻す工風をする。過去の人間を親しく目

睹するやうにする。人間の身體が見えたらば次には人間の心を視なければならぬ。外部の表彰は悉く心といふ中樞から放射するのであつて、此心は新舊いろ〳〵の感覺や情緒や道理からなつて居る仲々の研究材料であるが、批評家の敎育が充分であるならば、文章の一節一句一語あらゆるもの悉く象徵となつて、眼が本文を辿ると共に批評家の心が本文の裏に潛む作者の思想感情の不斷の進行變化を趁ふて行く。別言すれば批評家が作物の心理學を作り出すのである。偖て斯うして心理の事實を集めたるだけでは未だ終了しない。有形無形を問はず總て事實には必ず原因がある。野心にも勇氣にも原因があることは猶ほ消化作用にも筋肉運動にも原因があると同じことである。此原因を推究して行くと甚だ簡單なものになつて仕舞ふ。或る時代或る邦土或る人種に共通なる心的特徵があるから、歷史が複雜であるやうでも其原因が簡單なる心理的要素から成立することは、丁度結晶の繁雜らしいのがあつても鑛物學の系統で分類したのを呑み込むと容易に理解が出來るやうなものだ。原因は三つある。人種と境遇と時代とである。人種といふことは人間が持つて生れてくる遺傳的內的性質の意味だ。本來人間に色々あることは犬に獵犬鬪犬羊飼犬夜番犬などがあると同じことで、例せばアリアン民族といふものが諸方に分れて久しい歲月を經て文明の各階段を作つたが、依然としてアリアン民族固有の目印が磨滅しないで居る。抑も〳〵動物は生れると共に其四圍の境遇に適應する必要があるが爲めに、人間も四圍の境遇に氣分や性格を適應させて次第に遺傳させる。故に或る人の性格は如何なる時

でも夫れより以前の行爲と感覺とを縮少したものと考へてよろしい。そうすれば殆んど限りなき過去が蓄積したのであるから、動かせない程重くなつて歴史の事實をつくる大勢力と見做なければならぬ。此天秤を動かすには更らに重い行爲と感覺とを集めたる錘より外に用あるものがないのであるから、其樣な錘の見當る筈がない。斯く遺傳したる人種の内的構造を圍繞する四圍の境遇がある。自然が圍繞する。同胞が圍繞する。從つて物質的若しくは社交的の有樣が人種の性格に影響するやうになる。例せば同一のアリアン民族のうちでも獨逸民族と羅甸民族とは住居する土地の影響で甚だ差違あるやうになつた。時としては政治の影響を蒙ることもあり、時としては社交狀態で影響を蒙ることもある。例は數多ある。偖、以上二原因即ち内部の力と外部の力と共に更らに他に一つの原因があるが、夫れは内外兩力が相働きて既に成されたる仕事であつて、此仕事が後の仕事に寄與するやうになる。内外兩力が働くときは白紙の上に動くのではなくして、既に足痕の印してある地上に働く。試みに文藝の二時代例せば希臘の劇ではエスキラス時代とユーリピデス時代とを比較すると、一般觀念には變化なく、表彰する人間の型も同樣であるが、一は先驅者にして他は模倣者たるの相違がある。別言すれば、甲に手本がなければも乙には手本があり、甲は面のあたりに事物を見るが乙は甲を通じて事物を視る。即ち甲の作物が乙に影響を與へるから、簡單にして雄大なる刺觸が減却して精巧な優美な形體が增加して來る。斯ういふ臨梅に歴史を觀察して見ると、英國の文學が數多の材料を供給するに都合がよく面白いから、自分が一つ試みて見やうと思ふのだ。是れがテーンの英文學史の緒論に與へられたる大意である。

時處を異にする人間を理解せんが爲めには、先づ之を目睹せよ、目睹し得ざる場合には目睹すると同一の結果を齎らすやうな補助學問の世話になれ、といふ此意見に反對する者はあるまい。あるまいどころか、少しく物事を眞面目に考へると何人も痛切に其必要を感じて來る。實物示指が教育の第一步で、繪畫寫眞が其缺を補つて居る。英文を理解するために英人を理解するために先づ外面の英人を目睹しやうといふ要求があればこそ、英文學の傳播するにつれて、丸善や教文館の番頭は繪畫寫眞入りのリヴィング、ロンドン、繪畫寫眞入りの武器武具史、繪畫寫眞入りの服裝家具史、繪畫寫眞入りの動植物風景をと矢繼早に櫛の齒をひくが如き注文に惱されるのである。英人の心が外に現はれる時分には如何なる形態を取るであらう、英人の心が反射する時分には如何なるものが四圍にあるであらうと考察して、此四圍此形態を目睹して後に此心に分け入らうと身構へるのであるが、目睹し得ない場合には恰かも目睹したるが如き地位に身を据えやうとする。豈啻に英文學に對してのみならんやであつて、凡ての時代、凡ての邦土に對して實に悉く斯の如き態度を餘儀なくされるであらうと思ふ。例せば自分のやうに轉居といふ一些事を數年來の宿題として居りながら今以て決行し得ない程鬱の重い性質の者は、親らグローブ、トロッタアにな

る見込が急にたちかねるので、六疊の書齋に負暄を仕ながら机上の地球儀を眺め、他人の旅行記を讀んで心だけ旅行してみやうといふ至極虫の可い旅行家であるから、從つて吾が同胞の日本人の旅行記に色々な注文が出てくる。筆不精口不精なる日本人の旅行談は口も八丁手も八丁なる西洋人の旅行談に比較どころの沙汰にはなれない。言ひたいことも言はずに澁さう、書くべき義務がないならば書かずに了らうといふ日本人の性格が此方面にも亦著しく發揮されるのを見て、おのづから微笑を禁じ得ざる次第ではあるが、室内旅行家たる自分に取つては甚だ不便の極みである。洋行歸りの人にして、日本人としての第一刺觸を巧妙に言ひ廻したるが爲めに恰かも歐米の零圍氣中にあるが如き思ひを讀者聽者に抱かしむるやうなものは洵に稀少であつて、夏目漱石君の倫敦通信や島村抱月君の滯歐文談の如きものは滅多に逢遭し得られない珠玉の文字であらうと思ふ。外人にして横濱に上陸すれば必ず歸つて日本を本國に紹介するが、年々歲々幾十百人官私用を帶びて歐米の間に往來する邦人の期待さるゝ土産を本國に携へるものがない。紐育に何十層の大建築があるとか、テムス河底に坑道があるとか、巴里に凱旋門があるとか、伯林の冬は寒いとかいふやうなことは、市街地圖や繪書や寫眞や向うの書物などで既に先刻承知であるから、再び縷々叙述されるのを拜聽するには及ばぬ。詳細な記載を日本人に求めずして、始めて受くべき活潑な刺觸を日本人に求むるのが、吾々同胞の期待する心的態度である。少くとも記載の充分に具備されて居るところの歐米の天地に對しては內國日本人が外出日本人に期待する心的態度は多くは此範圍を出でまい。斯ういふ點に就いては西洋人の旅行は感心する程身構へが吾々と違つて、吾々の氣付かないところを巧みに捕捉して全體の雰圍氣を生かして來る。例せば亞米利加から英吉利に渡る時分に聖ヂョーヂ海峽を過ぎリヴアプールに入らんとするにあたつて、若し自分ならば端艇の往來旅客の混雜に目をくれて、何處の上陸間際にも應用され得るやうな普遍的な筆を弄するであらうと信ずるところを、始づ泥炭の香ひを放つて英吉利特有の空氣を泳びせかけ頭上を飛交ふ燕子の種類を指示して英吉利特有の風光を浮ませ、讀者聽者をして不知不識英吉利の霧圍氣中に生息せしめて了ふのが西洋人のチャームさせる方法である。加之、詳細な記載の力にも富んで居て近頃は殊に原色板や寫眞を惜まず使用するから、未だ世界に知れ渡らない東洋方面の旅行記も吾々は矢張り西洋人の著書にのみ世話になる。僅かに一葦帶水を隔てたる比律賓群島の生活狀態や天然の風光も吾々の同胞中に信用ある結收つた著書を見出すことが出來ない。『朝鮮横斷記』さへ自分は西洋人の著作に依憑せざるを得ないといふ運命だ。日本の同胞にして中央亞細亞を跋涉した人も、西藏に立籠つた人も、蒙古を横斷して北地へと出た人もあるのに、其地方々々を吾々の眼前に躍出せしむる旅行談が唯だ一度もないやうな氣がする。凡そ他人をして自己の旅行談を了解せしむるには、日常熟知せる自國の自然及人生を後景にしてグラフイカルな言ひ方や書き方をするか、若しくは科學的顯微鏡的に細大漏らさず記實をするか、孰れかにしなければなるま

い。日露談判破裂して百萬の大軍海を渡つた時、遼東半島滿洲朝鮮の光景を吾が書齋中に收むべき好機到來したりと思ひ、多少新聞雜誌の從軍記に留心してみたが、自分の注意の疎漫なりし故か、遂に目的物を捕捉し得ずして今以て茫漠たる觀念を有するばかりだ。遼東よりの志賀氏遼東から滿洲にかけての古川氏及び滿洲の小西氏等數氏の通信文に自分は多大の興味を感じたけれども、更らに數十名の小西氏が在つて各地に分散したまゝ一年間移動せずに毎日寒暖計を頻繁に使用しながら自然及人間を詳細に觀察されたならば自分に取つて如何程有益であつたか知れないと思ふ。グラフイカルな繪書のやうな活々した言ひ方に關しても、例せば數多の鷗外先生が居られて、雨期に突然伸び出したる高粱の美しさを故國の吾々に了解せしむる爲め、若竹の極く奇麗なのが揃つて居るやうなものと說明されるならば、吾々は眼前に視るやうな氣がするから、すべて斯ういふ書き方言ひ方が望ましいと思ふのである。兎に角百萬人の土產としては甚だ輕少であると感じたのは穴勝ち自分ばかりでなからうと信ずる。

更らに進んで人間の心理活働を調査し、之を簡單なる範疇のなかに入れやうとする此著者の計畫に關しては又同じく何人も贊成するであらうし、其所說の大體に於いても自分は傾向を同うしたいけれども、生ける人間を以て鑛物の結晶を取扱ふ時のやうに見立てゝ容易に說了し得るやうな口吻に對しては自分は未だ首肯しかぬる。自分の持ちものでありながら情意の研究が爲し得られないといふことは

意に對して甚だ權衡を失したる心理學書で立派な證據が弄つて居る。ベーンの感情及意志が出でたのは僅かに四十八年前に過ぎない。夫れから餘程隔てゝナーロースキの感情生活やレーマンの感情生活原則やマーシャルの快不快及美學やリボーの感情心理學やなんどが現はれたるばかりである。それに自分だけの感じであるから公言するに憚る次第ではあるが、例せばリボーには更らに一層深く同情を文學者に與へて貰ひたいやうな氣がするし、レーマンの原則には更らに一層深きところまで輪廓を進めることは出來まいかと尋ねてみたくなる。複雜にして變化多き心理活働を眺めると依然として未知數を含めるまゝの人格が眼先きに閃き、今後學界の一隅には謂はゞ美的人格の特別研究とでも命名すべき研究が創りはしまひかと心私かに期待して居る。心理活働其ものは複雜にして變化多くとも、學問は之を少數なる要素に分解して簡單なる範疇に入れやうとする努力であるから、文學發展の三要素として此著者の指示したる點も自分は大體に於いてまづ贊成するが、著者の時代と今日とでは研究の進歩をも計算の中に入れなければなるまいと思ふ。例せば遺傳といふ一事に關したるだけでも、著者もゾラもすべて其頃の人は御家元と時代との關係上、ラマルキズムの影響を受けて居るまいかと自分は臆測する。今日に於いては丁度正反對のヴアイズマニズムがあることを知らなければならない。尤も兩派とも却つて末派の陣笠連が言囃す程主人が思ふて居たのではなからうが、兎に角斯かる種類の學問の結果を見て文學に對する觀察點を案配する吾々は決して雲煙過眼視することは出來ない。但し

ワアイズマニズムに對して論爭して居るヘッケルが在ることゝ、從つてヘッケルは寧ろラマルキズムから系圖をひいて居ることゝを念頭に刻して置く必要があらう。それから文學を餘りに死物の如く概括し過ぎたる點に於いて、後世之に滿足せずして補充の道を講じたることも忘れてはなるまい。

捕綴したるは實に今より十七年以前に現はれたるブリユンチエールの文學史中文學種類之進化第一卷、緒論復興期より今日に到る迄の批評の進化に述べたる說である。即ちテーンの見逃したる個性を補充したことである。バルザックを置土產にして此頃逝ける此著者は比較文學界の思人であるから佛文學者の手を經て更らに詳細なる紹介あらんことを自分は熱望するのであるが、自分の此小論文の性質上フイッシャー、アンウイン社からは二種の書冊のみ出でたるにも係らず、其うちの佛文學史の方へ著者親しく序文を認めて大文學史へ適用したる進化原理と銘打ちたる趣意だけを玆に說明しやうと思ふ。著者は文學研究へ生物學の進歩を類推的に及ぼさんとして居るらしい。テーン說を基礎として作者を動かす原因を次の如くに分つ。第一、遺傳即ち人種第二、境遇即ち氣候的條件社交的條件及歷史的條件第三、個性。而して著者はまた文學の種類に種々あるは藝術の手段及目的に種々あり人間の心に種々あるのに照應すると斷じ文學分化の原理は自然界にあるものと同じやうに簡單より複雜に進捗すると考へ、それ〳〵の文學は如何なる時にも靑春か成熟か若しくは老衰かの目印しがあると思ひ、文學變形の起るのはダーウィニズムの生存競爭、適者生存、自然陶汰に全然其儘の原理に依憑すると言ふて居る。自分の此小論文が次第に長くなつて餘白が逼迫して居るからテーンやブリユンチエールやの高弟たるヴェッソ若しくはリカルヅウまで論及することが出來かぬるけれども個性を認むるや否やに依つて興味ある一問題がおのづから現はれて來ることを附記せずばなるまい。テーンの祖述者にしてもかもブリユンチエールの如くに個性なる要素を認めたる獨逸のグロートが文明史と文學史とを論ずるところに於いて、個性といふ要素の存在を許せば如何なる創作物からでも其時代の一般性質を推究し得るといふことが出來かぬるやうになる、大作家は時代に超越するからして文明史の材料としては大文學は却つて小文學に劣る、といふて居る。玆に吾々は個性對群性とか若しくは個性對人種とか命名すべき問題に逢遭するからしてハーバート、スペンサアを祖述する文學研究者を顧みる必要が生ずる。

ボスネットが紐育で比較文學一篇を著したる後、僅かに二年を隔てゝアンヌカンが巴里で科學的批評一卷を著した。兩者共にスペンサア派である。アンヌカンは其書名の示すが如く科學的基礎の上に批評を築かんとする企圖であつて方法は大抵テーンに似通ふて居るけれども、其之れと異なる點は、人種を重用視することが減少すると共に作家の個性を優視し併せて自己相應の境遇を創造する作家の能力を優視するところである。而して批評の目的は單に作物と作物が啓示する作家の社交的心理的特性との關係を表彰するにありと公言して居る。從つてダウデンやブリユンチエールやサイマンズやから夫

れ夫れ評言を受けたけれども今玆では其處まで深入りして言ふべき場所がない。若し夫れポスネットの所說に到つては世間からは隨分非難を受くべき缺點を有するにも關せず自分一身だけから言へば殆んど天來の福音であつて、お蔭で從來不平不滿に堪えなかつた滔々たる文學史を放拋する勇氣を生じた。彼は社會組織の發達に關してスペンサアやメーンや其他の學者の研究したる結果を文學史に應用し始めたる人であつて、文學の進化の跡を最劣等の表白法より今日の複雜なる形態まで繹ねて四階級をつくり人格を構成する諸要素が深く廣くなることを以て進歩が示されると判じて居る。コールリッヂが沙翁は時を超越しスペンサーは處を超越すといへる如くに詩人の空想は時處を超越して働くといふ學說と、詩人の空想は悉く人間の經驗に限定さるゝといふ學說との間には中心點となつて存在する個性對群性問題がある。文學研究を生物研究動物研究視する觀察も仲々興味はあるが、此等の觀察だけでは到底文學的作物の生命に這入れないと考ふる者は、必ず眼を社會組織の發達に着けて、個性對群性の關係が經過すべき變遷を見る爲めに夫れ〳〵の社會狀態に存する文學を比較して研究することとなつて來る。此處がポスネットの寄與したる點である。材料としてはクラシックが大多數であつて過不及なく諸方面に亘るといふことがない爲めに速斷憶斷の誹を免れるわけに行かぬけれども、吾々後輩は之を改善し補充する方面に努力しなければならぬ。

凡そ此等諸問題に興味を生じたる人は自ら進んで自ら精密なる諸關係を發見し調査し寄與するところあるやうに願たい。藝術一般の進化にも注意を拂らひ、藝術の起原をも研究すべしである。時恰かも社會學的觀察點より藝術を論じたり日本繪畫を論じたりするので名高きバーデンのフライブルヒ大學教授のグロッセ博士は吾國に滯在中である。新聞紙の報ずるところに依れば博士は京阪の地に入りて日本的衣食住を試みながら親しく日本美術を調査する決心であるとやら。スタール教授編輯の人類學叢書のなかでグロッセ博士の藝術起原に御目にかゝつて居るところの吾々日本人は、今や眼のあたり博士が斯の如き熱誠を示されるので吾々はおのづから感奮せざるを得ない。文章世界の調査に依れば目下我國に文學者が二百五十人程居るそうであるが、水上に文字書くよりも果敢ない創作を試みながら近松や沙翁を目的にする大愚天才も居ることであらう。一二世上を風靡する作家が出現すると共に他の二百四十幾人は何の仕事を行つて居るのか分らなくなつて了ふ。夫れよりも自己を犧牲にして大建築物たる比較文學研究の一枚の瓦になる方が氣が利くやうな感じがする。

最近に讀書界が落掌したる佛のフレデリック、ロリエの比較文學小史は英の雜誌記者から酷評を頂戴した。就いて讀んでみるに自分には其樣を酷評を與へるのは甚だ氣の毒な感じがするが、唯だ作者たる個性といふ難物を輕々に論斷し去るは輕忽の態度と見做されても止むを得まいと思ふ。個性研究には更に愼重周到なる大著述を望む。しかし著者がオザナムの文句を引用して、斯かる大問題に對する自己の無能を知らざるにあらねど、自己の本心が招ねく事業をするに過ぎないといふ意味を述べて居

が、此意味は吾々一同須らく服膺すべきことゝ信ずるから、此論文の結尾にかりて以て筆を擱く。

（四十、三）

"Confronted by so vast a project, I am not blind to my own insufficiency. When I reflect on the inexhaustible nature of my subject, the difficulty of the problems it presents, the shortness of life, the distractions of the age, it savours of presumption to begin a book appealing for the commendation of the world. Of Fame, which is the prerogative of genius, I make no pursuit. I fulfil a task to which my conscience calls me."

Antoine Frédéric Ozanam.

文談花談 終

文談花談
實價壹圓貳拾錢

明治四十年七月十二日印刷
明治四十年七月十五日發行

著者　畔柳都太郎　東京市日本橋區通四丁目五番地
發行者　和田靜子　東京市日本橋區兜町二番地
印刷者　金澤求也　東京市日本橋區通四丁目角
發行所　春陽堂　電話本局五十二番　東京市日本橋區兜町二番地
印刷所　東京印刷株式會社

106